鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（118）

南九州西回り自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ― ＸＸⅣ

（市来IC～薩摩川内都IC間）

ANCHAGAHARA

安茶ヶ原遺跡

（鹿児島県いちき串木野市）

（第 Ⅱ 分 冊）

2007年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

目　　次

［第１分冊］
■巻頭カラー
■序　　文
■報告書抄録
■例　　言
■目　　次

［第１分冊］
第Ⅰ章　はじめに …… 1
　第１節　調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　路線内遺跡の概要 …… 1

第Ⅱ章　発掘調査の経過 …… 5
　第１節　調査の経過 …… 5
　第２節　調査の組織 …… 5
　第３節　調査の概要 …… 8
　第４節　発掘調査の経過 ……12
　第５節　整理・報告書作成作業の概要 ……16

第Ⅲ章　遺跡の位置と環境 ……17
　第１節　遺跡の位置と地理的環境 ……17
　第２節　歴史的環境 ……21

第Ⅳ章　発掘調査の概要 ……25
　第１節　発掘調査の方法 ……25
　第２節　遺跡の層序 ……30

第Ⅴ章　発掘調査の成果 ……35
　第１節　縄文時代 ……35
　　１．縄文時代の検出遺構 ……35
　　２．縄文時代の出土遺物 ……51
　　（１）縄文時代の土器 ……51
　　（２）縄文時代の石器 ……105
　第２節　弥生時代 ……171
　　１．弥生時代の出土遺物 ……171
　付編１　旧石器時代の調査 ……176
　　１．旧石器時代調査の概要 ……176
　　２．旧石器時代相当遺物 ……176

■遺跡の残存状況

［第２分冊］
第Ⅴ章　発掘調査の成果 …… 1
　第３節　古墳時代 …… 1
　　１．古墳時代の検出遺構 …… 1
　　２．古墳時代の出土遺物 ……13
　第４節　古　　代 ……40
　　１．古代の検出遺構 ……40
　　２．古代の出土遺物 ……72
　第５節　中　　世 ……93
　　１．中世の検出遺構 ……93
　　２．中世の出土遺物 ……65
　第６節　近世以降 ……182
　　１．近世以降の検出遺構 ……182
　　２．近世以降の出土遺物 ……194
　第７節　その他 ……197
　　１．その他の出土遺物 ……197
　付編２　斜面部の調査 ……210
　　１．トレンチ調査の結果 ……210
　　２．斜面部の出土遺物 ……211

第Ⅵ章　分析・同定 ……222
　　１．安茶ヶ原遺跡出土炭化材の
　　樹種同定 ……222
　　２．安茶ヶ原遺跡出土遺物の
　　放射性炭素年代測定１ ……226
　　３．安茶ヶ原遺跡出土遺物の
　　放射性炭素年代測定２ ……230
　　４．安茶ヶ原遺跡出土遺物の
　　元素分析結果について ……232

第Ⅶ章　発掘調査のまとめ ……34
　第１節　旧石器時代 ……234
　第２節　縄文時代 ……234
　第３節　弥生・古墳時代 ……235
　第４節　古代 ……235
　第５節　中近世 ……235
　考察１　「日置厨」
　　墨書須恵器について ……236
　考察２　建物の併存関係の検討 ……237
　考察３　溝状遺構と道跡との関係 ……239
　考察４　遺跡の立地と性格 ……240

［第３分冊］
■写真図版
■あとがき

挿図目次

［第２分冊］

第143図　古墳時代遺構配置図 …… 2
第144図　ＳＫ０４・ＳＫ０５ …… 3
第145図　ＳＫ０６・ＳＫ０７ …… 4
第146図　ＳＫ０８ …… 5
第147図　ＳＫ０９ …… 6
第148図　ＳＫ１０・ＳＫ１１ …… 7
第149図　ＳＫ１２ …… 8
第150図　ＳＫ１３ …… 9
第151図　ＳＫ１４ …… 10
第152図　ＳＳ０３ …… 11
第153図　ＳＳ０３出土遺物 …… 12
第154図　成川式土器分布図 …… 14
第155図　成川式土器１ …… 16
第156図　成川式土器２ …… 17
第157図　成川式土器３ …… 19
第158図　成川式土器４ …… 20
第159図　成川式土器５ …… 21
第160図　成川式土器６ …… 22
第161図　成川式土器７ …… 24
第162図　成川式土器８ …… 25
第163図　成川式土器９ …… 27
第164図　成川式土器10 …… 28
第165図　成川式土器11 …… 29
第166図　成川式土器12 …… 30
第167図　成川式土器13 …… 31
第168図　成川式土器14 …… 32
第169図　成川式土器15 …… 33
第170図　成川式土器16 …… 34
第171図　成川式土器17 …… 36
第172図　成川式土器18 …… 37
第173図　成川式土器19 …… 38
第174図　古代遺構配置図 …… 41
第175図　ＳＫ１５ …… 42
第176図　ＳＫ１５出土遺物 …… 43
第177図　ＳＫ１６ …… 44
第178図　ＳＫ１７ …… 45
第179図　ＳＫ１７出土遺物 …… 46
第180図　ＳＩ０１ …… 48
第181図　ＳＫ１８ …… 49
第182図　ＳＫ１９ …… 50
第183図　ＳＫ２０ …… 51
第184図　ＳＫ２１ …… 52
第185図　ＳＫ２２・ＳＫ２３ …… 53
第186図　ＳＫ２４・ＳＫ２５・ＳＫ２６・ＳＫ２７・ＳＫ２８ …… 54
第187図　ＳＫ２９・ＳＫ３０ …… 55
第188図　ＳＫ３１ …… 56
第189図　古代ＳＰ検出位置図 …… 58
第190図　ＳＫＰ０１～０３ …… 59
第191図　ＳＰ０１～１６ …… 62
第192図　ＳＰ１７～３３ …… 65
第193図　ＳＰ３４～４０ …… 67
第194図　古代ＳＰ出土遺物１ …… 68
第195図　古代ＳＰ出土遺物２ …… 69
第196図　ＳＦ０１・ＳＦ０２ …… 70
第197図　ＳＦ０１出土遺物 …… 71
第198図　古代遺物分布図 …… 72
第199図　土師器甕１ …… 73
第200図　土師器甕２ …… 75
第201図　土師器甕３ …… 76
第202図　土師器甕４ …… 77
第203図　土師器甕５ …… 78
第204図　土師器甕６ …… 79
第205図　土師器甕７ …… 81
第206図　土師器１ …… 82
第207図　土師器２ …… 84
第208図　土師器３ …… 85
第209図　土師器４ …… 86
第210図　土師器５ …… 88
第211図　須恵器１ …… 89
第212図　須恵器２ …… 91
第213図　須恵器３ …… 92
第214図　中世遺構配置図 …… 94
第215図　ＳＢ０１ …… 95-96
第216図　ＳＫ３２ …… 97
第217図　ＳＫ３２出土遺物 …… 98
第218図　ＳＢ０２ …… 99-100
第219図　ＳＢ０３ …… 102
第220図　ＳＢ０４ …… 104
第221図　ＳＢ０６ …… 106
第222図　ＳＢ０５ …… 107-108
第223図　ＳＢ０７ …… 110
第224図　ＳＢ０８ …… 111
第225図　ＳＢ０９ …… 113
第226図　ＳＢ１０ …… 114
第227図　ＳＢ１１ …… 116
第228図　ＳＢ１２ …… 117
第229図　ＳＢ１２出土遺物 …… 118
第230図　ＳＢ１３ …… 119
第231図　ＳＢ１４ …… 120
第232図　ＳＢ１５ …… 121
第233図　ＳＢ１６ …… 123
第234図　ＳＢ１７ …… 124
第235図　ＳＢ１８ …… 126
第236図　ＳＢ１９ …… 127
第237図　ＳＢ２０ …… 129
第238図　ＳＤ０１ …… 131
第239図　ＳＤ０１出土遺物１ …… 132
第240図　ＳＤ０１出土遺物２ …… 133
第241図　ＳＤ０２ …… 135
第242図　ＳＤ０２出土遺物 …… 136
第243図　ＳＤ０３・０４ …… 137
第244図　ＳＤ０５ …… 138

第245図　ＳＤ０６・０７ ……140
第246図　ＳＲ０１～０３ ……141
第247図　ＳＩ０２ ……142
第248図　中世ＳＰ検出位置図 ……144
第249図　ＳＫＫ０１・０２ ……145
第250図　貝種類別割合 ……146
第251図　科別内訳 ……146
第252図　ＳＫ３３～３８ ……148
第253図　ＳＫ３９ ……149
第254図　ＳＰ４２～５７ ……151
第255図　ＳＰ５８～７４ ……153
第256図　ＳＰ７５～７７ ……155
第257図　中世ＳＰ出土遺物 ……156
第258図　ＳＳＰ０１ ……158
第259図　ＳＳＰ０２～０８ ……160
第260図　ＳＳＰ０９・10 ……161
第261図　ＳＦ０２ ……162
第262図　ＳＦ０３ ……163
第263図　ＳＸ０１ ……164
第264図　中世遺物分布図 ……165
第265図　土師器６ ……166
第266図　須恵器４ ……167
第267図　須恵器５ ……168
第268図　須恵器６ ……169
第269図　瓦質土器 ……170
第270図　青磁１ ……173
第271図　青磁２ ……174
第272図　青磁３ ……175
第273図　白磁１ ……176
第274図　白磁２ ……177
第275図　陶器１・磁器１ ……178
第276図　磁器２ ……179
第277図　磁器３ ……180
第278図　滑石・北宋銭 ……181
第279図　近世遺構配置図 ……183
第280図　ＳＤ０８ ……184
第281図　ＳＤ０９ ……185
第282図　ＳＤ１０～１２ ……186
第283図　ＳＤ１３～１５ ……187
第284図　ＳＤ１３出土遺物 ……188
第285図　ＳＲ０４～０７ ……189-190
第286図　ＳＲ０８・０９ ……191
第287図　ＳＫ４０～４２ ……192
第288図　ＳＰ７７～８０ ……193
第289図　陶磁器分布図 ……194
第290図　陶器２ ……195
第291図　陶器３ ……196
第292図　釘・寛永通宝 ……197
第293図　その他１（カマド・甑・把手） ……198
第294図　その他２（土錘） ……199
第295図　その他３（鍛冶関連遺物） ……200
第296図　その他４（鉄滓１） ……201
第297図　その他５（鉄滓２） ……202
第298図　その他６（鉄滓３） ……203
第299図　その他７（鉄滓４） …… 204
第300図　その他８（砥石１） ……205
第301図　その他９（砥石２） ……206
第302図　その他10（砥石３） ……207
第303図　その他11（砥石４） ……208
第304図　その他12（砥石５） ……209
第305図　斜面出土成川式土器１ ……212
第306図　斜面出土成川式土器２ ……213
第307図　斜面出土成川式土器３ ……214
第308図　斜面出土成川式土器４ ……215
第309図　建物配置図 ……238
第310図　推定縄文海進域と遺跡の立地 ……240

表　目　次

［第２分冊］

表８　ＳＢ０１建物計測表 ……93
表９　ＳＢ０２建物計測表 ……101
表10　ＳＢ０３建物計測表 ……103
表11　ＳＢ０４建物計測表 ……105
表12　ＳＢ０５建物計測表 ……105
表13　ＳＢ０６建物計測表 ……109
表14　ＳＢ０７建物計測表 ……109
表15　ＳＢ０８建物計測表 ……112
表16　ＳＢ０９建物計測表 ……112
表17　ＳＢ１０建物観察表 ……115
表18　ＳＢ１１建物観察表 ……115
表19　ＳＢ１２建物観察表 ……118
表20　ＳＢ１３建物計測表 ……118
表21　ＳＢ１４建物計測表 ……122
表22　ＳＢ１５建物計測表 ……122
表23　ＳＢ１６建物計測表 ……125
表24　ＳＢ１７建物計測表 ……125
表25　ＳＢ１８建物計測表 ……128
表26　ＳＢ１９建物計測表 ……128
表27　ＳＢ２０建物計測表 ……130
表28　安茶ヶ原遺跡出土貝種内訳 ……146
表29　古墳・古代遺物観察表 ……216
表30　古代・中世遺物観察表 ……217
表31　中世遺物観察表 ……218
表32　青磁・白磁観察表 ……219
表33　白磁・青花・陶器観察表 ……220
表34　青花・陶器観察表 ……221
表35　鉄滓観察表 ……221

写真図版目次

［第３分冊］

巻頭カラー１　「日置厨」墨書須恵器
巻頭カラー１　「日置厨」墨書須恵器
巻頭カラー２　柱穴群と溝状遺構
ＰＬ１　いちき串木野市周辺と安茶ヶ原遺跡 …… 1
ＰＬ２　遺跡と周辺地形１・２ …… 2
ＰＬ３　遺跡と周辺地形３・４ …… 3
ＰＬ４　遺構検出状況全体（合成） …… 4
ＰＬ５　遺構検出状況空撮１ …… 5
ＰＬ６　遺構検出状況空撮２ …… 6
ＰＬ７　遺構検出状況空撮３ …… 7
ＰＬ８　遺構検出状況空撮４ …… 8
ＰＬ９　遺跡近・遠景 …… 9
ＰＬ10　調査区の土層１・２ ……10
ＰＬ11　ＳＺ０１・０２ ……11
ＰＬ12　ＳＺ０３・０４ ……12
ＰＬ13　ＳＫ０４ ……13
ＰＬ14　ＳＳ０１ ……14
ＰＬ15　ＳＫ１５ ……15
ＰＬ16　ＳＫ１７ ……16
ＰＬ17　ＳＫＫ０２ ……17
ＰＬ18　ＳＫＰ０１・０２ ……18
ＰＬ19　ＳＫ３２ ……19
ＰＬ20　ＳＩ０１ ……20
ＰＬ21　ＳＩ０２ ……21
ＰＬ22　ピット検出状況 ……22
ＰＬ23　ＳＢ０１・０２検出状況 ……23
ＰＬ24　ＳＢ０１・０２完掘状況 ……24
ＰＬ25　ＳＢ０１半截状況 ……25
ＰＬ26　ＳＢ０２半截状況 ……26
ＰＬ27　ＳＢ１１・１２ ……27
ＰＬ28　建物群検出状況 ……28
ＰＬ29　ＳＢ０５ ……29
ＰＬ30　ＳＢ１４・１７・１８ ……30
ＰＬ31　ＳＳＰ０１・０４・０６・０７ ……31
ＰＬ32　ＳＤ０１ …… 32
ＰＬ33　ＳＤ０４・０５ ……33
ＰＬ34　ＳＤ０７・０８ ……34
ＰＬ35　ＳＢ０８ ……35
ＰＬ36　ＳＲ０５ ……36
ＰＬ37　ＳＲ０５硬化面 ……37
ＰＬ38　ＳＤ１１・１２ ……38
ＰＬ39　ＳＦ０１ ……39
ＰＬ40　ＳＦ０２ ……40
ＰＬ41　横転半截状況 ……41
ＰＬ42　下層確認調査 ……42
ＰＬ43　遺物出土状況 ……43
ＰＬ44　縄文土器・成川式土器出土状況 ……44
ＰＬ45　石皿出土状況 ……45
ＰＬ46　磨斧・石錘・滑石・動物骨・炉壁 ……46
ＰＬ47　耳皿・土師器・土師器甕・須恵器 ……47
ＰＬ48　確認トレンチ作業風景 ……48
ＰＬ49　作業風景・委託作業風景 ……49
ＰＬ50　旧石器・石匙・剥片 ……50
ＰＬ51　石鏃 ……51
ＰＬ52　スクレイパー ……52
ＰＬ53　ＳＳ０２出土遺物 ……53
ＰＬ54　磨製石斧１ ……54
ＰＬ55　磨製石斧２ ……55
ＰＬ56　磨石１ …… 56
ＰＬ57　磨石２ …… 57
ＰＬ58　凹石 ……58
ＰＬ59　礫器 ……59
ＰＬ60　ＳＫＰ・ＳＫＫ出土貝殻 ……60
ＰＬ61　墨書土器 ……61
ＰＬ62　ＳＫ３２出土土師器 ……62
ＰＬ63　青磁・白磁 ……63
ＰＬ64　鍛冶関連遺物 ……64
ＰＬ65　敲石・ＳＺ０３・ＳＫ０３石皿 ……65
ＰＬ66　石皿１ ……66
ＰＬ67　石皿２ ……67
ＰＬ68　石皿３ ……68
ＰＬ69　軽石製品・石核 ……69
ＰＬ70　縄文土器（Ⅰ・Ⅱａ・Ⅱｂ類） ……70
ＰＬ71　縄文土器（Ⅱａ・Ⅱｂ・Ⅱｃ類） ……71
ＰＬ72　縄文土器（Ⅲａ類） ……72
ＰＬ73　縄文土器（Ⅵ・ＸⅡ類） ……73
ＰＬ74　縄文土器（ＸⅠ・ⅩⅣａ・ⅩⅦ類） ……74
ＰＬ75　縄文土器（ⅩⅦ・ＸＸ・ＸＸⅡａｃ類） ……75
ＰＬ76　弥生土器 ……76
ＰＬ77　成川式土器１ ……77
ＰＬ78　成川式土器２ ……78
ＰＬ79　成川式土器３ ……79
ＰＬ80　斜面出土土器１（成川式土器４） ……80
ＰＬ81　斜面出土土器２（成川式土器５） ……81
ＰＬ82　土師器甕・カマド ……82
ＰＬ83　内黒・内赤土師器 ……83
ＰＬ84　須恵器 ……84
ＰＬ85　中世須恵器・瓦質土器 ……85
ＰＬ86　ＳＫＰ・ＳＫＫ出土貝の種類 ……86
ＰＬ87　青花・薩摩焼・メンコ ……87
ＰＬ88　炉壁 ……88
ＰＬ89　鉄滓１ ……89
ＰＬ90　鉄滓２ ……90
ＰＬ91　鉄滓３ ……91
ＰＬ92　土錘 ……92
ＰＬ93　発掘・整理作業員のみなさん ……93
ＰＬ94　完成した西回り自動車道と安茶ヶ原遺跡近景 ……94

第Ⅴ章　発掘調査の成果

第３節　古墳時代の調査

古墳時代に該当する遺構・遺物はⅢ層から検出された。遺構は住居址等の明確な生活痕跡を示すものは検出されなかったものの，B・C-13～17，E～G-26～28グリッドを中心に土坑が，F-14区で成川式土器の集中出土区が検出されている。遺物は本県における古墳時代の代表的な土器である成川式土器が多く出土している。

3-1：古墳時代の検出遺構

①土坑

【SK04土坑】（第144図）

SK04はB-16区で検出されている。大きさは長径110cm・短径約90cm・深さ最大約30cmで，東側半分が１段低くなる段堀りの形状を呈する。埋土中から成川式土器の甕の口縁部と胴部片出土している。

703・704は成川式土器の甕の口縁部である。703は口縁部が「く」の字状に外反するもので，復元口径25.7cmを測るものである。内外面ともにハケ目調整が行われているが，外面口唇部付近と内面の頸部周辺にユビオサエの痕跡が認められる。中津野式の新段階に相当すると思われる。705は成川式土器の甕の胴部片と思われる。内外面ともにハケ目調整である。

【SK05土坑】（第144図）

SK05はC-30区で検出されている。大きさは長径80cm・短径66cm・深さ約25cmで，楕円形を呈する。断面形は擂鉢状となる。埋土中から成川式土器と思われる小片が出土している。

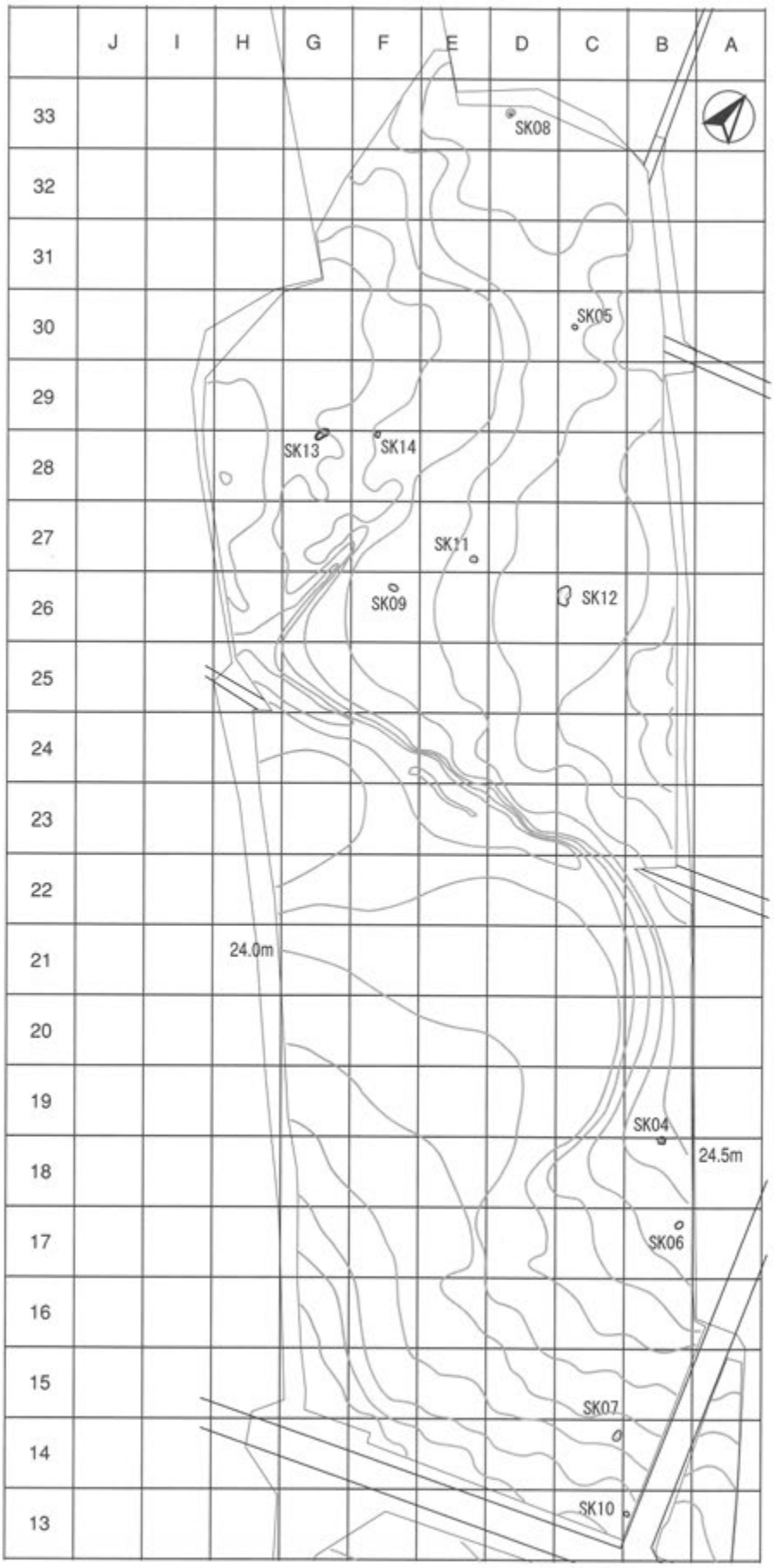
【SK06土坑】（第145図）

SK06はB-17区で検出されている。長径126cm・短径93cmの楕円形を呈し，深さは約20cmと浅めである。断面形は逆台形状を呈する。埋土中から成川式土器と思われる小片が出土している。

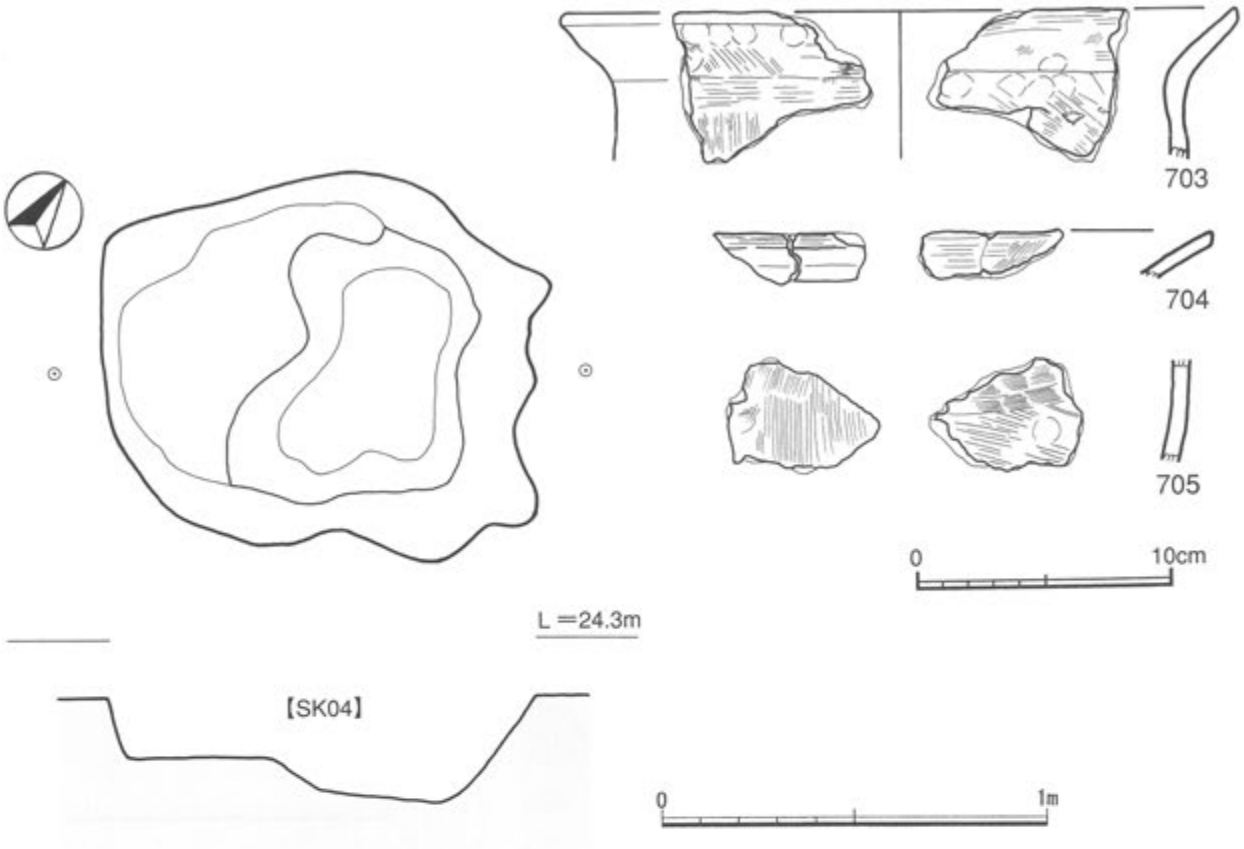
706・707は成川式土器と思われる胴部片である。706は６つの小片が接合した。外面は摩滅が著しく調整痕が明確ではないが，おそらくハケ目調整と思われる。内面はナデ調整が行われている。707は外面が縦位のハケ目調整で，内面は横位と斜位のハケ目調整である。

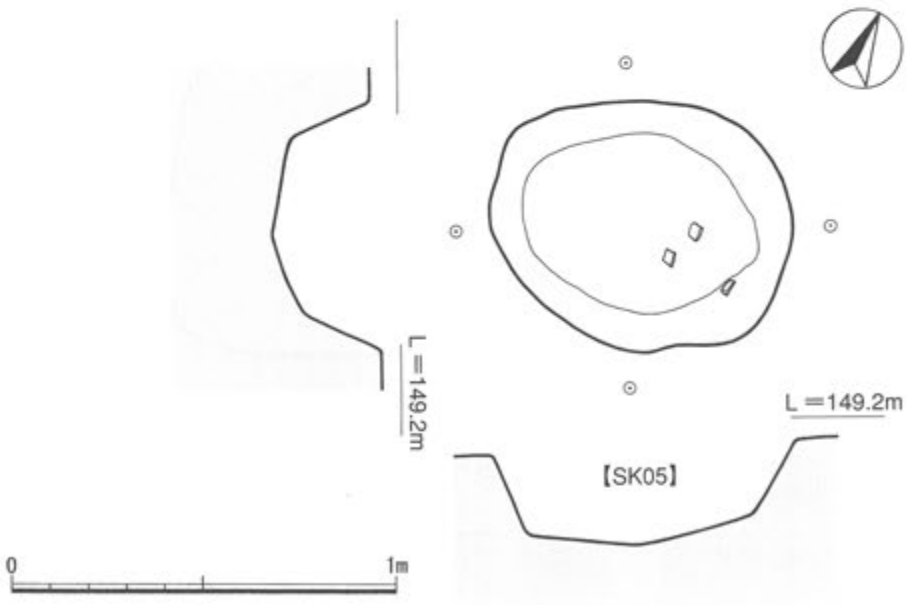
【SK07 土坑】（第145図）

SK07はC-14区で検出されている。長径150cm・短径95cmと大きめの楕円形を呈するが，深さは約22cmと浅い土坑である。断面形は皿状を呈するが，底面が凸凹している。埋土中から成川式土器と思われる小片が出土した。

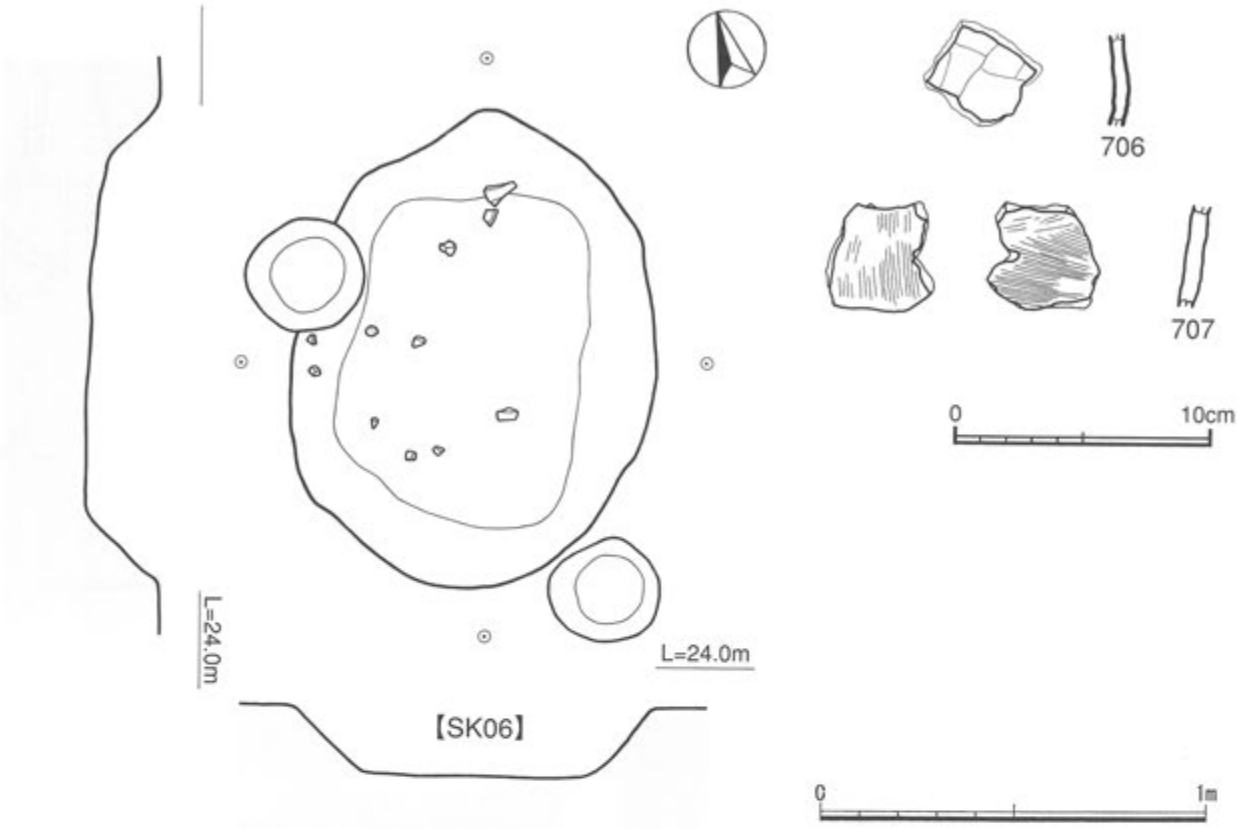


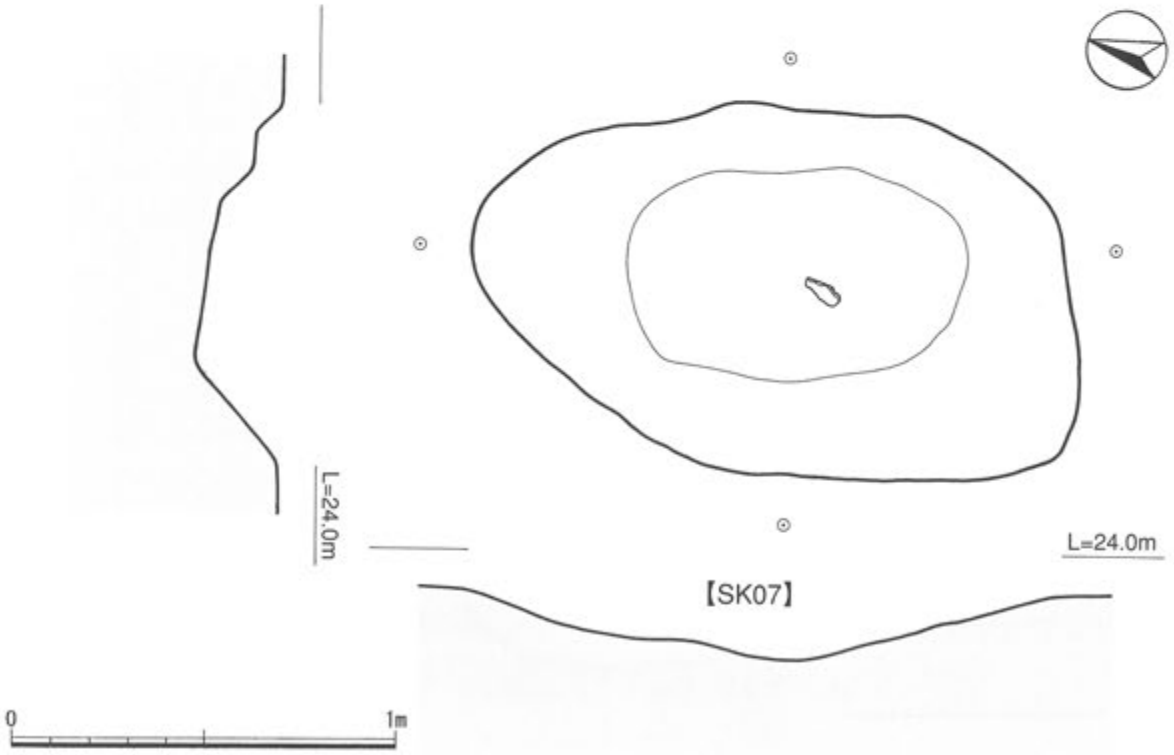
第143図　古墳時代遺構配置図



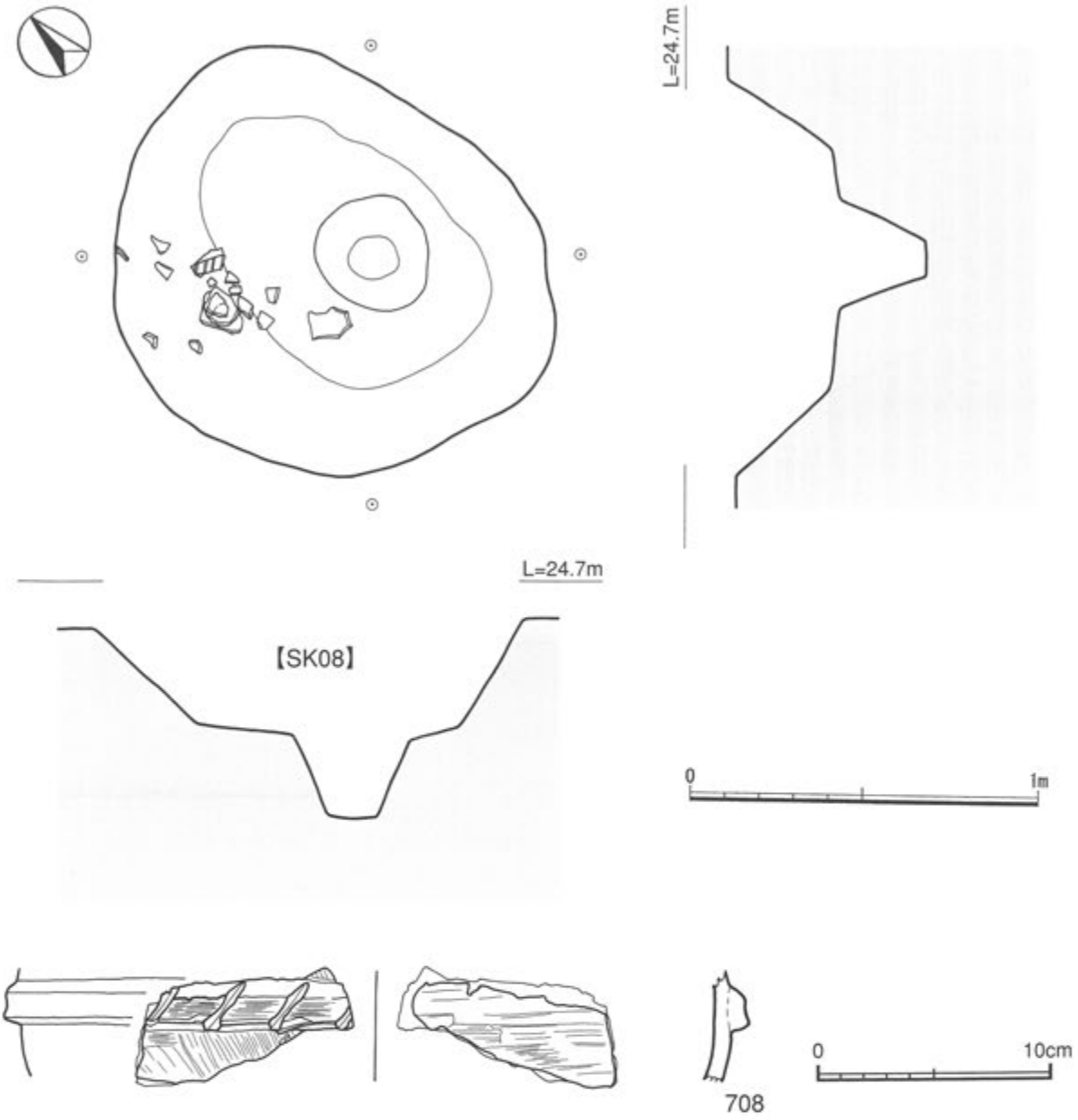


第144図　SK04・SK05





第145図　SK06・SK07

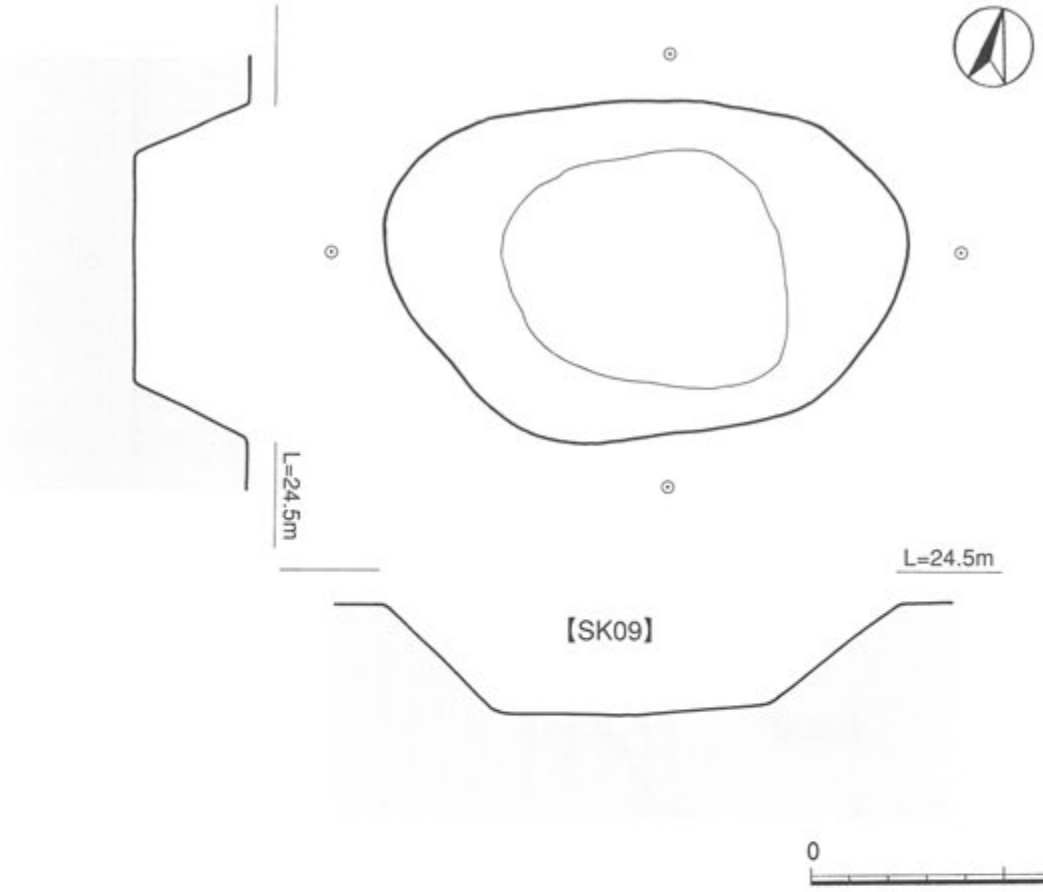


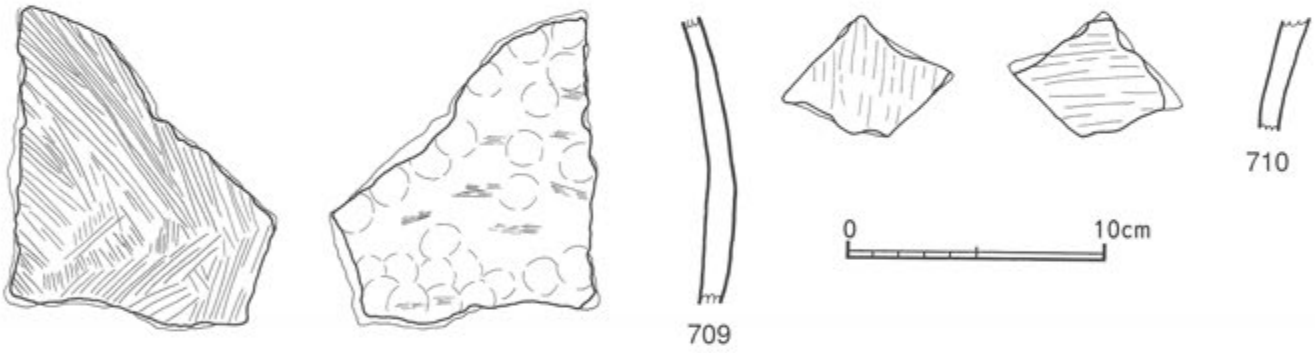
第146図　SK08

【SK08土坑】（第146図）

SK08はD-33区で検出されている。長径125cm・短径115cmの円形に近い楕円形を呈し，深さは約35cmである。断面形は逆台形状を呈する。中央部にピットが土坑を切っている。埋土中から成川式土器の壺の胴部片と小片が多く出土している。

708は成川式土器の壺の胴部片である。復元胴部径31cmを測る。外面はハケ目調整の上にやや幅広の断面方形の突帯が貼付されている。突帯には大形のキザミ目が施される。内面は横位のハケ目調整である。成川式土器の前半段階の壺の特徴である断面三角形の一条突帯ではなく，突帯が断面方形を呈し装飾としてのキザミ目が施されていること，一方で後半段階の特徴である，幅広の突帯ほどの大きさではないこと等を踏まえると，成川式土器の中段階に位置づけられる，東原式から辻道原式あたりに該当する土器と思われる。



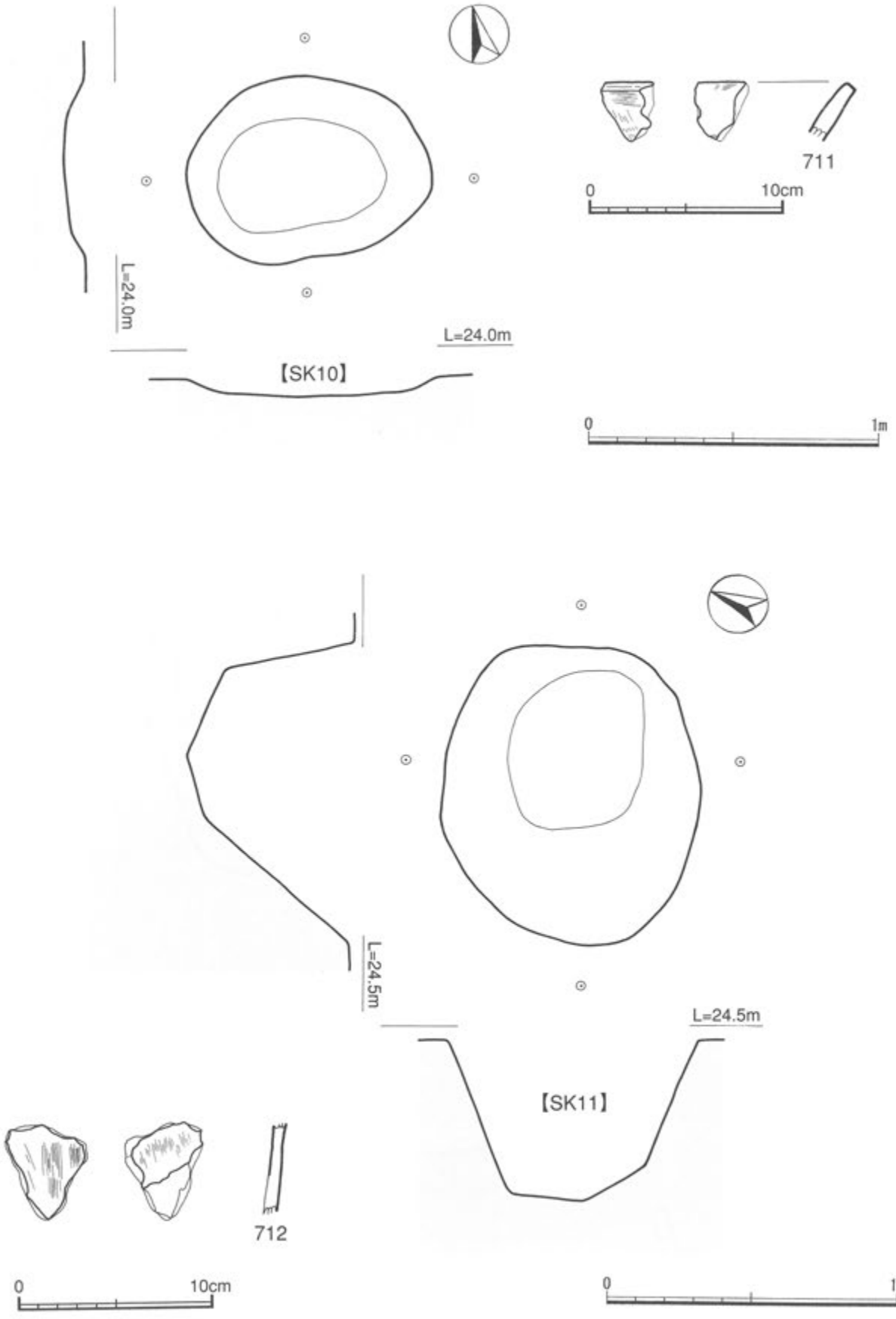


第147図　SK09

【SK09土坑】（第147図）

SK09はF-26区で検出されている。長径135cm・短径90cmの楕円形を呈し，深さは約30cmである。断面形は逆台形状を呈する。埋土中から成川式土器と思われる胴部片が出土している。

709・710は成川式土器と思われる胴部片である。調整等から判断して，いずれも甕形土器と思われる。709は胴部最大径あたりと思われる。外面がハケ目調整である。内面はナデ調整であるが，指頭圧痕の痕跡が多く認められる。710は外面が縦位のハケ目で，内面は横位のハケ目調整が行われている。



第148図　SK10・SK11

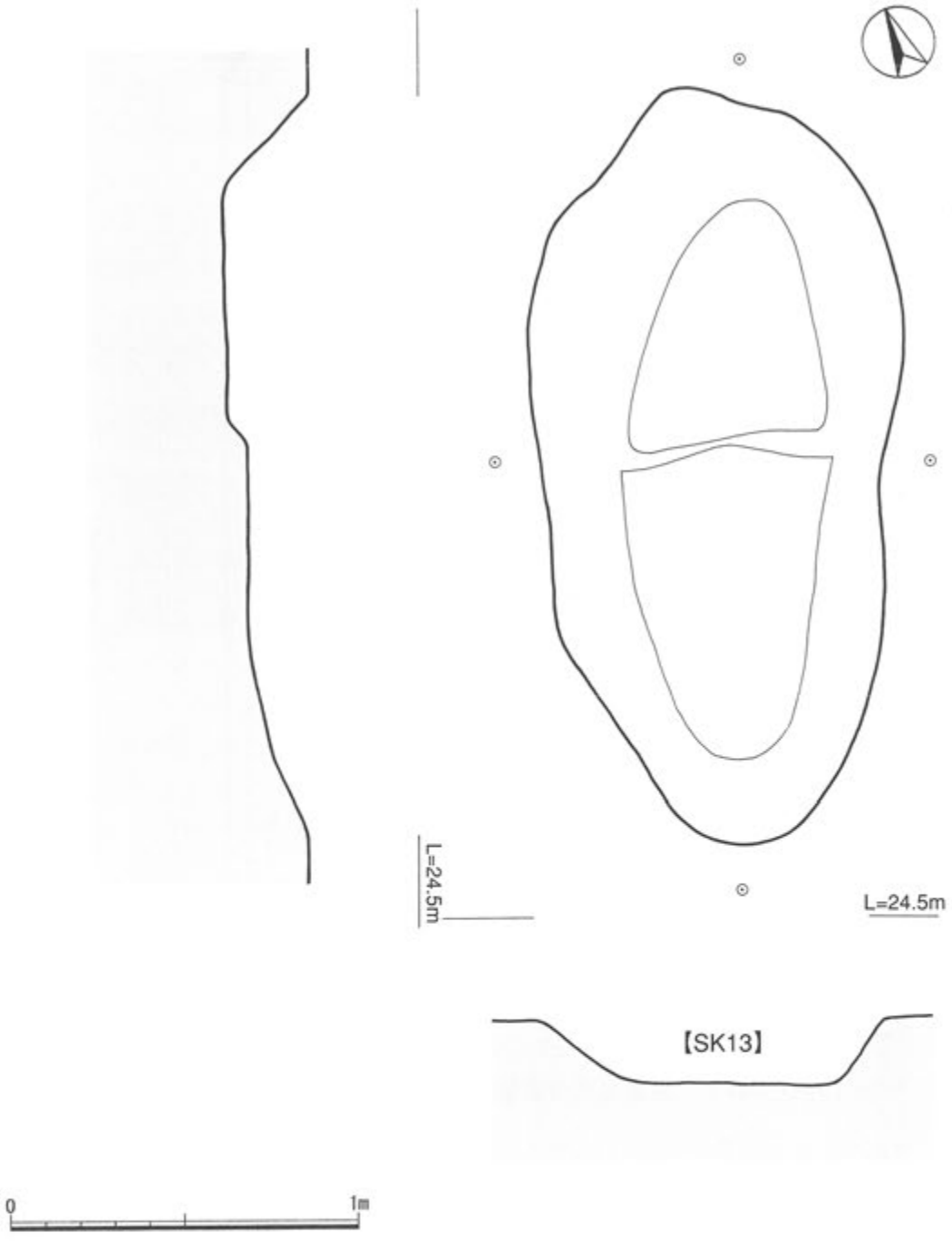
【SK12】

713

0 10cm

0 1m

第149図　SK12

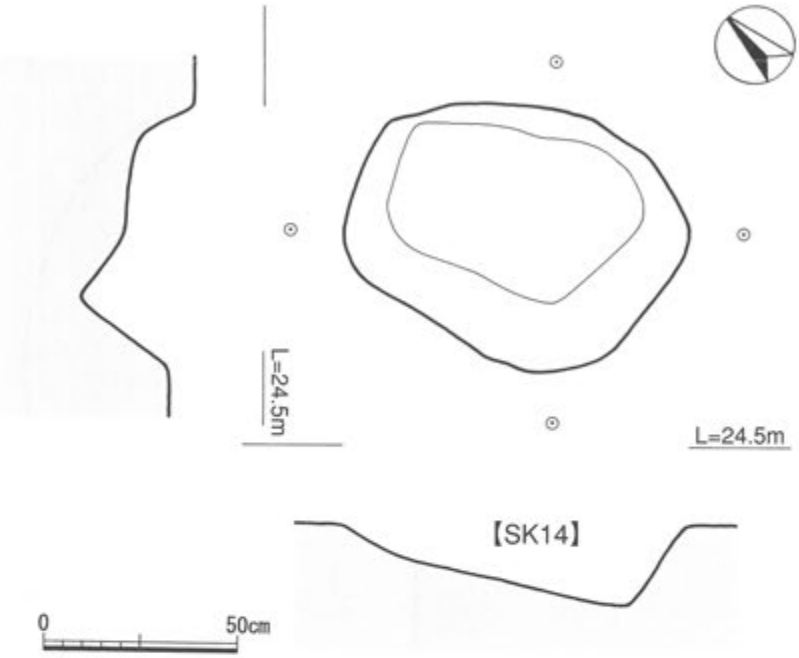


第150図　SK13

【SK10土坑】（第148図）

SK10はB-13区で検出されている。長径85cm・短径60cmの楕円形を呈するが，深さは約５cmと浅い。断面形は皿状を呈する。埋土中から成川式土器の甕と思われる口縁部小片が１点出土している。

711は成川式土器と思われる口縁部小片である。おそらく甕形土器と思われる。外面はハケ目調整



第151図　SK14

が主で，口唇部付近は横位のナデ調整である。内面はナデ調整が行われている。

【SK11土坑】（第148図）

SK11はE-27区で検出されている。長径105cm・短径90cmの楕円形を呈するが，深さは60cmと深い。断面形は擂鉢状を呈する。埋土中から成川式土器と思われる胴部片が出土している。

712は成川式土器と思われる胴部片である。2点が接合した。調整等から判断して，甕形土器と思われる。外面はハケ目調整である。内面はナデ調整が主であるが，一部ハケ目調整の痕跡が残る。

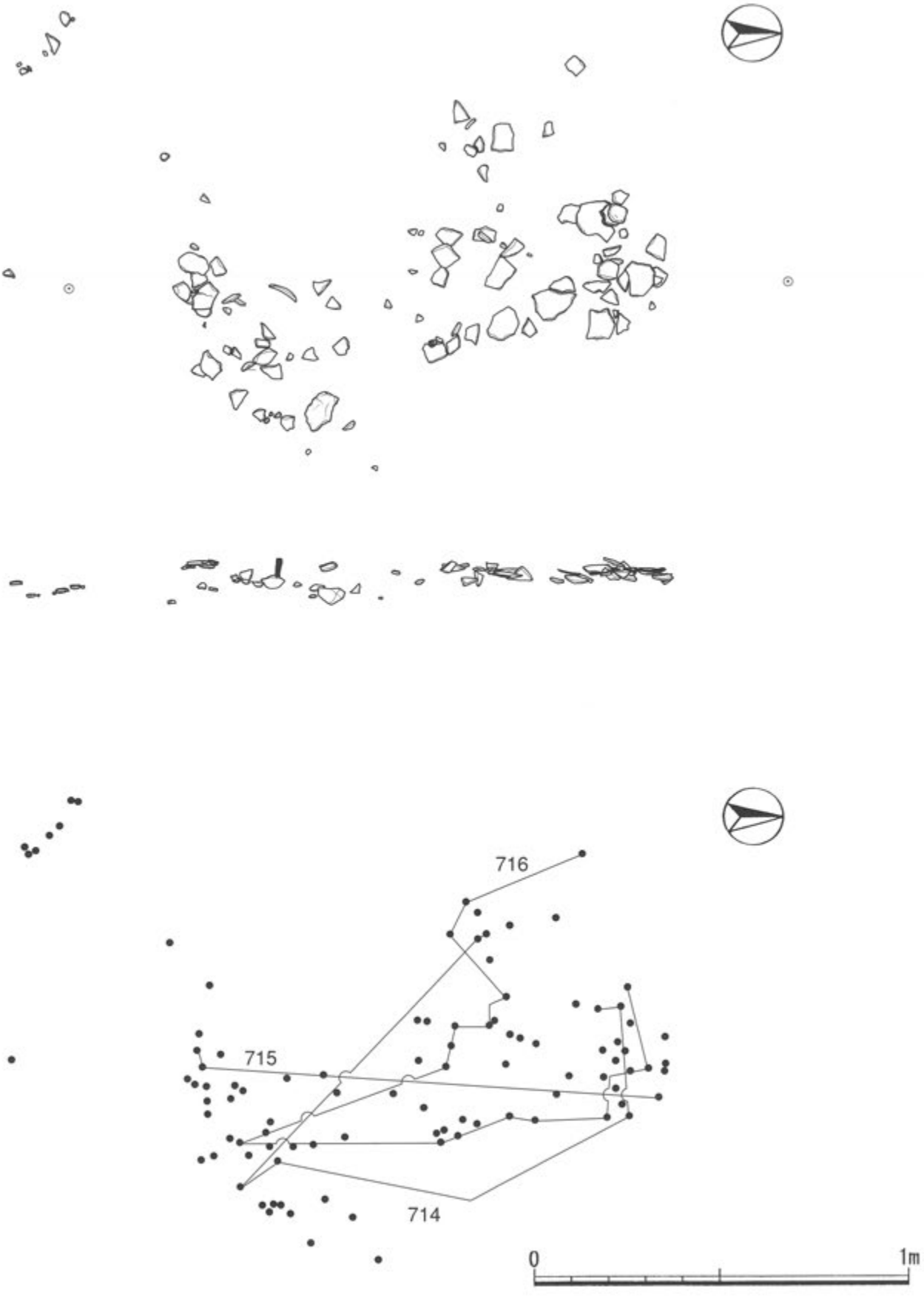
【SK12土坑】（第149図）

SK12はC-26区で検出されている。長径270cm・短径180cmの大形な楕円形を呈するが，深さは約25cmと浅めである。断面形は皿状を呈する。埋土中から成川式土器と思われる胴部片が出土している。

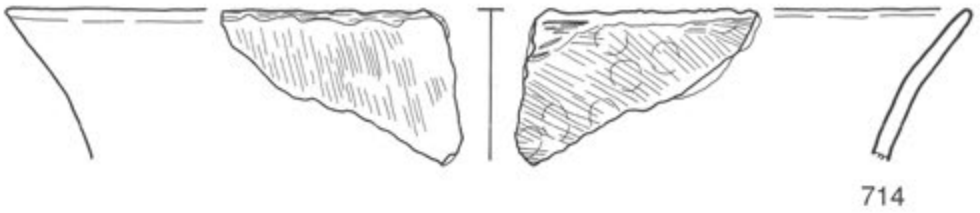
713は成川式土器と思われる胴部片である。外面は残存状態があまり良好ではないが，一部に縦位のハケ目調整が認められる。内面は縦位と斜位のハケ目調整である。

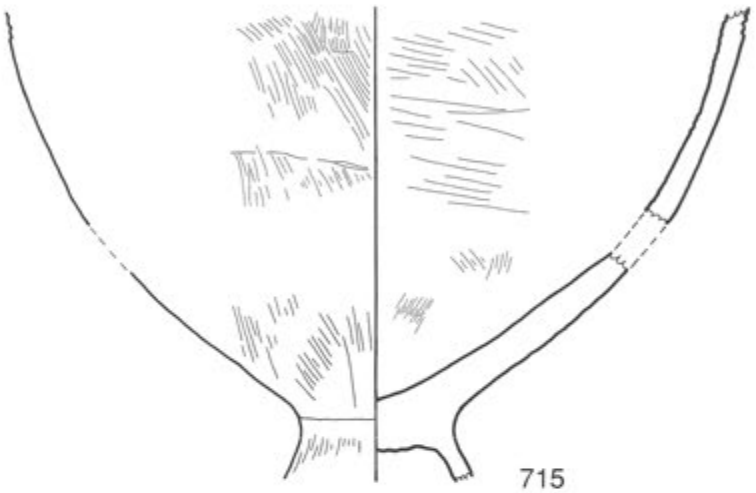
【SK13土坑】（第150図）

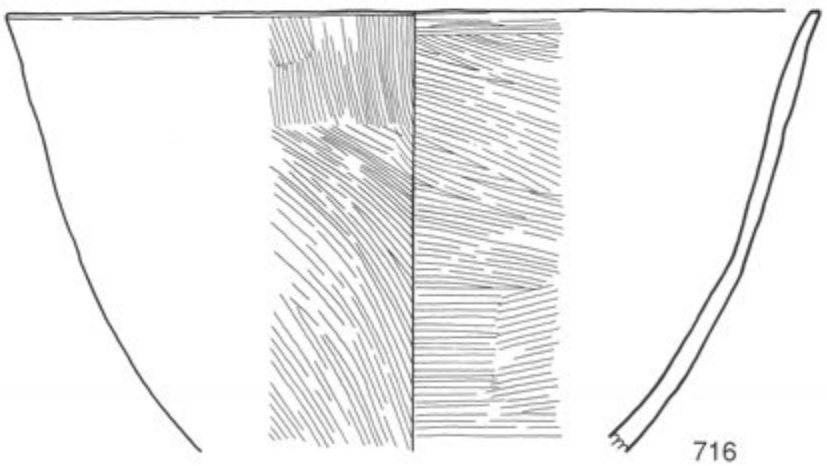
SK13はG-28区で検出されている。長径215cm・短径100cmの大形であるが，深さは20cmと浅めである。断面形は短軸方向で逆台形状を呈する。北側半分が1段低くなる段堀り状の形態を呈する。



第152図　SS03







第153図　SS03出土遺物

埋土中から成川式土器と思われる小片が出土している。

【SK14土坑】（第151図）

SK14はF-28区で検出されている。長径90cm・短径70cm・深いところで30cm程の楕円形で，東側の方が深くなっていく形態を呈する。埋土中から成川式土器と思われる小片が出土している。

②成川式土器集中出土

【SS03】（第152・153図）

F-16区で出土した。遺物は約180cm×150cmの範囲に集中しており，破片は大きなものが多く，出土量も多い。接合関係図が示すとおり，多くの土器片が接合した。本来2～4個体の土器が土圧等で割れたものと思われる。掘り込み等は確認されなかった。

714は甕の口縁部と思われる。復元口径38cmを測る。口縁部は若干外へ向かって折れ曲がるが，稜が残るほどのものではない。口唇部は丁寧には整えられておらず，波打っている。外面は縦位のハケ目が明瞭に残る。内面は成形の際の指頭圧痕の上から，斜位のハケ目が施されている。

715は甕の胴部～脚部付け根付近である。外面はほぼ縦位のハケ目が見られる。内面は，胴下半部は細めのハケ目であるが，胴上半部は間隔の広いハケ目がほぼ横位に近い感じで施されている。

716は鉢と思われる。甕とも判断できそうだが，口縁部径と比べて胴部の高さが低く，ここでは鉢として扱った。復元口径32cmと大きなものである。外面は胴部は斜位のハケ目であるのに対し，口縁～頸部付近は縦位のハケ目となっている。内面は胴下半部が横位のハケ目，口縁～胴上半部が斜位のハケ目である。全体的に器形にひずみが見られる。

3-2：古墳時代の出土遺物

古墳時代の遺物は，B～G-6～12区であまり出土が見られないものの，その他ではほぼ満遍なく出土している。基本的には土坑が検出された周囲に特に遺物が集中しているような傾向も伺えるが，遺構の検出の見られなかった区でも出土は多い。遺物は本県における古墳時代の代表的な土器である成川式土器が大部分を占める。

成川式土器は口縁部の形状や調整等などから判断して大別12類に分類した。各類の特徴は以下のとおりである。

【Ⅰ類土器】

口縁部が細長く伸び，「く」の字状に外反するもの。口縁部内側には弱い稜が見られる。外面はハケ目調整で，口縁部分は縦位方向に施される。なかには，カキアゲに近い強いハケ目調整が行われることにより，頸部に段をもつものもある。

型式：中津野式土器

【Ⅱ類土器】

口縁部が細長く伸びてゆるやかに外反するもの。口縁部内側の稜は弱いかほとんど見られない。

胴部への移行はスムーズである。外面はハケ目調整が主で，口縁部は縦位方向に施される。

型式：東原式～辻堂原式土器

【Ⅲ類土器】

長く伸びた口縁部が若干外反するもの。器形はほぼ直立ぎみとなる。外面はハケ目調整が主で，口縁部は縦位方向に施される。

【Ⅳ類土器】

口縁部が直立するか若干内弯するもの。口縁下には刻目突帯を貼付するものが多い。内外面ともにハケ目調整が施される。

【Ⅴ類】

甕形土器の各部位をまとめた。部位に応じて細分を行い，頸胴部をⅤａ類，胴部をⅤｂ類，脚部をⅤｃ類とする。

【Ⅵ類】

壺の各部位を一括した。

【Ⅶ類】

高坏の各部位を一括した。

【Ⅷ類】

鉢形土器の各部位を一括した。

【Ⅸ類】

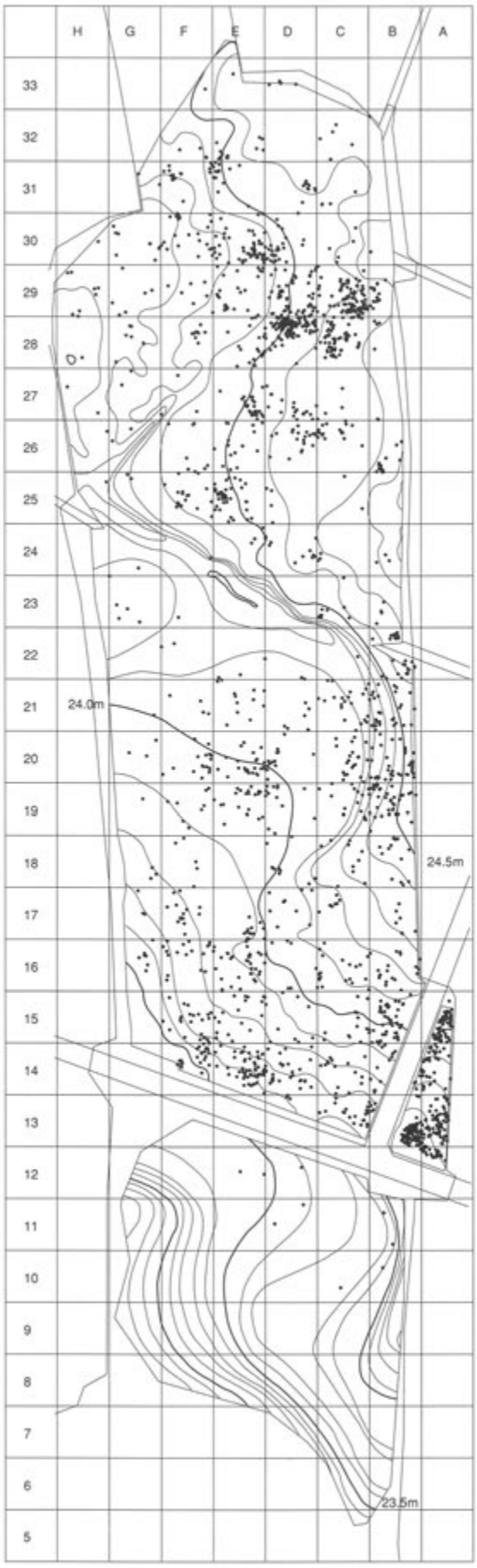
蓋形土器と思われる各部位を一括した。

【Ⅹ類】

坩形土器の各部位を一括した。

【ⅩⅠ類】

埦形土器を一括した。



第154図　成川式土器分布図

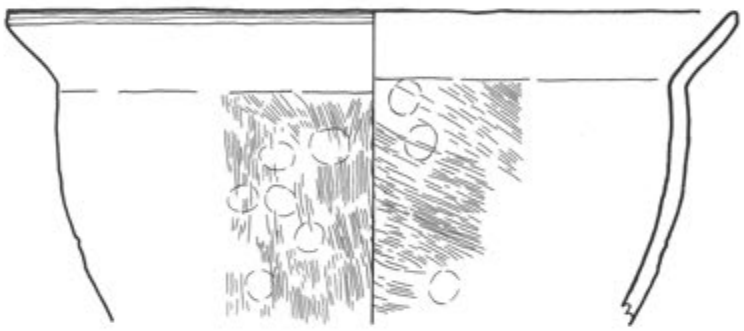
【ⅩⅡ類】

成川式以外の土器と思われるもの。

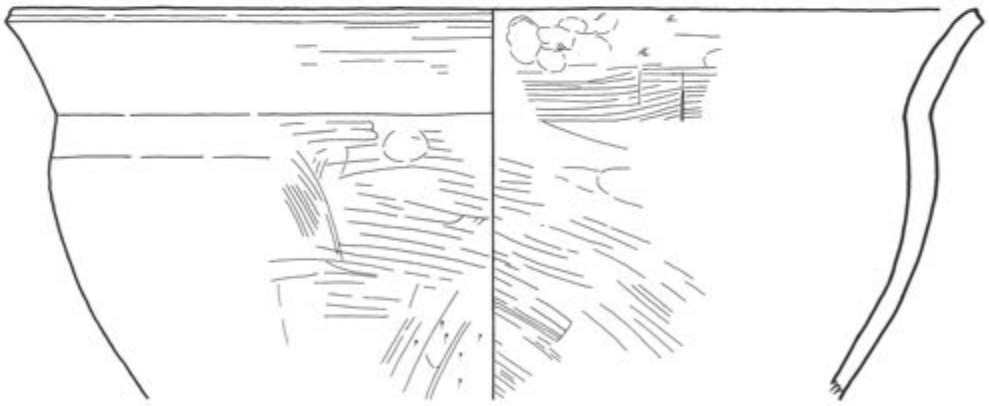
Ⅰ類土器（第155～157図）

717～734は口縁部である。717は口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。口径は35.2cmである。口縁部内面には稜が見られる。口縁部外面には縦位のハケ目とナデ調整が施され，胴部は横位のハケ目である。口縁部内面は横位のハケ目である。胴部最大径は頸部直下にあり，ややふくらむものである。718は「く」字に外反する口縁部が717よりもさらに外に開くもので，口径は29.1cmである。口縁部内面には弱い稜が見られる。胴部には張りがほとんどなく，頸部から底部に向かってすぼまっていく形状を呈する。内外面ともに縦位と斜位のハケ目調整が施されているが，一部に指頭圧痕も認められる。719は口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。口径は38.9cmである。口縁部内面には稜がほとんど見られない。胴部最大径は頸部直下にあるが，ほとんどふくらまずに頸部から底部に向かってすぼまっていく形状を呈する。内外面ともに横位と斜位のハケ目調整が主であるが，外面下位には斜位のヘラケズリが施されている。720・721は口径17cm・18cmの小形の甕である。口縁部は折り曲げたように外反し，「く」字状口縁を呈する。内外面ともにハケ目のちナデ調整が行われているが，一部に指頭圧痕も認められる。722は口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。口径は28.4cmである。口縁部内面には弱い稜が見られる。胴部最大径は頸部直下にあり，ややふくらむものである。口縁部外面には縦位のハケ目が施されているが，頸部には起点の工具痕が明瞭に残る。口縁部内面は横位のハケ目である。胴部外面は横位のハケ目調整で，内面はナデ調整が施される。723は口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。外面は縦位のハケ目のちナデ，内面もハケのちナデ調整である。724は口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。口径29.2cmである。口縁部内面には弱い稜が見られる。胴部最大径は頸部直下にあるが，ほとんどふくらまずに頸部から底部に向かってすぼまっていく形状を呈する。外面はハケのちナデ調整で，内面は横位のナデ調整であるが，口縁部先端付近や頸部周囲に指頭圧痕が認められる。725は724と形態的に近い。口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。口径20cmである。口縁部内面には弱い稜が見られる。胴部最大径は頸部直下にあるが，ほとんどふくらまずに頸部から底部に向かってすぼまっていく形状を呈する。口縁部外面には縦位のハケのちナデ調整で，工具痕が認められる。口縁部内面は横位のナデ調整である。胴部外面は縦位のハケ目調整，内面はナデ調整である。727は口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。口縁部内面には稜が認められる。口径34.2cmで，胴部最大径は頸部直下にある。他の土器に比べて器壁が厚い。口縁部外面はハケのちナデ調整，内面は横位のハケ目である。胴部外面は斜位のハケ目のちナデ，内面は横位のハケ目のちナデ調整である。727は口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。口唇部はやや上位につまみ上げた形状を呈する。口縁部内面には稜が認められる。口径20cmで，胴部最大径は頸部直下にあるが，ほとんどふくらまずに頸部から底部に向かってすぼまっていく形状を呈する。外面はハケ目のちナデ，内面は横位のハケ目のちナデ調整が施される。内面には指頭圧痕も認められる。728は口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。口径23cmである。口縁部内面には弱い稜が認められる。他の土器と比べて胴部最大径の位置が低く，やや長胴形を呈するものと思われる。胴部最大径も口径とほぼ同じかそれよりも大きくなるものと思われる。

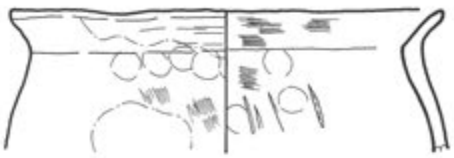
717



718



719

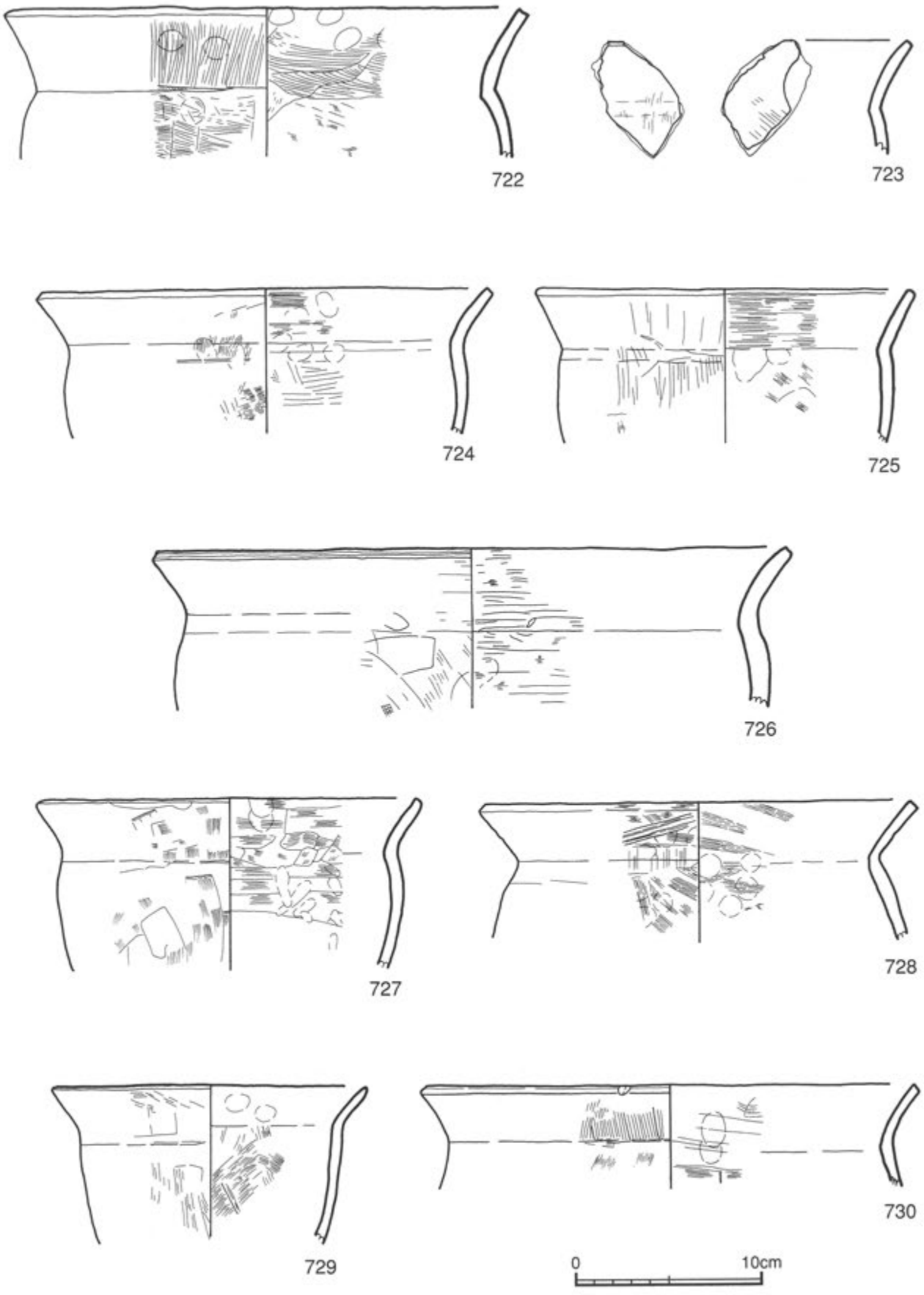


720

721

0 10cm

第155図　成川式土器 1

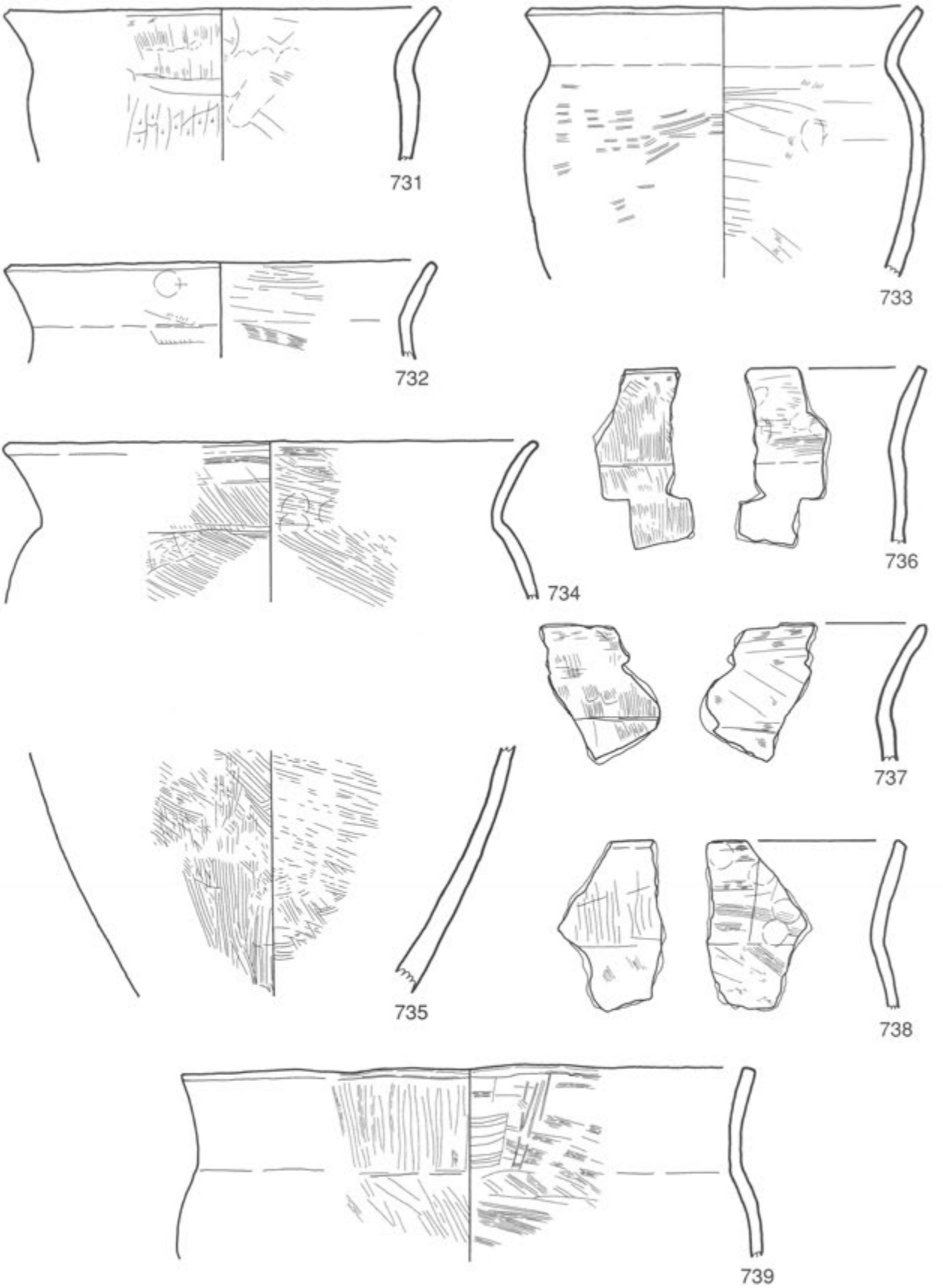


第156図　成川式土器 2

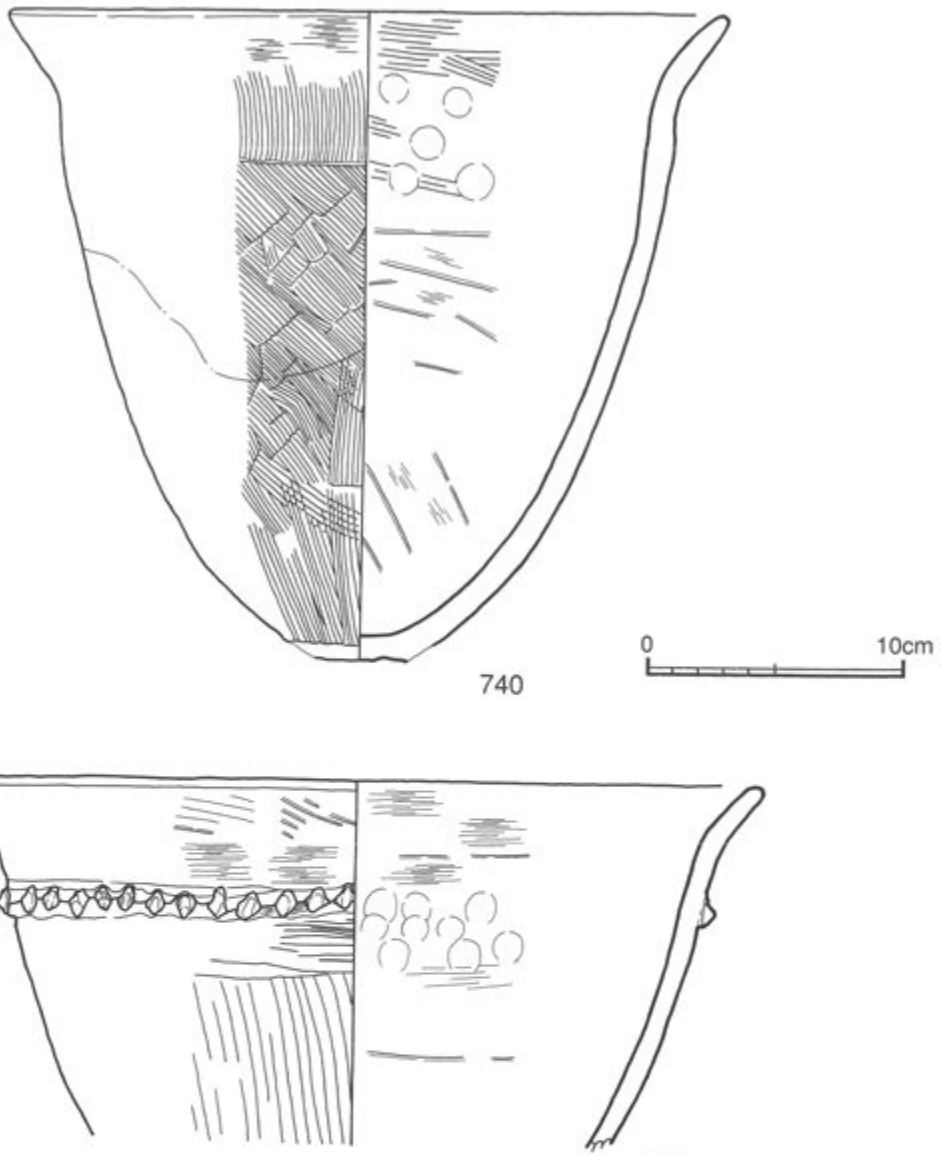
外面は縦位・斜位のハケ目で，内面は斜位のハケ目のちナデ調整である。頸部内面から胴部上位にかけて指頭圧痕が認められる。729は「く」の字に外反する口縁部がさらに外に開くもので，口径は17cmである。口縁部内面には弱い稜が見られる。胴部には張りがなく，頸部から底部に向かってそのまますぼまっていく形状を呈する。口縁部外面は縦位のハケ目のちナデ調整で，頸部には工具の起点痕などの工具痕が残る。口縁部内面はナデ調整で指頭圧痕が認められる。胴部は内外面ともにハケ目調整である。730は口縁部が長く伸びて「く」字状にややゆるく外反する。頸部内面に弱い稜が残る。口径26.4cmである。口縁部外面は縦位のハケ目調整が行われているが，頸部には起点痕が残る。口縁部内面は横位のハケ目のちナデ調整で一部に指頭圧痕が認められる。胴部外面はハケのちナデ調整である。731は口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。口縁部内面には弱い稜が認められる。口径22.8cmで，胴部最大径は頸部直下にあるが，胴部の張りはほとんどない。口縁部外面は縦位のハケ目で，胴部外面はヘラケズリが施されて器壁の厚みが調整されている。内面はナデ調整である。732は口縁部が長く伸びて「く」字状にやや弱く外反する。口縁部内面には弱い稜が認められる。口径22.8cmである。内外面ともにハケのちナデ調整が行われている。733は口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。口径21cmである。口縁部内面には弱い稜が認められる。頸部直下に胴部最大径が位置する。胴部最大径は口径とほぼ同じ大きさである。胴部外面にはタタキが行われている。内面は横位のハケ目のちナデ調整である。734は口縁部が長く伸びて「く」字状に外反する。口径28cmである。口縁部内面には稜が認められる。頸部直下に胴部最大径が位置する。胴部最大径は口径とほぼ同じ大きさである。口縁部外面は縦位のハケ目のちナデ，口縁部内面は横位のハケ目のちナデ調整で，頸部付近には指頭圧痕も認められる。胴部は内外面ともに斜位のハケ目調整である。735は甕の胴部片であるが，734と同一個体と思われる。外面は斜位と縦位のハケ目のちナデ調整，内面は斜位のハケ目のちナデ調整である。

Ⅱ類土器（第157～160図）

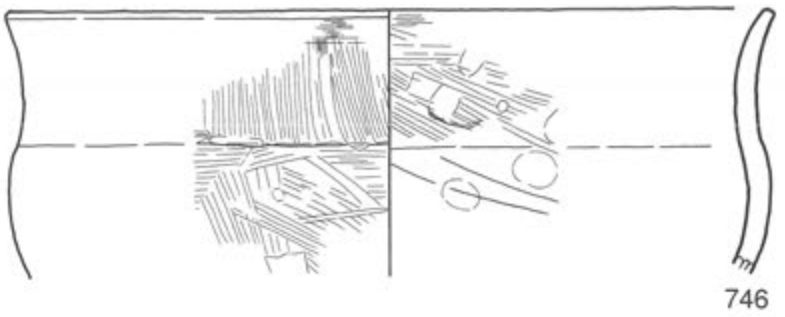
736は口縁部が細長く伸びてゆるやかに外反する。口縁部内側には弱い稜が見られる。胴部の張りはほとんどなく，胴部から底部に向かってスムーズに移行する。外面は縦位のハケ目で，内面は口縁部が横位のハケ目のちナデで，一部に指頭圧痕も認められる。胴部はナデ調整が行われている。737は口縁部が細長く伸びてゆるやかに外反する。口縁部内側には稜がほとんど見られない。口縁部外側は縦位のハケ目のちナデ調整で，頸部には工具の起点痕が残る。内面は斜位・横位のハケのちナデ調整である。738は口縁部が細長く伸びてゆるやかに外反する。口縁部内側には弱い稜が見られる。口縁部外面は縦位のハケ目で，内面は口縁部が横位のハケ目のちナデで，一部に指頭圧痕も認められる。胴部はハケのちナデ調整が行われている。739は口縁部が細長く伸びてゆるやかに外反する。口縁部はややいびつで，口径30.2cmである。口縁部内側には弱い稜が見られる。胴部最大径は頸部直下にあるが，胴部最大径は30.8cmと口径よりも大きくなる。外面は縦位のハケ目で，内面は斜位のハケ目のちナデ調整が行われている。740は口縁部がゆるやかに外反する。口縁部内側には稜が見られない。口径28cmである。胴部の張りはなく，胴部から底部に向かってスムーズに移行する。外面は口縁部が縦位のハケ目調整であるが，口縁端部付近は横位のナデ調整が行われている。胴部は斜位のハケ目で，ススの付着が見られる。内面はハケのちナデ調整で，工具の痕跡が認められる。

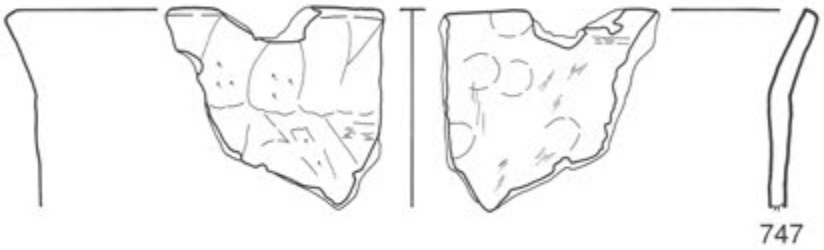


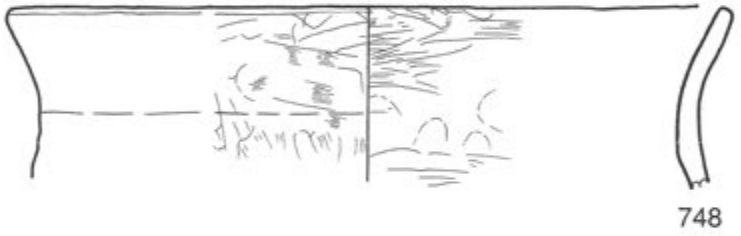
第157図　成川式土器 3

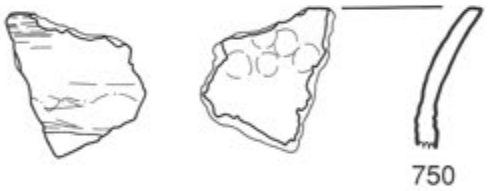


第158図　成川式土器 4

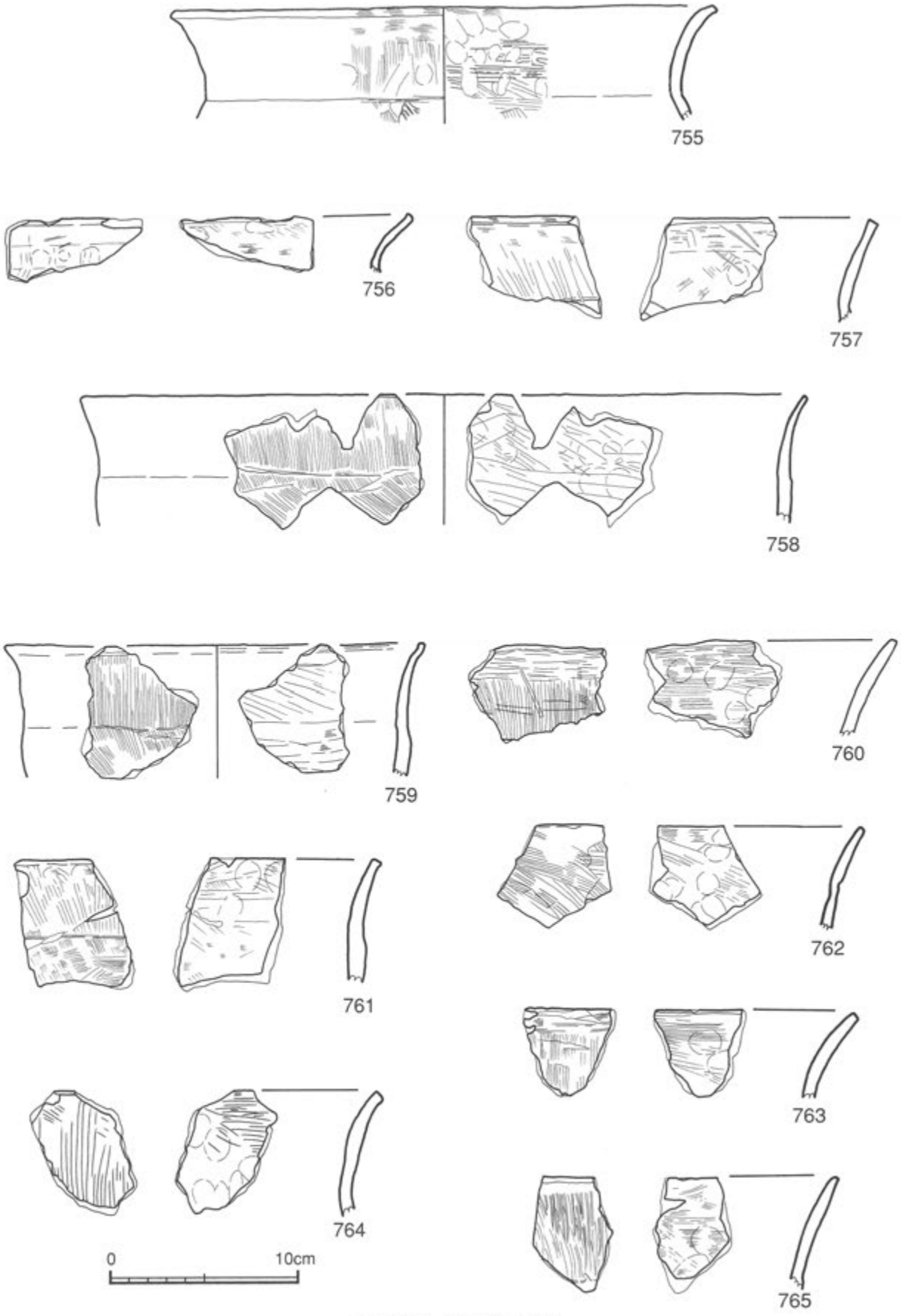








第159図　成川式土器 5

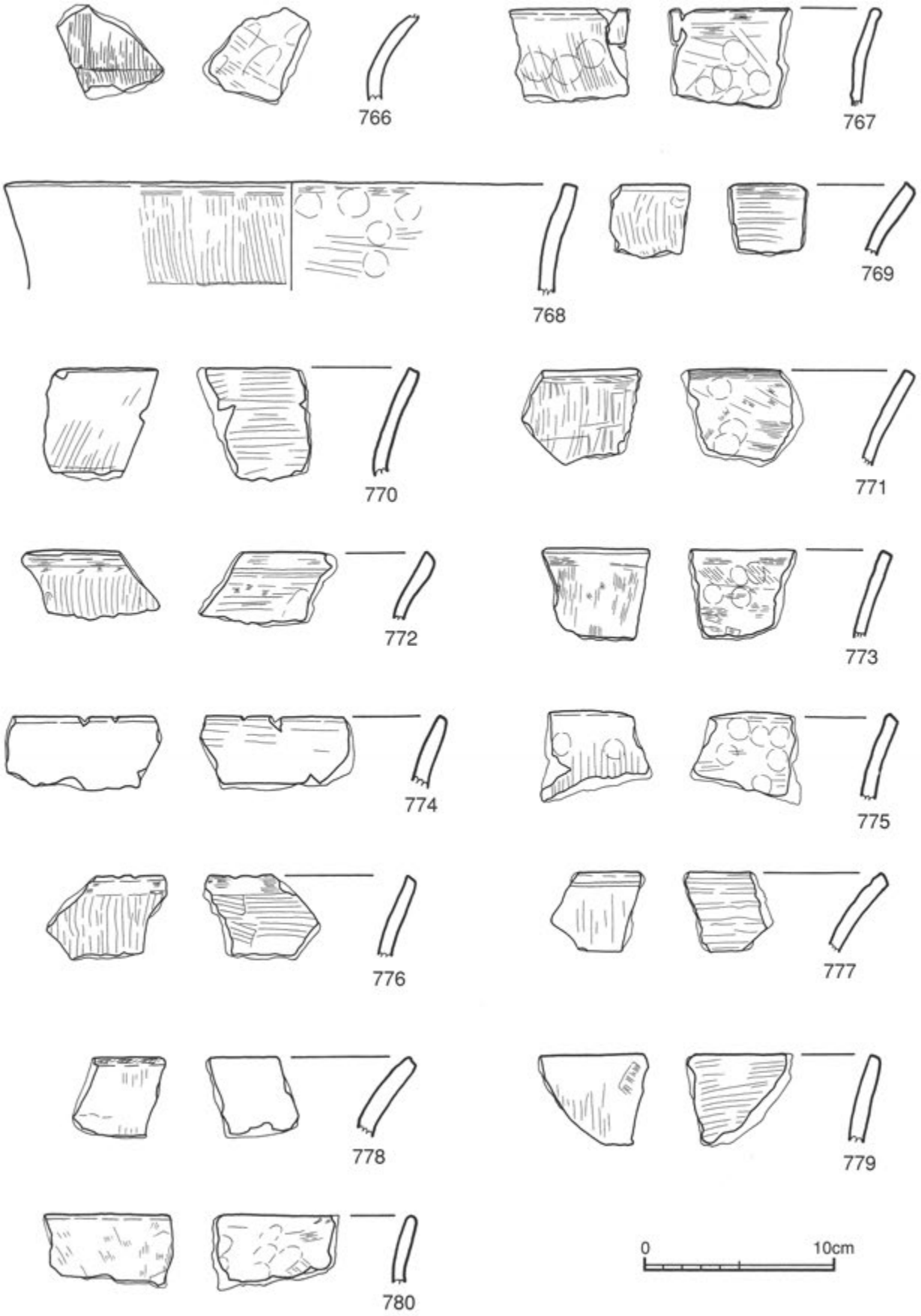


第160図　成川式土器 6

741は口縁部がゆるやかに外反する。口縁部内側には稜が見られない。口径31.8cmである。胴部の張りはなく，胴部から底部に向かってスムーズに移行する。頸部からやや下がったところに１条の刻目突帯がめぐる。外面は突帯の上下が横位のハケ目調整で，胴部下位が縦位のハケ目が施される。内面は横位のハケ目のちナデ調整で，突帯の裏側付近には，突帯貼付の際の痕跡と思われる指頭圧痕が残る。742は口縁部がゆるやかに外反する。口縁部内側には稜が見られない。口縁部はややいびつで，口径24cmである。内外面ともにナデ調整であるが，外面には縦位の工具痕，内面には指頭圧痕が認められる。743は甕の胴部片である。742と同一個体と思われる。外面は縦位のハケ目のちナデ調整で，内面はナデ調整である。744は口縁部が細長く伸びる。内外面ともにハケのちナデ調整である。745は口縁部が細長く伸びてゆるやかに外反する。口径20.4cmである。外面は口縁部が縦位のハケ目調整で，頸部には工具の起点痕が残る。胴部は斜位のハケ目である。内面は口縁部が斜位のハケ目で，胴部はナデ調整である。746・748も口縁部が細長く伸びてゆるやかに外反する。746は口径30.2cmである。口縁部は縦位に強めのハケ目調整が行われており，頸部に段をもつ。胴部最大径の位置は高くて頸部近くにある。胴径29.8cmとほぼ口径と同じ大きさである。748は口径28.6cmで，口縁部外面はナデ調整である。頸部内面には指頭圧痕が認められる。747・749・750は，直立ぎみの胴部から口縁部がわずかに外反するものである。747は復元口径30.8cmである。口縁部外面は縦位のカキアゲが施される。内面には指頭圧痕が認められる。749は外面に１条の刻目突帯が貼付されている。口縁部外面は縦位のハケ目，内面は横位のハケ目調整である。750は口縁部外面に指頭圧痕が認められる。751・752は口縁部が短い。胴部はやや張りがみられ，胴径は口径を上回る。751は口径20cm，胴部最大径20.2cmで，口縁部外面は縦位のハケのちナデ調整が行われ，内面には指頭圧痕が認められる。752は口径20cm，胴部最大径20.4cmである。751と同様に，内面には指頭圧痕が認められる。753・754は口縁部外面に縦位のナデ調整が行われている。755は口縁部が弯曲ぎみに外反するものである。口径28.6cmである。口縁部外面は縦位のハケ目が施される。口縁部内面には指頭圧痕と横位のハケ目調整である。756は器壁の薄いものである。

Ⅲ類土器（第160・161図）

757は口縁部外面は縦位のハケ目調整，内面は斜位のハケ目調整である。内面には工具の起点痕が認められる。口唇部を四角くおさめ，端部周辺には横位のナデ調整が施されている。758・759は口縁部外面に縦位のハケ目調整が施され，内面は横位と斜位のハケ目調整である。758は復元口径38.6cmを測り，頸部には工具の起点痕が残る。759は復元口径22.2cmであり，口縁部内面は斜位，胴部は横位のハケ目調整である。760～767は，いずれも口縁部外面に縦位のハケ目調整，内面には横位または斜位のハケ目調整が行われるともに指頭圧痕も認められる。また口縁端部周辺は横位のナデ調整が施される。761・766は頸部外面に工具の起点痕を残している。768は口径30.4cmで，口唇部を四角くおさめる。外面には縦位のハケ目調整が施され，下端部に工具の起点痕が残る。内面は横位のハケ目のちナデ調整で，指頭圧痕も認められる。769～780は口縁部の一部である。いずれも傾きやゆるく外反している状況から判断して，Ⅲ類に該当するものと思われる。口唇部を四角くおさめるものが大多数である。769・770・772・776・777・779は外面は縦位，内面は横位のハケ目調整が行われている。772の口唇部は斜形でやや肥厚する。771・773は内面が斜位のハケ目のちナデ調整



第161図　成川式土器 7

第162図　成川式土器 8

で，指頭圧痕も認められる。775は口縁部内外に指頭圧痕が残る。776も口唇部が斜形となるものである。778・780は内外面ともナデ調整が主で，ハケ目はほとんど見られない。780は両面に指頭圧痕が認められる。

Ⅳ類土器（第162図）

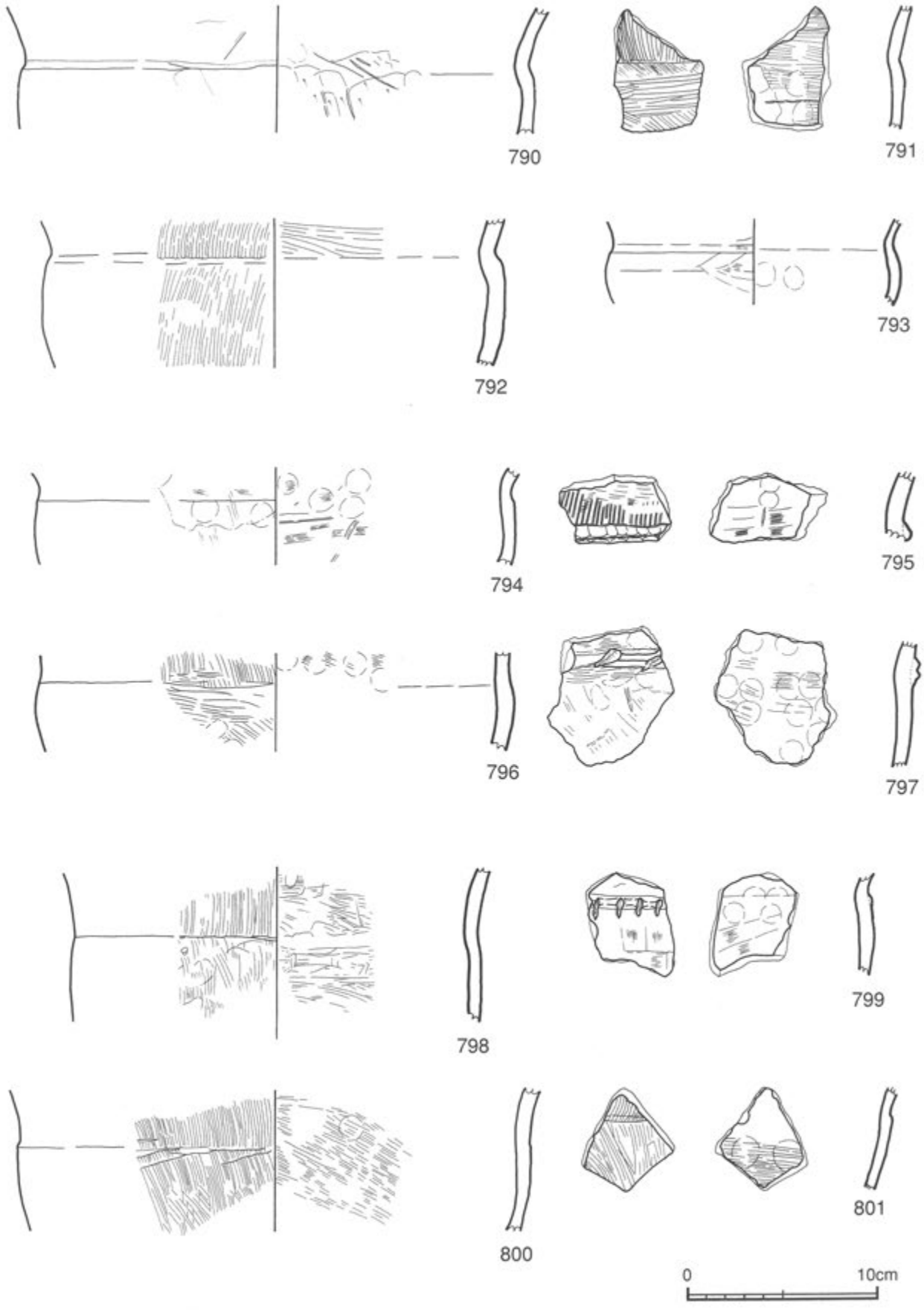
784は口縁部先端が若干内弯するものである。復元口径21cmである。外面は縦位のハケ目，内面は横位のハケ目調整が施され，口縁下には1.5cm程度のやや幅広の突帯が貼付されている。突帯には竹管状の工具によって連続的に刺突が施される。785～788は口縁部が直立するものである。785・786は内面は横位のハケ目調整で，外面には1cmほどのやや幅広の突帯が貼付されている。突帯には竹管状の工具によって連続的に刺突が施されている。785の外面はナデ調整で，指頭圧痕が認められる。786の外面は縦位のハケ目調整である。787は外面に縦位のハケ目調整が施され，約1.5cm幅の突帯にヘラ状工具で斜位のキザミをX字状に入れて菱形文を作出している。内面には指頭圧痕が認められる。788は内外面ともにナデ調整である。

Ⅴａ類土器（第163・164図）

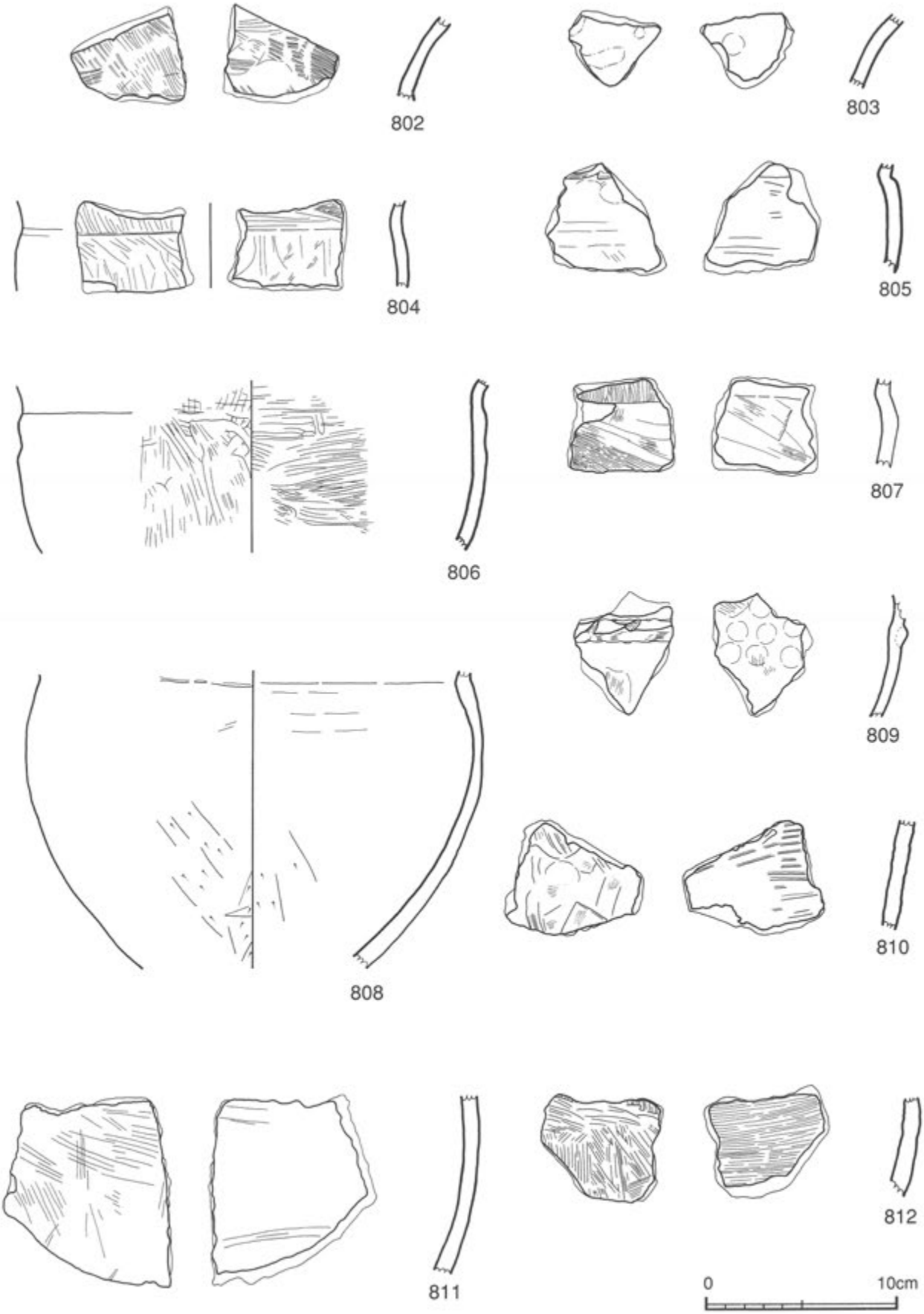
790は頸部径26.6cmを測る。頸部外面は屈曲部が強く，やや凹線状となる。外面はナデ調整で，胴部内面は縦位のヘラケズリが行われている。791は外面が口縁部部分は縦位，胴部は斜位と横位のハケ目調整である。内面は横位のハケ目調整で，一部に指頭圧痕が認められる。792は頸部径23.4cmを測る。頸部外面は屈曲部が強く，やや凹線状となる。外面は口縁部・胴部ともに縦位のハケ目調整で，内面は口縁部が横位のハケ目，胴部はナデ調整である。793は頸部径14.8cmを測る。頸部外面は屈曲部が強く，やや凹線状となる。内外面ともにナデ調整が主で，胴部内面に一部指頭圧痕が認められる。794は頸部径25cmを測り，胴部の張りがほとんど見られないものである。内外面ともに頸部周辺に指頭圧痕が認められる。796は頸部径24.8cmを測る。胴部の張りがほとんどなく，頸部も立ち上がるものである。口縁部外面は縦位，胴部は斜位のハケ目調整である。口縁部内面は斜位のハケ目のちナデ調整で，指頭圧痕が認められる。798・800は胴部の張りがほとんどなく，頸部も立ち上がる。外面は口縁部・胴部ともに縦位のハケ目で，頸部外面には工具によって作出された稜が認められる。内面は横位のハケ目調整で，一部にナデも確認される。798は頸部径21.4cm，800は頸部径27cmである。795・797・799は頸部に突帯が貼付されるものである。795は外面が縦位のハケ目で，下端部に１条の突帯が貼付される。突帯は上下から指で挟むようにつままれており，絡縄突帯の形状を呈している。内面は横位のナデ調整である。797は外面が斜位のハケ目のちナデ調整で，１条の刻目突帯が貼付される。刻目はヘラ状工具によって右斜め方向に入れられている。内面は指頭圧痕の上に，横位のハケ目とナデ調整が施されている。799は外面がヘラ状工具によるナデ調整で，１条の刻目突帯が貼付される。内面もヘラ状工具によるナデ調整であるが，突帯周辺には突帯を貼付する際の痕跡と思われる指頭圧痕が認められる。801は口縁部は縦位のハケ目調整で，頸部は工具の起点痕により凹む。内面は口縁部がナデ調整で，胴部は指頭圧痕の上に横位のハケ目調整が施される。802・803は外反する頸部である。802は外面が斜位，内面は横位のハケ目のちナデ調整である。803は内外面ともにナデ調整である。804は復元頸部径19.9cmである。外面は縦位のハケ目調整で，頸部には沈線状の稜が入る。内面は口縁部が横位のハケ目，胴部が縦位のハケ目のちナデ調整である。805は内外面ともにナデ調整であるが，内面に横位のハケ目調整の痕跡が若干伺える。806は頸部径24.4cmである。胴部にはほとんど張りが見られない。外面は縦位，内面は横位のハケ目調整が施されている。807は内面は区具によるナデ調整で，胴部外面にもハケ目調整のち一部ナデ調整が施されている。

Ⅴｂ類土器（第164～166図）

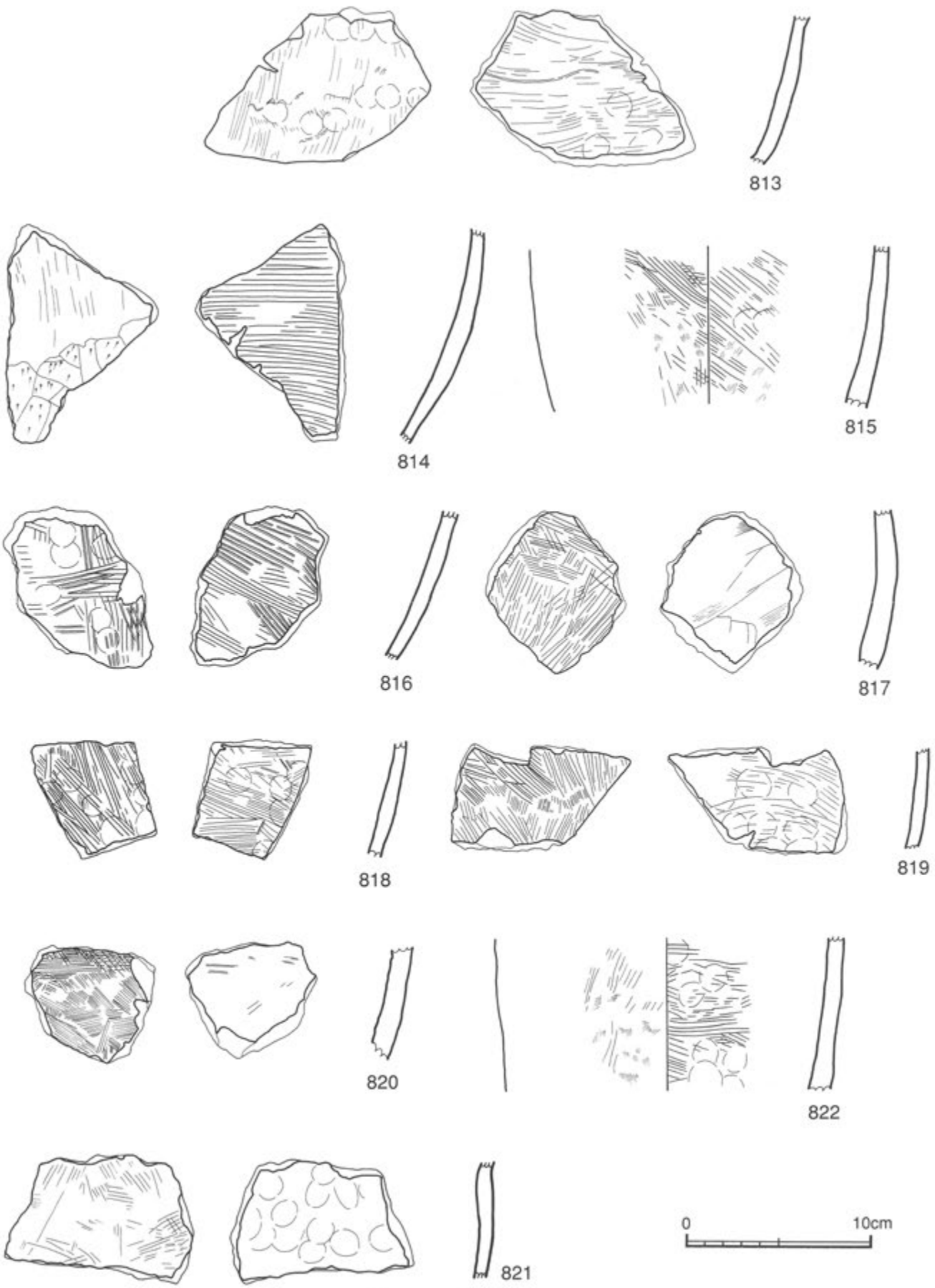
808は胴部最大径が24cmである。胴部上半部は内外面ともにナデ調整が主で，下半部は内外面ともにヘラケズリが行われている。809は外面に刻目突帯が貼付されるものである。突帯の周囲を強くナデているため，凹線状に凹む。突帯には右斜め方向にヘラ状工具によって刻目を入れている。内外面ともにナデ調整である。810・811は内外面ともにハケのちナデ調整である。812は外面が縦位，内面は横位のハケ目調整である。813は外面が縦位，内面が横位のハケ目調整で，内外面ともに指頭圧痕が認められる。814は813と同様，外面が縦位，内面が横位のハケ目調整であるが，外面下半部にヘラケズリが施されている。815は残存部における胴部径19.6cmで，内外面ともに斜位のハケ目調



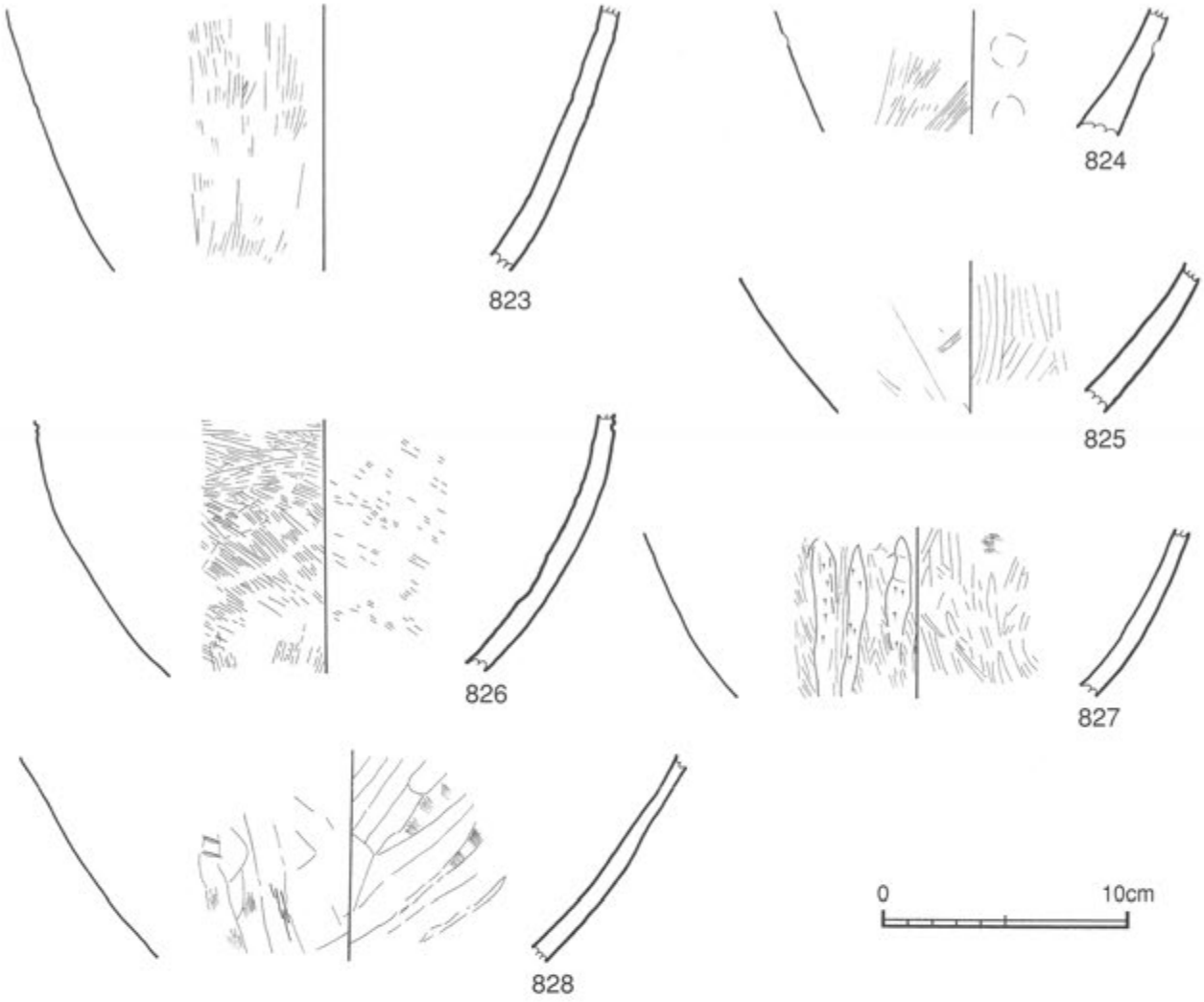
第163図　成川式土器 9



第164図　成川式土器10



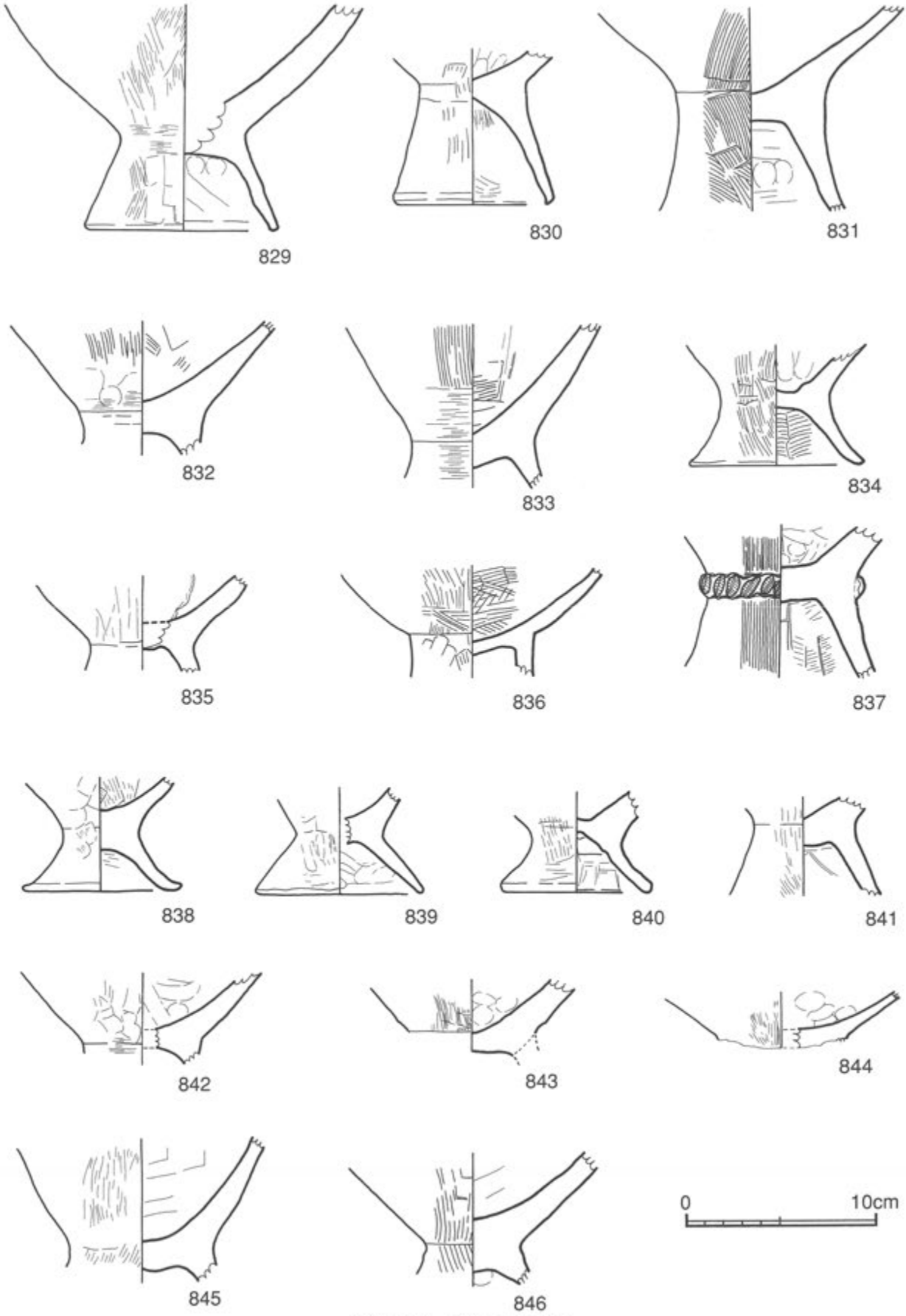
第165図　成川式土器11



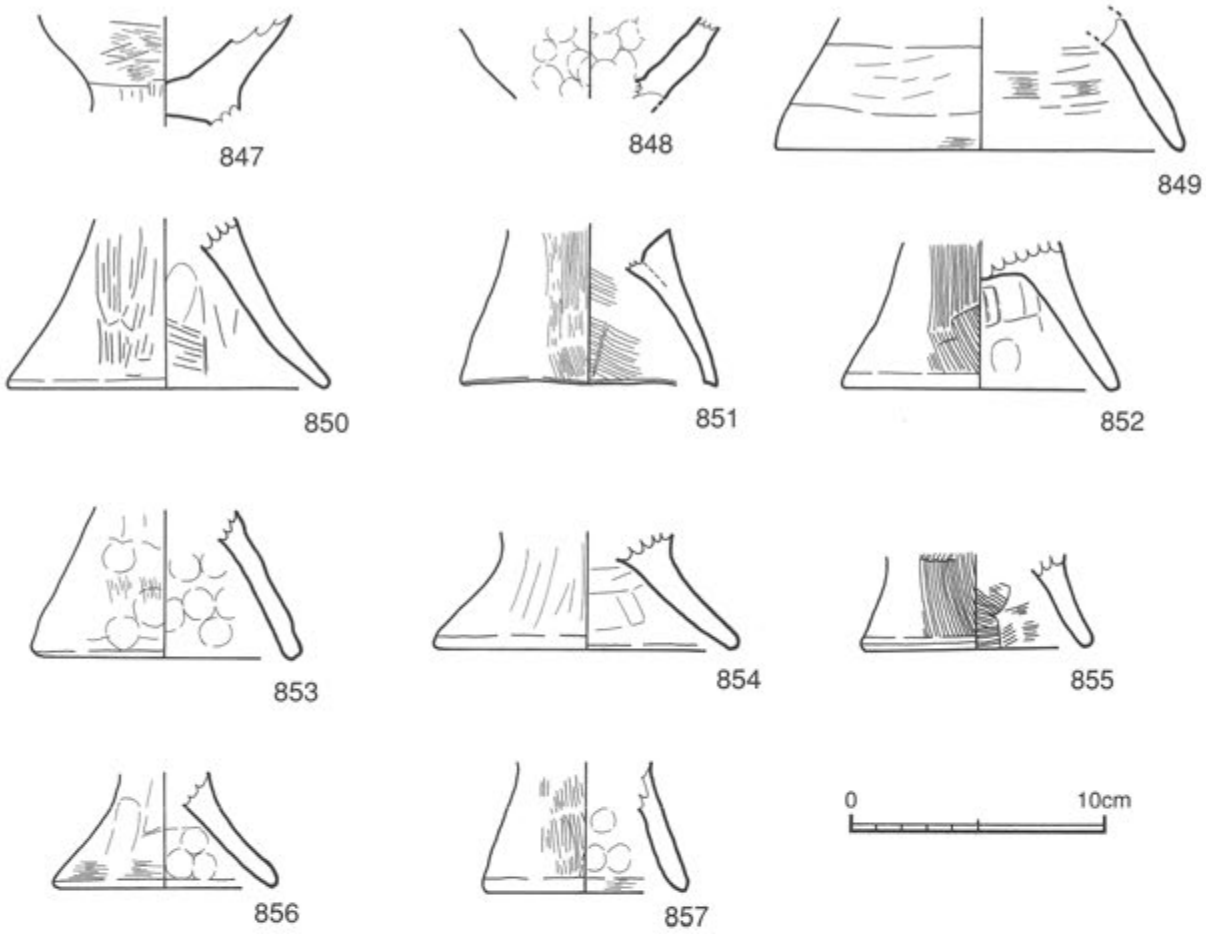
第166図　成川式土器12

整である。816・818・819は内外面ともに斜位のハケ目調整で，外面もしくは内面に指頭圧痕が認められる。817・820は外面がハケ目，内面がナデ調整である。821は外面がハケのちナデ調整，内面はナデ調整であるが，指頭圧痕が多く認められる。822は残存部における胴部径19cmである。外面はハケのちナデ，内面は指頭圧痕の上に横位のハケ目が施される。

823～828は胴下半部である。823・824は外面がハケのちナデ，内面はナデ調整である。823は残存部における胴部径25cm，824は16.2cmを測る。825は残存部における胴部径19cmで，外面はハケのちナデ，内面は縦位のハケ目調整である。826は残存部における胴部径23.6cmで，ほぼ胴部最大径に相当すると思われる。外面はハケ目が主で下半部にややナデが施される。内面はナデが主で，斜位のハケ目の痕跡が若干認められる。827は残存部における胴部径22.6cmで，外面にはハケ目調整と一部に縦位のヘラケズリが認められる。828は残存部における胴部径27cmで，内外面ともに工具ナデの痕跡が伺える。



第167図　成川式土器13

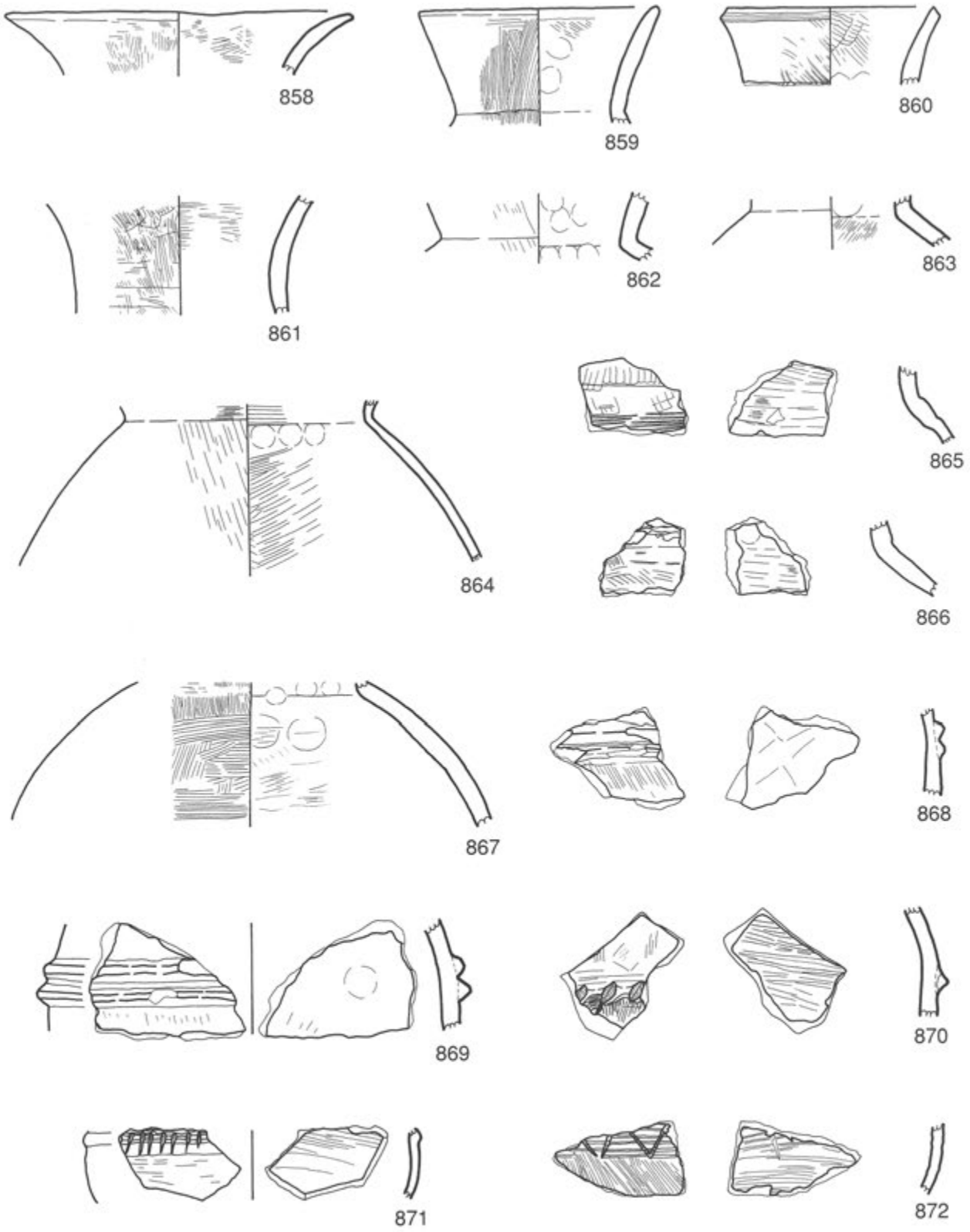


第168図　成川式土器14

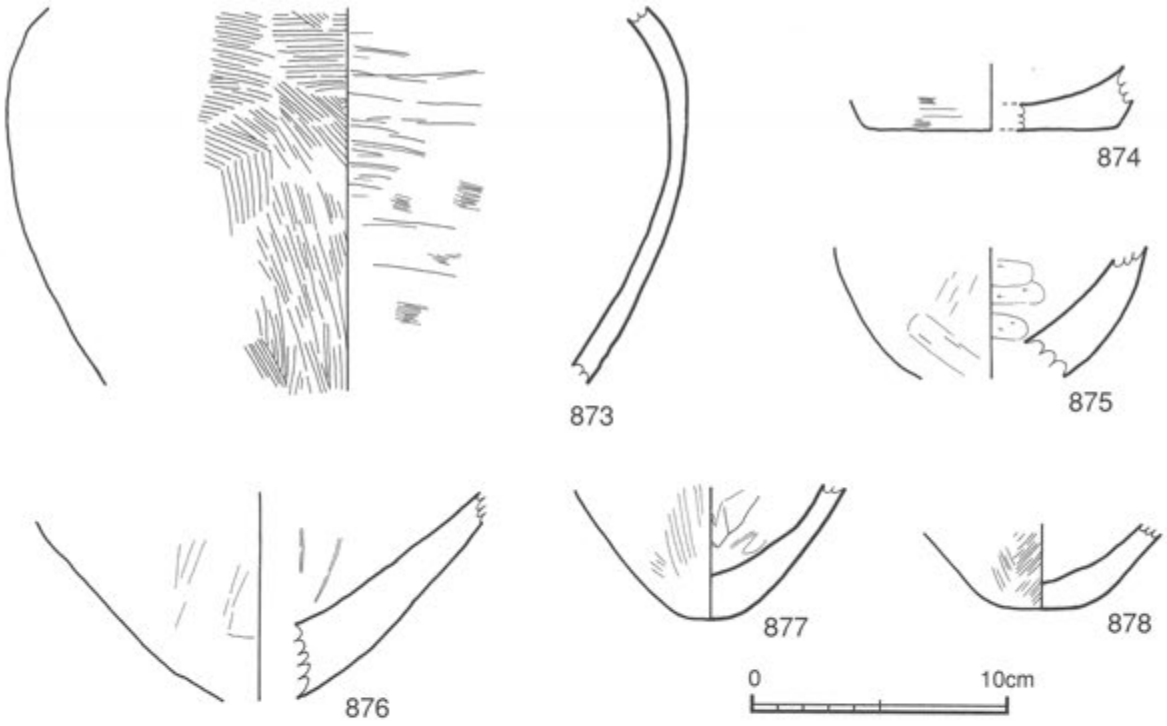
Ｖｃ類土器（第167・168図）

829は脚底径10.4cmを測り，中空脚台の内部形状は台形状を呈する。脚部外面はハケ目と工具痕が認められ，内面にも斜位の工具痕が認められる。脚部と胴部の境には横位のナデ調整が行われている。830は脚底径8.6cmを測り，中空脚台の内部形状は逆丸底状を呈する。やや細長い脚部である。

831は中空脚台の内部形状が台形状を呈するものである。外面は縦位，内面は横位のハケ目で，一部に指頭圧痕が認められる。832・833・835は脚部と胴部の境に横位のナデ調整が施されている。834は脚底径9.4cmを測る。やや踏ん張るような形状を呈し，中空脚台の内部形状は逆船底状を呈する。外面は縦位，内面は横位のハケ目調整が施される。836は残存部分の脚部は直立している。837は外面は胴部から脚部に縦位のハケ目調整が施され，脚部と胴部の境に一条の刻目突帯が巡る。通常の成川式土器ではこの部分に突帯を貼付することはないので，珍しいタイプである。脚部内面には横位のハケ目が施され，ハケ目工具の起点痕も認められる。中空脚台の内部形状は台形状である。838～840はやや小さめの脚台である。838は脚底径8.6cmで，脚端部が反って踏ん張るような形状を呈する。中空脚台の内部形状は逆船底状である。839は脚底径9cmで，中空脚台の内部形状は台形状である。840は脚底径8.2cmで，脚部がやや反る。中空脚台の内部形状は三角形状である。841は丸底の甕に粘土を輪高台状に接合して脚部を形成したと思われるもので，脚部内面が逆丸底を呈してい



第169図　成川式土器15



第170図　成川式土器16

る。内面には工具の起点痕も認められる。842は胴部と脚部の境に横位のナデが施される。843～848脚部の大部分が欠損している。849は脚底径16.2cmと大型である。内外面ともに横位のハケ目調整である。850は脚底径12.8cmで，胴部付け根に向かって細長くなる。脚端部はやや反っており，若干踏ん張る形状である。851・853は脚部がやや内反りとなるものである。851は胴部からはずれた脚部と思われ，上端部が擬口縁状を呈する。外面は縦位，内面は斜位のハケ目調整が施される。脚底径10.2cmである。853は脚底径10.8cmである。内外面ともに指頭圧痕が認められる。852は脚底径11cmである。外面は縦位のハケ目で，内面は横位方向に工具痕が認められる。854・856は脚部が反って踏ん張った形状を呈するものである。854は脚底径12.2cmで内面に横位方向の工具痕が認められる。856は脚底径9cmで外面は縦位の板ナデ，内面は指頭圧痕が認められる。857は脚底径8cmで，直立ぎみに立ち上がる。

Ⅵ類（第169・170図）

858～860は壺の口縁部である。858は口径17.8cmで外反する。内外面ともにハケのちナデ調整が施される。859・860は口縁部が緩く外反し，直口気味になるものである。859は外面が縦位のハケ目調整で，頸部には工具の起点痕によって稜が見られる。口縁端部は横位のナデ調整が施される。内面はナデ調整が主で，一部に指頭圧痕も確認される。口径12cmである。860は口径10.6cmで口縁端部は面取りされる。外面は縦位のハケ目のちナデ調整である。

861～866は頸部である。861は頸部径11cmである。外面は縦位，内面は横位のハケ目調整が施される。862は頸部付け根部分で，頸部径10cmである。外面は縦位のハケ目のちナデ，内面には指頭圧痕が認められる。863も頸部付け根部分で，頸部が頸部径8.2cmである。865・866も頸部付け根部

分であるが，頸部の締まりが弱い。いずれも外面は縦位，内面は横位のハケ目調整である。
864・867は頸部付け根から胴部である。いずれも頸部内面には指頭圧痕が認められる。864は頸部径12.6cmで，外面縦位，内面斜位のハケ目調整である。867は頸部径約11.8cmで，外面は縦位のち横位のハケ目，内面は横位のナデ調整である。

868～872は胴部片で，いずれも突帯が貼付されるものである。868・869は断面三角突帯が2条貼付されている。外面の突帯下は縦位のハケ目，内面はナデ調整である。869は復元胴部径20.8cmである。870は1条の断面三角突帯の上にヘラ状工具によって右斜め方向のキザミ目が施されるものである。内面は横位のハケ目調整である。871は1条の丸みをもった突帯の上にヘラ状工具によって縦位のキザミ目が施されている。外面は横位のハケのちナデ，内面も横位のナデ調整である。復元胴部径17cmを測る。872は胴部外面にヘラ状工具で5・6条の横位の沈線を入れ，その上にさらにV字状に沈線文を加えて文様を構成する。外面は縦位，内面は横位のハケ目が施される。

873はやや肩の張った器形を呈し，胴部最大径26.6cmを測る。外面は上半部が横位，下半部が斜位のハケ目で，内面は横位のナデ調整である。874は平底の底部である。底径10cmを測る。外面には横位のナデ調整が施される。875は丸底の底部になると思われる。外面は工具ナデ，内面は横位のヘラケズリが施されている。876・877は尖底状の底部である。いずれも外面は縦位のハケ目調整で，内面には横位の工具痕が認められる。878は底面の小さい不安定な平底を呈する。外面にはハケ目調整が施されている。

Ⅶ類土器（第171図）

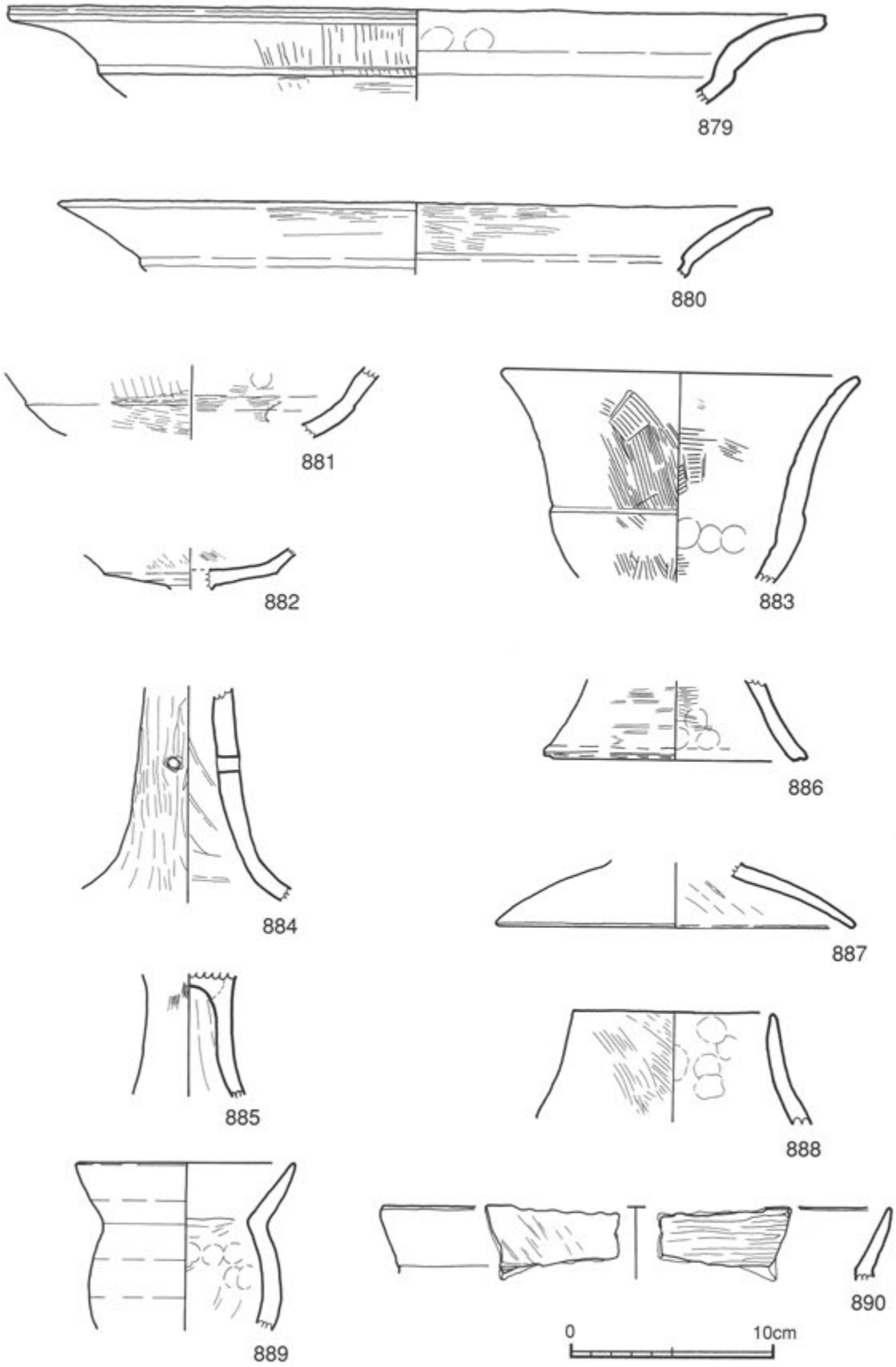
879・880は坏部の中途で屈折し，口縁部が大きく外反するものである。屈曲部に段をもつ。879は口径40.8cmで口唇部を四角くおさめる。外面には縦位のハケ目調整の痕跡が認められる。880は口径35.6cmで横位のナデ調整が施される。881は坏部の屈曲部付近である。内外面ともにハケ目調整の痕跡を残す。882も同じく屈曲部付近であるが，屈曲部分の直径が8.8cmと小形のものである。883は坏部が深い高坏で，屈曲部から長く伸びた口縁部が若干外反するものである。屈曲部には段を有する。外面は縦位，内面は横位のハケ目調整で，坏部内面には指頭圧痕も認められる。

884・885は高坏の脚部である。外面にはミガキが施され，内面には絞りの痕跡が伺える。884は脚部に円孔をもつ。

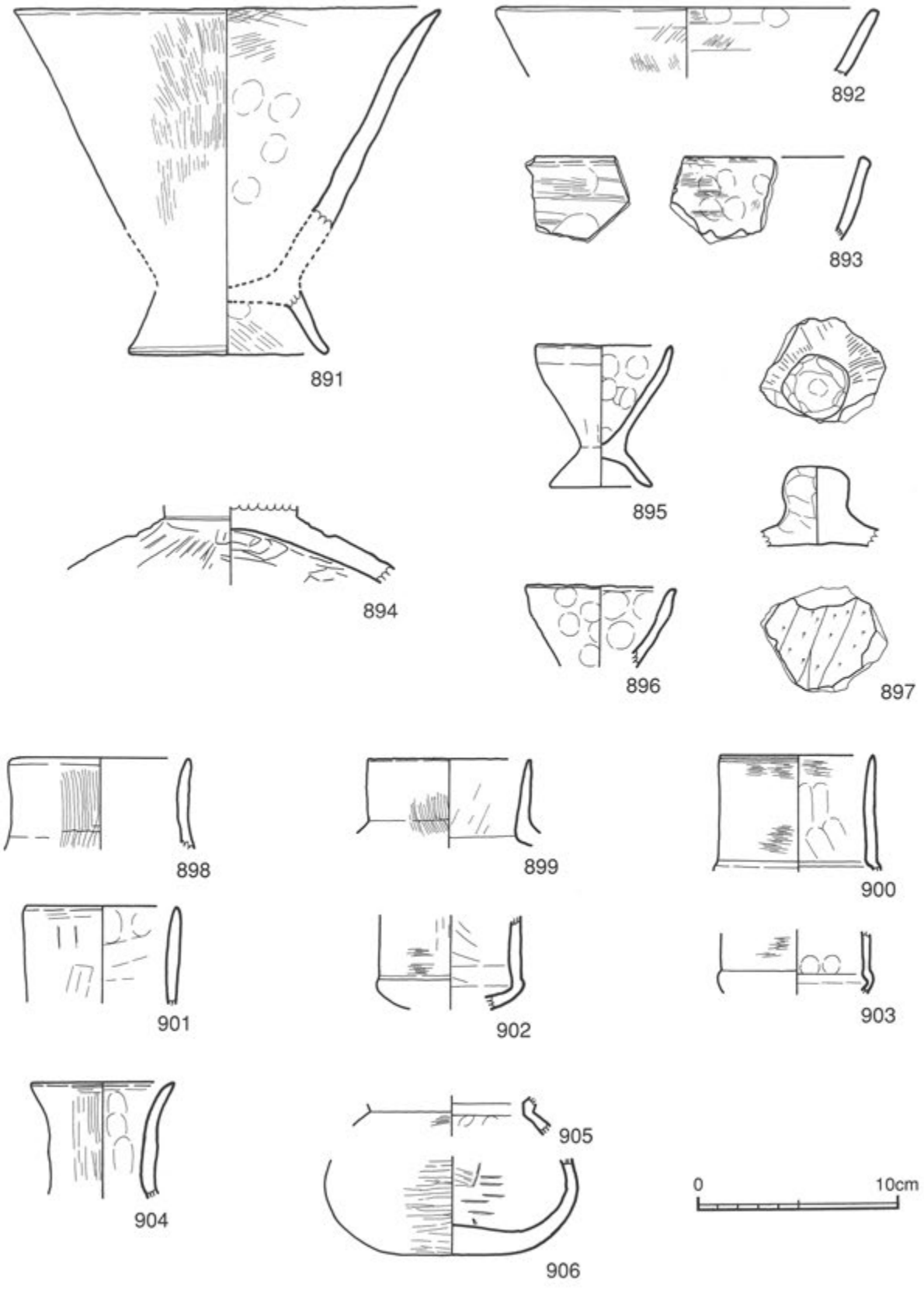
886・887は高坏の底部である。886は底径13.2cmを測る。端部は若干凹む。内外面ともに横位のハケのちナデ調整で，内部には指頭圧痕も認められる。887は裾部分が内反りする形状を呈し，底径18cmを測る。外面はナデ調整で，内面には工具痕が残る。888は特殊な器形を呈するもので，壺あるいは鉢の類かと思われる。胴部から口縁部へ向かって内反りしながら立ち上がるもので，口径10cmを測る。外面はハケ目調整が施され，内面には指頭圧痕が認められる。

Ⅷ類土器（第172図）

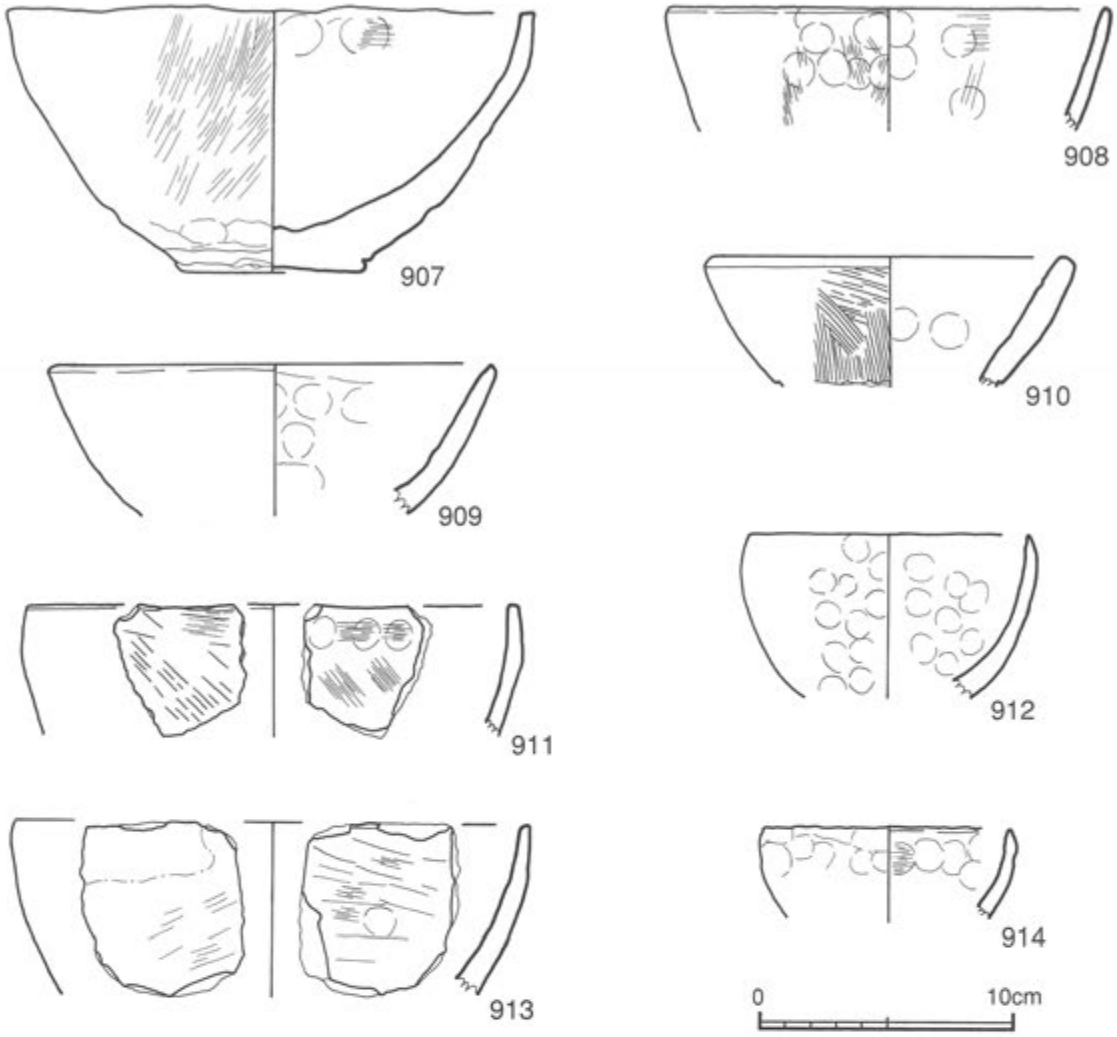
891は口径21.4cmである。胴部から外に直線状にひらく器形を呈し，底径10cmの脚部が付く。外面は縦位のハケ目で，内面はナデ調整である。892・893は鉢の口縁部片で，892は復元口径19cmである。893は口唇部を四角くおさめ，外面は横位のハケ目のちナデ調整，内面には指頭圧痕が認めら



第171図　成川式土器17



第172図　成川式土器18



第173図　成川式土器19

れる。895・896は小形の鉢で，手捏ね土器である。895は口径7cm・脚底径5cmで口縁部はやや内弯し，内面には明瞭な指頭圧痕が認められる。896は口縁部片で復元口径7.6cmを測り，内外面に明瞭な指頭圧痕が認められる。

Ⅸ類土器（第172図）

894は蓋形土器の胴部片と思われる。甕・鉢類よりも開きが大きい。外面は縦位のハケ目，内面には工具痕が認められる。つまみ部分は，付け根径で6.6cmである。897は蓋のつまみ部分と思われる。直径3.4cmで丸みをもち，ヘラ状工具によるナデ調整が施されている。蓋外面はハケ目調整，内面はヘラケズリが行われている。

Ⅹ類土器（第172図）

898～901は口頸部である。898・899は口頸部が短いもので，898が口径9cm・口頸部長4cm，899が口径8.2cm・口頸部長3.2cmである。いずれも頸部付け根に稜をもち，外面は縦位のハケ目調整，内面はナデ調整である。900・901は口頸部がやや長くなるもので，900が口径7.8cm・口頸部長5.4cm，

901は口径7.6cm・口頸部長5cmである。900は頸部付け根内外面に明瞭な稜が認めらる。内外面ともに丁寧なナデ調整で，内面には指頭圧痕も認められる。901も内外面ナデ調整であるが，工具痕も認められる。904も同じく口頸部であるが，細長く手捏ね的で坩形土器かどうか断定できない。口径7cm・口頸部径6cmで，外面はハケ目調整，内面は指頭圧痕が認められる。

902・903・905・906は頸胴部である。902は胴部最大径7.4cmである。胴部最大径の位置はほぼ頸部付け根付近と高い位置にあって，肩が張る形状を呈する。胴部高は低く，口頸部高の方が長い形状を呈する。903は胴部最大径7.8cmである。ほぼ902と同様の形状を呈するものと思われる。905・906は同一個体である。胴部最大径12.8cmとやや大きめである。底面はやや丸みのある平底を呈する。内外面ともに丁寧なナデ調整である。

ＸⅠ類土器（第173図）

907は完形である。口径20.8cm・底径7.4cmで，全体的に凸凹した印象を受ける。外面はハケ目・内面はナデ調整である。908は口径17.6cmで，内外面ともに指頭圧痕が認められる。909は口径17.6cmである。内外面ともにナデ調整が行われているが，内面には指頭圧痕も認められる。910は口径14.6cmである。外面にはハケ目調整が行われている。911・913は破片で，911は復元口径19.4cm，913は復元口径20.4cmである。いずれも内外面ともにハケ目調整が行われている。912・914は手捏ね状である。912は口径11.2cm，914は口径10cmで，内外面ともに多数の指頭圧痕が認められる。

ＸⅡ類土器（第171図）

889は布留式の模倣甕と思われるものである。口径11cm，胴部最大径9.6cmと小形である。口縁部は「く」字状に外反し，先端へ向かって細くなる。口縁部内面はわずかに凹み，稜が入る。外面はナデ調整，内面には指頭圧痕が認められる。890は復元口径25.6cmである。889と同様，口縁部は「く」字状に外反し，先端へ向かって細くなる。口縁部内面はわずかに凹み，稜が入るものである。外面は縦位のハケのちナデ，内面は横位のハケ目調整である。口縁部器形的には889に類似するが，胴部器形が不明なため，布留式模倣甕かどうかは断定できない。

第4節　古代の調査

古代の遺構・遺物はⅢ層から検出されている。遺構はB～H区を中心に，土坑・ピットが検出され，遺物は土師器・土師器甕・須恵器が出土した。

4-1：古代の検出遺構

①土坑（ＳＫ）

SK15（第175・176図）

SK15はD-12区で検出された。長径53cm，短径33cmであり，残存している深さは約70cmである。土坑のプラン検出時点で，遺物は検出面よりも高さ約10cm程度削り込んでいたことから，土坑自体の深さは少なくとも約40cm程度はあったと考えられる。平面形は全体的に楕円形で，極端に西方向へ斜めに掘られ，緩やかなカーブを呈している。主軸方向はＮ30°Ｗである。

出土した遺物は土坑の上位で出土しており，すべて須恵器である。ほぼ完形のものが3点，破片が1点である。破片のものは他の3点とは接合できなかった。まとめて投げ込まれたと考えられ，向きは揃っていない。そのうちの最も北側の，ほぼ横向きになった状態で出土した高台の付かないものに「日置厨」と墨書された須恵器があった。

915・916は埦で底部に高台が付くものである。915は口径12.6cmである。916は口縁部が傾斜している。口径12.1cmである。917は須恵器破片である。他の3点とは接合できなかったため別個体として扱ったが，同一個体の可能性もある。919は坏で高台がつかず，ヘラ切り底である。底部外面に「日置厨」と墨書されている。8世紀後半～9世紀頃に位置づけられると思われる。口径12.3cmである。

SK16（第177図）

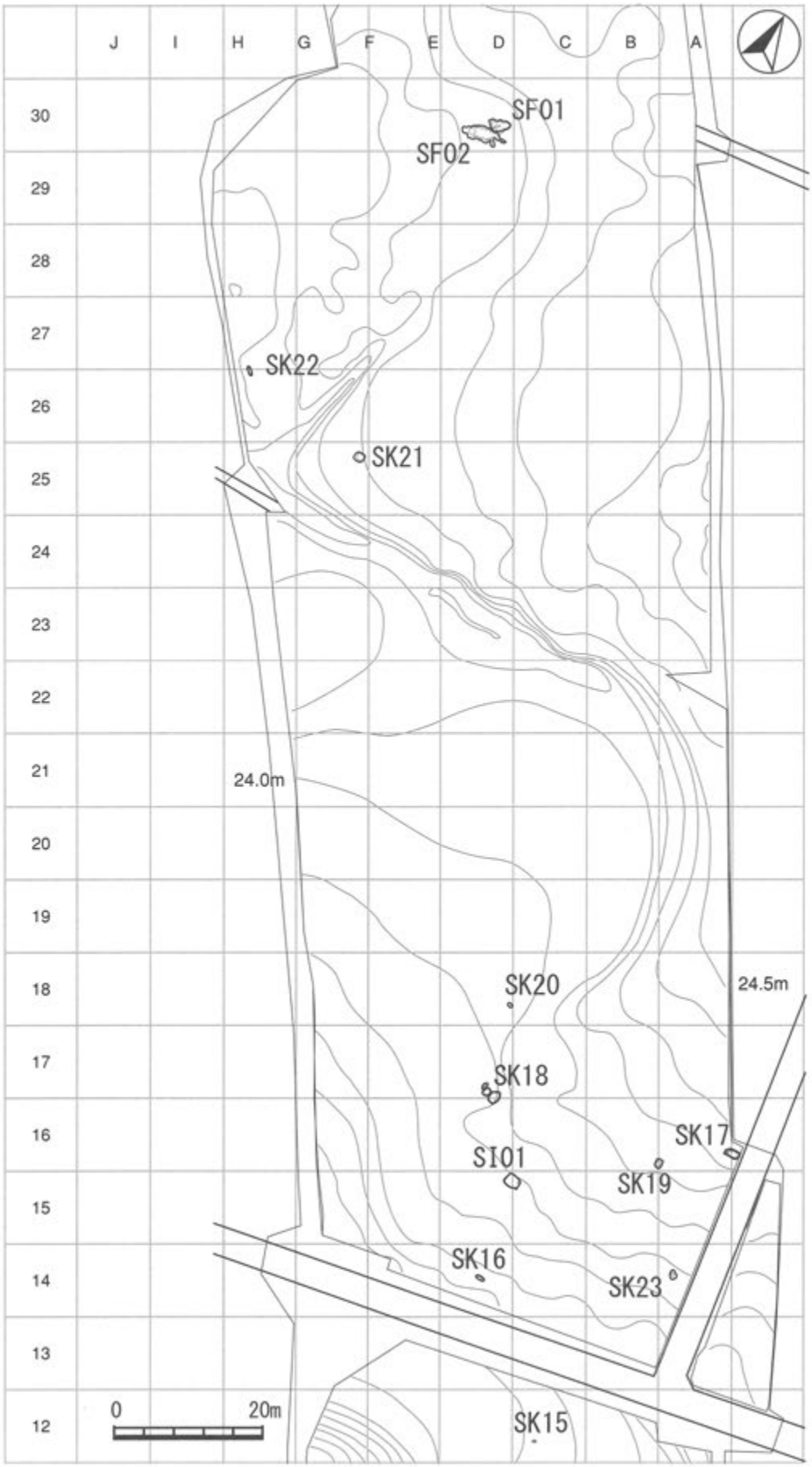
SK16はB-14区で検出された。長径42ｃｍ，短径38cmで，深さは約26cmである。ただ，土坑の検出時には，遺物が検出面よりも2～3cm程度上部にあったことから，深さはこれよりも若干深くなるものと考えられる。平面形は角張った円形で，底部は平たいことから断面形は台形に近い形状をしている。主軸方向はＮ60°Ｅである。遺構内から須恵器1点出土した。

919は須恵器埦である。底部に高台の付くもので，全体の約3分の1程度が残存している。

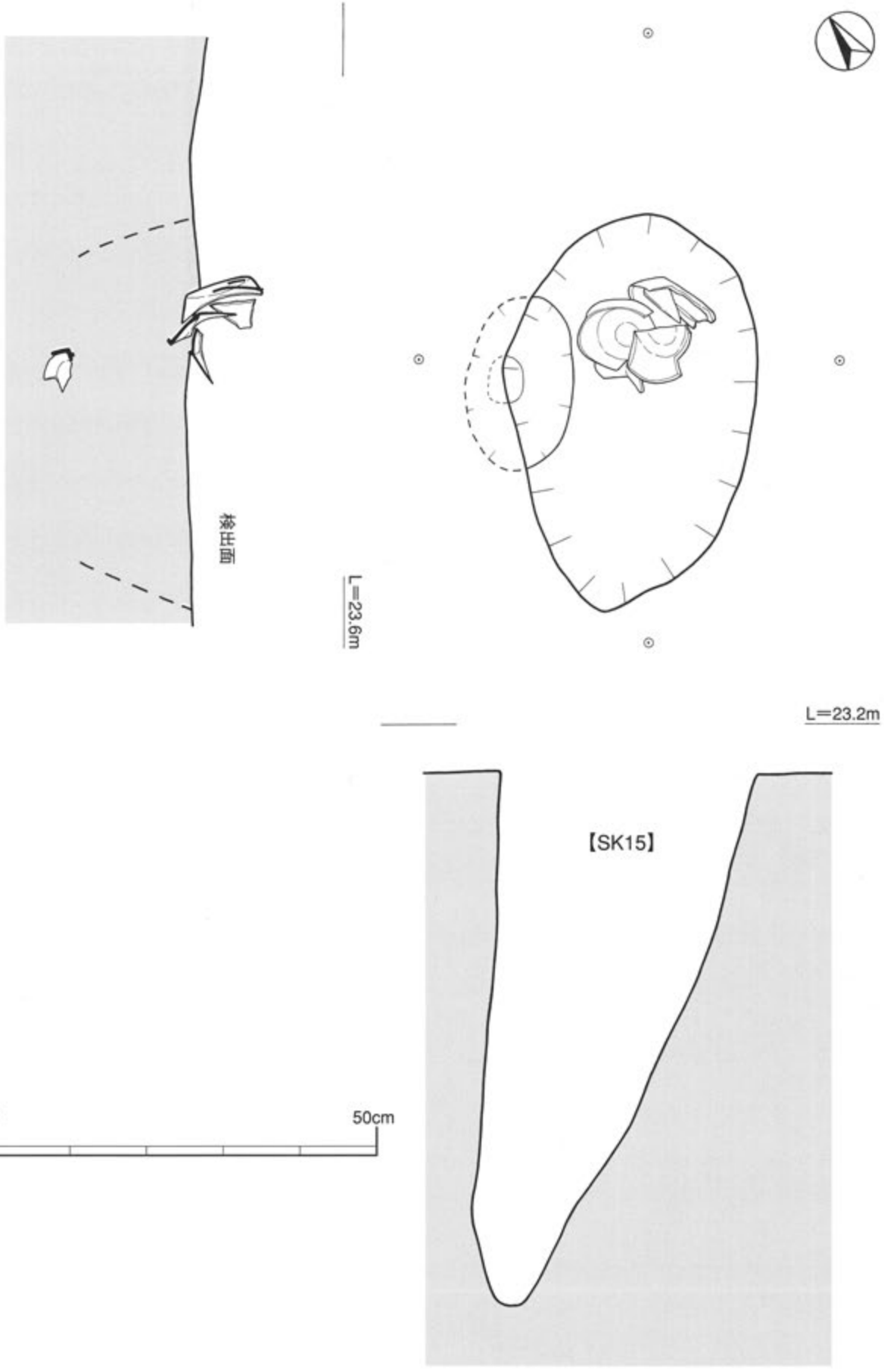
SK17（第178・179図）

SK17はB-16区で検出された。長径220ｃｍ，短径100cmで，深さは約60cmの楕円形を呈する。主軸方向はＮ60°Ｅである。埋土中から多くの遺物が出土しているが，特に床面に近い位置で墨書土器が出土している。

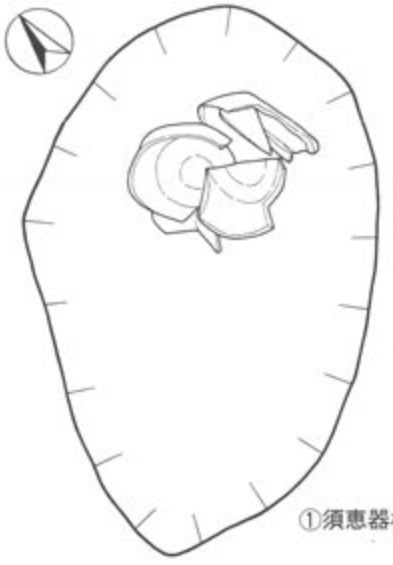
920～922は内黒土師器である。いずれも内面は丁寧なヘラミガキが施されている。920は埦で，伏せるような形でほぼ床面に接して出土した。口径14.5cmで，体部外面に縦書きで2文字が墨書されている。文字自体は判読不明であるが，下の文字は「宋」とも読める。921も体部外面に墨書されている。破片のため文字自体は判読不明である。復元口径15.9cmを測る。923～926は土師器甕の口縁部である。923は胴部からほぼ直線的に立ち上がり，口縁部が短く外反するものである。



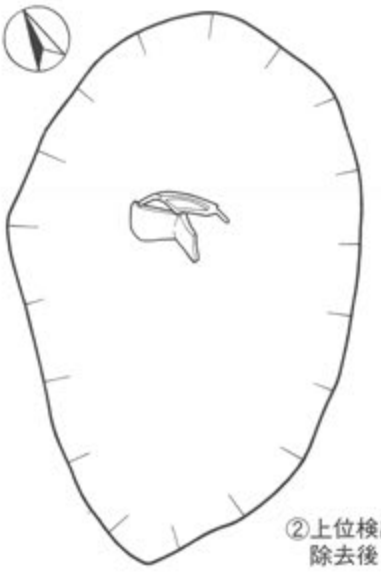
第174図　古代遺構配置図



第175図　SK15

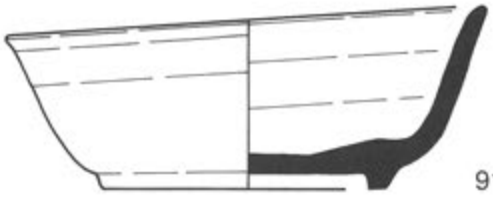


①須恵器検出状況上観図



②上位検出須恵器
除去後

915

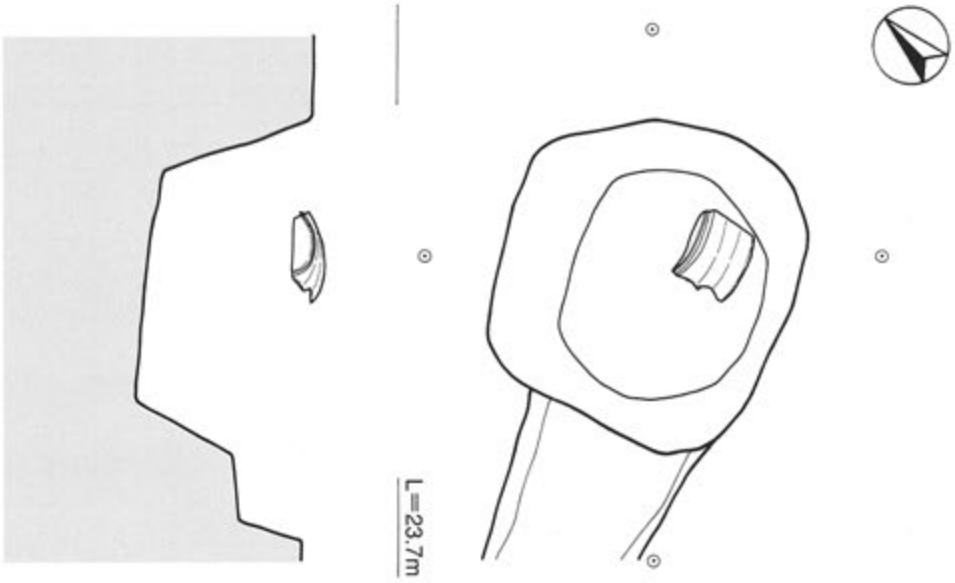


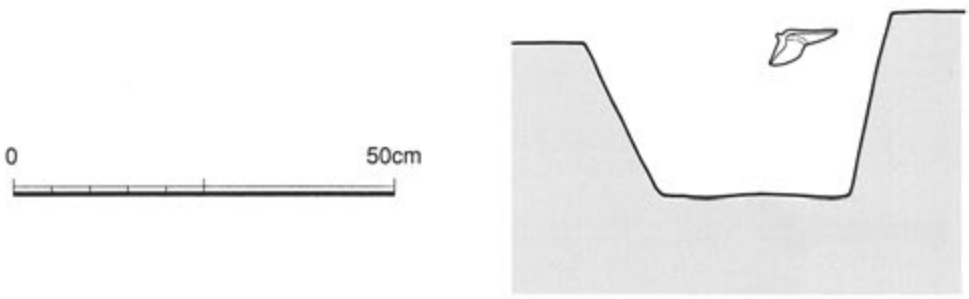
916

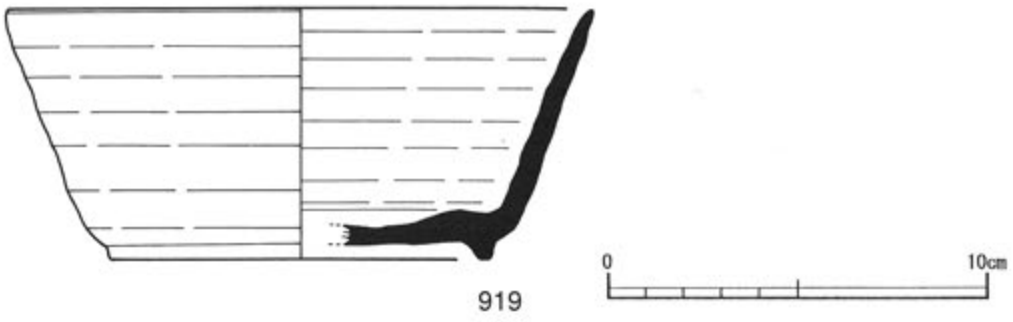
918

917

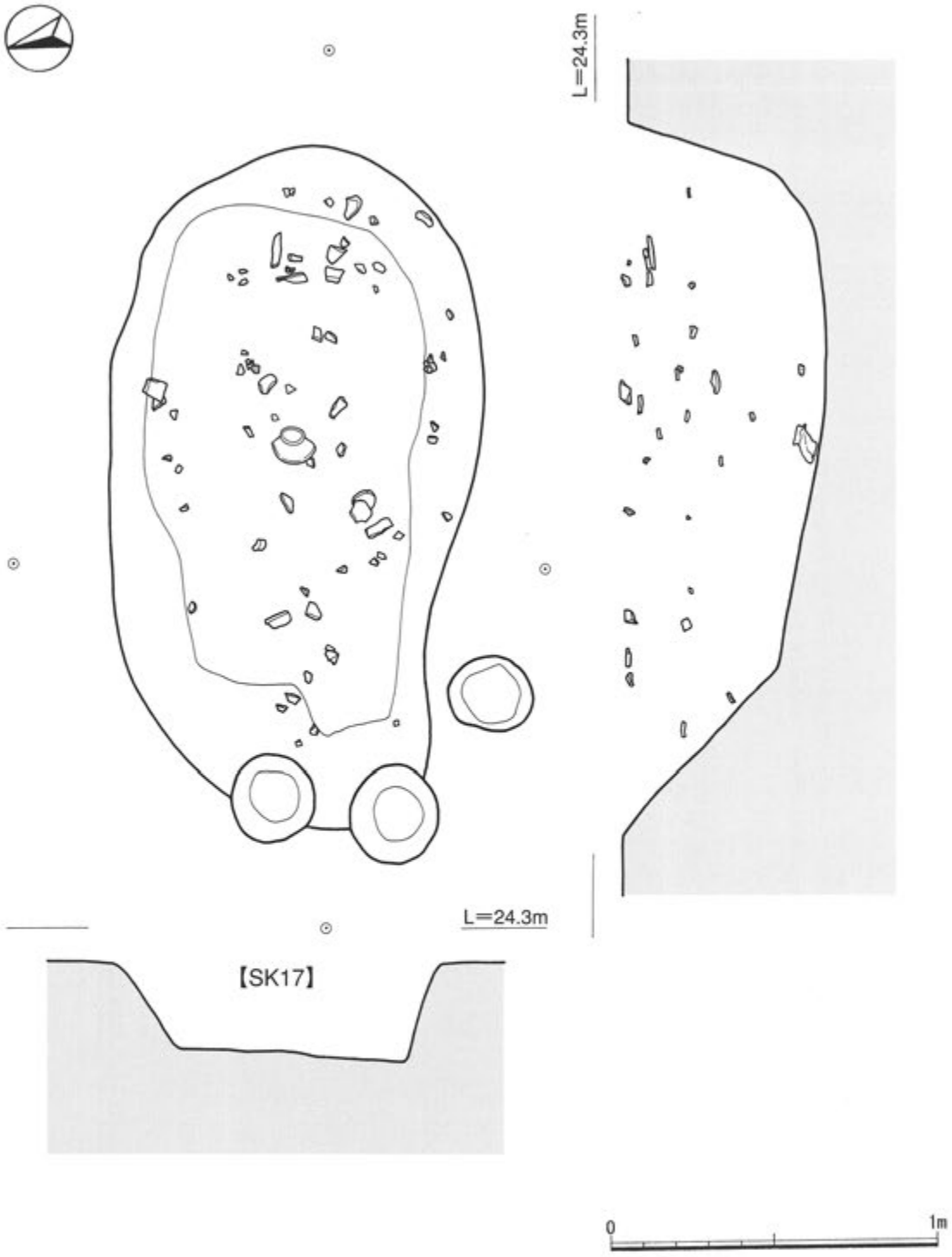
第176図　SK15出土遺物



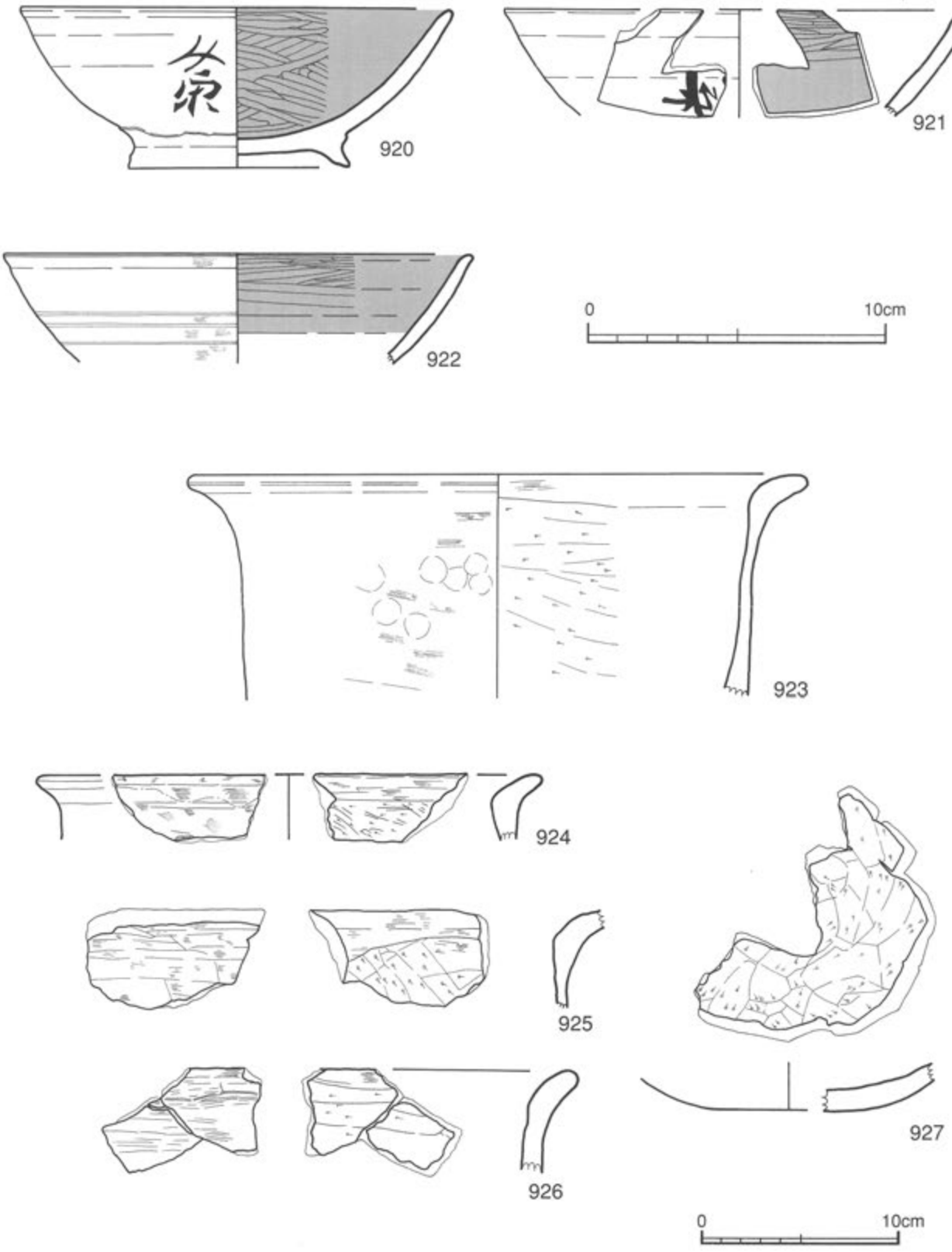




第177図　SK16



第178図　SK17



第179図　SK17出土物

外面は比較的丁寧なナデ調整で，内面は横位のヘラケズリである。924～926も口縁部が短く外反するもので，外面はナデ調整，内面は925は斜位のヘラケズリで，他は横位のヘラケズリである。927は土師器甕の底部と思われる。外面はナデ調整で，内面はヘラケズリが行われている。底径約5.5cmで，平底を呈する。

②竪穴遺構（SI）

SI01（第180図）

SI01はD・E-15区で検出された。主軸方向はN60°Eで，隣接して検出されたSI02とは主軸方向が異なる。長径208cm，短径162cmでほぼ方形を呈するが，南側だけが角が丸みをもち，小さな張り出しをもつ。深さは約20cmである。内部から柱穴8基が検出されているが，これらすべてが本遺構に伴うものとは考えにくく，本来は2基程度が遺構と対応しているのではないかと考えられる。埋土中から土師器が出土している。

928～931は土師器の口縁部である。928・931は復元口径がそれぞれ15.4cm・15cmを測る。930は口径12.8cmと他と比べて小形で，口縁部の傾斜も強いことから，皿の可能性が考えられる。929は口径10.8cmと小形で体部が深い。932は坏の底部で，933は高台付き埦の底部である。いずれもヘラ切り底である。

SK18（第181図）

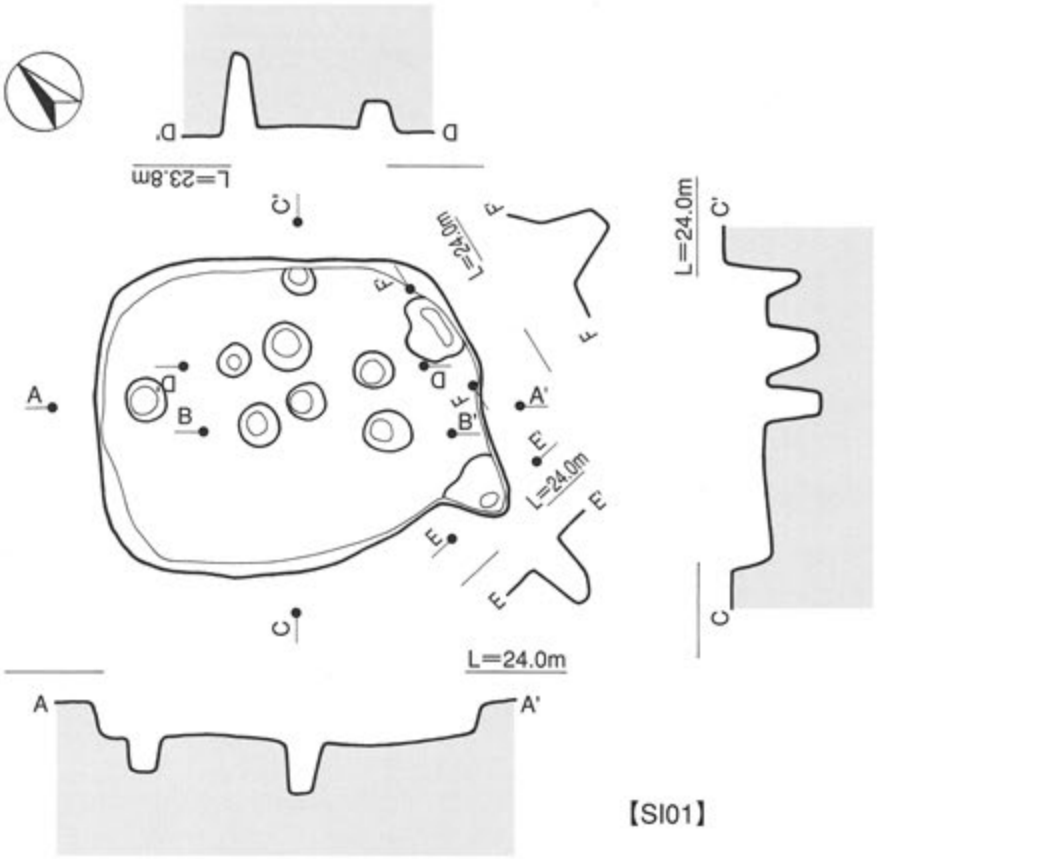
SK18はE-16・17区で検出された。検出状況時に1つの土坑として把握していたが，完掘の結果3つの土坑によって構成されていることが判明した。埋土中から土師器が出土している。

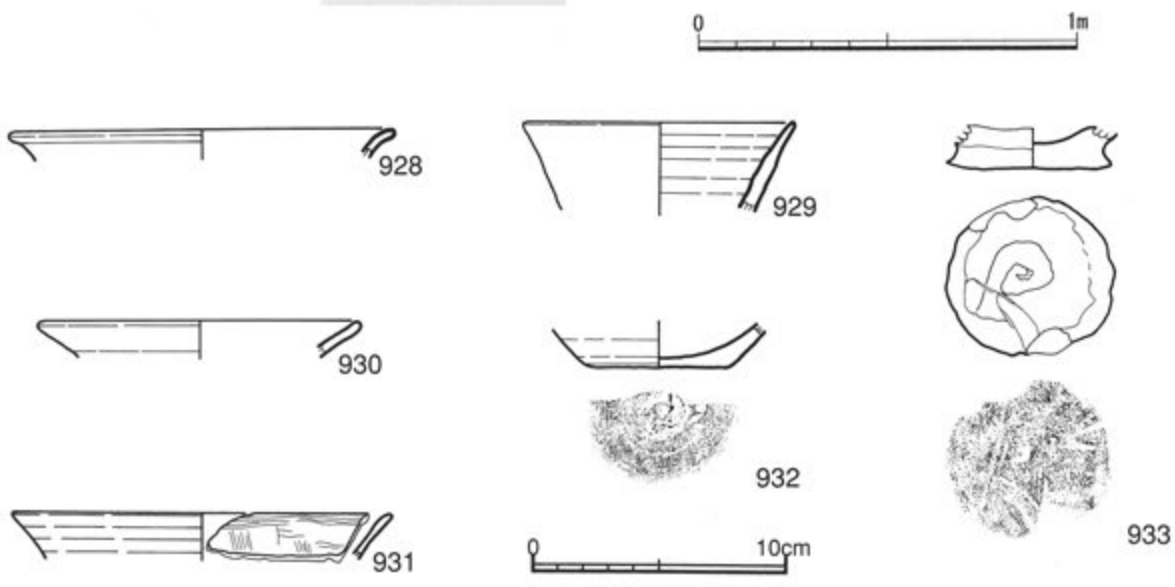
934～936は土師器の口縁部である。口縁部径は13.4～14cmと，いずれもほぼ同程度の大きさである。937は土師器坏の底部である。939は土師器の蓋と思われる。口径17cmで，体部が深く，口縁部内面に付着物のような痕跡が認められる。938・940は土師器甕である。938は土師器甕の口縁部で，短い口縁部が逆「L」字状に近い状態に折れ曲がっている。外面には口縁部を曲げる際の痕跡と思われる指頭圧痕が認められ，内面には縦位のヘラミガキが残る。940は土師器甕の頸胴部片である。頸部からやや外にふくらむ形状を呈する。外面は横位のハケ目調整で，内面は首部がハケ目，胴部はナデ調整である。

SK19（第182図）

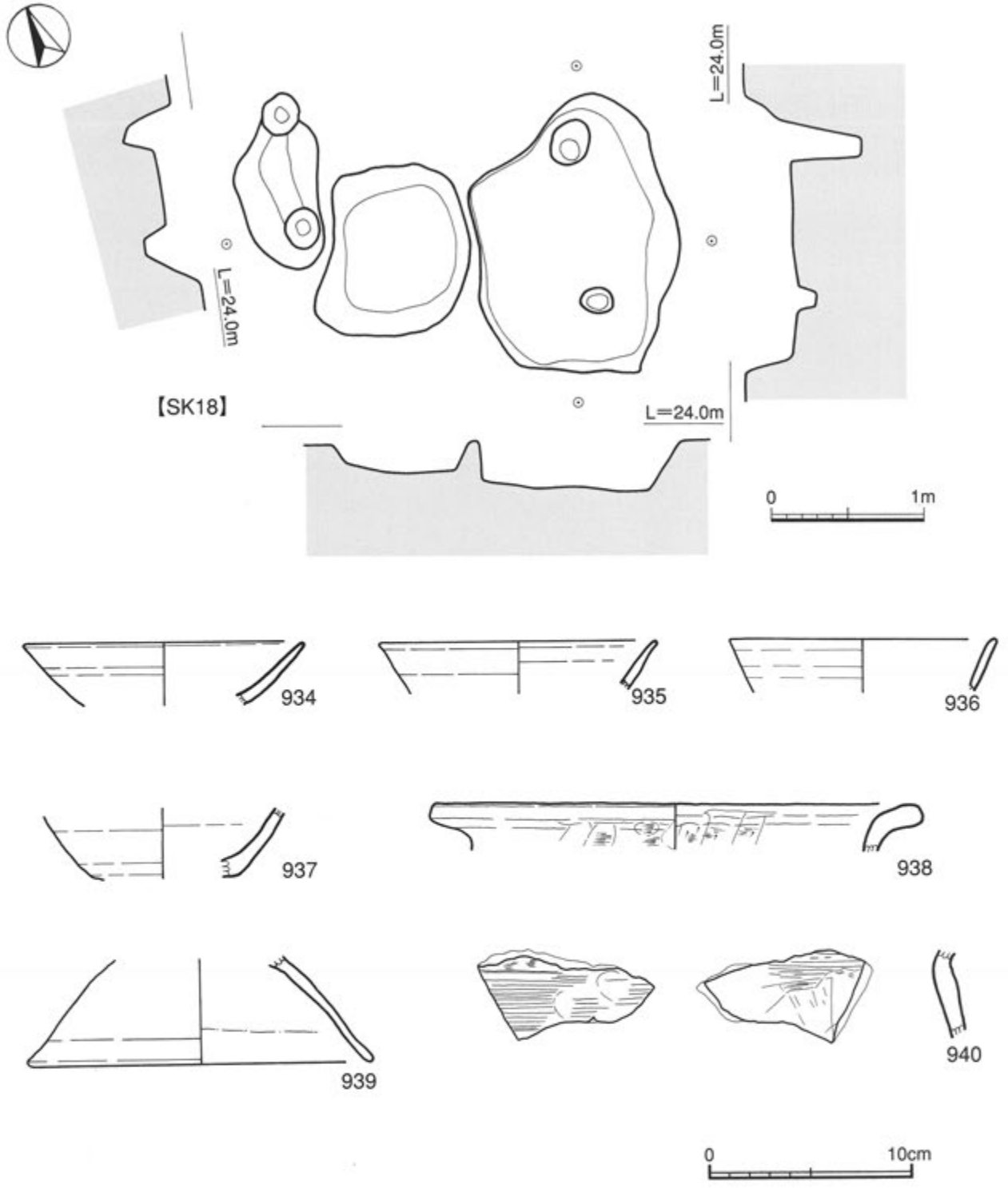
SK19はC-16区で検出された。長径117cm，短径88cmの楕円形を呈し，深さは約40cmと深めである。埋土中から土師器甕が出土している。

941は土師器甕である。復元口径29.2cmを測る。外面はヘラ状工具等によるナデ調整が行われている。内面は口縁部分がナデ調整で，胴部が横位のヘラミガキが施されている。


L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
L=23.8m
L=24.0m
L=23.8m
【SI01】


928
929
930
931
932
933
0
1m
0
10cm

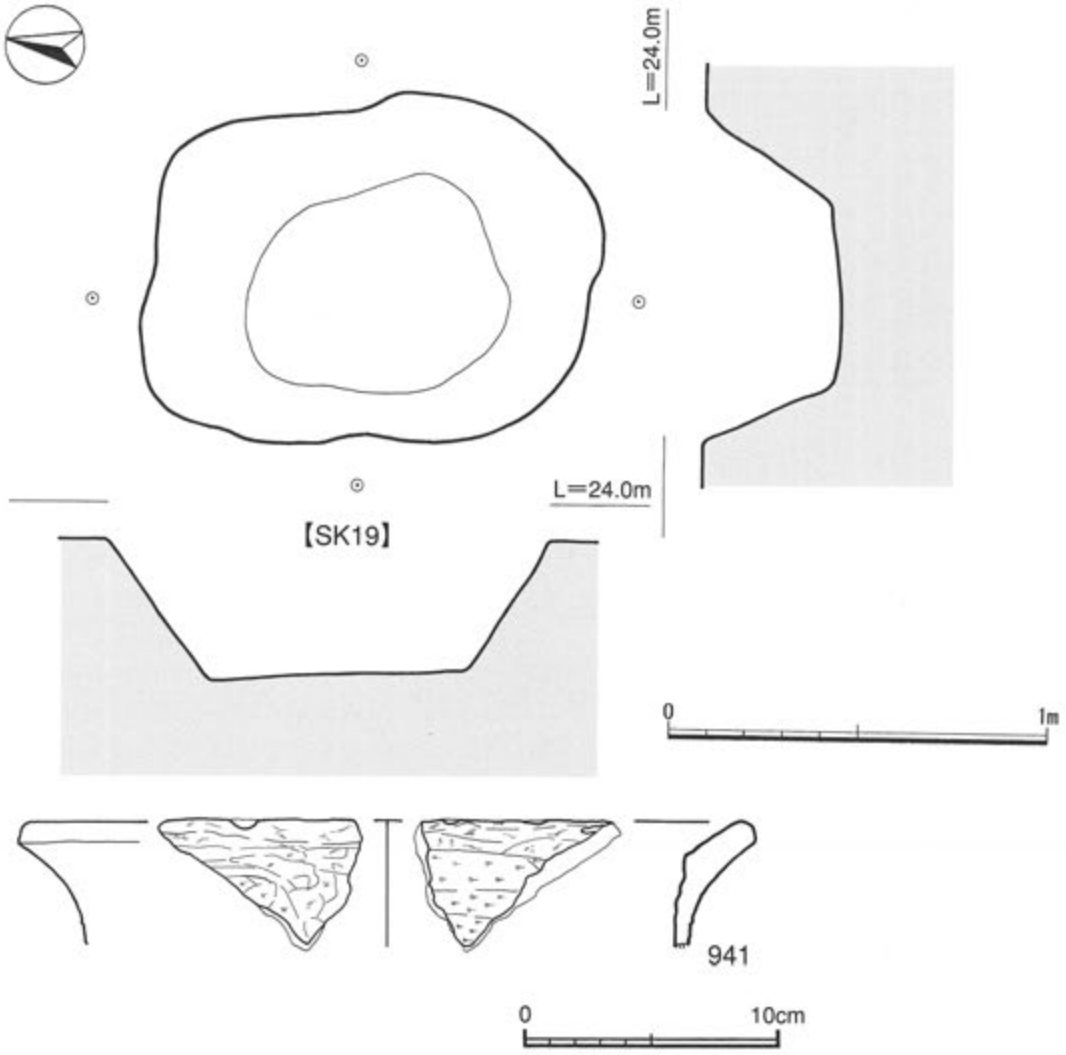
第180図　SI01



第181図　SK18

SK20（第183図）

SK20はE-18区で検出された。長径80cm，短径78cmのほぼ円形を呈する。長軸方向はほぼ一定の深さであるが，短軸方向は東側の方がより深くなっている。埋土中からは礫などとともに土師器片などが数点出土したが，整理作業時の不手際等のために確認できなくなり，１点しか図示できなかった。



第182図　SK19

942は土師器甕の胴部片と思われる。外面はハケ目調整で，内面はナデ調整が行われている。

SK21（第184図）

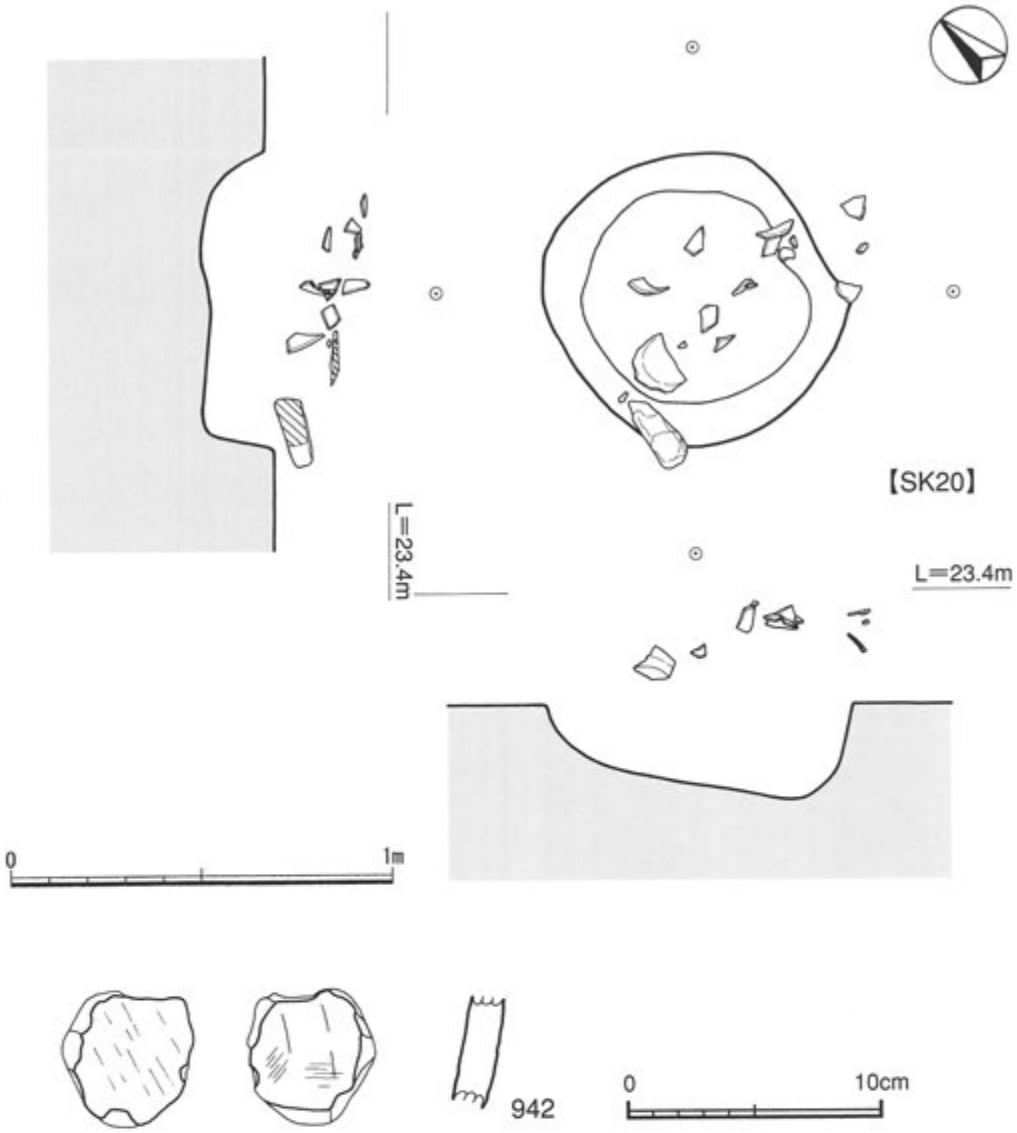
SK21はG-25区で検出された。長径155cm，短径140cm，深さ30cmと大形で，方形に近い形状を呈する。埋土中から土師器甕が出土している。

943は土師器甕の胴部片と思われる。内外面ともにナデ調整が行われているが，内面には指頭圧痕も認められる。

SK22（第185図）

SK22はH-26区で検出された。長径156cm，短径140cm，深さ30cmと長楕円形を呈する。両端にそれぞれ柱穴が認められるが，土坑そのものに伴うものかは不明である。埋土中から土師器甕が出土している。

944・945は土師器甕の胴部片である。いずれも内外面ともにナデ調整が行われるとともに，内面には指頭圧痕も認められる。



第183図　SK20

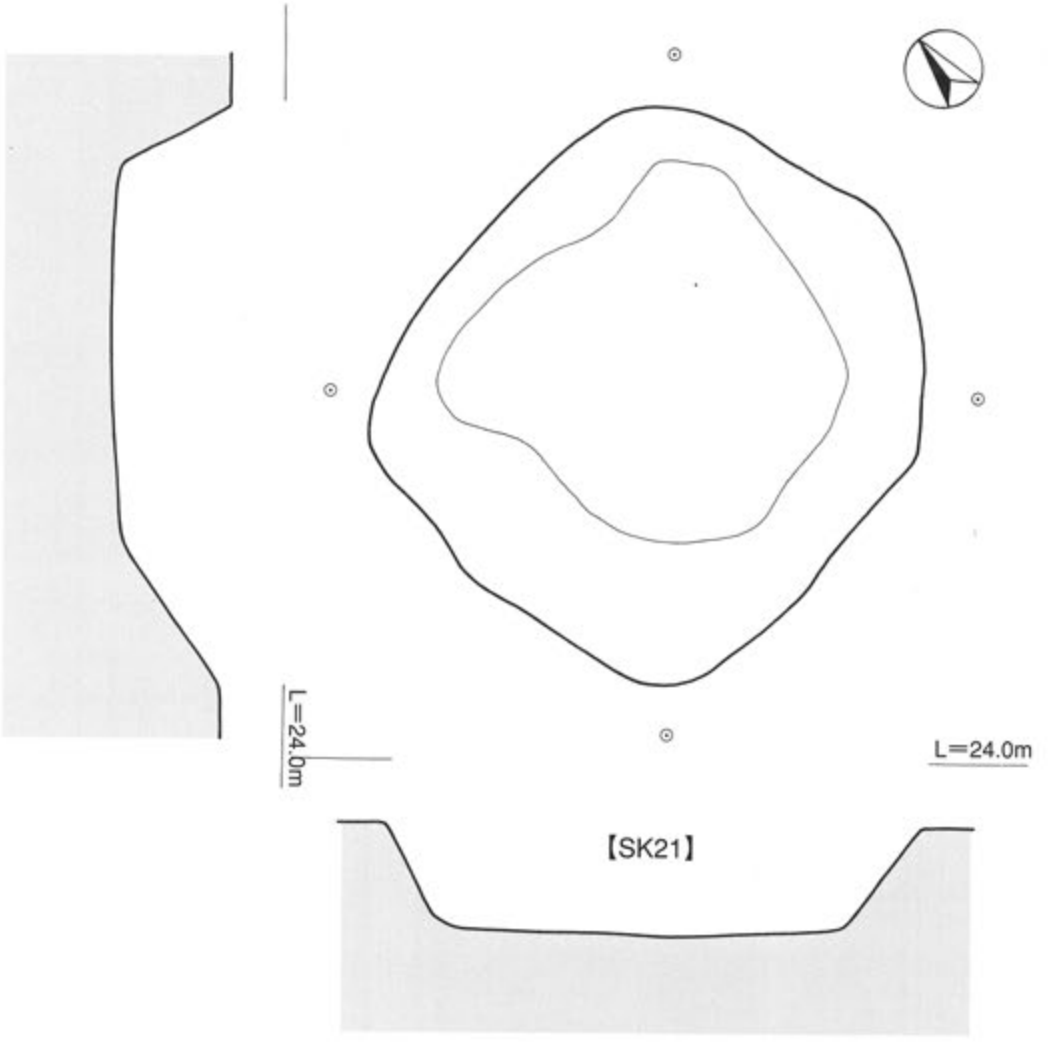
SK23（第185図）

SK23はB-14区で検出された。長径126cm，短径94cmの不正形を呈し，深さは最大20cmと浅く，堀り方も安定していない。埋土中から土師器甕が出土している。

946・947はいずれも土師器甕である。946は口縁部片である。短く外反している。外面はナデ調整で，内面は横位のハケ目調整が行われている。947は胴部片である。外面はハケ目調整で，内面は斜位のヘラケズリが行われている。

SK24（第186図）

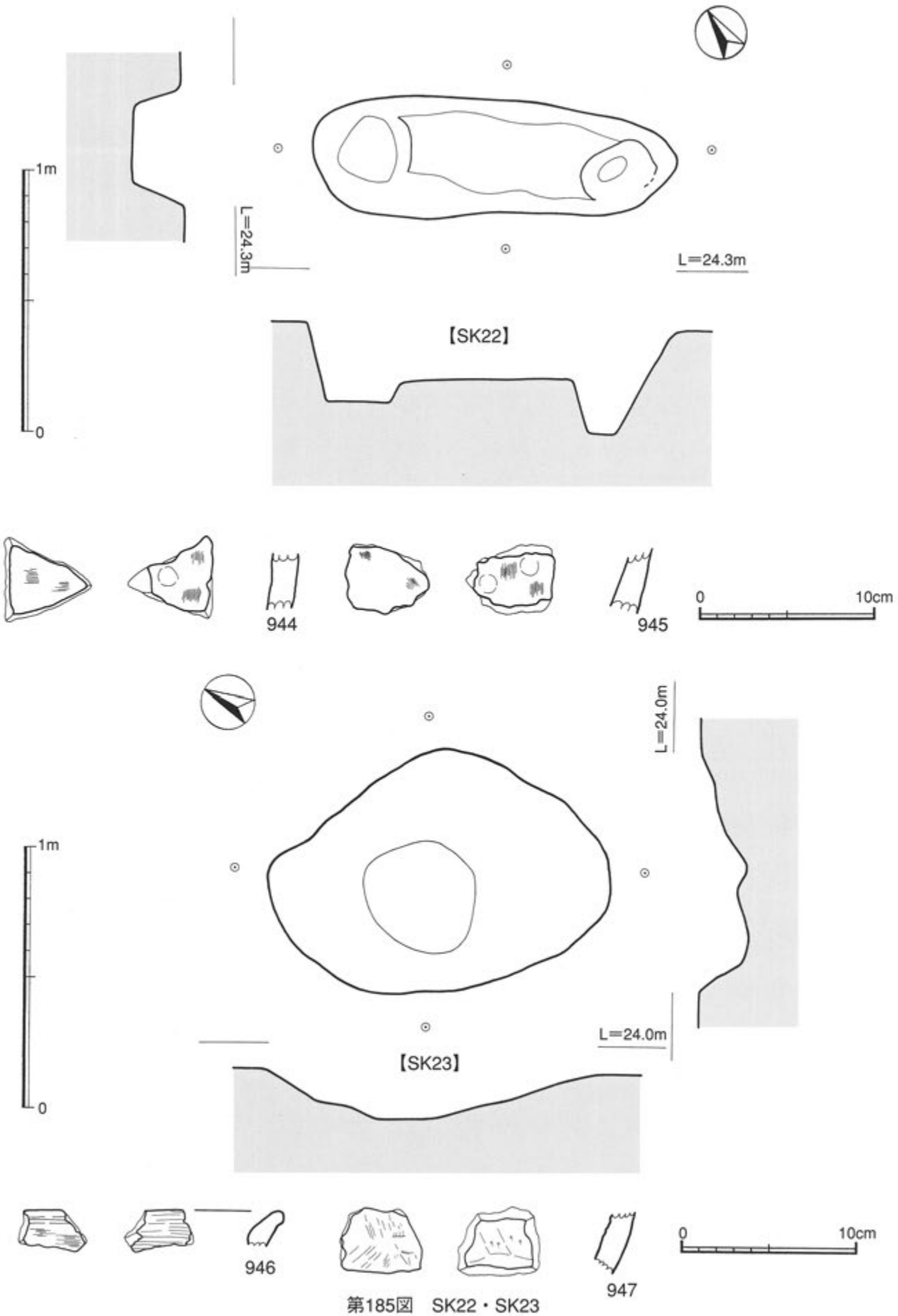
SK24はC-15区で検出された。長径87cm，短径86cmの円形を呈し，深さは44cmと深めである。埋土中から土師器甕が１点出土したが，小片のため図示しなかった。



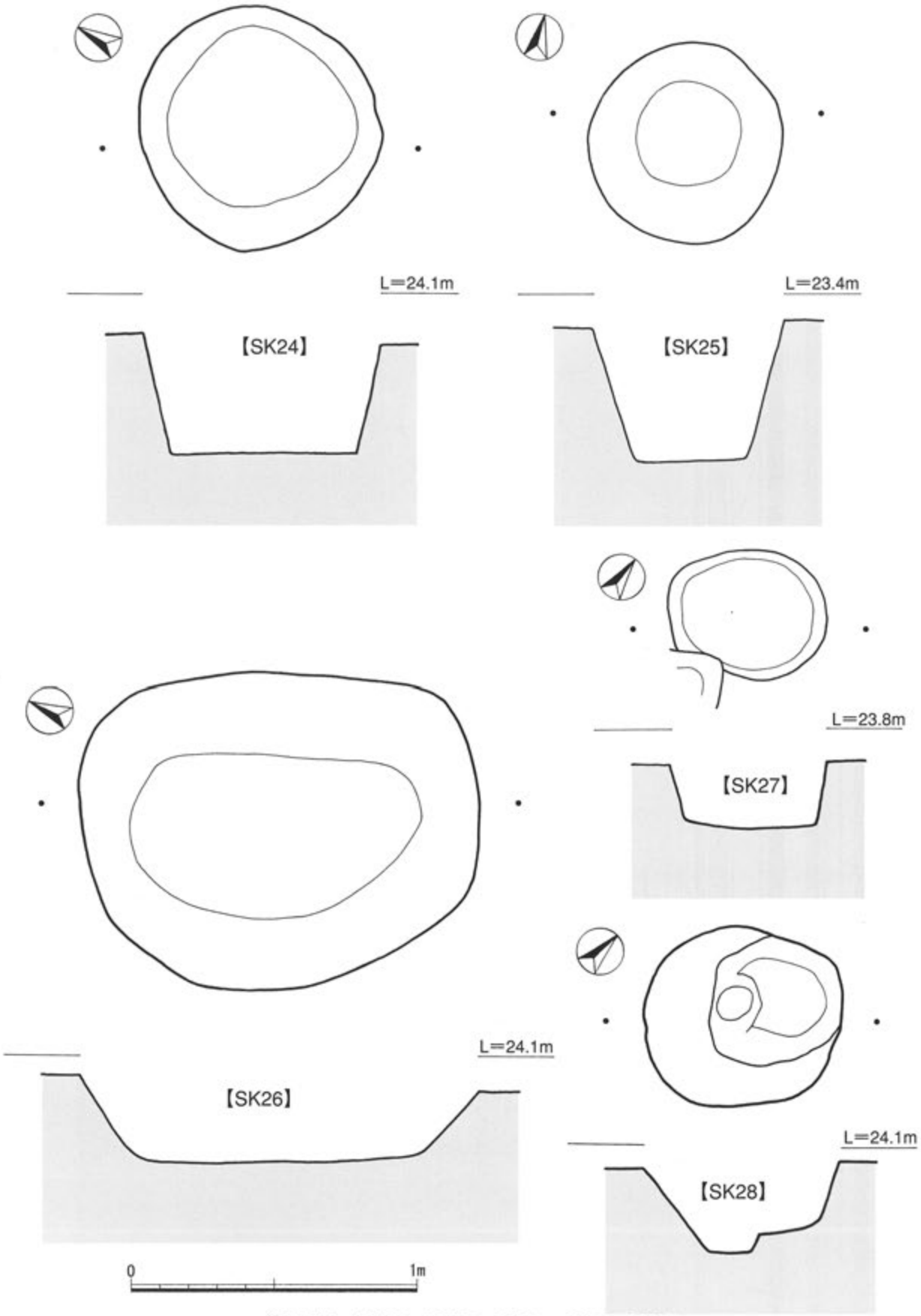
第184図　SK21

SK25（第186図）

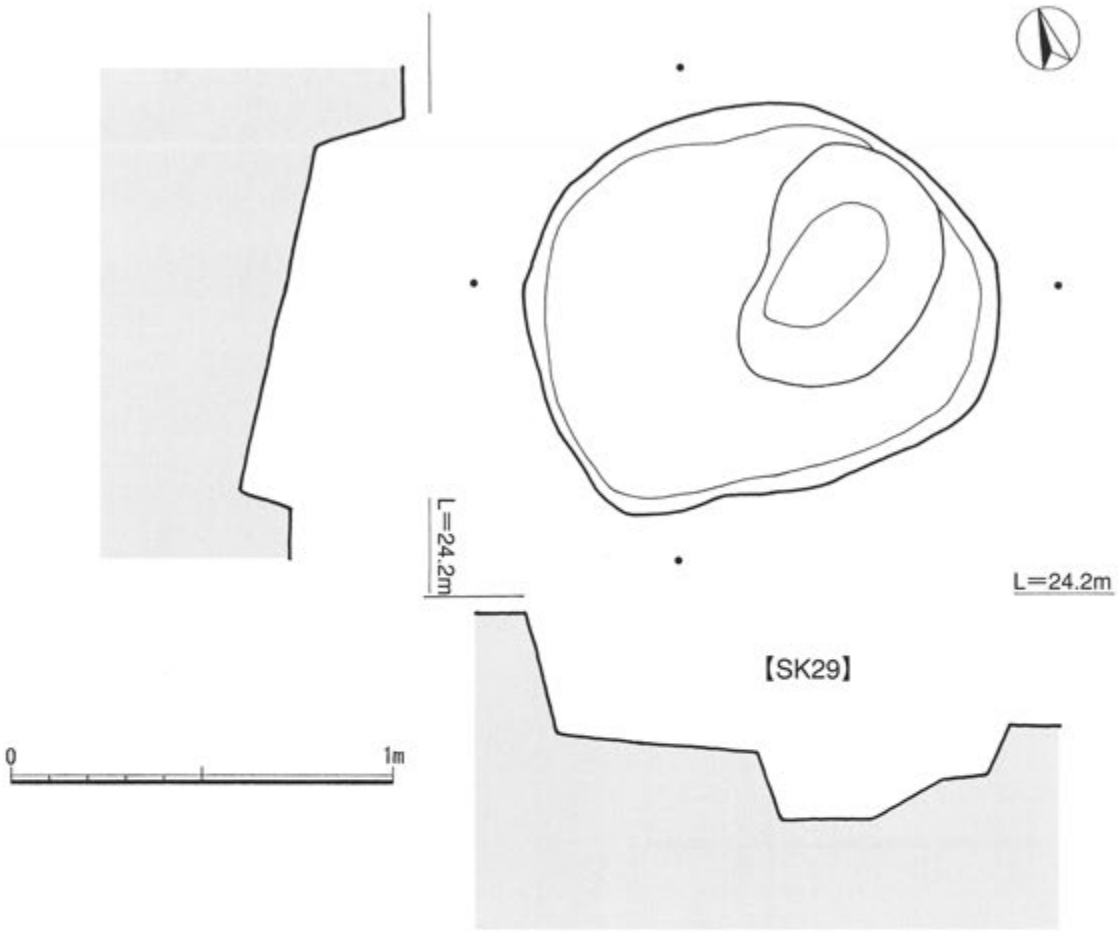
SK25はD-14区で検出された。長径71cm，短径69cmの円形を呈し，深さは48cmと深めである。埋土中から土師器と土師器甕が１点ずつ出土したが，小片のため図示しなかった。

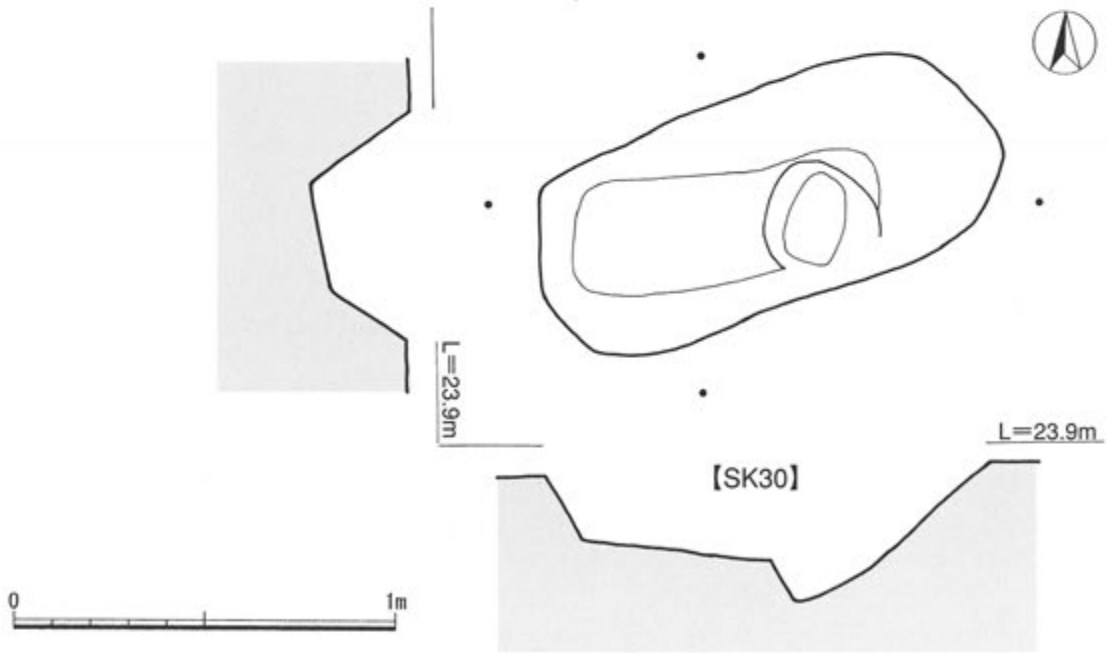


第185図　SK22・SK23

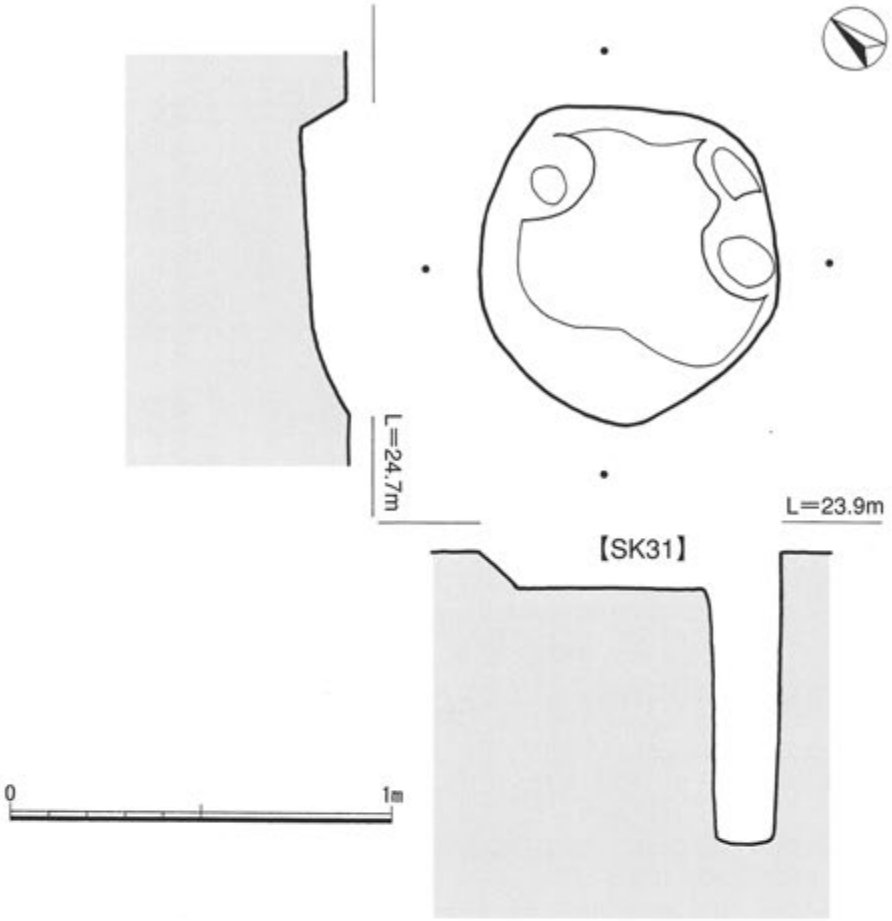


第186図　SK24・SK25・SK26・SK27・SK28





第187図　SK29・SK30



第188図　SK31

SK26（第186図）

SK26はC-15区で検出された。長径140cm，短径112cm，深さ33cmの楕円形を呈する。埋土中から土師器甕が2点出土したが，小片のため図示しなかった。

SK27（第186図）

SK27はD-14区で検出された。長径55cm，短径46cm，深さ22cmの小形の円形を呈する。埋土中から古代のものと思われる土師器が1点出土したが，小片のため図示しなかった。

SK28（第186図）

SK28はD-17区で検出された。長径70cm，短径64cm，深さ24cmの円形を呈する。埋土中から土師器甕が1点出土したが，小片のため図示しなかった。

SK29（第187図）

SK29はE-14区で検出された。長径126cm，短径105cm，の楕円形である。中央部から東側半分にさらに土坑が掘られており，段堀りのような形状を呈している。埋土中から古代のものと思われる

土師器が1点出土したが，小片のため図示しなかった。

SK30（第187図）

SK30はE-16区で検出された。長径126cm，短径56cm，深さ25cmの長楕円形を呈する。埋土中から土師器甕が2点出土したが，小片のため実測しなかった。

SK31（第188図）

SK31はE-16区で検出された。長径85cm，短径80cm円形を呈するが，深さ12cmと浅い土坑である。埋土中から土師器と土師器甕が出土したが，小片のため実測しなかった。

③ピット（ＳＫＰ，ＳＰ）

古代に属すると確認できたピットは，全部で43基である。うち3基は内部から貝殻が出土している。

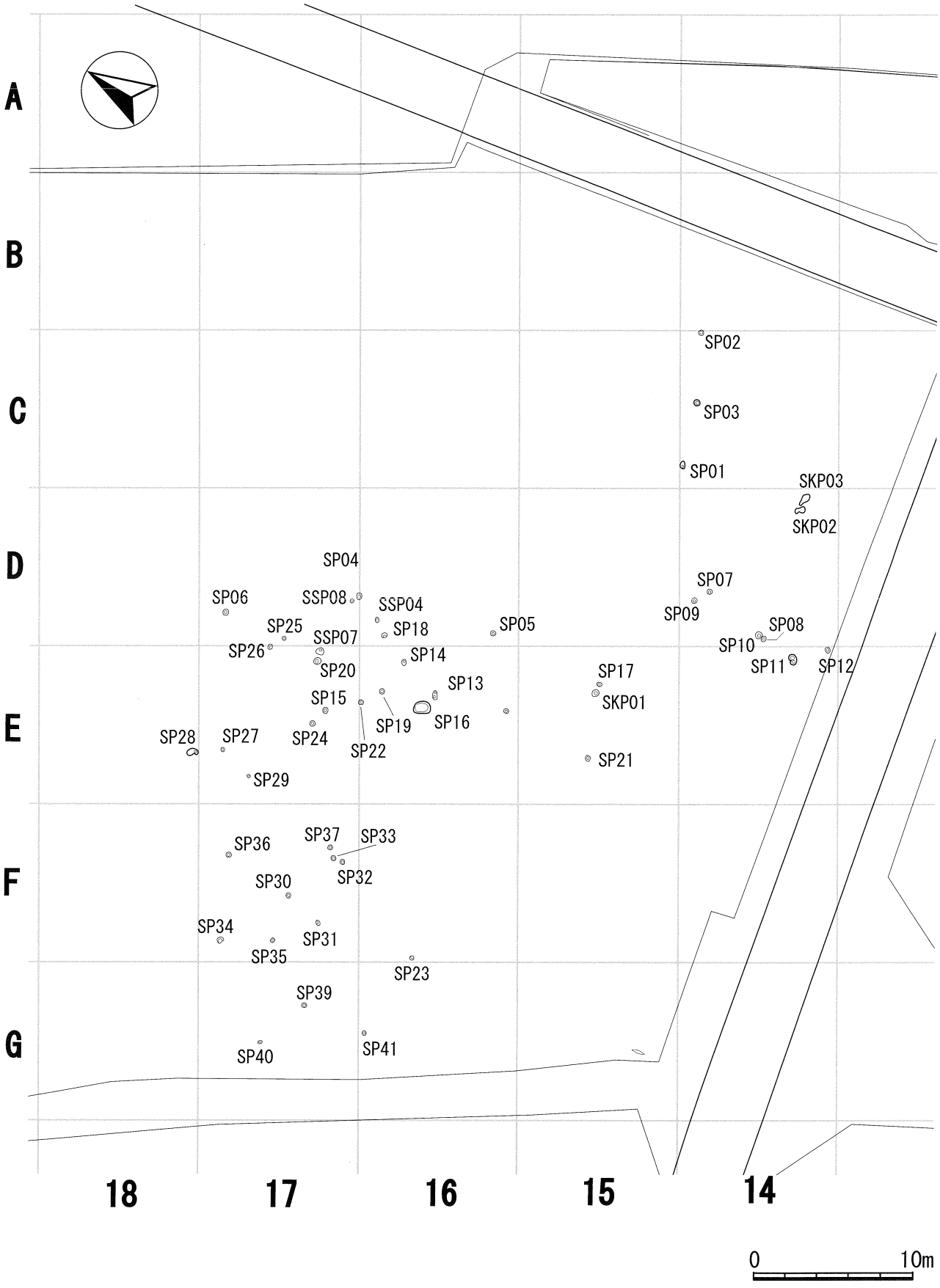
SKP01（第190図）

SKP01はE-15区で検出された。長径30cm，短径27cmのほぼ円形で，検出面からの深さは41cmである。断面形状は上部の検出面からほとんど同じ広さで底面に向かっていることから，長方形に近い形で底部が若干丸味を帯びる。貝殻は検出面付近から始まって約20cmの深さに至るまでぎっしり詰まった状況であった。ただ，それより下位にはほとんど見られないことから，掘った穴をある程度まで土で埋めた後，若しくは空いていた穴（柱の抜き取られた後が自然に埋まっていったことも考えられる）に，容器に入っていたと思われる貝殻を一気に遺棄したような印象を受ける。貝は1号と同様に二枚貝が多く，小さめの粒ぞろいのものが多い点も類似している。放射性炭素年代測定の結果は，1030±30（BP）である。

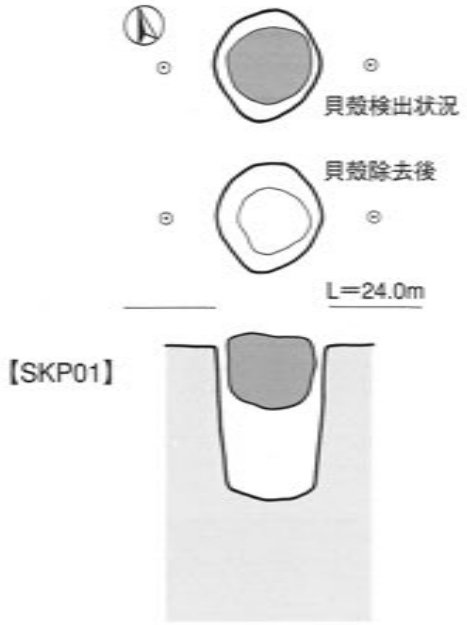
SKP02（第190図）

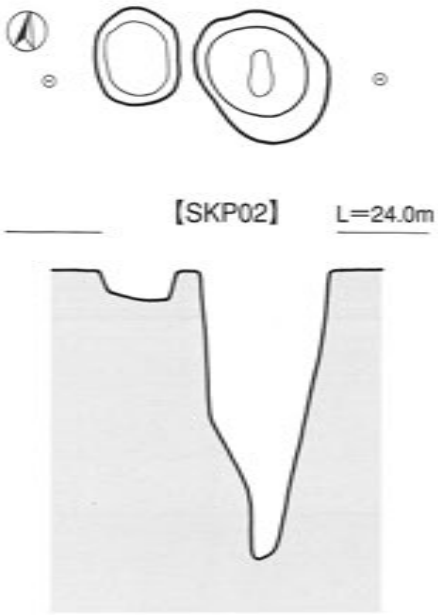
SKP02はD-14区で検出された。長径47cm，短径30cmの楕円形で，深さは76cmである。検出面から約40cmまでは徐々にすぼまる形状をしているが，それ以下は東側にかけて急激に狭まっている。検出面から約60cmのところで直径が10cm程度となる。貝殻は検出面付近から下位の急激に狭まる直前までのところに，土とともに埋められていた。貝は二枚貝が多く，大きさはそれほど大きくなく，粒がそろっている印象を受けた。二枚貝のほか巻き貝も若干見られた。また埋土中から土師器甕と須恵器も出土している。

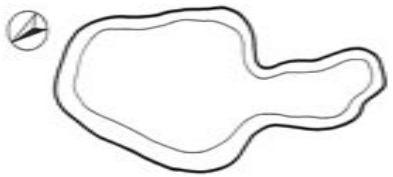
948は土師器甕の口縁部である。口縁部が伸びながら外反している。外面は横位のハケ目調整で，内面は横位のナデ調整が行われている。949は須恵器甕の胴部片と思われる。残存部の胴部径で34cmを測る。内外面ともに格子目状のタタキが行われている。放射性炭素年代測定の結果は，1090±30（BP）である。

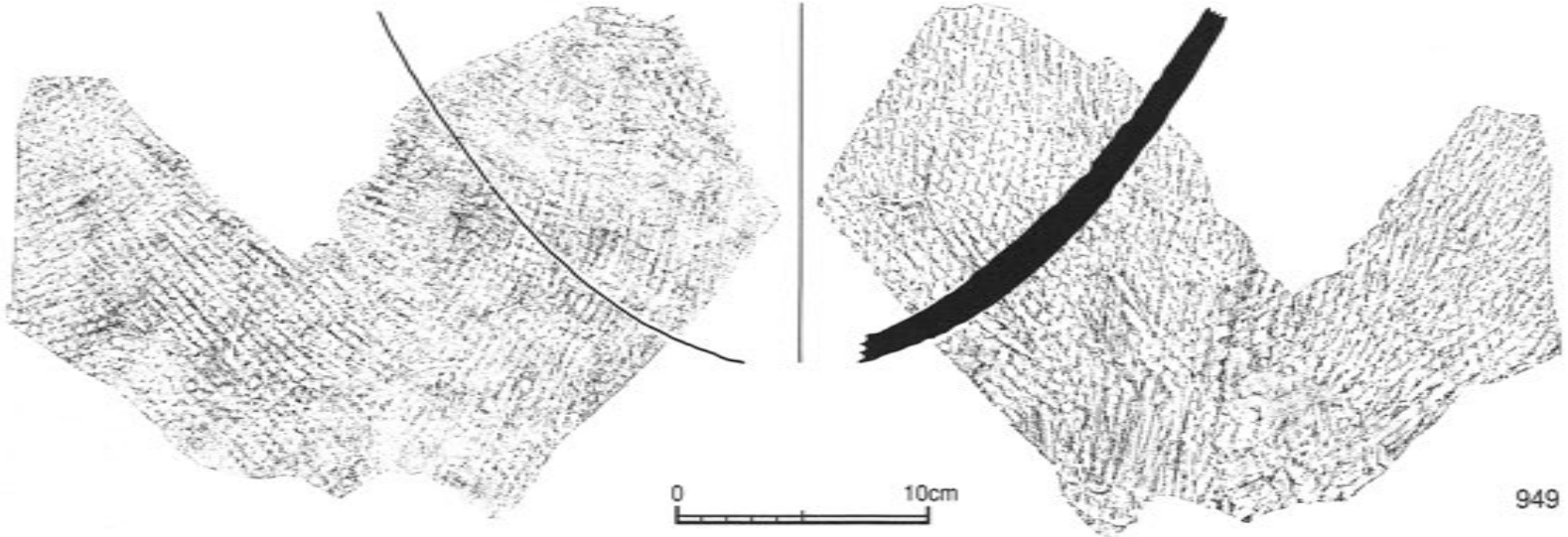


第189図　古代ピット検出位置図









第190図　SKP01～03

SKP03（第190図）

SKP03はD-14区で検出され，SKP02とは隣接している。長径90cm，短径45cmで，西側の方が細長くなる不正形を呈する。調査時の不手際でレベルを計測し忘れ，断面形は不明である。放射性炭素年代測定の結果は，1070±30（BP）である。

SP01（第191・195図）

SP01はC-14区から検出されている。上場37cm・下場13cm・深さ47cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師質の鉢が出土している。

983は土師質の鉢と思われる。端部がやや肥厚して四角くおさめている。外面はハケ目調整，内面は横位のヘラケズリが施されている。

SP02（第191図）

SP02はSP01と同じくC-14区で検出されている。上場35cm・下場21.5cm・深さ21cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈している。埋土中から土師器甕が１点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP03（第191図）

SP03はSP01・02と同じくC-14区で検出されている。上場31cm・下場14.5cm・深さ30cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈している。埋土中から土師器甕が１点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP04（第191図）

SP04はD-16区で検出されている。上場31.5cm・下場22.5cm・深さ23cmである。正面形態はほぼ円形で，断面形態は逆台形状に近いが底部がやや傾斜している。埋土中から土師器甕が１点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP05（第191図）

SP05はSP04と同じくD-16区で検出されている。上場23cm・下場10.5cm・深さ17cmと浅いピットである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器甕が１点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP06（第191図）

SP06はD-17区で検出されている。上場35cm・下場25cm・深さ28cmである。正面形態は円形で，断面形態は底部中央部が尖底状を呈する。埋土中から土師器甕が１点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP07（第191図）

SP07はD-14区で検出されている。上場30cm・下場25.5cm・深さ18cmである。正面形態は円形で，断面形態は方形状を呈する。埋土中から土師器甕が1点出土している。979は土師器甕の胴部片である。外面は縦位と斜位のハケ目，内面は斜位のヘラケズリが施されている。

SP08（第191・194図）

SP08はSP07と同じくD-14区で検出されている。上場38.5cm・下場23cm・深さ45cmである。正面形態は不正楕円形で，断面形態は底部が不定形を呈する。埋土中から内黒土師器が2点出土している。

950は内黒土師器で，復元口径17cmを測る。体部は口縁部へ向かって弯曲して立ち上がる。内外面ともに横位のヘラミガキが施されている。951も内黒土師器片である。内外面ともに横位のヘラミガキが施されているが，950よりは雑な印象を受ける。

SP09（第191図）

SP09はSP07・08と同じくD-14区で検出されている。上場29cm・下場19cm・深さ25cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から須恵器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP10（第191図）

SP10はSP07・08・09と同じくD-14区で検出されている。上場25.5cm・下場25cm・深さ38cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈するが，やや斜めに掘られている。埋土中から土師器甕が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP11（第191・194図）

SP11はE-14区で検出されている。上場49cm・下場17cm・深さ18cmである。正面形態はピット2基が合わさったような形状を呈している。断面形態は北側へ向かって立ち上がるような形状となる。埋土中から須恵器が1点出土している。

974は須恵器の胴部片である。外面は格子目タタキ・内面は平行タタキの上に同心円の当て具痕が重なっている。

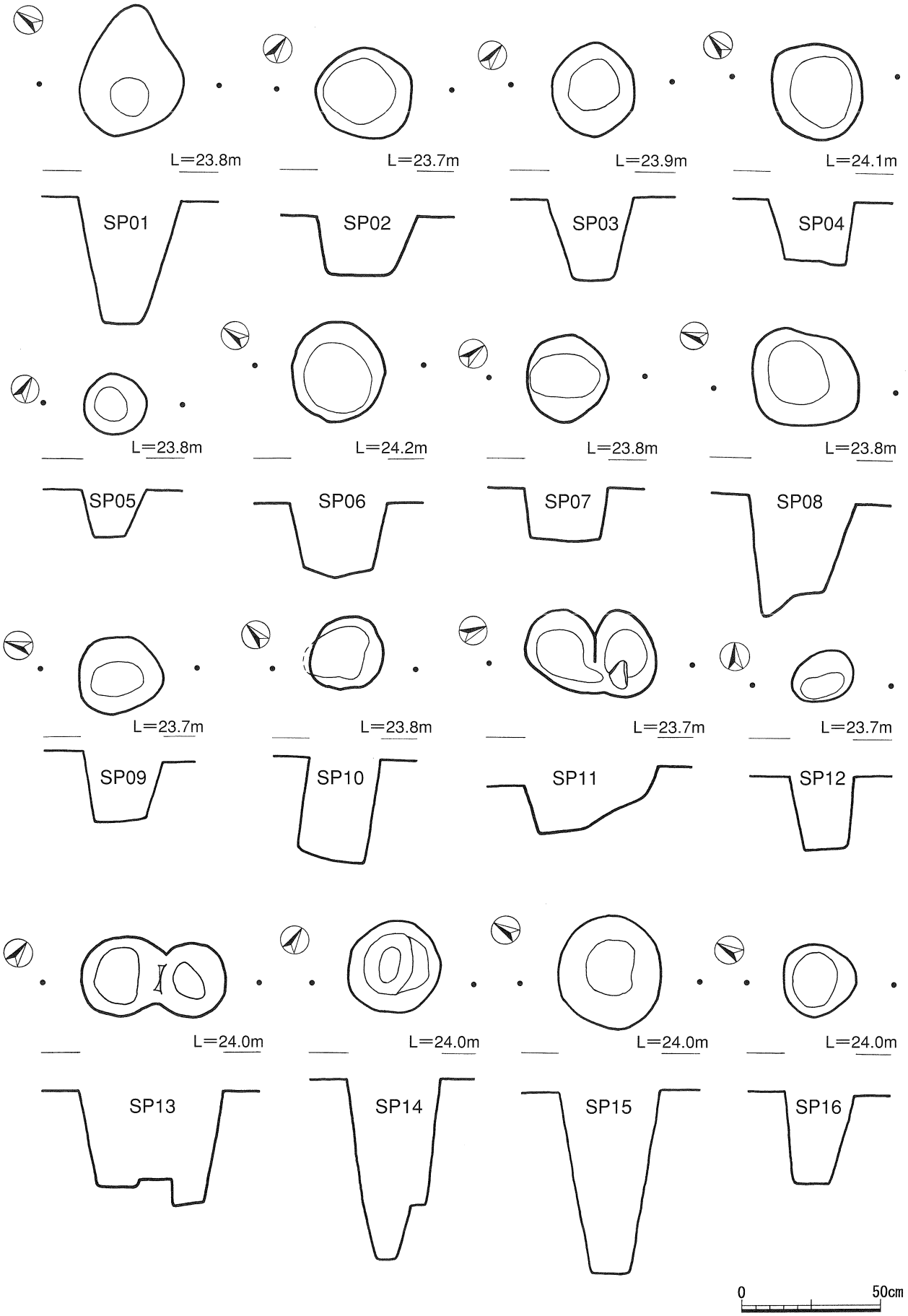
SP12（第191・194図）

SP12はSP11と同じくE-14区で検出されている。上場23.5cm・下場15cm・深さ27cmである。正面形態は楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から内黒土師器1点出土している。

965は内黒土師器で，口径15.8cmを測る。内外面ともに横位のヘラミガキが施されている。

SP13（第191・195図）

SP13はE-16区から検出されている。上場52cm・下場40cm・深さ42cmである。正面形態はピット2基が合わさったような形状を呈している。断面形態もピットが2基合わさったような形状で，底



第191図　SP01～16

部が凸凹している。埋土中から土師質の土器が2点出土している。

984は土師質の土器である。2点出土したが，同一個体と思われる。器壁は厚く球形に近い形状を呈すると思われる。内面にはヘラケズリが施されている。器種が判然としない土器である。

SP14（第191図）

SP14はSP13と同じくE-14区で検出されている。上場33.5cm・下場7cm・深さ67cmである。正面形態は円形で，断面形態は段堀り状を呈する。ピットの深さは深い。埋土中から土師器が数点出土しているが，いずれも小片で実測に耐え得ないため，図化しなかった。

SP15（第191・194図）

SP15はE-17区で検出されている。上場36.5cm・下場13.5cm・深さ66cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。ピットの深さは深い。埋土中から土師器甕と土師器がそれぞれ1点ずつ出土している。

952は土師器である。口径13cmを測る。体部は直線的に立ち上がる。953は土師器甕の胴部片である。外面はナデ調整で，内面は斜位のヘラケズリが施されている。

SP16（第191・194図）

SP16はE-16区で検出されている。上場24cm・下場13cm・深さ34cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。ピットの深さは深い。埋土中から土師器甕と土師器がそれぞれ1点ずつ出土している。

954は土師器である。口径13.4cmを測る。体部は口縁部へ向かってやや外反する。955は土師器甕の口縁部である。外面はナデ調整で，内面は横位のハケ目が施されている。

SP17（第192図）

SP17はE-15区で検出されている。上場30cm・下場16cm・深さ30cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が数点出土しているが，いずれも小片で実測に耐え得ないため，図化しなかった。

SP18（第192図）

SP18はE-16区で検出されている。上場32cm・下場20cm・深さ6cmである。正面形態は不正楕円形で，断面形態は皿状を呈する。非常に浅く，ピットに含めてよいか疑問も残る。埋土中から土師器と須恵器が1点ずつ出土しているが，いずれも小片で実測に耐え得ないため，図化しなかった。

SP19（第192図）

SP19はSP18と同じくE-16区で検出されている。上場28cm・下場20cm・深さ29cmである。正面形態は不正円形で，断面形態は逆台形状に近いが底部が傾斜する。埋土中から土師器甕が1点出土しているが，小片のため，図化しなかった。

SP20（第192図）

SP20はE-17区で検出された。上場38cm・下場27cm・深さ22cmである。正面形態は不正円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器と土師器甕が1点ずつ出土しているが，いずれも小片で実測に耐え得ないため，図化しなかった。

SP21（第192図）

SP21はE-15区で検出された。上場31cm・下場23cm・深さ37cmである。正面形態は楕円形で，断面形態は中央部が尖底状を呈する。埋土中から土師器甕が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP22（第192・194図）

SP22はE-16区で検出された。上場26cm・下場18cm・深さ32cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から須恵器が1点出土している。

973は須恵器の胴部片である。外面は平行タタキ，内面はナデ調整である。中世の可能性もある。

SP23（第192図）

SP23はF-16区で検出された。上場30cm・下場26cm・深さ30.2cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP24（第192図）

SP24はE-17区で検出された。上場25cm・下場18cm・深さ13cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。浅いピットである。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP25（第192図）

SP25はSP24と同じくE-17区で検出された。上場23cm・下場15cm・深さ23cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器甕が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

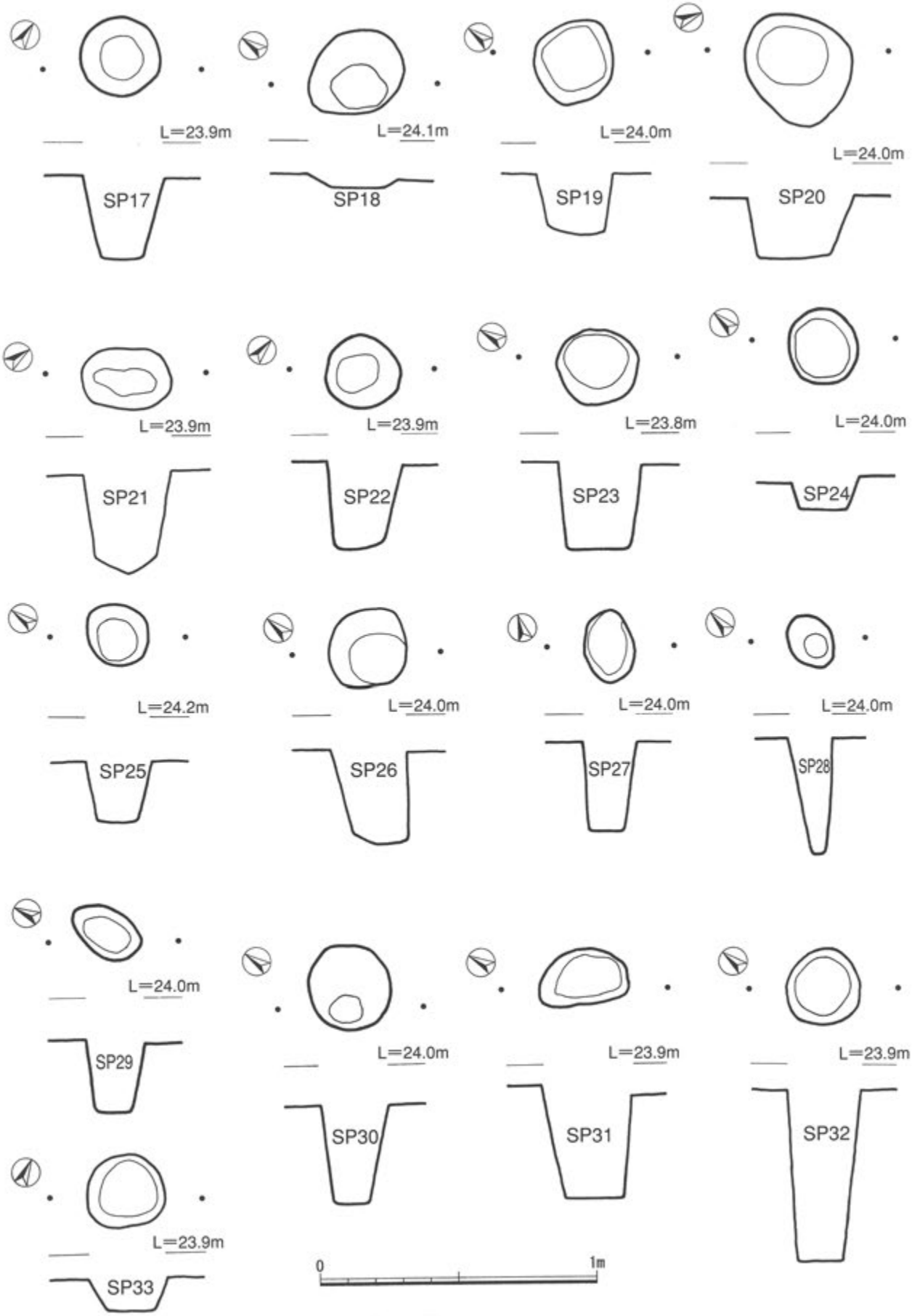
SP26（第192・194図）

SP26はSP24・SP25と同じくE-17区で検出された。上場27cm・下場20cm・深さ32cmである。正面形態は不正円形で，断面形態は逆台形状に近いが，やや斜めに掘られている。埋土中から内赤土師器が1点出土している。

971は内赤土師器で，口径13.2cmを測る。口縁部は直線的に立ち上がる。

SP27（第192・195図）

SP27はSP24・SP25・SP26と同じくE-17区で検出された。上場19cm・下場8cm・深さ33cmである。



第192図　SP17～33

正面形態は長楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器甕が1点出土している。

982は土師器甕の胴部片である。外面はハケ目調整，内面は縦位のヘラケズリが施されている。

SP28（第192・195図）

SP28はE-18区で検出された。上場16cm・下場5cm・深さ43cmである。正面形態は不正楕円形で，断面形態は逆台形状を呈し，先細りとなる形状を呈する。埋土中から土師器甕が1点出土している。

980は土師器甕の頸部である。外面は横位のハケ目，内面は横位のナデ調整が施されている。

SP29（第192図）

SP29はE-17区で検出された。上場20cm・下場13cm・深さ27cmである。正面形態は不正楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器甕が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP30（第192・194図）

SP30はF-17区で検出された。上場25cm・下場14cm・深さ37cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から内黒土師器が1点出土している。

969は内黒土師器の高台部分である。高台径8cmを測る。

SP31（第192・194図）

SP31はSP30と同じくF-17区で検出された。上場49cm・下場31cm・深さ61cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から内黒土師器が1点出土している。

963は内黒土師器で，口径10cmと小形のものである。体部は直線的に立ち上がる。

SP32（第192図）

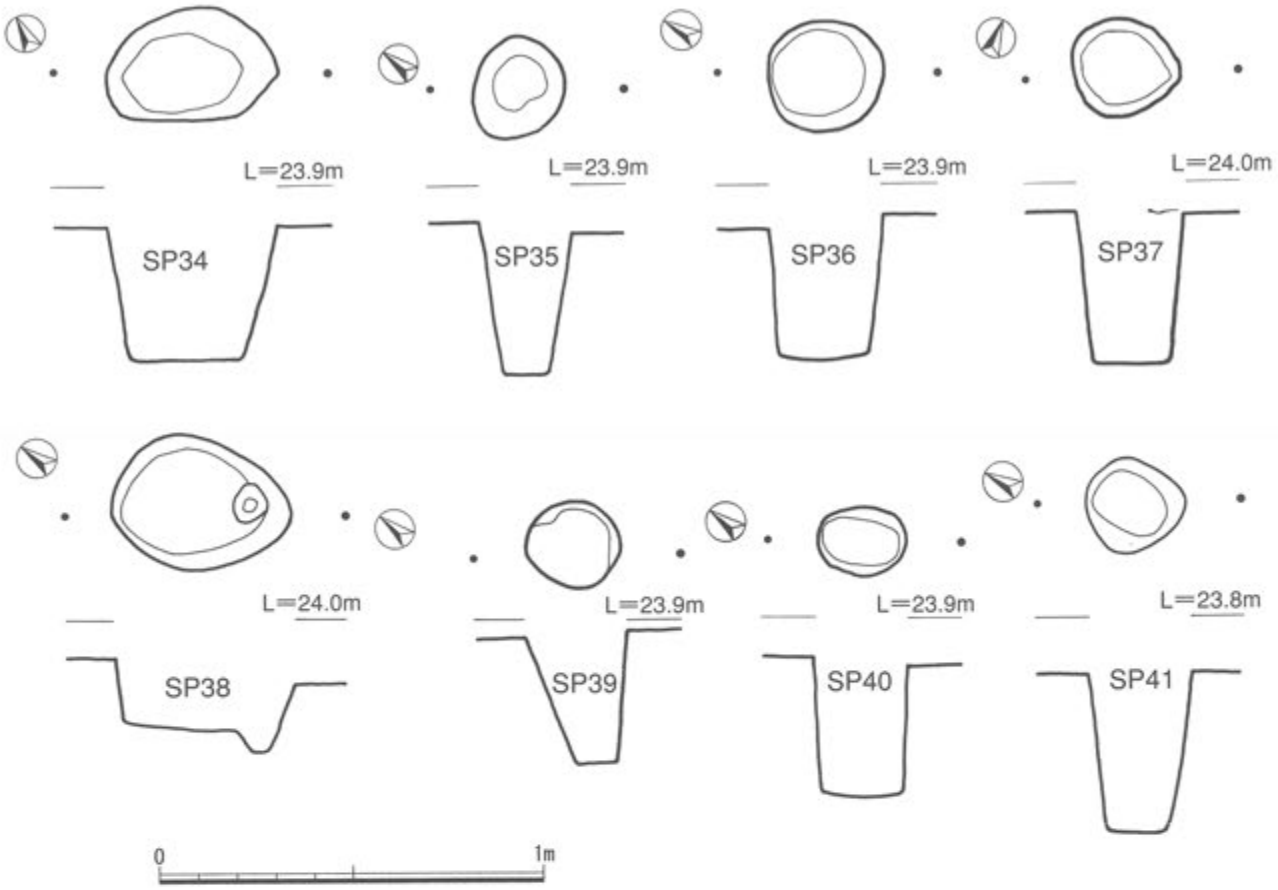
SP32はSP30・SP31と同じくF-17区で検出された。上場40cm・下場23cm・深さ92cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。非常に深いピットである。埋土中から土師器と土師器甕が1点ずつ出土しているが，いずれも小片で実測に耐え得ないため，図化しなかった。

SP33（第192図）

SP33はSP30～SP32と同じくF-17区で検出された。上場28cm・下場18cm・深さ11cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器甕が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP34（第193・194図）

SP34はSP30～SP33と同じくF-17区で検出された。上場43cm・下場30cm・深さ36cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から内赤土師器と内黒土師器がそれぞれ1点出土している。



第193図　SP34～41

958は内赤土師器で，口径13cmである。体部は直線的に立ち上がる。959は内黒土師器である。体部は弯曲して立ち上がる。内面は縦位のミガキが施されている。

SP35（第193・194図）

SP35はSP30～SP34と同じくF-17区で検出された。上場24cm・下場13cm・深さ40cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から内黒土師器が1点出土している。

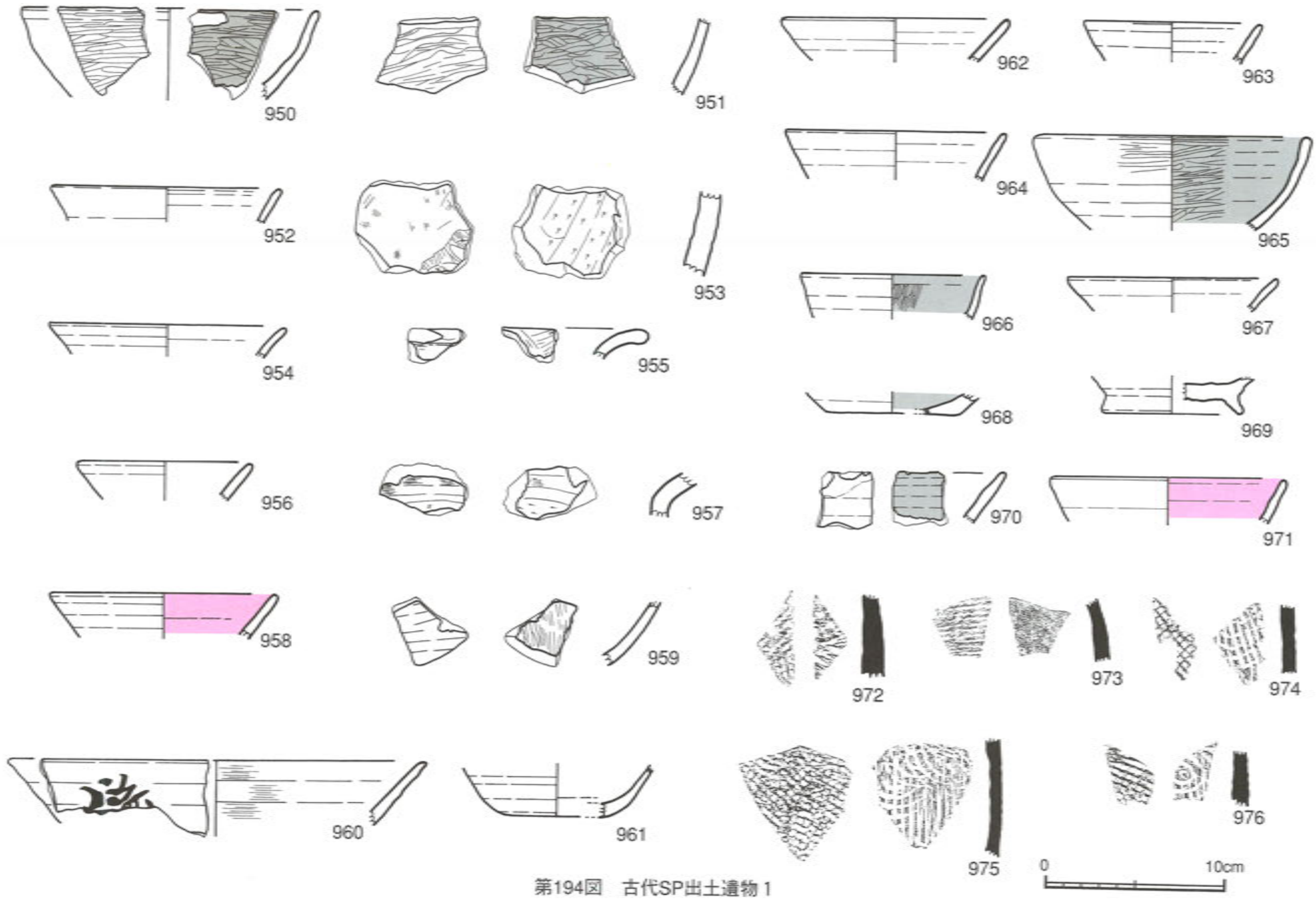
966は内黒土師器で，口径10.2cmと小形である。体部は直線的に立ち上がるが，端部でやや外反する。器高の深い形態を呈すると思われる。

SP36（第193図）

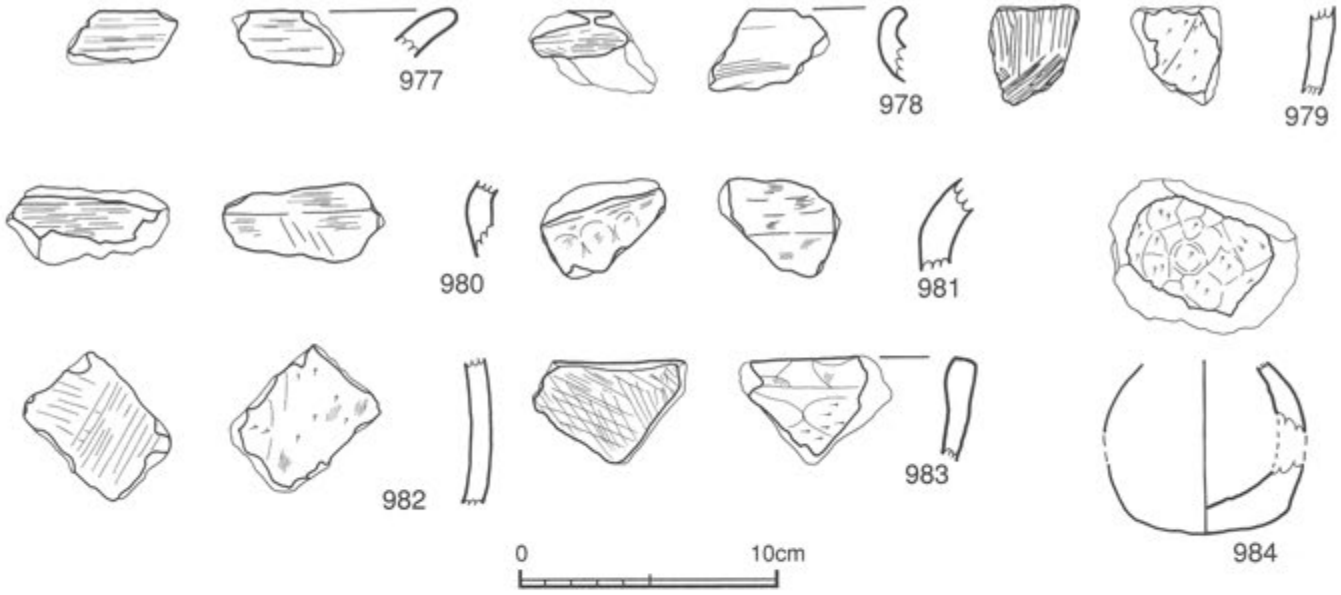
SP36はSP30～SP35と同じくF-17区で検出された。上場28cm・下場19cm・深さ39.5cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器甕が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP38（第193・194図）

SP38はG-18区で検出された。上場45.5cm・下場40.5cm・深さ18cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が1点出土している。



第194図　古代SP出土遺物1



第195図　古代SP出土遺物 2

967は土師器で，口径11.8cmを測る。体部はやや外反して立ち上がる。

SP39（第193図）

SP39はG-17区で検出された。上場26cm・下場10cm・深さ35cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から須恵器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP40（第193・194図）

SP40はSP39と同じくG-17区で検出された。上場24.5cm・下場21cm・深さ34.5cmである。正面形態は楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から内黒土師器が1点出土している。

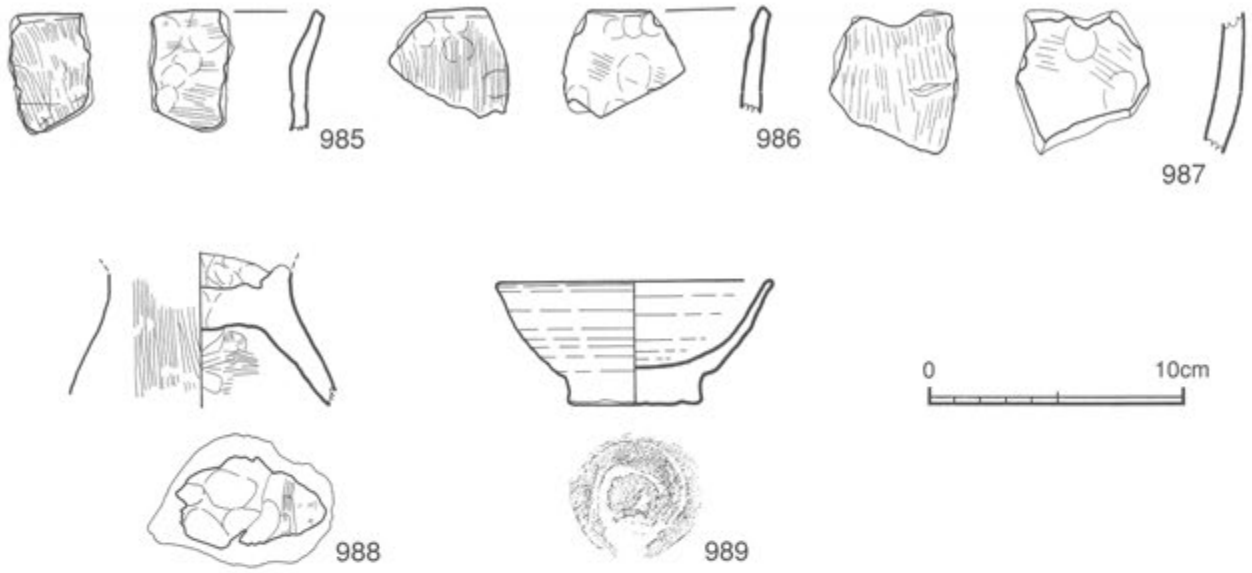
970は内黒土師器である。体部は直線的に立ち上がる。ミガキ調整は確認できない。

SP41（第193図）

SP41はG-16区で検出された。上場26.5cm・下場14.5cm・深さ42.5cmである。正面形態は不正円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器甕が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

その他にピット中から遺物が出土したものの，調査中の不手際からピットの実測がなされなかったものの中で主要な遺物を掲載した。なかでも960は墨書土器である。体部は直線的に立ち上がり，体部外面に墨書されるが，破片のため文字の判読は難しい。

第196図　SF01・02



第197図　SF01出土遺物

④焼土・焼土坑（ＳＦ）

SF01（第196図）

SF01はE-30区で検出された。主軸方向はN53°Eである。長径230cm，短径160cmの不整形を呈する。内部は複数の穴が混在しており，底部は安定したものではない。赤く焼けた焼土部分と炭と思われる黒色土部分によって構成されている。埋土中から古墳時代と古代の遺物が出土しているが，出土状況を押さえていなかったため，帰属時期を決めかねる。ここでは後出遺物の時期である古代として扱ったが，古墳時代に遡る可能性も残されている。

985・986は古墳時代の成川式土器である。いずれも甕の口縁部と思われる。外面は縦位のハケ目調整で，内面は一部に横位のハケ目調整を残すもののナデ調整が主である。また指頭圧痕もともに認められる。987は土師器甕の胴部片と思われる。外面はハケ目調整で，内面はナデ調整が主である。また一部に指頭圧痕の痕跡が認められる。

SF02（第196図）

SF02はE-30区からSF01と接して検出された。主軸方向はN70°Eである。長径612cm，短径202cmの不整形を呈する。SF01と同じく内部は複数の穴が混在しており，底部は安定したものではない。むしろ複数の土坑状のものがまとまって１つの土坑を形成しているような印象を受ける。埋土は赤く焼けた焼土部分と炭と思われる黒色土部分によって構成されている。SF01と同じく埋土中から古墳時代と古代の遺物が出土しいるが，出土状況を押さえていなかったため，帰属時期を決めかねる。ここでは後出遺物の時期である古代として扱ったが，古墳時代に遡る可能性も残されている。

988は古墳時代の成川式土器である。甕の脚部と思われる。外面は縦位のハケ目調整で，内面は脚部内面が横位のハケ目調整を一部残し，底部内面はナデ調整が行われている。989は土師器の埦である。充実高台が付き，ヘラ切り底である。口径11cm，底径5.1cmを測る。

4-2：古代の出土遺物

古代の遺物は調査区全域から出土したものの，ややA-13～F-21区にかけて集中する傾向が伺える。古代の遺構もこのあたりに集中することとも合致しており，古代の時期はこのあたりが遺跡の中心域であったと推定される。遺物は土師器甕，土師埦・坏，内黒・内赤土器，須恵器等が出土した。

①土師器甕（第199～205図）

安茶ヶ原遺跡からは多数の土師甕が出土したが，形態や調整等から６類に分類した。各類の特徴は以下のとおりである。

【Ⅰ類土器】

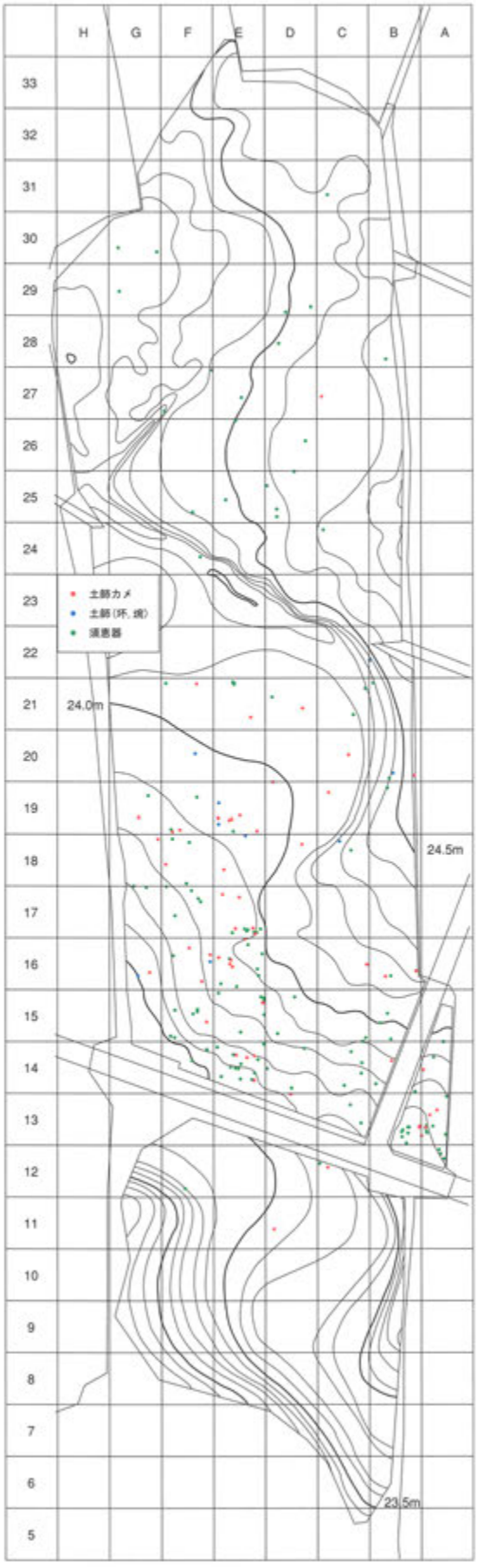
口縁部は長く伸びて大きく外反する。器壁は薄く，胴部がやや張る。外面はハケ目調整，あるいはハケのちナデ調整が主で，内面は口頸部はハケ目，あるいはハケのちナデ調整が主で，胴部には横位や斜位のヘラケズリが施される。ケズリ上端の位置は揃わない。

【Ⅱ類土器】

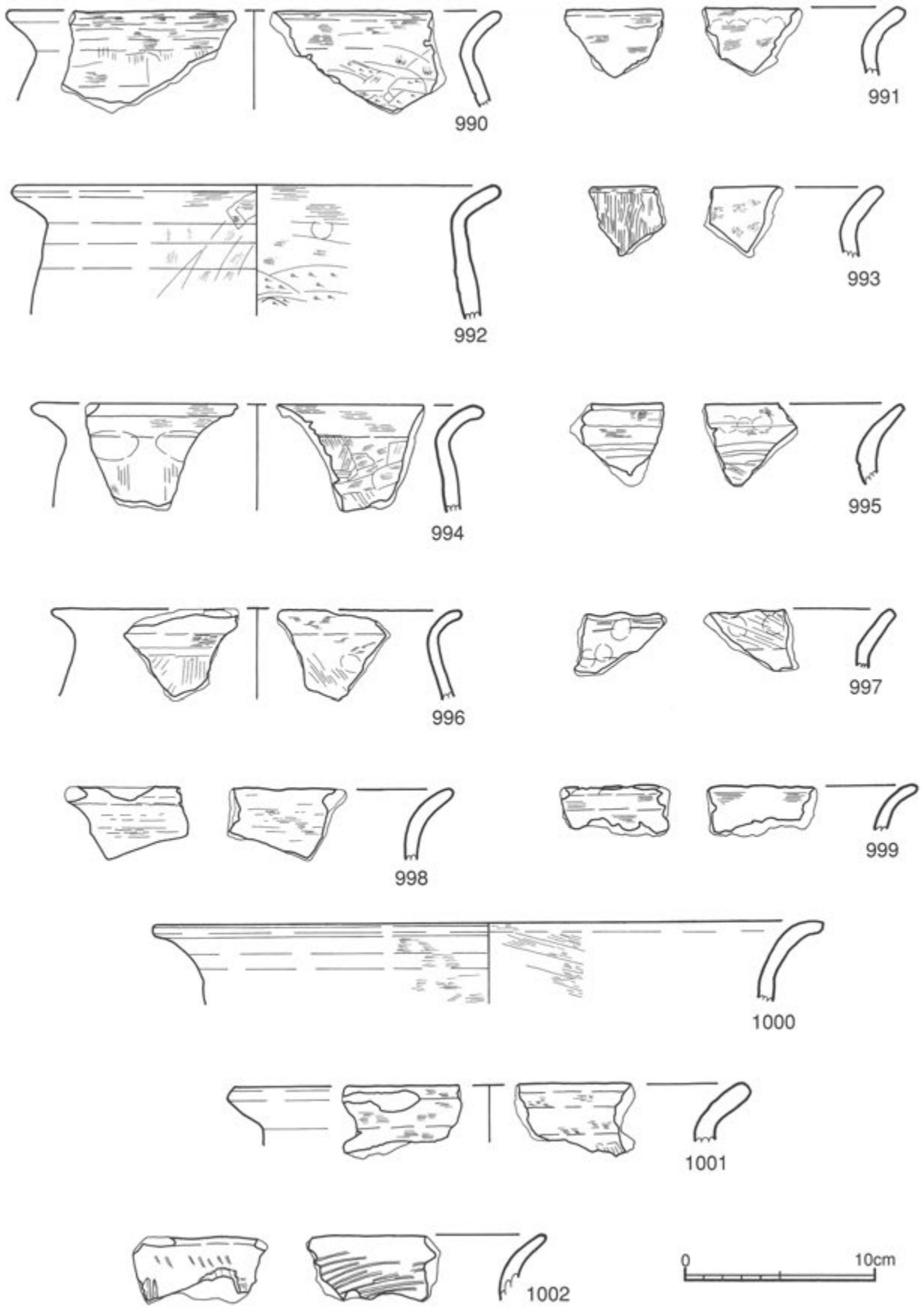
口縁部はⅠ類ほど長く伸びないものの，さらに大きく外反して逆「L」字状に近い形状となる。器壁は薄く，胴部の張りはあまり見られない。外面はハケ目調整で，頸部のあたりに横ナデを施すものもある。内面は口頸部はハケ目，あるいはハケのちナデ調整が主で，胴部には斜位のヘラケズリが施される。ケズリ上端の位置は揃わない。

【Ⅲ類土器】

口縁部は大きくゆるやかに外反する。器壁は厚く，胴部の張りは見られない。外面はハケ目調整で，頸部には横位のナデ調整が施される。内面は口縁部はナデ調整で，胴部は縦



第198図　古代遺物分布図



第199図　土師甕 1

位あるいは斜位のヘラケズリが施される。ケズリ上端の位置は揃わない。

【Ⅳ類土器】

口縁部は長さが短く外反する。器壁は厚い。口縁部は両面ともナデ調整である。胴部は外面はハケ目調整で，内面は斜位のヘラケズリが主であり，ケズリの上端が水平に揃う。

【Ⅴ類土器】

口縁部は短く外反する。器壁は厚い。内面は横位あるいは斜位のヘラケズリを施し，ケズリの上端が水平に揃えるため，稜が形成される。外面はナデ調整が主である。

【Ⅵ類土器】

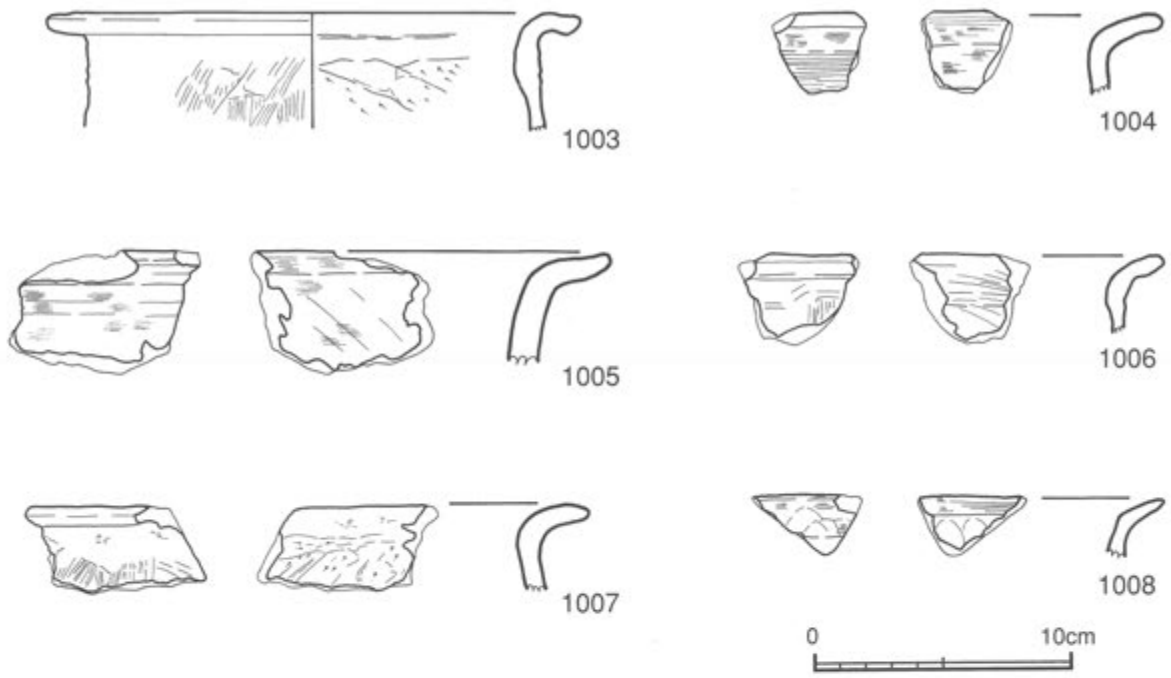
土師甕の胴部片等を一括した。

Ⅰ類土器（第199図）

990は復元口径26cmで，胴部はやや張る。口縁部は長く伸び大きく外反する。端部を丸くおさめる。外面はナデ調整で，胴部内面は横位・斜位のヘラケズリが施されているが，ケズリ上端は揃わない。991は口縁部がゆるく外反する。端部を丸くおさめる。内外面ともにナデ調整である。992は口径25.8mで，胴部はやや張る。口縁部は長く伸び大きく外反する。端部を丸くおさめる。外面は横位と斜位のヘラナデ調整が施される。内面は斜位のヘラケズリでケズリ上端は揃わない。993は口縁部がゆるく外反する。端部を丸くおさめる。外面は縦位のハケ目調整，内面は横位のナデ調整である。994は復元口径23.8cmである。口縁部は弯曲しながら大きく外反する。端部を丸くおさめる。胴部はやや張る。口縁部は横位のナデ調整で，内面胴部は不正方向のヘラケズリののちナデ調整が施されている。995はゆるく外反し，頸部は太く口縁部が先細りとなる。内外面ハケ目調整で，頸部内面には指頭圧痕が認められる。996は復元口径21.6cmで，口縁部は弯曲しながら大きく外反し胴部が張る。端部は丸くおさめる。器壁は薄い。内外面ともに口縁部はナデ調整，胴部はハケ目調整である。997は口縁端部が不正形である。口縁部はゆるく外反する。端部は隅丸方形状になる。頸部内面には指頭圧痕が認められる。胴部は内外面ともに横位のハケ目である。998・999は口縁部がゆるく外反し，端部を丸くおさめる。内外面ともに横位のナデ調整が施されている。1000は口径35.4cmである。口縁部はゆるく外反し，端部を丸くおさめる。内外面ともに横位のナデ調整が施されている。器壁は薄い。1001は復元口径27.8cmである。口縁部はゆるく外反し，端部へ向かってやや太くなる。端部は丸くおさめる。器壁は厚めである。内外面ともに横位のナデ調整が施される。胴部に張りはみられない。1002は口縁部はやや不定形で，ゆるく外反する。頸部は太く口縁先端に向かって先細りする。器壁は薄い。外面は縦位のハケ目のちナデ調整，内面は横位のハケ目調整が施されている。

Ⅱ類土器（第200図）

1003は口縁部が大きく弯曲しながら外反し，逆「L」字状を呈するものである。端部は丸くおさめる。口径21cmを測る。外面は縦位のハケ目調整で，内面は斜位のヘラケズリが施され，一部はナ

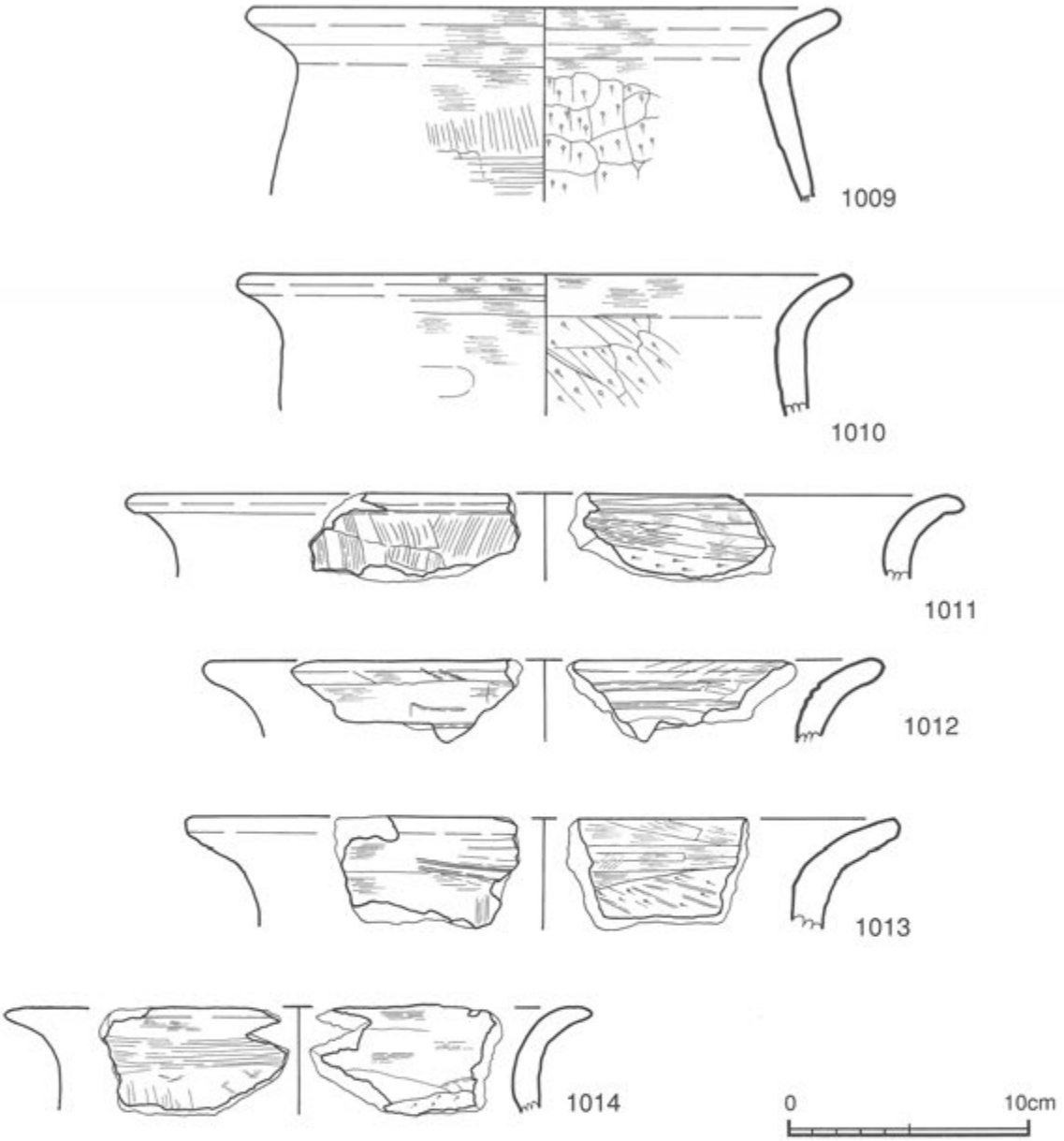


第200図　土師甕 2

デ消されている。ケズリの上端は揃っていない。胴部はヘラケズリによって器壁が薄くなっているが，頸部はケズリがなされていないため，器壁が厚くなっている。胴部に張りは見られない。1004は口縁部が長く伸び，大きく外反する。端部は丸くおさめる。口縁部は横位のナデ調整で，胴部外面には横位のハケ目が施されている。器壁は薄い。1005は器壁は厚く，口縁部が大きく外反し，ほぼ水平となる。口縁端部へ向かってやや先細りしながら先端部が上へ反る。胴部外面は横位のナデ調整で，内面はヘラケズリが施されたのちナデ消されている。胴部に張りはみられない。1006は口縁部が大きく外反する。端部は丸くおさめる。器壁は薄いが，頸部部分のみ太くなる。外面はナデ調整で，内面は頸部周辺に横位のハケ目が見られる。1007は口縁部が大きく外反し，逆「L」字状を呈する。口縁端部はやや先細りとなる。口縁部は内外面ともにナデ調整が施される。胴部の外面は縦位のハケ目調整で，内面は斜位と横位のヘラケズリが行われる。ケズリの上端は揃っていない。1008は口縁部が大きく外反し，先端部が先細りとなるものである。口縁部内面には稜が見られる。外面はナデ調整で，内面には指頭圧痕が認められる。胴部に張りは見られない。

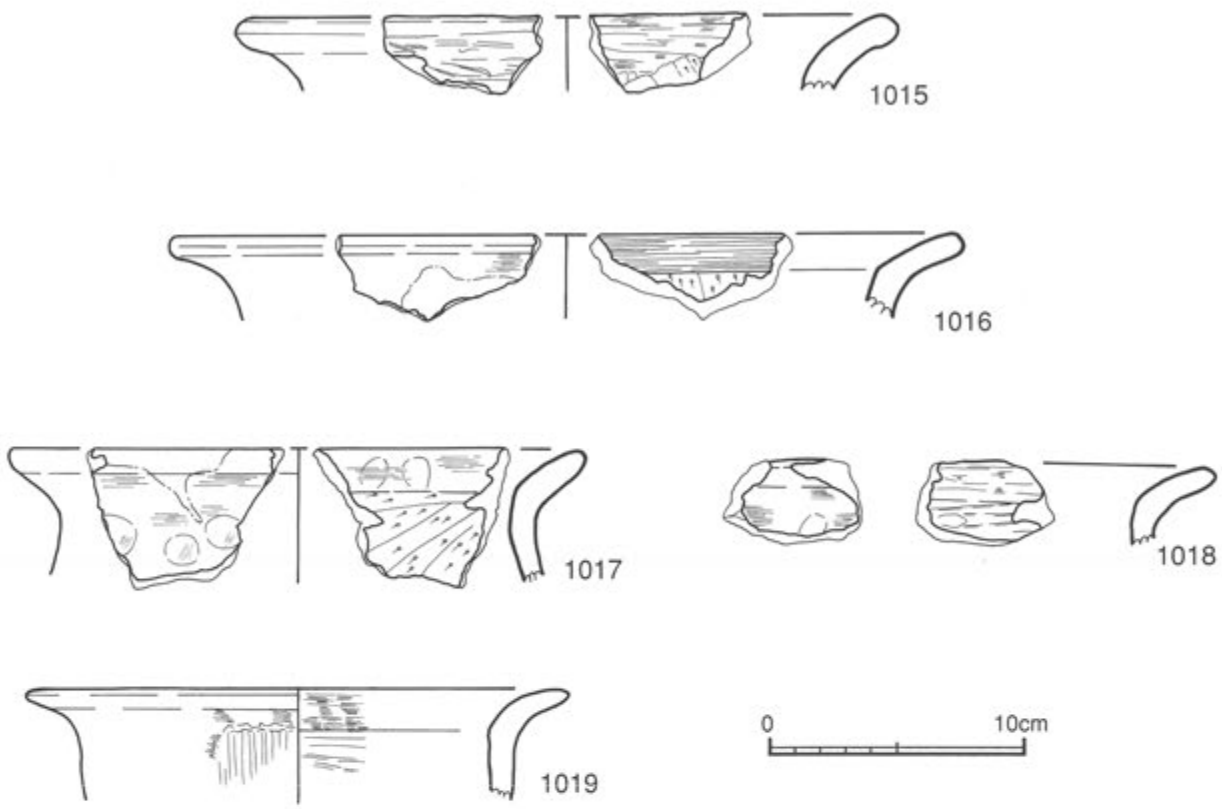
Ⅲ類土器（第201・202図）

1009は口径25cmである。口縁部は大きく外反するが，Ⅰ・Ⅱ類ほど長くは伸びない。端部は丸くなる。また器壁も厚くなる。胴部には張りが見られる。口縁部は内外面ともにナデ調整で，胴部外面は縦位と横位のハケ目調整が施され，内面は縦位のヘラケズリが細かく入れられる。ケズリの上端は揃わない。1010は口径26cmである。口縁部は大きく外反し，先端部へ向かって先細りとなる。端部は丸くなる。胴部は張らずほぼ直線的である。外面はナデ調整で，内面は斜位のヘラケズリが



第201図　土師甕 3

施される。ケズリの上端はほぼ揃う。器壁は厚い。1011は復元口径35.2cmである。口縁部は大きく外反するが，端部でさらに反る。外面は縦位，内面は横位のハケ目調整で，口縁端部はナデ調整で丸くおさめている。器壁は厚い。1012は復元口径28.8cmである。口縁部は大きく外反する。端部は丸くおさめる。内外面ともに横位のナデ調整である。器壁は厚い。1013は復元口径29.8cmである。口縁部が大きく外反するものである。端部は丸くおさめる。頸部は太く，口縁先端へ向かって先細りとなるものである。外面は横位のナデ調整で，内面は口縁部がヘラナデで，胴部は斜位のヘラケズリが施されている。ケズリ上端は斜位方向に揃っている。器壁は厚い。1014は復元口径24.8cmである。口縁部は大きく外反する。端部は丸くおさめる。外面は頸部が横位のハケ目，胴部は縦位のハケ目調整である。内面は頸部は横位のナデ調整，胴部は横位のヘラケズリで上端は揃わない。

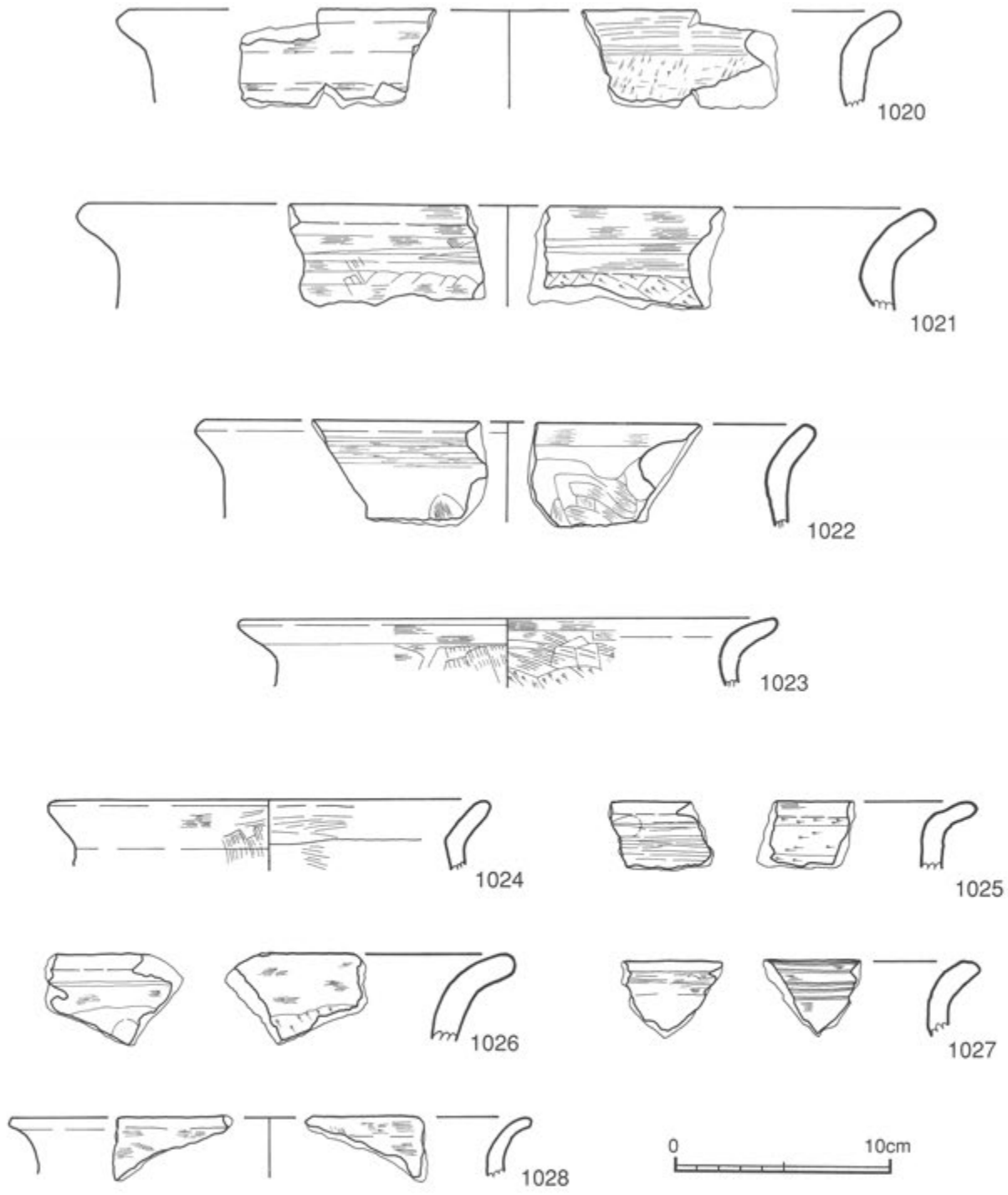


第202図　土師甕 4

1015は復元口径26cmである。口縁部は大きく外反する。端部はやや肥厚し丸くおさめる。内外面ともにナデ調整で，胴部内面には斜位のヘラケズリが施されている。ケズリ上端は斜位方向で揃っている。器壁は厚い。1016は復元口径31.2cmである。口縁部は頸部で屈曲して外反し，端部を丸くおさめる。外面はナデ調整である。口縁部内面は横位のハケ目調整，胴部内面には縦位のヘラケズリが施されている。ケズリ上端は揃っており，稜を形成している。器壁は厚い。1017は復元口径22.6cmである。口縁部は頸部で屈曲するようにして大きく外反する。端部は丸くおさめる。胴部はやや張りがみられる。外面はナデ調整で，内面は斜位のヘラケズリが施されるが，頸部分のみ横位のヘラケズリを施して稜を形成している。器壁は厚い。1018は口縁部が大きく外反する。
端部は丸くおさめる。内外面はナデ調整である。器壁は厚い。1019は口径21.2cmである。口縁部は頸部で屈曲するように大きく外反する。内面には稜が見られる。胴部はほぼ真っ直ぐ立ち上がって張りが見られない。口縁部は内外面ナデ調整で，胴部は外面縦位，内面は横位のハケ目調整が行われている。

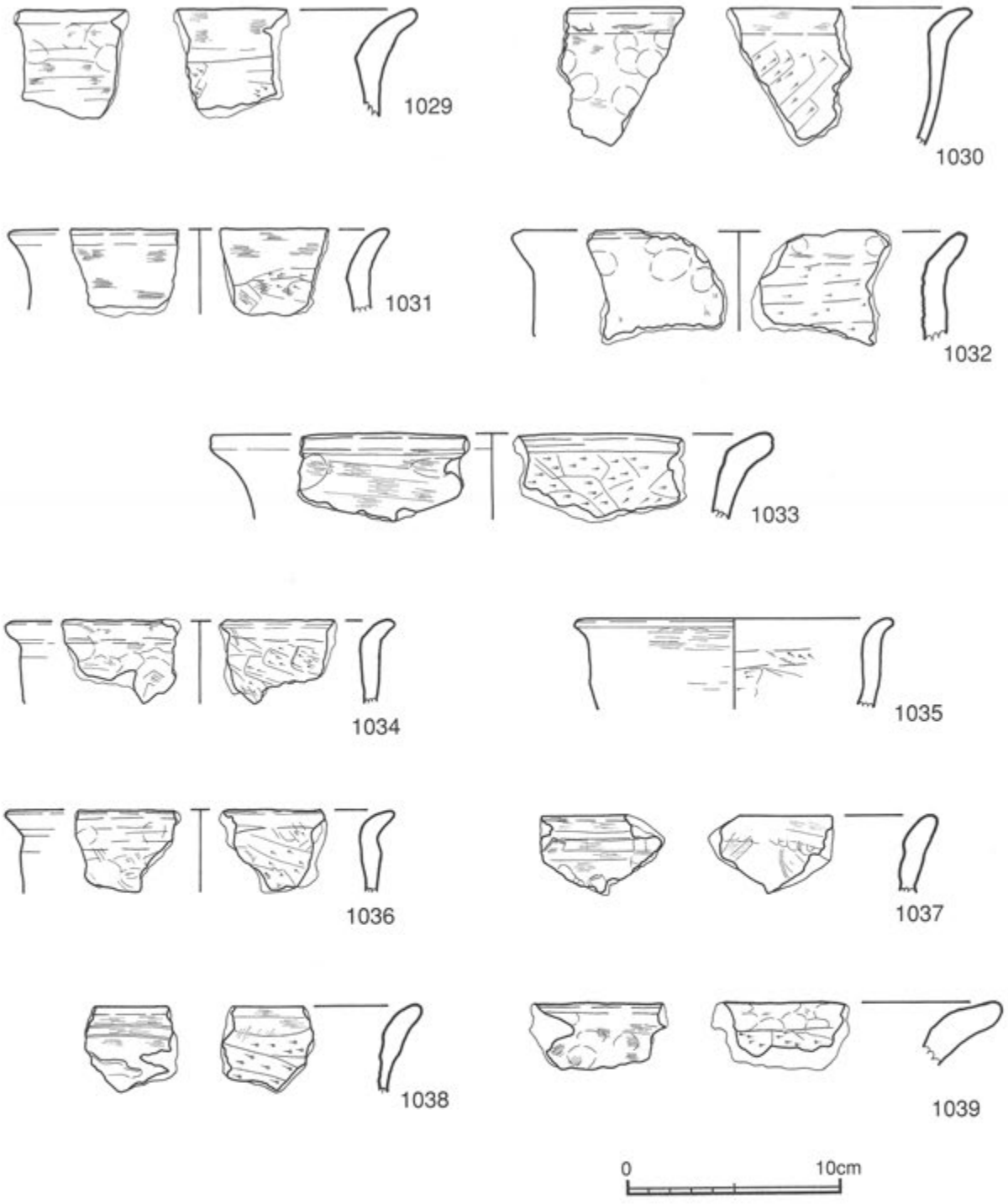
Ⅳ類土器（第203図）

1020は復元口径36.6cmである。器壁は厚く口縁部が短く外反する。端部は丸くおさめる。外面はナデ調整である。内面は口縁部が横位のハケ目調整，胴部は縦位のヘラケズリで，ケズリは上端が揃っており，稜を形成している。1021は復元口径40cmである。器壁は厚く口縁部が短く外反する。



第203図　土師甕 5

端部は丸くおさめる。口縁部は内外面ともに横位のナデ調整である。胴部内面は斜位のヘラケズリで，ケズリの上端は横位のナデによって揃えられており，稜を形成している。1022は復元口径29cmである。口縁部が短く外反し，端部を丸くおさめる。内外面ともにナデ調整が施されている。1023は口径25.2cmである。口縁部は大きく外反する。口縁端部へ向かってやや細くなるとともに，端部を丸くおさめている。口縁部は内外面ともにナデ調整である。胴部外面は縦位のハケ目調整，胴部



第204図　土師甕 6

内面はヘラケズリが行われ，頸部付近はさらに横位のハケ目が施されている。1024は口径20.4cmで，頸部から屈曲するように外反するものである。口縁部は短く，端部を丸くおさめる。内面には稜が見られる。外面は縦位，内面は横位のハケ目調整が行われている。1025も頸部から屈曲するように外反するものである。口縁部は短く，端部は丸くおさまる。胴部は直線的で張りは見られない。外面は横位のハケ目，内面は横位のヘラケズリが施され，頸部に稜が形成される。1026は口縁部が短

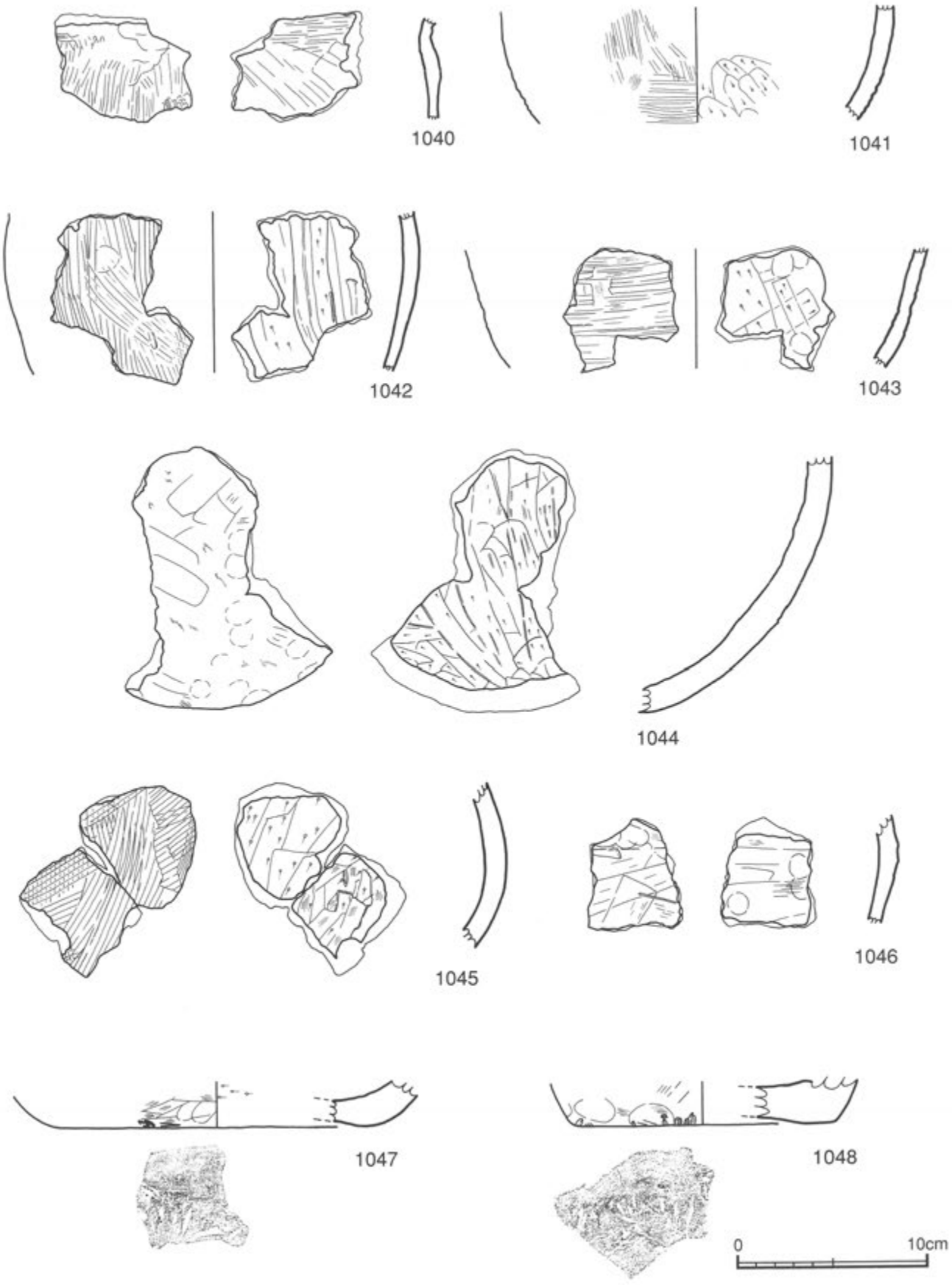
く外反するものである。器壁は厚く，端部を丸くおさめる。口縁部は内外面ともにナデ調整で，胴部内面は斜位のヘラケズリが施されており，ケズリ上端は斜位方向に揃っているため稜は形成されない。1027は口縁部が短く外反するものである。口縁端部へ向かってやや肥厚するとともに端部を丸くおさめている。外面は横位のナデ調整，口縁部内面には横位のハケ目の痕跡が認められる。1028は復元口径24.6cmである。口縁部は短く外反し，口縁端部へ向かって先細りとなる。端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整である。

Ⅴ類土器（第204図）

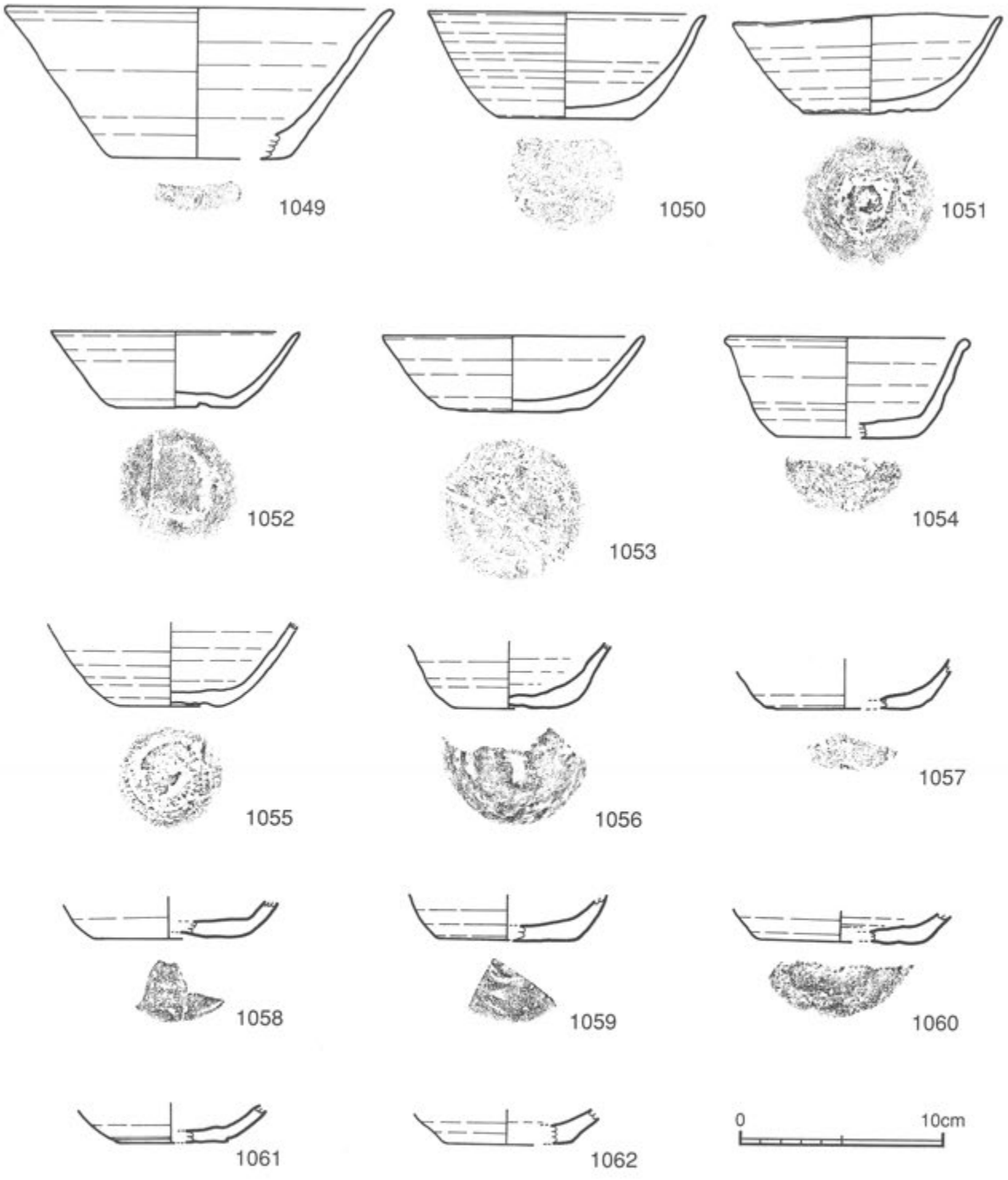
1029は口縁部が短く外反する。口縁端部へ向かって先細るとともに，端部を丸くおさめる。頸部は太く内面には稜が形成される。口縁部は内外面ともにナデ調整であるが，頸部外面には指頭圧痕が認められる。胴部外面は横位のナデ調整，内面は斜位のヘラケズリのちナデ調整が行われ，上端は揃えられている。1030も口縁部が短く外反する。口縁端部へ向かって先細るとともに，端部は丸くおさめられる。頸部は太く内面には稜が形成される。胴部には張りがない。口縁部は内外面ともにナデ調整である。胴部外面も横位のナデ調整が施されているが，指頭圧痕も認められる。胴部内面は斜位のヘラケズリのちナデ調整である。1031は復元口径18cm を測る。口縁部は短く外反し，端部を丸くおさめる。口縁部は内外面ともにナデ調整である。胴部外面は横位・斜位のナデ調整，胴部内面は斜位のヘラケズリで，上端を揃えられ，頸部内面に稜を形成している。1032は復元口径21.6cmを測る。口縁部は短く外反し，端部を丸くおさめる。外面はナデ調整で，指頭圧痕が認められる。内面には横位のヘラケズリが施され，頸部には稜が形成されている。1033は復元口径26.6cmである。口縁部は胴部よりも肥厚して短く外反し，端部を丸くおさめる。外面は横位のナデ調整，内面は横位のヘラケズリが行われるとともに，ケズリの上端を揃えて稜が形成されている。1034・1036は口縁部が端部へ向かって先細るとともに短く外反するものである。胴部に張りはみられない。外面はナデ調整，内面は斜位のヘラケズリが施される。1034は復元口径18.6cm，1036は18.4cmである。1035は口径15cmで，口縁部は短く外反し，端部を丸くおさめる。外面は横位のナデ調整で，胴部内面には横位・斜位のヘラケズリが行われている。1037は口縁部が肥厚するとともにわずかに外反するものである。端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ調整である。1039も口縁部がわずかに外反するものである。端部は丸くおさめる。ヘラケズリによって器壁が薄くなった胴部と比べて，口縁部がかなり肥厚しているような印象を受ける。口縁部は横位のナデ調整，胴部内面は横位のヘラケズリが行われる。1039は口縁部は短いが大きく外反するものである。端部は丸くおさめ，器壁は厚い。外面は横位のナデ調整で，指頭圧痕も認められる。内面は口縁部に指頭圧痕が認められ，胴部には横位のヘラケズリが行われている。ケズリ上端は揃えられ，頸部に稜が形成されている。

Ⅵ類土器（第205図）

1040は土師器甕の胴部片である。外面は縦位のハケ目で，内面は頸部付近は横位，胴部は斜位のヘラケズリのちナデ調整が行われている。1041は土師器甕の胴下半部である。残存部分で胴部径21cmを測る。外面は縦位と横位のハケ目調整で，内面には斜位のヘラケズリが施されている。1042は土師器甕の胴部最大径付近で，復元胴部径22.1cmである。外面は縦位と斜位のハケ目調整，内面



第205図　土師甕 7

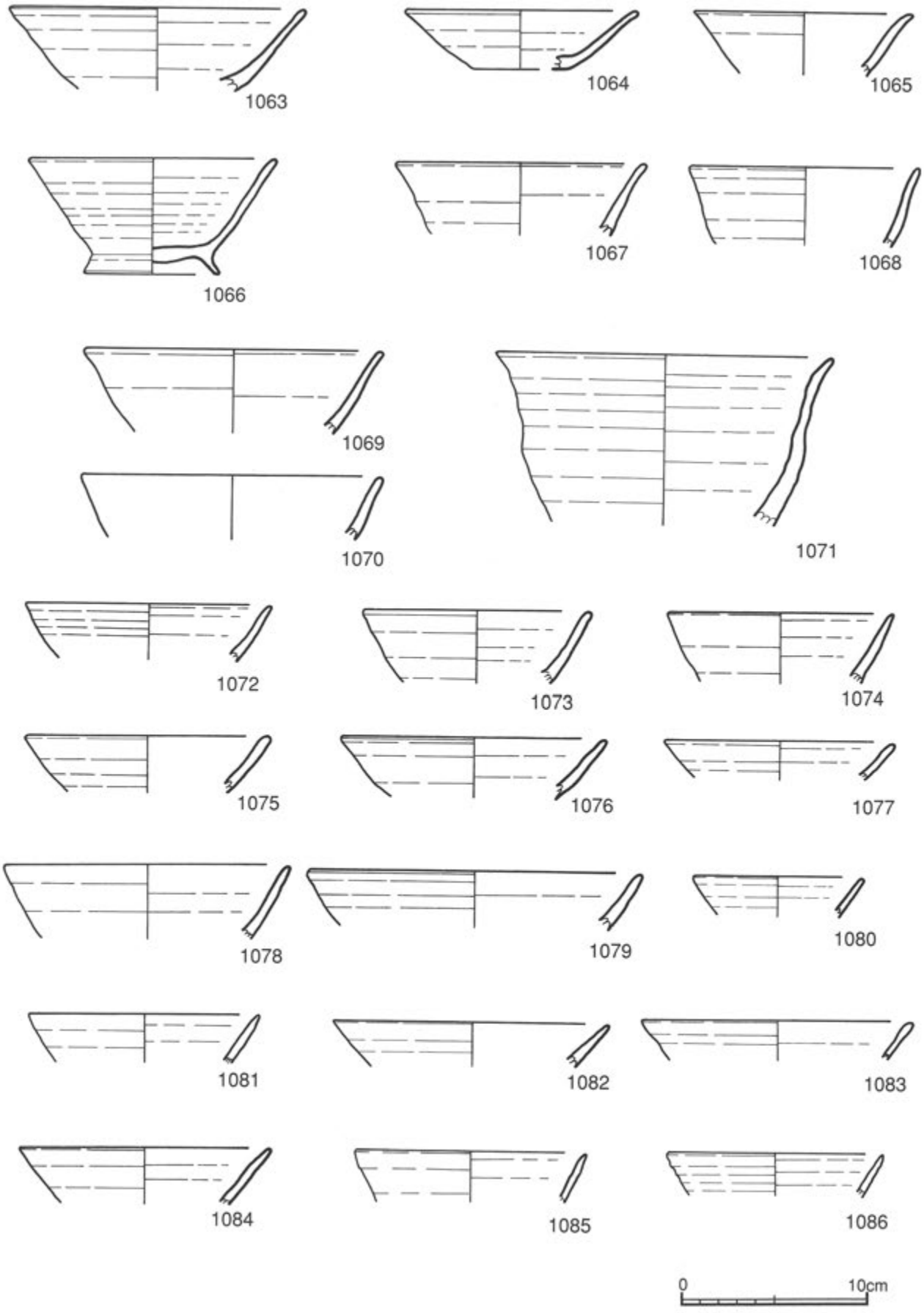

1049
1050
1051
1052
1053
1054
1055
1056
1057
1058
1059
1060
1061
1062
0
10cm

第206図　土師器 1

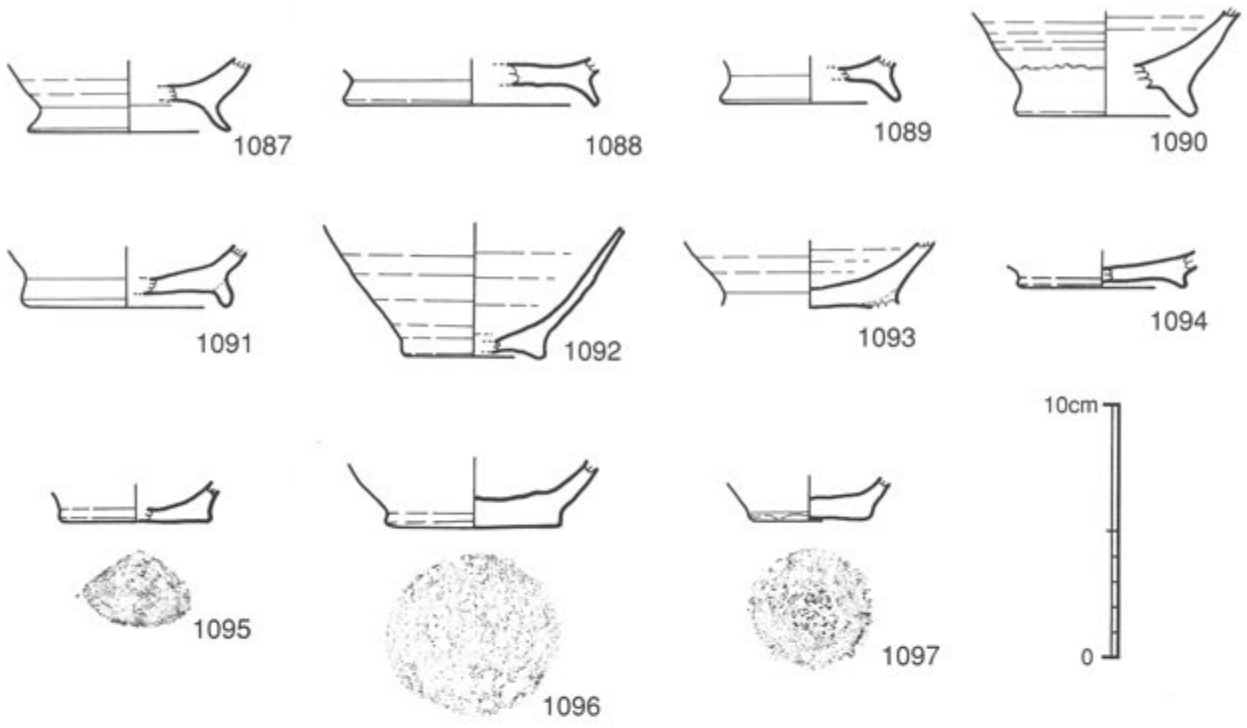
は縦位のヘラケズリが行われている。1043は土師器甕の胴下半部である。残存部分で胴部径24.8cmを測る。外面は横位のハケ目調整で，内面は斜位のヘラケズリが行われるとともに，一部に指頭圧痕も認められる。1044も土師器甕の胴下半部である。外面は斜位のハケ目をナデ消しており，指頭圧痕も認められる。内面は縦位のヘラケズリが行われている。1045は土師器甕の胴部最大径付近である。外面は斜位のハケ目調整である。内面は縦位のヘラケズリが行われているが，下半部の方はナデ消されている。1046も同じく土師器甕の胴部最大径付近と思われる。内外面ともに工具による横位のナデ調整である。1047・1048は土師質の底部で，鉢状のものと思われる。1047は復元底径16.4cmで若干上げ底になると思われる。外面はナデ調整で，底部の側縁部にヘラ状工具によるキザミのようなものが認められる。内面は横位のヘラケズリである。1048は復元底径14cmを測り，1047と同じく若干上げ底になるものと思われる。外面はナデ調整で，底部の側縁部にヘラ状工具によるキザミのようなものが認められる。

②土師器坏（第206図）

1049は口径19cm・底径8.6cm・器高7.6cmと大形の坏である。体部は直線的に立ち上がり，ナデ調整が行われている。9世紀代に比定されると思われる。1050は口径13.6cm・底径6.6cm・器高5.2cmで，体部がやや弯曲して立ち上がる。底部はヘラ切りののちナデ調整が施されている。9世紀代に比定されると思われる。1051は口径13.4cm・底径6.4cm・器高4.9cmで，体部がやや弯曲して立ち上がる。口縁部は歪みが見られる。底部は回転ヘラ切りによる切り離しが行われている。1052・1053は体部がわずかに弯曲して立ち上がるものである。1052は口径12.2cm・底径5.8cm・器高3.9cmで，底部はヘラ切りののちナデ調整が施されている。1053は口径12.8cm・底径7cm・器高3.9cmで，底部は回転ヘラ切りによる切り離しが行われている。いずれも9世紀代に比定されると思われる。1054は口径12.2cm・底径7cm・器高5cmで箱形に近い形状を呈する。体部は直線的に立ち上がり，口縁端部がやや肥厚する。底部は回転ヘラ切りによる切り離しが行われている。8世紀後半から9世紀前半頃に比定されると思われる。1055～1062は口縁部が欠損しており，体部から底部にかけて残存するものである。1055は底径5cmである。ヘラ切り底で，体部がわずかに弯曲して立ち上がる。1056は底径6cmで，体部が外反して立ち上がるものである。底部はヘラ切りののちナデ調整が施されている。1057・1058は底径7cmである。体部は弯曲して立ち上がると思われる。底部はヘラ切りののちナデ調整が施されている。1059は底径6.8cmである。体部は弯曲して立ち上がると思われる。底部は回転ヘラ切りによる切り離しが行われている。1060は底径8cmである。体部の立ち上がりは不明である。底部は回転ヘラ切りによる切り離しが行われている。1061は底径5.4cmである。底部にはヘラ切りによる粘土のはみ出しが認められる。体部は弯曲して立ち上がると思われる。1062は底径6.2cmで，やや厚みがある。体部の立ち上がりは不明である。1064は口径12.6cm・底径5cm・器高3.3cmで，体部はほぼ直線的に立ち上がる。これらはいずれも9世紀代に比定されるものと思われる。


1063
1064
1065
1066
1067
1068
1069
1070
1071
1072
1073
1074
1075
1076
1077
1078
1079
1080
1081
1082
1083
1084
1085
1086
0
10cm

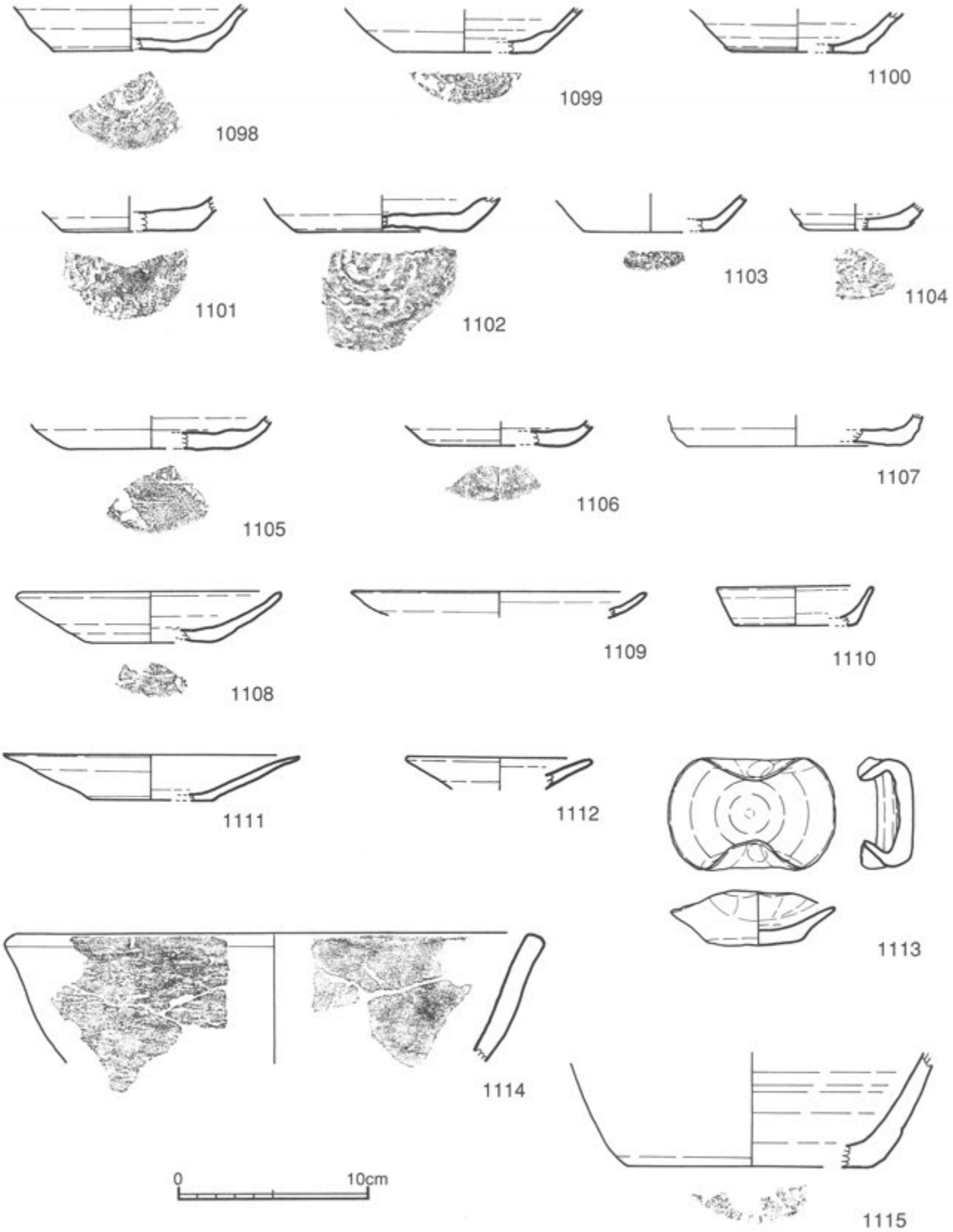
第207図　土師器 2



第208図　土師器 3

③土師器口縁部片（第207図）

1063～1086は土師器の口縁部片をまとめたものである。1066は土師器埦であるが，他は器種が明確ではない。1063は口径16cmと大形のものである。体部は若干外反しながら立ち上がり，口縁端部へ向かって細くなる。1065は口径11.8cmである。体部はわずかに弯曲しながら立ち上がり，口縁端部付近で外反する。1066は土師器埦である。口径13.4cm・高台径7.2cm・器高6.3cmである。体部は直線的に立ち上がる。底部外面は下方へふくらみ，高台の脚は「ハ」字状に広がる。高台は断面三角形の細長いもので，接地面は少ない。1067は口径13.4cmである。体部は若干外反しながら立ち上がり，口縁端部へ向かって細くなる。1068は口径12.4cmである。体部が深い形状になると思われる。体部はややふくらみながら立ち上がり，口縁部付近で外反する。端部へ向かって細くなる。1069・1070は口径16cmと大形のものである。体部はややふくらみながら立ち上がり，口縁部付近で外反する。器壁は口縁部へ向かって薄くなる。内外面ともにナデ調整が行われている。1071は口径18.2cmで体部が深い器形を呈する。体部はふくらみながら立ち上がり，口縁部付近で外反する。体下方部の器壁は厚く，口縁端部へ向かって細くなる。外形は，ナデによって凸凹している。1072・1073は体部がわずかに弯曲して立ち上がる。1072は口径13cm，1073は12cmである。1074は口径12cmである。体部がわずかに弯曲して立ち上がり，口縁端部へ向かって細くなる。1075は口径13cmである。体部はほぼ直線的に立ち上がるが，口縁端部へ向かってやや肥厚する。1076は口径14.4cmである。体部はほぼ直線的に立ち上がるが，口縁端部へ向かって細くなる。1077は口径12.4cmで，体部は直線的に立ち上がり，口縁部付近でやや外反する。1078は口径15.2cmで体部がわずかに弯曲して立ち上がる。1079は口径18cmと大形のものである。口縁端部へ向かって細くなる。1080は1079とは反対に，口径9cmと小形のものである。体部は直線的に立ち上がる。1081・1082は口縁端部へ向かって


1098
1099
1100
1101
1102
1103
1104
1105
1106
1107
1108
1109
1110
1111
1112
1113
1114
1115
0
10cm

第209図　土師器 4

細くなるもので，体部は直線的に立ち上がる。1081は口径12.2cm，1082は14.8cmである。1083も体部が直線的に立ち上がるが，口縁端部付近が肥厚するものである。口径14.6cmを測る。1084～1086は口縁端部へ向かって細くなるもので，体部は直線的に立ち上がるものである。1084は口径13.2cm，1085は12.4cm，1086は11.6cmである。

④土師器底部片（第208・209図）

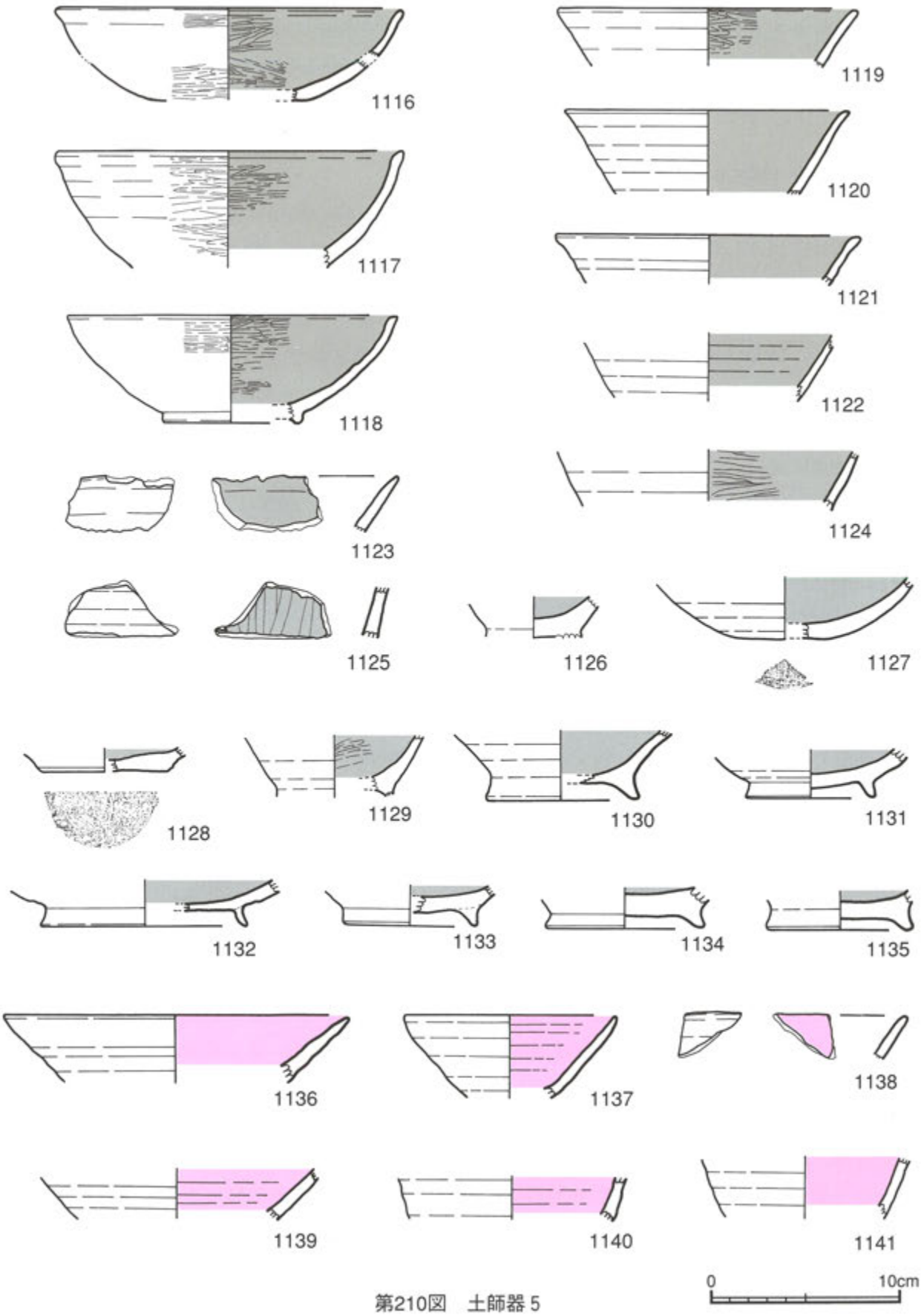
1087～1097は土師器の底部片で，1087～1091は土師器埦の高台部分である。1087は高台径8cmである。脚部は内反りしながら「ハ」字状に広がる形状を呈しており，接地面へ向かって細くなり，やや踏ん張った形状を呈する。接地面は少ない。1088・1089は脚部が直線的に立ち上がり，接地面へ向かって細くなる。1088は高台径10cmで，断面三角形の細長い高台が「ハ」字状に広がる。1089は7cmである。1090は高台径7cmである。脚部は断面方形の高台が「ハ」字状に付けられており，どっしりとした印象を受ける。体部の器壁も厚い。1091は高台径8cmである。高台高6mmと低い高台である。脚部が直線的に立ち上がり，高台内部は台形状を呈する。1092は高台径5.6cmである。高台部分は非常に低い。1093は高台の脚部を欠損している。1094は高台径6.8cmで，高台高4mmと低いものである。1095～1097は充実高台である。1095は高台径6cm・1096は7cm・1097は4.6cmで，いずれも底部は回転ヘラ切りによる切り離しが行われている。1098～1107は土師器坏の底部である。1098～1100は器壁が薄く，体部はやや弯曲しながら立ち上がる。底径はそれぞれ1098が8cm，1099が7.6cm，1100が7.2cmである。1101は器壁が厚い。底径6.8cmで，ヘラ切りによる切り離しののちナデられている。1102は底径9cmと大形である。底部はヘラ切り痕が明瞭に残り，やや上げ底となる。1104は底径5.6cmと小形で，ヘラ切りによる切り離しののちナデられている。底部には粘土のはみ出しが見られる。1105・1106は器壁が厚く，体部はふくらみをもつようである。底部はヘラ切りによる切り離しののちナデ調整が施されている。1105は底径9cm，1106は底径7cmである。1107は底径11.6cmと大きく，やや上げ底となる。器壁は厚めで鉢などの可能性がある。

⑤土師器皿（第208・209図）

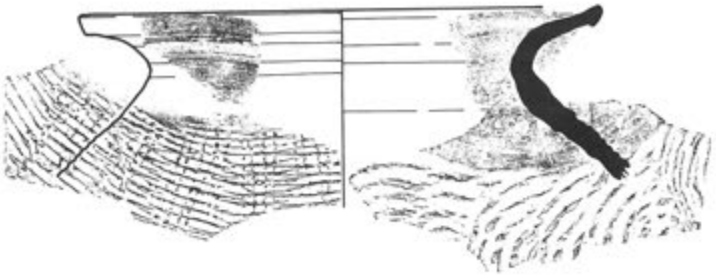
1108～1113は皿である。1108は口径13.8cm・底径7cm・器高2.8cmである。体部はわずかに内弯する。1109は口径15.6cmである。1110は口径8.3cm・底径6.4cm・器高1.1cmで，やや箱形に近い。1111は口径15.6cm・底径6.6cm・器高2.4cmである。体部は外反しながら立ち上がり，口縁部へ向かって先細りとなる。1112は9.8cmと他よりも小形であるが，サイズに比して器壁が厚い。1113は耳皿である。口径8.8cmで相対する２ヶ所の口縁を内側上方へ折り曲げている。器壁は厚く底部は不安定な平底である。

⑥土師質鉢（第208・209図）

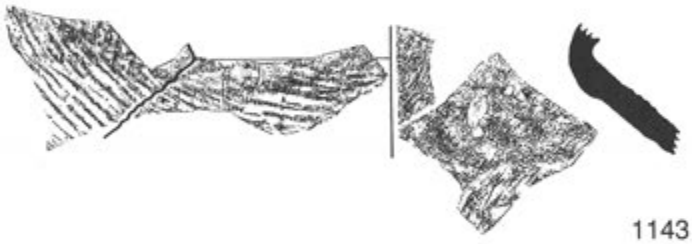
1114は土師質の鉢である。口径27cmで器壁は厚く，口縁部でわずかに外反する。内外面ともにナデ調整が施されている。1115も土師質の鉢と思われる。底径13cmで器壁は厚く，ほぼ直線的に立ち上がる。


1116
1117
1118
1119
1120
1121
1122
1123
1124
1125
1126
1127
1128
1129
1130
1131
1132
1133
1134
1135
1136
1137
1138
1139
1140
1141
0
10cm

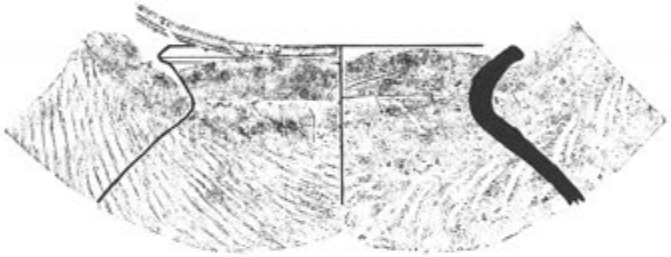
第210図　土師器 5



1142

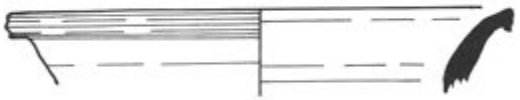


1143



1144

1145



1146

1147

1148

1149

1150

第211図　須恵器1

⑦内黒・内赤土師器（第210図）

1116～1135は内黒土師器である。1116～1118はいずれも大形のもので，体部が弯曲する器形を呈するものである。1116は坏と思われる。口径18cmで，口縁端部が短く外反する。内外面ともに横位のミガキが施されている。1117は口径18.6cmで，内外面ともに横位のミガキが施されている。1118は埦で，口径17.6cm・底径7.4cm・器高5.8cmである。体部は弯曲して立ち上がり，内外面ともに横位のミガキが施されている。1119～1121・1123は体部が直線的に立ち上がる器形を呈する。1119は口径16cmで，内面にはミガキが施されている。1120は口径15cmで，口縁端部が若干外反する。ミガキは見られない。1121は口径16.2cmで，口縁端部は肥厚し，若干外反する。ミガキは見られない。1122・1124・1125は体部片である。1124は横位，1125は縦位のミガキが施されている。1126・1129は底部付近である。高台部分は欠損している。1129は内面に横位のミガキが施されている。1127は坏である。器壁は厚く体部は弯曲して立ち上がる。1128は底部切り離しのあとヘラナデ調整が施されている。1130～1135は埦の高台部分である。1130は高台径8cmで，断面三角形の短い高台が「ハ」字に広がる。1131は高台径7cmで，丸みをもつ底部に断面三角形の短い高台が「ハ」字状に付く。1132は底径11cmで，断面三角形で細長い高台が「ハ」字状に付いている。接地面は少ない。1133～1135は太くて短い断面三角形の高台が「ハ」字状に付く。高台径はそれぞれ，1133が7cm，1134が8.4cm，1135が7.8cmである。

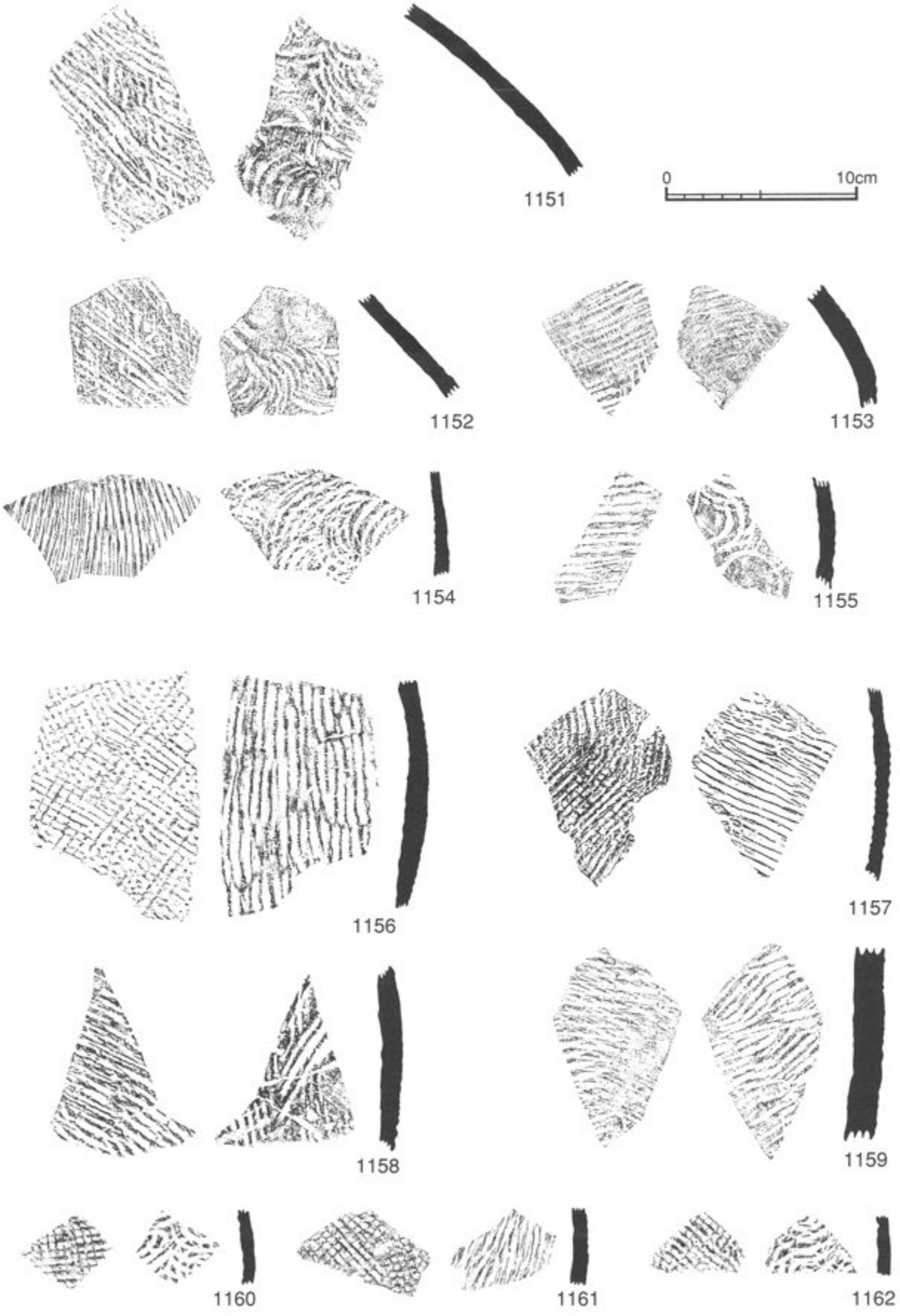
1136～1141は内赤土師器である。1136は口径18.4cmと大形のものである。体部は直線的に立ち上がり，口縁端部へ向かって先細りとなる。ミガキ調整は見られない。1137は口径11.4cmである。体部はやや歪みが見られる。ミガキ調整は見られない。1139～1141は体部片である。

⑧須恵器（第211～213図）

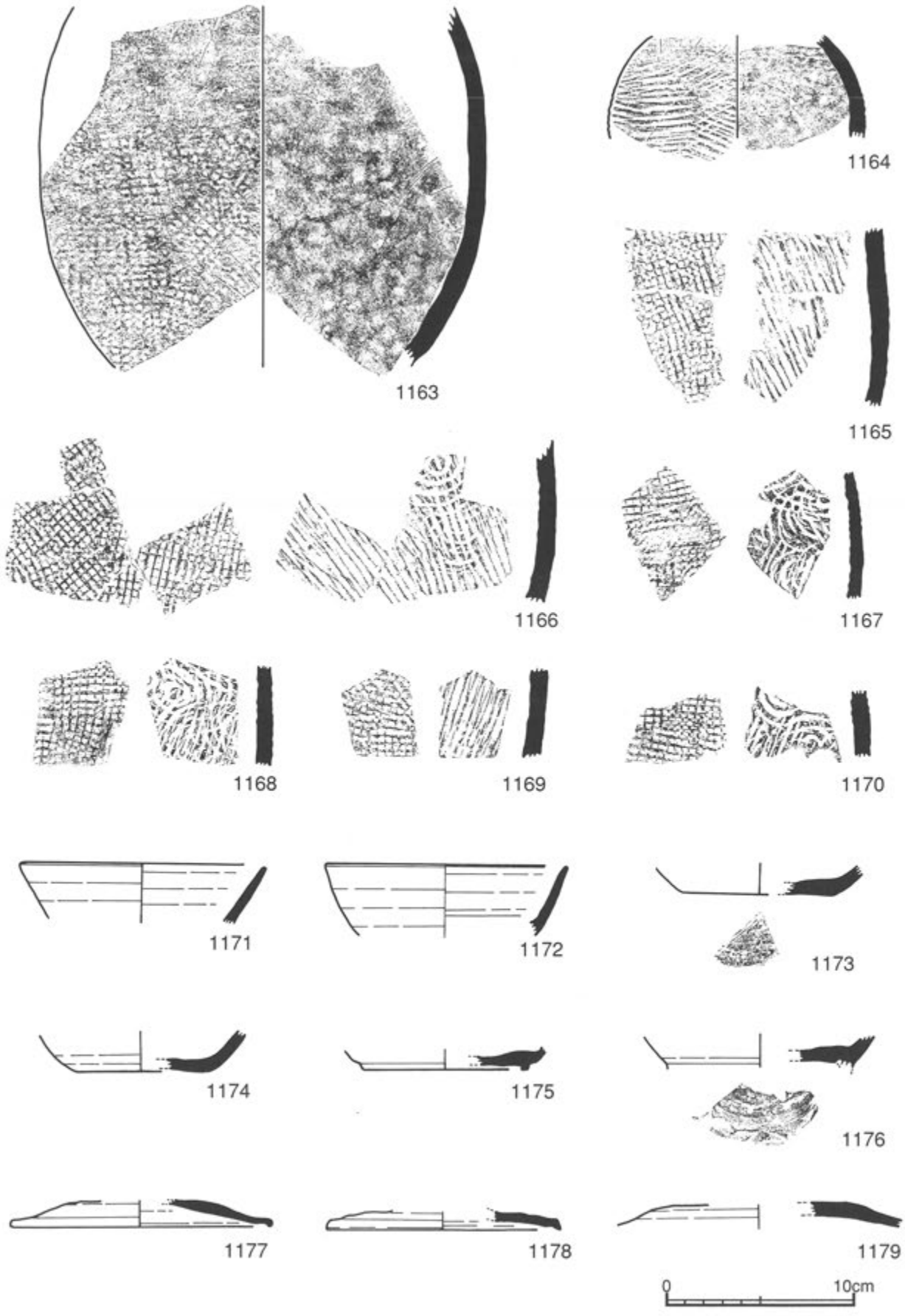
1142～1146は甕の口頸部である。1142は口径20.6cmを測り，口縁端部が下方に拡張されるものである。口頸部は内外面ともに横ナデで，胴部外面は格子目タタキが施され，内面には同心円の当て具痕が認められる。1143は頸部で，頸部径15.6cmを測る。外面は平行タタキ，内面は斜位のナデ調整が施されている。1144は口径13.6cmを測り，端部が断面三角形状に拡張する。口頸部は内外面ともに横ナデで，胴部外面は平行タタキが施され，内面には同心円の当て具痕が認められる。1146は口径19.8cmで，口縁端部が下方に拡張されるものである。口頸部は内外面ともに横ナデが施されている。1147は無頸壺と思われる。口径9cmで，内画面ともにナデ調整である。1148～1170は甕の胴部片と思われる。1148・1150・1156・1157・1161・1165・1166・1169は外面が格子目タタキで，内面には平行タタキが施されている。1149・1151・1152・1154・1155は外面に平行タタキが施され，内面には同心円の当て具痕が認められる。1152・1153は内面の同心円の当て具痕が一部ナデ消されている。1163・1164は内面がナデ調整のものである。

1171・1172は埦もしくは坏の口縁部である。ともに口径13cmである。1173・1174は坏の底部である。1173は底径8.2cm，1174は7.4cmである。1175・1176は埦の高台部分である。1175は高台径9cmで，断面方形の4mm程度の低い高台が付く。1176は高台部分が欠損している。

1177～1179は蓋である。1177は口径13.8cmで，天井部から口縁部へ向かって反りながら細くなるもので，端部がややつまみ状になる。1178は口径12.6cmで天井部の低いものである。


1151
0
10cm
1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1160
1161
1162

第212図　須恵器 2


1163
1164
1165
1166
1167
1168
1169
1170
1171
1172
1173
1174
1175
1176
1177
1178
1179
0
10cm

第213図　須恵器 3

第５節　中世の調査

中世の遺構・遺物は調査区のほぼ全面にわたって，Ⅱ・Ⅲ層から検出されている。遺構内の埋土や出土遺物などから判断された中世の遺構としては，四面廂建物跡，片廂建物跡を含む掘立柱建物跡と竪穴建物跡，土坑，ピット，溝状遺構，道跡などである。そのほか，建物の地鎮遺構と考えられる土師器の土坑も検出されている。遺物は土師器・須恵器・青磁・白磁等を中心に出土したほか，中国陶磁の出土も見られた。

5-1：中世の検出遺構

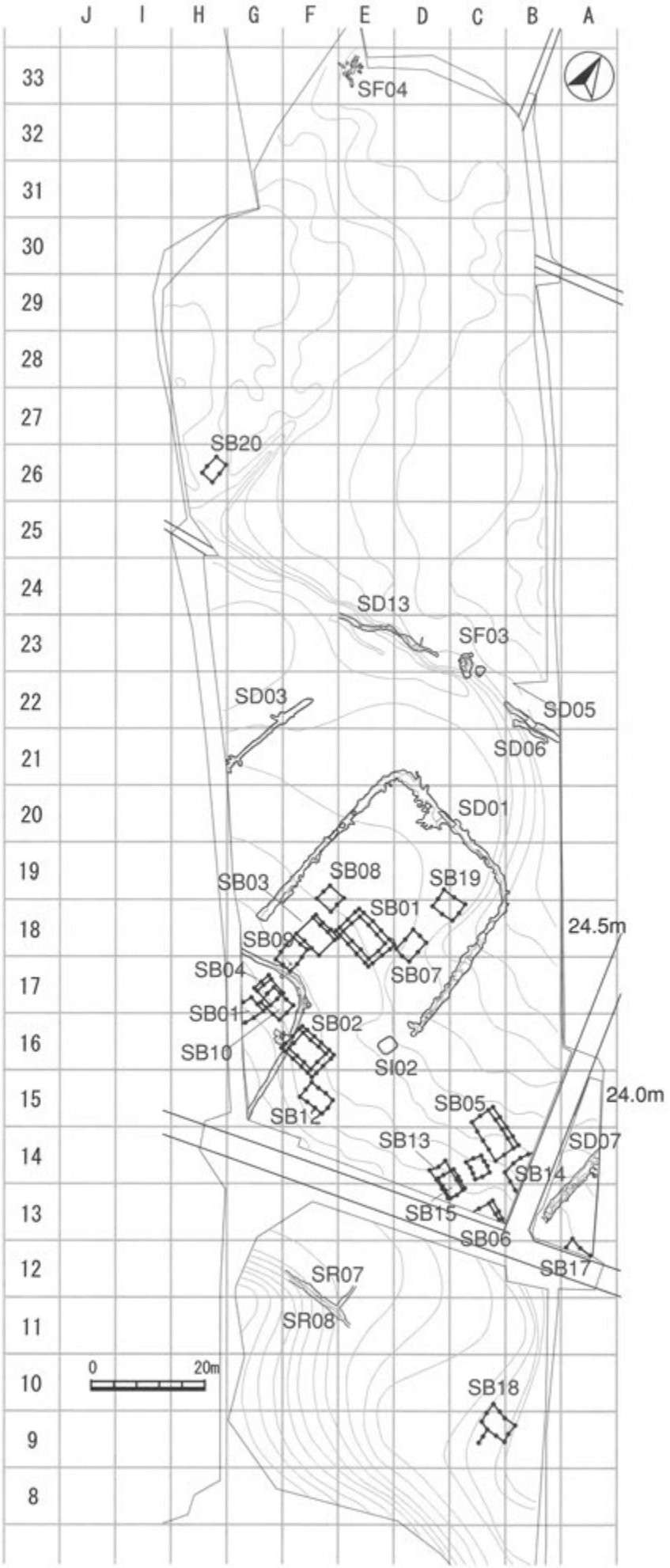
①ＳＢ（掘立柱建物跡）

SB01（第215図）

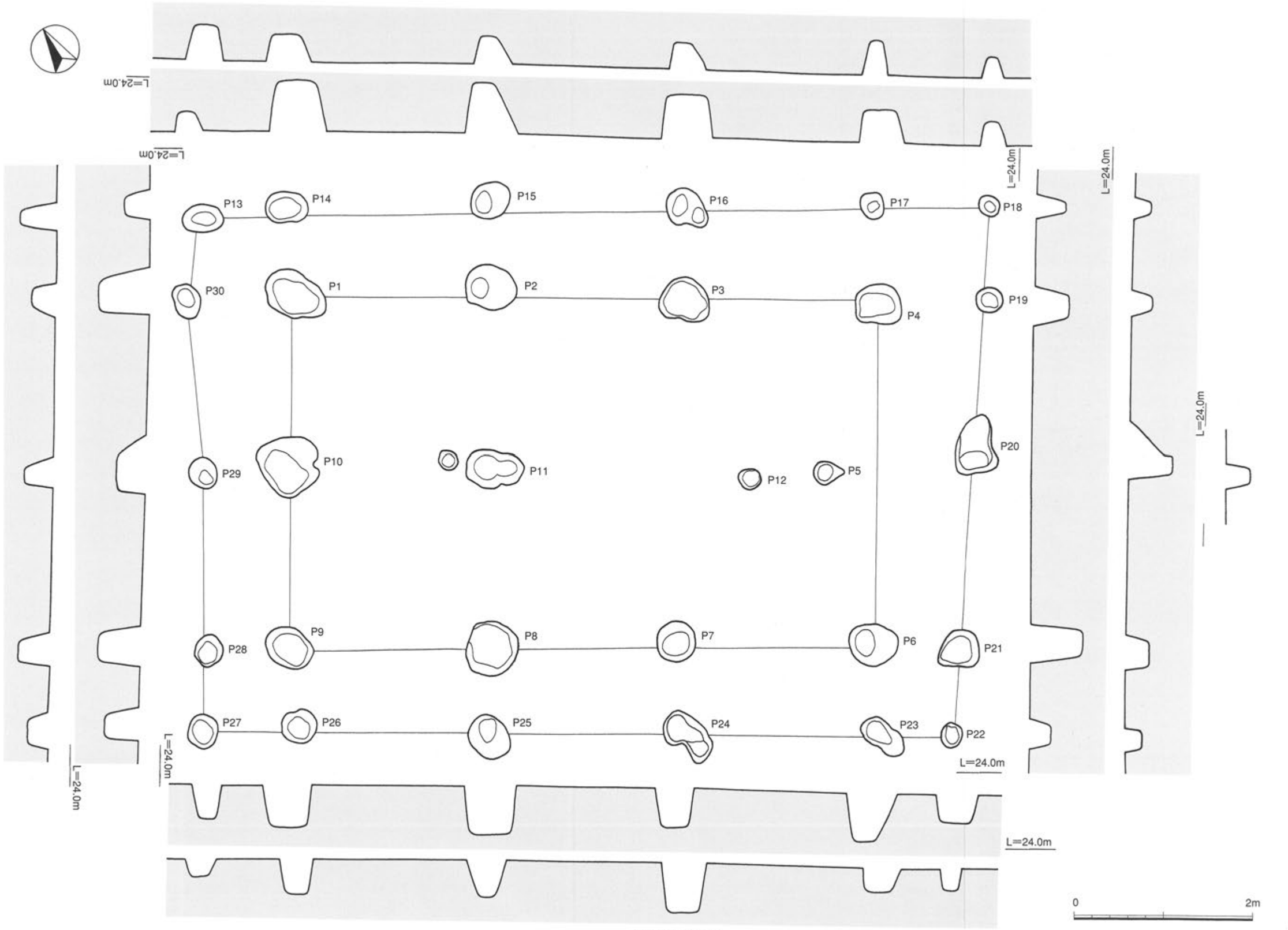
SB01はE-18区を中心に検出された。主軸方向はＮ２０°Ｅで，棟方向はおおよそ東西向きと言える。上屋は２間×３間で，他とは際だって大きな柱穴が掘られている。上屋の内部には２基の比較的小型の柱穴が見られ，束柱かと思われる。上屋の周りには半間ほどの距離を置いて，若干小型の柱穴が見られることから，廂と考えられる。小型の柱穴は４方向全てにあることから，四面廂建物跡と判断される。また，北東隅の廂の外側に，楕円形のピットが検出され，その中から土師器の皿の集積が出土している。

表８　SB01建物計測表

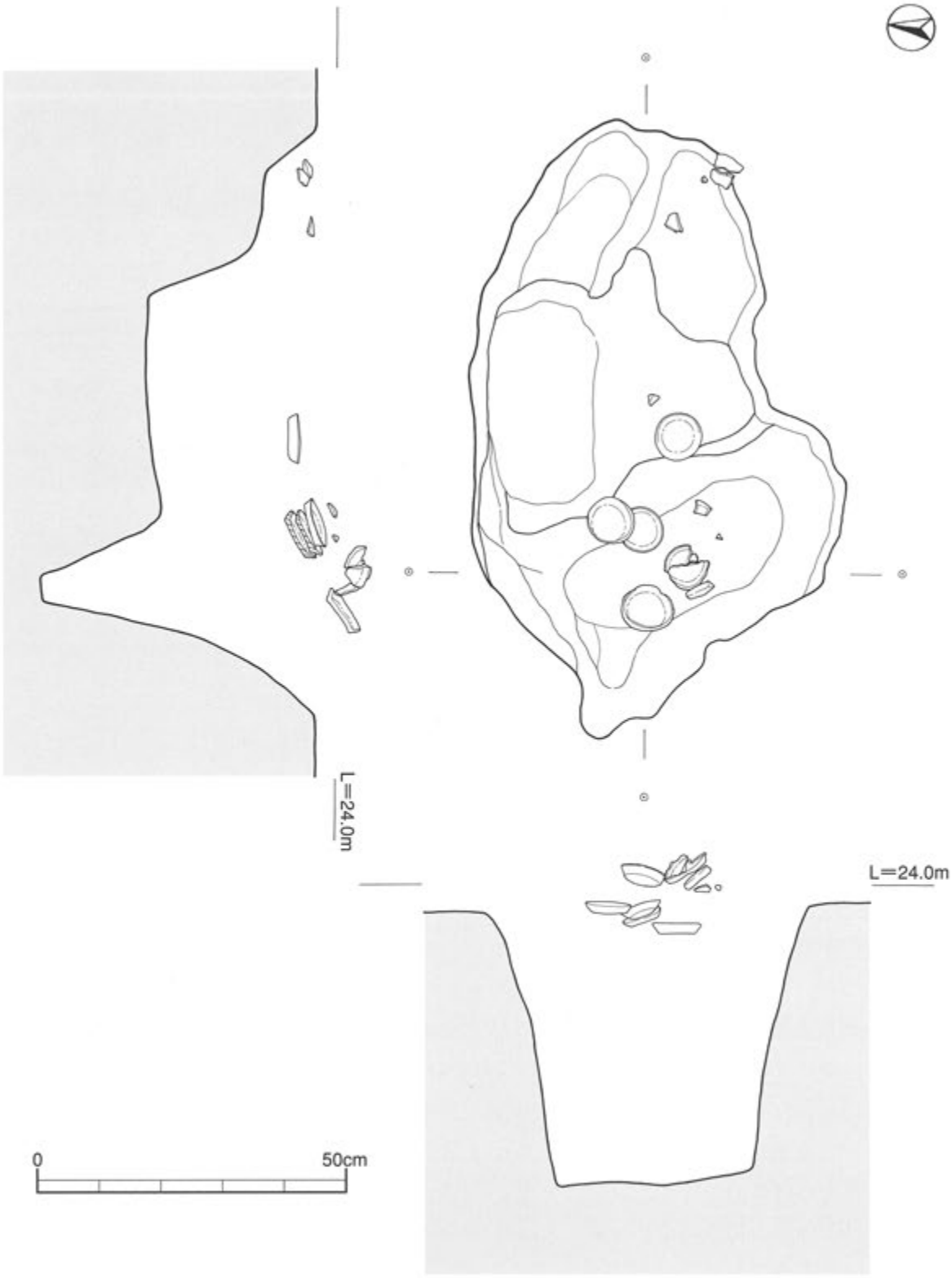
主軸方向	建物	桁行方向	桁間柱間 (cm)	桁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	梁行方向	梁間柱間 (cm)	梁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
N20° E	上屋	P1-P2	224	7.42	P1-P10	193	6.39	1	74	55	56
		P2-P3	220	7.28	P10-P9	200	6.62	2	58	23	58
		P3-P4	215	7.12	P1-P9	393	13.01	3	57	48	51
		P4-P1	659	21.82	P2-P11	190	6.29	4	55	39	37
		P6-P7	220	7.28	P11-P8	207	6.85	5	36	19	28
		P7-P8	218	7.22	P2-P8	397	13.15	6	55	30	59
		P8-P9	228	7.55	P3-P12	215	7.12	7	48	32	43
		P6-P9	666	22.05	P12-P7	210	6.95	8	54	45	53
		P10-P11	230	7.62	P3-P7	425	14.07	9	55	40	49
		P11-P12	290	9.60	P4-P5	175	5.79	10	73	50	32
		P12-P5	85	2.81	P5-P6	212	7.02	11	65	49	-
		P10-P5	605	20.03	P4-P6	387	12.81	12	26	17	-
	下屋	P13-P14	95	3.15	P13-P30	90	2.98	13	46	27	40
		P14-P15	230	7.62	P30-P29	190	6.29	14	48	37	30
		P15-P16	230	7.62	P29-P28	210	6.95	15	50	24	31
		P16-P17	215	7.12	P28-P27	92	3.05	16	52	21	30
		P17-P18	130	4.30	P13-P27	582	19.27	17	31	14	40
		P13-P18	900	29.80	P18-P19	108	3.58	18	16	12	18
		P27-P26	110	3.64	P19-P20	185	6.13	19	31	18	23
		P26-P25	210	6.95	P20-P21	213	7.05	20	58	21	50
		P25-P24	225	7.45	P21-P22	100	3.31	21	52	38	26
		P24-P23	220	7.28	P18-P22	606	20.07	22	29	18	25
		P23-P22	80	2.65				23	55	32	25
		P27-P22	224	7.42				24	62	55	55
	面積	床面積 (㎡)	最大値：54		床面積 (㎡)	最小値：49.43		25	52	25	40
								26	40	25	38
								27	40	28	20
		桁梁方向	(P13-P18)×（P18-P22)		桁梁方向	(P22-P27)×（P27-P13)		28	38	25	36
								29	35	17	33
								30	40	22	28



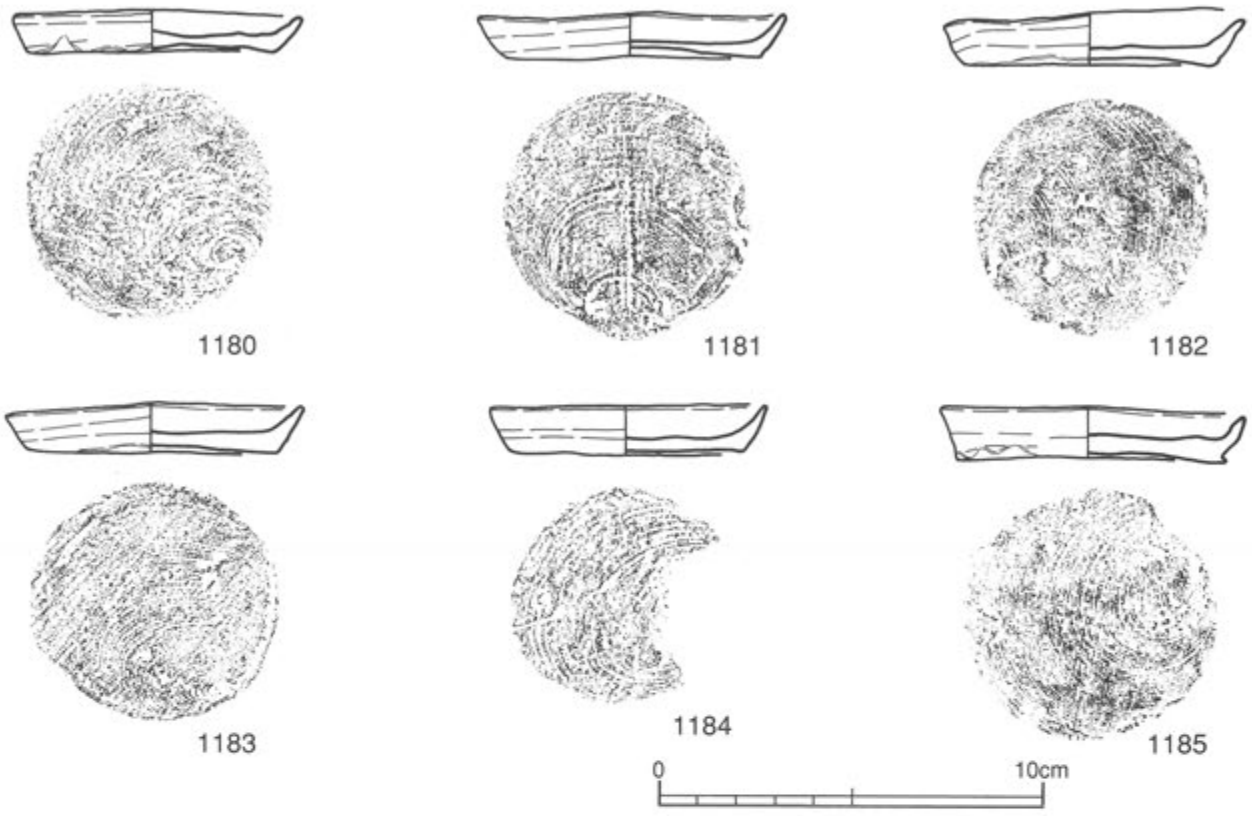
第214図　中世遺構配置図


L=24.0m
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P30
P1
P2
P3
P4
P19
P29
P10
P11
P12
P5
P20
P28
P9
P8
P7
P6
P21
P27
P26
P25
P24
P23
P22
0
2m

第215図　SB01



第216図　SK32

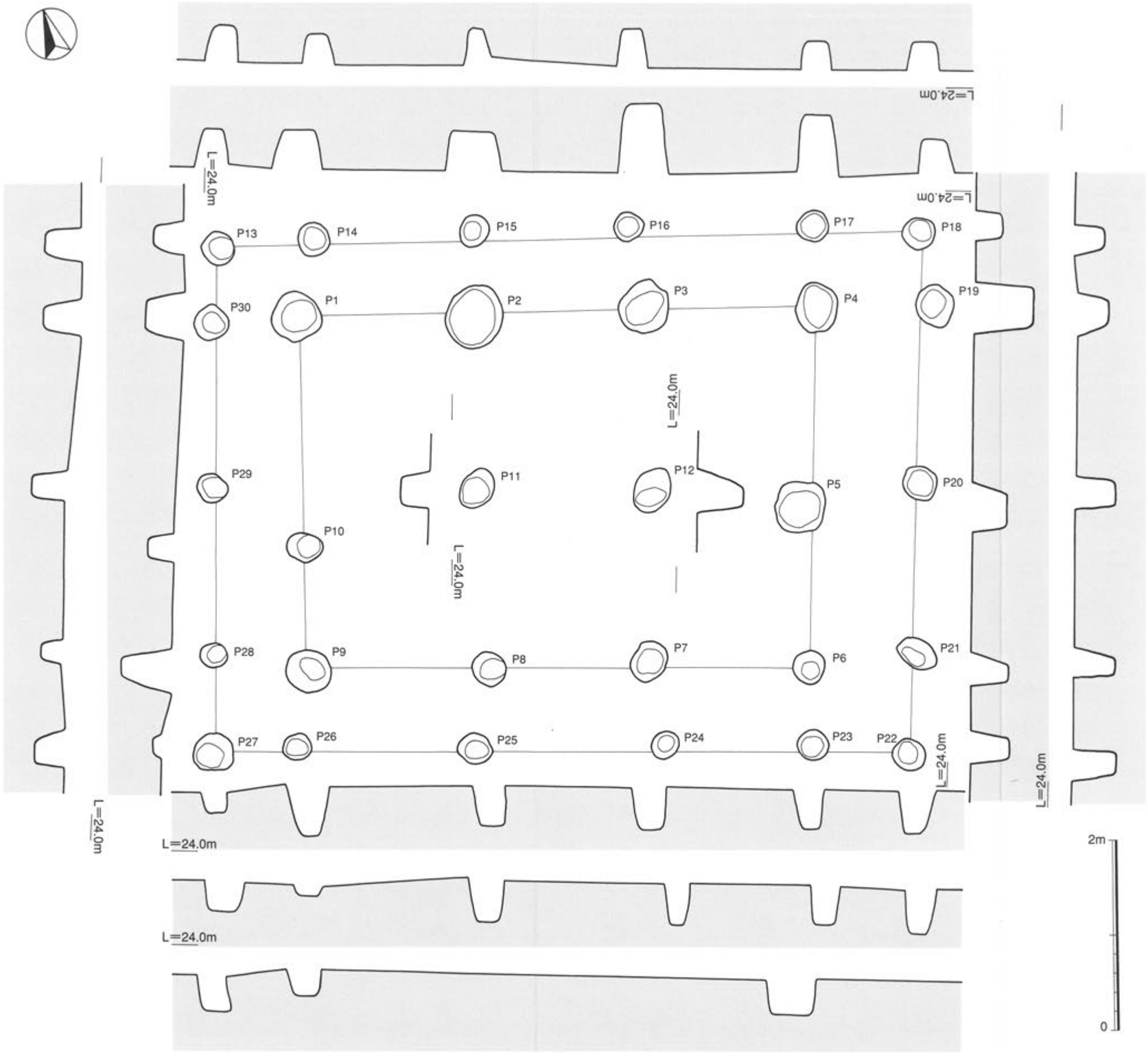


第217図　SK32出土遺物

SK32（第216・217図）

SK32はSB01の北東部から検出された。長径95cm，短径55cm，残存深さ47cm以上の楕円形土坑であるが，南側に突き出ているように見えるのは，この土坑との切り合いによると判断される。土師器の皿が出土した場所と土坑の検出面とのレベル差は約10cmあることから，土坑自体の深さは概ね10cm以上深かったことが想定される。土坑は概ね3段に掘られており，東側が低く，中央部がそれに次ぎ，西側が最も深く円錐状に掘られている。ただ，南北方向の断面では，底面はそれほど高低差は見られない。皿は西側半分に偏って6枚出土しており，東側の端からはほぼ同一レベルで土器の破片が3点出土している。6枚の皿は西半分のほぼ中央に3枚を重ねたような形で置き，その東側に1枚，西側に2枚がまとめられずに，つまり分けた形で置かれている。1枚破損しているが，埋納の時点で割られたものかは不明である。SB01に接して検出されたこと，土坑内から出土した土師器のあり方から埋納遺構と考えられることなどを踏まえると，この建物を建てた際の地鎮を目的とした遺構と考えられる。

1180～1185は土師器の皿である。いずれも口径7.5～8cmの範囲におさまるもので，規格性が高い。底部は糸切り底である。


L=24.0m
L=24.0m
P13
P14
P15
P16
P17
P18
P30
P1
P2
P3
P4
P19
L=24.0m
P29
P11
P12
P5
P20
P10
L=24.0m
P28
P9
P8
P7
P6
P21
P27
P26
P25
P24
P23
P22
L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
2m
0

第218図　SB02

SB02（第218図）

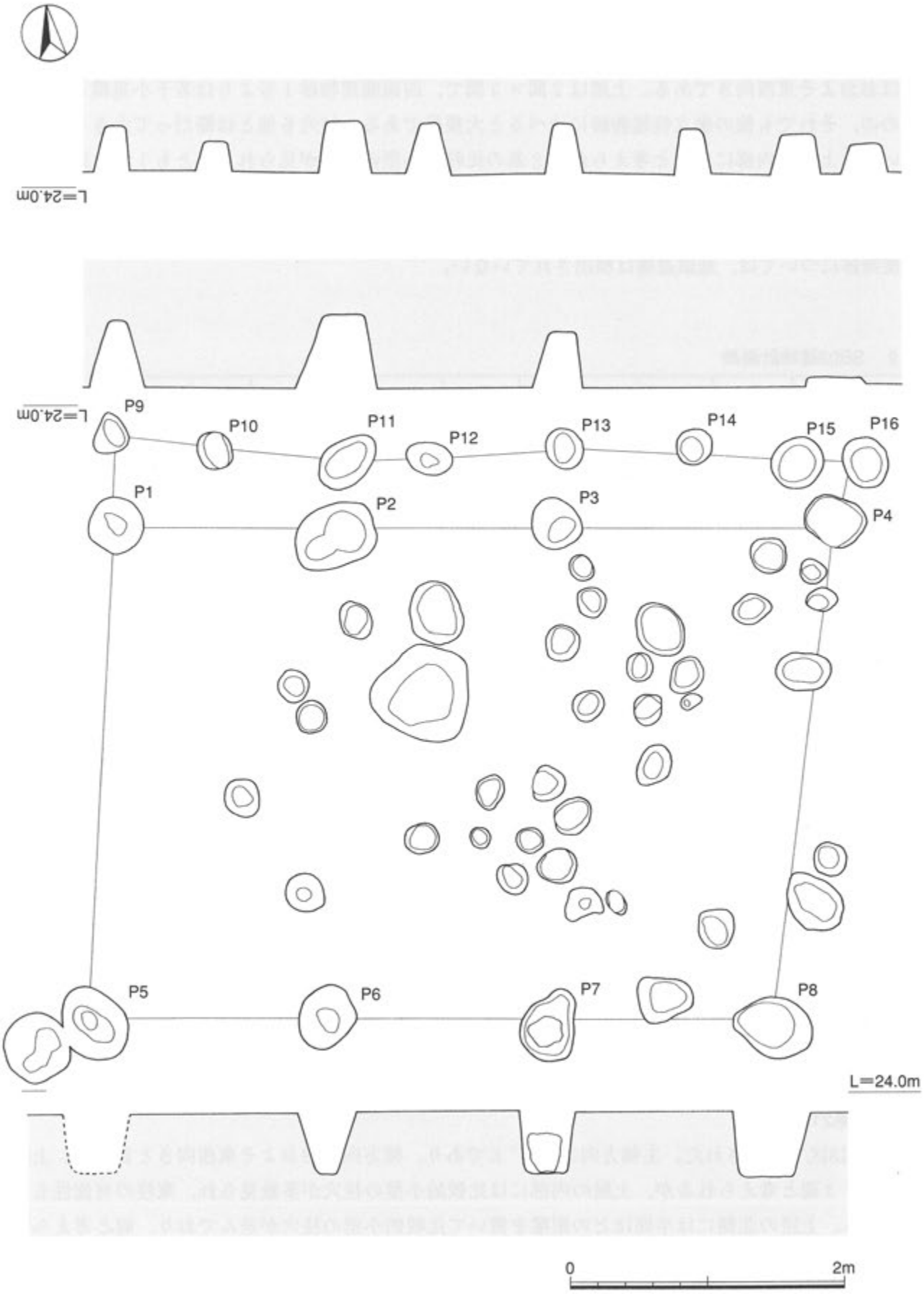
SB01の南東部，約30m離れたところのF-16区を中心に検出された。主軸方向はN16° Eで，棟方向はおおよそ東西向きである。上屋は2間×3間で，四面廂建物跡1号よりは若干小規模と言えるものの，それでも他の掘立柱建物跡に比べると大規模である。柱穴も他とは際だって大きく掘られている。上屋の内部に束柱と考えられる2基の比較的小型の柱穴が見られることも1号と類似している。また，上屋の周りに，半間ほどの距離を置いて若干小型の柱穴が見られることも同様であり，これもまた廂と考えられる。これらは4方向に巡っていることから，四面廂建物跡と判断できる。本建物跡については，地鎮遺構は検出されていない。

表9　SB02建物計測表

主軸方向	建物	桁行方向	桁間柱間 (cm)	桁間柱間 (尺) ※1尺=30.2cm	梁行方向	梁間柱間 (cm)	梁間柱間 (尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)
東西 N16° E	上屋	P1-P2	185	6.13	P1-P10	240	7.95	1	54	34	40
		P2-P3	185	6.13	P10-P9	100	3.31	2	60	40	40
		P3-P4	185	6.13	P1-P9	345	11.42	3	52	32	72
		P1-P4	555	18.38	P2-P11	187	6.19	4	54	26	62
		P6-P7	175	5.79	P11-P8	180	5.96	5	50	34	36
		P7-P8	165	5.46	P2-P8	370	12.25	6	34	16	41
		P8-P9	190	6.29	P3-P12	192	6.36	7	38	28	45
		P6-P9	530	17.55	P12-P7	180	5.96	8	36	24	43
		P10-P11	185	6.13	P3-P7	335	11.09	9	48	18	53
		P11-P12	185	6.13	P4-P5	220	7.28	10	38	22	28
		P12-P5	160	5.30	P5-P6	175	5.79	11	38	26	30
		P10-P5	530	17.55	P4-P6	395	13.08	12	46	20	50
	下屋	P13-P14	100	3.31	P13-P30	82	2.72	13	36	18	40
		P14-P15	170	5.63	P30-P29	175	5.79	14	36	20	30
		P15-P16	135	4.47	P29-P28	175	5.79	15	36	16	38
		P16-P17	200	6.62	P28-P27	105	3.48	16	32	22	40
		P17-P18	115	3.81	P13-P27	535	17.72	17	34	25	29
		P13-P18	720	23.84	P18-P19	85	2.81	18	36	22	30
		P27-P26	90	2.98	P19-P20	190	6.29	19	46	30	30
		P26-P25	190	6.29	P20-P21	185	6.13	20	36	26	41
		P25-P24	200	6.62	P21-P22	105	3.48	21	38	16	43
		P24-P23	155	5.13	P18-P22	565	18.71	22	36	22	45
		P23-P22	100	3.31				23	34	22	41
		P27-P22	735	24.34				24	28	16	44
	面積	床面積 (㎡)	最大値：41.5		床面積 (㎡)	最小値：38.52		25	38	24	44
								26	30	22	11
								27	40	28	33
		桁梁方向	(P18-P22)×（P22-P27)		桁梁方向	(P13-P18)×（P27-P13)		28	26	16	20
								29	32	20	35
								30	38	20	40

SB03（第219図）

E・F-18区で検出された。主軸方向はN 7° Eであり，棟方向はおおよそ東西向きと言える。上屋は1間×3間と考えられるが，上屋の内部には比較的小型の柱穴が多数見られ，束柱の可能性も考えられる。上屋の北側には半間ほどの距離を置いて比較的小型の柱穴が並んでおり，廂と考えられる。北側1列であることから，片廂の建物跡ということになる。また，この廂には廂と廂の間にも柱穴が見られることから，廂を支える束柱と思われる。


L=24.0m
L=24.0m
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
L=24.0m
0
2m

第219図　SB03

表10　SB03建物計測表

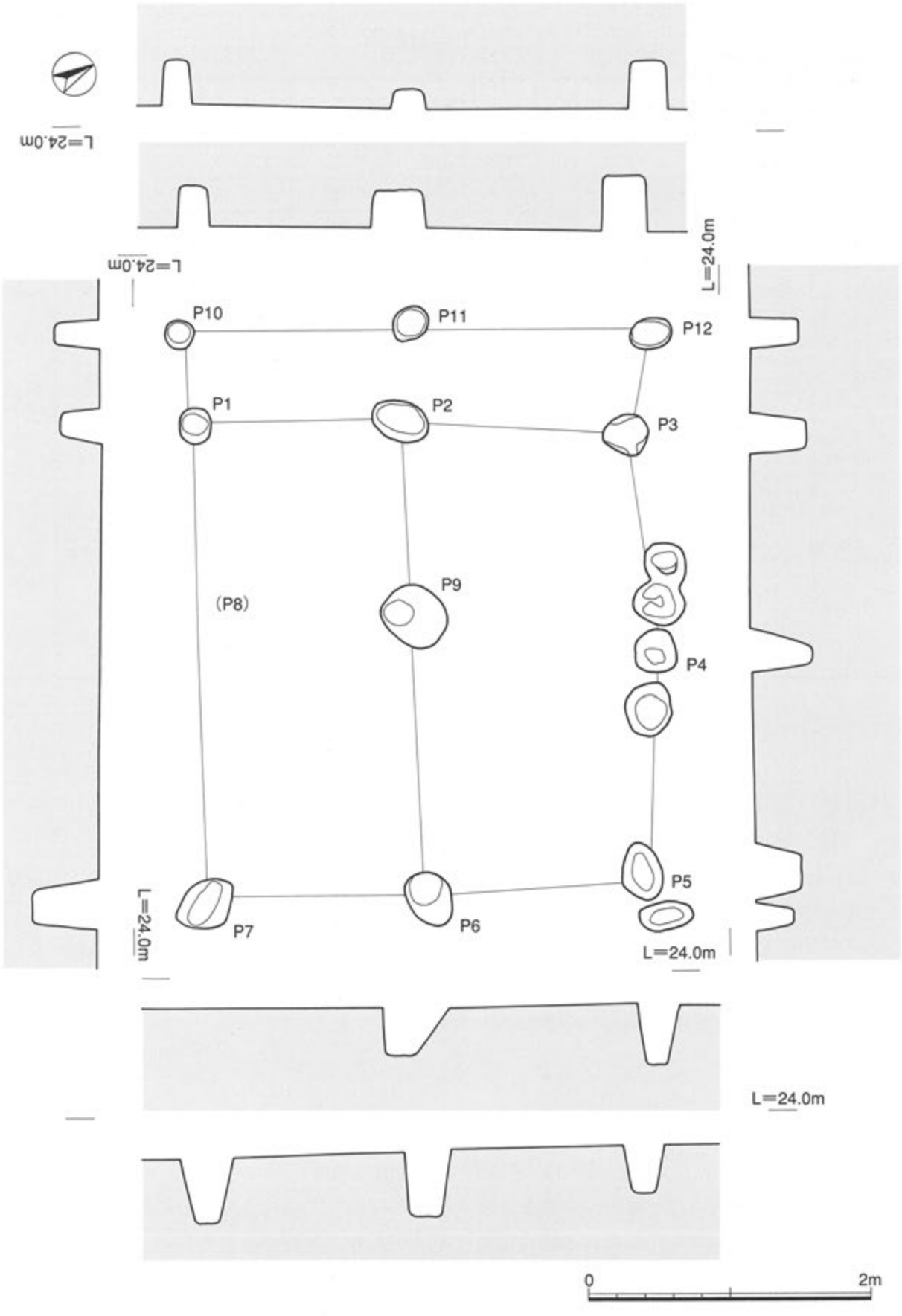
主軸方向	建物	桁行方向	桁間柱間 (cm)	桁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	建物	桁行方向	桁間柱間 (cm)	桁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	床面積 (㎡)	桁梁方向
東西 N7°E	上屋	P1-P2	150	4.97	下屋	P9-P10	65	2.15	1	60	30	75	最大値 19.25	(P5-P9) × (P9-P16)
		P2-P3	145	4.80		P10-P11	90	2.98	2	90	70	80		
		P3-P4	180	5.96		P11-P12	55	1.82	3	60	30	60		
		P1-P4	475	15.73		P12-P13	90	2.98	4	65	55	10		
		P5-P6	155	5.13		P13-P14	85	2.81	5	90	50	(60)		
		P6-P7	145	4.80		P14-P15	70	2.32	6	70	30	70		
		P7-P8	148	4.90		P15-P16	45	1.49	7	80	65	65		
		P5-P8	448	14.83		P9-P11	155	5.13	8	90	60	75		
						P11-P13	145	4.80	9	45	30	50	最小値 16.8	(P5-P8) × (P8-P16)
						P13-P15	155	5.13	10	45	40	35		
	建物	梁行方向	梁間柱間 (cm)	梁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	建物	梁行方向	梁間柱間 (cm)	梁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	11	75	50	60		
									12	50	15	55		
	上屋	P1-P5	325	10.76	下屋	P9-P1	60	1.99	13	45	30	55		
		P2-P6	320	10.60		P11-P2	55	1.82	14	40	25	50		
		P3-P7	330	10.93		P13-P3	50	1.66	15	60	45	50		
		P4-P8	330	10.93		P15-P4	80	2.65	16	55	35	35		

SB04（第220図）

F・G-17区で検出された。主軸方向はN22°Eで，棟方向はおおよそ南北向きと言える。上屋は2間×2間と考えられるが，周辺の柱穴で欠くものもある。このことについては，柱筋が整っていることからその所在を想定するのに支障はないと判断される。上屋の内部には柱穴が見られ，束柱と考えられる。上屋の西側に半間ほどの距離を置いて，若干小型の柱穴が1列に並んでいる様子が見られることから，廂と考えられ，片廂建物跡ということになる。

SB05（第222図）

C-14・15区で検出された。主軸方向はN22°Eであり，棟方向は概ね東西方向と言える。上屋は2間×4間で，一部に柱穴を欠く。柱穴自体の規模は他の掘立柱建物跡とほとんど変わることはない。上屋の内部には3基の柱穴が見られることから，形式上は総柱に見えるものの，梁間方向の柱筋が整っていないことから，これら3基の柱穴は束柱の痕跡と考える方がふさわしいように思える。上屋の北側には，半間の距離を置いて，上屋と同程度あるいはそれよりも若干小型の柱穴が1列に並んでおり，廂と考えられる。北側の1列にのみ見られることから片廂の建物跡ということになる。


L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
P10
P11
P12
P1
P2
P3
(P8)
P9
P4
P5
P7
P6
L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
0
2m

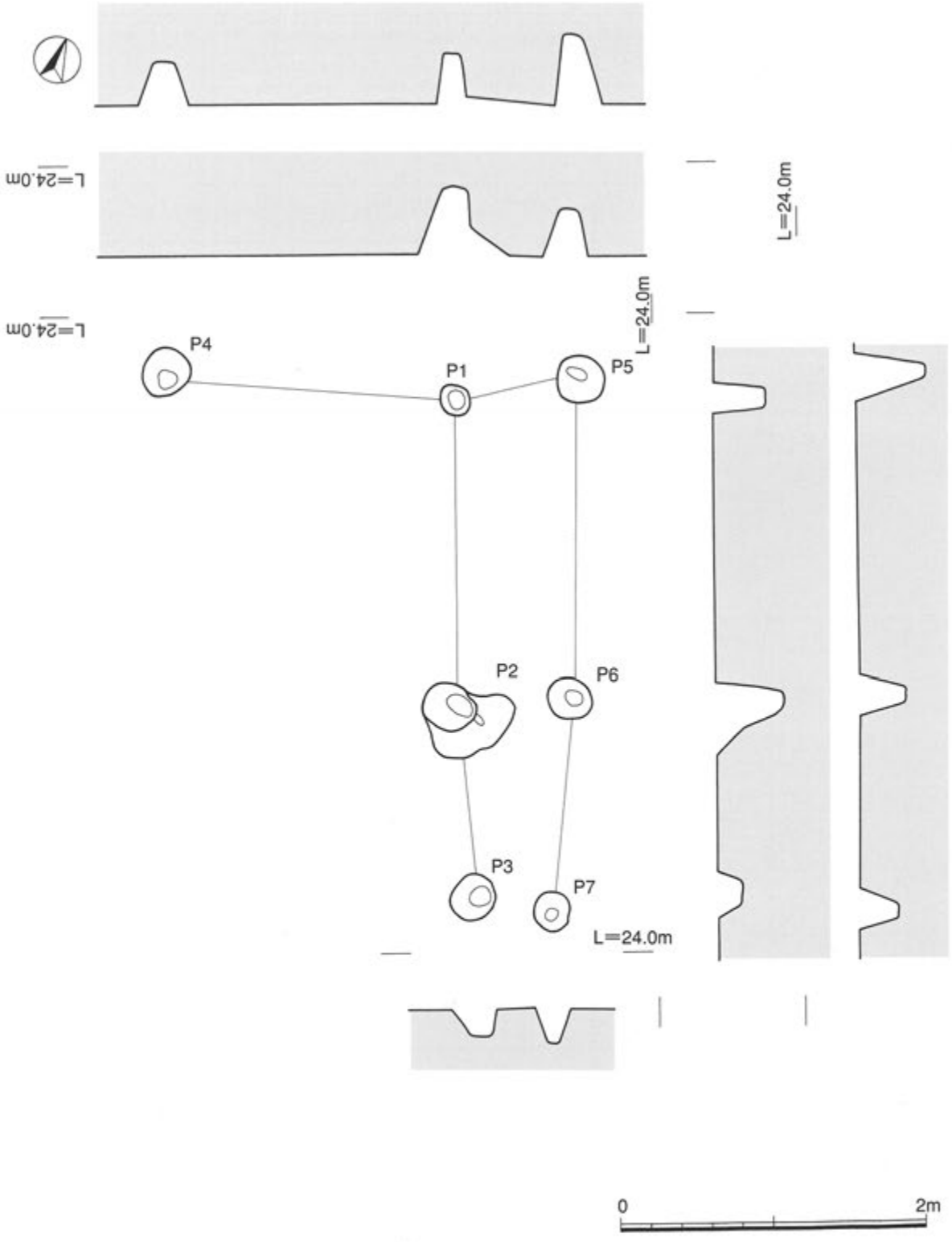
第220図　SB04

表11　SB04建物計測表

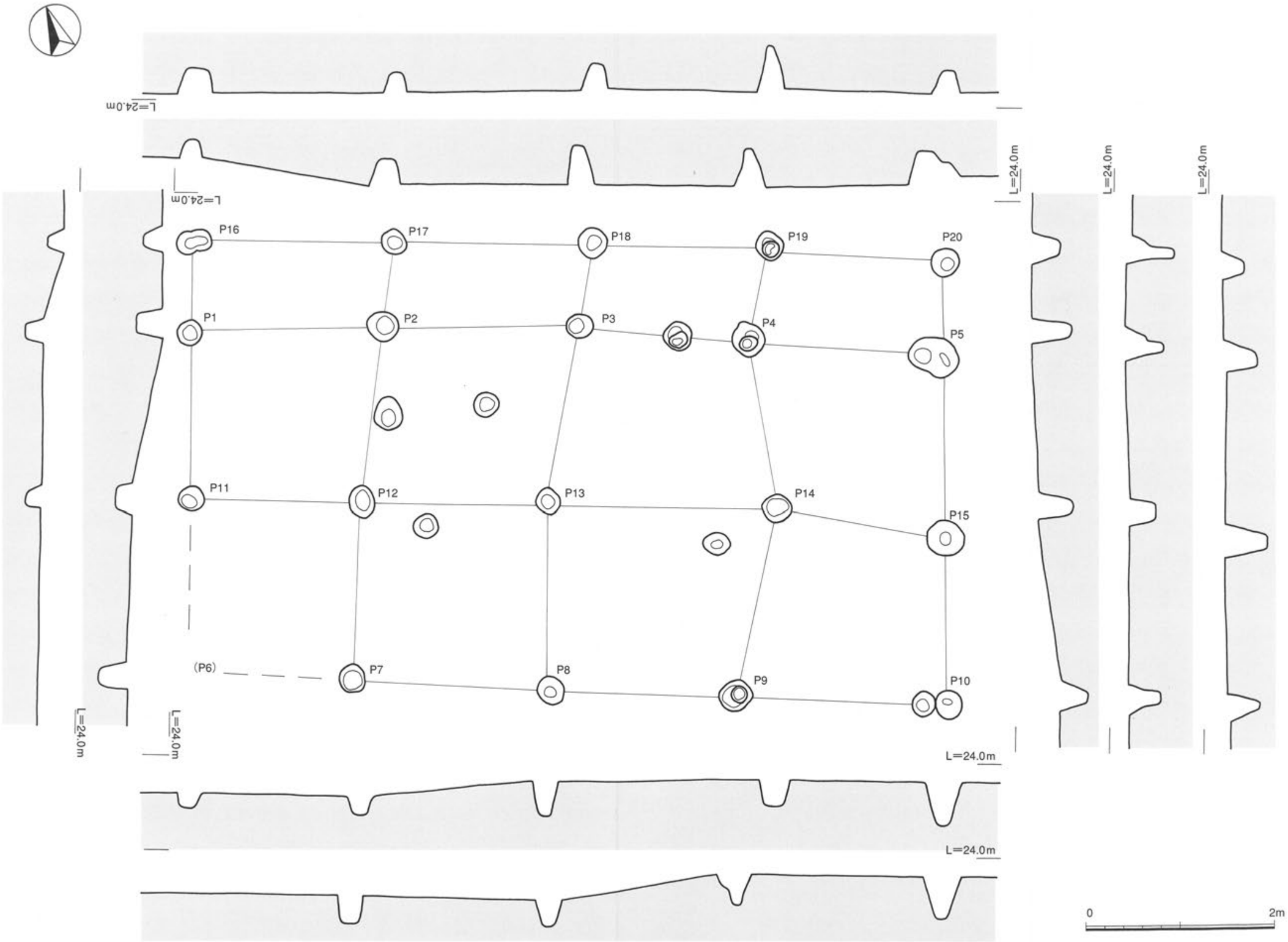
主軸方向	建物	桁行方向	桁間柱間(cm)	桁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	建物	梁行方向	梁間柱間(cm)	梁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
南北 N22° E	上屋	P1-P2	150	4.97	上屋	P1-(P8)	230	7.62	1	27	18	28
		P2-P3	160	5.30		(P8)-P7	300	9.93	2	42	36	27
		P1-P3	310	10.26		P1-P7	345	11.42	3	32	30	40
		P7-P6	160	5.30		P2-P9	140	4.64	4	30	16	42
		P6-P5	155	5.13		P9-P6	200	6.62	5	38	24	27
		P7-P5	315	10.43		P2-P6	160	5.30	6	41	22	48
		(P8)-P9	230	7.62		P3-P4	115	3.81	7	47	35	47
		P9-P4	190	6.29		P4-P5	215	7.12	(8)	-	-	-
		(P8)-P4	420	13.91		P3-P5	330	10.93	9	48	22	34
	下屋	P10-P11	165	5.46	下屋	P10-P1	65	2.15	10	22	15	32
		P11-P12	175	5.79		P11-P2	70	2.32	11	28	20	13
		P10-P12	340	11.26		P12-P3	75	2.48	12	30	28	35
	面積	床面積 (㎡)		最大値　13.94			床面積 (㎡)		最小値12.78			
		桁梁方向		(P7-P10)　×　(P10-P12)			桁梁方向		(P5-P7)　×　(P5-P12)			

表12　SB05建物計測表

主軸方向	建物	桁行方向	桁間柱間(cm)	桁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	建物	桁行方向	梁間柱間(cm)	梁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
東西 N22° E	上屋	P1-P2	210	6.95	下屋	P1-P11	180	5.96	1	28	15	18
		P2-P3	210	6.95		P11-(P6)	(180)	(5.96)	2	32	20	28
		P3-P4	185	6.13		P1-(P6)	(360)	(11.92)	3	28	18	42
		P4-P5	210	6.95		P2-P12	190	6.29	4	40	10	40
		P1-P5	815	26.99		P12-P7	190	6.29	5	55	15	36
		(P6)-P7	180	5.96		P2-P7	380	12.58	6	-	-	-
		P7-P8	210	6.95		P3-P13	190	6.29	7	30	20	30
		P8-P9	200	6.62		P13-P8	200	6.62	8	30	12	28
		P9-P10	225	7.45		P3-P8	390	12.91	9	34	20	34
		(P6)-P10	(810)	(26.82)		P4-P14	185	6.13	10	30	10	46
		P11-P12	185	6.13		P14-P9	200	6.62	11	28	15	15
		P12-P13	200	6.62		P4-P9	385	12.75	12	35	20	20
		P13-P14	245	8.11		P5-P15	195	6.46	13	30	15	38
		P14-P15	185	6.13		P15-P10	175	5.79	14	30	22	28
		P11-P15	815	26.99		P5-P10	370	12.25	15	40	14	46
	建物	梁行方向	梁間柱間(cm)	梁間柱間（尺） ※1尺=30.2cm	建物	梁行方向	梁間柱間(cm)	梁間柱間（尺） ※1尺=30.2cm	16	38	22	22
									17	30	16	20
	上屋	P16-P17	215	7.12	下屋	P16-P1	95	3.15	18	30	16	25
		P17-P18	215	7.12		P17-P2	90	2.98	19	30	14	48
		P18-P19	190	6.29		P18-P3	90	2.98	20	30	12	25
		P19-P20	190	6.29		P19-P4	100	3.31				
		P16-P20	810	26.82		P20-P5	100	3.31				
	面積	床面積 (㎡)	最大値：38.07		床面積 (㎡)		最小値：33.04					
		桁行方向	(P10-P20)×（P(6)-P10)		桁行方向		(P17-P20）×（P7-P17）＋ (P11-P16）×（P11-P12)					



第221図　SB06


P16
P17
P18
P19
P20
P1
P2
P3
P4
P5
P11
P12
P13
P14
P15
(P6)
P7
P8
P9
P10
L=24.0m
0
2m

第222図　SB05

SB06（第221図）

C-13区で検出された。遺構が道路下に潜り込んでいるために全体は不明である。全体像が不明であることから正確なことはわからないが，他の片廂建物跡の向き等から考えると，主軸方向は，N30° Eであると思われ，棟方向はおおよそ東西向きと考えられる。上屋は1間以上×2間以上あると見られ，最終的な規模は不明と言わざるを得ない。ただ，これでも柱間の間隔が棟方向で不均一であることから，道路下部分に別に柱穴があることも想定される。そうであっても北側には半間ほどの距離を置いて柱穴が並んでいることから，廂と考えられ，1列であることから片廂の建物跡と考えられる。

表13　SB06建物計測表

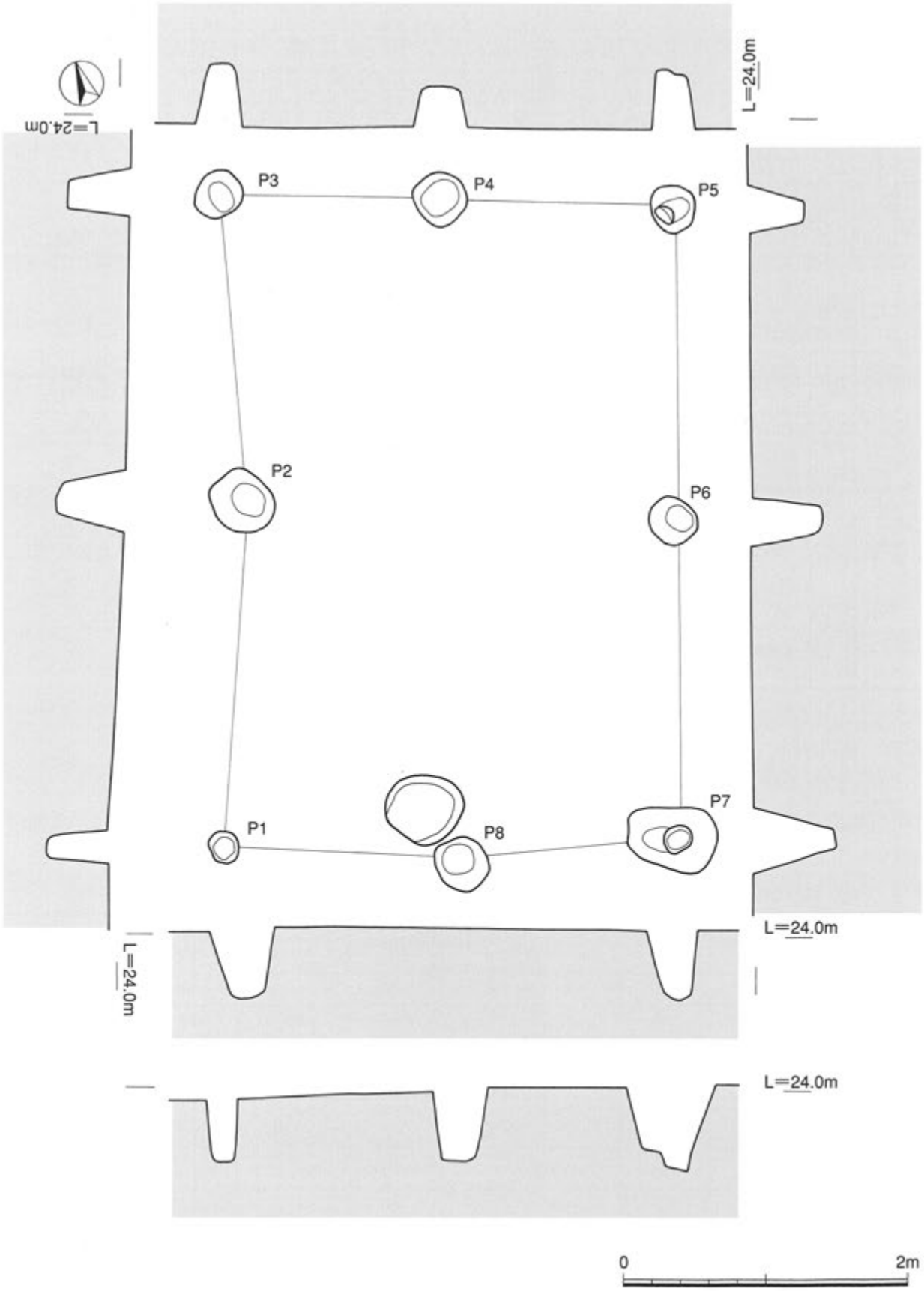
主軸方向	建物	桁行方向	桁間柱間 (cm)	桁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	建物	梁行方向	梁間柱間 (cm)	梁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
東西 N30° E	上屋	P1-P2	200	6.62	上屋	P1-P3	330	10.93	1	34	22	12
		P2-P3	130	4.30		P1-P4	90	2.98	2	46	48	12
	下屋	P5-P6	215	7.12	下屋	P5-P1	85	2.81	3	16	32	14
		P6-P7	195	6.46		P6-P2	75	2.48	4	30	34	13
		P5-P7	410	13.58		P7-P3	50	1.66	5	48	34	14
	面積	床面積 (㎡)	最大値　7.18		桁梁方向		(P4-P5)　×　(P5-P7)		6	30	30	13
									7	24	27	8
		床面積 (㎡)	最小値　1.67		桁梁方向		(P1-P3)　×　(P3-P7)					

SB07（第223図）

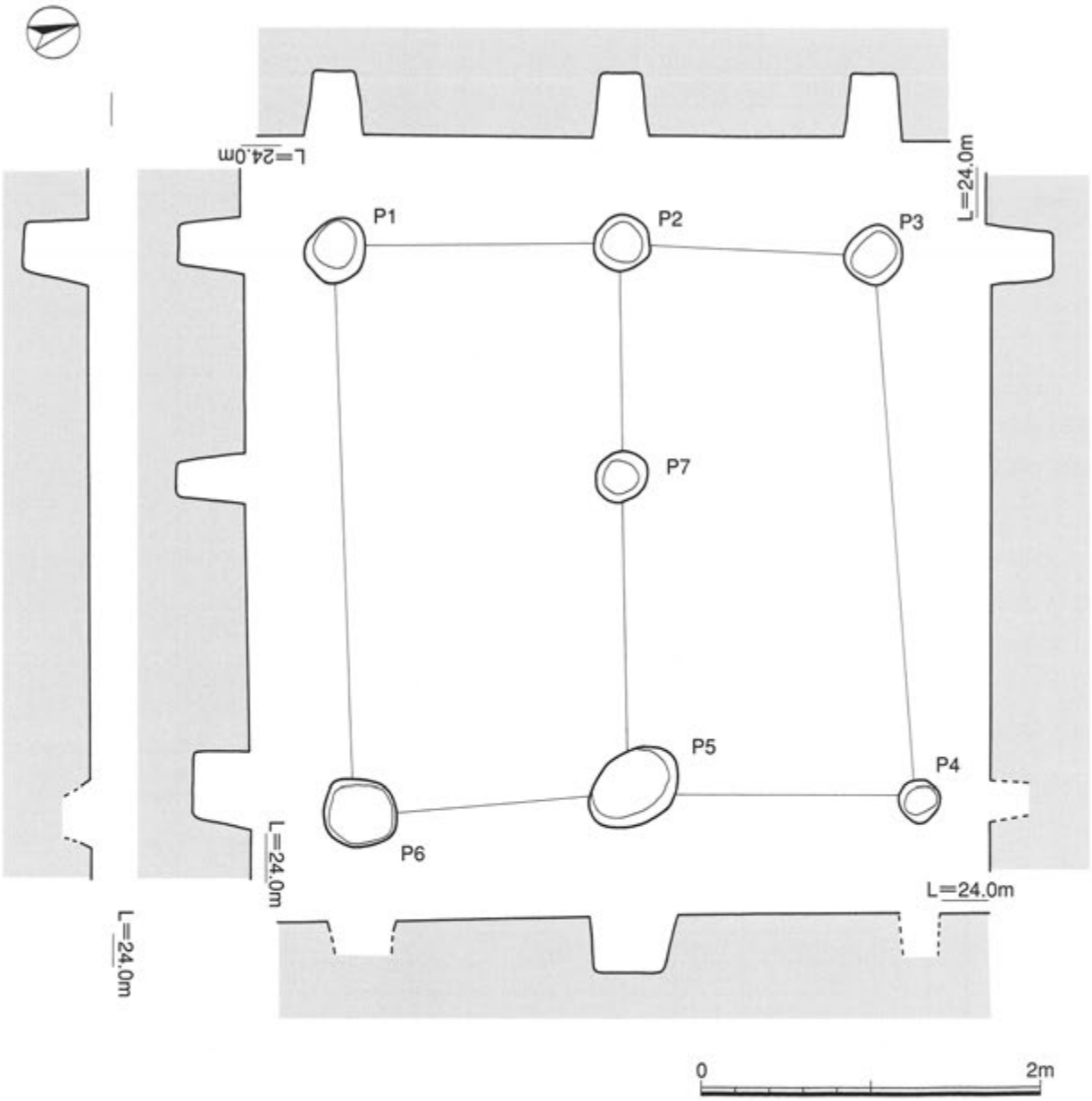
D-17・18区で検出された。主軸方向はN15° Eで，棟方向はおおよそ南北方向と言える。2間×2間の規模であるが，柱間は南北方向が長く，東西方向は短い。平面的な広さとしては，2間×3間程の広さと同程度に見える。

表14　SB07建物計測表

主軸方向	方向	桁行方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	方向	柱穴番号	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	床面積 (㎡)	桁梁方向
南北 N15° E	桁行	P1-P2	245	8.11	梁行	P1-P8	165	5.46	最大値 14.95	(P1-P3) × (P3-P5)
		P2-P3	215	7.12		P8-P7	160	5.30		
		P1-P3	460	15.23		P1-P7	325	10.76		
		P8-P4	470	15.56		P2-P6	305	10.10		
		P7-P6	225	7.45		P3-P4	155	5.13		
		P6-P5	220	7.28		P4-P5	170	5.63		
		P7-P5	445	14.74		P3-P5	325	10.76	最小値 14.46	(P5-P7) × (P7-P1)
	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)		
	1	50	24	14	5	42	35	25		
	2	48	48	27	6	48	36	20		
	3	43	35	22	7	56	46	15		
	4	29	40	27	8	52	40	23		



第223図　SB07



第224図　SB08

SB08（第224図）

E・F-18・19区で検出された。主軸方向はN10°Eで，棟方向はどちらかと言えば東西方向と言える。2間×1間の規模であるが，柱間が東西方向と南北方向で大きな差異があることと，内部のほぼ中央部に柱穴が1基見られることから，2間×2間ほどの広さと同程度と言える。本建物跡の内部を中心として硬化面が見られたこは特筆に値すると考えられる。これが版築に当たるかどうか

表15　SB08建物計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
東西 N10°E	桁行	P1-P2	170	5.63	1	40	40	28
		P2-P3	150	4.97	2	38	34	25
		P1-P3	320	10.60	3	40	35	28
		P6-P5	160	5.30	4	(30)	26	20
		P5-P4	175	5.79	5	33	60	49
		P6-P4	335	11.09	6	34	44	37
	梁行	P1-P6	335	11.09	7	40	34	20
		P2-P7	140	4.64	床面積（㎡）	最大値：11.22		最小値：10.4
		P7-P5	185	6.13				
		P2-P5	325	10.76	桁梁方向	(P4-P6)×(P6-1)		(P1-P3)×(P3-P4)
		P3-P4	325	10.76				

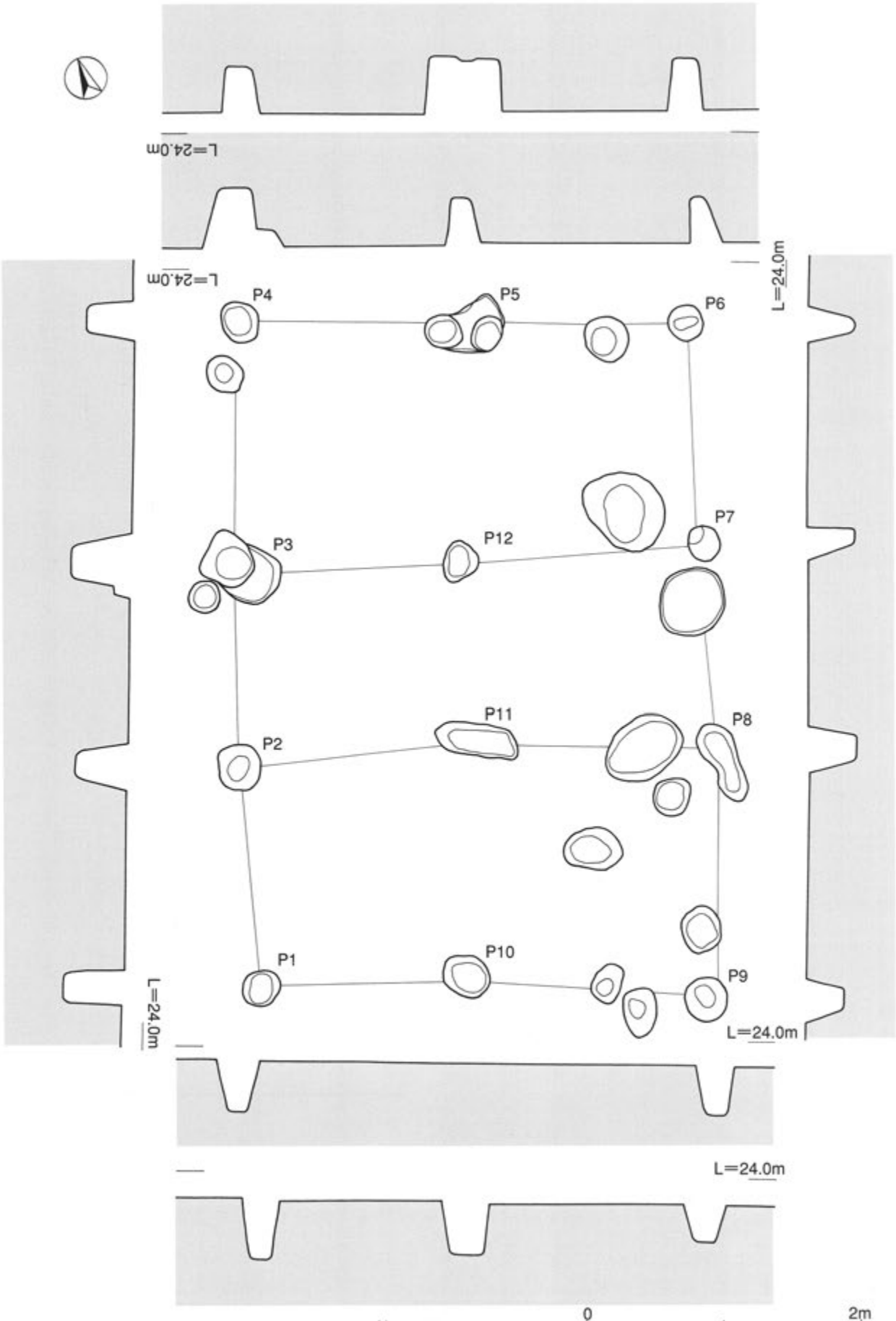
は明確にはしえなかった。

SB09（第225図）

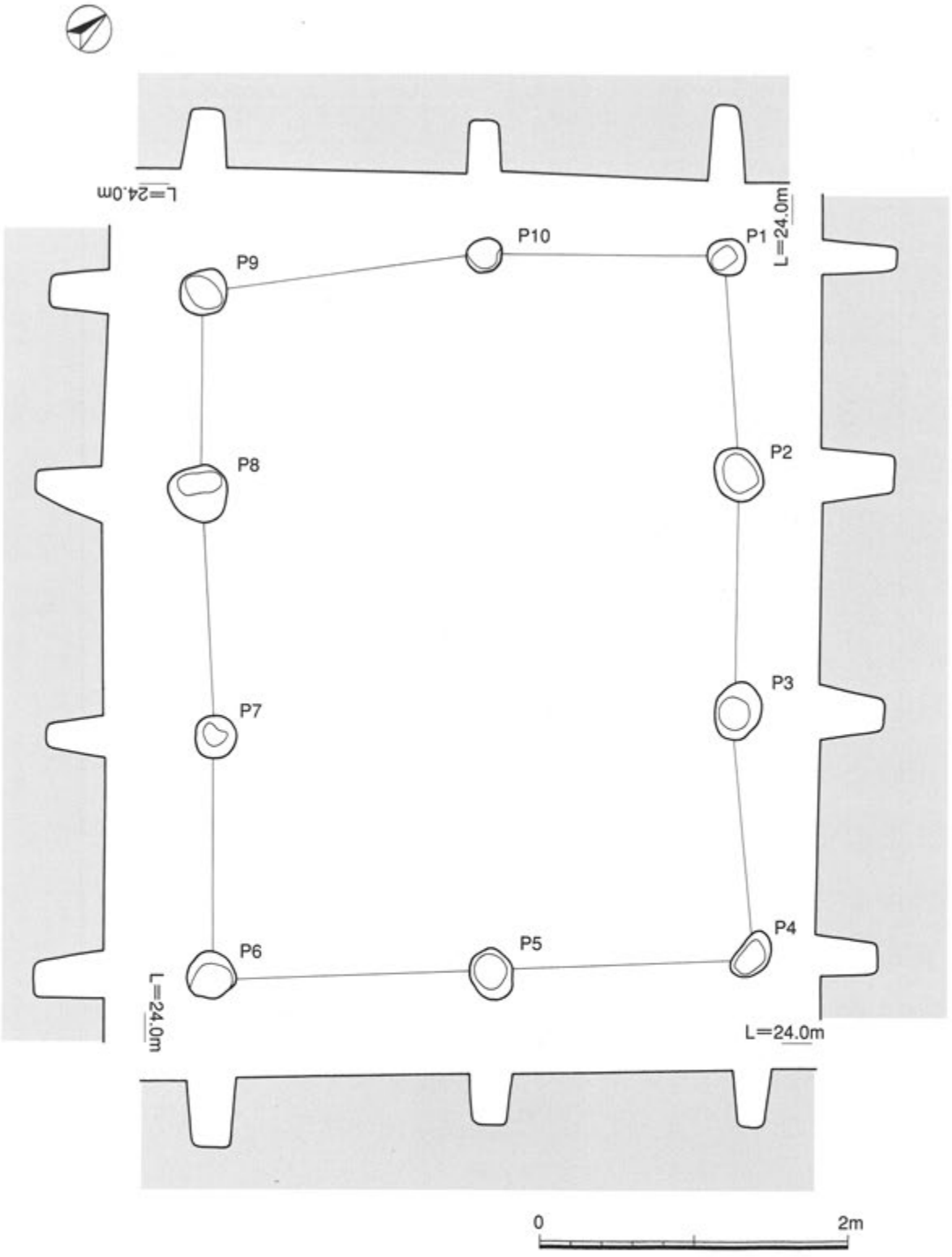
F・G-17・18区で検出された。主軸方向はN8°Eで，棟方向はおおよそ南北方向と言える。2間×3間の規模で，内部には多くの柱穴が見られるほか，主柱と思われる柱穴の周囲にも別な柱穴や2基が複合したようなものも見られることから，建て替えや補強も考えられる。内部の2基の柱穴は柱筋が揃っており，総柱建物跡の可能性が考えられる。

表16　SB09建物計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
南北 N8°E	桁行	P1-P2	165	5.46	1	44	28	21
		P2-P3	150	4.97	2	40	32	18
		P3-P4	180	5.96	3	45	60	45
		P1-P4	495	16.39	4	36	32	20
		P10-P11	175	5.79	5	44	60	54
		P11-P12	135	4.47	6	40	24	18
		P12-P5	175	5.79	7	35	24	10
		P10-P5	485	16.06	8	36	62	45
		P9-P8	185	6.13	9	28	30	15
		P8-P7	155	5.13	10	38	35	25
		P7-P6	155	5.13	11	35	62	48
		P9-P6	495	16.39	12	35	30	22
	梁行	P1-P10	155	5.13	床面積（㎡）		桁行方向	
		P10-P9	175	5.79				
		P1-P9	330	10.93	最大値：17.57		(P1-P4)×(P2-P8)	
		P2-P11	180	5.96				
		P11-P8	175	5.79				
		P2-P8	355	11.75				
		P3-P12	170	5.63				
		P12-P7	175	5.79	最小値：16.34		(P1-P9)×(P6-P9)	
		P3-P7	345	11.42				
		P4-P5	170	5.63				
		P5-P6	165	5.46				
		P4-P6	335	11.09				


L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
0
2m

第225図　SB09



第226図　SB10

SB10（第226図）

C・D-13・14区で検出された。主軸方向はN60°Wで，棟方向はおおよそ東西方向と言える。2間×3間の規模で，内部にも柱穴が見られる。柱筋は若干歪んでいる。総柱と言うよりは，束柱である可能性が大きいように感じられる。

表17　SB10建物計測表

主軸方向	方向	柱間方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
東西 N74° E	桁行	P1-P2	140	4.64	1	48	37	18
		P2-P3	155	5.13	2	48	36	25
		P3-P4	160	5.30	3	45	39	21
		P1-P4	485	16.06	4	39	34	23
		P10-P5	470	15.56	5	34	34	23
		P9-P8	130	4.30	6	46	32	28
		P8-P7	160	5.30	7	38	30	15
		P7-P6	160	5.30	8	42	38	28
		P9-P6	315	10.43	9	38	32	27
	梁行	P1-P10	160	5.30	10	34	23	20
		P10-P9	190	6.29	床面積（㎡）		桁梁方向	
		P1-P9	350	11.59				
		P2-P8	360	11.92	最大値：16.98		(P1-P4)×（P9-P1)	
		P3-P7	340	11.26				
		P4-P5	170	5.63				
		P5-P6	185	6.13	最小値：10.24		(P4-P6)×（P6-P9)	
		P4-P6	325	10.76				

SB11（第227図）

G-16・17区で検出された。用地外の崩壊防止のための区域に潜り込んでいたため，全体像は不明である。主軸方向はN28° Eで，棟方向はおおよそ南北方向と言えるが，若干歪んでいることは否定できない。2間×2間以上と見られるが，他の同様な建物跡の規模から考えると2間×3間ではないかと思われる。

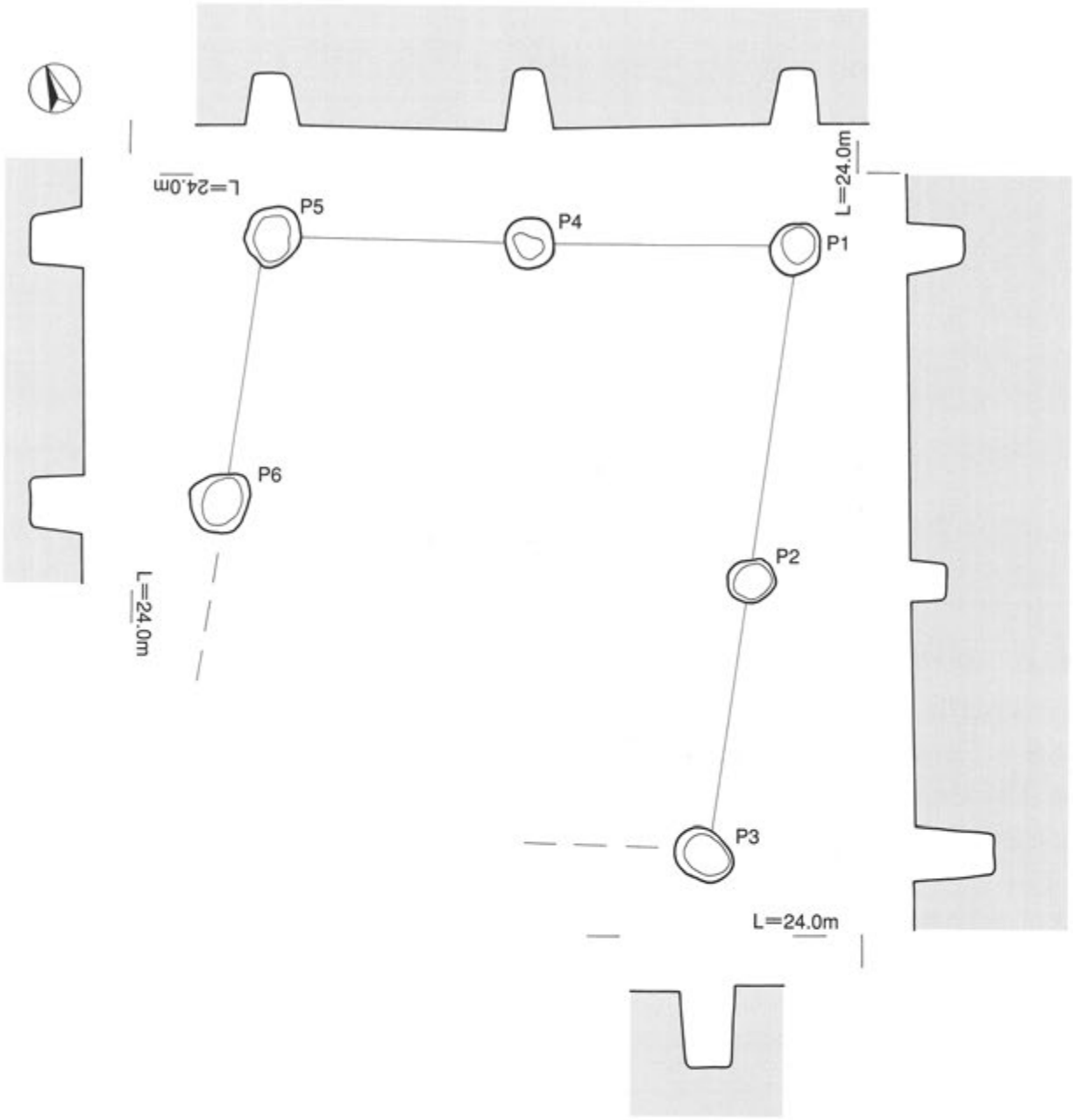
表18　SB11建物計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	床面積 (㎡)	桁行方向
南北 N28° E	桁行	P1-P2	200	6.62	1	34	34	22	最大値 12.03	(P2-P4) × (P4-P6)
		P2-P3	170	5.63	2	22	30	22		
		P1-P3	370	12.25	3	49	37	28		
	梁行	P1-P4	165	5.46	4	37	32	20		
		P4-P5	160	5.30	5	32	37	29	最小値 5.36	(P1-P2) × (P2-P4)
		P1-P5	325	10.76	6	30	41	31		
		P2-P6	330	10.93						

SB12（第228・229図）

F-15区で検出された。主軸方向はN80° Wで，棟方向はおおよそ東西方向と言える。2間×3間の規模で，内部には多数の柱穴が見られるものの，本建物跡に付随するものとは考えにくい。柱穴の埋土から遺物が出土している。

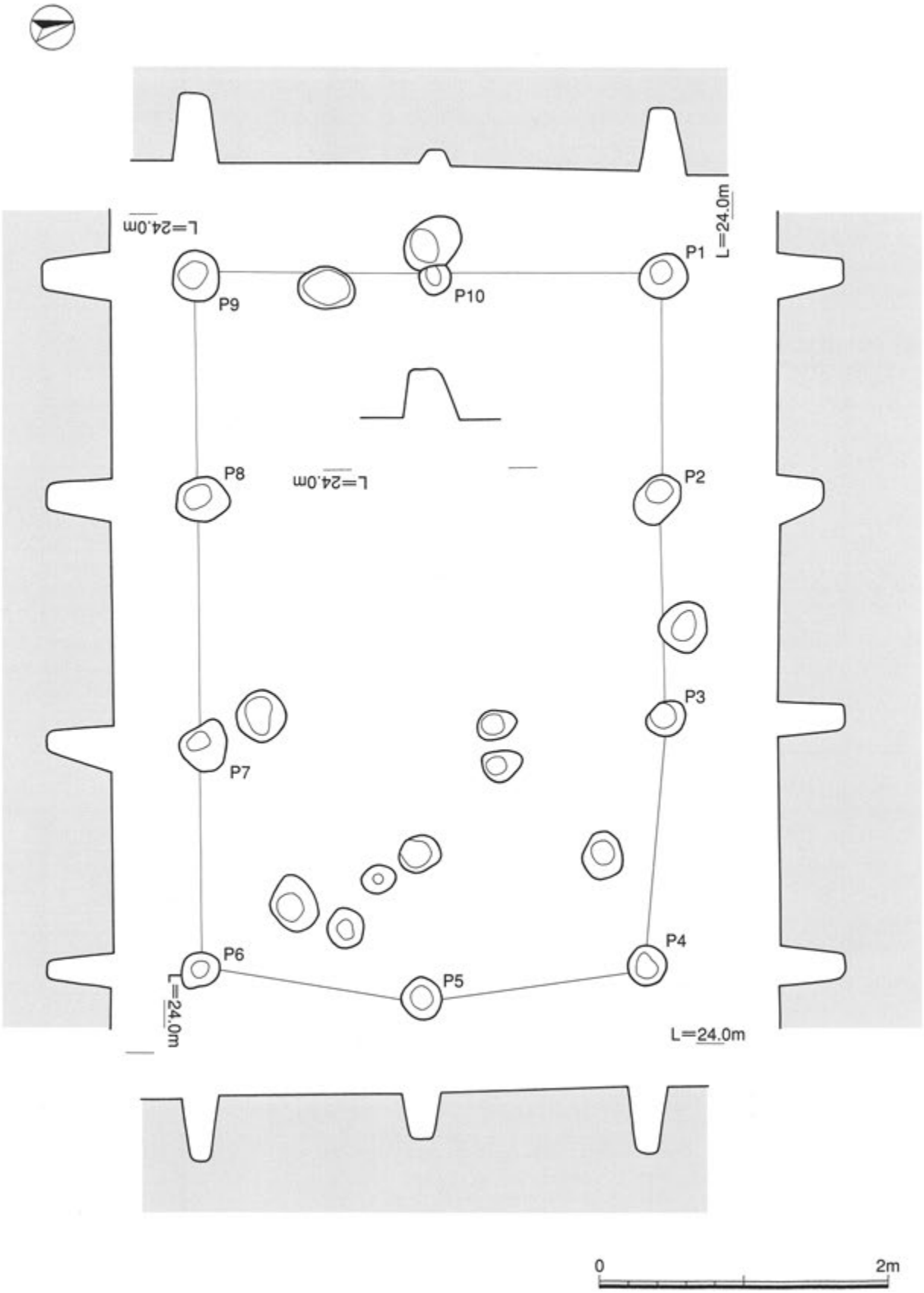
1186・1187は土師器甕である。1186は外面はナデ調整で，内面は横位のヘラケズリが行われている。1187は外面が斜位のハケ目調整で，内面は縦位のヘラケズリである。1188～1190は土師器の皿である。1188は復元口径7.6cm，1189が8.8cm，1190が8.0cmを測る。いずれも底部は糸切り底である。



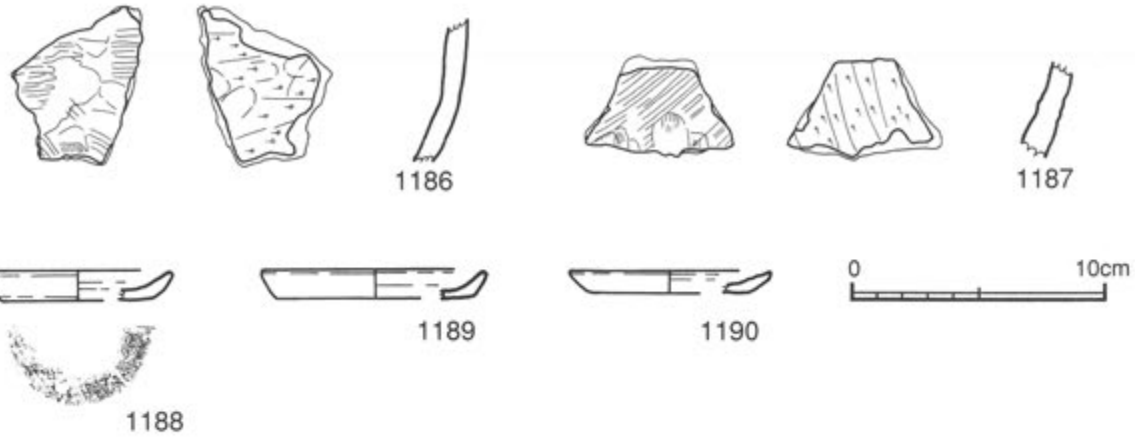
第227図　SB11

SB13（第230図）

C・D-13・14区で検出された。主軸方向はN60°Wで，棟方向はおおよそ東西方向と言える。2間×3間の規模で，内部にも柱穴が見られるものの，柱筋は若干歪んでいる。そのため，総柱として捉えるべきかについては，躊躇を覚える。東柱の可能性の方が大きいようにも思える。注目されるのは，内部に貝殻が詰まったピットであるSKP02・03が建物内部に位置することである。本建物は中世で扱ったため，古代に帰属するSKPとは時期が異なるが，建物の帰属時期に明確な根拠があるわけではなく，検討の余地を含んでいる。



第228図　SB12



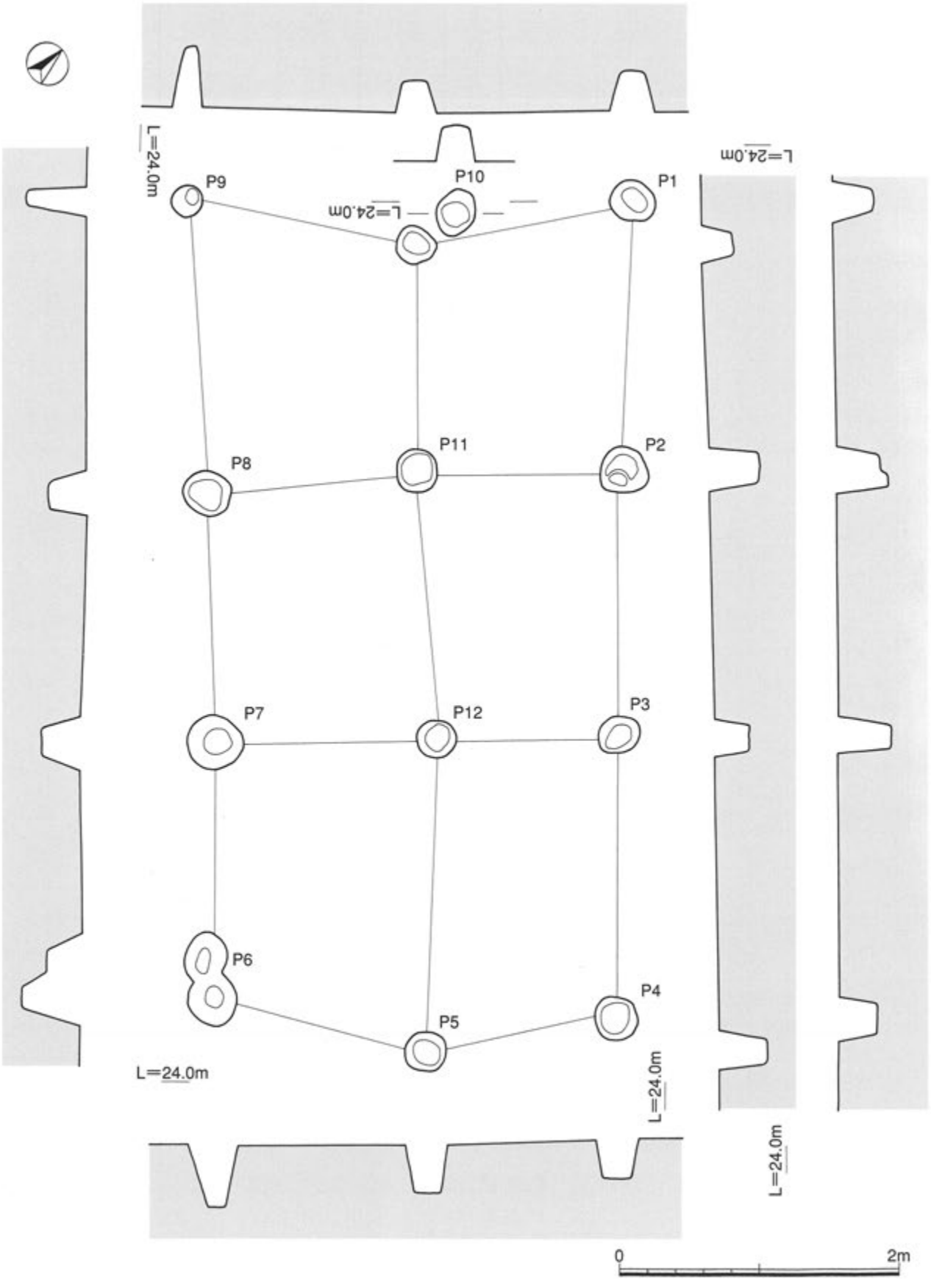
第229図　SB12出土遺物

表19　SB12建物計測表

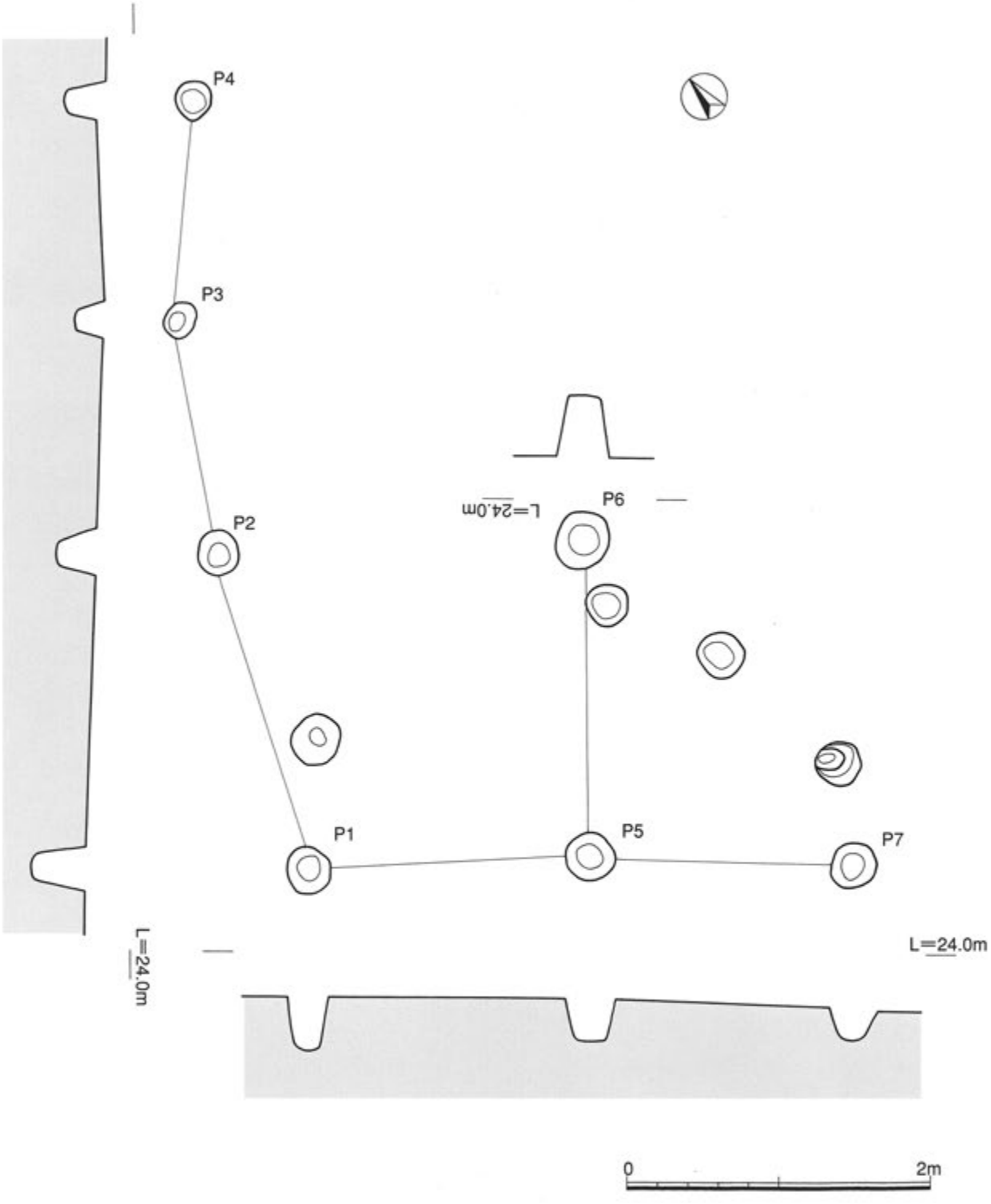
主軸方向	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
東西 N80° W	桁行	P1-P2	160	5.30	1	45	32	16
		P2-P3	170	5.63	2	30	38	18
		P3-P4	155	5.13	3	47	30	16
		P1-P4	485	16.06	4	46	28	17
		(P10)-P5	510	16.89	5	32	30	16
		P9-P8	180	5.96	6	46	30	12
		P8-P7	160	5.30	7	46	36	16
		P7-P6	155	5.13	8	45	37	18
		P9-P6	495	16.39	9	48	36	20
	梁行	P1-(P10)	155	5.13	10a	10	20	13
		P10-P9	160	5.30	10b	32	45	25
		P1-P9	315	10.43	床面積（㎡）		桁梁方向	
		P2-P8	325	10.76				
		P3-P7	320	10.60	最大値：16.09		(P4-P6)×（P6-P9)	
		P4-P5	165	5.46				
		P5-P6	160	5.30	最小値：15.28		(P1-P4)×（P9-P1)	
		P4-P6	325	10.76				

表20　SB13建物計測表

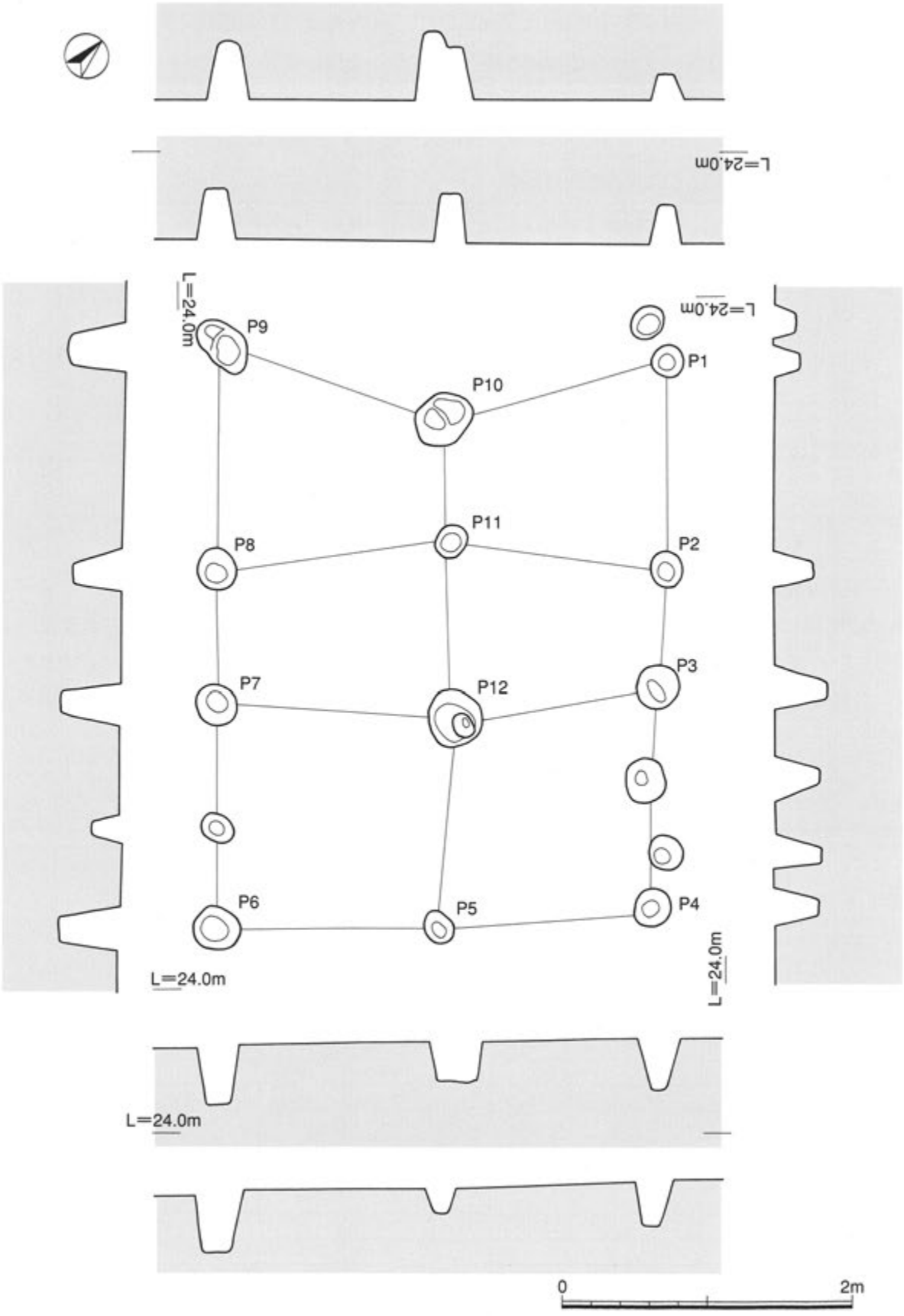
主軸方向	方向	柱穴方向	梁間柱間 (cm)	梁間柱間　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)
東西 N60° W	桁行	P1-P2	200	6.62	1	30	32	20
		P2-P3	200	6.62	2	38	36	28
		P3-P4	200	6.62	3	25	30	20
		P1-P4	600	19.87	4	28	22	30
		P10-P11	170	5.63	5	35	28	20
		P11-P12	200	6.62	6	44	65	44
		P12-P5	230	7.62	7	28	40	20
		P10-P5	600	19.87	8	30	32	22
		P9-P8	220	7.28	9	44	24	12
		P8-P7	180	5.96	10	36	30	20
		P7-P6	185	6.13	11	36	30	22
		P9-P6	585	19.37	12	36	25	20
	梁行	P1-P10	165	5.46	床面積（㎡）		桁行方向	
		P10-P9	165	5.46				
		P1-P9	330	10.93				
		P2-P11	145	4.80				
		P11-P8	150	4.97	最大値：19.8		(P1-P4)×（P1-P9)	
		P2-P8	295	9.77				
		P3-P12	130	4.30				
		P12-P7	160	5.30				
		P3-P7	290	9.60				
		P4-P5	140	4.64	最小値：19.31		(P4-P6)×（P6-P9)	
		P5-P6	160	5.30				
		P4-P6	300	9.93				


P9
P10
P1
P8
P11
P2
P7
P12
P3
P6
P5
P4
L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
0
2m

第230図　SB13



第231図　SB14


L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
P9
P10
P1
P11
P8
P2
P7
P12
P3
P6
P5
P4
L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
0
2m

第232図　SB15

SB14（第231図）

B・C-13・14区で検出された。主軸方向はN36° Eで，棟方向はおおよそ南北方向と言える。道路の下部に潜り込んでいたため全体像は不明であるが，2間×3間かそれ以上の規模であると考えられる。柱穴の並びから見ると，若干歪んでいると考えられる。内部に柱穴が若干見られるほかに大型の土坑もあるが，後者については本建物跡に付随しない可能性の方が大きい。

表21　SB14建物計測表

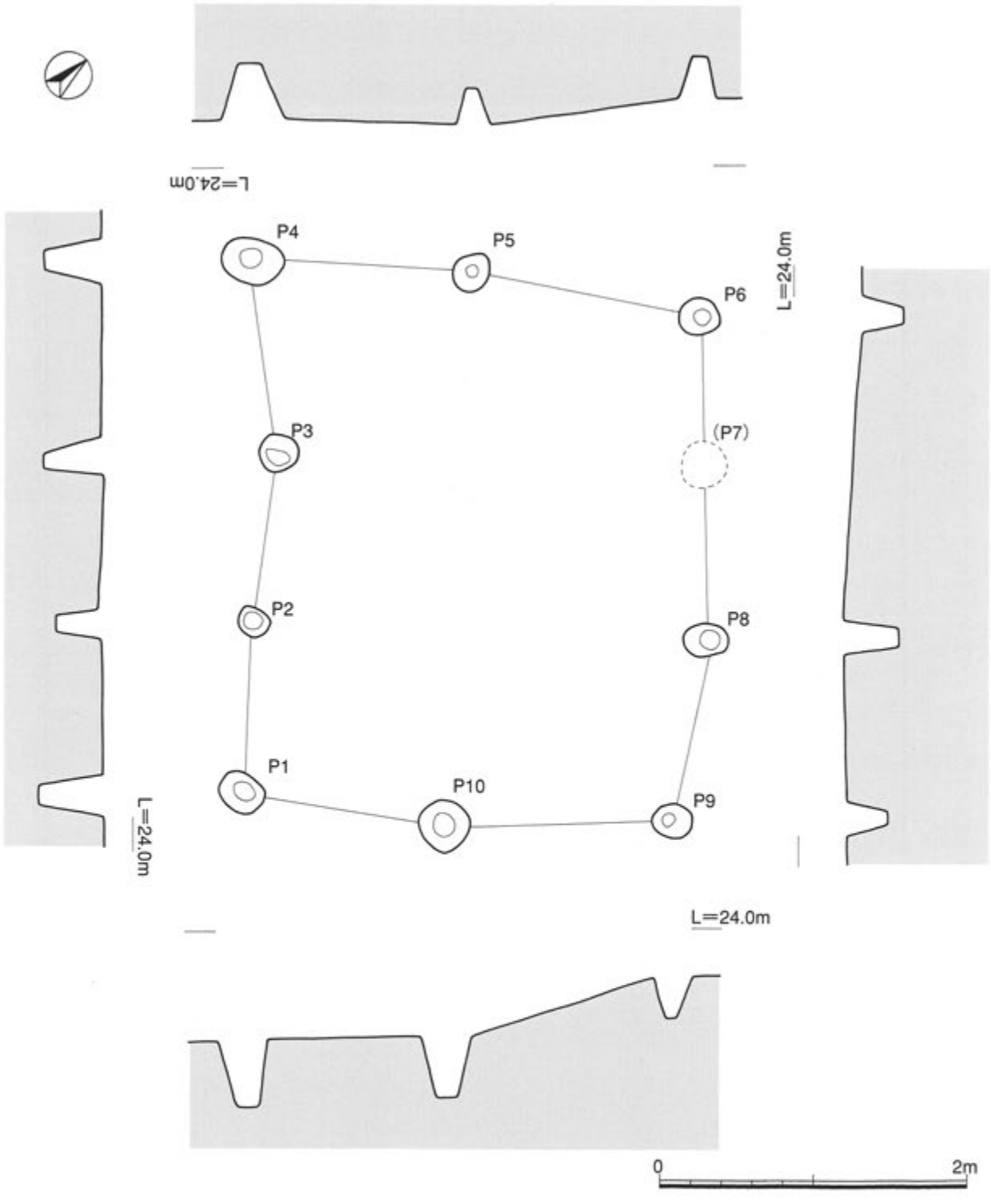
主軸方向	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離 (尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	床面積 (㎡)	桁行方向
南北 N36° E	桁行	P1-P2	215	7.12	1	38	32	15	最大値 (18.98)	(P1- P4) × (P1- P7)
		P2-P3	245	8.11	2	28	30	15		
		P3-P4	145	4.80	3	20	24	10		
		P1-P4	520	17.22	4	25	25	15		
		P5-P6	210	6.95	5	28	34	20		
	梁行	P1-P5	190	6.29	6	42	40	20		
		P5-P7	175	5.79	7	22	30	18		
		P1-P7	365	12.09						
		P2-P6	245	8.11						

SB15（第232図）

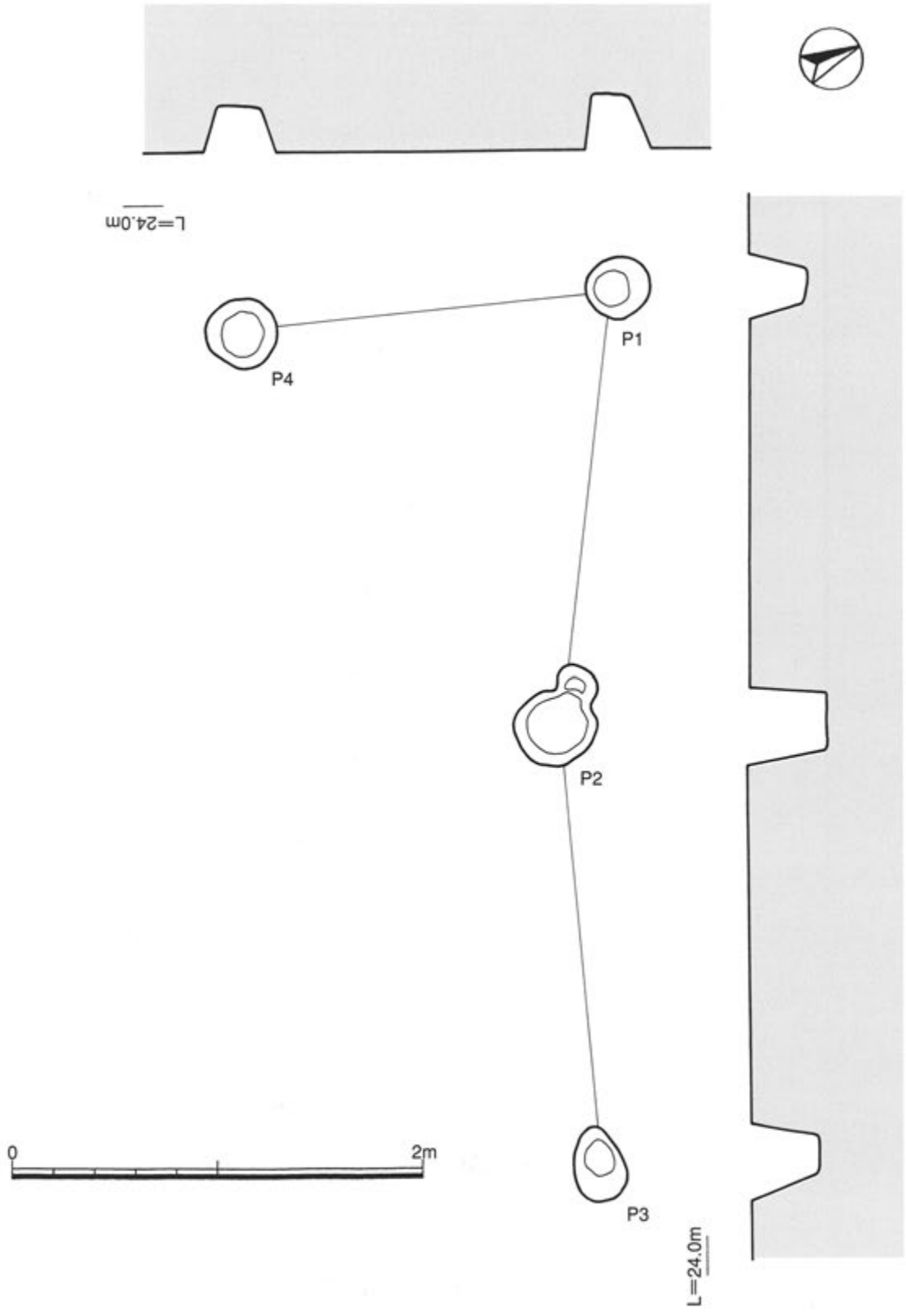
SB13と同様にC・D-13・14区で検出された。主軸方向はN60° Wで，棟方向はおおよそ東西方向と言える。2間×3間の規模で，内部にも柱穴が見られる。柱筋は若干歪んでいる。総柱と言うよりは，束柱である可能性が大きいように感じられる。

表22　SB15建物計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離 (尺) ※1尺=30.2cm	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離 (尺) ※1尺=30.2cm	床面積 (㎡)	桁行方向
東西 N60° W	桁行	P1-P2	145	4.80	梁行	P1-P10	160	5.30	最大値 (13.53)	(P1- P9) × (P6- P9)
		P2-P3	85	2.81		P10-P9	170	5.63		
		P3-P4	150	4.97		P1-P9	330	10.93		
		P1-P4	380	12.58		P2-P11	150	4.97		
		P10-P11	90	2.98		P11-P8	165	5.46		
		P11-P12	130	4.30		P2-P8	315	10.43		
		P12-P5	145	4.80		P3-P12	145	4.80		
		P10-P5	365	12.09		P12-P7	165	5.46		
		P9-P8	160	5.30		P3-P7	310	10.26		
		P8-P7	90	2.98		P4-P5	150	4.97		
		P7-P6	160	5.30		P5-P6	155	5.13	最小値 (11.59)	(P1- P4) × (P4- P6)
		P9-P6	410	13.58		P4-P6	305	10.10		
	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)		
	1	18	22	12	7	42	28	14		
	2	28	25	15	8	34	30	12		
	3	38	30	16	9	40	33	22		
	4	30	25	12	10	48	40	28		
	5	16	20	10	11	34	22	12		
	6	40	32	18	12	28	42	25		



第233図　SB16



第234図　SB17

SB16（第233図）

C-14区のSB05・SB15に挟まれるように検出された。主軸方向はN22° Eであり，棟方向は概ね東西方向と言える。規模は2間×3間で，柱筋は若干歪んでいる。

表23　SB16建物計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	床面積 (㎡)	桁行方向
東西 N22° E	桁行	P1-P2	115	3.81	梁行	P1-P10	135	4.47	最大値 10.65	(P1-P4) × (P4-P6)
		P2-P3	110	3.64		P10-P9	145	4.80		
		P3-P4	130	4.30		P1-P9	280	9.27		
		P1-P4	355	11.75		P2-P8	300	9.93		
		P10-P5	315	10.43		P3-(P7)	280	9.27		
		P9-P8	125	4.14		P4-P5	145	4.80		
		P8-(P7)	115	3.81		P5-P6	155	5.13		
		(P7)-P6	100	3.31		P4-P6	300	9.93		
		P9-P6	340	11.26					最小値 9.52	(P1-P9) × (P6-P9)
	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)		
	1	44	32	14	6	28	26	12		
	2	30	18	10	7	-	(30)	-		
	3	40	24	10	8	36	30	10		
	4	38	42	12	9	25	28	10		
	5	24	24	8	10	40	36	14		

SB17（第234図）

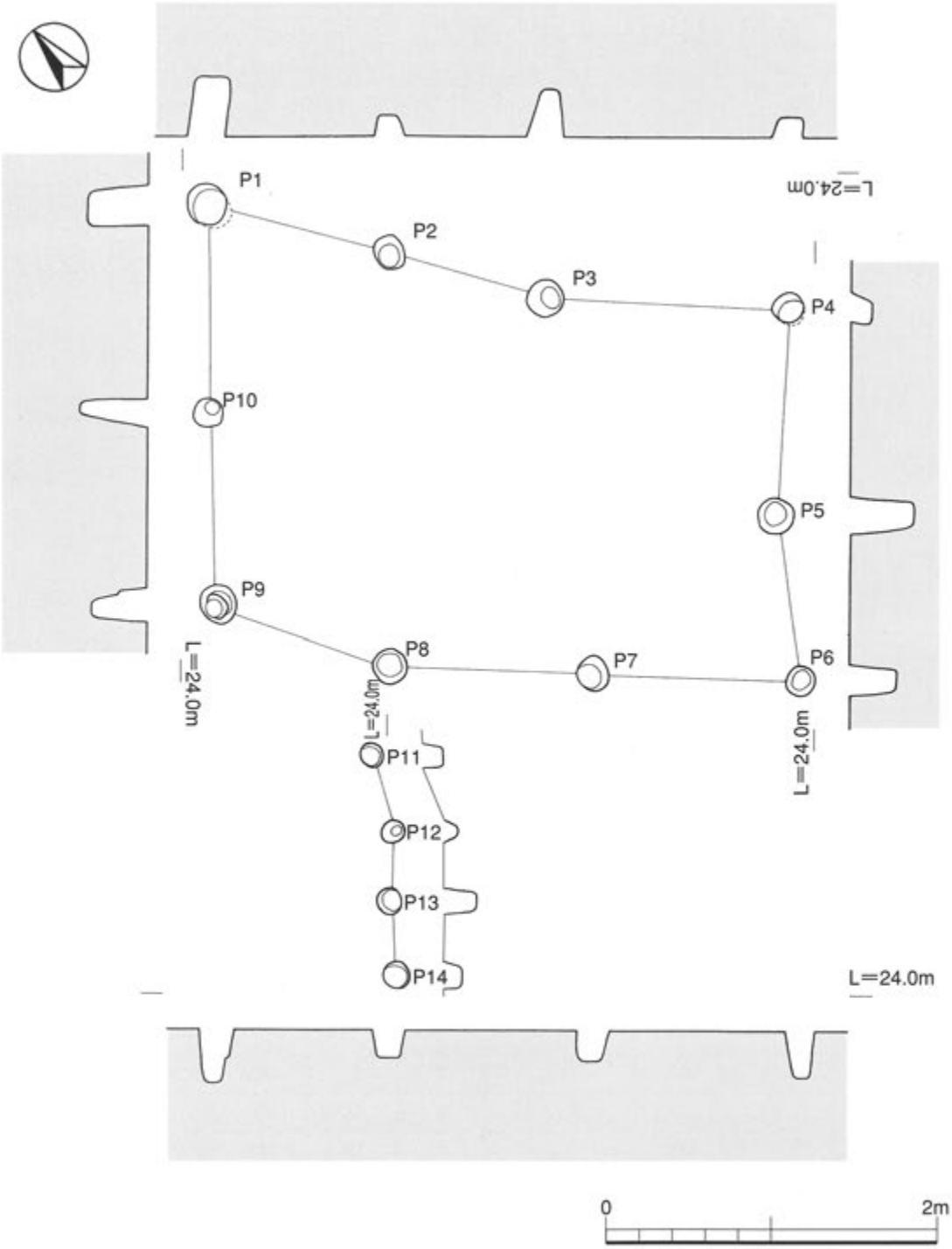
A・B-12・13区で検出された。主軸方向はN85° Wで，棟方向はおおよそ東西方向と考えられる。1間×2間以上の規模と想定されるが，道路の下部に潜り込んでいるために全体像は不明である。

表24　SB17建物計測表

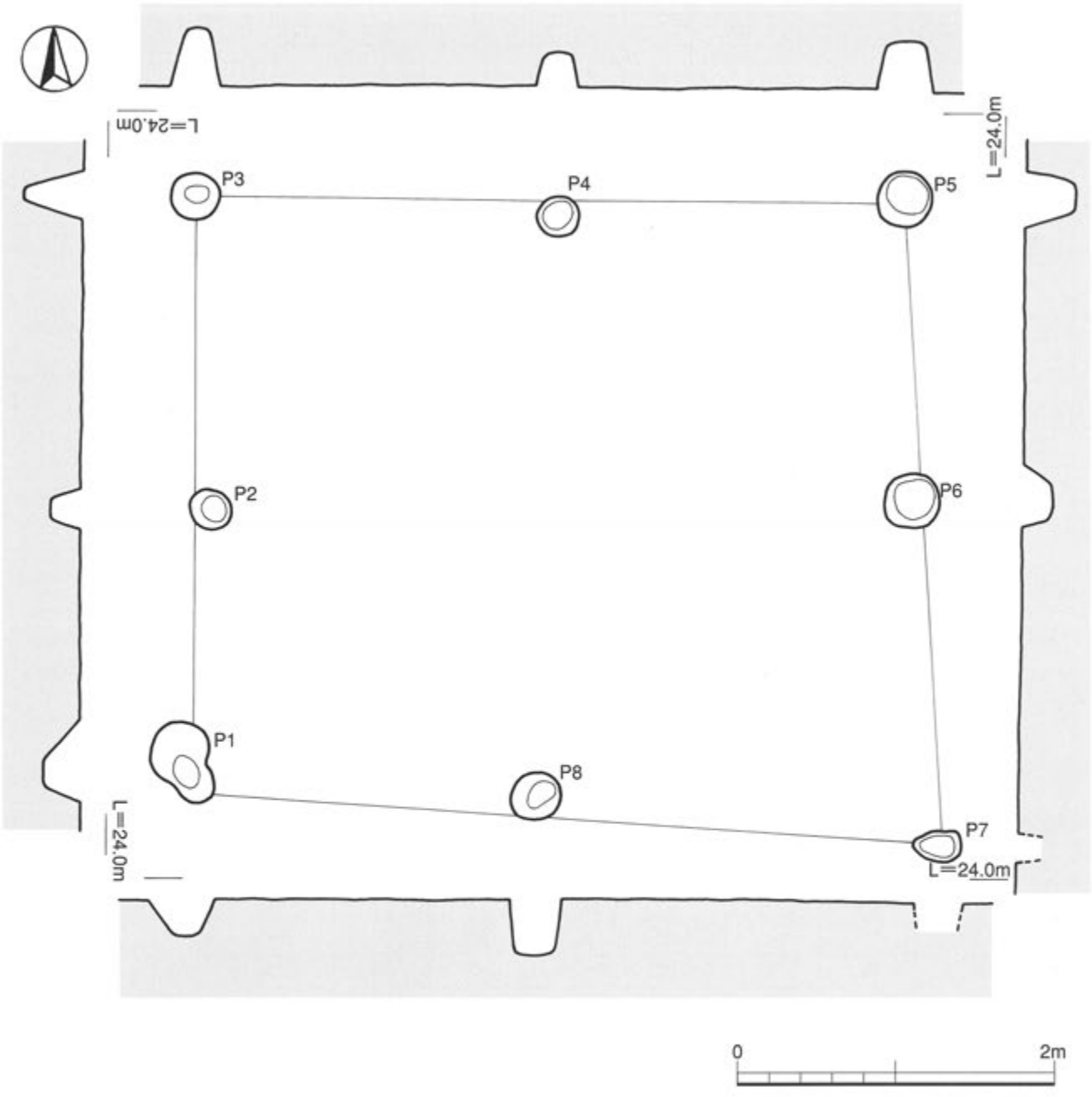
主軸方向	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	床面積 (㎡)	桁行方向
東西 N85° W	桁行	P1-P2	220	7.28	1	27	32	17	最大値 8.05	(P1-P3) × (P1-P4)
		P2-P3	215	7.12	2	38	38	30		
		P1-P3	435	14.40	3	33	37	18		
	梁行	P1-P4	185	6.13	4	23	36	20		

SB18（第235図）

B・C-9区で検出された。主軸方向はN75° Wで，棟方向はおおよそ東西方向と言えるが，若干歪んでいる印象はぬぐえない。2間×3間の規模で，南側に南北方向の4列の柱穴が見られることから，柵跡または目隠し塀の跡ではないかと想定される。


P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
L=24.0m
0
2m

第235図　SB18



第236図　SB19

SB19（第236図）

H-26区で検出された。他の建物とは離れた場所に位置する。主軸方向はＮ５°Ｗで，棟方向はおおよそ南北方向と考えられる。１間×２間の規模で，内部には柱穴が４基確認されるものの，本建物跡に付随するものとは考えにくい。

表25　SB18建物計測表

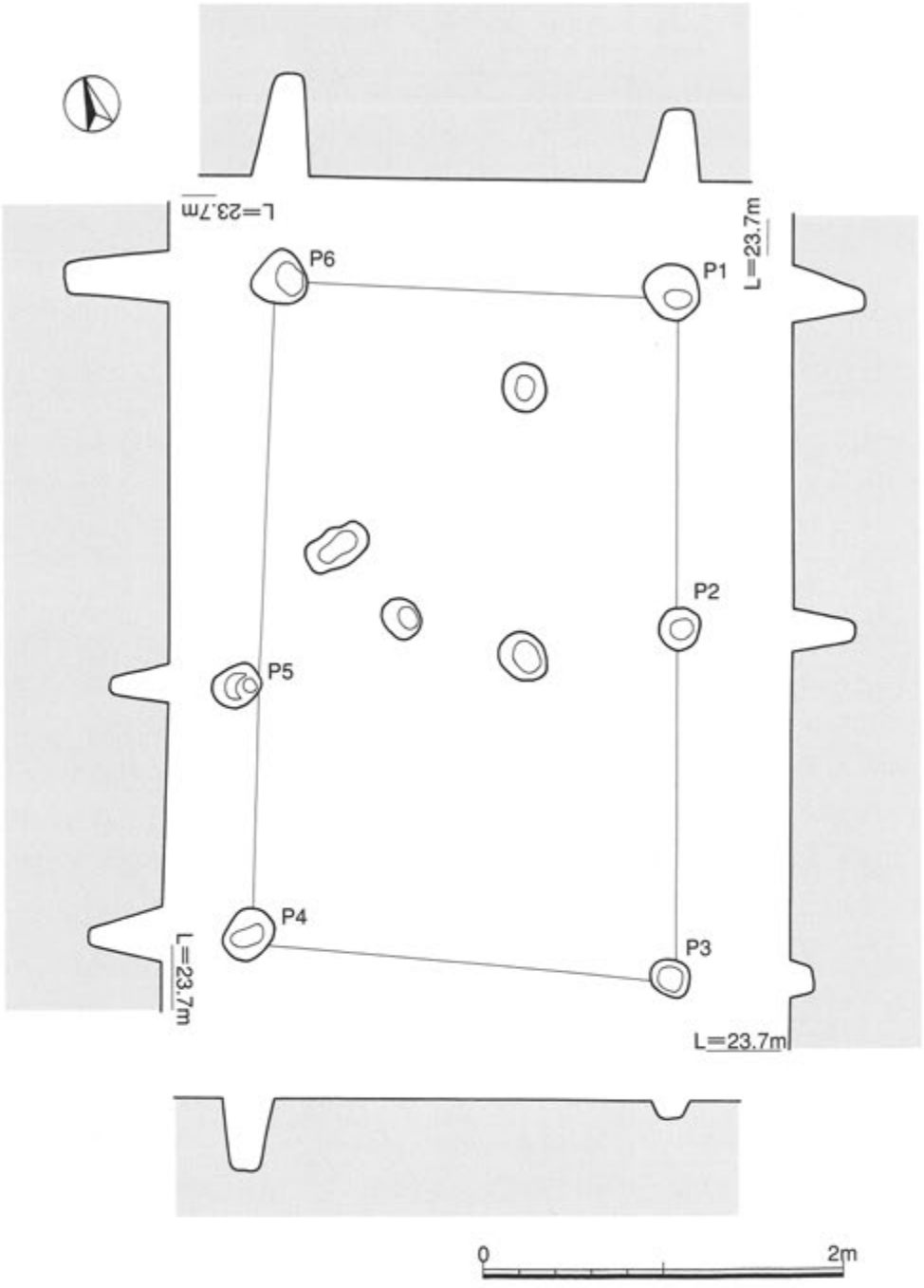
主軸方向	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	床面積 (㎡)	桁行方向
東西 N75° W	桁行	P1-P2	170	5.63	1	55	38	32	最大値 19.98	(P1-P4) × (P1-P9)
		P2-P3	150	4.97	2	19	32	22		
		P3-P4	220	7.28	3	42	34	20		
		P1-P4	540	17.88	4	19	27	18		
		P10-P5	515	17.05	5	57	32	21		
		P9-P8	165	5.46	6	42	27	19		
		P8-P7	185	6.13	7	28	33	22		
		P7-P6	190	6.29	8	25	32	22	最小値 18.36	(P4-P6) × (P6-P9)
		P9-P6	540	17.88	9	50	30	14		
	梁行	P1-P10	190	6.29	10	62	28	11		
		P10-P9	180	5.96	11	18	23	17		
		P1-P9	370	12.25	12	12	22	10		
		P2-P8	375	12.42	13	30	24	18		
		P3-P7	350	11.59	14	17	24	18		
		P4-P5	190	6.29						
		P5-P6	150	4.97						
		P4-P6	340	11.26						

表26　SB19建物計測表

主軸方向	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離　(尺) ※1尺=30.2cm	床面積 (㎡)	桁行方向
南北 N5° W	桁行	P1-P8	220	7.28	梁行	P1-P2	170	5.63	最大値 19.48	(P1-P7) × (P5-P7)
		P8-P7	255	8.44		P2-P3	200	6.62		
		P1-P7	475	15.73		P1-P3	370	12.25		
		P2-P6	440	14.57		P8-P4	384	12.72		
		P3-P4	230	7.62		P7-P6	220	7.28		
		P4-P5	220	7.28		P6-P5	190	6.29		
		P3-P5	450	14.90		P7-P5	410	13.58		
	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	最小値 12.95	(P1-P3) × (P3-P5)
	1	22	35	15	5	33	36	24		
	2	22	27	15	6	20	35	24		
	3	36	31	14	7	-	30	22		
	4	23	28	18	8	35	32	15		

SB20（第237図）

G・H-26区で検出された。SD06の西側に位置し，他の掘立柱建物跡とは離れた場所にある。主軸方向はN2° Eで，棟方向はほぼ南北方向と言える。柱筋は若干歪んでいる。2間×2間の規模で，内部にも柱穴が見られる。



第237図　SB20

②ＳＤ（溝状遺構）

SD01（第238～240図）

C～G-16～21区にかけて検出された。幅は上面で70～228cm，下面で39～140cmである。深さは15～20cm程度で，断面の形状は１号と同様，U字状ないし丸味を帯びた箱形である。検出された総延長は65.2mである。主軸方向は東側のC・D-16～19区でN18° E，そこで大きく西に向きを変え，北

表27　SB20建物計測表

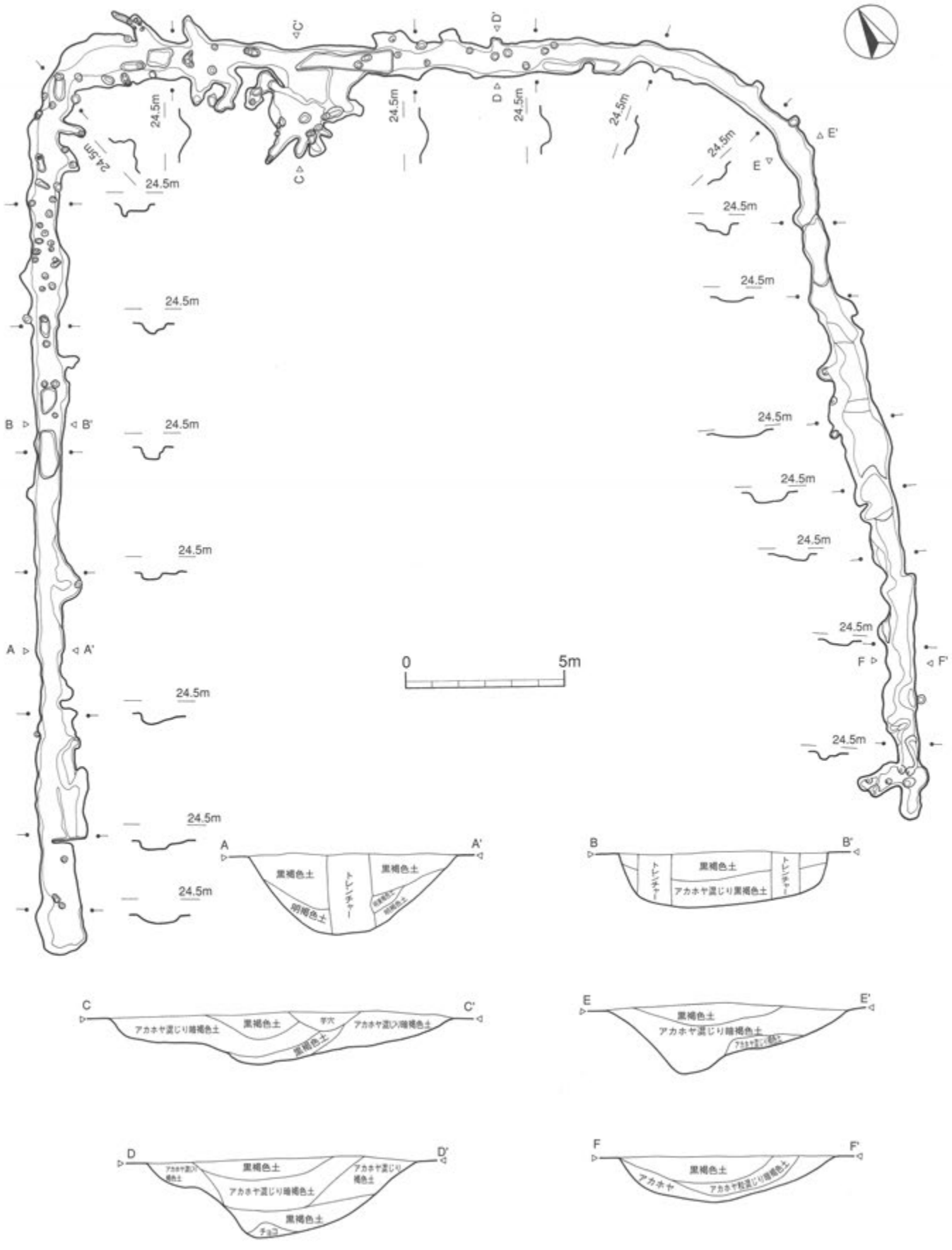
主軸方向	方向	柱穴方向	柱間距離 (cm)	柱間距離 (尺) ※1尺=30.2cm	Pit. (No.)	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	床面積 (㎡)	桁行方向
南北 N5° W	桁行	P1-P2	190	6.29	1	40	32	15	最大値 9.36	(P1-P3) × (P3-P4)
		P2-P3	200	6.62	2	33	23	11		
		P1-P3	390	12.91	3	10	24	15		
		P6-P5	230	7.62	4	40	30	18		
		P5-P4	150	4.97	5	40	28	10		
		P6-P4	380	12.58	6	56	32	19	最小値 8.74	(P1-P6) × (P4-P6)
	梁行	P1-P6	230	7.62						
		P2-P5	240	7.95						
		P3-P4	240	7.95						

側のC・D-19・21区でN66° Wとなり，さらに南に向きを変えて西側のD～G-18～21区でN24° Eとなる。当初は凹凸が無く整った形状だったのであろうが，最終的には局所的に不整形の突き出しが多く見られる。これは，長期間この遺構が生きていたことが考えられ，雨水の流入やそれらによる崩壊などによってこのような形状となったものと考えられる。また，大小さまざまなピットも見られるが，これもこの溝に伴ったものではなく，溝の形成前後の時期のものと見られる。また，この溝の内側には，溝に沿うような形でピットが並んでいる状況が見られることから，内側を隠す目隠し塀的なものではなかったかと考えられる。ただ，雨水によるものか土砂の崩壊のために形成されたと思われる凹凸の激しい箇所については柱穴の並びが明確ではないが，これは本来所在した柱穴が土砂の崩壊によって欠損した可能性が大きいと考えられる。そのように考えると，溝状遺構の存続期間よりも目隠し塀的な遺構の存続期間ははるかに短かったということになると思われる。このSD01の向きとSB01・02（四面廂建物跡）の向きがほとんど同一であることから，これらは同時併存と考えられ，目隠し塀的な遺構の存続期間が短かったことから判断すると，建物の存続期間もそのように考えられる可能性もあり，興味深いことと思われる。溝の埋土中からは，古代～中世にわたる遺物が比較的多く出土した。

1191～1198は土師器である。1196をのぞき，いずれも口縁部である。復元口径16～18cmのやや大きめのもの（1191・1194・1197）と，復元口径12cm前後のやや小形のもの（1192・1198）がある。うち1194・1198は内赤土器である。1196は土師器の底部である。復元底径8cmで，糸切り底である。1199～1202は土師器甕の口縁部である。口縁部がゆるやかに外反するもので，口縁部の長さは短めである。いずれも外面はナデ調整で，1199・1200の内面は斜位のヘラケズリが行われている。1200は内外面ともに同位置にユビオサエの痕跡が認められ，製作工程において輪積みした粘土を密着させた際の痕跡と思われる。1201・1202は内外面ともにナデ調整である。

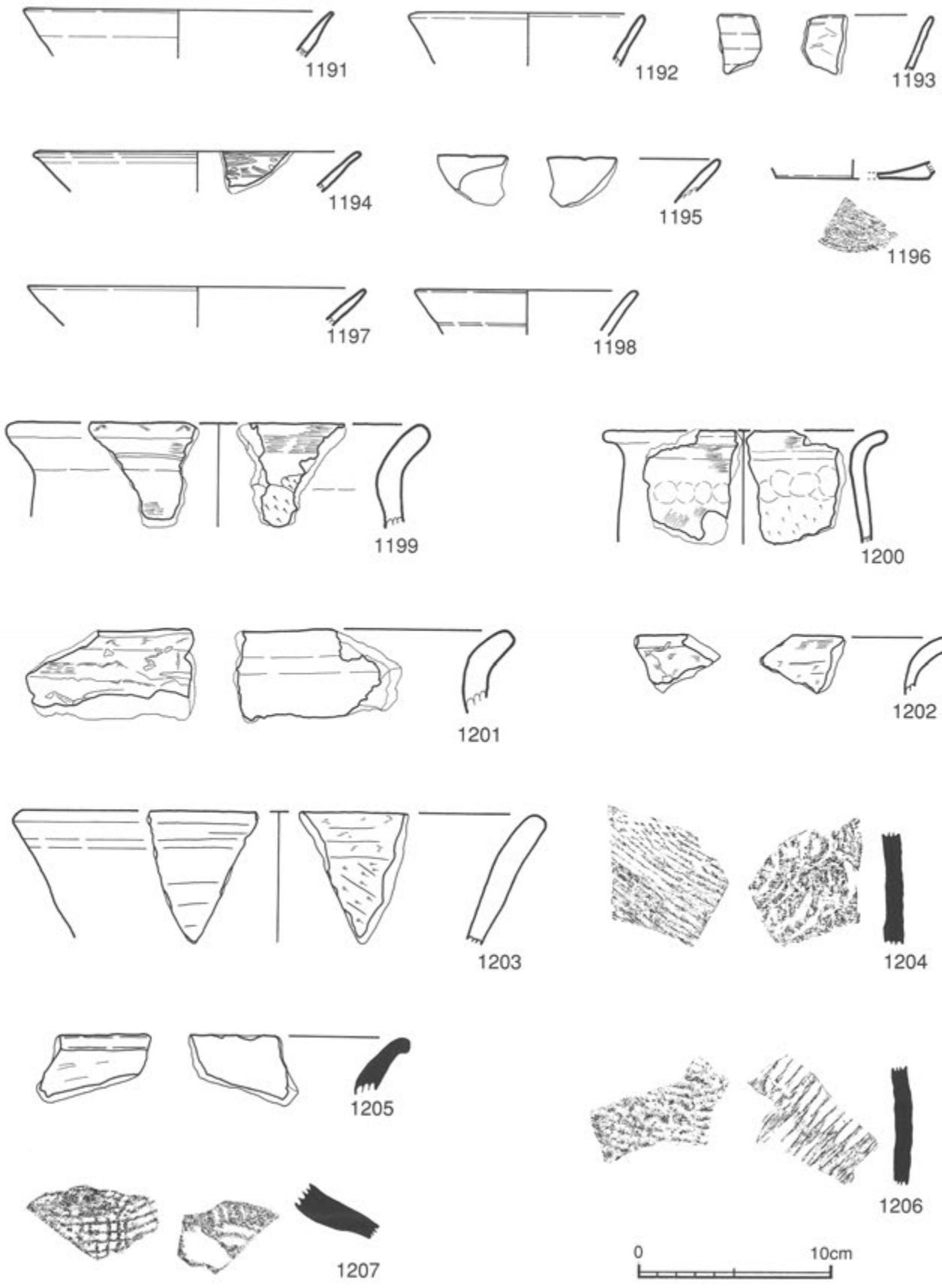
1203は土師器の鉢である。復元口径27.8cmで，外面はナデ調整，内面は斜位のヘラケズリが行われている。

1204～1210は須恵器である。1205は甕の口縁部である。ローリングを受けており，色落ちして白色化している。1207は甕の頸部と思われる。こちらもローリングを受けており，色落ちして白色化している。外面は格子目タタキ，内面は同心円文タタキと思われる。1204～1210は胴部片である。1204は外面は平行タタキ，内面は同心円文タタキである。1206は内外面ともに平行タタキが行われ

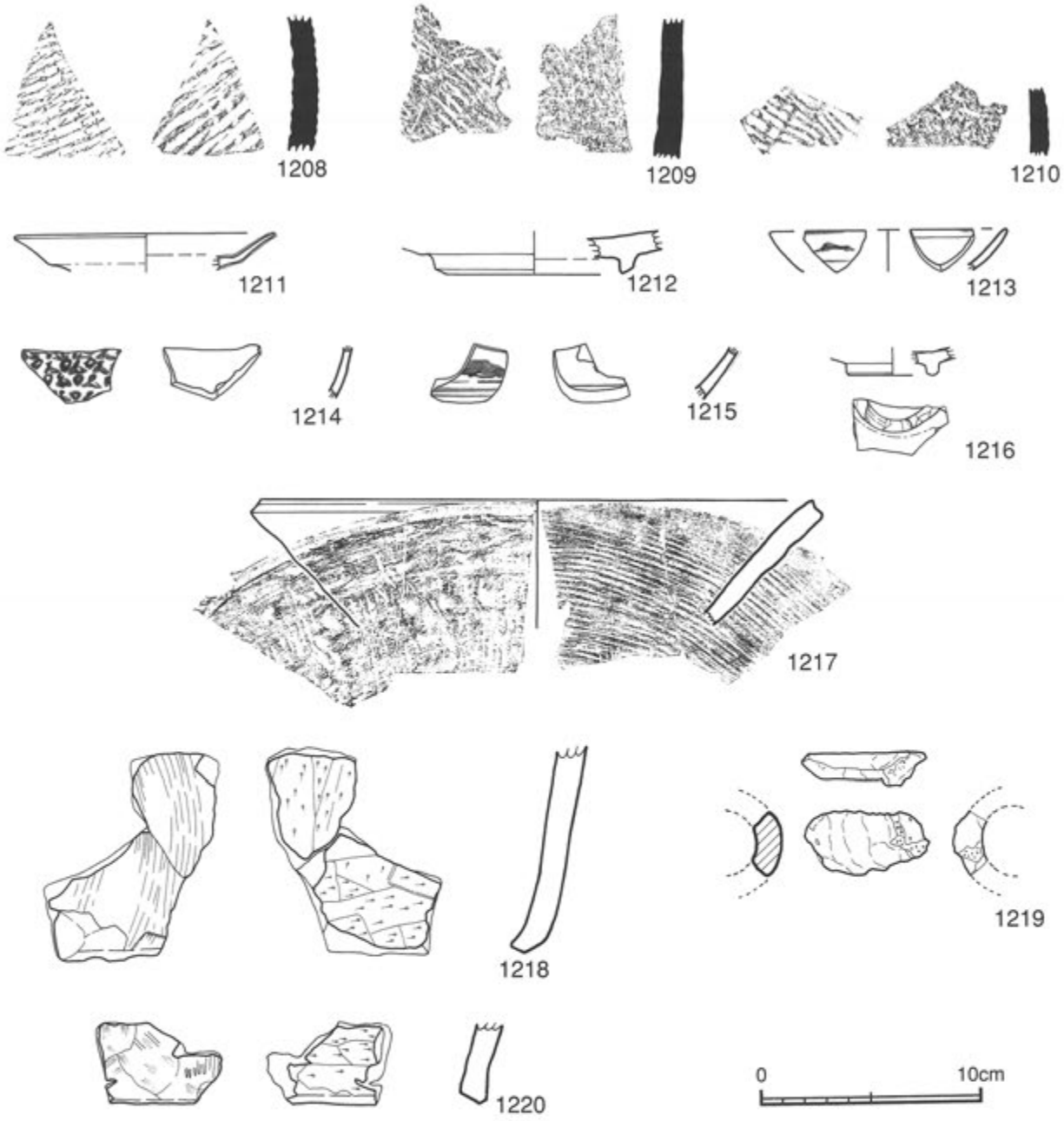


24.5m
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
0
5m
黒褐色土
明褐色土
トレンチャー
アカホヤ混じり黒褐色土
アカホヤ混じり暗褐色土
アカホヤ

第238図　SD01



第239図　SD01出土遺物1



第240図　SD01出土遺物２

ている。外面には自然釉がかかっている。1208は外面が格子目タタキ，内面は平行タタキである。1209は筒状の鉢の胴部と思われる。外面は平行タタキで，内面は輪積みした際の指頭圧痕とヘラ状工具によるナデが行われている。1210は外面は格子目タタキで，内面は平行タタキと思われる。ローリングを受けており，色落ちして白色化している。

1211・1212は青磁である。1211は皿で，口径12cmである。1212は底部で，底径8cmである。

1213～1216は染付で，中国陶磁と思われる。いずれも体部外面に文様を描く。1213は復元口径11cmである。1216は底部で，底径4.2cmを測る。

1217は瓦質土器の鉢である。復元口径25cmで，口唇部を四角くおさめる。外面は成形時のユビオサエの痕跡が明瞭に残り，その上に平行タタキが行われ，最後に横位のナデ調整が行われている。内面は胴部に斜位のハケ目が施され，口縁部周囲は横位のナデ調整が行われている。1218・1220はコシキと思われる。下位端部を四角くおさめ，若干傾斜する。1218は外面はハケ目調整で，内面は縦位・横位のヘラケズリが行われている。1220は外面がナデ調整で，内面は横位のヘラケズリである。1219は鞴の羽口と思われる。表面は剥落しているが，一部に融鉄滓の付着が見られる。

SD02（第241・242図）

F・G-15～18区にかけて検出された。幅は上面で56～162cm，下面で20～88cmである。深さは10～20cmで，断面の形状はU字状ないし丸味を帯びた箱形と言える。検出された総延長は37.3mである。主軸方向は東側のF・G-15～17区でN３° E，そこで大きく西に向きを変え，北側のF・G-17・18区でN82° Wとなる。全体的に凹凸が無く整った形状と言えるが，局部的に不整形の突き出しが見られる。また，大小さまざまなピットも見られるが，この溝に伴ったものではなく，溝の形成前後の時期のものと判断される。

F-16区でSB02と切り合っているが，これとの前後関係は，SB02の南西側の柱穴４基をこのSD02が切っていることから，SB02が古く，SD02が新しいということがわかる。ただ，いずれも中世と考えられることから，どれほどの時期差や時間差があるかについては明確ではない。調査担当者としては，SB02の柱穴の埋土は締まっており，ゆるんだ状況ではなかったことから，ある程度の時間差を考える方が良いのではないかと思える。また，これら４基の柱穴の下部に流水作用を受けたような砂の堆積は見られなかったことから，SB02が遺棄された段階では，一旦これらの柱穴はしっかりと埋められ，その後，ある程度の時間の経過を経た後にこの溝が作られたものと想定される。埋土中からは比較的多くの遺物が出土している。

1221～1233は土師器である。1221は口縁部で，口径13.4cmを測る。1222は体部が深いものである。1223は充実高台状の底部で，糸切り底である。1224・1225は坏の底部で，復元底径が7cmと6cmを計る。1226は底径8cmで糸切り底である。1227は充実高台である。底径6.4cmを測る。1229・1230は底径がそれぞれ5.4cm・4.1cmと小さなものである。1232・1233は輪高台である。底径はそれぞれ10.4cm・8.4cmを測る。

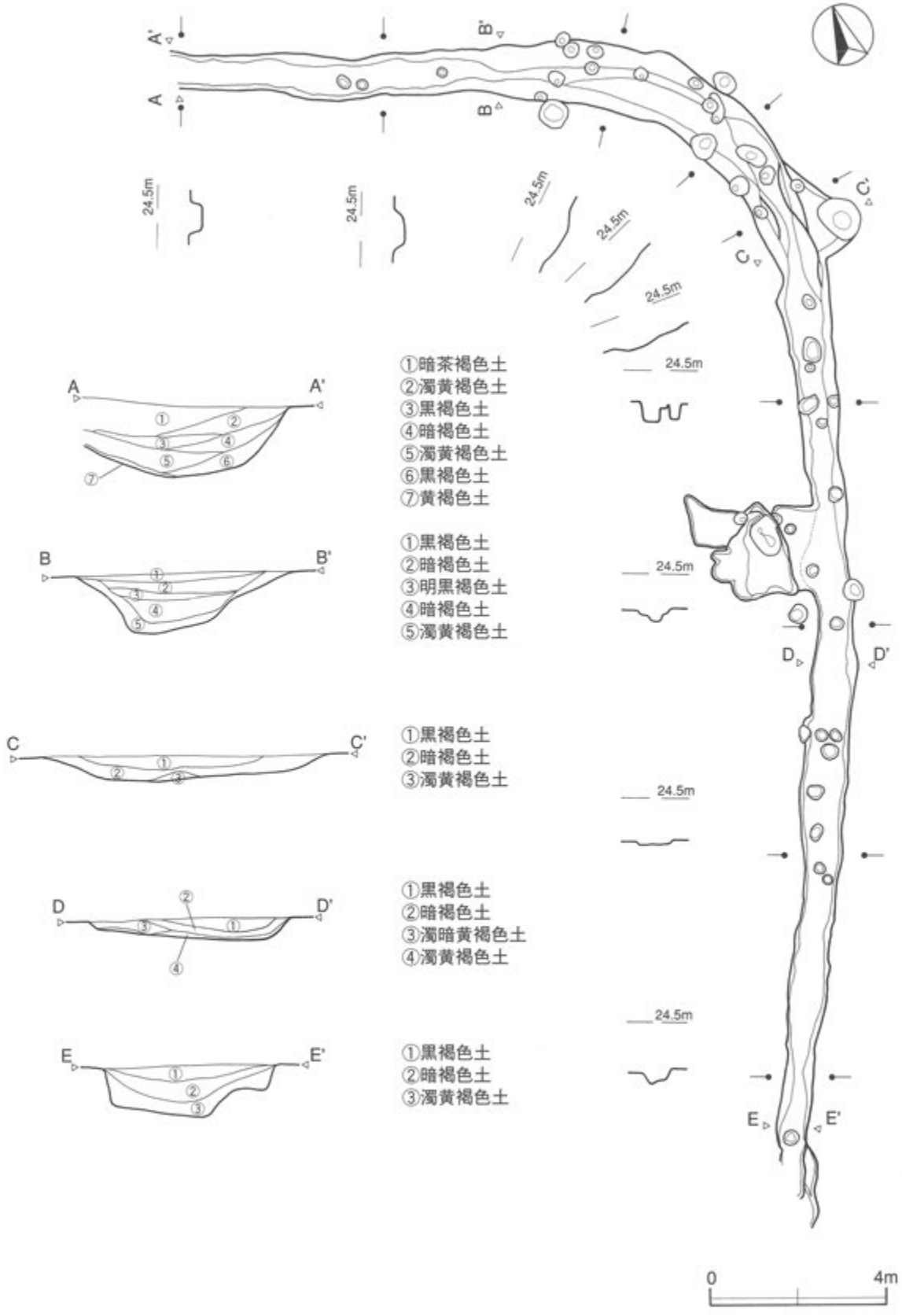
1234・1235は内黒土師器である。内面には丁寧なヘラミガキが施されている。

1236は墨書土器である。土師器外面の口縁部付近に墨書されたものであるが，破片のため文字の判読は不明である。復元口径14cmを測る。

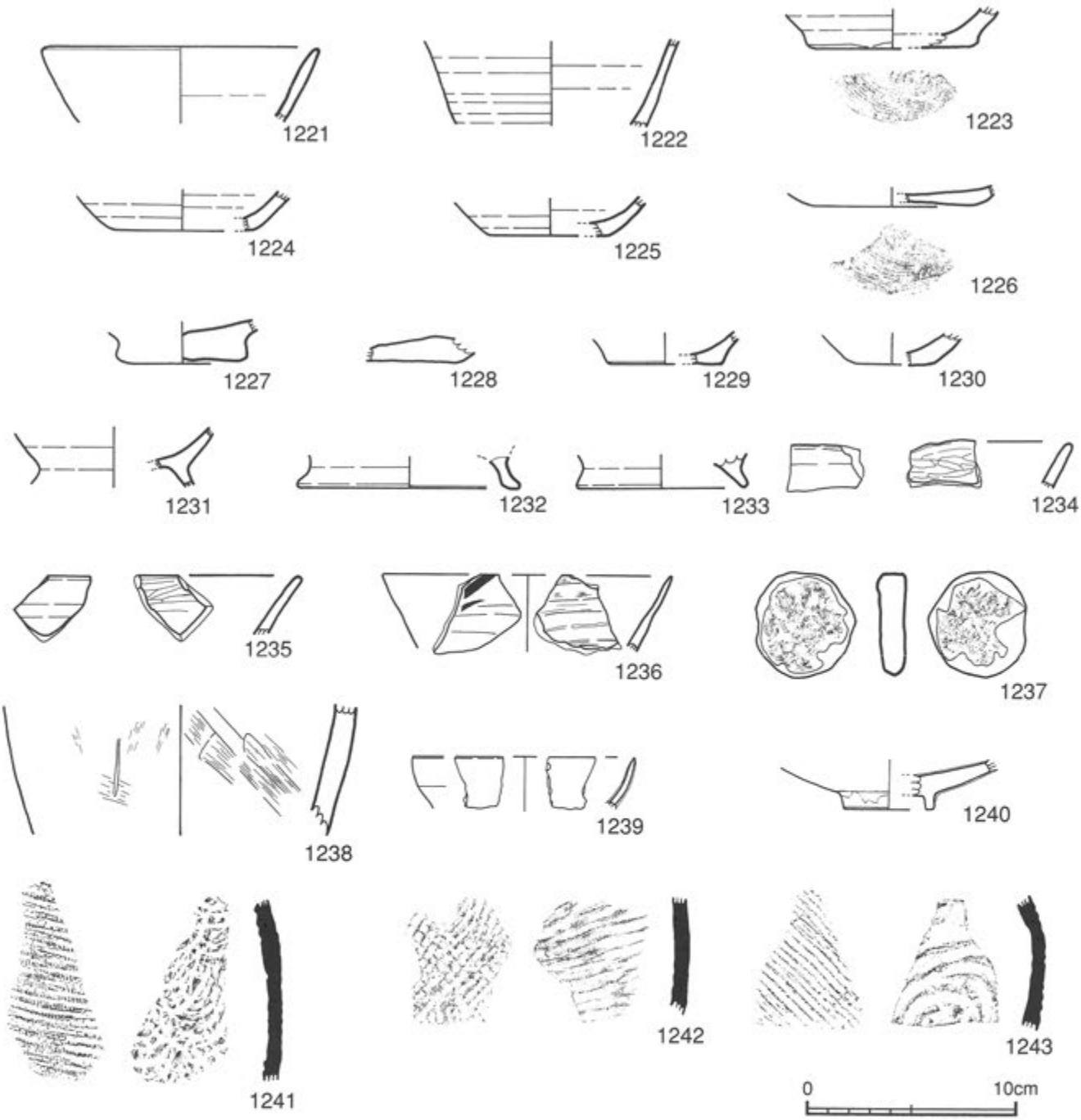
1237は土師質のメンコである。長軸・短軸ともに約5cmの大きさである。厚みが1.5cm近くあり，片面にヘラ切りの痕跡が見られることから，土師器埦の充実高台部分を転用したものであると 思われる。

1238は土師器で鉢状の形態を呈するものである。外面はナデ調整で，内面はハケ目調整が残る。1239・1240は青磁である。1239は口縁部が丸みをもった埦で，復元口径10.8cmを測る。1240は底部で底径4.6cmを測る。

1241～1243は須恵器の胴部である。1241・1243は外面が平行タタキで，内面は同心円文タタキで


A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
24.5m
①暗茶褐色土
②濁黄褐色土
③黒褐色土
④暗褐色土
⑤濁黄褐色土
⑥黒褐色土
⑦黄褐色土
①黒褐色土
②暗褐色土
③明黒褐色土
④暗褐色土
⑤濁黄褐色土
①黒褐色土
②暗褐色土
③濁黄褐色土
①黒褐色土
②暗褐色土
③濁暗黄褐色土
④濁黄褐色土
①黒褐色土
②暗褐色土
③濁黄褐色土
0
4m

第241図　SD02

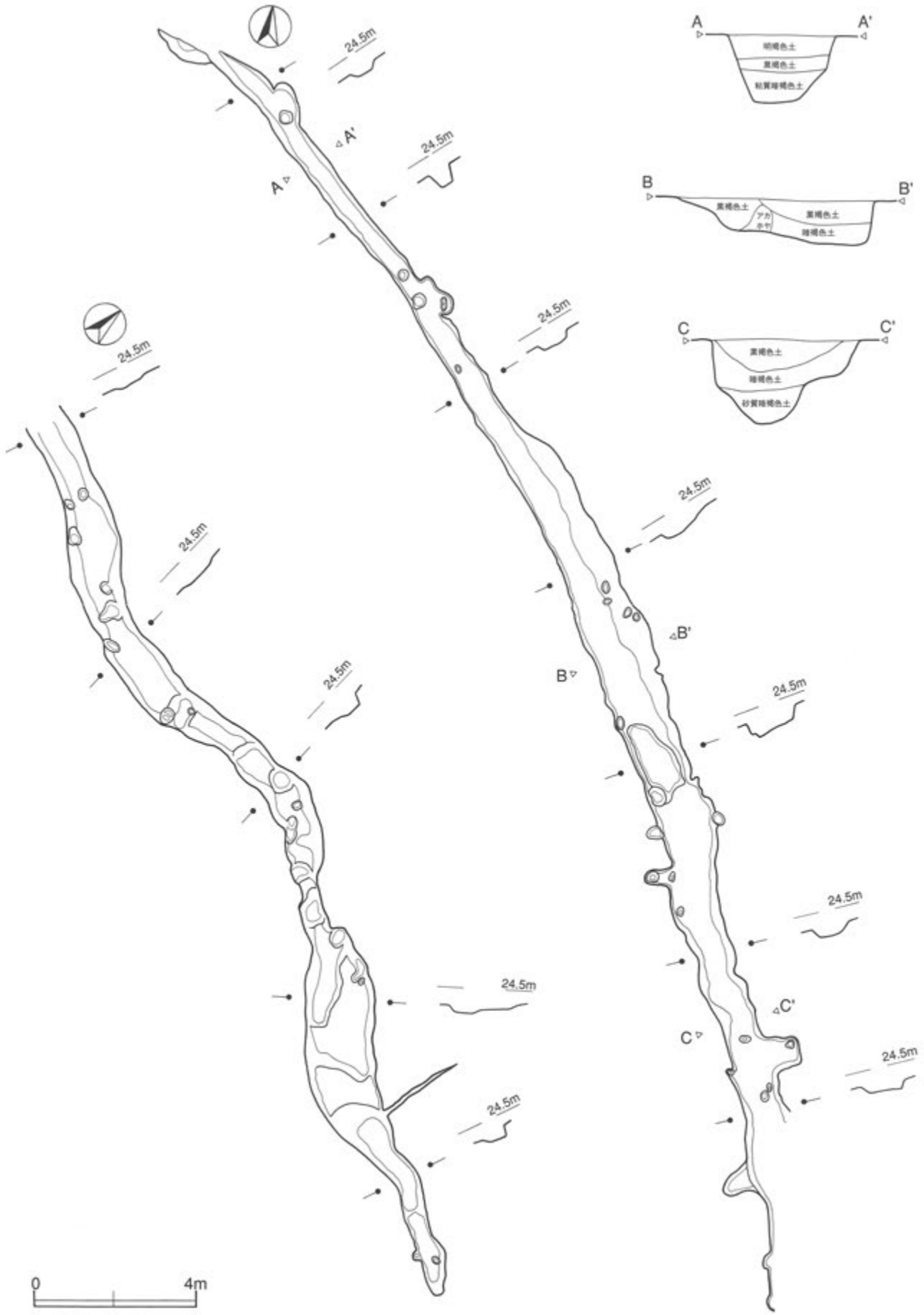


第242図　SD02出土遺物

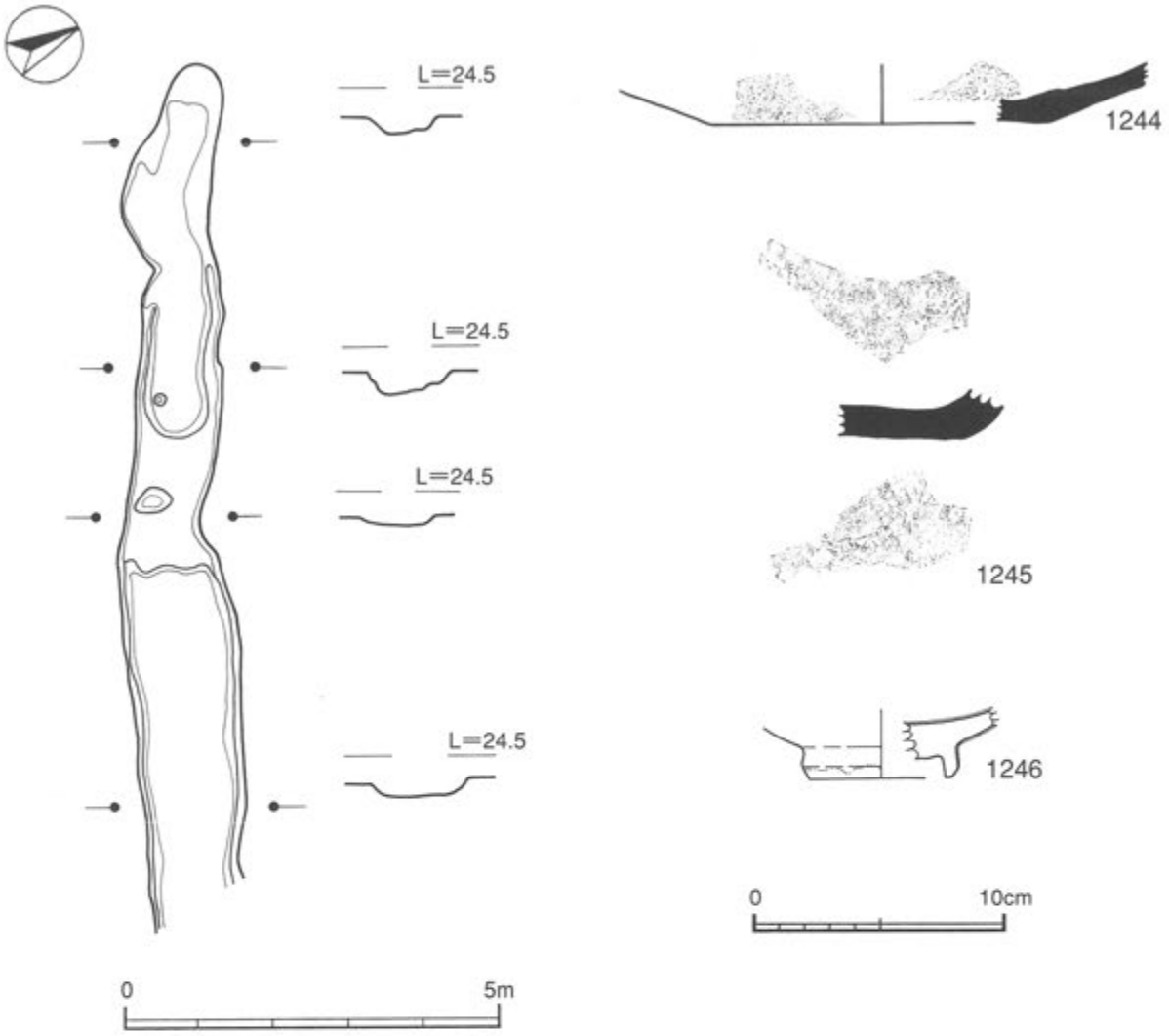
ある。1242は外面が格子目タタキで，内面は平行タタキである。

SD03（第243図）

F・G-21・22区で検出された。幅は上面で41～162cm，下面で25～131cmである。深さは30～40cmで，断面の形状はU字状ないしは丸味を帯びた箱形である。検出された総延長は19.7mである。主軸方向はN35°Wで，西側で若干屈曲してはいるが，基本的にはほぼ直線的と言える。平面的には幾分凹凸が見られ，小さなピットも散見する。



第243図　SD03・04



第244図　SD05

SD04（第243図）

B・C-20～22区にかけて検出された。幅は上面で41～160cm，下面で31～119cmである。深さは20～40cmで，断面の形状はU字状ないし丸味を帯びた箱形である。検出された総延長は35.6mである。主軸方向はN43°Wで，北側に小さくふくらんではいるが，基本的にはほぼ直線的と言える。平面的には幾分凹凸が見られる。また，小さめのピットもいくらか見られる。溝そのものに伴うものではないと考えられる。

SD05（第244図）

SD06とほぼ平行に，沿うような形でB-21・22区で検出された。幅は上面で97～155cm，下面で45～118cmである。深さは20～30cmで，断面の形状はU字状ないしは丸味を帯びた箱形である。検出された総延長は11.6mである。主軸方向はN77°Wで，途中で南側に向けてくの字状に屈曲しているが，基本は直線的と言えよう。溝の中にはピットもいくらか見られるが，溝自体に伴うものではないと考えられる。また，二段に深くなっている箇所も見られる。これは，実際に雨水が流れたことによって掘られた，または抉れたものと考えられる。この部分の下部は硬化しており，道として

使用されたことが伺える。その時期は，溝の使用時期とそれほど隔たるものではないと考えられる。埋土中からわずかながら遺物が出土している。

1244は擂鉢で内面に卸し目の条線が入る。1245は中世須恵器である。1246は青磁の底部である。

SD06（第245図）

B-21・22区で検出された。幅は上面で36～99cm，下面で25～61cmである。深さは15～20cmで，断面の形状はU字状ないしは丸味を帯びた箱形である。検出された総延長は7.3mである。主軸方向はN84°Wで，く字状に屈曲してはいるが，基本的にはほぼ直線的と言える。また，この部分の下部は硬化しており，道として使用されたことが伺え，その時期は，溝の使用時期とそれほど変わるものではないと考えられる。

SD07（第245図）

A・B-13・14区で検出された。幅は上面で147～197cm，下面で44～99cmである。深さは30～60cmで，断面の形状はU字状ないしは丸味を帯びた箱形である。ただ，全体的に凹凸が激しく，実際に雨水が流れていたことを裏付けるものと考えられる。検出された総延長は15.8mである。主軸方向はN17°Eで，基本的に直線的である。溝の中にピットもいくらか見られるが，この溝に伴うものではない。また，この中から，動物の歯が出土した。分析の結果，馬の歯であることが判明し，放射性炭素年代測定では370±30の結果を得た。

③ＳＲ（道跡）

溝状遺構の下面が硬化しているものを道跡と判断した。溝状遺構と同時期と考えられる。この時期の遺構として3本の道跡が確認されている。

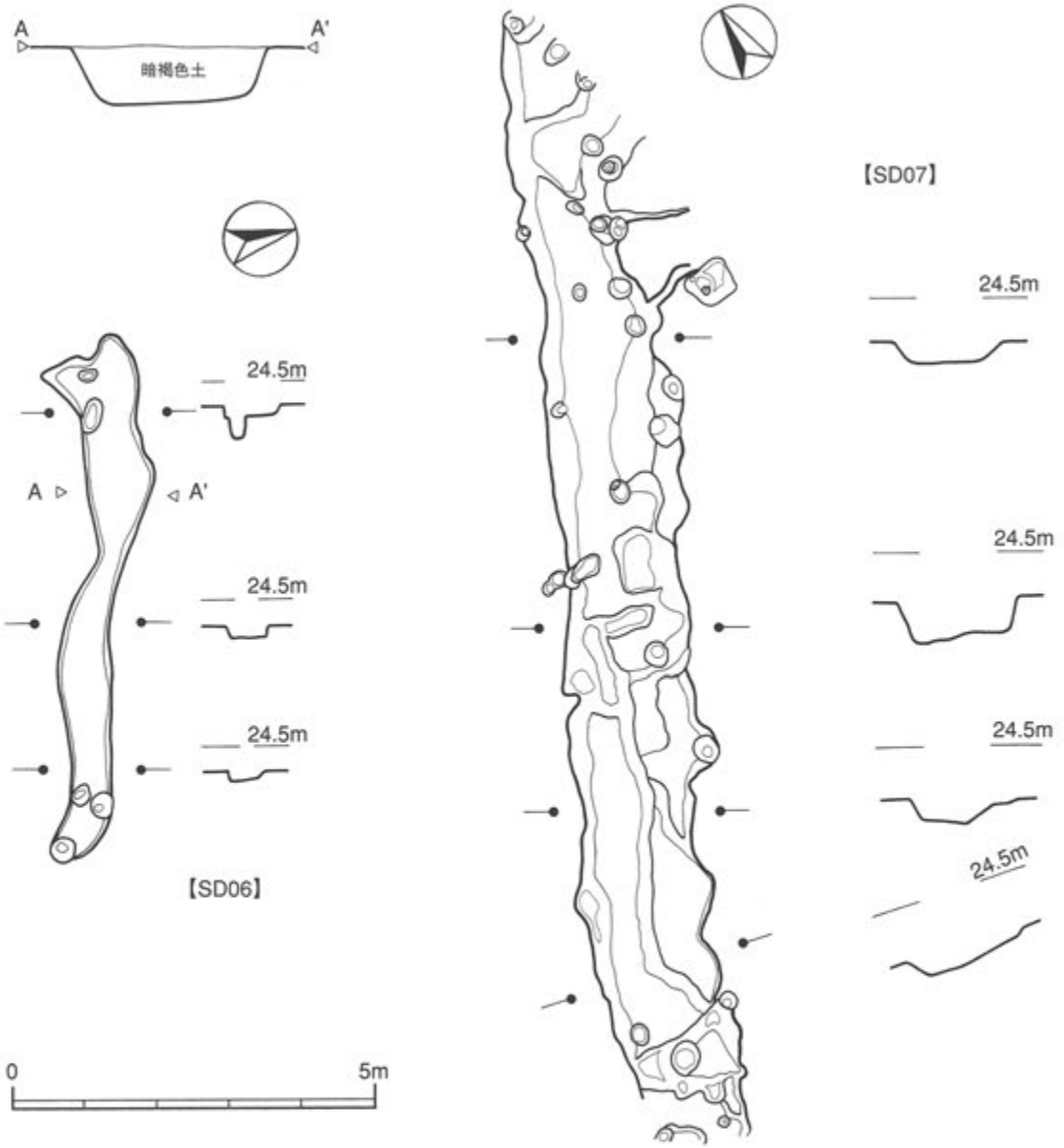
SR01（第246図）

B・C-21・22区で，SD04の西側部分で確認された。東側では硬化面は確認されていない。西側のみが硬化していた理由は明確ではないが，北側に位置するB-21・22区のSD05及びSD06で，やはり短めの硬化面が検出され，同様な方向を向いていることと何らかの関係があることも考えられる。

基本的には溝として作られ，機能していたものが，水がない時期に，安茶ヶ原の台地を斜めに横切る道として付け替えを経ながら形成されて行ったものと考えるのが，最も自然なように思われるのである。この西側は小高くなっており，相対的に東側は低く，本来の溝としての機能が失われることがなかったのではなかろうか。

SR02（第246図）

B-21・22区で検出された。SD06の下面が硬化していることから道跡と判断したものである。幾分屈曲しているが，下面が全体的に硬化している状況が見られた。この遺構の東及び西側では明確な硬化面は確認されていないことから，相対的に高い場所であったために，後世の耕作等で破壊されたことが考えられる。



第245図　SD06・SD07

SR03（第246図）

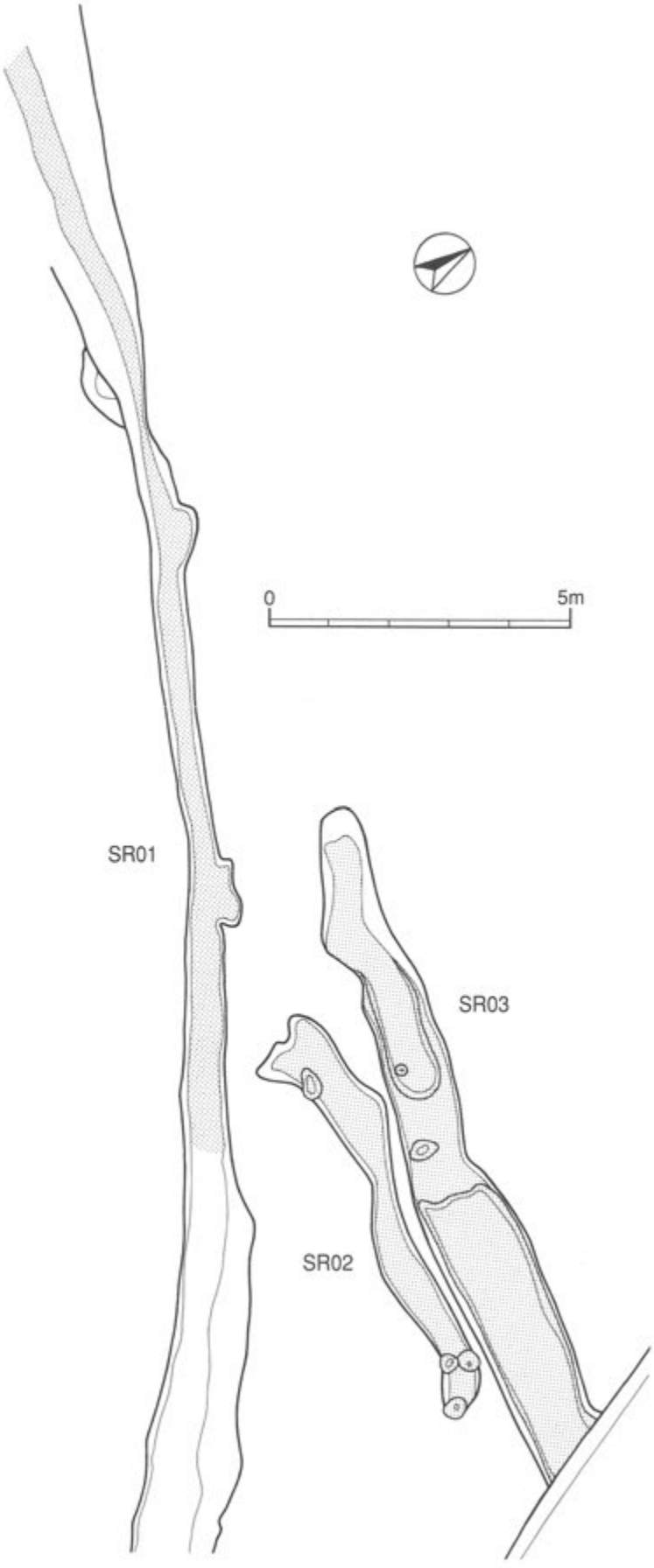
SR02と同じく，B-21・22区で検出された。SD05の下面が硬化していることから道跡と判断した。下面が全体的に硬化している状況であった。SR02とはほぼ平行であると言える。この遺構の東及び西側では明確な硬化面が確認されていないこともSR02と同様であり，その理由も同様と考えられる。

これらSR01～03は残存している部分でほぼ同じ方向（主軸方向はN80° W）を向いていることと，幅約３mの範囲に収まることから，使用当時の方向や道幅がこの程度であったことが考えられる。

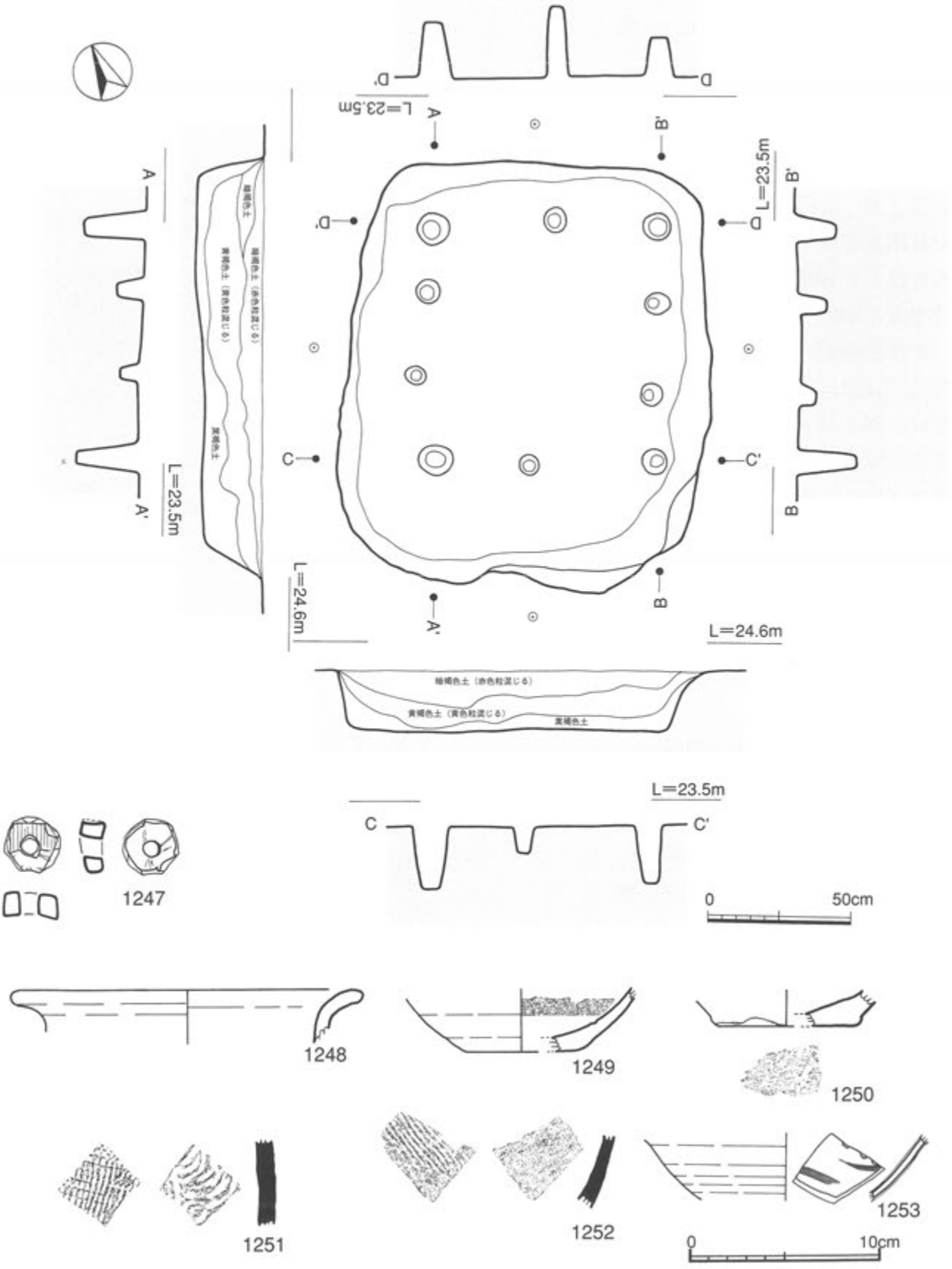
④ＳＩ（方形竪穴建物跡）

SI02（第247図）

D・E-16区から方形竪穴建物跡が１軒確認されている。規模は，長軸方向が298cm，短軸方向が266cm，残存する最大の深さは46cmである。主軸方向はN３° Wで，ほぼ南北方向である。全体的には長方形で，四隅が丸まっていることから，隅丸方形を呈していると言える。床面には10基の 柱穴が見られるが，中央よりも若干北側に寄っていることから，幾分南側が空いた感じとなっているほか，西側も壁から若干離れて設けられていることから，幾分西側も空いた感じになっている。これらのスペースが，出入り口を考える際には参考となると思われる。床面の10基の柱穴は，東側の４基は南北方向に整然と並



第246図　SR01～03


L=23.5m
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
L=24.6m
褐褐色土
黄褐色土（黄色粒混じる）
黒褐色土
1247
1248
1249
1250
1251
1252
1253
0
50cm
10cm

第247図　SI02

んでいるのに比べて，西側のものは幾分柱筋が乱れているように感じられる。また，東西方向のものは，北側のものが若干北に，また，南側のものは若干南に，それぞれずれていることから，整った矩形とはなっていない。

このような方形竪穴建物跡については，従来からその名称から構造，使用方法などについていろいろな考え方がなされてきたが，中世都市鎌倉での同様な遺構の膨大な調査によって，現在では倉庫の跡とかある種の工房跡などと考えられるに至っており，本遺跡でも同様な機能が考えられるのではないかと思われる。埋土中から遺物が出土している。

1247は滑石製品である。直径3cmほどの円形で，中央部に直径1cmほどの穴があけられている。紡錘車的なものかと思われるが，用途は不明である。1257は土師器甕である。口縁部が曲がるように外反したもので，口径19cmである。1249は土師器の坏である。底径6cmで，体部にスス状の付着物のような痕跡が巡っており，灯明皿として使用されたのではないかと思われる。1250は土師器の底部である。1251・1252は須恵器の胴部片である。1251は外面が格子目タタキで，内面は同心円文タタキである。1252は外面が平行タタキで，内面はナデである。底部外面はヘラでナデられている。1253は白磁の体部片である。

⑤ＳＫ（土坑）

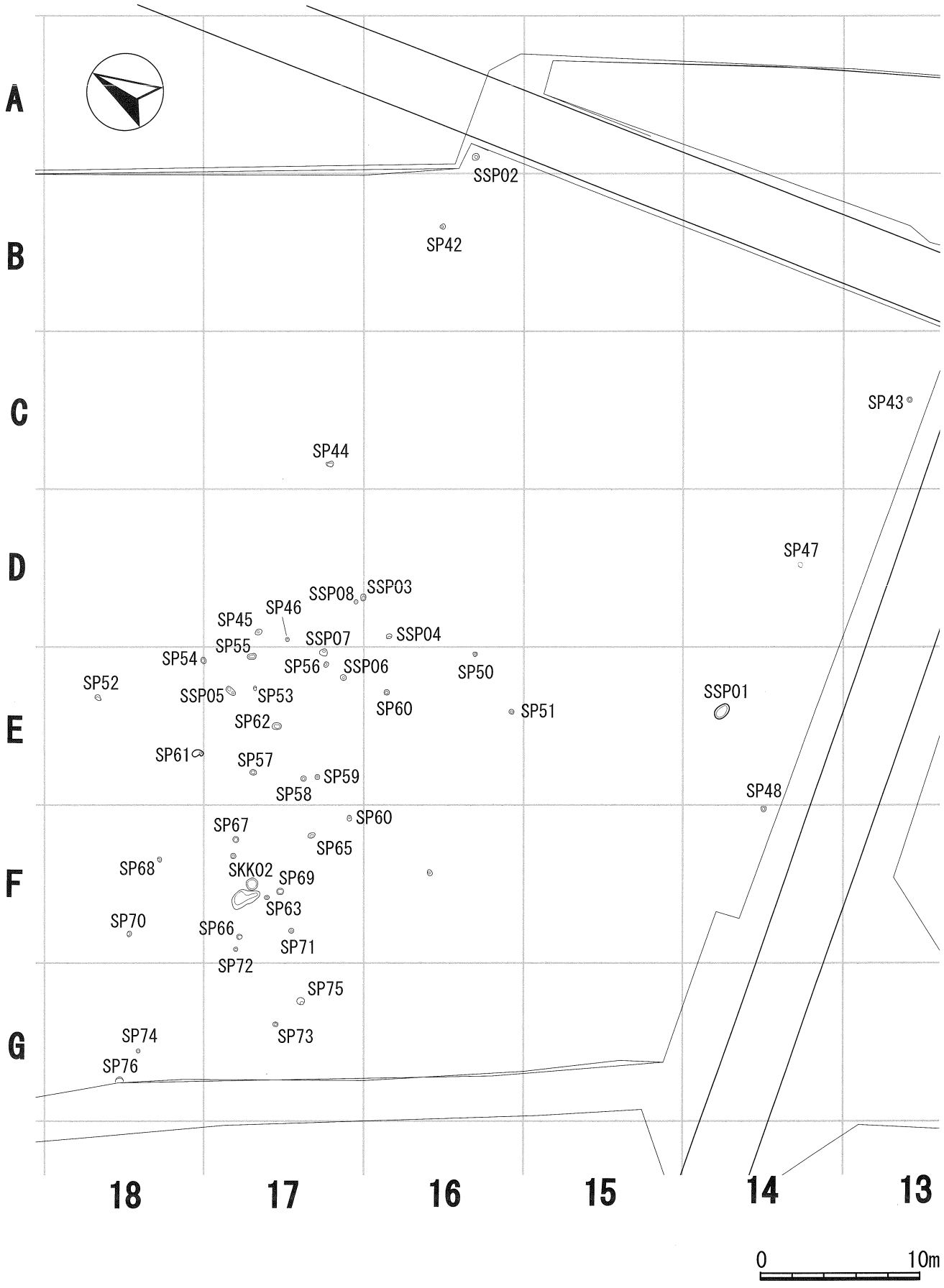
中世に帰属すると考えられる土坑は８基確認されており，うち２基は埋土中に貝殻が入っていた。

SKK01（第249図）

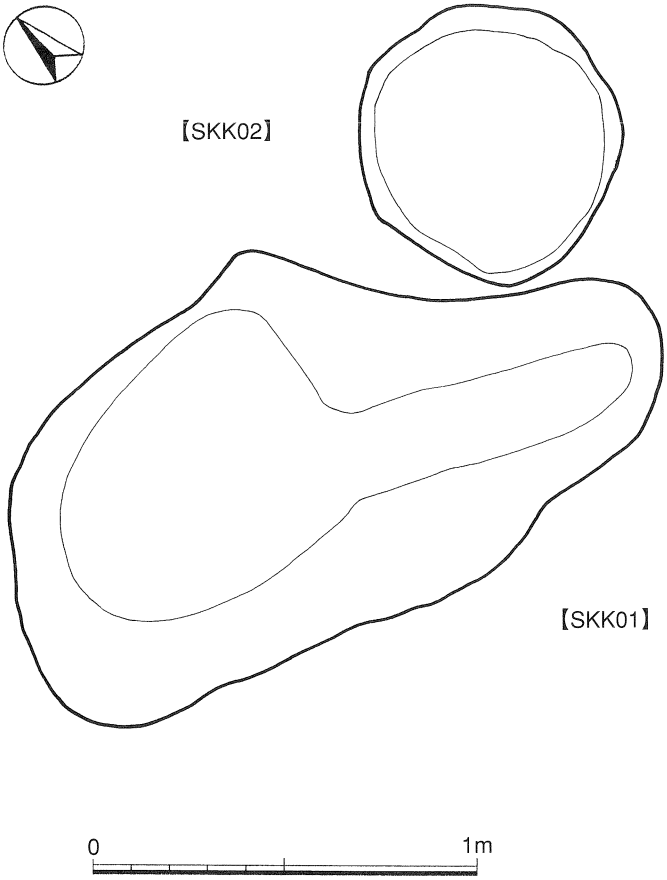
F-17区で検出された。SKK02と隣接した場所であることから，時間差もほとんどないことが考えられる。長径は185cm，短径は94cmで，西側が大きく，東側が小さい不整楕円形とでも言うべき形状をしている。調査時の不手際により断面の実測とレベル計測が行われていないため，深さ・断面形態は不明である。貝殻の出土状況は上記の貝殻ピットとほぼ同様で，多くの埋土の中に多くの貝殻が混入している状態である。貝殻は二枚貝が主体で，その中に頂頭部の折られた巻き貝が混じる状況である。放射性炭素年代測定により，450±30の年代結果が得られている。

SKK02（第249図）

SKK01と同様に，F-17区から検出された。SKK01と隣接した場所にある。長径は70cm，短径は60cmである。調査時の不手際により断面の実測とレベル計測が行われていないため，深さ・断面形態は不明である。二枚貝を主にして，巻き貝も混じる。巻き貝は，頂頭部を折っている状況が観察される。貝殻が主体ではあるが，埋土も極めて多く，埋土中に貝殻が多く混じっていると言った方がふさわしいかも知れない。放射性炭素年代測定により，530±30との結果が得られている。



第248図　中世ピット検出位置図



第249図　SKK01・SKK02

SKP・SKK出土貝殻について

本遺跡からは古代で貝殻の入ったピット（SKP）が3基，中世で貝殻の入った土坑が2基それぞれ検出されたが，ここではそれらの貝殻の種類別の内訳等に関してふれておきたい。なお，本来ならば時代別，あるいは各遺構番号別に言及するべきであるが，貝殻として一括されてしまってあったため，個別具体的な内容に関しては言及不可能であり，遺跡全体として言及せざるをえなかった。

貝の種類としては，海産貝類が圧倒的に多い。現棲分布は北海道以南，あるいは本州南部以南に分布するものがほとんどである。棲息地は岩礁帯が最も多く，砂泥帯・汽水地・内湾などに棲息するものはあまり採取されていない。これらのことから，貝殻の出土したピット・土坑の貝は，遺跡近辺で採取されたものはあまりなく，海岸域の岩礁帯に棲息するような貝が採取されていたことが伺える。ただし淡水産貝類であるカワニナとヤマトシジミは，量的には比較的多く採取されている。これらの貝は同時普遍的に食されていたのか，それとも何らかの目的をもって特別に採取されたのかが問題となるが，これらの貝は川上貝塚からも出土しているため，普遍的に食されていたのだろう。また縄文時代後期と古代・中世の貝の種類に大きな変化が見られないことは，古代・中世の海岸線も，当時は遺跡周辺近くにあったことが推測される。重量比較でみると，貝の種類ではハマグリが，科別ではマルスダレガイ科が圧倒的多数を占めている。

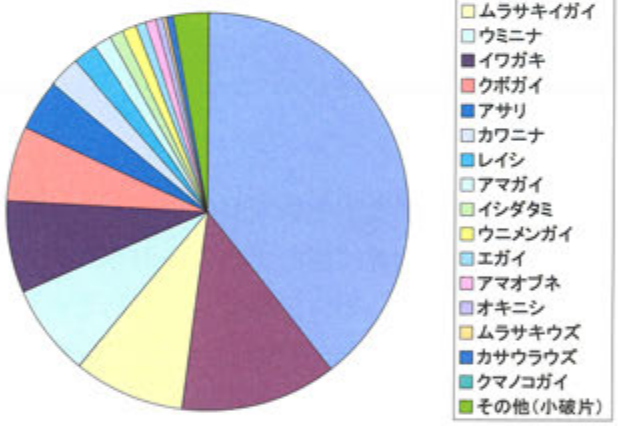
吉良哲明　　『原色日本貝類図鑑』保育社

坂下泰典1991「市来町川上貝塚出土の貝類」『川上（市来）貝塚』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

表28　安茶ヶ原遺跡出土貝種内訳

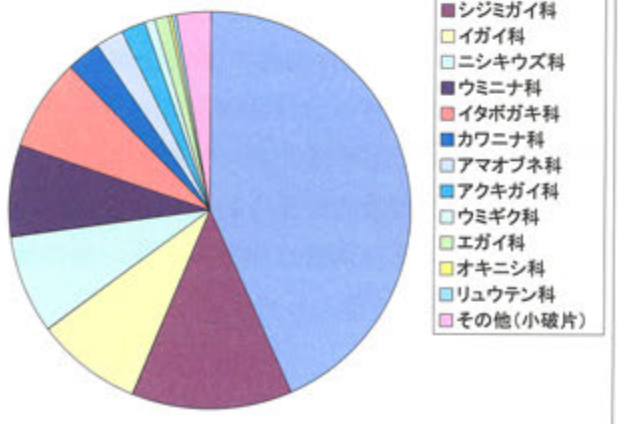
科名	和名	英名	棲息地	現棲分布
にしきうず科	クマノコガイ	*Chlorstoma xanthostigma*	岩礁帯	本州南部（房総）以南
	イシダタミガイ	*Monodonta labio*	岩礁帯	北海道南部以南
	クボガイ	*Chlorostoma lischkei*	岩礁帯	本州南部（房総）以南
	ムラサキウズ	*Trochus stellatus*	岩礁帯	九州南部以南
りゅうてん科（さざえ類）	カサウラウズ	*Astralium heimburgi*	岩礁帯	本州南部以南
あまおぶね科	アマガイ	*Puperita(Heminerita) japonica*	汽水岩礫帯	本州以南
	アマオブネガイ	*Thliostyra albicilla*	岩礫帯	本州南部（房総）以南
うみにな科	ウミニナ	*Batillaria multiformis*	内湾砂泥帯	本州以南
おきにし科	オキニシ	*Bursa dunkeri*	岩礁帯	本州以南（太平洋岸）
あくきがい科	レイシガイ	*Thais bronni*	岩礁帯	北海道南部以南
ふねがい科	エガイ	*Barbatia lima*	岩礫帯	本州南部（房総）以南
いがい科	ムラサキイガイ	*Mytilus edulis*	岩礁帯	北海道南部以南
うみぎく科	ウニメンガイ	*Spondylus versicolor*	岩礁帯	本州南部（房総）以南
いたぼがき科	イワガキ	*Crassostrea gigas*	岩礁帯	本州南部以南
まるすだれがい科（はまぐり類）	ハマグリ	*Meretrix lusoria*	砂底	全国の内湾
	アサリ	*Tapes(Amygdala) japonica*	砂底礫底	北海道以南
かわにな科	カワニナ	*Semisulcospira niponica*	淡水砂礫底	全国の淡水域
しじみがい科	ヤマトシジミ	*Corbicula japonica*	汽水河口砂礫底	北海道以南

第250図　貝種類別割合



貝種	重量(g)
ハマグリ	995
ヤマトシジミ	320
ムラサキイガイ	222
ウミニナ	195
イワガキ	188
クボガイ	155
アサリ	102
カワニナ	67
レイシ	45
アマガイ	37
イシダタミ	31
ウニメンガイ	26
エガイ	24
アマオブネ	22
オキニシ	10
ムラサキウズ	10
カサウラウズ	9
クマノコガイ	5
その他（小破片）	68

第251図　科別内訳



科	重量(g)
マルスダレガイ科	1097
シジミガイ科	320
イガイ科	222
ニシキウズ科	201
ウミニナ科	195
イタボガキ科	188
カワニナ科	67
アマオブネ科	59
アクキガイ科	45
ウミギク科	26
エガイ科	24
オキニシ科	10
リュウテン科	9
その他（小破片）	68

【SK33 土坑】（第252図）

SK33はA-14区で検出された。長径6.2cm・短径5.4cm・深さ30cmで，やや方形に近い形状を呈する。断面形は南西側が1段低くなる段堀状である。埋土中から青磁片が出土しているが，小片のため図化しなかった。

【SK34 土坑】（第252図）

SK34はC-14区で検出されている。長径70cm・短径68cmのほぼ円形を呈する。深さは33cmで断面形は逆台形状である。埋土中から糸切り底の土師器片が出土しているが，小片のため図化しなかった。

【SK35 土坑】（第252図）

SK35はD-14区で検出されている。長径70cm・短径58cm・深さ45cmで，やや倒卵状に近い形状を呈する。断面形は西側が1段低くなる段堀状である。埋土中から糸切り底の土師器片が出土しているが，小片のため図化しなかった。

【SK36 土坑】（第252図）

SK36はF-18区で検出されている。長径70cm・短径62cmでやや菱形に近い形状を呈する。深さは62cmで，断面形は逆台形状である。埋土中から糸切り底の土師器片が出土しているが，小片のため図化しなかった。

【SK37 土坑】（第252図）

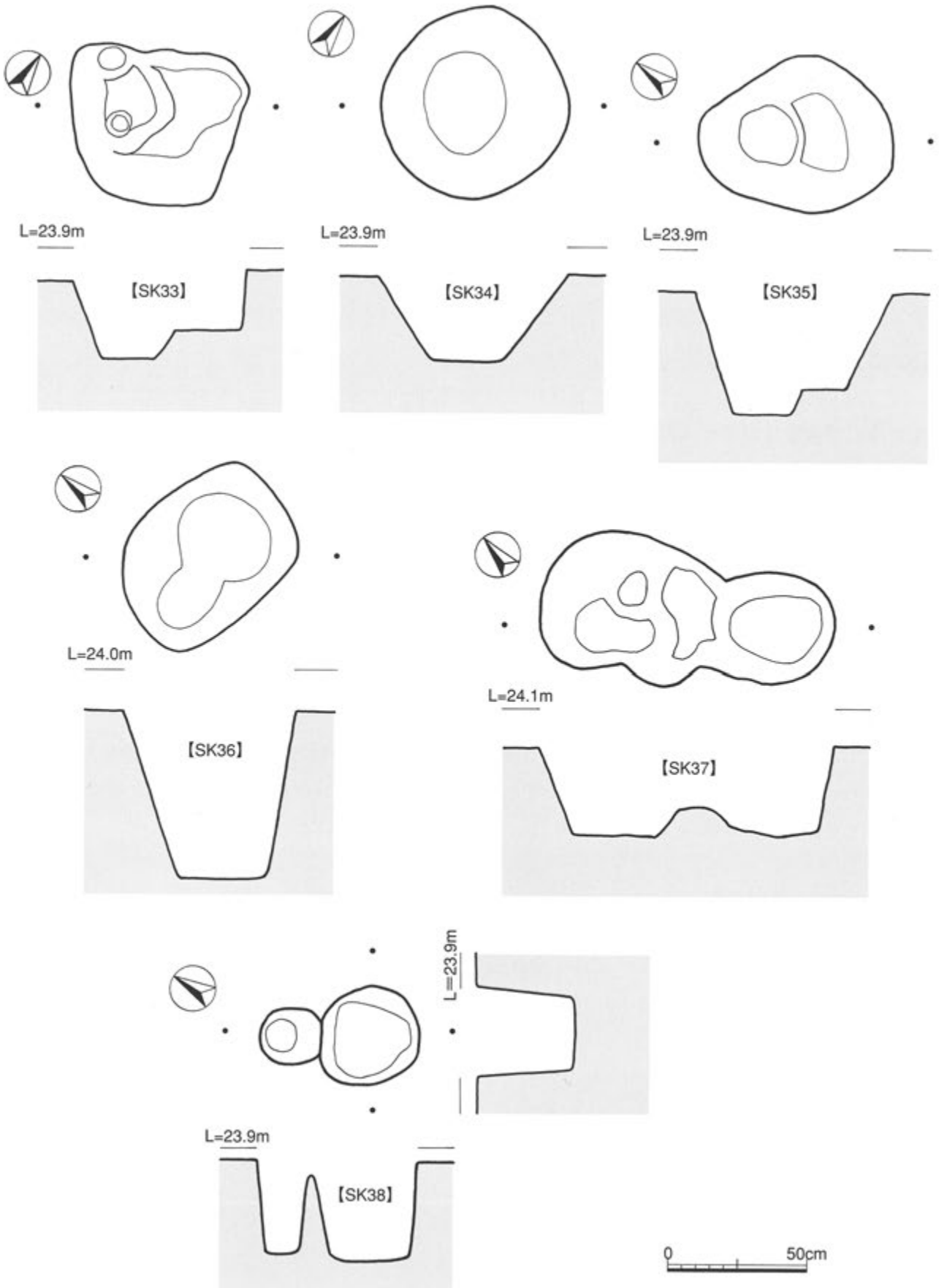
SK37はE-17区で検出されている。2・3基の土坑が1つに結合されたような形状を呈しており，長径107cm・短径は最小33cm・深さ33cmである。断面形は中央部が台形状で，両脇が逆台形状である。埋土中から糸切り底の土師器片が出土しているが，小片のため図化しなかった。

【SK38 土坑】（第252図）

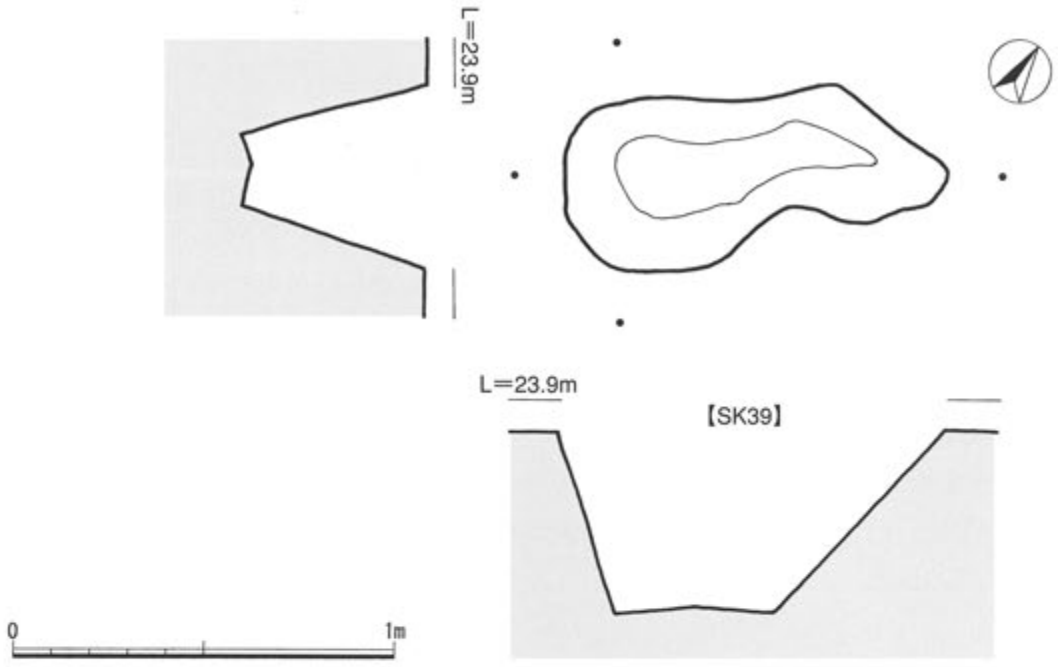
SK38は，SK37と同様にE-17区で検出されている。2基のピットが上面でつながった形状を呈しており，長径58cm・短径は33cmと20cm・深さ36cmである。断面形も2つの逆台形がつながったものである。埋土中から糸切り底の土師器片が出土しているが，小片のため図化しなかった。

【SK39 土坑】（第253図）

SK39はF-17区で検出されている。長径104cm・短径48cmで中央部付近でややくびれた不正形を呈する。深さは49cmで，断面形は逆台形状である。埋土中から土師器が出土しているが，小片のため図化しなかった。



第252図　SK33～38



第253図　SK39

⑥ＳＰ（ピット）

中世に帰属すると考えられるピットは36基確認された。埋土状況・出土遺物から判断したが，古代に遡る可能性のあるピットを幾分含んでいる可能性もある。

SP42（第254図）

SP42はB-16区で検出された。上場33cm・下場15cm・深さ49cmである。正面形態は円形，断面形態は逆台形状に近いが，底面中央部がやや尖底状となる。埋土中から糸切り底の土師器が１点出土したが，小片のため図化しなかった。

SP43（第254図）

SP43はC-13区で検出された。上場32cm・下場14cm・深さ29cmである。正面形態は円形，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から糸切り底の土師器が１点出土したが，小片のため図化しなかった。

SP44（第254・257図）

SP44はC-17区で検出された。上場47cm・下場37cm・深さ21cmである。正面形態は不正形，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が出土している。

1270は土師器である。口径12cmを測る。体部はやや弯曲して立ち上がり，口縁部付近で若干外反するものである。

SP45（第254・257図）

SP45はD-17区で検出された。上場37cm・下場13cm・深さ45cmである。正面形態は楕円形，断面

形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が出土している。

1274は土師器である。体部のみ残存しており，器壁はやや厚い。

SP46（第254図）

SP46はSP45と同じくD-17区で検出された。上場39cm・下場24cm・深さ52cmである。正面形態は楕円形，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から瓦質土器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP47（第254・257図）

SP47はD-14区で検出された。上場29cm・下場14cm・深さ36cmである。正面形態は不正楕円形，断面形態は逆台形状に近いが，底部が若干傾斜する。埋土中から土師器が出土している。

1266は土師器埦の底部である。体部及び高台部分を欠損している。古代に遡る可能性もある。

SP48（第254・257図）

SP48はE-14区で検出された。上場29cm・下場14cm・深さ43cmである。正面形態は不正形を呈し，断面形態も底部が若干盛り上がる形状を呈する。埋土中から土師器が出土している。

1262は土師器である。口径13.4cmを測る。体部は直線的に立ち上がっている。

SP49（第254図）

SP49はE-16区で検出された。上場27cm・下場21cm・深さ33cmである。正面形態は不正形を呈し，断面形態は逆台形状に近いが，底部が若干傾斜する。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP50（第254図）

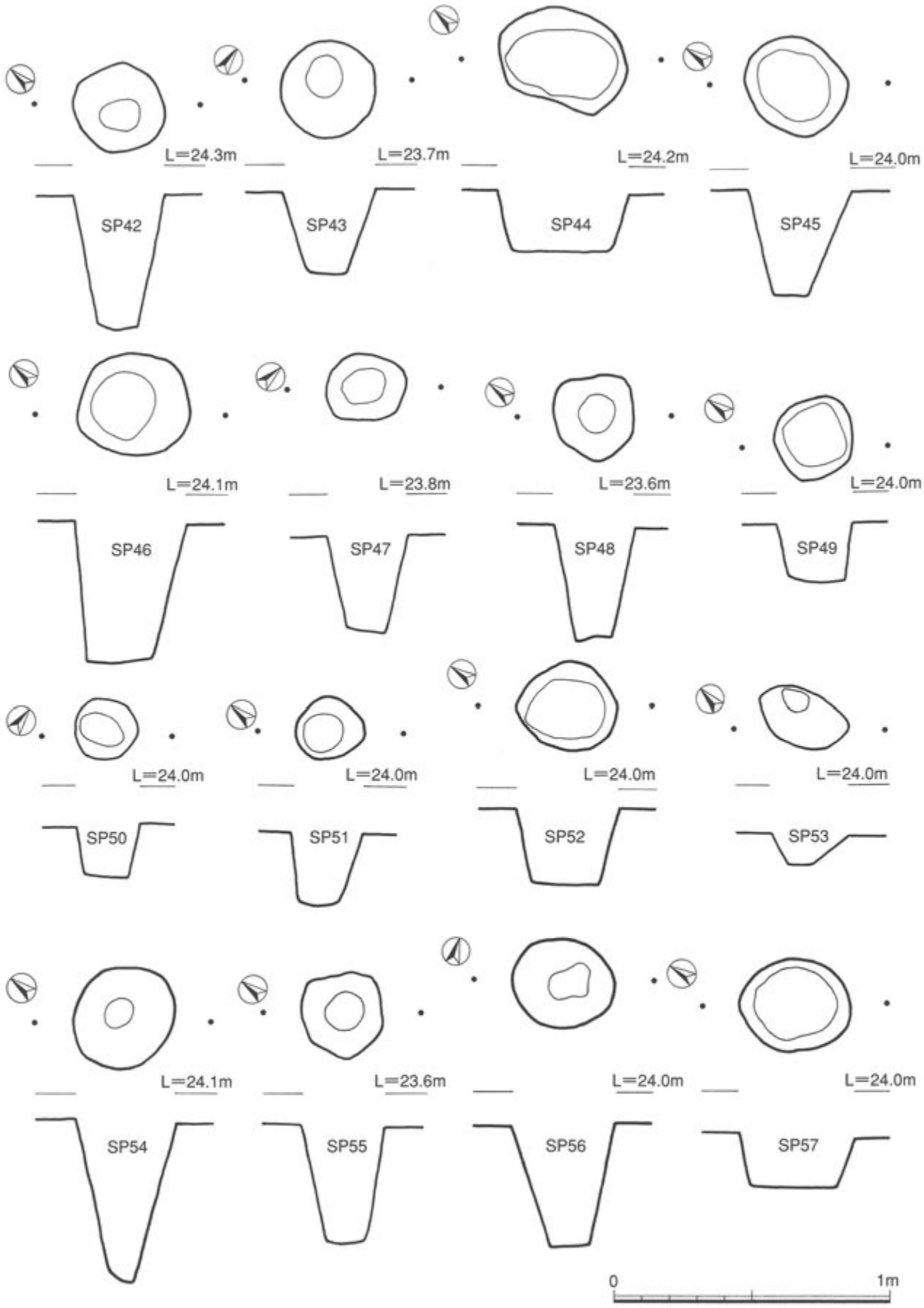
SP50はSP49と同じくE-16区で検出された。上場22cm・下場16cm・深さ19cmである。正面形態は円形を呈し，断面形態は逆台形状に近い。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP51（第254図）

SP51はSP49・SP50と同じくE-16区で検出された。上場25cm・下場14cm・深さ26cmである。正面形態は不正円形を呈し，断面形態は逆台形状に近いが底部がやや丸底となっている。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP52（第254図）

SP52はE-18区で検出された。上場36cm・下場25cm・深さ27cmである。正面形態は楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が出土しているが，小片のため図化しなかった。



第254図　SP42～57

SP53（第254・257図）

SP53はE-17区で検出された。上場27cm・下場9cm・深さ14cmである。正面形態は不正楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。浅いピットである。埋土中から土師器が出土している。

1260は土師器である。口径12.4cmを測る。器壁はやや厚く，体部は若干弯曲して立ち上がる。

SP54（第254・257図）

SP54はSP53と同じくE-17区で検出された。上場35cm・下場9cm・深さ58cmである。正面形態は不正楕円形で，断面形態は底部が傾斜する形状を呈する。深いピットである。埋土中から土錘が出土している。

1280は土錘である。全長4.6cmを測る。埋土等から判断して中世に含めたが，遺物自体は中世のものか断定できない。古代あるいは近世の可能性もある。

SP55（第254図）

SP55はSP53・SP54と同じくE-17区で検出された。上場30cm・下場14cm・深さ43cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP56（第254・257図）

SP56はSP53・SP54・SP55と同じくE-17区で検出された。上場36cm・下場15cm・深さ43cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器底部が出土している。1276は土師器底部である。体部及び高台部分を欠損しており，全体の形状は不明である。古代に遡る可能性もある。底径5.4cmと小形の印象を受ける。

SP57（第254図）

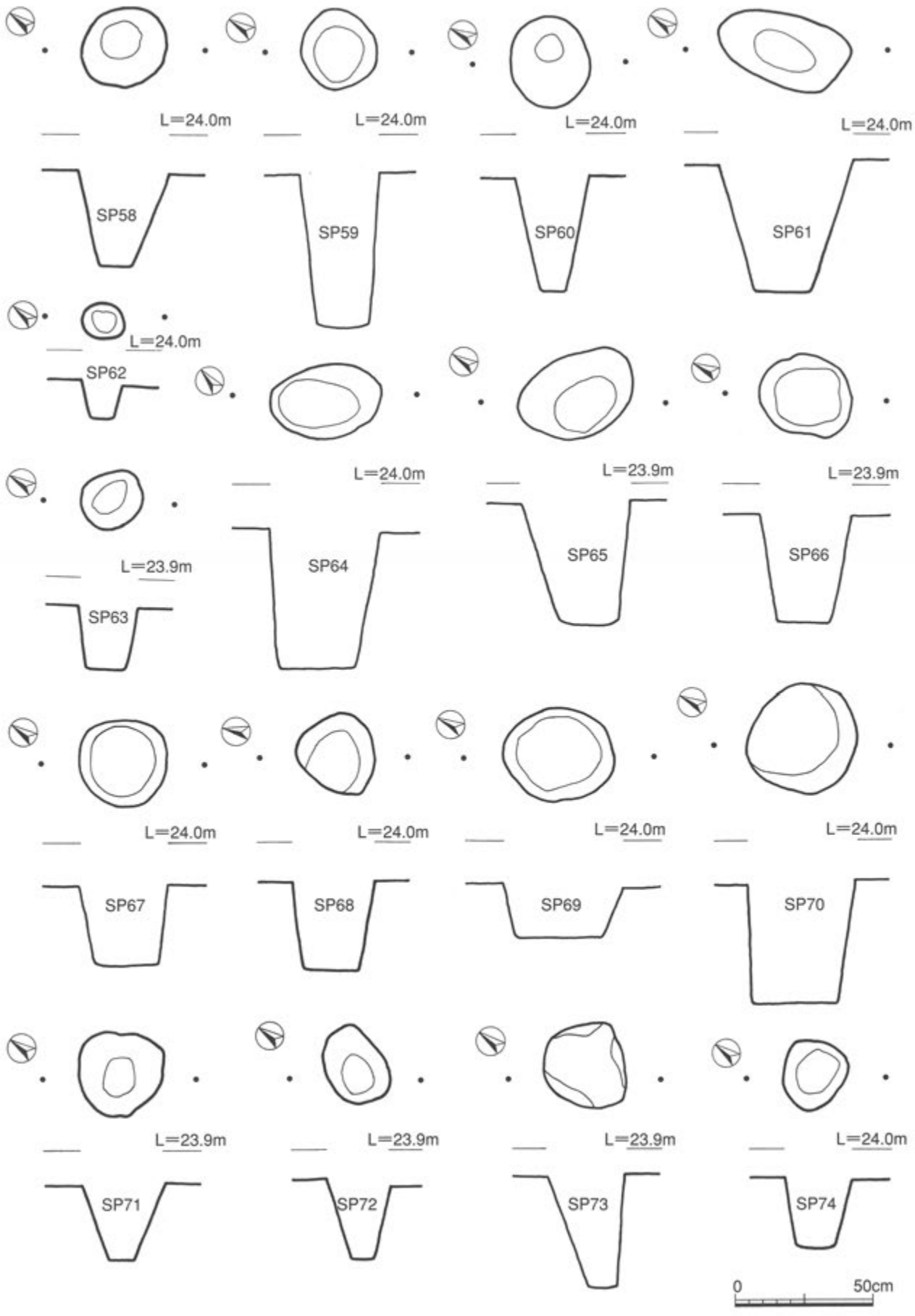
SP57はSP53～SP56と同じくE-17区で検出された。上場41cm・下場32cm・深さ19cmである。正面形態は楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。浅めのピットである。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP58（第255図）

SP58はSP53～SP57と同じくE-17区で検出された。上場32cm・下場13cm・深さ35cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が2点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP59（第255・257図）

SP59はSP53～SP58と同じくE-17区で検出された。上場28cm・下場20cm・深さ56cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。深いピットである。埋土中から土師器皿が出土している。



第255図　SP58～74

1273は土師器皿である。口径6.2cmを測る。器壁は厚く底部は糸切り底となっている。

SP60（第255図）

SP60はSP53～SP59と同じくE-17区で検出された。上場27cm・下場10cm・深さ42cmである。正面形態は楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP61（第255・257図）

SP61はE-18区で検出された。上場48cm・下場22cm・深さ48cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が1点出土している。

1255は土師器で，口径12.8cmを測る。器壁はやや厚く，体部はわずかに弯曲して立ち上がる。

SP62（第255・257図）

SP62はE-17区で検出された。上場15cm・下場10cm・深さ14cmである。正面形態は不正楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。浅いピットである。埋土中から土師器皿が1点出土している。

1274は土師器皿である。口径7.8cmを測る。器壁は薄く底部は糸切り底となっている。

SP63（第255・257図）

SP63はF-17区で検出された。上場21cm・下場16cm・深さ23cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。浅いピットである。埋土中から土師器皿が1点出土している。

1258は土師器の口縁部である。体部は直線的に立ち上がるが，口縁先端へ向かって先細りとなるものである。

SP64（第255図）

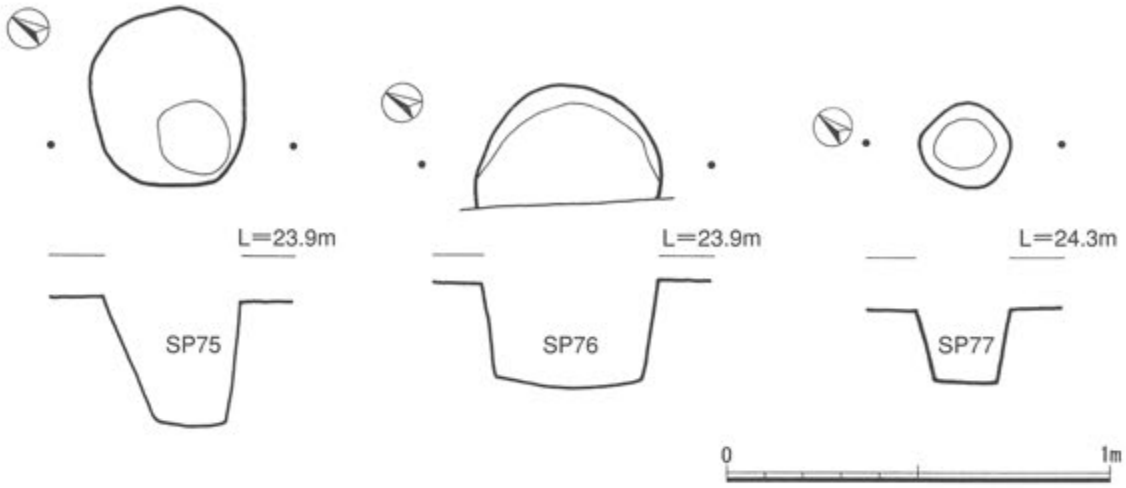
SP63はF-16区で検出された。上場40cm・下場30cm・深さ51cmである。正面形態は不正楕円形で，断面形態は方形状を呈する。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP65（第255図）

SP65はF-17区で検出された。上場39cm・下場22cm・深さ46cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP66（第255図）

SP66はSP65と同様にF-17区で検出された。上場33cm・下場21cm・深さ40cmである。正面形態は不正円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。



第256図　SP75～77

SP67（第255図）

SP67はSP65・SP66と同様にF-17区で検出された。上場32cm・下場25cm・深さ30cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP68（第255図）

SP68はF-18区で検出された。上場29cm・下場22cm・深さ33cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器が1点出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP69（第255・257図）

SP69はF-17区で検出された。上場43cm・下場34cm・深さ20cmである。正面形態は楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。浅めのピットである。埋土中から土師器2点と染付1点が出土している。

1272は土師器で口径15cmを測る。体部はやや弯曲して立ち上がり，口縁部付近でわずかに外反している。1286は土師器坏の底部である。糸切り底で底径6.8cmを測る。1279は染付の口縁部である。端部が端反り状に外反する。内面に文様が描かれている。

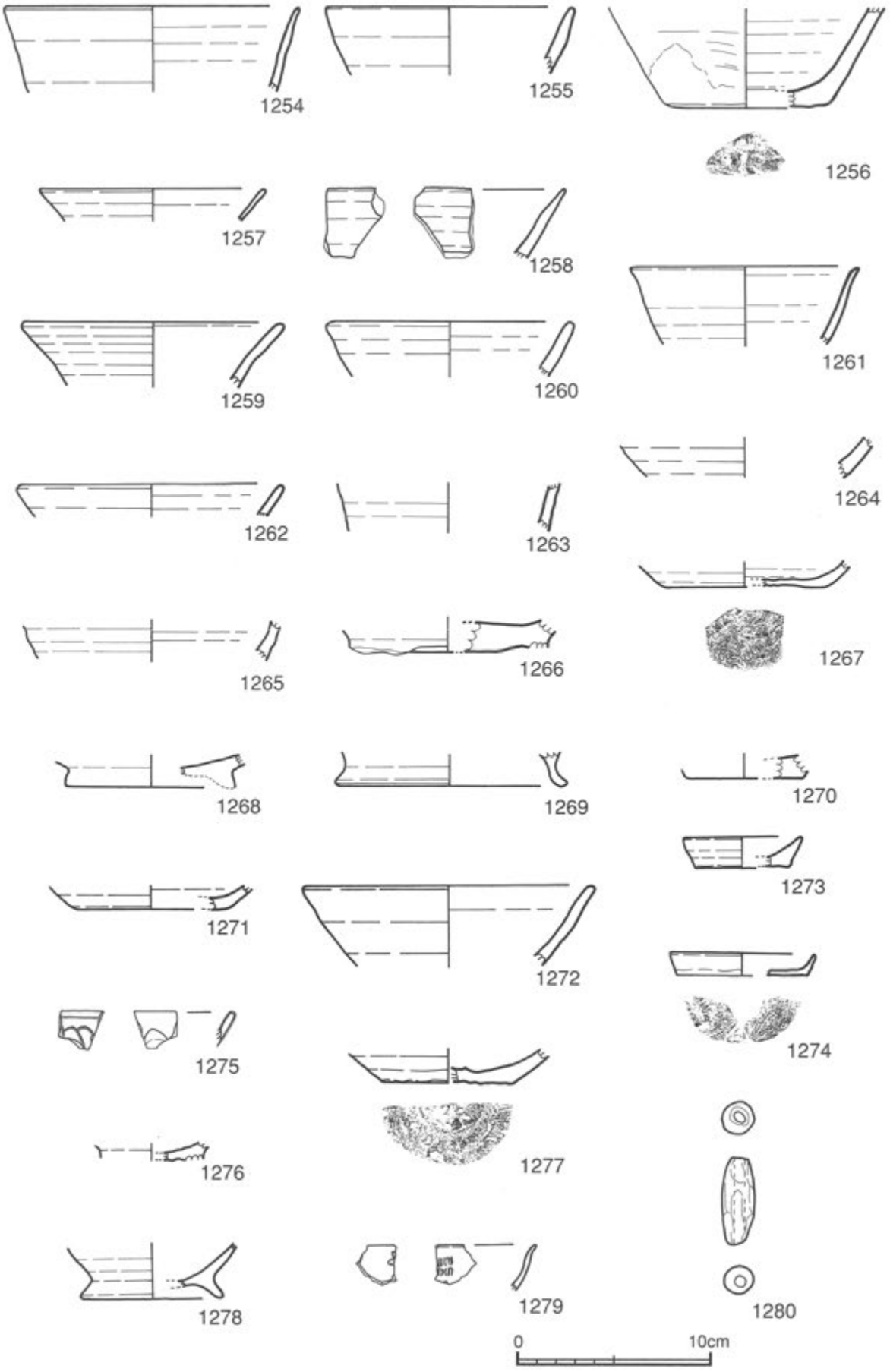
SP70（第255・257図）

SP70はF-18区で検出された。上場39cm・下場33cm・深さ45cmである。正面形態は円形で，断面形態は方形状を呈するが，やや斜めに掘られている。埋土中から土師器1点が出土している。

1271は土師器坏の底部と思われる。底径7.8cmを測る。

SP71（第255・257図）

SP71はF-17区で検出された。上場30cm・下場11cm・深さ28cmである。正面形態は不正形で，断



第257図　中世SP出土遺物

面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器１点が出土している。

1257は土師器である。口径11.6cmと小形である。器壁は薄く体部は直線的に立ち上がる。

SP72（第255図）

SP72はSP71と同様にF-17区で検出された。上場23cm・下場10cm・深さ30cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器１点が出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP73（第255・257図）

SP73はG-17区で検出された。上場27cm・下場12cm・深さ42cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器１点が出土している。

1263は土師器の体部である。やや直立ぎみであり，体部の深い器形を呈すると思われる。

SP74（第255・257図）

SP74はG-18区で検出された。上場24cm・下場15cm・深さ26cmである。正面形態は不正形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器１点が出土している。

1254は土師器である。口径15cmと大形である。体部は直立ぎみに立ち上がり，口縁端部へ向かって先細りとなる。体部の深い器形を呈すると思われる。

SP75（第256図）

SP75はG-17区で検出された。上場35cm・下場20cm・深さ33cmである。正面形態は不正楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器１点が出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP76（第256図）

SP76はG-18区で検出された。上場45cm・下場40cm・深さ29cmである。調査区境に接しているため，正面形態は半円形で，断面形態は方形状を呈する。埋土中から青磁１点が出土しているが，小片のため図化しなかった。

SP77（第256・257図）

SP77はH-27区で検出された。上場23cm・下場17cm・深さ20cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から土師器埦の高台が１点出土している。

1268は土師器埦の高台である。高台径8.8cmを測る。

ＳＳＰ（礫石を伴うピット）

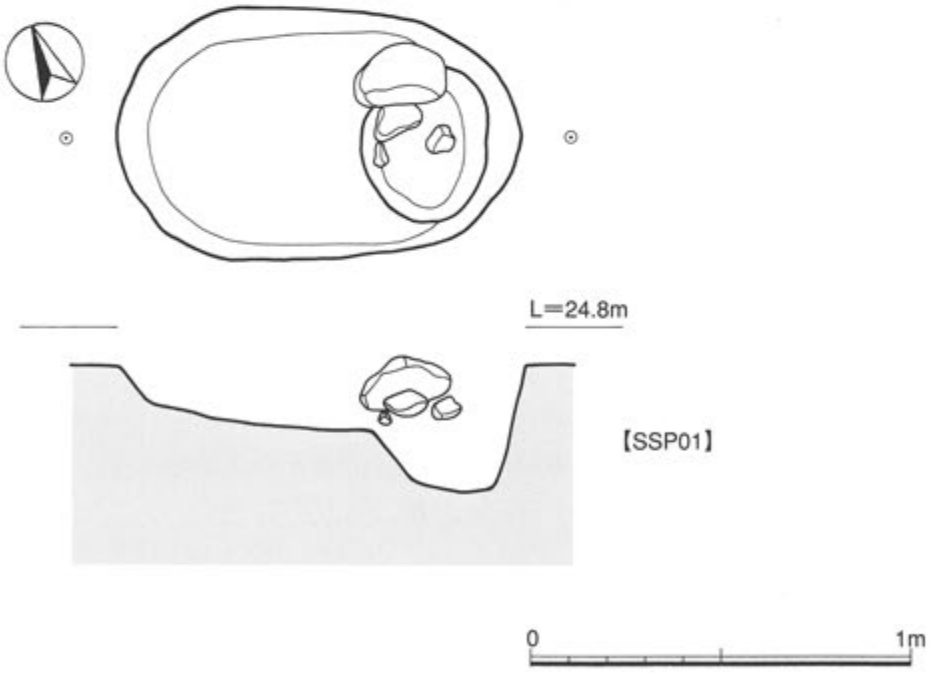
中世に帰属すると思われるピットのうち，ピット内に１～数個の礫が入っているものが8基あった（SSP01～SSP08）。礫を含むピットは比較的まとまって検出されているものの，それらだけで建物跡として復元することはできなかった。しかし，SSP01がSB04片廂建物跡のP2に対応することから，柱穴の根固め石等の建物に関係する機能をもつものであると考えられる。柱穴の埋土中からは須恵器や糸切り底の土師器が出土しており，時期的には古代～中世あたりのものと想定されるが，時期を明確にしえないものもあり，一括して扱った。これら柱穴内に礫石を含むピットは，SSPとして他のピットとは区別して扱うことにする。

【SSP01 ピット】（第258図）

SSP01はG-17区で検出された。長径107cm・短径57cmと楕円形を呈する。断面形は東側が１段深くなる段堀状を呈し，深い方で33cmである。土坑をピットが切っている可能性も考えられるが，明確には出来なかった。この１段深くなる方の検出面付近から礫石が４個出土している。SSP01はSB04片廂建物跡のP2に対応するものであることから，根固め石等の役割を果たしていたと想定される。

【SSP02 ピット】（第259図）

SSP02はB-16区で検出された。長径52cm・短径50cmの円形を呈する。深さは約76cmと深く，断面形は逆台形状で底径13cmと先細りになるものである。検出面付近と柱穴の中位あたりから礫石が３個出土している。



第258図　SSP01

【SSP03 ピット】（第259図）

SSP03はD-16区で検出された。長径50cm・短径45cmとほぼ円形を呈する。深さは52cmで，深さ約40cmあたりで短径20cmほどと細くなる。断面形は段堀状の形状を呈する。礫石は検出面から5cmほど掘り下げたところから，深さ40cmあたりにかけて3個出土している。また埋土中からは糸切り底の土師器が1点出土しているが，親指爪ほどの小片のため図示しなかった。

【SSP04 ピット】（第259図）

SSP04は，SSP03と同じくD-16区で検出された。長径34cm・短径32cm・深さ62cmと小形で，円形を呈する。柱穴内からは長さ25～30cm・厚さ20cmほどの大きな礫石が2個縦に積まれるようにして出土した。

【SSP05 ピット】（第259図）

SSP05はE-17区で検出された。長径41cm・短径36cm・深さ30cmのほぼ円形を呈する。断面形は逆台形状である。柱穴内の中位あたりから礫石が2個出土している。

【SSP06 ピット】（第259図）

SSP06は，SSP05と同じくE-17区で検出された。長径36cm・短径34cm・深さ53cmの円形を呈する。断面形は逆台形状である。柱穴内の下位から礫石が1個出土した。また埋土中からは，須恵器の胴部片が1点出土している。

1281は須恵器の胴部片である。外面は平行タタキで，内面は同心円文タタキを有する。

【SSP07 ピット】（第259図）

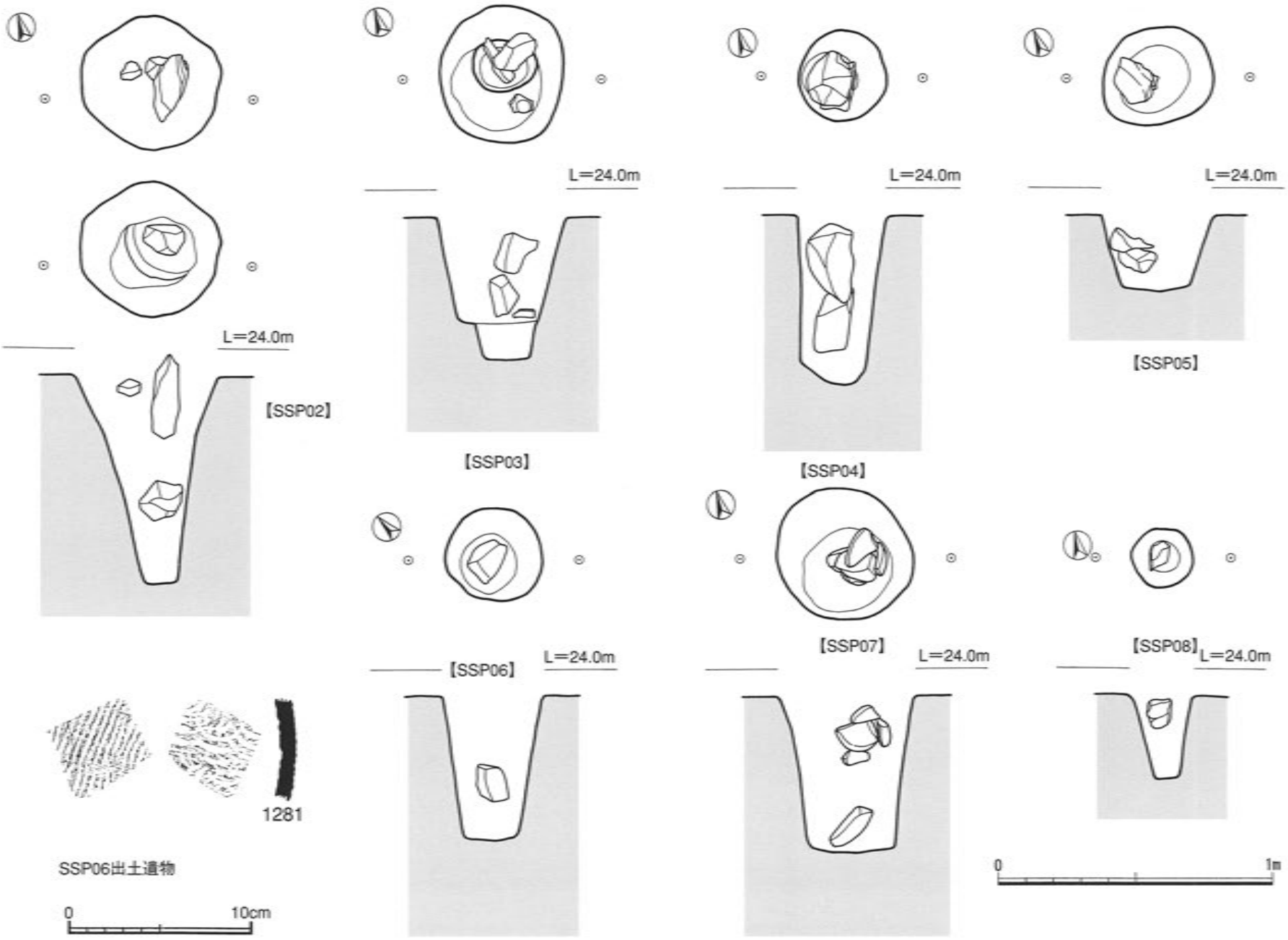
SSP07は，D-16区で検出された。長径50cm・短径48cm・深さ58cmの円形を呈する。断面形は逆台形状である。検出面付近から4個固まるように出土している。また底面からも1個の礫石が出土している。

【SSP08 ピット】（第259図）

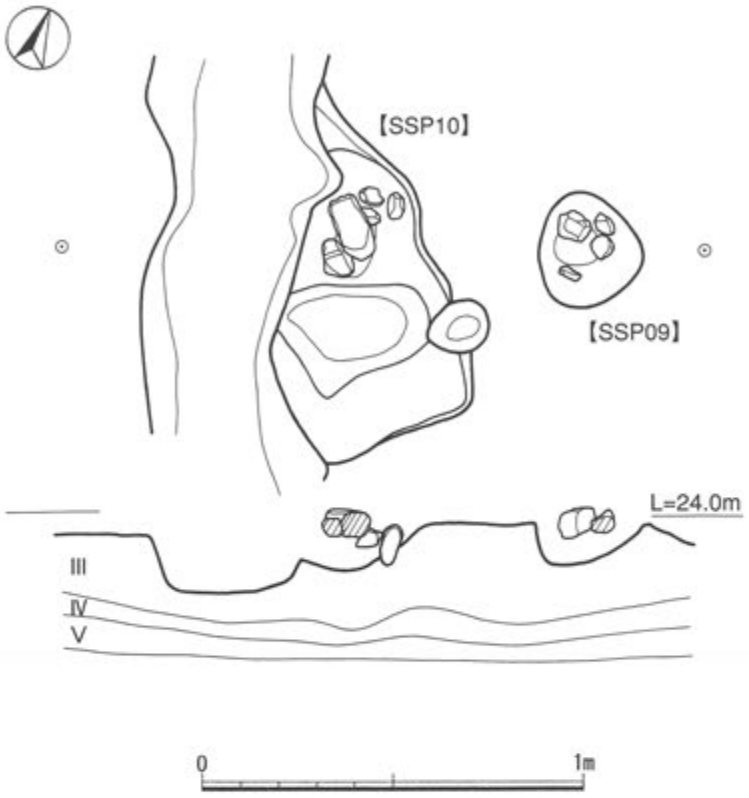
SSP08は，SSP07と同じくD-16区で検出された。長径23cm・短径22cm・深さ31cmの円形を呈する。断面形は逆台形状である。検出面付近から礫石が1個出土している。

【SSP09 ピット】（第259図）

SSP09はF-19区でSD01に隣接して検出された。長径30cm・短径27cmの卵形を呈し，深さは12cmと他の柱穴より浅い。検出面から礫石4個が検出されているが，礫自体は火を受けて焼けている。



第259図　SSP02～08



第260図　SSP09・SSP10

【SSP10 ピット】（第260図）

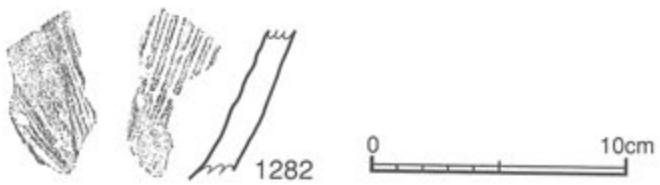
SSP10は，SSP09に隣接してF-19区から検出された。長径約100cm・短径約50cmほどの不正形を呈し，SD01と切り合っているように見えるが，SD01の一部である可能性も残されている。深さは約12cmでSSP09と同じく浅い。検出面から礫石５個がまとまるように検出されている。礫自体は火を受けて焼けている。SSP09・10は他のSSP01～08とは形状が異なるうえ，礫自体も火を受けているなど様相を異にしており，同列の遺構として扱えるか疑問な点もあるが，礫の出土状況等を踏まえ，一応同一の遺構として扱っておきたい。

⑦ＳＦ（焼土）

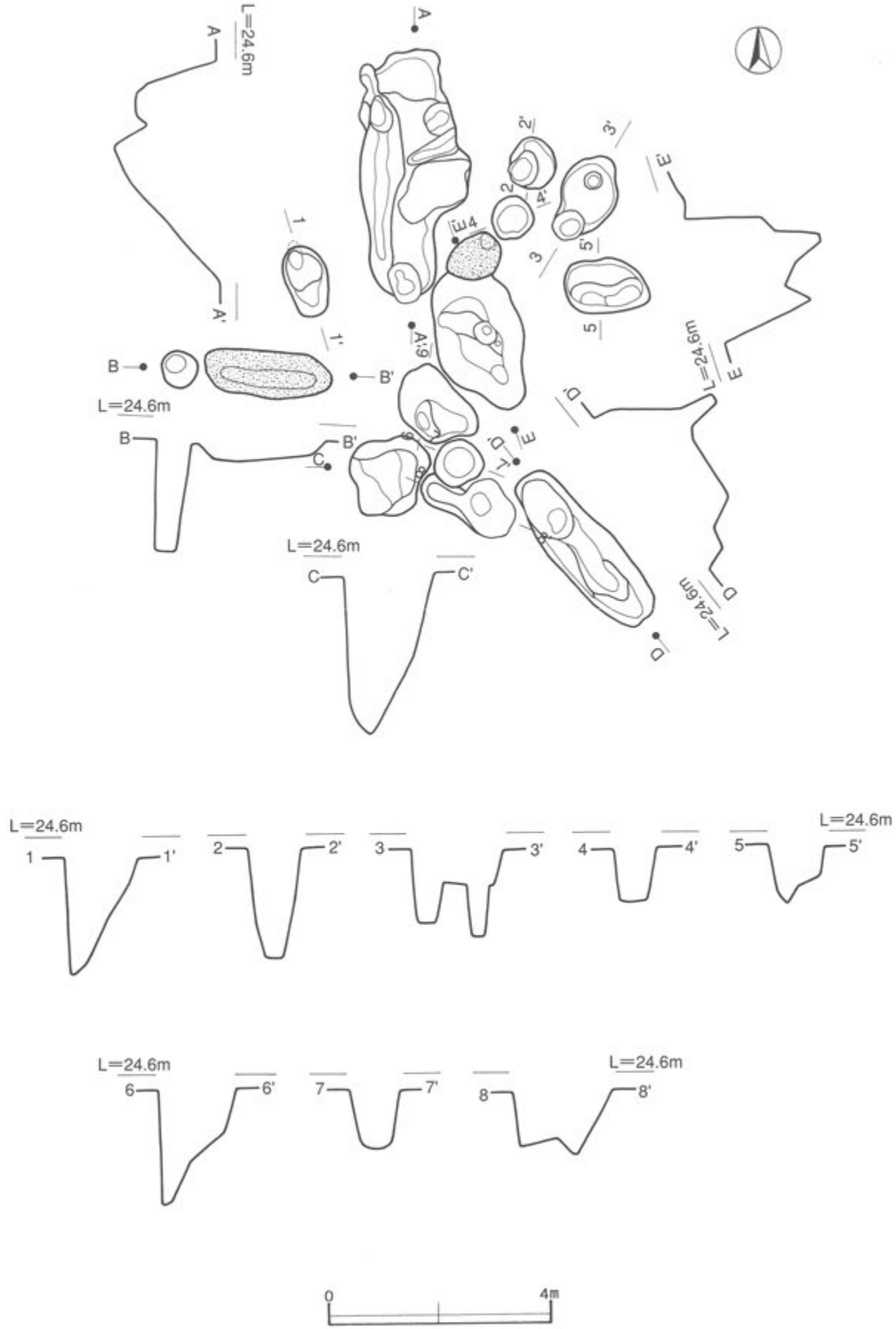
【SF02】（第261図）

SF02はC・D-22・23から検出された。約230cm×約110cmほどの範囲に複数の土坑やピットあるいは樹痕と思われるようなものが複雑に切り合ったような複雑な形態を呈している。うち約190cm×約90cmの範囲（薄いアミ掛け部分）が赤く焼けた焼土部分となっており，約135×約100の範囲（濃いアミ掛け部分）に炭や炭化物の混ざる黒色土が広がっている。埋土中からは瓦質土器の擂鉢が１点出土している。

1282は瓦質土器の擂鉢である。外面はナデ調整が主であるが，一部にハケ目が認められる。内面



第261図　SF02



第262図　SF03

には卸し目の条線が入る。

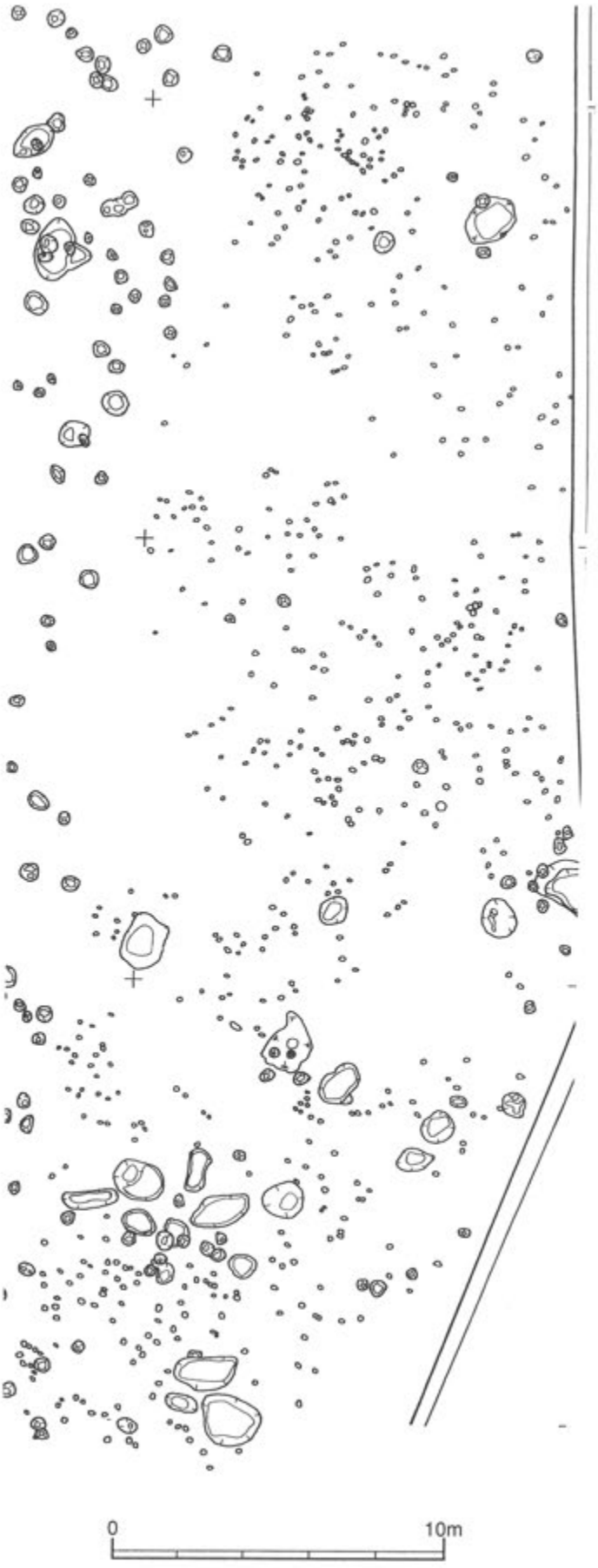
【SF03】（第262図）

SF03はE-33区から検出された。複数のピットや土坑が約220cm×約175cmの範囲に集中している。うち２ヶ所（薄いアミ掛け部分）に土が赤く焼けた焼土が見られ，他の土坑・ピットからは埋土中に炭や炭化物の出土が見られた。

ＳＸ（性格不明遺構）

【SX01（小ピット群）】（第263図）

SX01はB・C-13～18区で検出された。本遺跡全面に広がる一般的な柱穴と推定されるものよりもはるかに小さなものである。この区域以外には見られないことから，極めて注目すべき遺構と考えられる。ただ，時期を比定するのに躊躇せざるを得なかった。それは，１基１基が非常に小さいことから，その埋土も黒～暗褐色を中心とするものの，それ以外にも周辺に広がっている土，つまり当時の表土と考えられる土の色調によってはその埋土も多様となることが想定され，事実，埋土を詳細に観察した結果，実にさまざまな色調を呈する埋土が見られたことによる。しかし，これらの小ピットの時期は，その広がった範囲が極めて限られていることから，ある１時期と考えるべきであって，埋土の違いによって，異なる多くの時期にまたがった遺構と考えることは，決してしてはならないことは明らかであろう。そうしたとき，この遺構の時期は，本遺跡の中心をなしている時期と捉えることが良いのではないかと考えるのである。もし，異なった時期を考えるのであれば，この区域だけに建物の痕跡と判断される柱穴が見られないことはどのように説



第263図　SX01

明できるのだろうか。これら建物跡の柱穴と同じ時期であるからこそ，この区域だけに柱穴が見られないことの説明が可能となると考えられる。異なった時代であるならば，B-16～18区を中心として，もっと柱穴が広がっていてもよいと考えられるのである。

次に，この小ピット群の性格であるが，細かく見るとある間隔で並んだ状況も見られないことはないことから，柵跡の可能性を完全に否定することはできないものの，これについても積極的に肯定できるほどの論拠もないことから，ここでは一応，杭跡として捉えておきたい。

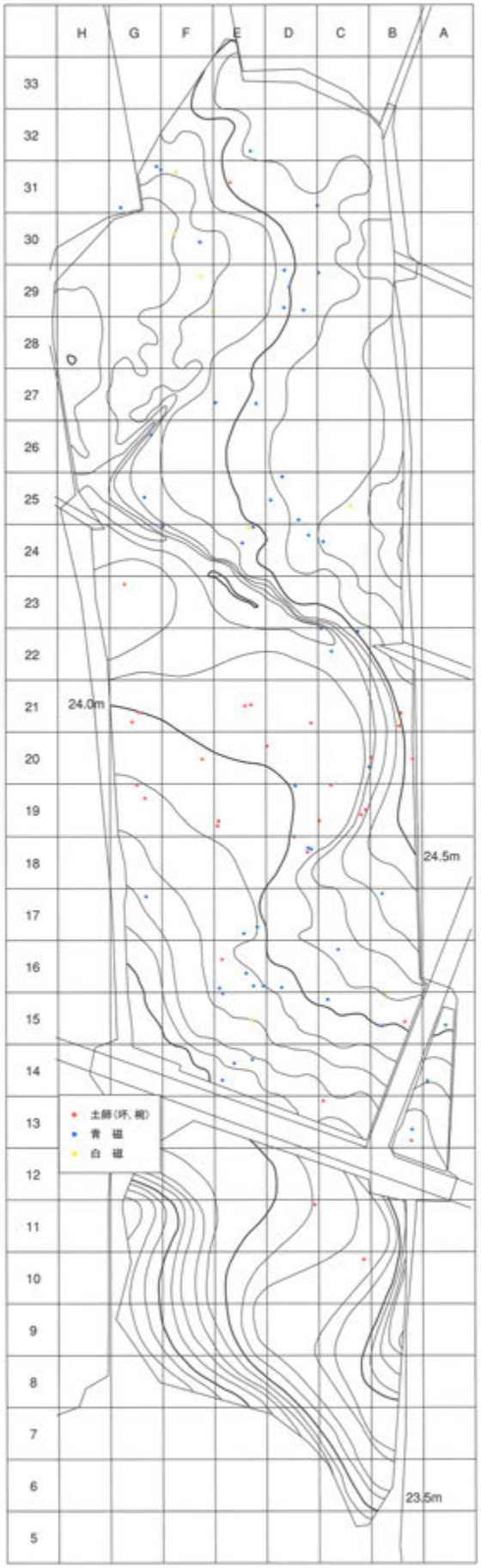
5-2：中世の出土遺物

中世の出土遺物は，土師器・須恵器・瓦質土器・青白磁・中国青花などが出土した。特に安茶ヶ原遺跡から出土した染付類の大部分が中国青花であることは，中世における本遺跡の性格を知る上で興味深いものである。

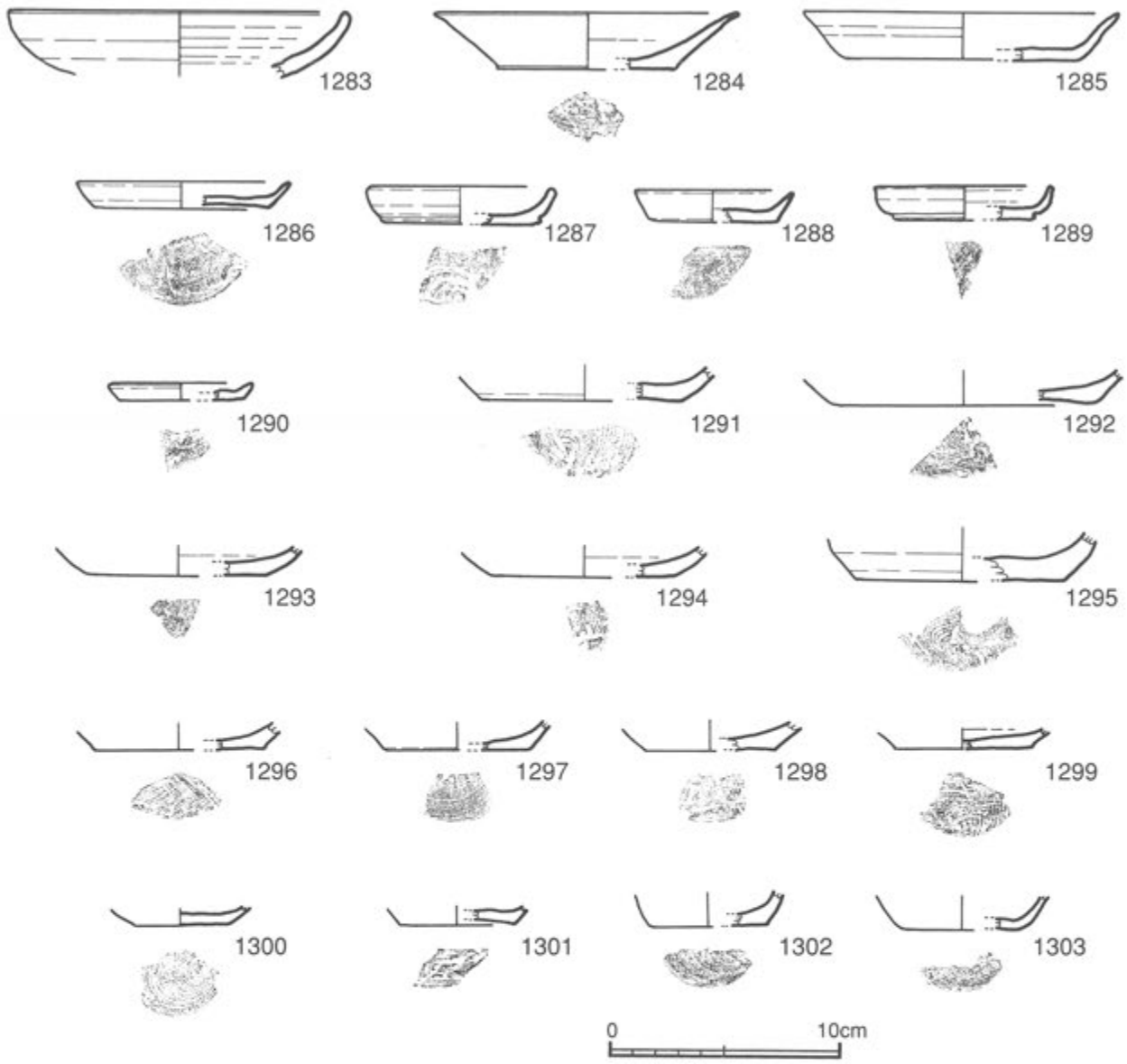
①土師器（第265図）

1283～1290は皿である。1283は口径14.8cmで，体部が丸みをもつものである。1284は口径13.2cmで，体部は直線的に立ち 上がり，端部付近で若干外反する。口縁端部へ向かって先細りとなる。1285は口径13.8cm・底径10.2cmで，口径に比して底径の大きなものである。体部は外反しながら立ち上がる。1286は9.4cm・器高1.2cmと浅い皿である。1287・1288は口径8cm・7.8cmである。器壁は厚めで，体部は丸みをもって立ち上がる。底部には粘土がはみ出している。1288は口径7cm・器高1.4cmの皿である。1290は口径6.4cmで器高は8mmの小形で浅い皿である。

1291～1303は皿もしくは坏の底部である。1291・1292・1301は底部がやや上げ底となる

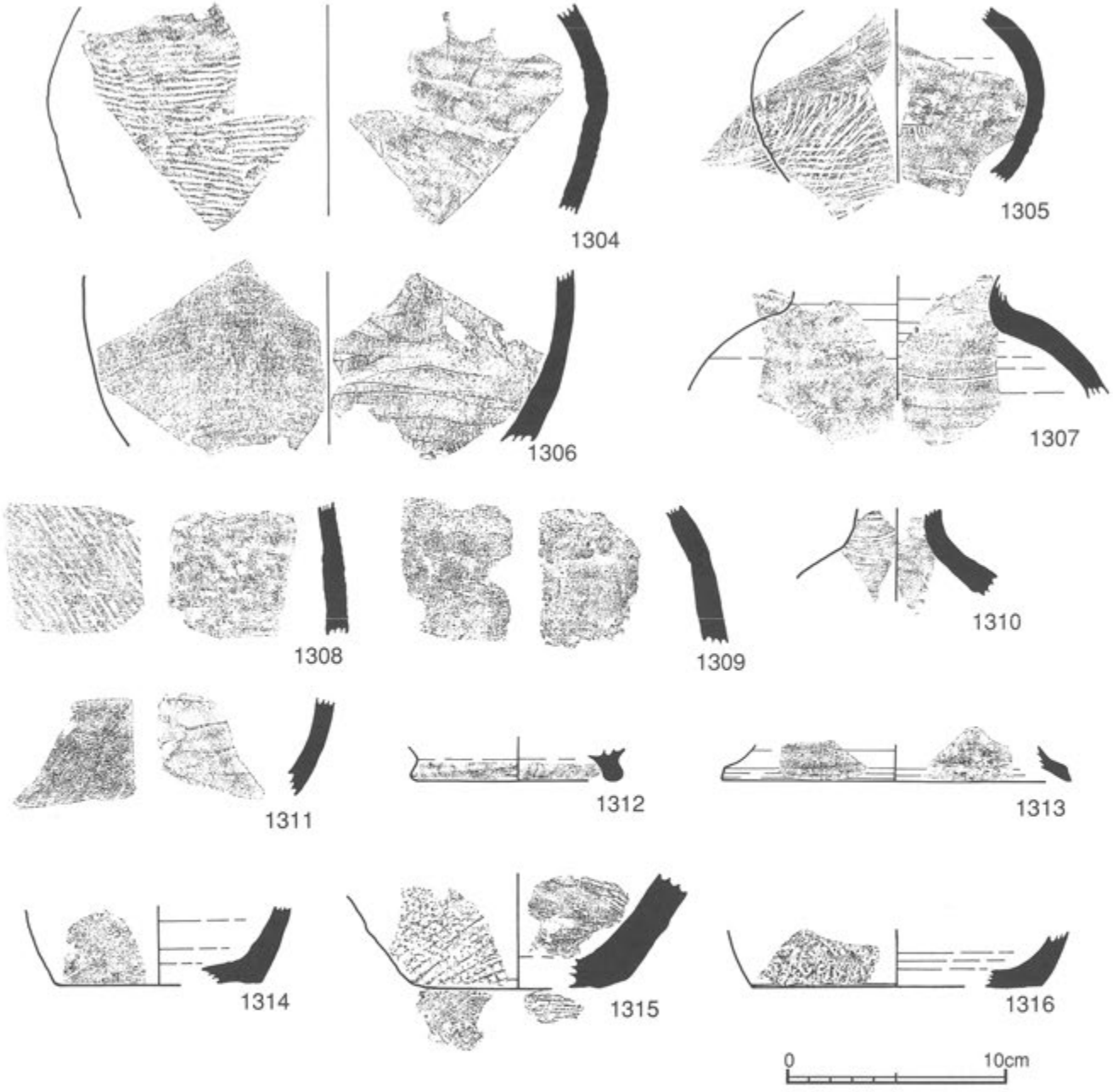


第264図　中世遺物分布図



第265図　土師器 6

ものである。底径はそれぞれ，1291が8.6cm，1292が11.4cm，1310が5cmである。1293・1294はともに底径7.8cmを測る。体部が内弯しながら立ち上がる器形を呈すると思われる。1295は底径9cmである。器壁は厚く，体部は内弯しながら立ち上がる器形を呈すると思われる。1296・1298・1299は底部からやや立ち上がったのち外にひらく器形を呈する。1298は器壁が厚い。底径はそれぞれ，1296が7.4cm，1298が5.6cm，1299が5.8cmである。1300・1302・1303は体部が丸みをもって立ち上がるものである。1302は器壁が厚く器高の深い器形を呈するものと思われる。1303は逆に器壁が薄く，体部は底部から折り曲げるようにして立ち上がっている。底径はそれぞれ，1300が4cm，1302が4cm，1303が5.2cmといずれも小形のものである。



第266図　須恵器 4

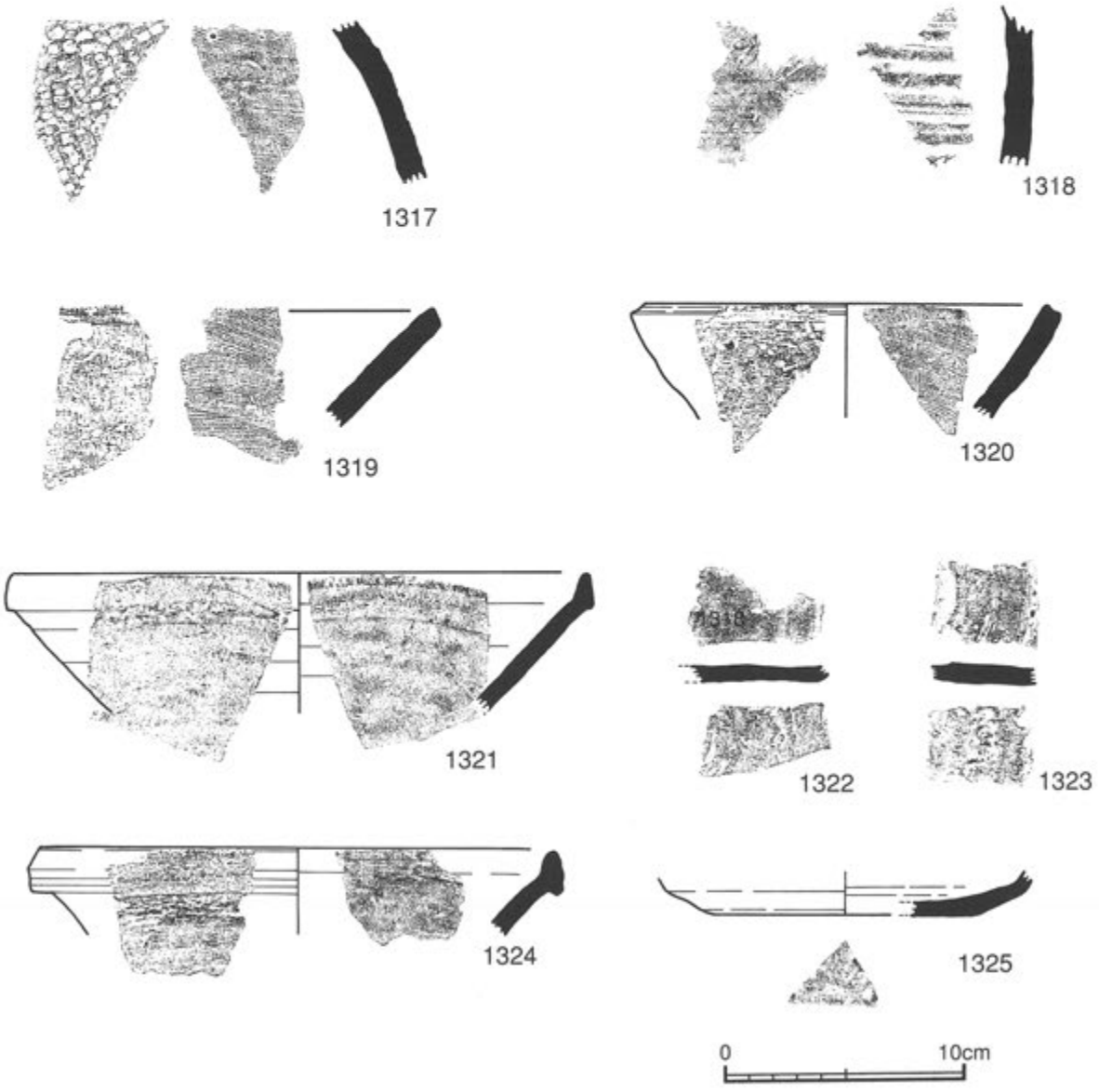
②須恵器（第266～268図）

1304～1311は壺形土器の胴部と思われる。1304は胴部最大径25.8cmである。外面は平行タタキ，内面はナデ調整が行われている。1305は小形の壺で，胴部最大径13.6cmである。外面は平行タタキを縦位・横位・斜位に施し，内面はナデ調整が行われている。1306・1311は外面は横位のナデ，内面はケズリが施されている。1307は外面はナデ調整で，内面にはカキ目が見られる。1308は外面は

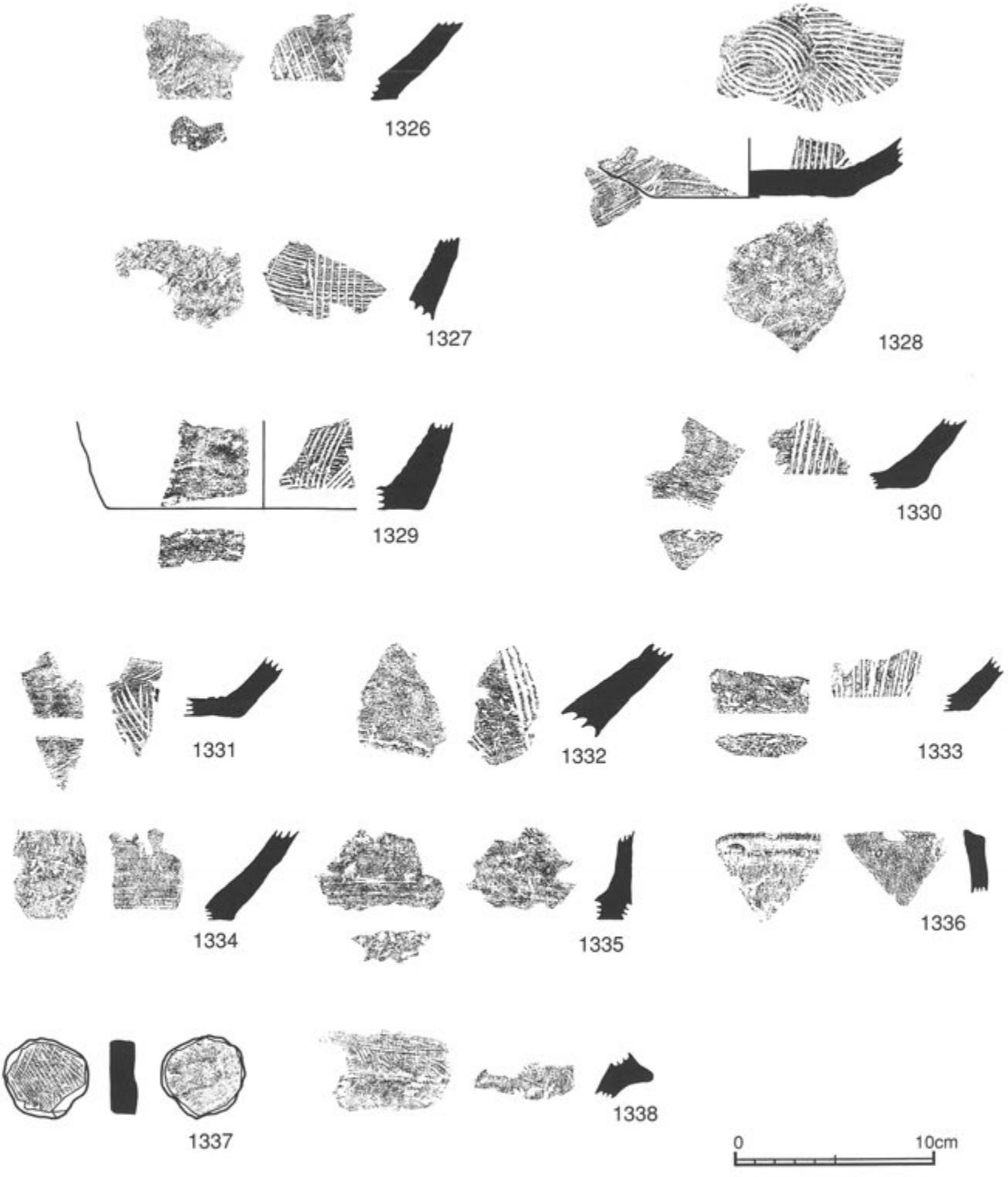
平行タタキを斜位に施し，内面にはケズリが見られる。1309は内外面ともにナデ調整である。1310は壺の頸部である。外面には回転ナデが施されている。1303は埦の高台で，高台径10cmを測る。断面方形の高台が「ハ」字状に付き，端部を丸くおさめている。1313は蓋と思われる。口径16cmで，端部が垂直に立つものである。1317は外面は格子目タタキ，内面はカキ目が施されている。1325は坏もしくは鉢の底部と思われる。体部が弯曲しながら立ち上がる器形と思われる。

1314～1316は壺もしくは鉢形土器の底部と思われる。1314は底径9.4cmで，外面はナデ調整である。1315は底径8.6cmで器壁全体に厚みがある。外面は格子目タタキ，内面にはカキ目が見られる。1316は底径13.4cmである。外面はナデ調整である。

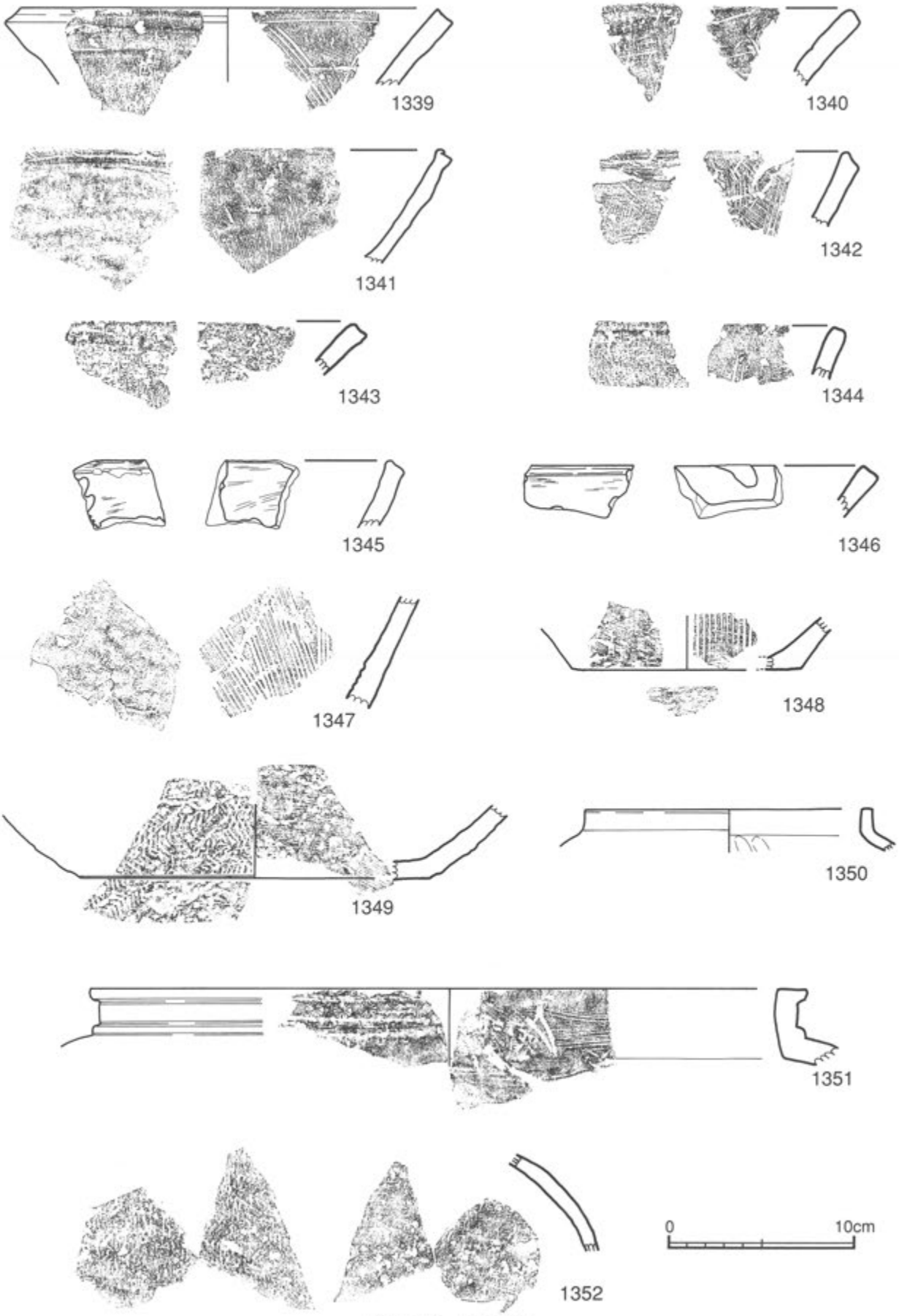
1319～1321・1324は鉢の口縁部である。1319・1320は外面がナデ調整で，内面にはハケ目調整が行われている。1320は口径17cmである。1321・1324は東播磨系須恵器である。内外面ともにナデ調整が施されている。1321は口径24.2cmで，口縁端部を上下に拡張するものである。拡張は上方の方がより強い。1324は口径21.8cmで，口縁端部をさらに上下に拡張するものである。



第267図　須恵器5


1326
1327
1328
1329
1330
1331
1332
1333
1334
1335
1336
1337
1338
0
10cm

第268図　須恵器 6


1339
1340
1341
1342
1343
1344
1345
1346
1347
1348
1349
1350
1351
1352
0
10cm

第269図　瓦質土器

1322・1323は器種を特定できない。内外面ともにナデ調整が施されている。

1326～1334は擂鉢と思われる。1326は体部がほぼ直線的に立ち上がるものである。外面はナデ調整で，内面はナデ調整の上に縦位の卸し目が間隔を空けて施され，深い条線となっている。1327は内面にまず横位のハケ目を施し，その上に間隔を空けて縦位の卸し目を施している。1328は底部で，底径10cmを測る。内面見込み部分に卸し目を半円ずつ描き入れて円形の条線を構成しており，そこから体部へ向かって縦位の卸し目を施している。1329も底部で底径16cmである。器壁は厚めで，外面はナデ調整，内面は縦位の卸し目を間隔を空けて入れている。1330～1333も1329と同様である。1334は外面はナデ調整，内面はカキ目が施されている。1335・1338は器種を特定できない。内外面ともにナデ調整が施されている。1336は直立する口縁部としたが，鉢形土器の口縁部かもしれない。外面はナデ調整，内面はハケ目調整が施される。1337はメンコである。直径3.6cmで，外面はハケ目調整，内面にはヘラ状工具によるナデ調整が施された器種を転用したものである。

③瓦質土器（第269図）

1339～1340は瓦質の擂鉢と思われる。1339～1346は口縁部で，1339は口径22.2cmである。口唇部を四角くおさめ，外面はナデ調整，内面はナデ調整の上から間隔を空けて卸し目を斜位に入れている。1340も口唇部を四角くおさめるものである。内外面ともにナデ調整である。1341はやや内弯する口縁部である。口唇部はやや凹む。外面はナデ調整で，内面にはナデ調整の上から卸し目が施されている。1342も口唇部を四角くおさめている。外面はナデのち縦位のハケ目調整で，内面は斜位方向の板ナデの上から間隔を空けて卸し目が施されている。1343・1345・1346は，口唇部を四角くおさめるとともに，内外面ナデ調整が施されている。1344は外面がナデ調整，内面はナデ調整の上に卸し目が施されている。

1347は擂鉢の胴部片である。外面はナデ調整，内面は斜位の卸し目が施されている。1348は擂鉢の底部片である。底径12.4cmを測る。外面はナデ調整，内面は縦位の卸し目が施されている。

1349は鉢形土器の底部と思われる。底径19cmを測る。外面は山形状のタタキ目が施されており，内面は横位のハケ目調整がなされている。

1350は壺形状の土器と思われる。口縁部は短く直立するもので，口径15.6cmを測る。内外面ともにナデ調整である。

1351は火鉢と思われる。口径38.6cmを測り，口縁部は端部を外方へ拡張するとともに平坦面を形成している。外面には頸部付け根に１条の突帯を巡らせ，口縁部と突帯の間に花文のスタンプを押捺している。外面はナデ調整，内面はナデ調整の上に一部横位のハケ目調整がなされている。

1352は弯曲する胴部片で，器種は不明である。外面はナデ調整の上に縦位のハケ目，内面はナデ調整の上に横位のハケ目調整が施されている。

④青磁（第270～273図）

碗・皿を中心に龍泉窯系のものが多く出土した。部位で分類したため，器種についての詳細は観察表を参考にされたい。年代としては，14世紀から15世紀代のものが中心であると思われる。

胎土は緻密で，緑がかった灰色を呈するものが多い。釉は全体的に薄くかかり，灰緑色またはやや青みがかった緑色を呈する。

1353～1380・1382～1385・1387は口縁部で，一部わずかに外反するものも見られるが，直口するものがほとんどである。体部から口縁部にかけてのラインは「逆ハ」の字型のものが中心で，腰部が丸みを帯びるものも見られる。文様は外面に雷文，蓮弁文，鎬蓮弁文等が施される。内面は無文のものが多いが，草花文や雷文が施されるものも見られる。1385は，体部が筒状を呈し，内面は一部露胎する。

1381・1388～1393は体部のみの資料である。1390は腰部が張る形状を呈するものである。施釉は，内面と外面腰部までで，腰部以下は露胎する。1392は腰部が強く屈曲するもので，体部は筒状を呈するものと思われる。

1386・1394～1417は口縁部が端反りになるものである。端反りの程度は様々で，緩やかなものと強く屈曲するものが見られる。口縁部先端は丸くつくられ，器壁は厚めである。1418～1432は底部である。1420・1431は見込みに印刻の花文が施される。1432は高台や体部を打ち欠いてメンコにしたものと思われる資料である。

⑤白磁（第273・274図）

碗，坏または皿が出土した。部位で分類したため，器種についての詳細は観察表を参考にされたい。胎土は緻密で灰白色を呈し，釉は灰色味を帯びるものが多い。おおよその年代としては，１５世紀代のものが中心であると思われる。

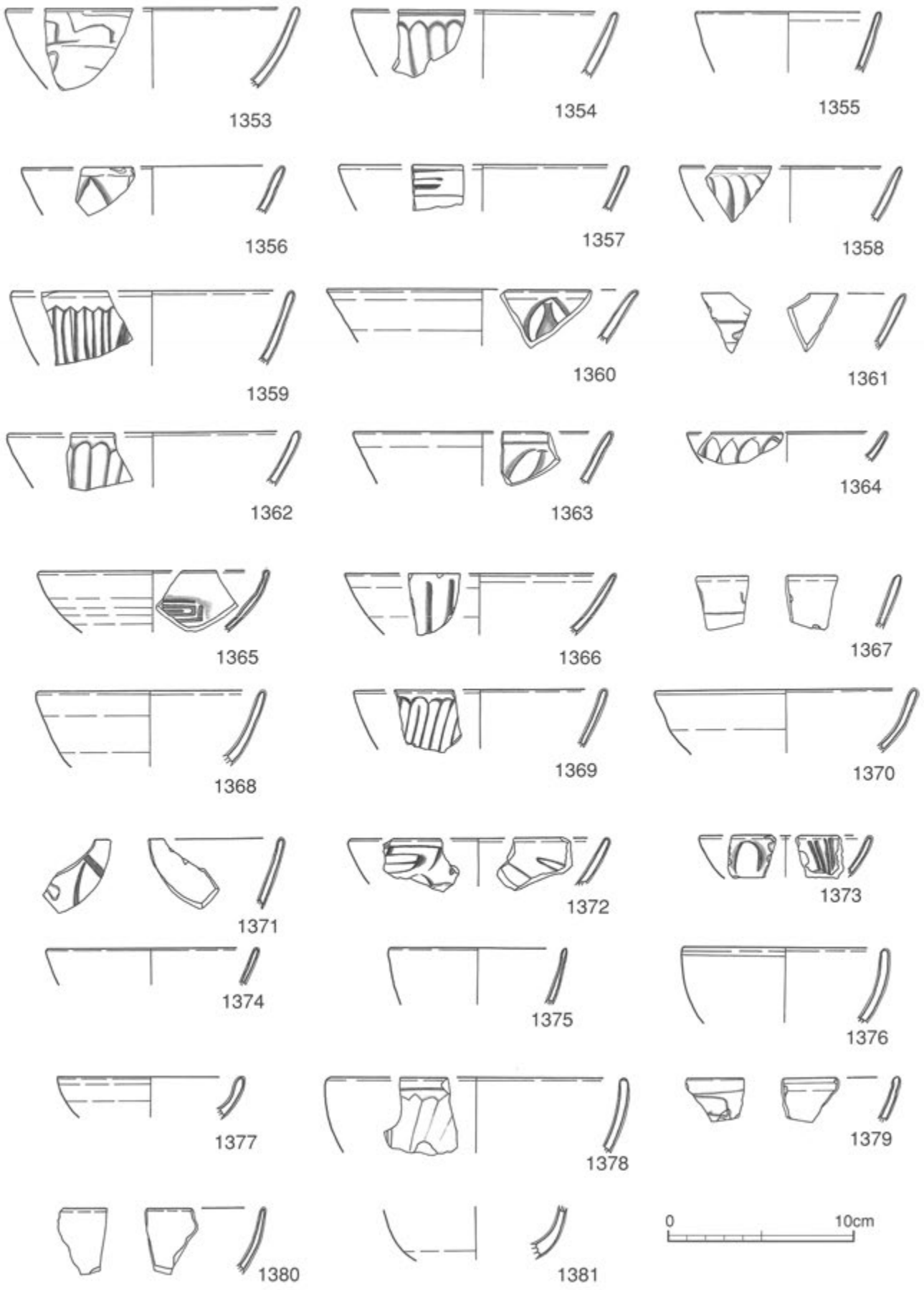
1433は完形に復元できた碗である。器壁は肉厚で，口縁部は外反する。見込みには型押の花文が施される。高台は幅広肉厚で高台内面の削りは浅く，中心は凸状をなす。釉は内面と外面腰部までかけられる。

1434～1473は口縁部である。先端が外反するものまっすぐに伸びるものが見られる。1451・1455・1461は口唇部が口禿げとなる資料である。 1471は玉縁口縁をなすものである。還元焼成となってしまったためか，胎土・釉薬ともに緑色に発色して青磁のような焼き上がりとなっている。1474は注口を有する水注状の器形になるものと思われる。

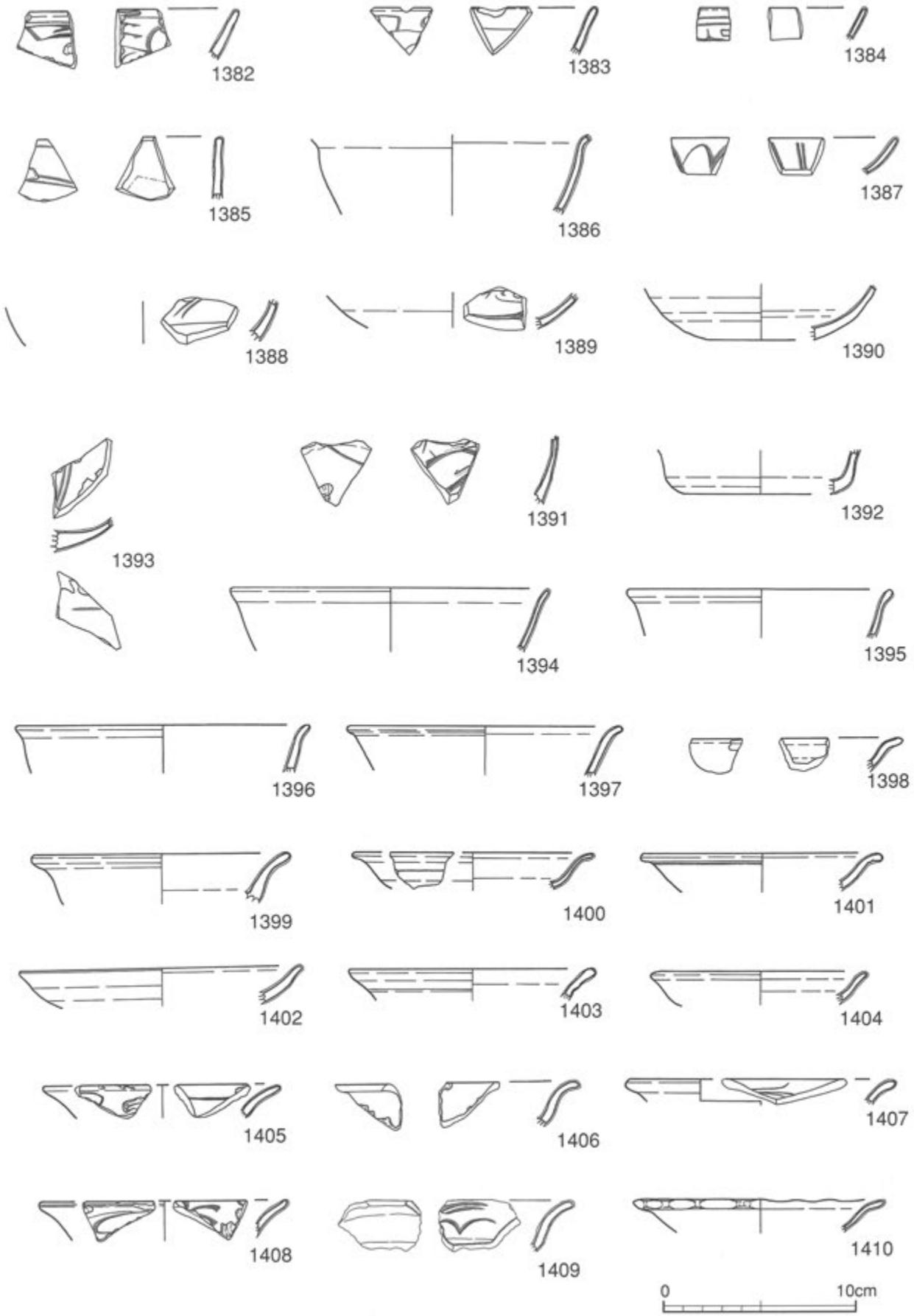
1475～1487は底部である。1475～1478は抉り高台を呈するもので，1476～1478の見込みには抉り高台の目跡が残る。1475は円形の目跡が残る。1479は見込みに型押の花文が施される。

⑥陶器（第275図）

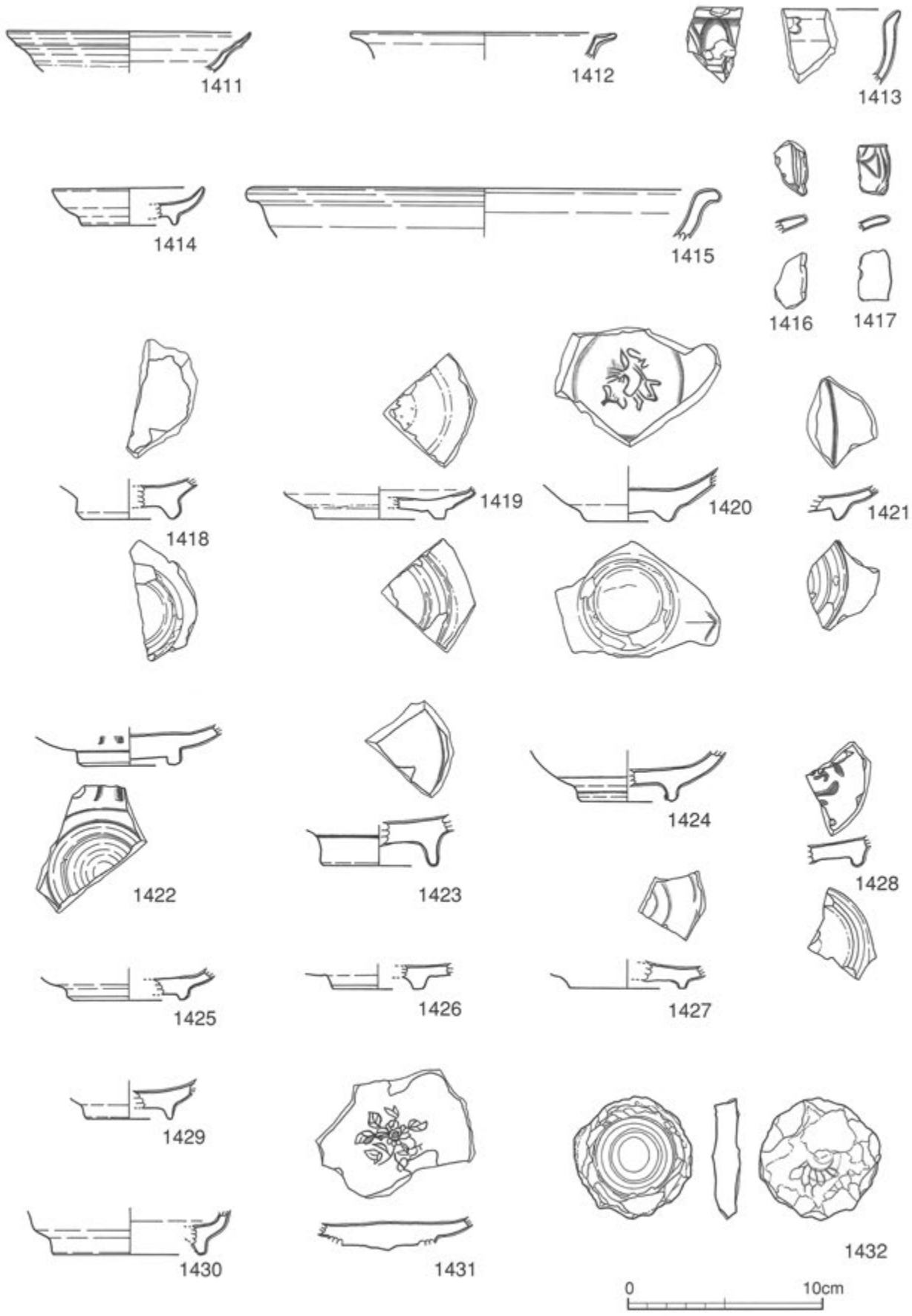
1488～1490は常滑焼の大甕である。1488は頸部，1489は胴部，1490は底部である。胴部外面には黄緑色の自然釉がかかる。1491は中国南部の窯で生産されたものと思われる壺である。内外面に光沢のある黒釉がかかる。


1353
1354
1355
1356
1357
1358
1359
1360
1361
1362
1363
1364
1365
1366
1367
1368
1369
1370
1371
1372
1373
1374
1375
1376
1377
1378
1379
1380
1381
0
10cm

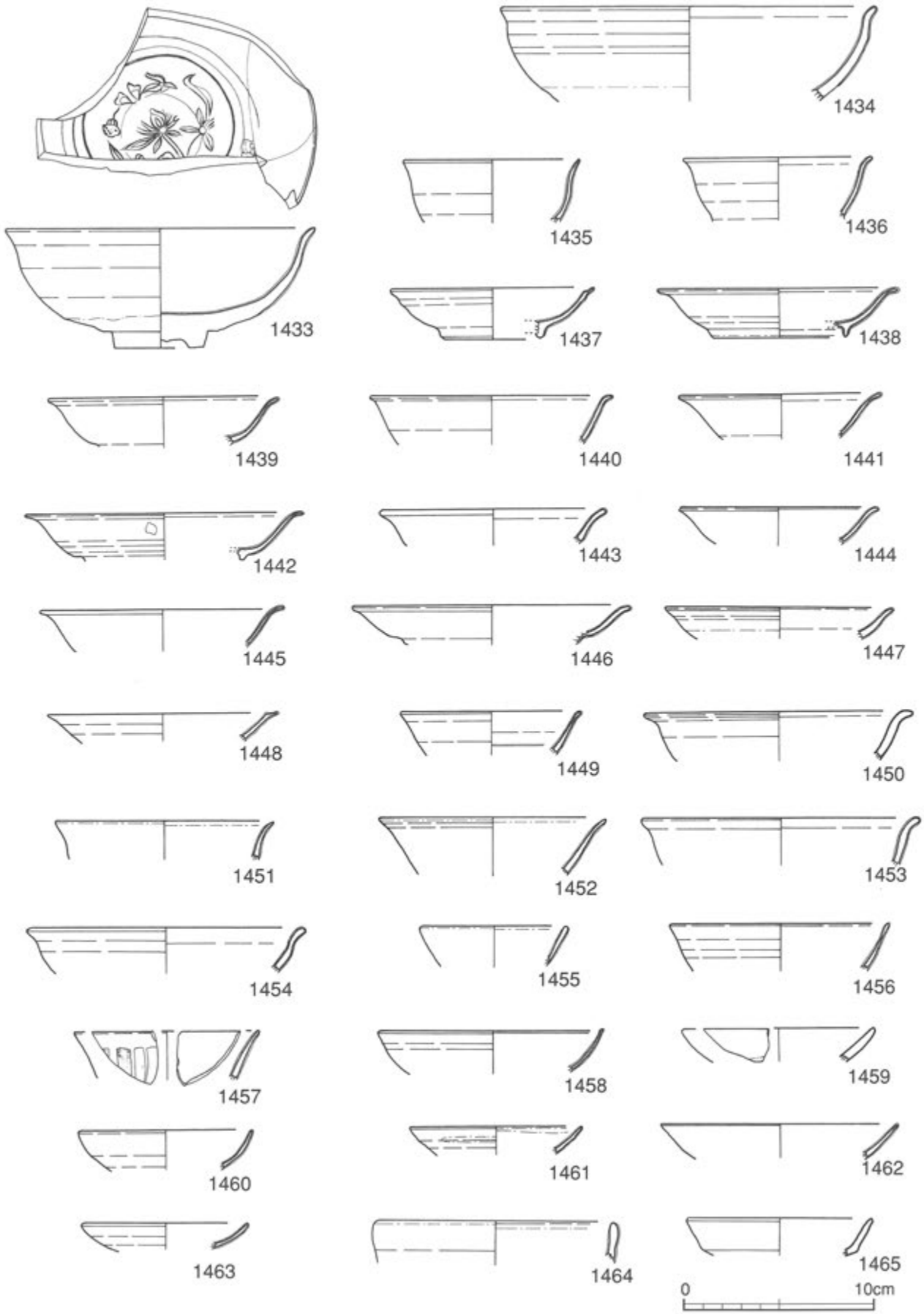
第270図　青磁 1


1382
1383
1384
1385
1386
1387
1388
1389
1390
1391
1392
1393
1394
1395
1396
1397
1398
1399
1400
1401
1402
1403
1404
1405
1406
1407
1408
1409
1410
0
10cm

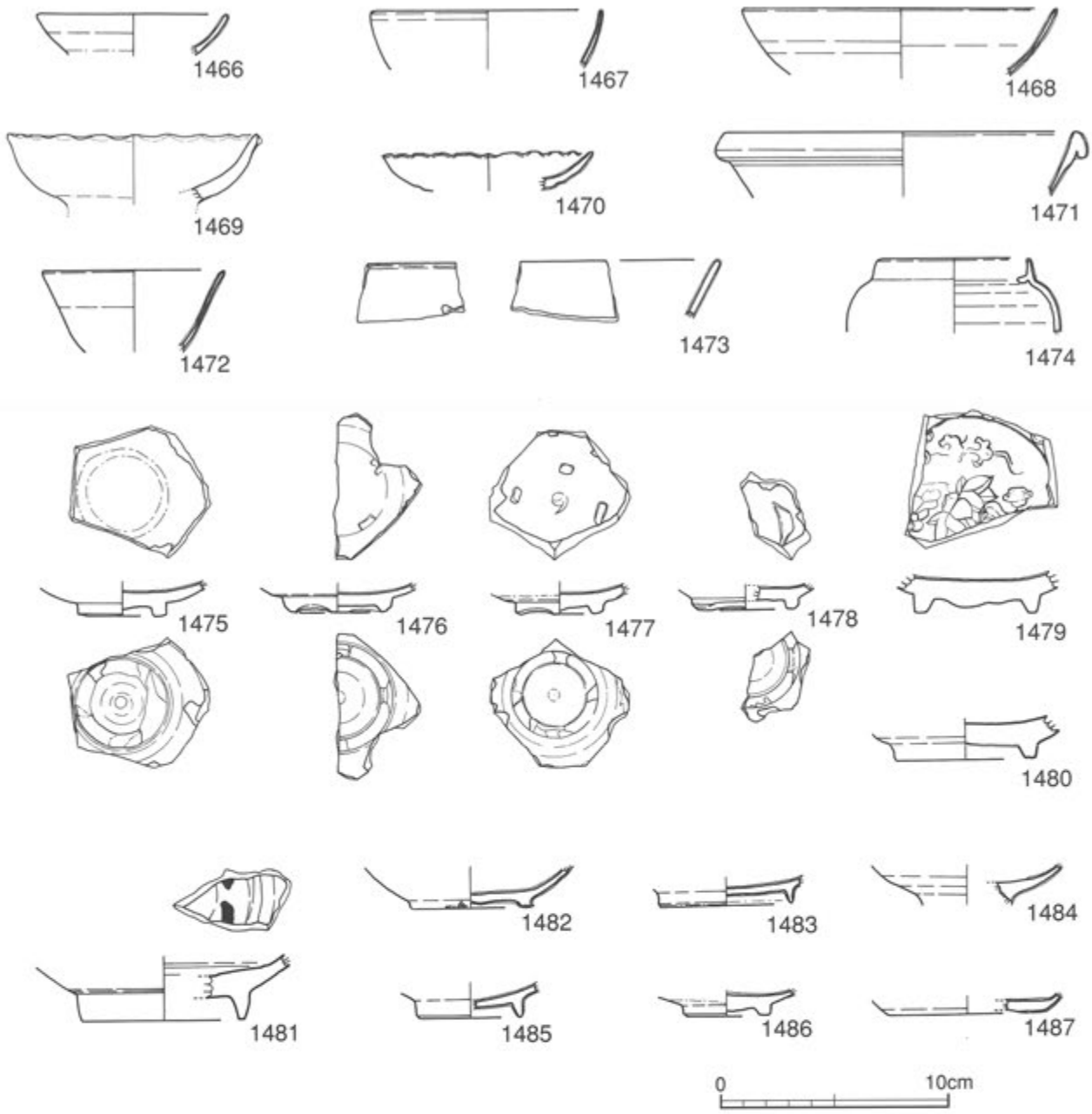
第271図　青磁 2


1411
1412
1413
1414
1415
1416
1417
1418
1419
1420
1421
1422
1423
1424
1425
1426
1427
1428
1429
1430
1431
1432
0
10cm

第272図　青磁 3


1433
1434
1435
1436
1437
1438
1439
1440
1441
1442
1443
1444
1445
1446
1447
1448
1449
1450
1451
1452
1453
1454
1455
1456
1457
1458
1459
1460
1461
1462
1463
1464
1465
0
10cm

第273図　白磁1

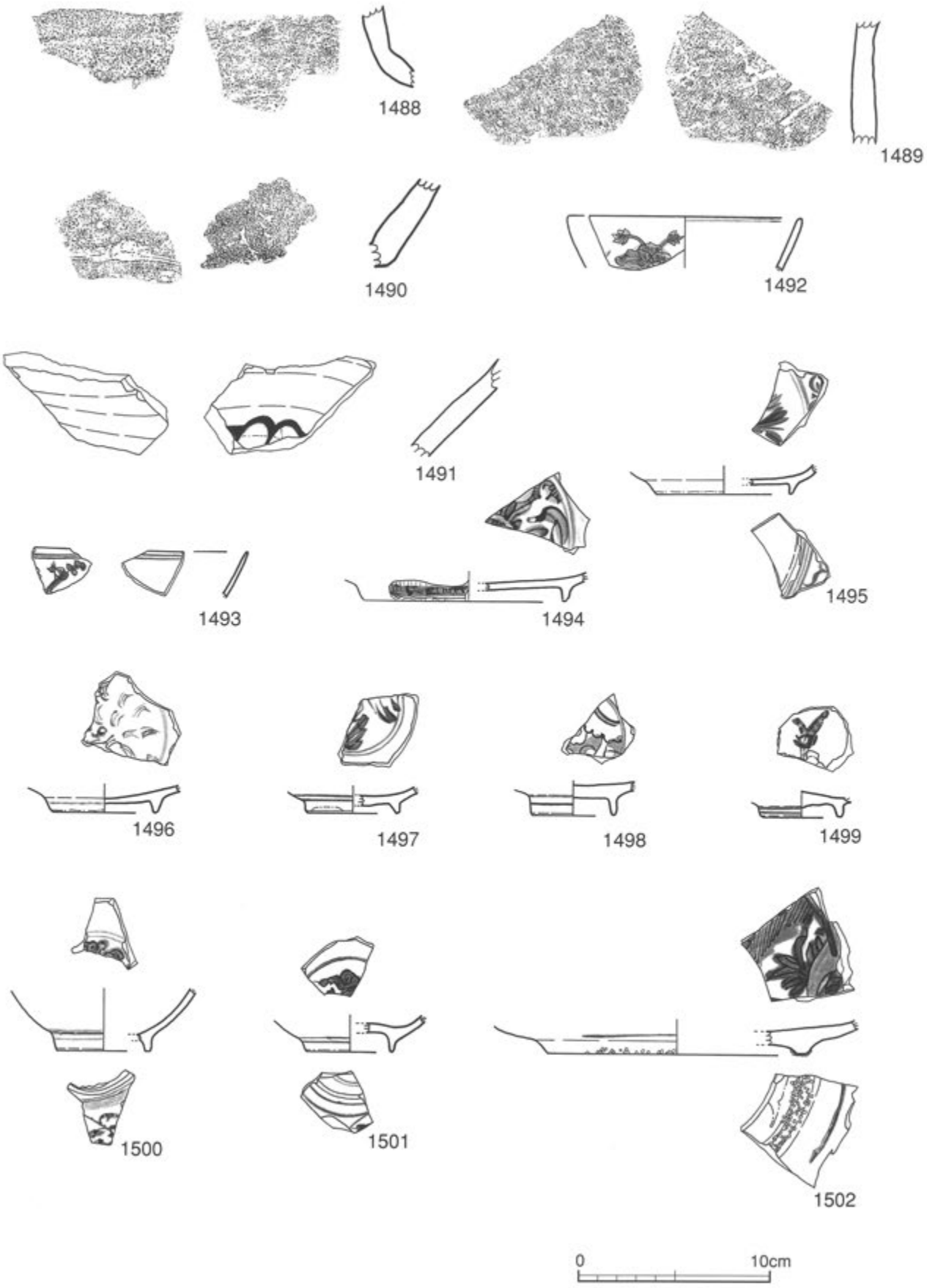


第274図　白磁2

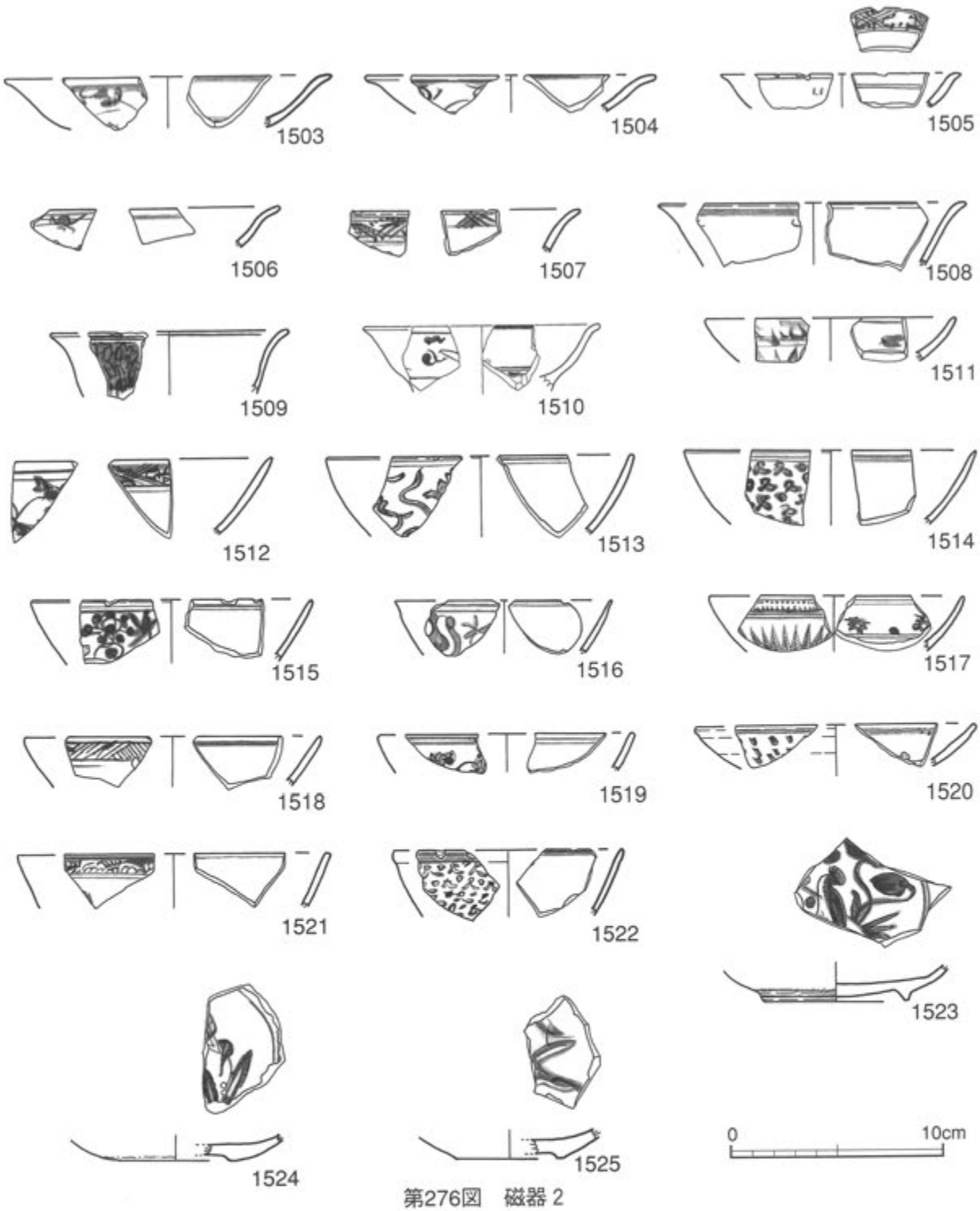
⑦青花（第275～277図）

1492～1536は青花として分類したが，1530・1533・1537・1541・1543の５点については肥前系陶磁器であったため，先に述べておきたい。1530は，染付の端反り碗の口縁部である。1533は白化粧土にハケ目を施した肥前系陶器の皿である。1537は外面に丸文が描かれた染付碗である。1541は染付皿としたが，蓋の可能性も考えられる。1543は肥前陶器の碗で，打ちハケ目の施された現川焼である。

青花については碗・皿が中心であり，上手のものと粗製のものが見られる。上手のものは，景徳鎮窯系と思われる。胎土は緻密で白色を呈する。釉は透明度が高く，呉須の発色も青色を呈する。一方粗製のものは漳州窯系のものと思われる。胎土が粗く灰白色を呈する。釉は灰色気味に白濁し，呉須の発色も鈍い。割合は景徳鎮窯系のものが中心である。年代としては，１４世紀から１５世紀代のものが中心であると思われる。


1488
1489
1490
1492
1491
1493
1494
1495
1496
1497
1498
1499
1500
1501
1502
0
10cm

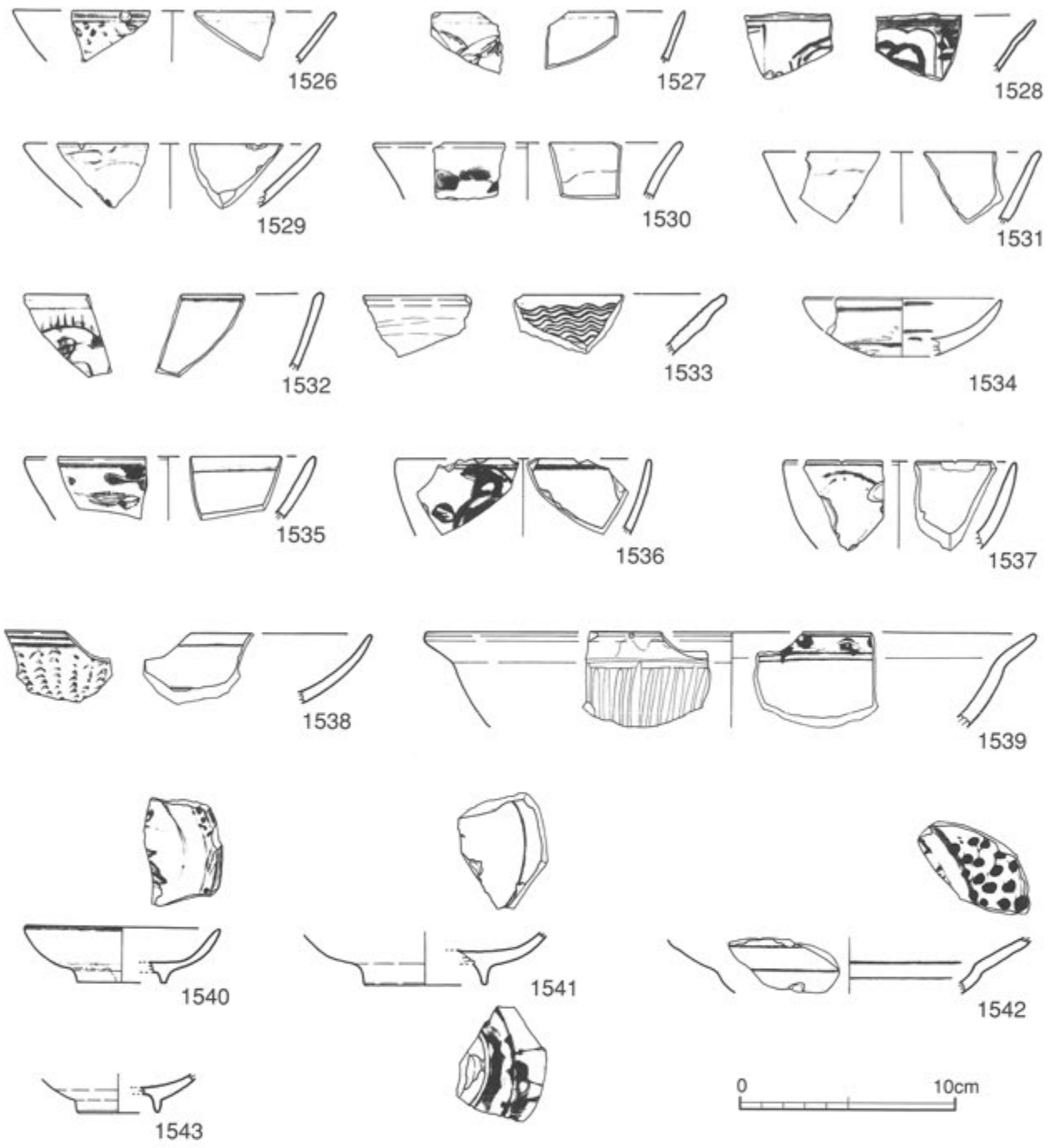
第275図　陶器・磁器 1



第276図　磁器 2

1491・1493は碗の口縁部である。先端は外反せずまっすぐに伸びるタイプのものである。1493は特に器壁が薄い。1494～1502は底部である。1494～1496は皿と思われ，畳付の先端がシャープな作りのものである。1494は畳付と高台の内側が釉剥ぎされ，1495・1496は畳付が釉剥ぎされる。1497～1501は碗である。1497は畳付と高台内面が露胎する。1498・1500は畳付が釉剥ぎされる。1499は見込みが饅頭心を呈するものである。1501は畳付と畳付の内側下位が釉剥ぎされるものである。1502は大皿もしくは盤と思われるものである。畳付には灰黒色の砂粒が熔着する。

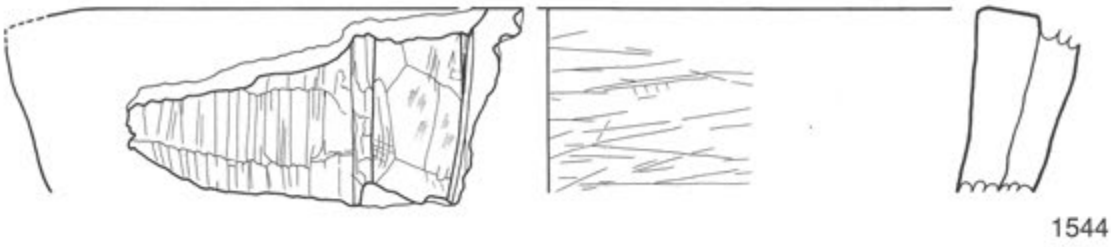
1503～1522は口縁部である。1503～1510は端反りになるもので，1503～1507・1510は皿，1508・

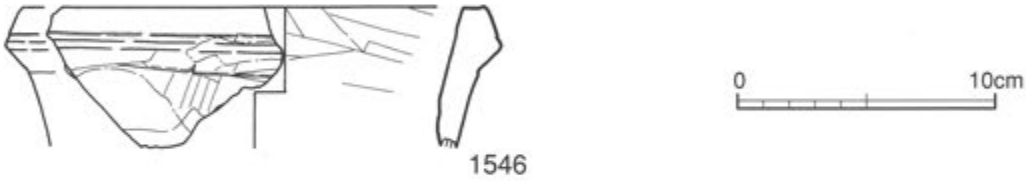


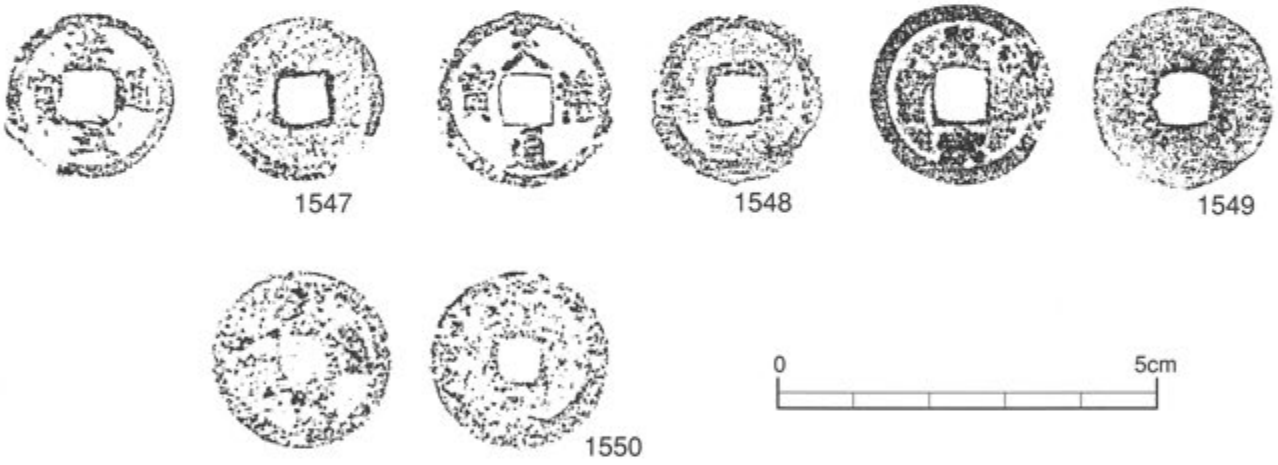
第277図　磁器 3

1509は碗である。1503は外面に貫入が見られる。1511～1522は，口縁部がまっすぐ伸びるものとやや内弯気味に丸みを帯びるものである。1511・1517は皿で，口縁部はやや内弯気味にのびる。文様は外面胴部に芭蕉葉，口縁部に波濤文が描かれる。底部は欠損しているが，碁笥底になるものと思われる。1512～1516・1518～1522は碗である。器壁は薄く，器高の深いものと浅いものが見られる。1523は皿の底部である。高台径からみて大皿になるものと思われる。1524・1525は碁笥底を呈する底部である。見込みには略化した文字と思われるものが描かれる。

1526～1539は口縁部である。そのうち1530・1539は折れ縁皿，1534は底部が欠損しているが碁笥底を呈する皿で，その他は碗である。1540の胴部外面は型押によりつくられる。1539は皿である。







第278図　滑石・北宋銭

見込みには略化した文字と思われるものが描かれる。畳付と高台内面が露胎する。1542は折れ縁皿である。口縁部先端はわずかに欠損している。

⑧滑石製石鍋・北宋銭（第278図）

1544～1546は滑石製の石鍋である。口縁下に鍔が巡るもので，14・15世紀代のものと思われる。1544は口径36cm，1546は口径18cmである。

1547～1550は北宋銭である。1547は洪武通宝，1548は天禧通宝である。

第6節 近世以降の調査

近世の遺構・遺物はⅡ・Ⅲ層を中心に検出された。遺構としては溝状遺構や道跡，土坑・ピットが検出され，遺物は陶磁器が出土している。

6-1：近世の検出遺構

①ＳＤ（溝状遺構）

SD08（第280図）

F～H-25区で検出された。幅も広く，屈曲も小さくなる。幅は上面で282～405cm，下面でも49～90cmと安定する。深さは20cm程度である。ピットも見られるが，これもポットホールと考えられる。特に，南西端のSD09と直交する辺りでは１～2.7m程度のものも見られるが，これは２方向からの激しい流水作用によるものと考えられる。そのほか，中には杭の跡もあるのかも知れないが，明確には区分し得なかった。この部分の総延長は30m程に及んでいる。溝全体としては，主軸方向はＮ80°Ｗである。

SD09（第281図）

C～H-25～31で検出された。SD08とは直交する形で北東方向に作られており，主軸方向はＮ26°Ｅである。幅は上面で172～336cm，下面では57～180cmである。深さは20cm程度である。内部は，北側では安定しているが，南側ではポットホールも見られるなど，若干不安定な状況が伺える。検出した総延長は，途中欠損しているが，それを加味しても50.7mに及んでいる。

SD10（第282図）

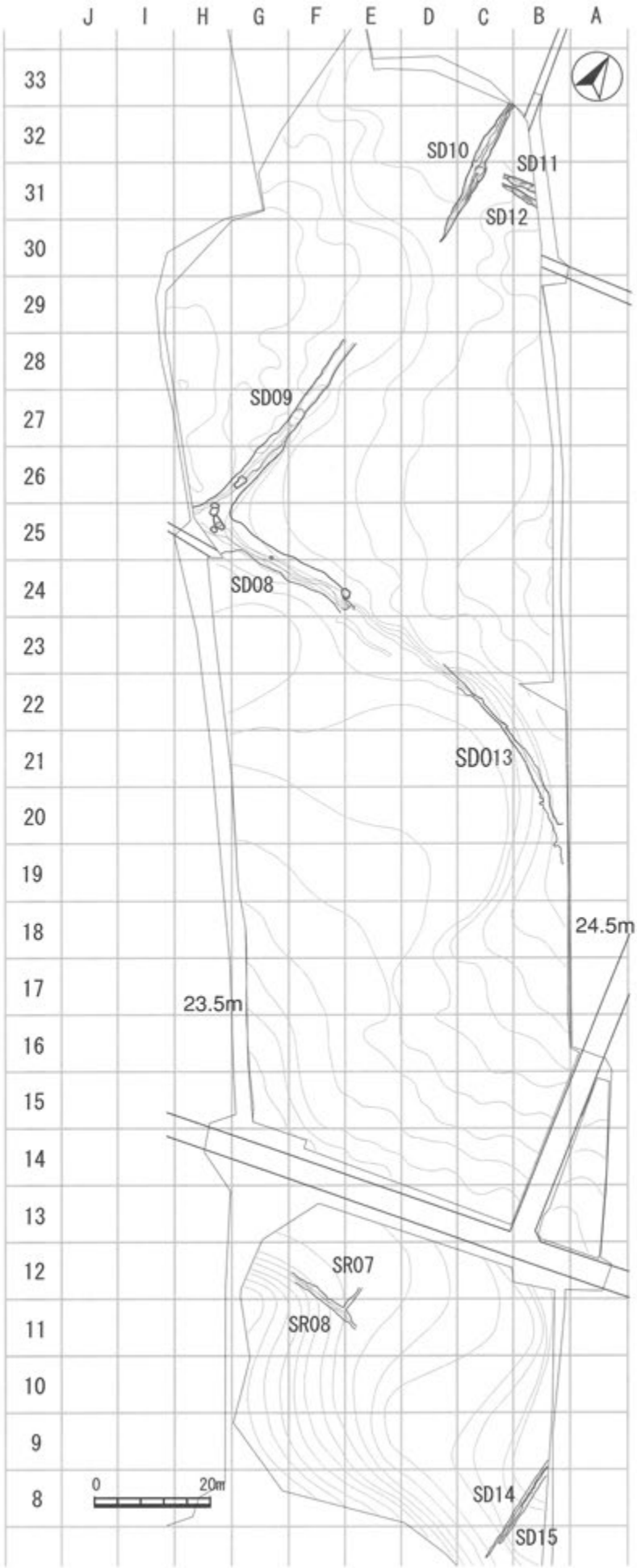
SD09とやや方向を同一にするように，C-30～32区で検出された。幅は上面で88～273cm，下面で10～237cmと差異が極めて大きい。深さは20cm程度であり，部分的に段差が大きく，最大では４段となっている。これは激しい流水作用によるものと考えられ，ポットホールも若干見られることもそのことを裏付けていると思われる。検出した総延長は28.3mであるが，南側では溝状遺構９号と接し，その先は消失している。主軸方向はＮ18°Ｅである。

SD11（第282図）

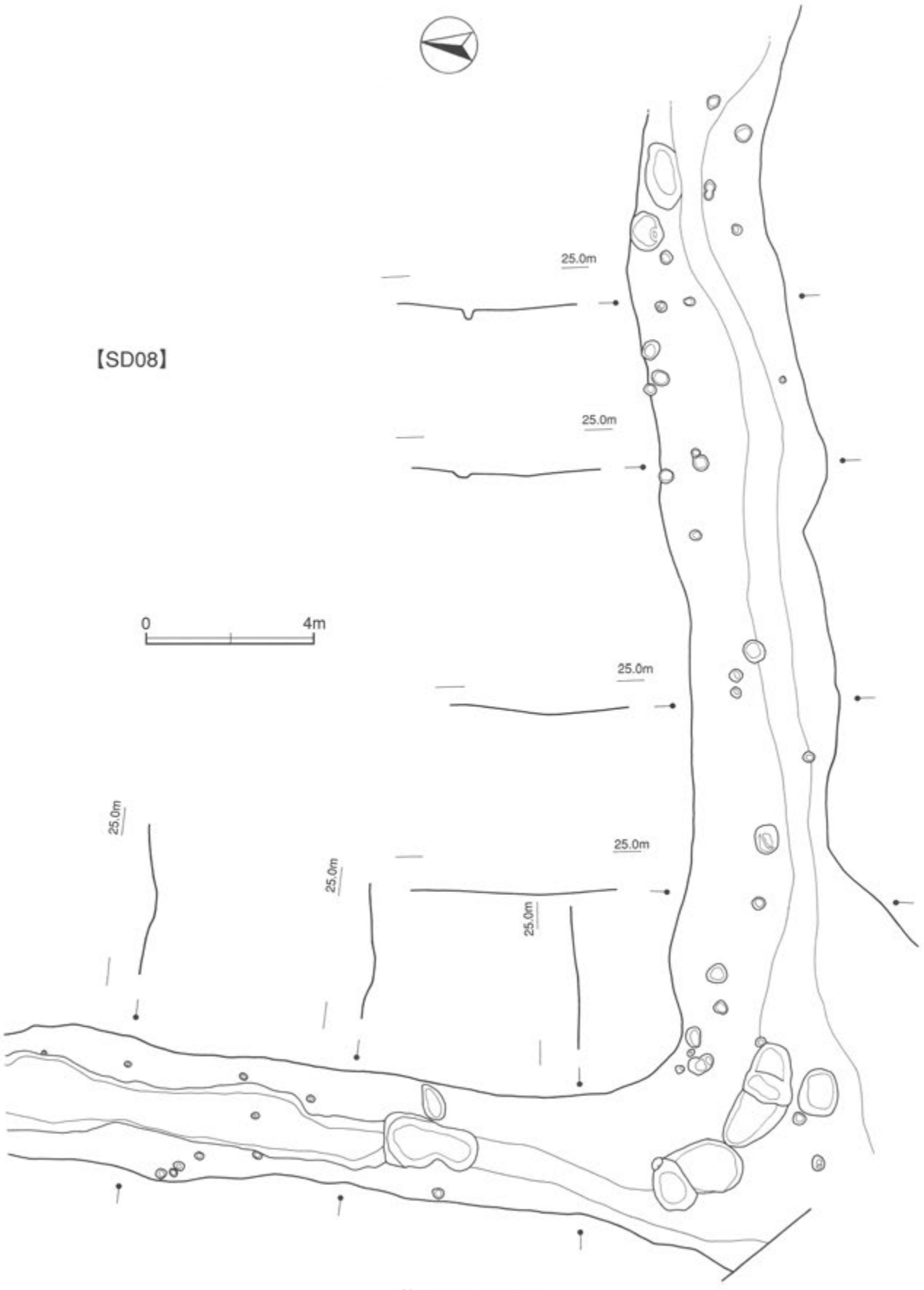
SD12と平行に作られたもので，Ｂ・C-31区で検出された。溝状遺構11号と同様に，溝状遺構９号及び10号と直交するように作られている。主軸方向はＮ88°Ｗで，ほとんど東西方向と言える。幅は上面で56～128cm，下面で17～61cmである。激しい流水作用によると考えられるポットホールも複数見られる。

SD12（第282図）

Ｂ・C-30・31区で検出された。SD09びSD10と直交するように作られている。主軸方向はＮ80°Ｗである。幅は上面で41～116cm，下面で27～45cmである。内部には流水作用によるらしい長楕円形のポットホールも複数見られる。



第279図　近世遺構配置図



第280図　SD08

SD13（第283・284図）

C～E-22～23区で検出された。溝状遺構3号とほぼ同じ方向に向かって作られているが，接点はなく，微妙にずれていることから，別個の遺構とした。大きく屈曲しており，幅も41～171cmと差異が大きい。深さは20cm程度で，内部は凹凸が激しいばかりでなく，小ピットも見られる。これは流水作用によるポットホールと考えられる。この部分の総延長は24.4mである。主軸方向はN80°Wで ある。埋土中から遺物が出土している。

1551は須恵器の胴部片である。外面には 格子目タタキが施されている。1552は瓦質土器で，端部を四角くおさめている。1553は青磁の口縁部で，端部は玉縁状なっている。

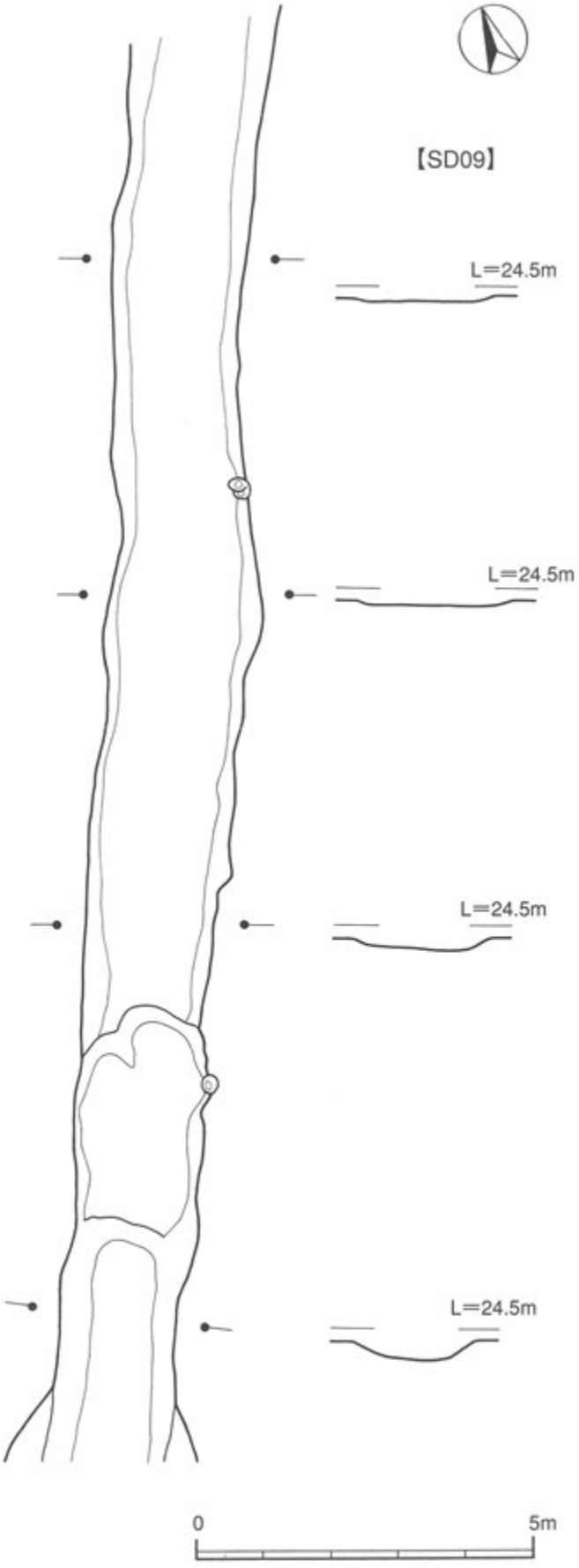
1554は青磁碗の高台部分である。高台径6.4cmを測る。1555も青磁碗の高台部分である。高台径6cmを測る。1556は青磁の盆または鉢と思われる。底径13cmを測る。1557は染付の口縁部である。内面に文様が描かれる。1558は染付碗の高台部分で，底径8cmを測る。外面に文様が描かれている。1559は染付碗の高台部分で，底径4cmを測る。見込み部分に文様が描かれている。

SD14（第283図）

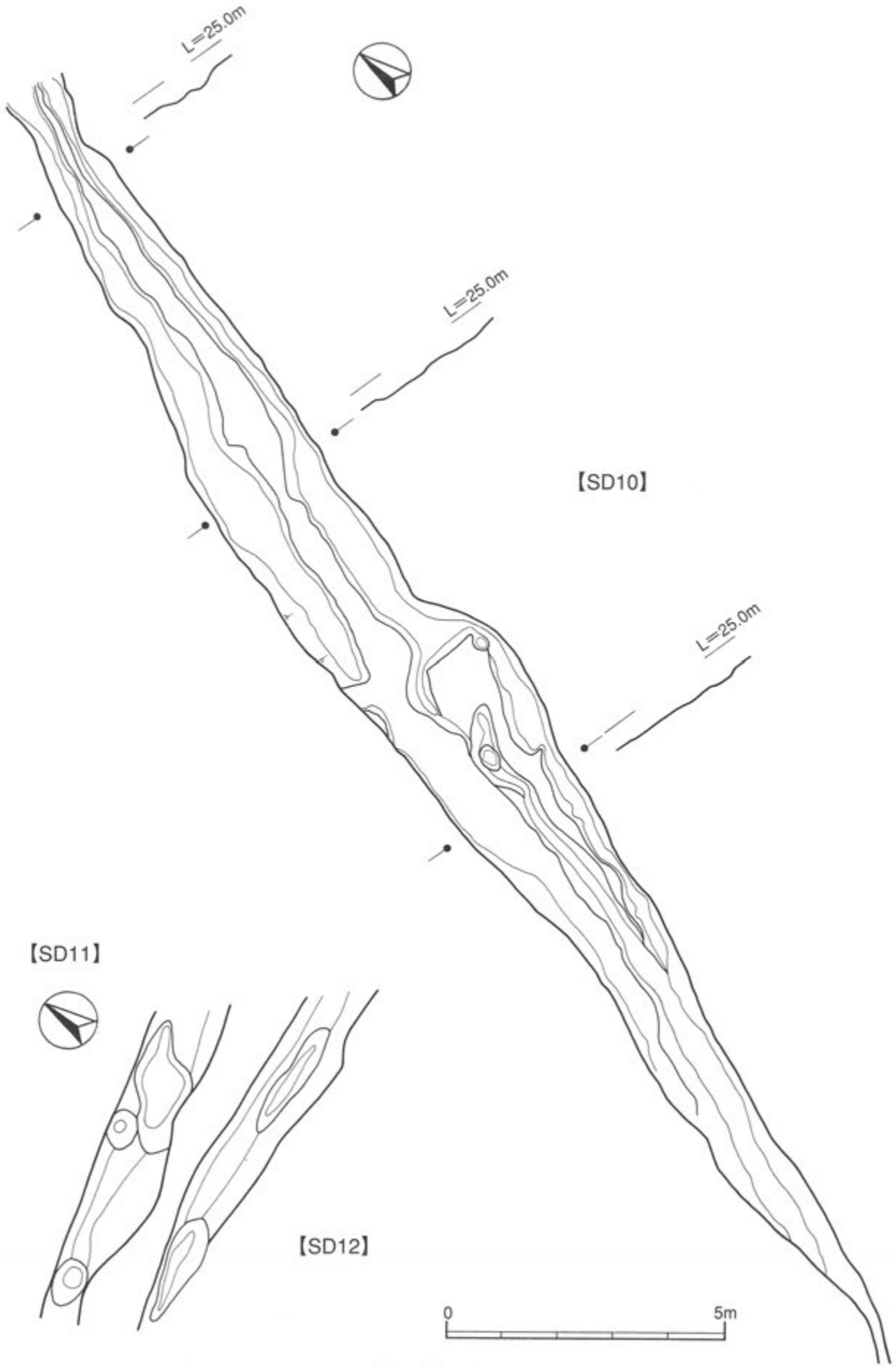
B・C-7～9区で検出された。溝状遺構15号とほぼ平行に作られている。主軸方向はN12°Eである。幅は上面のみの計測であるが12～49cmである。検出した総延長は溝状遺構14号より若干長く，20.0mである。

SD15（第283図）

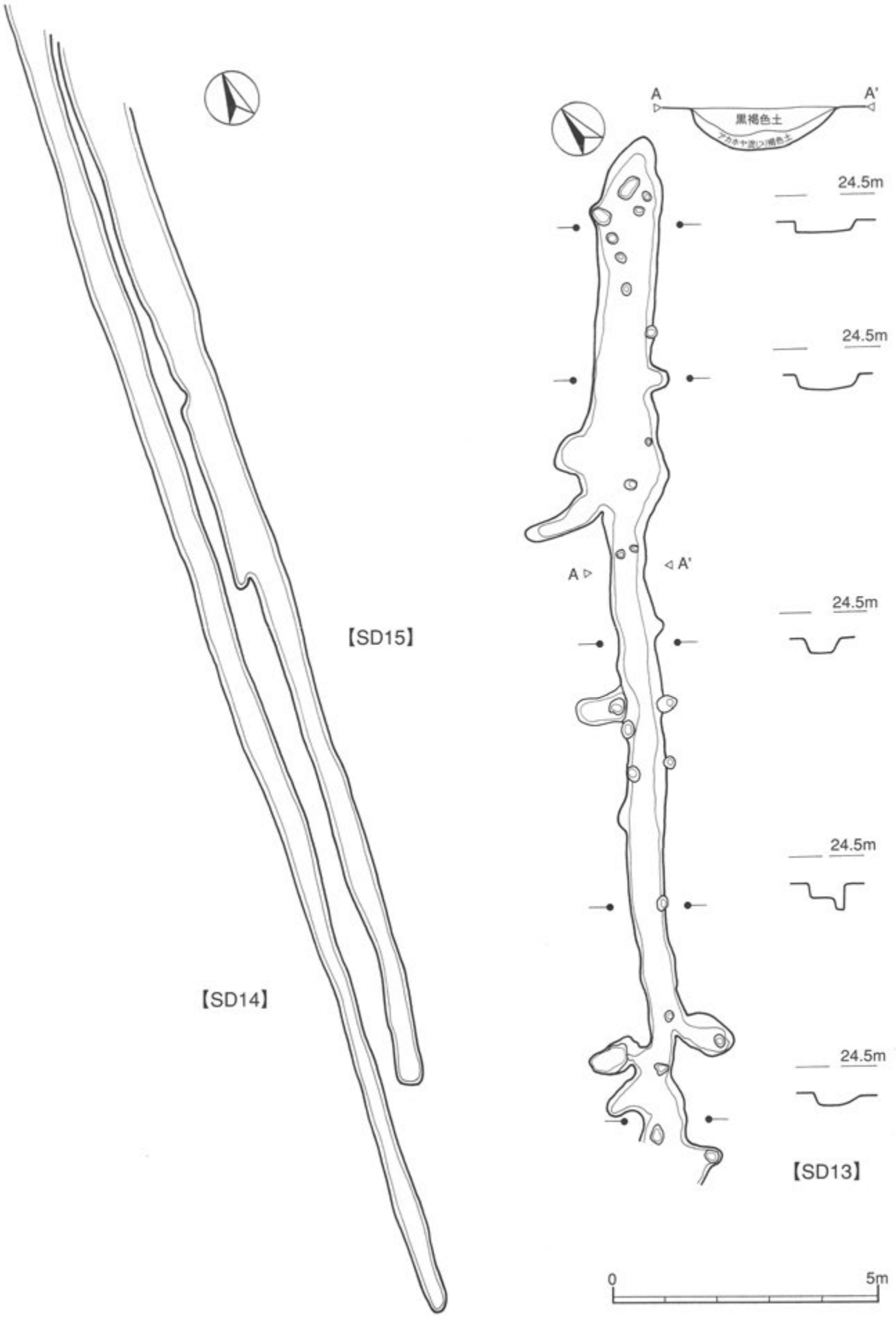
SD14と同様，また，それと平行にB・C-7～9区で検出された。主軸方向はN12°Eである。幅は上面のみの計測で26～71cmである。検出した総延長は15.7mである。



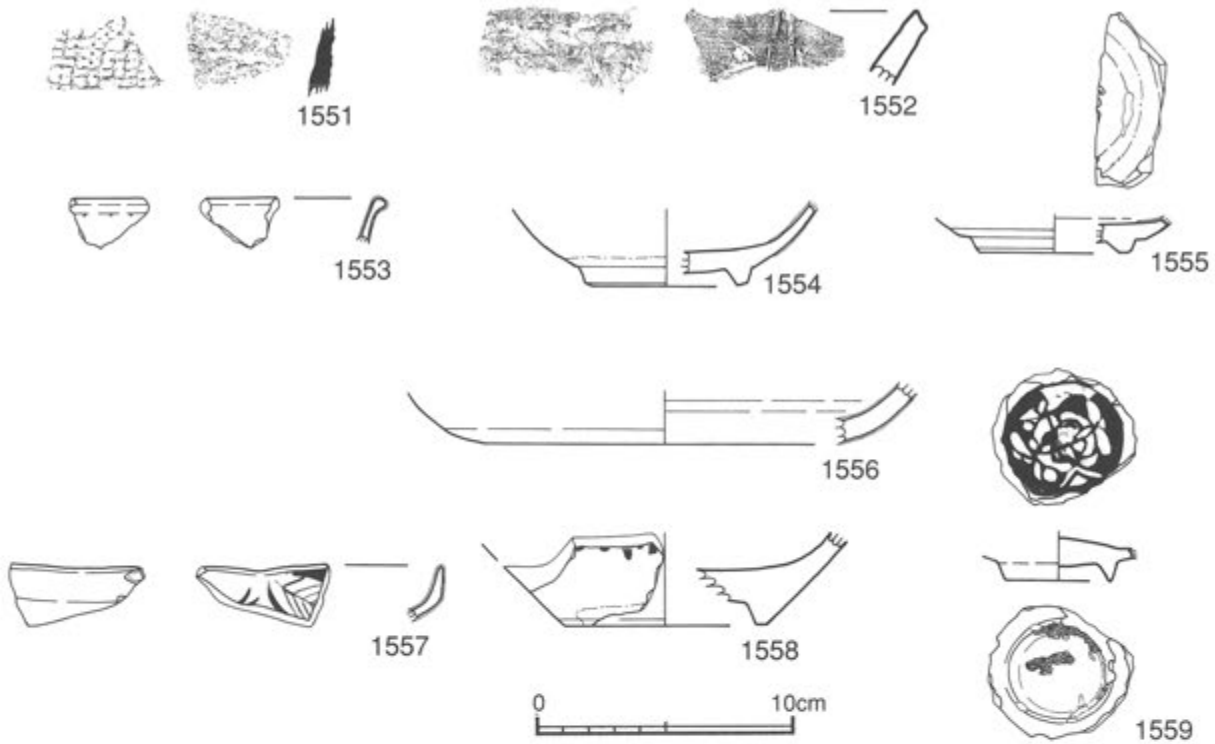
第281図　SD09



第282図　SD10～12



第283図　SD13～15



第284図　SD13出土遺物

②ＳＲ（道跡）

埋土やそこから出土した遺物，及び形成順序等により判断されるこの時期の道跡は６本が考えられる。E・F-11区のみが道跡単独の検出で，それ以外は溝状遺構と複合した検出である。なお，遺構番号は中世からの通し番号である。

SR04（第285図）

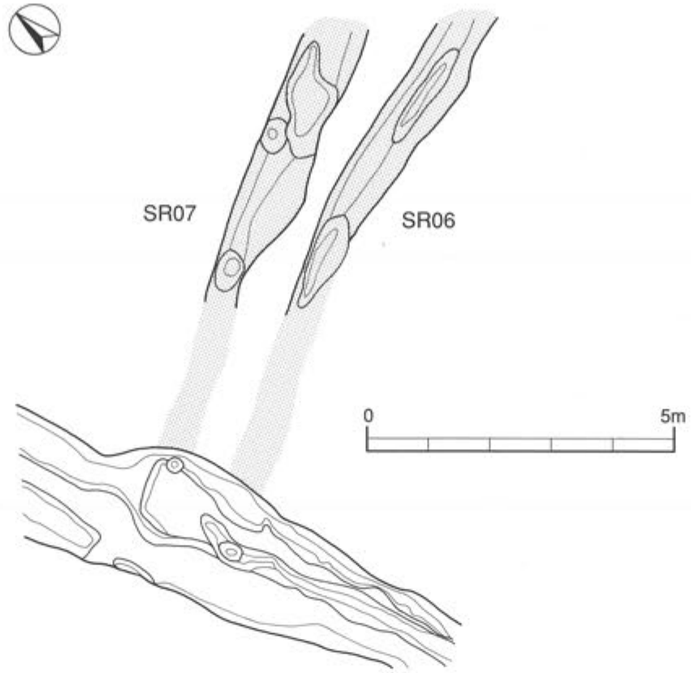
C～H-22～25区で検出された。SD13の上面で確認され，それよりも新しいことが判然としている。検出された幅は1.7～5.3mで，硬化面の硬さ・締まり具合の程度は部分により異なっている。主軸方向はN79°W，総延長は49.6mである。

SR05（第285図）

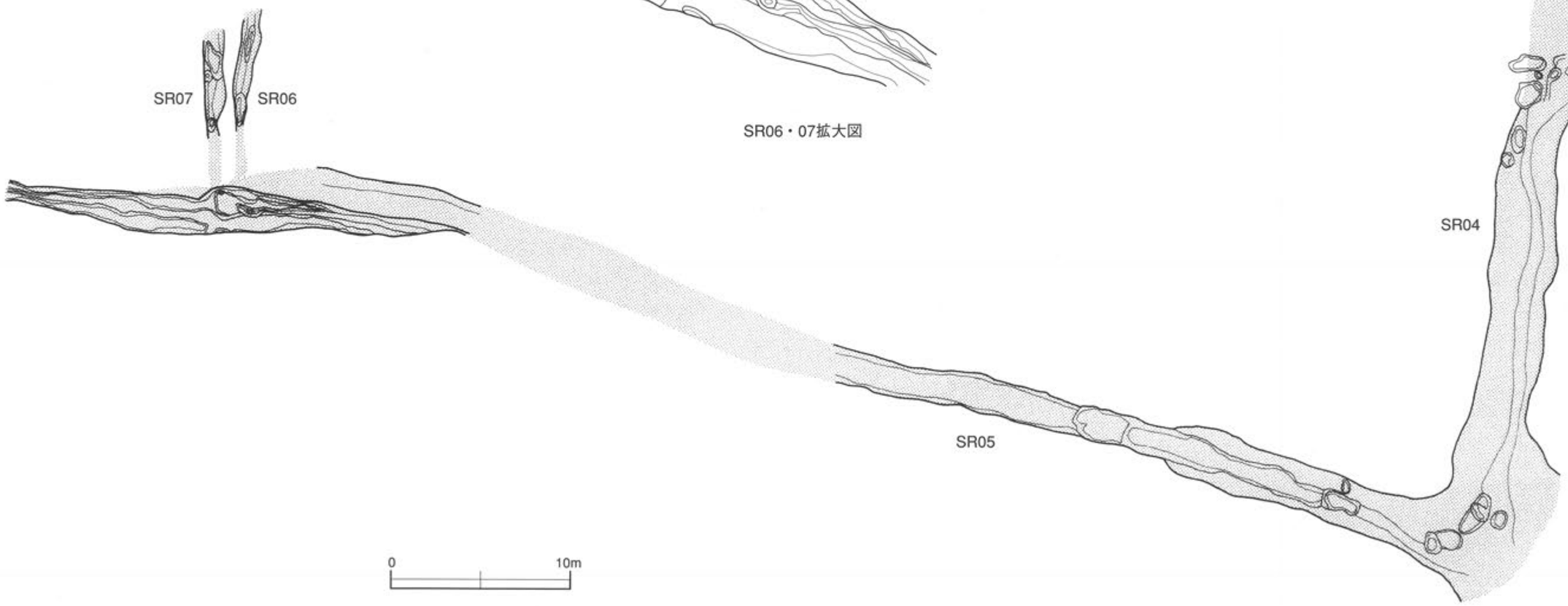
C～H-25～31区で検出された。SD09の上面で確認され，それより新しいことが確かめられている。検出された幅は2.0～3.8mで，硬化面の硬さや締まり具合も場所によって異なっている様子が観察される。主軸方向はN22°E，総延長は75.0mである。

SR06（第285図）

B・C-30・31区で検出された。SD10の上面で確認されたことから，それよりも新しいものである。検出された幅は0.6～1.2mで，硬さや締まり具合はほぼ同じである。これは，検出された部分の総延長が短かったことによると考えられる。主軸方向はN10°E，総延長は10.1mである。



SR06・07拡大図



第285図　SR04～07

SR07（第285図）

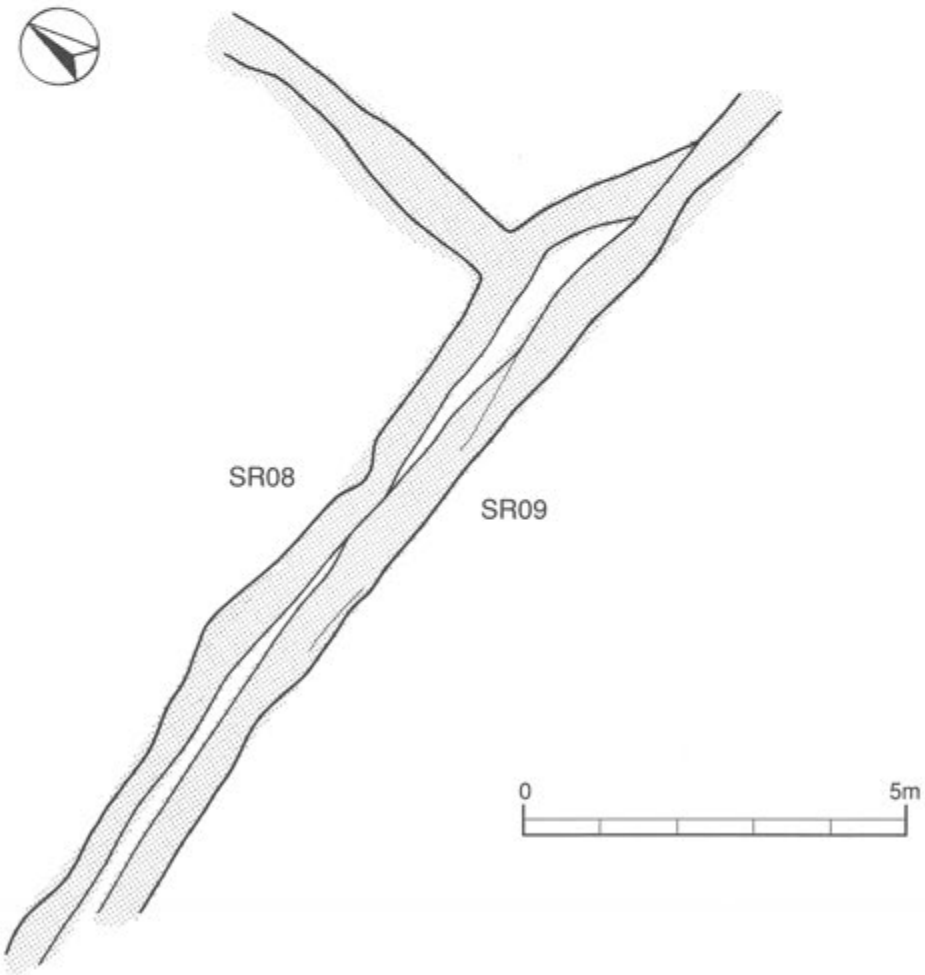
SR06と同様に，B・C-30・31区で検出された。SD12の上面で確認され，それよりも新しいことは明らかである。検出された幅は0.7～1.4mで，硬さや締まり具合はほぼ同様であるが，これはSR06と同様に，検出された総延長が短かったことによると考えられている。主軸方向はN 2°E，総延長は9.4mである。

SR08（第286図）

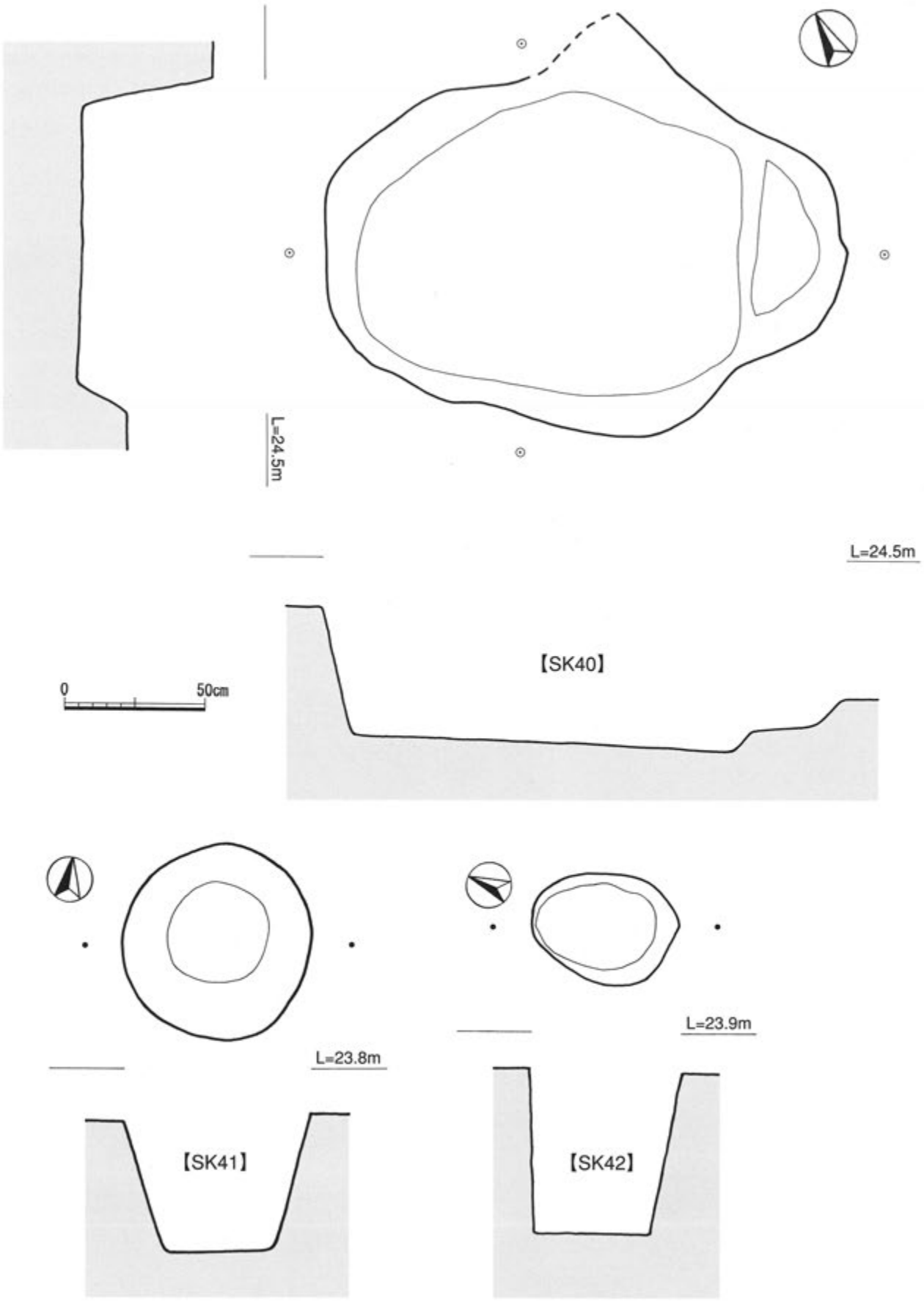
本遺跡の南側，E・F-11区で検出された。すぐ北側に検出されたSR09と大半ではほぼ平行となっている。検出された幅は0.4～0.7mで，硬さや締まり具合は場所によってやや異なっているものの，大部分は硬く締まっている。主軸方向はN79°W，総延長は13.8mである。

SR09（第286図）

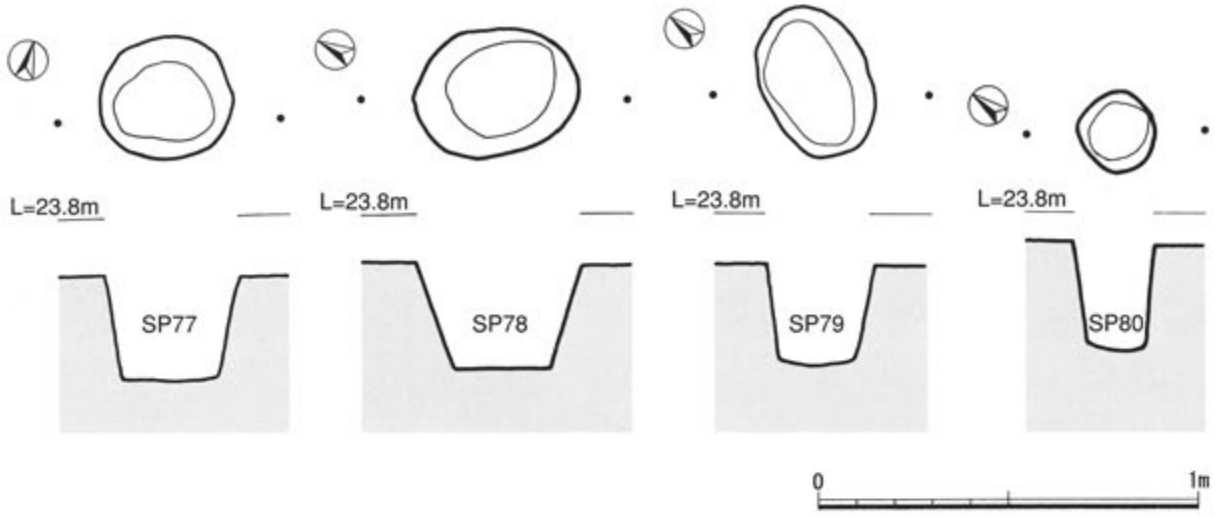
SR08と同様に，E・F-11区で検出された。検出された幅は0.3～0.8mで，硬さや締まり具合はほぼ同じである。E-11区で方向を大きく変えている。主体をなす長いものは，主軸方向がN75°W，総延



第286図　SR08・09



第287図　SK40～42



第288図　SP77～80

長は13.4mで，分岐した短いものは，主軸方向がN21°E，総延長は5.0mである。

③ＳＫ（土坑）

SK40（第287図）

SK40はE-24区から検出された。長径186cm・短径124cm・深さ47cmの不正形を呈し，断面形態は逆台形状に近いが，南側が削平のため１段低くなっている。埋土中から陶器の破片が１点出土しているが，小片のため図化はしなかった。

SK41（第287図）

SK41はD-14区で検出された。長径72cm・短径68cmの円形を呈し，深さ48cmで断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から陶器の破片が１点出土しているが，小片のため図化はしなかった。

SK42（第287図）

SK42はF-16区で検出された。長径54cm・短径40cmの不正楕円形を呈する。深さは60cmと深く，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から染付の破片が１点出土しているが，小片のため図化はしなかった。

④ＳＰ（ピット）

SP77（第288図）

SP77はD-14区で検出された。上場35cm・下場25cm・深さ28cmである。正面形態はほぼ円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から陶器の破片が１点出土しているが，小片のため図化はしなかった。

SP78（第288図）

SP78はF-17区で検出された。上場42.5cm・下場26cm・深さ28cmである。正面形態は楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から染付の破片が１点出土しているが，小片のため図化はしなかった。

SP79（第288図）

SP79はG-17区で検出された。上場27.5cm・下場20cm・深さ26.5cmである。正面形態は楕円形で，断面形態は逆台形状を呈する。埋土中から陶器の破片が１点出土しているが，小片のため図化はしなかった。

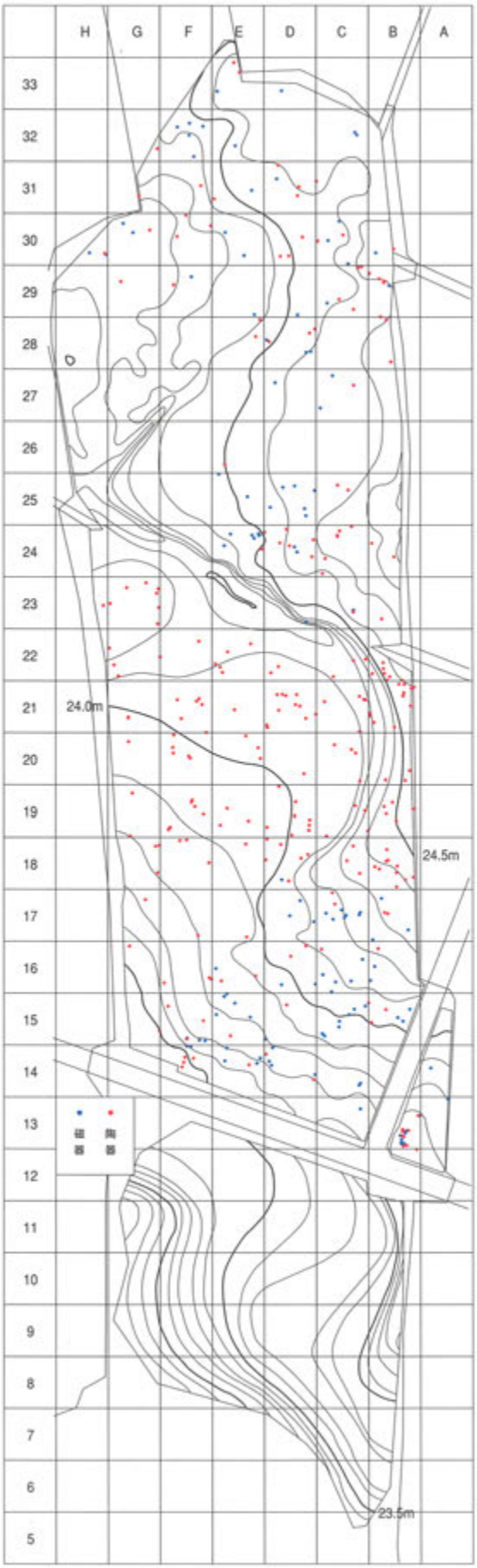
SP80（第288図）

SP80はG-18区で検出された。上場21cm・下場16cm・深さ28.5cmである。正面形態は円形で，断面形態は逆台形状に近いが，底部がやや傾斜している。埋土中から染付の破片が１点出土しているが，小片のため図化はしなかった。

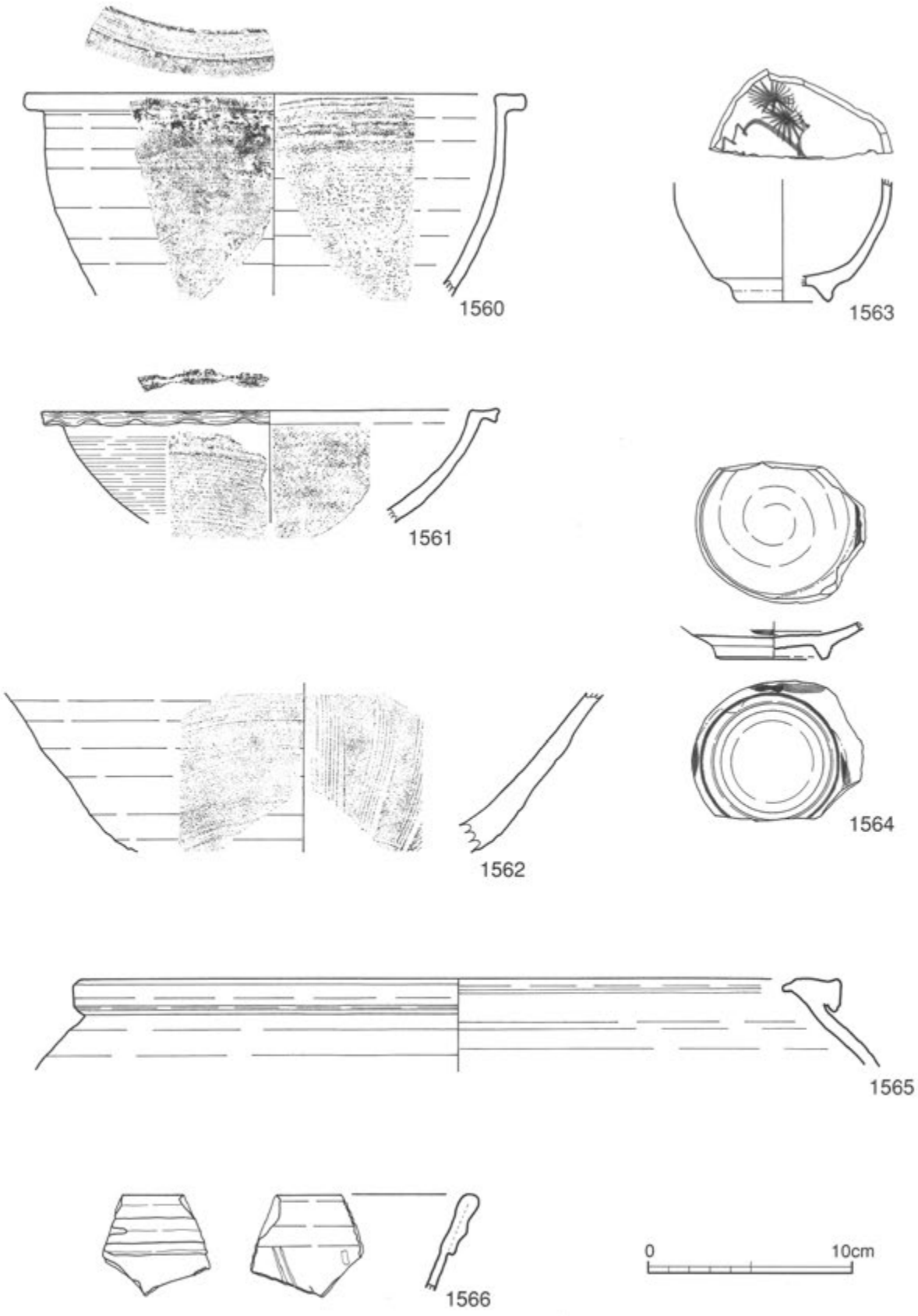
6-2：近世の出土遺物

①近世陶磁器（第290～291図）

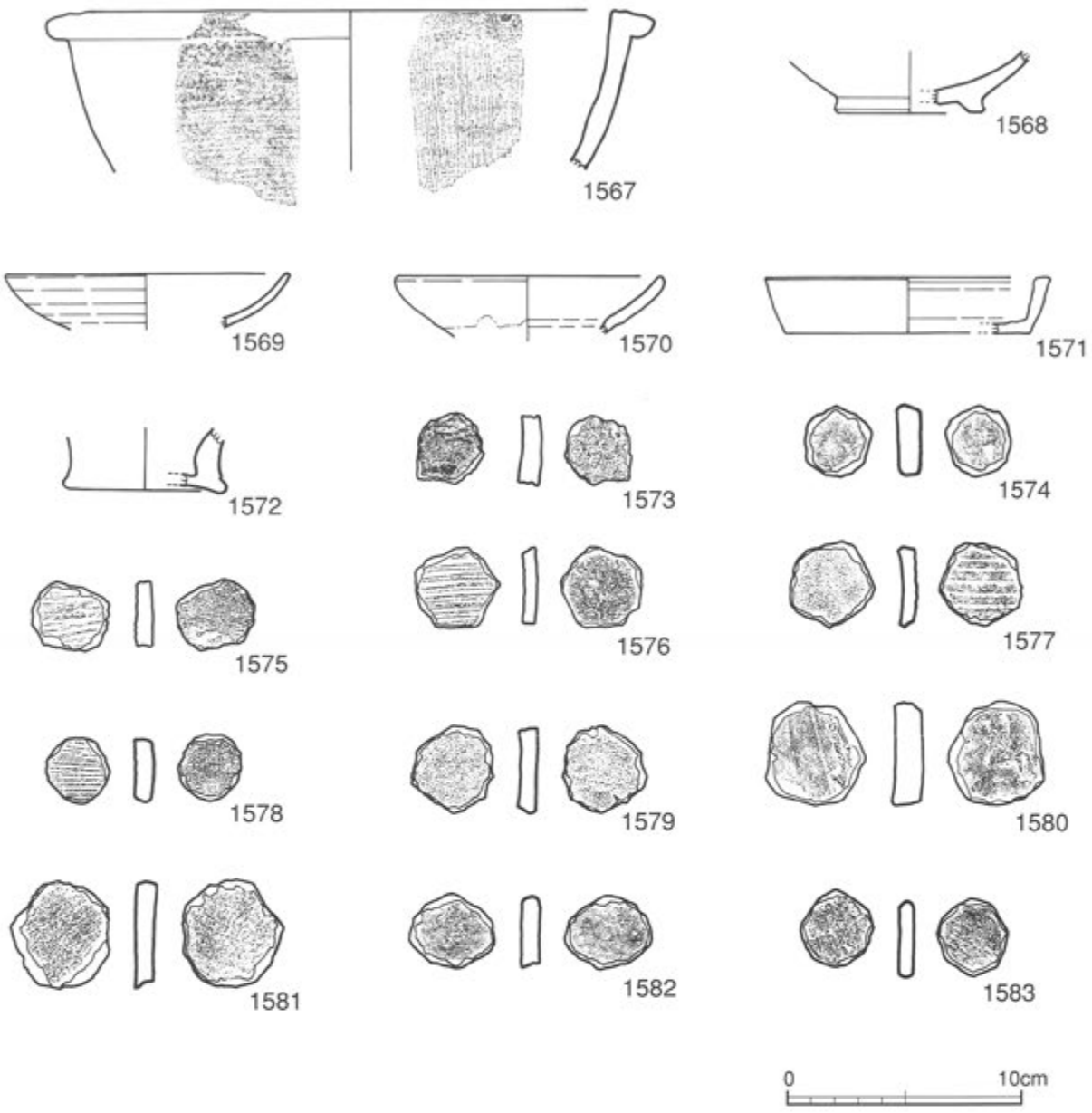
1560～1571は近世陶磁器である。1560は鉢である。内外面に鉄釉がかかり，口唇部は剥ぎ取られる。1561は「L」字状の口縁部先端をつまんで装飾しているものである。浅鉢としたが植木鉢の可能性も考えられる。1562は備前系擂鉢である。1563は肥前系の染付碗で，波佐見焼である。外面は高台と高台内面を除き，青磁釉がかけられ，内面見込みには呉須で文様が描かれる。1564は淡黄色君の胎土に鉄絵が描かれるもので，皿と思われる。1565～1568は苗代川焼である。1565は甕の口縁部で，口唇部は内側を高く外側を低くつくり，貝目が残る。1566



第289図　陶磁器分布図



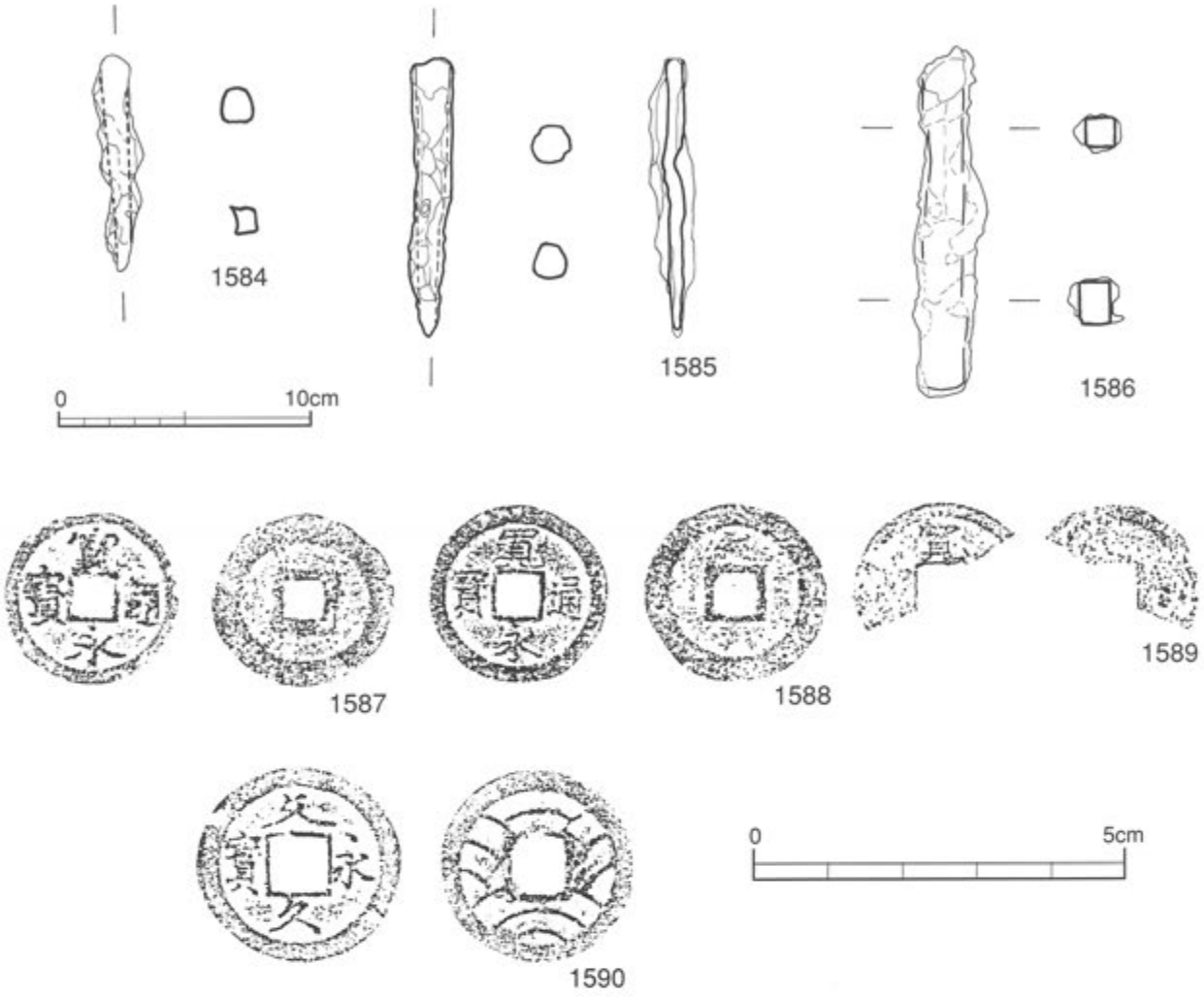
第290図　陶器 1



第291図　陶器２

は擂鉢である。口縁部は外側に折り返して肥厚させ，２条の突帯をつくる。口唇部の釉は拭い取られる。1565・1566は堂平窯跡（日置市東市来町）乗せ遺品で，17世紀代のものと思われる。1567は擂鉢である。口唇部を除き内外面に鉄釉がかかるが，焼きが甘く発色も悪い。1568は皿である。畳付以外鉄釉がかかる。1569・1570は皿である。1569は灰褐色の胎土に鉄釉がかかるもので，産地は不明である。1570は唐津焼である。褐色の胎土に灰色の灰釉がかかる。1571は作りが雑で，口唇部を除き薄い灰釉がかかるもので，堂平窯の製品と思われる。皿としたが他の器種の可能性も考えられる。1572は壺の底部である。外面のみ黒釉がかかる。

1573～1583は苗代川焼の陶器を転用してつくられたメンコである。



第292図　釘・寛永通宝

②釘（第292図）

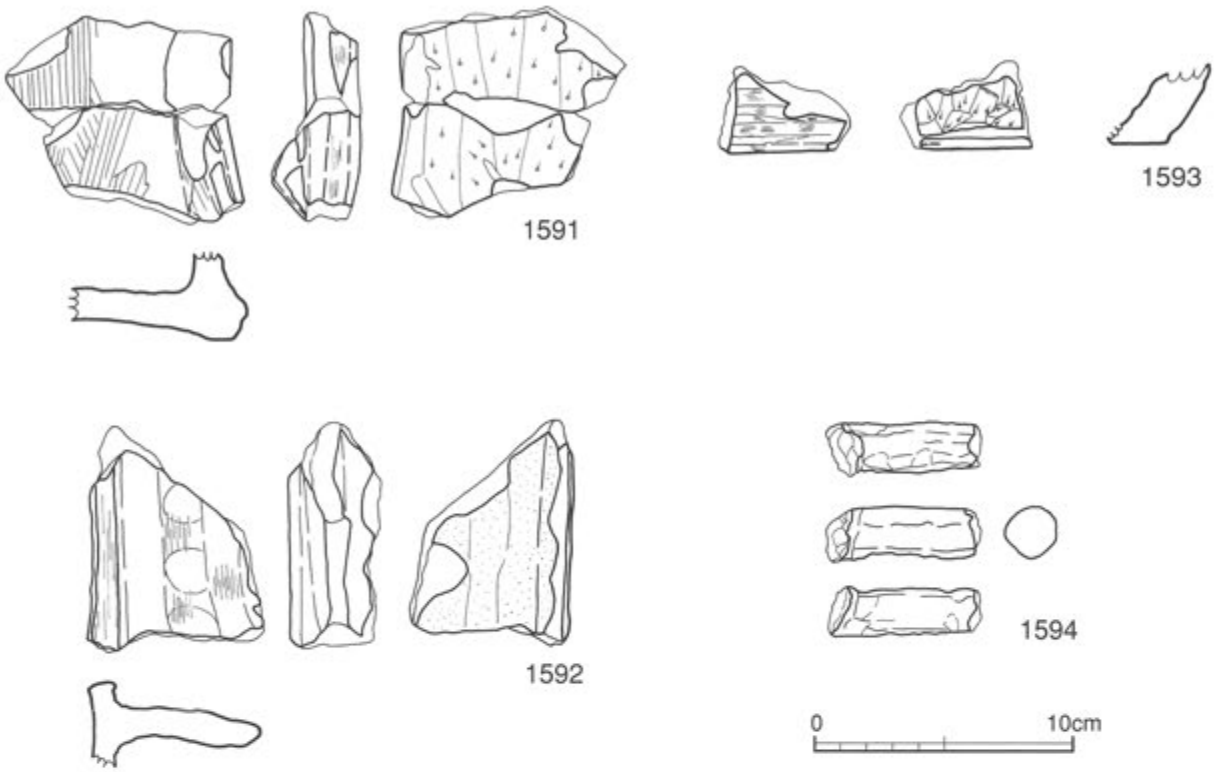
1584～1586は釘である。1584・1586は断面が方形，1585は断面が丸形を呈する器形である。

③古銭（第292図）

1587～1590は近世の貨幣である。1587～1589は寛永通宝で，1590は文久通宝である。

7：その他の遺物

その他の遺物としたものは，主に古代～近世の遺物であると考えられるもので，遺物の帰属時期を特定できなかったものである。これは安茶ヶ原遺跡の層位が時期ごとに分層できないことと，遺物の型式学的研究が進んでいないことによる。



第293図　その他１（カマド・コシキ・把手）

①カマド・コシキ・把手（第293図）

1591・1592は移動式カマドの一部であると思われる。いずれも焚口の庇部分か，側面基部付近と思われる。1591は外面がハケ目調整で，内面にはケズリが施されている。1592は外面がナデ調整で，指頭圧痕が認められる。内面はケズリのちナデ調整である。

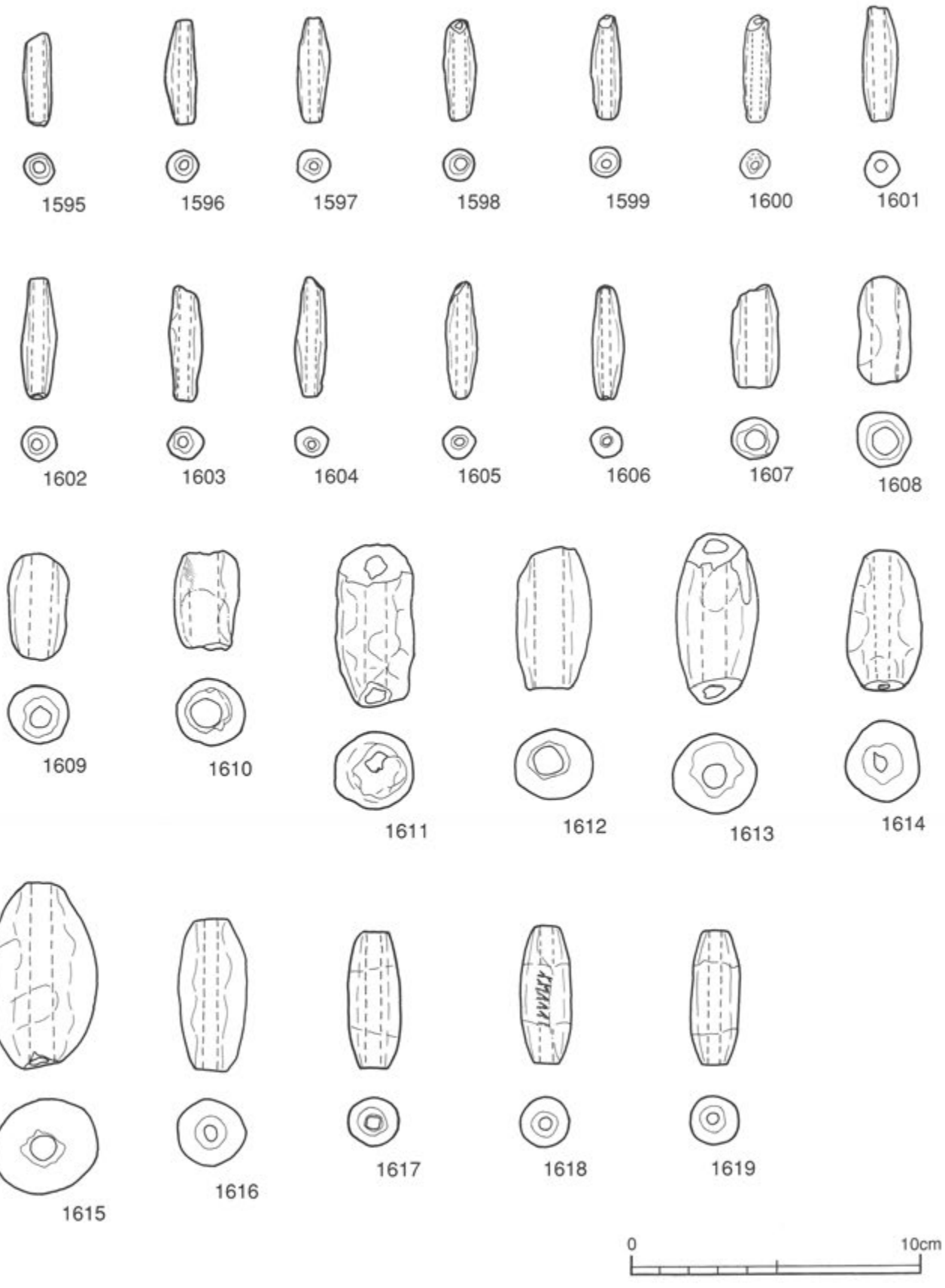
1593はコシキの一部と思われる。底部を面取りしている。外面は横ナデ，内面は縦位のヘラケズリである。

1594は把手の一部と思われる。円形の棒状で，ナデ調整されている。

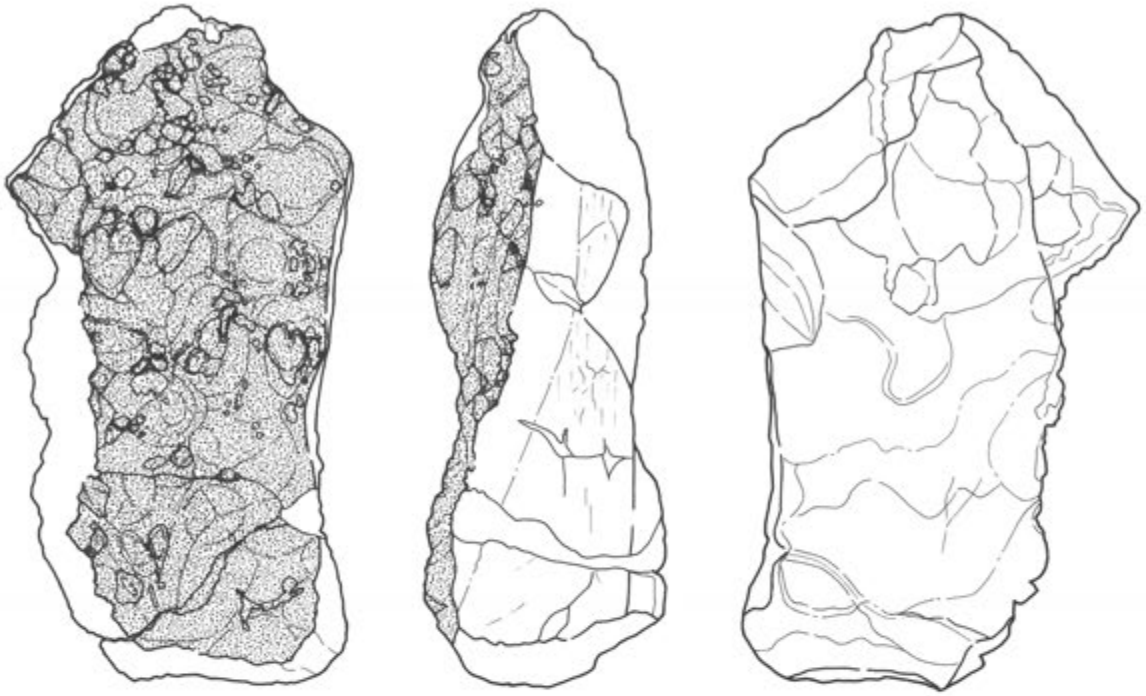
②土錘（第294図）

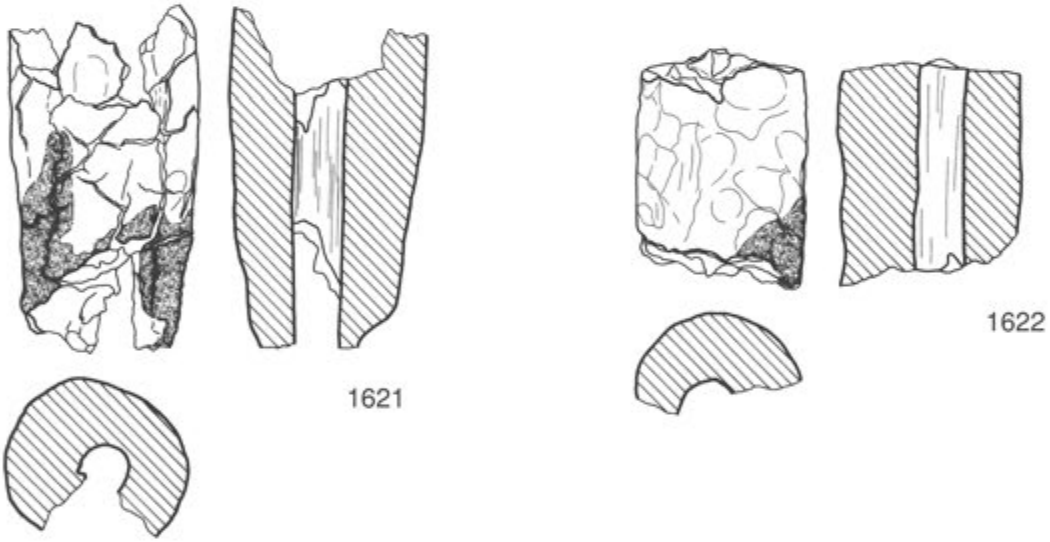
1595～1619は土錘である。細長いものから，太くて短いものまで様々あるが，法量や形状に基づいて7類に分けることが可能である。

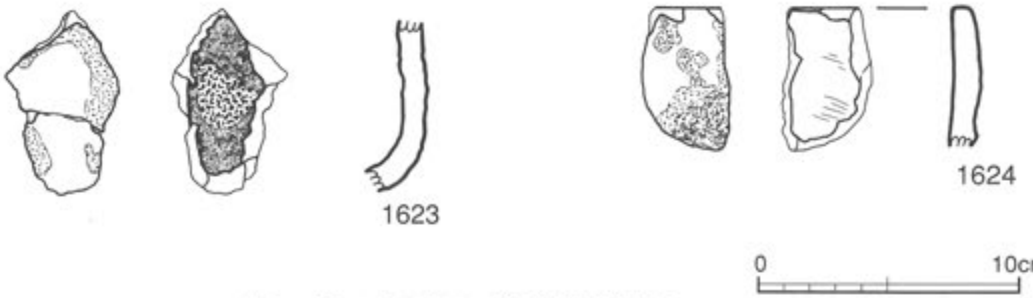
Ⅰ類（1595～1600）は全長が3～4cm・幅が1cm前後のもので，細くて軽いものである。中心に



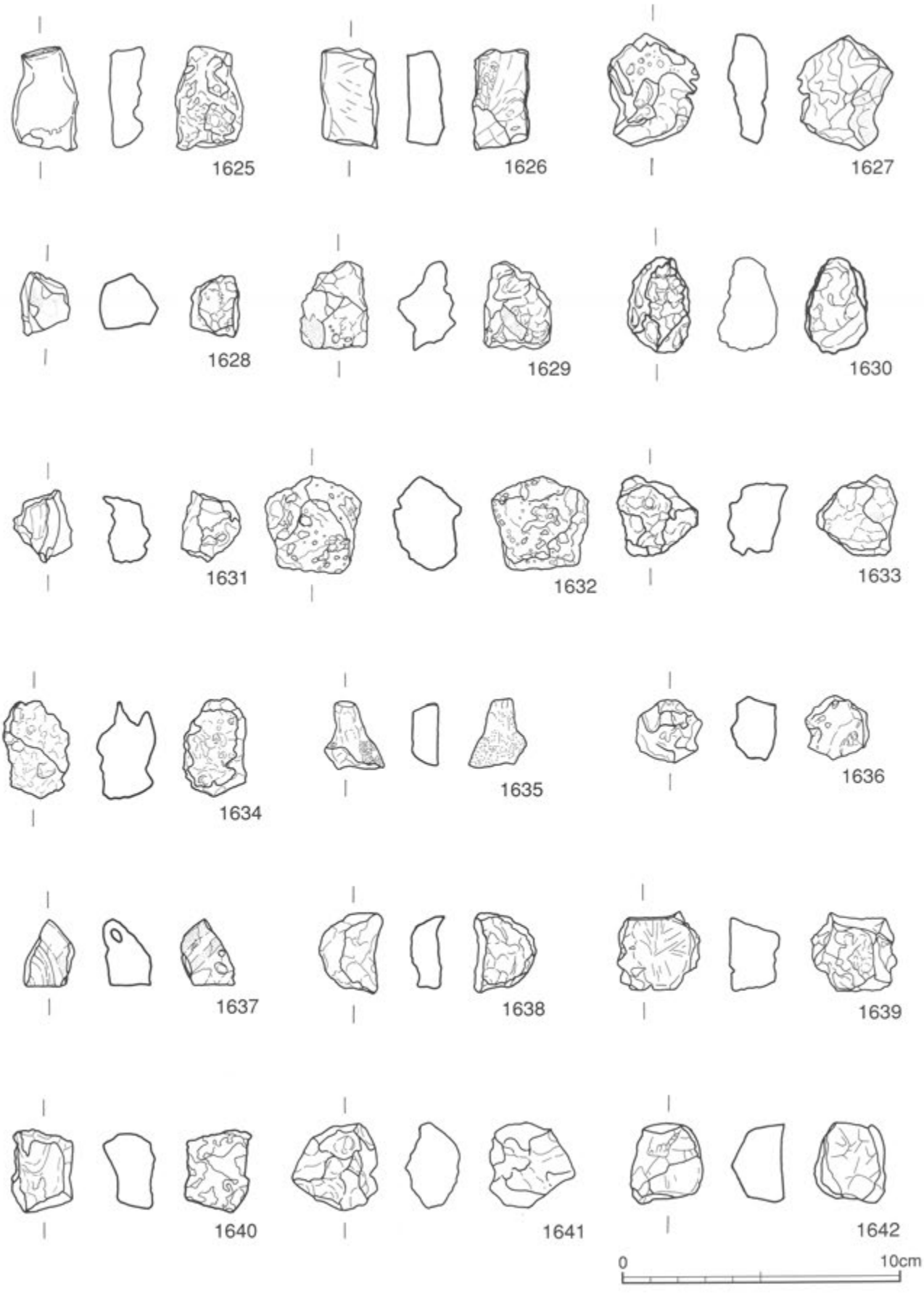
第294図　その他２（土錘）



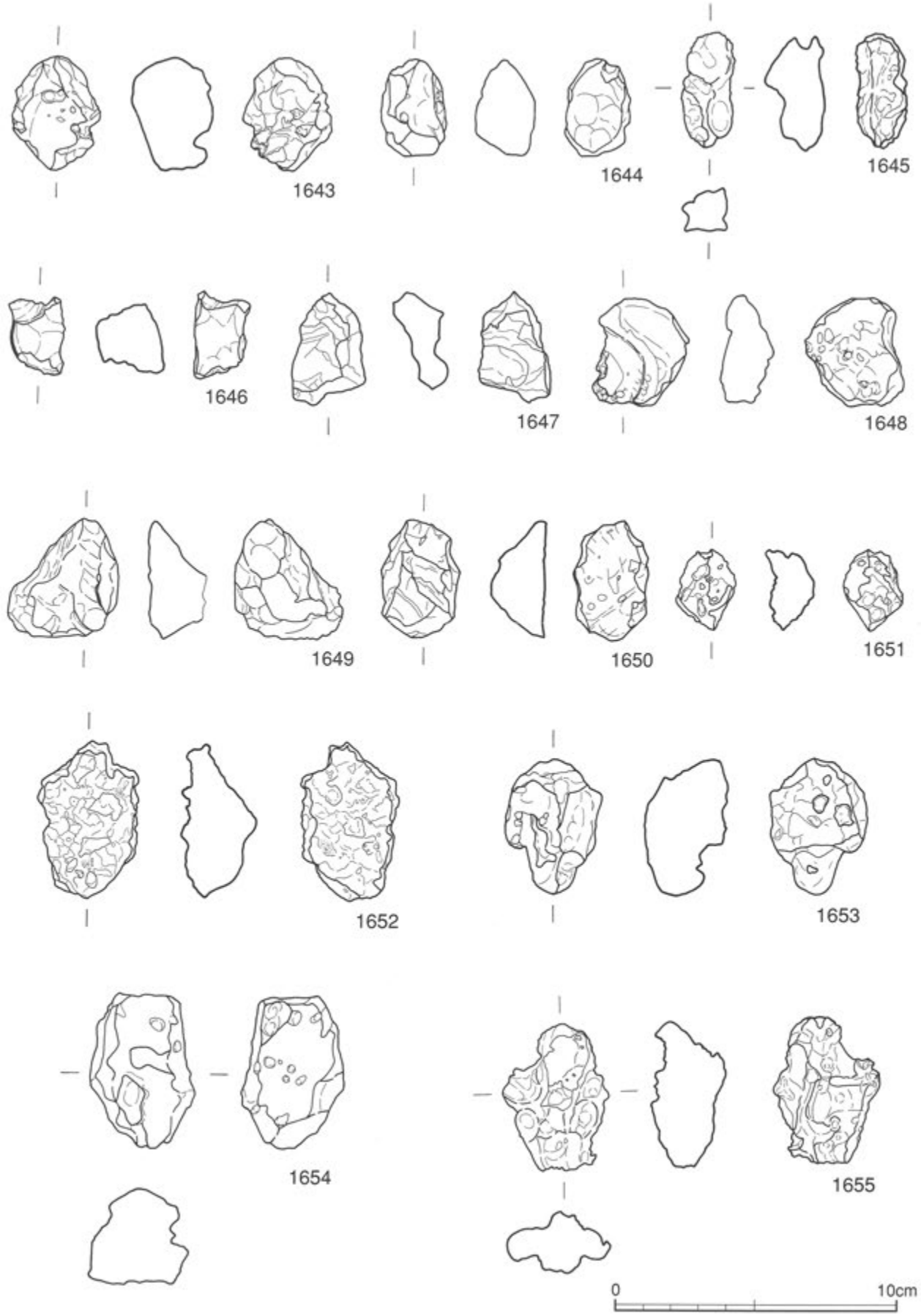




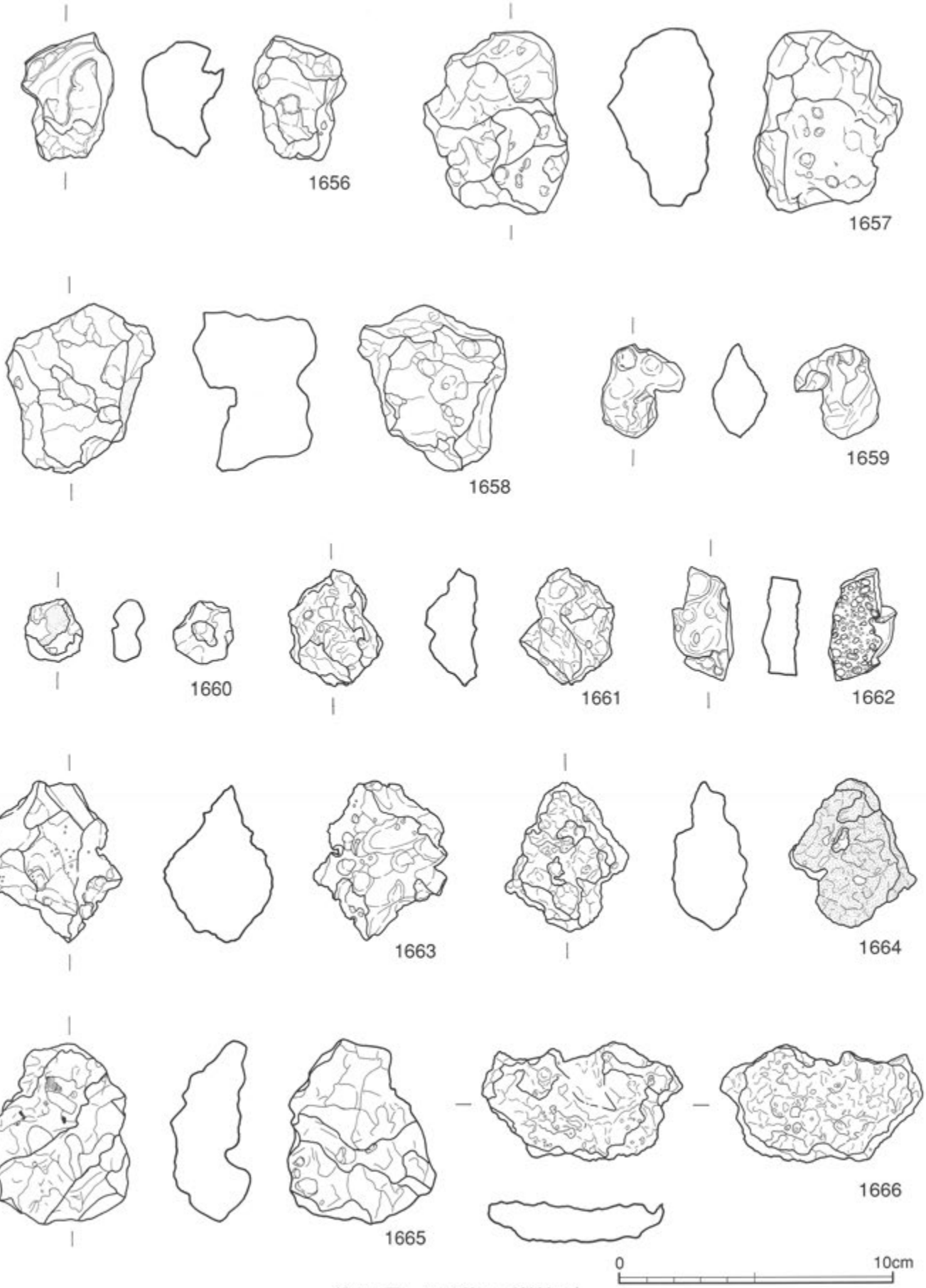
第295図　その他３（鍛冶関連遺物）



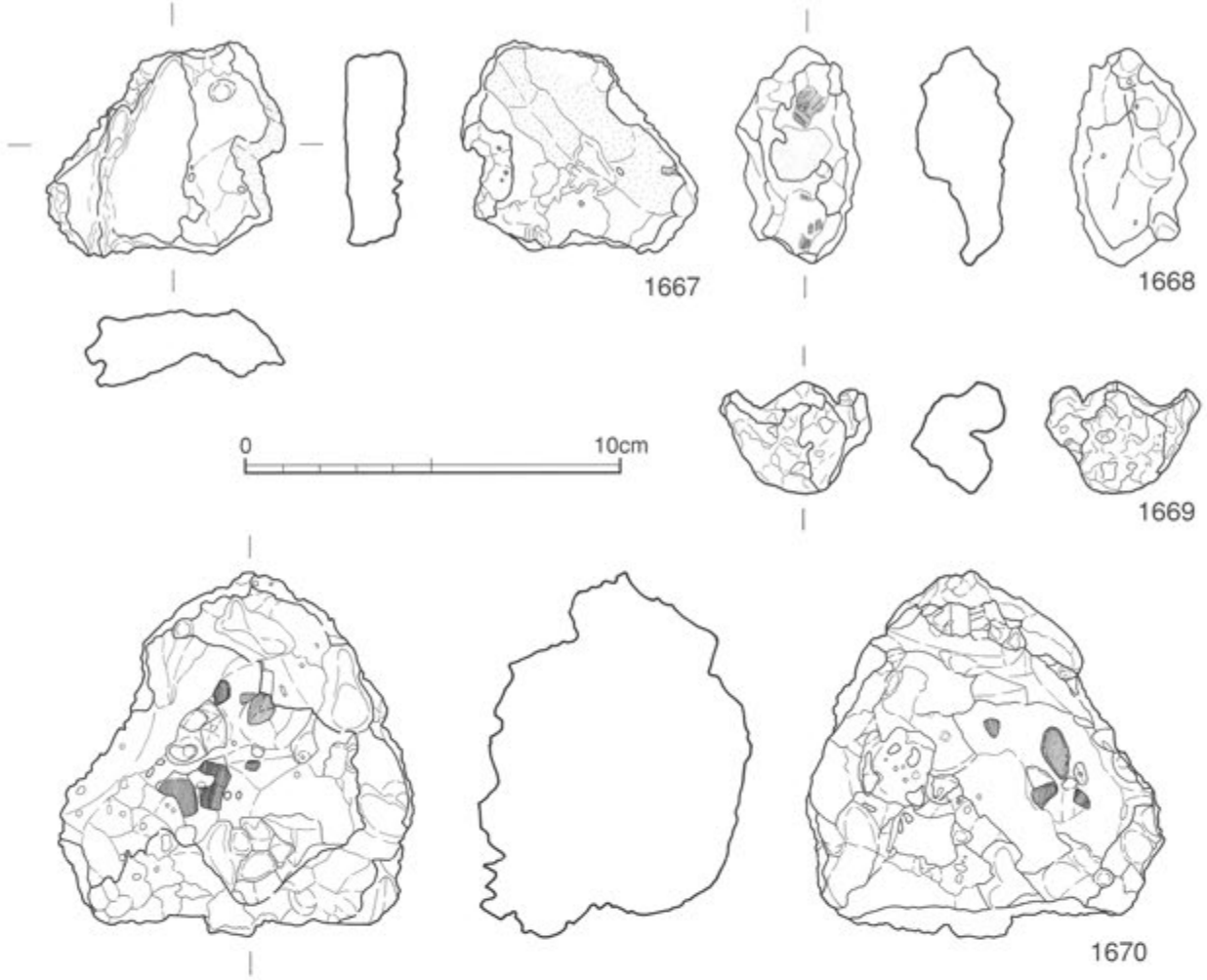
第296図　その他４（鉄滓１）



第297図　その他５（鉄滓２）



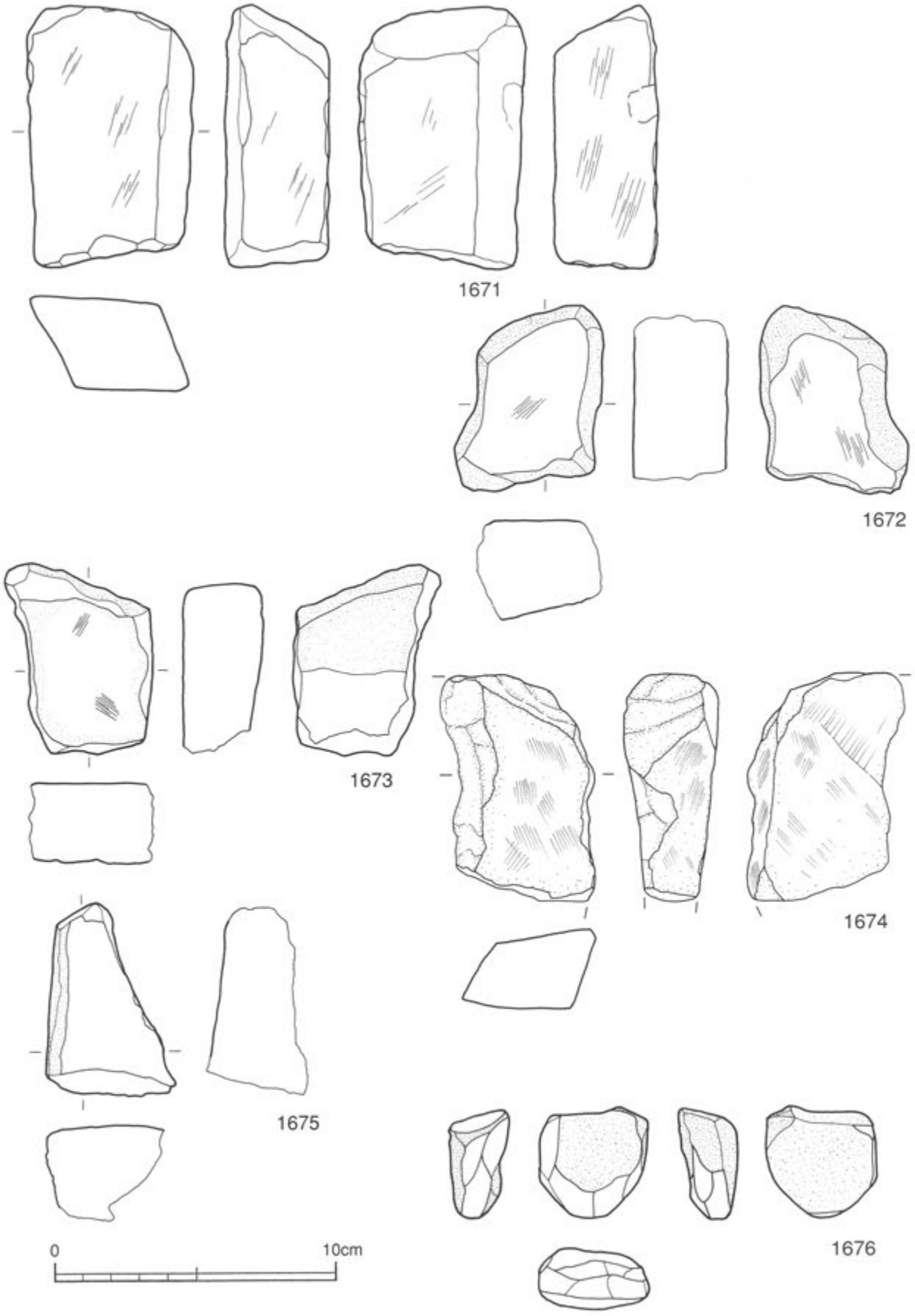
第298図　その他６（鉄滓３）



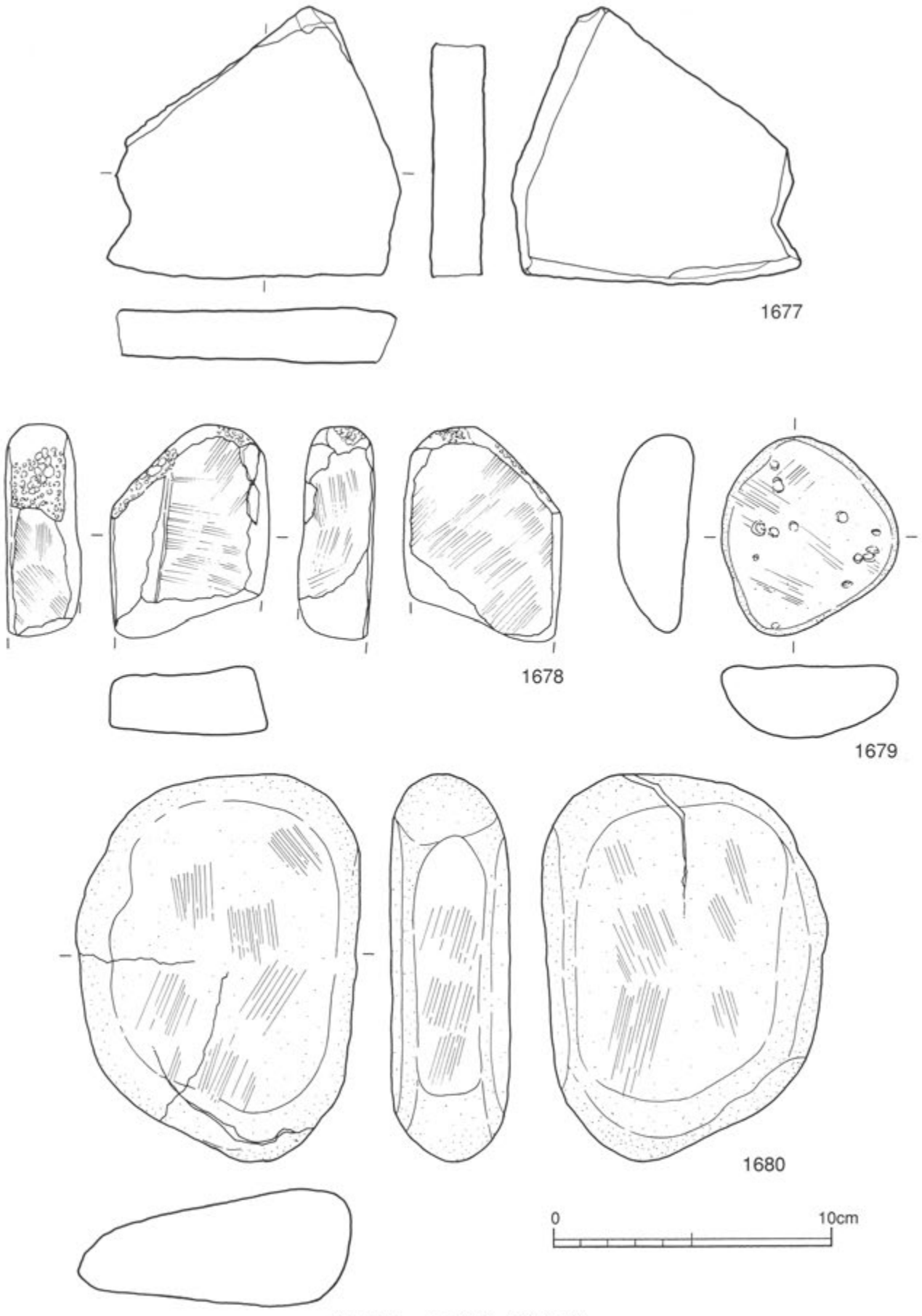
第299図　その他７（鉄滓４）

5mm弱の孔が通る。丸棒に粘土を巻き付けて成形したと考えられ，全体的に手捏ねの痕跡が残り，凸凹した印象を受ける。Ⅱ類（1601～1606）は全長が約4.5cm・幅が1～1.5cm程度のもので，Ⅰ類よりも一回り大きくなるものである。全体的に紡錘形状を呈し，中心にはⅠ類と同じく5mm弱の孔が通る。Ⅲ類（1607～1610）は全長が3.5cm～4cm・幅が2～2.5cm程度のもので，短くて太いものである。全体的に丸みをもっており，繭玉状を呈する。全体的に手捏ねの痕跡が残り，凸凹した印象を受ける。中心には1cm弱の孔が通る。Ⅳ類（1611～1613）は欠損のため全形が不明であるが，全長が5cm以上になる大型のものと思われる。幅は3cm前後あり，中心には1cm弱の孔が通る。全体的に丸みをもち紡錘形状を呈するものと，ゴツゴツして棒状を呈するものとある。

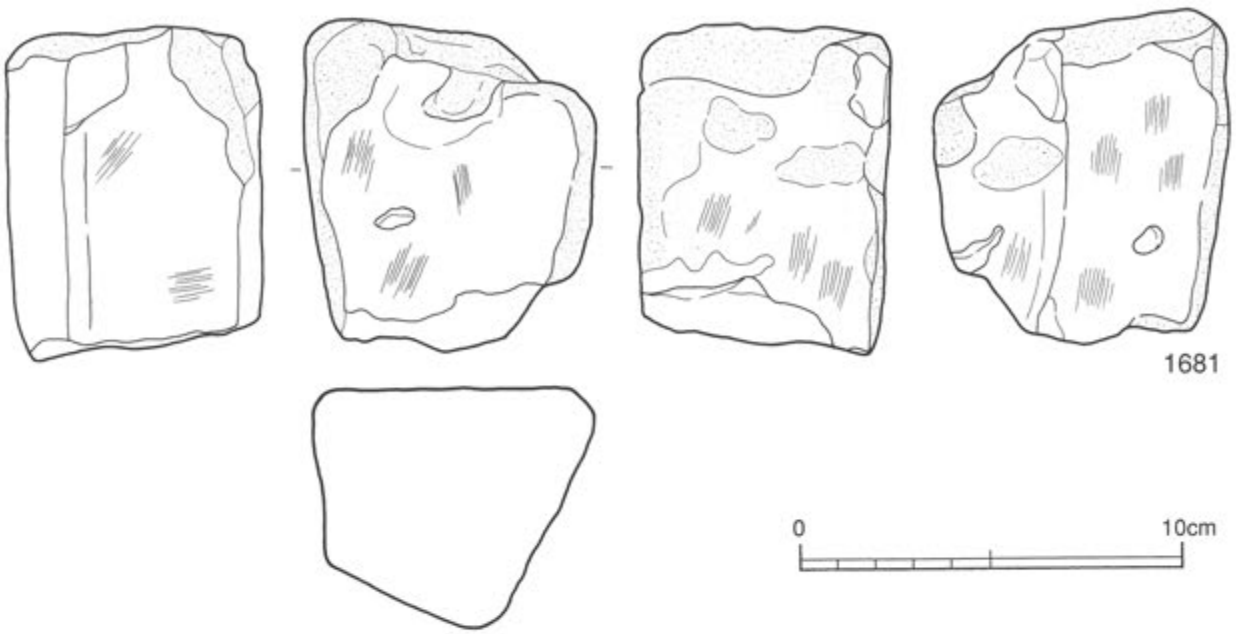
Ⅴ類（1614・1615）は全長5～6.5cm・幅2.5～3.5cmで全体的に丸みをもち紡錘形状を呈するものである。丸棒に粘土を巻き付けて成形したと考えられ，粘土を密着させた際の指頭圧痕が明瞭に残る。Ⅵ類（1616）は全長5.3cm・幅2.4cmである。全体の形状はⅦ類に近いが，材質が異なるため別類として扱った。Ⅶ類（1617～1619）は全長4.7～4.8cm・幅1～1.2cmと非常に規格性の高いものである。他の類が外面に指頭圧痕を残し凸凹したものが多いのに対して，外面も整えられている。材質は磁器質のような硬いものであり，材質・規格性の高さから考えて，近世以降のものと思われる。

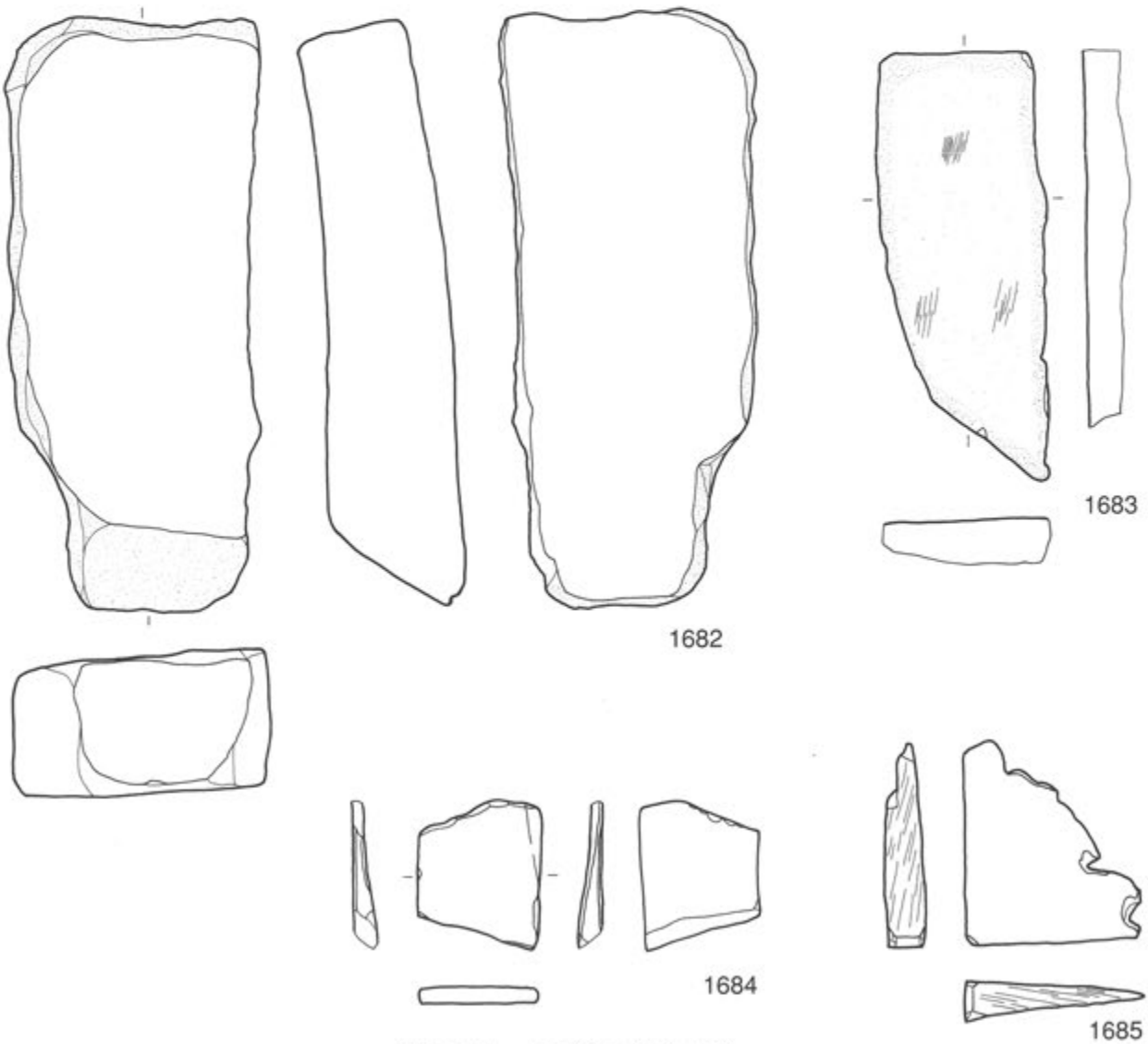


第300図　その他８（砥石１）

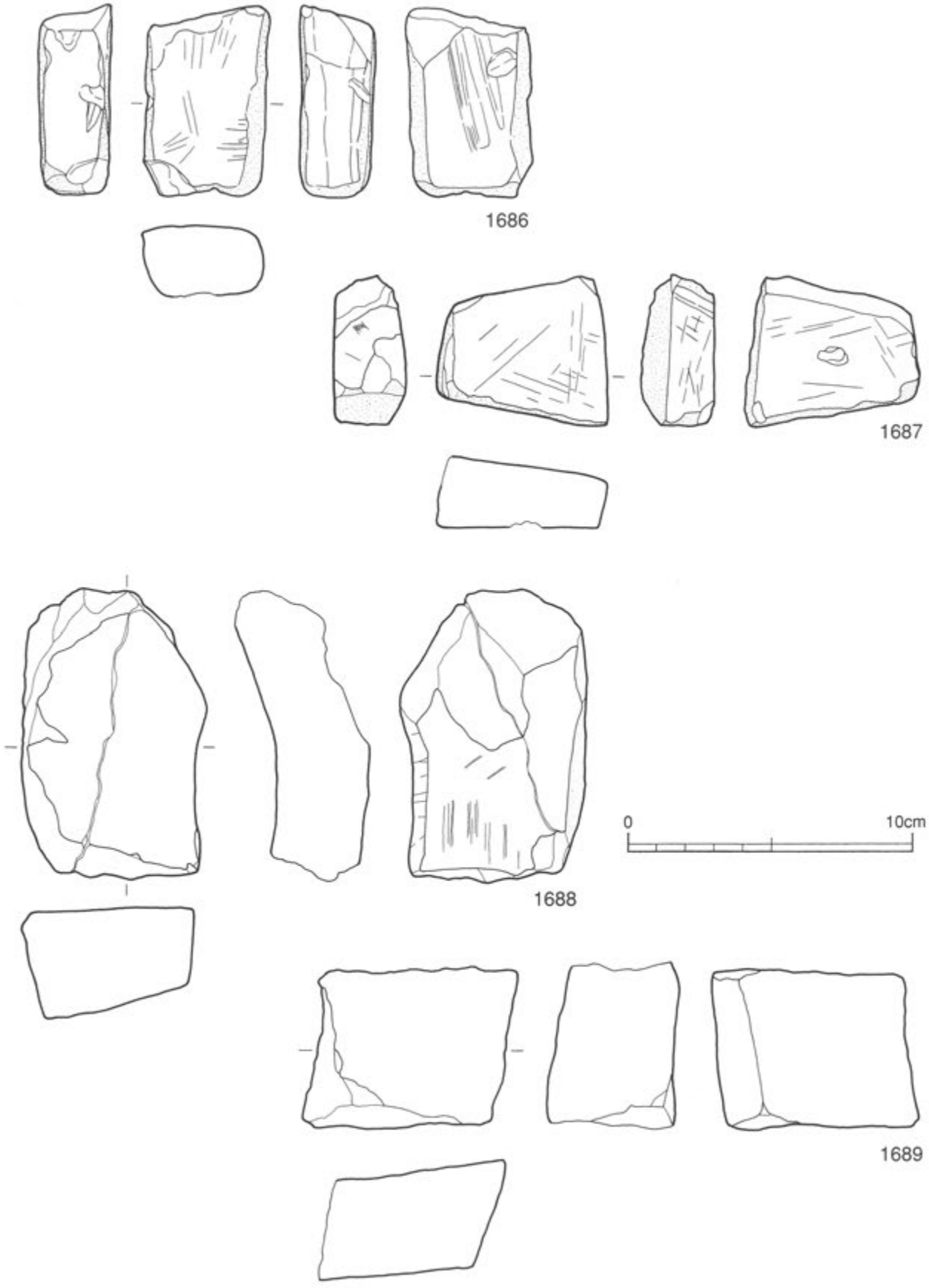


第301図　その他９（砥石２）

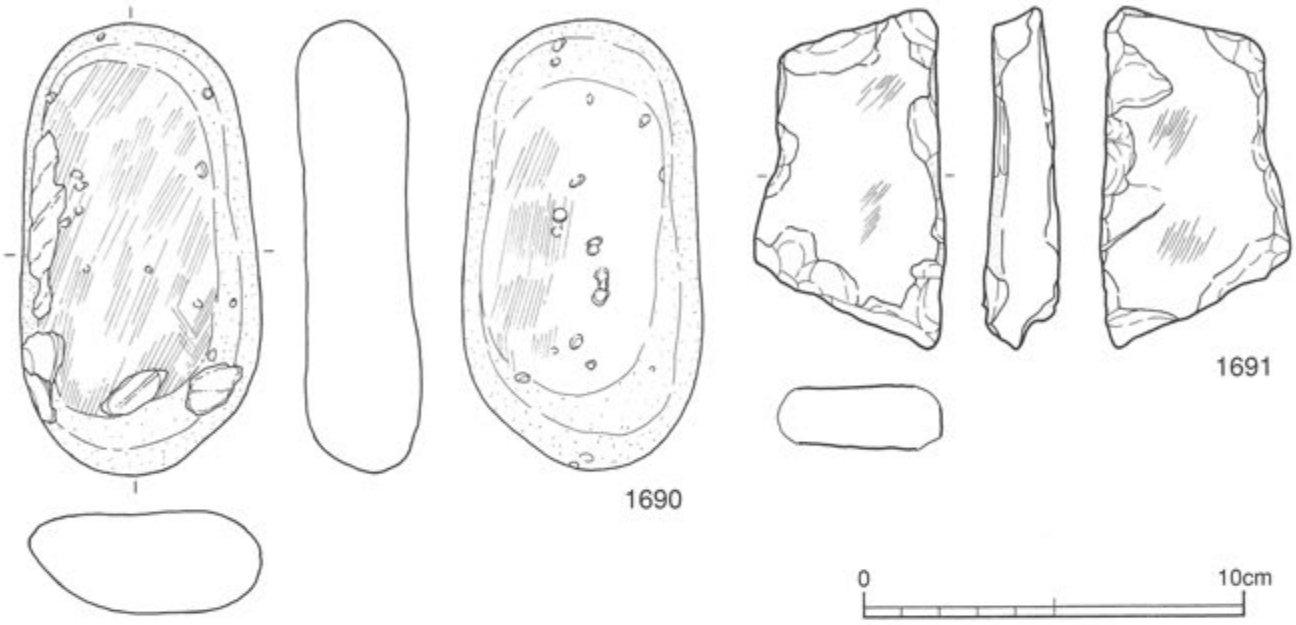




第302図　その他10（砥石３）



第303図　その他11（砥石４）



第304図　その他12（砥石５）

③鍛冶関連遺物（第295・299図）

1620は炉壁である。残存部における器壁は8.6cm,で，内面には炉内滓が付着している。

1621・1622は鞴羽口である。1621は細かく亀裂が入っており，加熱による破砕によるものと思われる。直径7cm・孔径1.9cmで，内面には竹の節の痕跡等が認められ，竹筒を利用して成形されたものと思われる。下端部には滓の付着が見られる。1622は直径7cm・孔径2cmである。外面には指頭圧痕が多数認められる。下端部に滓の付着が見られる。

1623・1624は坩堝と思われる。1623は丸底から胴部が直立する器形と思われる。外面は加熱によって変色しており，一部に滓のような付着物が見られる。内面にも滓のような付着物が認められるが，分析の結果，銅であることが判明した。分析内容に関しては，別項を参照して頂きたい。1624は口縁部付近と思われ，端部を四角く収めている。外面は加熱を受けて変色しており，一部に滓のような付着物が認められる。内面はナデ調整である。

1625～1670は鉄滓である。1625～1664は流動滓と思われる。1659にはガラス質滓の付着が認められる。1664は背面に砂の付着がみられる。1665～1670は炉内滓と思われる。1665・1668～1670には炭が付着した痕跡が残る。1667は表面が平坦面を形成し，背面には砂の付着が認められる。1653・1657・1660・1663～1670は磁力反応が認められるものであり，含鉄鉄滓である。

④砥石（第300・304図）

1671～1691は砥石である。材質的には砂岩製のものが最も多い。形態的には方形のものが多いが，河原石を利用したものや板状の薄いものもあり，いくつかの時代のものを含んでいる可能性を伺わせる。1671・1686・1687は方形で表面に擦痕が認められる。1676は携帯用と思われ全面的に使用の痕跡が伺えるものである。1679・1680・1690は円礫を利用している。1684・1685は板状の薄いものである。

付編２　斜面部の調査

付編2-1：トレンチ調査の結果

平成10年度に，安茶ヶ原台地南側の斜面で，遺跡の範囲確認を目的として行ったトレンチ調査の概要は先に述べた通りであるが，ここでは，各トレンチの状況について可能な限り詳細に述べるとともに，その結果をまとめてみたい。

斜面の比高差は約14mあったが，急傾斜の斜面は除外して比較的安定した緩傾斜の面あるいは小さな平坦面を中心に５本のトレンチを入れた。トレンチの大きさは３ｍ×５ｍを基本として設定した。第１トレンチ（以下，１Ｔと略す）と２Ｔを台地南側の一段低いテラス面に傾斜と直交する方向に設定し，山鍬による掘り下げを行った。その結果，表土のすぐ下は暗褐色土があるものの，無遺物層であり，その後はすぐにシラスとなっていたことから，遺構，遺物共に確認されなかった。

次に，町道横の人家が建っていた平坦面に，３Ｔ及び４Ｔを傾斜と直交する方向に設定し，さらに，傾斜の方向に合わせて５Ｔを設定して，それぞれ山鍬で掘り下げを行った。その結果，５ＴからはⅡ層以下Ⅵ層該当の橙色に発色している砂礫を含む層も残存はしていたが，全くの無遺物層であった。それ以降は重機によって掘り下げを行った結果，その下位は本来のシラス層となったため，遺構，遺物共に確認されなかった。

それに対して，３Ｔ及び４Ｔでは，表土を除去した下位は部分的にⅡ層が残存していたものの，ほとんどは滅失しており，遺物も含まれてはいなかった。しかし，Ⅲ層の掘り下げ中に遺物が多く出土したことから範囲を拡張して２本のトレンチの範囲を含む10ｍ×50ｍの広さで掘り下げた。その結果，古墳時代の成川式土器の破片が大量に出土した。ただ，その出かたについては疑問があった。つまり，埋土中には大小さまざまな軽石を多く含んでいたほか，一般の礫も混じり，しかも土器片にローリングを受けているものも少なからず見られたことである。これに解明の手掛かりを与えるものとして，地形が東側から西側へと大きく傾斜していることと，台地上の包含層では小さなパミスは含むことはあっても，割合に大きな軽石そのものが混じることは，まず考えられないことであった。これは，人が運搬という手段を用いない限りは招来されることはない。そうでなければ，そのような大きさの軽石が降下してきたということになる。火山でも噴火口の近辺であれば考えられなくはないが，ここは近辺に火山は知られていない。そうであれば，地形が東から西に大きく傾斜していることと，土器片にローリングを受けているものがままあることから導かれる結論としては，安茶ヶ原台地の南側に対峙する台地から，梅雨時や台風時などの大雨によって起きたと考えられる洪水等によってもたらされたと想定することが適当である，ということになる。そのために，そのような遺物の出土状況となるとともに，遺構が全く見られないことの整合性もうなずけると思われるのである。事実，安茶ヶ原台地の南側の台地には，調査時点でも成川式土器片が散在していたことを付記しておきたい。

調査によって大量の遺物を取り上げた後にさらに下層の掘り下げを行ったが，遺構，遺物共に確認されず，シラス層まで掘り下げて調査を終了した。

付編2-2：斜面部の出土遺物

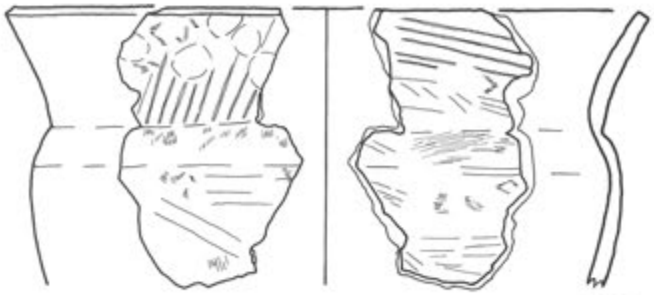
成川式土器（第305～308図）

1692～1713は成川式土器の甕である。1692～1701は甕の口縁部で，1692・1693は頸部でくびれてから外へ開くタイプで，口縁部が弱いく字状になるものである。胴部最大径は頸部近くにある。口縁部内面の稜は見られない。1692は口縁部外面に縦位のハケ目の痕跡が残るとともに，指頭圧痕も確認される。内面はヨコナデが主であるが，口縁部にハケ目が残る。1693は口縁部外面に掻き上げの痕跡が明瞭に確認される。内面はヨコナデが施されるが，指頭圧痕も明瞭である。胴部はタテナデである。1694・1695は頸部のくびれがほとんどなく外へ開くものである。胴部にほとんど張りはなく，底部からほぼ直線的に立ち上がってくる。型式学的に1692・1693のタイプより後出するものである。1694は口縁部外面は縦位，胴部は斜位のハケ目が施される。1695は外面は斜位のハケ目が主であるが，口縁端部周囲にヨコナデが見られる。内面はナデ調整であるが，口縁部を曲げた際についたと思われる指頭圧痕が多く確認される。

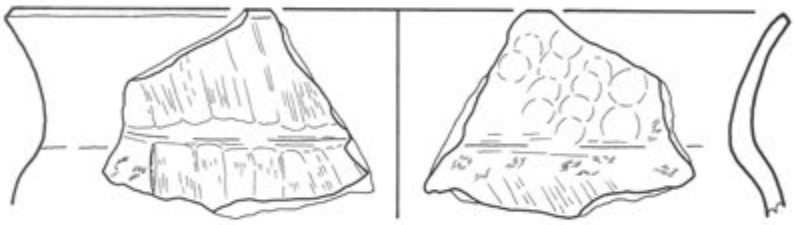
1696・1697・1701は甕の口縁部であるが，形状は推測できない。1696は細い突帯がめぐるもので，一つまみごとに突帯をつまんだような痕跡が見られる。内面は口縁上位に指頭圧痕が確認される。1697は外面が縦位のハケ目で，内面は横位のハケ目が見られる。1701は下部が若干曲がっており，恐らく1694・1695のような形態であったと推測される。外面は縦位のハケ目が明瞭に残る。

1698～1700・1703は甕の頸部である。頸部付近に胴部最大径があり，くびれが弱い形状から，本来は1694・1695のような形態であったと推測される。1698・1700は断面三角形の突帯がめぐり，1699・1703は無突帯である。1698は内面に指頭圧痕が認められる。1700は内外面ともにナデ調整である。1699は外面はナデ調整であるものの，ナデの前に調整されたハケ目の痕跡が残っている。内面はハケ目調整のあと，一部にナデ調整が行われている。1703は外面は口縁部は縦位のハケ目で，内面はナデ調整が主である。内面は頸部から胴部にかけて指頭圧痕が見られる。

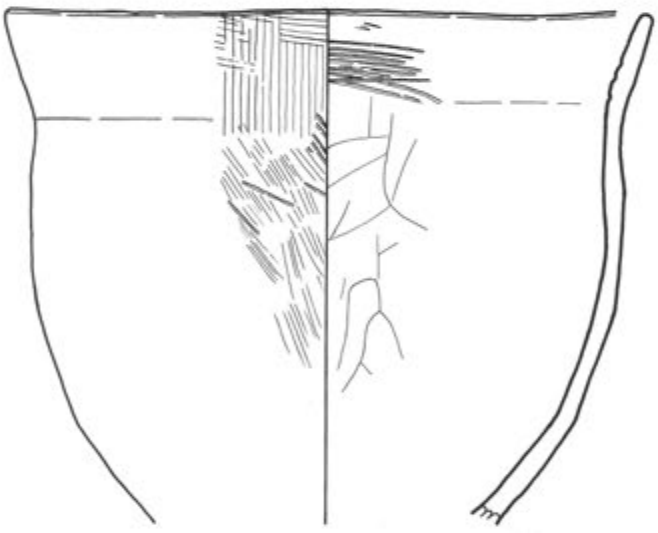
1702～1710は甕の胴部下位片である。1702の外面はハケ目調整で，内面はハケ目調整ののち，一部がナデ調整されている。1704も外面はハケ目調整で，内面はナデである。1705～1710は，胴部片ではあるが，ほぼ脚部に近い場所である。1705は外面は縦位のハケ目で，内面はヘラ状工具によるナデである。1706は内外面ともに縦位のハケ目が認められる。1707は外面はハケ目の痕跡が若干認められ，内面は指頭圧痕が認められる。1710は外面はナデ調整で，内面は一部にハケ目の痕跡が残っている。1708～1713は甕の脚部である。1708は胴部まで残存しているもので，外面はハケ目調整が明瞭に残り，内面はナデ調整である。胴部に指頭圧痕も認められる。1709は外面はナデ調整であるが，ナデの前に行ったハケ目調整の際のものと思われる工具痕が消えずに残っている。脚部内面もハケ目調整の際のものと思われる工具の起点痕が，円を描くように残っている。また胴部と脚部の接合が剥がれており，製作技法を推測できる。1711は外面はナデで，内面は1709と同様にハケ調整の際のものと思われる工具の起点痕が脚裾に認められる。1712は外面は縦位のハケ目であるが，裾部は横位のナデによって消されている。内面も裾のあたりはナデ調整で，上の方に指頭圧痕も認められる。1713の外面はナデ調整で，内面はハケ調整の際のものと思われる工具の起点痕が認められる。



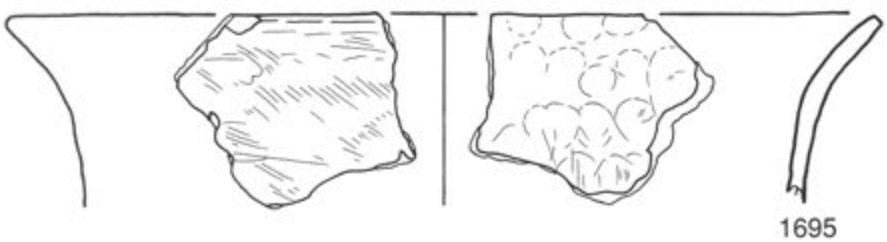
1692



1693



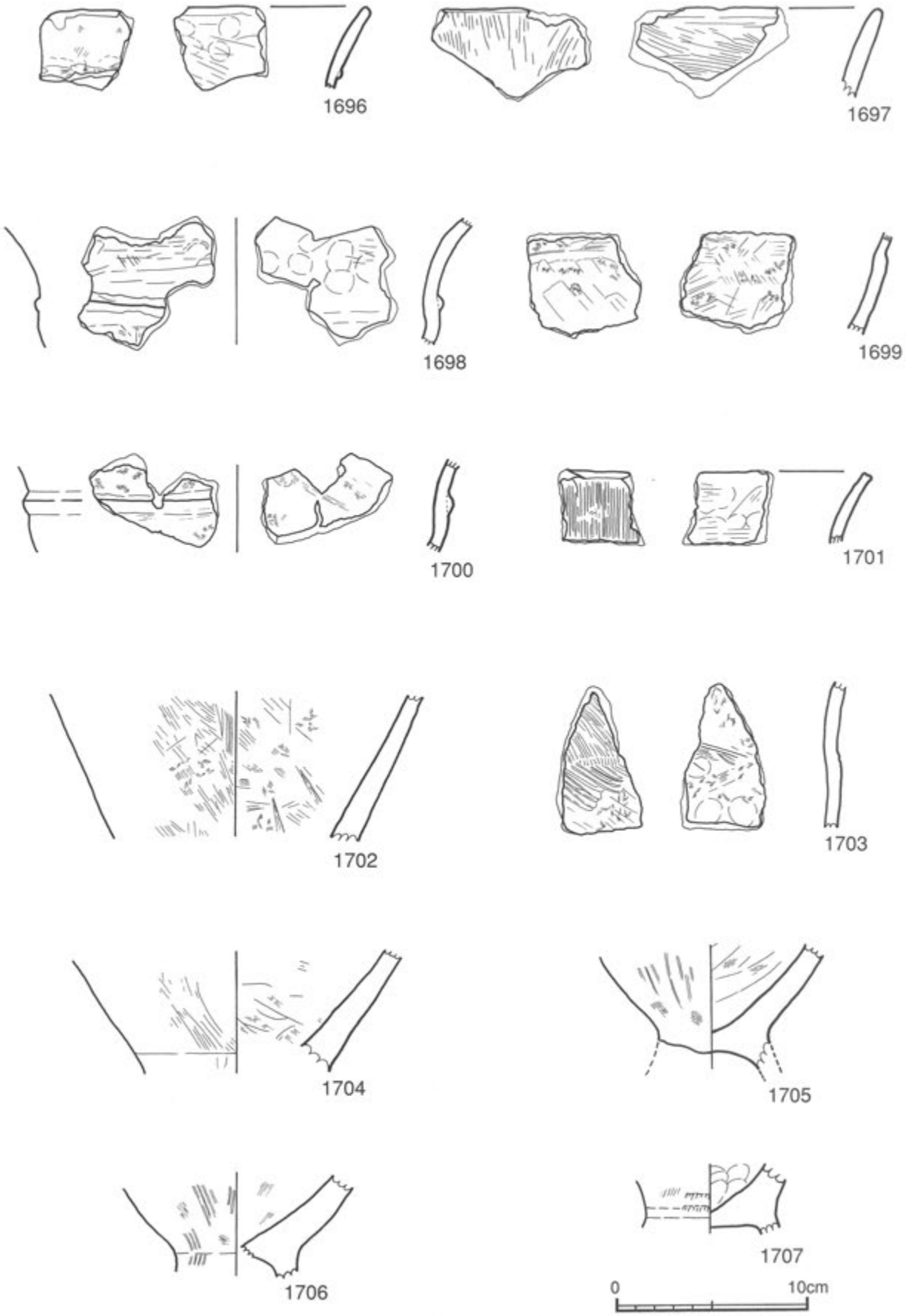
1694



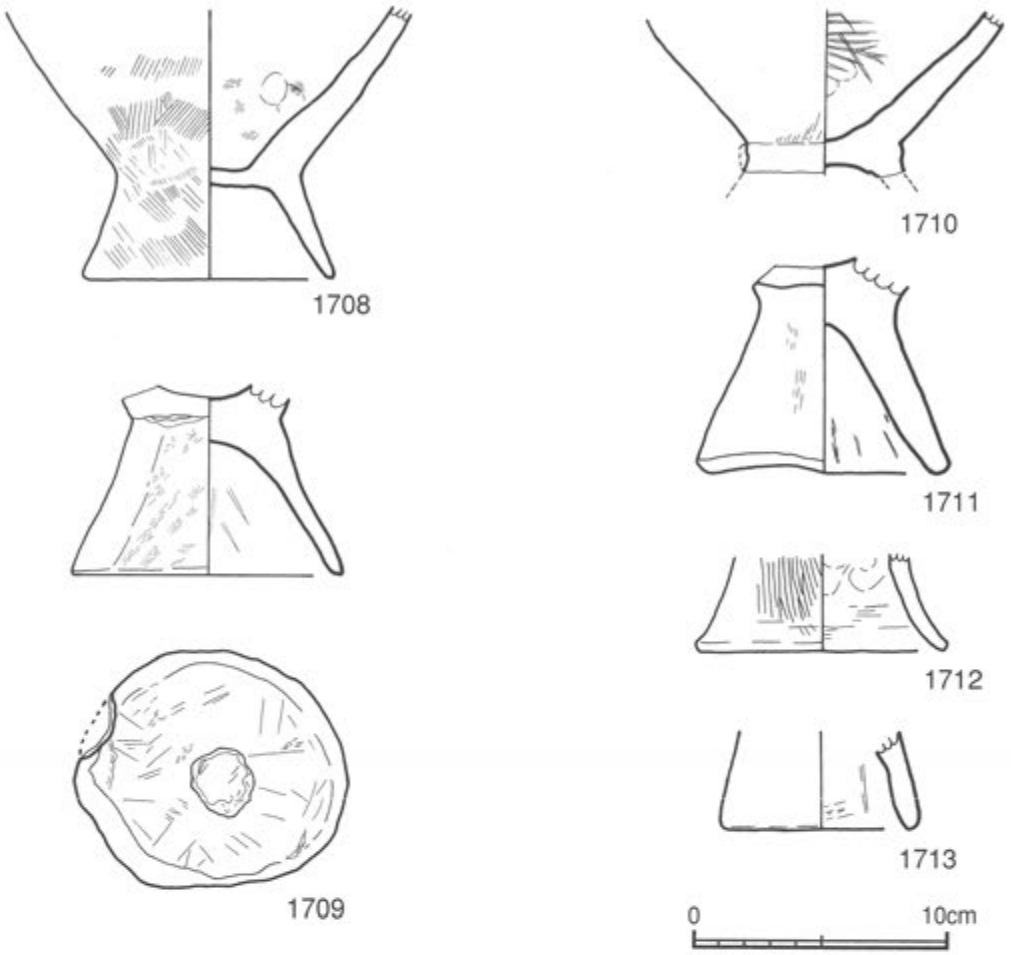
1695

0 10cm

第305図　斜面部出土成川式土器 1



第306図　斜面部出土成川式土器 2

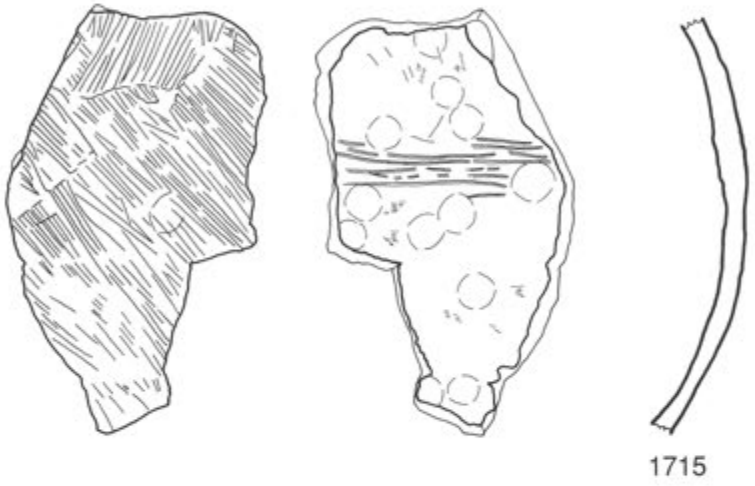


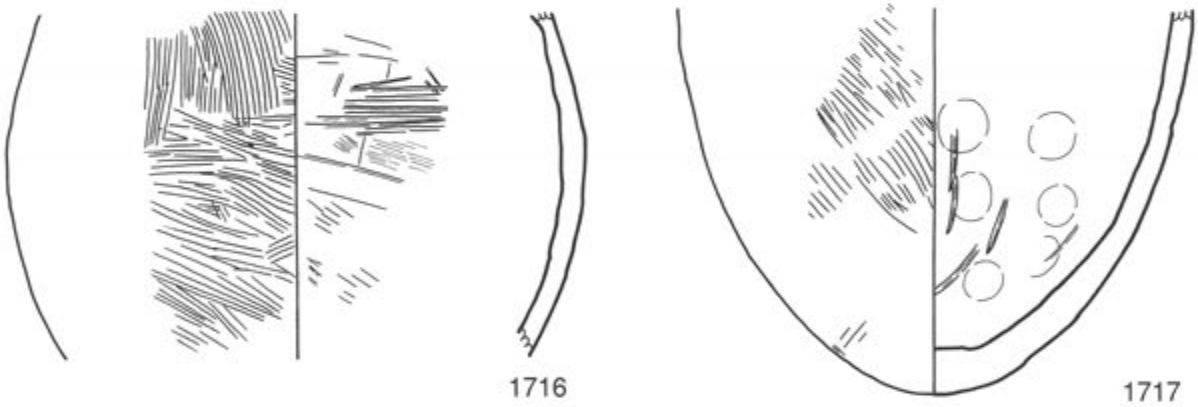
第307図　斜面部出土成川式土器 3

1714～1717は壺形土器である。1714は壺の胴部片である。胴部最大径付近に 4 条の横位の沈線を巡らし，さらに縦位の沈線を 4 条 1 単位で間隔を空けながら入れている。内外面ともにナデ調整が施されている。胴部最大径36cmである。1715も胴部片である。外面は斜位のハケ目調整で，内面は胴部最大径付近に横位のハケ目が施されている。そのほかはナデ調整であるが，指頭圧痕も認められる。1716も胴部径で，胴部最大径23cmである。外面は胴上半部が縦位，下半部が斜位のハケ目である。内面は横位のハケ目調整が行われ，その後ナデが施されている。1717は胴底部である。底部は丸底を呈する。残存部における胴部径は20.4cmで，長胴に近い形状を呈するものと思われる。外面は斜位のハケ目である。内面はナデ調整が主であるが，一部に工具の起点痕が残っている。また指頭圧痕も認められる。

1718は坩形土器である。口径は9.6cmである。口縁部はやや外にひらいている。底部は平底に近い丸底である。全体的に器壁は薄いが底部のみ厚くなっている。頸部にミガキが施されているが，他はナデ調整である。頸部内面には指頭圧痕が残り，外面には黒斑が認められる。

1719は埦形土器である。復元口径21.4cmを測る。内外面ともにナデ調整が施されている。





第308図　斜面部出土成川式土器 4

表29　古墳・古代遺物観察表

挿図番号	報告番号	出土区	遺構	時代	部位	調整（外面）	調整（内面）	焼成	色調（外面）	色調（内面）	取上番号	石英	長石	角閃石	輝石	その他
144	703	B-18	SK04	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い黄褐	—		○			
	704	B-18	SK04	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い橙	—		○			
	705	B-18	SK04	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—		○			
145	706	B-17	SK06	古墳	胴	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	11		○			
	707	B-17	SK06	古墳	胴	ハケ	ハケ	不良	浅黄橙	鈍い黄橙	1		○			
146	708	D-33	SK08	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	—		○	○		○
147	709	F-26	SK09	古墳	胴	ハケ	ナデ	良好	鈍い褐	灰黄褐	10	○				
	710	F-26	SK09	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄褐	鈍い黄橙	10102	○	○			○
148	711	B-13	SK10	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い黄	—		○			○
	712	E-27	SK11	古墳	胴	ハケ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い橙	—	○	○			
149	713	C-26	SK12	古墳	胴底	ナデ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	—	○				
153	714	F-16	SS03	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	成川6			○		
	715	F-16	SS03	古墳	胴底	ハケ	ハケ	良好	明赤褐	明赤褐	成川1	○	○			
	715	F-16	SS03	古墳	胴底	ハケ	ハケ	良好	黒褐	黒褐	成川2		○	○		
	715	F-16	SS03	古墳	胴底	ハケ	ハケ	良好	灰褐	灰褐	成川2		○			
	715	F-16	SS03	古墳	胴底	ハケ	ハケ	良好	明赤褐	明赤褐	成川3	○	○	○		
	715	F-16	SS03	古墳	胴底	ハケ	ハケ	良好	暗褐	暗褐	成川9		○			
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	褐灰	褐灰	—	○	○	○		
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	褐灰	褐灰	—	○	○	○		
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—					
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い褐	鈍い褐	—		○	○		
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	成川11		○			○
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い褐	鈍い褐	成川11	○	○			
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い橙	成川11		○			○
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	褐灰	褐灰	成川2	○	○	○		
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	黒褐	黒褐	成川2	○				○
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い褐	鈍い褐	成川2	○				
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い橙	成川2		○			○
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い橙	成川2	○	○	○		
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い橙	成川2					
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	灰褐	成川3	○	○			
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	成川4	○	○			○
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	灰黄褐	灰黄褐	成川5		○			○
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い橙	成川5		○			○
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	灰褐	灰褐	成川5		○			○
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い褐	鈍い褐	成川5					
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い橙	成川5		○			○
	716	F-16	SS03	古墳	口胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い橙	成川9		○			○
155	717	C-21	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い橙	2113					
	718	E-11	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	灰黄褐	532					
	719	F-31	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	灰黄褐	4006					
	720	C-29	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	灰黄褐	5153					
	721	D-29	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	橙	4518					
156	722	C-13	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	11876					
	723	E-18	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	12111					
	724	C-20	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	2975					
	725	C-15	Ⅳ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	明褐	鈍い黄橙	10952					
	726	B-20	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	浅黄	鈍い黄橙	1730					
	727	C-10	撹乱	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	—					
	728	—	—	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	—					
	729	D-31	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	4041					
	730	—	—	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	浅黄	鈍い黄橙	—					
157	731	C-31	Ⅲ	古墳	口	ハケ，ケズリ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	3633					
	732	—	—	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	—					
	733	E-25	Ⅲ	古墳	口	タタキ	ナデ	良好	淡橙	鈍い黄橙	12701					
	734	F-14	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	304					
	735	F-14	Ⅲ	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	褐	鈍い黄橙	11433					
	736	E-25	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	12677					
	737	C-23	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	明赤褐	黒褐	9268		○			
	738	E-27	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	15023					
	739	E-27	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	15026					
158	740	B-10	Ⅲ	古墳	口胴	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	156					
	741	D-20	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	1495					
	742	D-12	—	古墳	口	ナデ	ナデ	良好		鈍い黄橙	—		○			○
	743	D-12	Ⅲ	—	胴	ハケ	ナデ	不良	橙	鈍い黄橙	299		○			○
	744	C-8	—	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	浅黄	鈍い黄橙	—		○			○
	745	B-10	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄褐	鈍い黄橙	156	○	○			○
159	746	F-30	—	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—	○	○			○
	747	D-12	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	297	○	○			○
	748	C-28	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	明黄褐	鈍い黄橙	5144	○	○			○
	749	B-15	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	11755	○	○			○
	750	B-12	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	明赤褐	鈍い黄橙	12213	○	○			○
	751	D-24	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	15106	○	○			○
	752	G-17	Ⅱ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	1016	○	○			○
	753	D-11	Ⅲ	—	口	ハケ	ナデ	不良	橙	鈍い橙	517		○	○		○
	754	E-11	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	橙	358		○	○		○
160	755	E-11	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	橙	357		○	○		○
	756	D-24	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い橙	12646	○	○			○
	757	C-26	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い橙	14928	○	○			○
	758	C-26	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	明黄褐	鈍い橙	14932	○	○			○
	759	D-27	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い橙	15096	○	○			○
	760	C-13	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い橙	11866	○	○			○
	761	C-29	—	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い橙	—	○	○			○
	762	D-28	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄褐	鈍い黄橙	4460	○				○
	763	D-14	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	11168	○				○
	764	C-13	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄褐	11866		○	○		
	765	—	—	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	—		○			○
161	766	D-12	Ⅲ	—	口	ハケ	ハケ	不良	橙	黄褐	299		○			○
	767	C-7	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い赤褐	鈍い黄褐	581	○	○			
	768	E-27	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	暗灰黄	15020		○			
	769	C-26	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	橙	14930					
	770	F-25	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い褐	鈍い褐	15226					
	771	E-27	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	明赤褐	黄褐	15028	○	○	○		
	772	D-26	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄褐	鈍い褐	14967		○			○
	773	E-27	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	15026		○			
	774	E-27	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	15020	○				
	775	D-32	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	—	○	○			○
	776	C-26	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	14928	○				○
	777	C-23	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	明赤褐	鈍い黄橙	9268	○				○
	778	D-8	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い褐	鈍い橙	—		○			○
	779	E-25	—	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄褐	鈍い橙	—	○				○
162	780	—	—	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—	○				
	781	C-17	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	橙	—		○			○
	782	F-11	—	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	橙	灰黄褐	—		○			
	783	A-14	Ⅳ	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い橙	12108			○		
	784	E-11	—	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	明黄褐	鈍い黄褐	—					○
	787	—	—	—	口	ハケ	ハケ	不良	灰黄	鈍い黄橙	—					○
	788	E-20	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	明赤褐	鈍い黄橙	2096					○
	789	G-28	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ハケ	良好	鈍い黄橙	橙	15313	○	○			○
163	790	—	Ⅲ	古墳	頸	ナデ	ケズリ	良好	黒褐	鈍い橙	12131	○				○
	791	G-11	—	古墳	頸	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	灰黄褐	—			○		
	792	C-28	Ⅲ	古墳	頸	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	5167	○				○
	793	C-28	Ⅲ	古墳	頸	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	5167	○				○
	794	—	—	古墳	頸	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—					
	795	C-7	—	古墳	頸	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	—		○			○
	796	—	—	古墳	頸	ハケ	ナデ	良好	橙	黒褐	—		○	○		
	797	G-11	—	古墳	頸	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—					○
	798	D-29	Ⅲ	古墳	頸	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	14973		○			○
	799	B-26	Ⅲ	古墳	頸	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	8784		○			○
	800	D-24	Ⅲ	古墳	頸	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄褐	12633		○			○
	801	C-29	Ⅲ	古墳	頸	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	灰褐	3869		○			
164	802	—	—	古墳	頸	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	灰黄褐	—		○			○
	803	—	—	古墳	頸	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	灰黄褐	—		○			○
	804	C-28	—	古墳	頸	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄褐	鈍い黄橙	—					○
	805	—	—	古墳	頸	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い橙	—		○			○
	806	D-26	Ⅲ	古墳	頸	ハケ	ハケ	良好	橙	橙	14975	○	○			
	807	A-14	—	古墳	頸	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	灰黄褐	—					
	808	C-20	Ⅲ	古墳	頸	ケズリ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄橙	3233		○			○
	809	C-20	Ⅲ	古墳	頸	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄橙	—		○			○
	810	B-10	Ⅲ	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄褐	鈍い黄橙	156		○	○		○
	811	D-27	Ⅲ	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い黄橙	15096	○		○		
	812	—	-	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	浅黄	鈍い黄橙	—	○				
165	813	C-8	—	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	浅黄	浅黄	—		○			
	814	F-11	—	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	暗灰黄	灰黄褐	—		○	○		
	815	C-10	—	—	胴	ハケ	ハケ	不良	鈍い橙	明赤褐	—		○			
	816	D-27	Ⅲ	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	明赤褐	14845		○			
	817	—	—	古墳	胴	ハケ	ナデ	良好	鈍い橙	浅黄	—			○		
	818	G-18	—	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	浅黄	浅黄	—			○		
	819	D-25	Ⅲ	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	橙	3736	○	○			
	820	E-25	Ⅲ	古墳	胴	ハケ	ナデ	良好	淡橙	鈍い黄橙	12701	○				
	821	C-31	Ⅳ	古墳	胴	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	12948			○		
	822	B-16	Ⅲ	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	橙	橙	11716			○		
166	823	F-19	—	古墳	胴	ハケ	ナデ	良好	橙	黄灰	—	○		○		
	824	D-31	Ⅱ	古墳	胴	ハケ	ナデ	良好	橙	黄灰	4043	○		○		
	825	B-22	Ⅳ	古墳	胴	ナデ	ハケ	良好	浅黄橙	黄灰	—	○		○		
	826	B-22	Ⅳ	古墳	胴	ハケ	ナデ	良好	浅黄橙	黄灰	8850	○		○		
	827	C-16	Ⅳ	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	黄灰	12406	○		○		
	828	D-24	—	古墳	胴	ナデ	ナデ	良好	橙	黄灰	—	○		○		
167	829	D-28	Ⅲ	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	橙	橙	7331		○	○		
	830	D-29	Ⅲ	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	鈍い橙	橙	4510		○	○		
	831	—	-	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	橙	—		○			
	832	E-19	Ⅱ	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	1380		○	○		
	833	B-13	Ⅱ	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	10669		○	○		
	834	C-15	—	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	浅黄	鈍い黄橙	—		○	○		
	835	F-28	—	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	—		○	○		
	836	B-21	—	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	3291			○		
	837	表	-	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	表			○		
	838	D-12	Ⅲ	古墳	脚	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	284					
	839	D-28	Ⅲ	古墳	脚	ナデ	ナデ	良好	黒	鈍い橙	4388			○		
	840	B-26	Ⅲ	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	8800			○		
	841	D-12	-	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	鈍い橙	橙	-			○		
	842	D-21	Ⅲ	古墳	脚	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	2040			○		○
	843	E-25	Ⅲ	古墳	脚	貝殻痕	ナデ	良好	橙	明褐	12669			○		○
	844	C-20	Ⅲ	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	1771					
	845	D-11	-	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	—			○		○
	846	表	-	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙				○		○
168	847	F-14	Ⅲ	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い橙	10082	○				○
	848	D-20	Ⅲ	古墳	脚	ナデ	ナデ	良好	鈍い褐	鈍い黄褐	1529			○		○
	849	C-15	-	古墳	脚	ナデ	ナデ	良好	橙	黒褐	-		○			
	850	C-21	Ⅲ	古墳	脚	ハケ	ハケ	良好	橙	灰黄褐	2107			○		
	851	E-12	—	古墳	脚	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	黒	317	○	○			○
	852	C-28	Ⅲ	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	浅黄	鈍い黄橙	5140	○	○		○	○
	853	E-19	Ⅲ	古墳	脚	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	1827	○	○	○		
	854	B-20	Ⅱ	古墳	脚	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	3000	○	○	○	○	
	855	B-14	Ⅲ	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	鈍い褐	浅黄橙	12166		○			○
	856	D-20	Ⅲ	古墳	脚	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄褐	1514	○	○	○	○	
	857	—	—	古墳	脚	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	—		○			○
169	858	D-28	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐	黒褐	4460		○	○		○
	859	E-28	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	明黄褐	鈍い黄褐	1489	○			○	○
	860	表	-	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い橙	表		○	○	○	
	861	D-27	Ⅲ	古墳	頸	ハケ	ナデ	良好	鈍い褐	鈍い黄褐	15087	○	○		○	
	862	A-15	Ⅲ	古墳	頸	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い褐	11174	○				○
	863	D-12	撹乱	古墳	頸	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い褐	—	○				○
	864	C-10	Ⅲ	古墳	肩	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い褐	394	○				○
	865	E-24	Ⅲ	古墳	肩	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い褐	12659					○
	866	D-20	Ⅲ	古墳	肩	ハケ	ハケ	良好	鈍い褐	鈍い褐	1529	○				○
	867	C-28	Ⅳ	古墳	肩	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い褐	7445	○				○
	868	D-27	Ⅲ	古墳	胴	ハケ	ナデ	良好	明褐	鈍い褐	14939	○				○
	869	D-27	Ⅲ	古墳	胴	ナデ	ナデ	良好	鈍い褐	鈍い褐	15087	○				○
	870	C-28	—	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い褐	—	○				○
	871	A-14	Ⅱ	古墳	胴	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い褐	10809	○				○
	872	C-11	—	古墳	胴	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い褐	—					○
170	873	D-28	Ⅲ	古墳	胴	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	4404	○		○		○
	874	B-26	Ⅲ	古墳	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	明赤褐	8782		○	○		○
	875	C-10	撹乱	古墳	底	ナデ	ケズリ	良好	鈍い橙	明褐	—		○			○
	876	A-15	Ⅲ	古墳	底	ナデ	ナデ	良好	淡赤橙	鈍い黄褐	10863		○			
	877	D-12	Ⅲ	古墳	底	ハケ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄褐	462		○			
	878	D-12	Ⅲ	古墳	底	ハケ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄褐	—		○			
171	879	D-12	撹乱	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	明黄褐	—		○	○		
	880	B-20	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い褐	3167		○	○		
	881	C-28	—	古墳	坏	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄褐	—		○	○		
	882	F-14	Ⅱ	古墳	坏	ナデ	ナデ	良好	浅黄	鈍い黄褐	9747		○	○		
	883	F-14	Ⅱ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	明赤褐	鈍い橙	9759			○		
	884	E-20	Ⅲ	古墳	脚	ミガキ	ナデ	良好	明褐	鈍い橙	2895			○		○
	885	E-16	Ⅱ	古墳	脚	ミガキ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	9542					○
	886	E-19	Ⅲ	古墳	脚	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐	浅黄	1826		○			○
	887	D-12	Ⅲ	古墳	脚	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	黒褐	468					
	888	C-17	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	橙	橙	—	○	○			
	889	F-16	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	653					○
	890	F-21	Ⅰ	古墳	口	ナデ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—					○
172	891	B-13	Ⅱ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	10726					○
	891	B-13	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	11210					○
	891	B-13	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	11250					○
	891	B-13	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	11250					○
	891	D-27	Ⅲ	—	口	ハケ	ナデ	不良	淡黄	鈍い黄橙	14945					○
	892	G-21	—	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い褐	—	○	○			
	893	B-22	Ⅳ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い褐	3850	○	○			
	894	D-12	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	298	○	○			○
	895	E-30	Ⅱ	古墳	完	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	3787	○	○			○
	896	A-15	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	黒	10847	○	○			○
	897	D-15	Ⅲ	古墳	つまみ	ハケ	ケズリ	良好	橙	黒	11131	○	○			○
	898	D-30	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	黒	4304	○	○			○
	899	F-26	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	黒	16102	○	○			○
	900	C-29	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄	黒	4891	○	○			○
	901	G-30	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄	鈍い橙	3703	○	○	○		○
	902	D-29	Ⅰ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い橙	5179	○	○	○		○
	903	C-29	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い橙	3895	○	○	○		○
	904	B-13	Ⅲ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	橙	浅黄	10728		○			○
	905	B-13	Ⅲ	古墳	肩	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄	11283		○			○
	906	B-14	Ⅲ	古墳	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄	12175		○			○
173	907	B-11	Ⅱ	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	明黄褐	浅黄	38		○			○
	908	D-28	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐	灰黄	4396			○		○
	909	D-12	撹乱	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄	鈍い黄	-	○		○		
	910	C-10	-	古墳	口	ハケ	ナデ	良好	橙	灰黄	—	○		○		
	911	—	—	古墳	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄	鈍い黄橙	—	○		○		
	912	C-29	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	3865	○		○		
	913	G-18	Ⅲ	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—	○		○		
	914	C-29	—	古墳	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄褐	—		○			
176	915	D-12	SK15	古代	完	ナデ	ナデ	良好	灰青	灰青	—					
	916	D-12	SK15	古代	完	ナデ	ナデ	良好	灰青	灰青	—					
	917	D-12	SK15	古代	口	ナデ	ナデ	良好	灰青	灰青	—					
	918	D-12	SK15	古代	完	ナデ	ナデ	良好	灰青	灰青	—					
177	919	E-14	SK16	古代	完	ナデ	ナデ	良好	灰	灰白	288	○	○			
	919	E-14	SK16	古代	完	ナデ	ナデ	良好	灰青	灰青	—					
179	920	B-16	SK17	古代	完	ナデ	ミガキ	良好	鈍い橙	鈍い黄褐	—					
	921	B-16	SK17	古代	口	ナデ	ミガキ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄褐	—					
	922	B-16	SK17	古代	口	ナデ	ミガキ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄褐	—					
	923	B-16	SK17	古代	口～胴	ナデ	ケズリ	良好	暗オリーブ褐	灰黄褐	4		○			○
	924	B-16	SK17	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄褐	灰黄褐	8		○			○
	925	B-16	SK17	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄褐	—		○			○
	926	B-16	SK17	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄褐	41		○			
	927	B-16	SK17	古代	底	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄褐	鈍い黄褐	15		○			
180	928	—	SI01	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	灰黄	暗灰黄	4	○				○
	928	—	SI01	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	灰黄褐	灰黄褐	—	○				
	929	—	SI01	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い黄褐	10			○		○
	929	—	SI01	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—		○	○		
	930	—	SI01	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄褐	—			○		
	930	—	SI01	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—	○	○			
	931	—	SI01	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄	鈍い黄橙	11		○			○
	932	—	SI01	古代	底	ナデ	ナデ	良好	淡黄	灰黄褐	9	○				
	933	—	SI01	古代	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄	鈍い黄褐	6	○				
	934	—	SK18	古代	口	ナデ	ナデ	良好	淡黄	鈍い黄橙	36	○				

表30　古代・中世遺物観察表

挿図番号	報告番号	出土区	遺構	時代	部位	調整（外面）	調整（内面）	焼成	色調（外面）	色調（内面）	取上番号	石英	長石	角閃石	輝石	その他
181	934	–	SK18	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○				
	935	–	SK18	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い橙	–	○				○
	935	–	SK18	古代	口	ナデ	ナデ	良好	黒	黒	–	○				
	936	–	SK18	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い褐	42	○		○		○
	937	–	SK18	古代	胴	ナデ	ナデ	良好	鈍い褐	鈍い褐	–	○				○
	938	–	SK18	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	黒褐	鈍い褐	66	○				○
	939	–	SK18	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い褐	5	○				○
	940	–	SK18	古代	胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い褐	27	○				○
182	941	C-16	SK19	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄褐	鈍い黄橙	1	○	○			
183	942	E-18	SK20	古代	胴	ナデ	ナデ	良好	橙	褐	–	○		○		
184	943	G-25	SK21	古代	胴	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	–	○				
185	944	H-26	SK22	古代	胴	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	–	○				
	945	H-26	SK22	古代	胴	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	–	○				
	946	B-14	SK23	古代	口	ナデ	ハケ	良好	橙	橙	–	○				
	947	E-17	SK23	古代	胴	ハケ	ケズリ	良好	黄褐	鈍い黄褐	–	○				○
190	948	D-14	SKP02	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–					
	949	D-14	SKP02	古代	口	タタキ	タタキ	良好	灰白	灰白	–	○	○			
194	950	D-14	SP	古代	口	ミガキ	ミガキ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	–					
	951	D-14	SP	古代	胴	ミガキ	ミガキ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	–					
	952	E-17	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	灰黄褐	–	○				○
	953	E-17	SP	古代	胴	ナデ	ケズリ	良好	褐	灰黄褐	–	○				○
	954	E-16	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い橙	–		○			○
	955	E-16	SP	古代	口	ナデ	ハケ	良好	浅黄	鈍い橙	–	○				
	956	E-16	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	灰黄褐	鈍い黄橙	–		○			
	957	E-16	SP	古代	頸	ナデ	ケズリ	良好	橙	鈍い橙	–	○				○
	958	F-16	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	–		○			
	959	E-17	SP	古代	胴	ハケ	ハケ	良好	橙	鈍い橙	–	○				
	960	F-17	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い橙	–	○				○
	960	F-17	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い橙	–	○				○
	961	F-17	SP	古代	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い橙	–	○				○
	962	D-14	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	–					
	963	D-14	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い橙	–	○		○		
	964	E-16	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	–	○				
	964	F-17	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	灰	鈍い黄橙	–	○				
	965	F-16	SP	古代	口	ミガキ	ミガキ	良好	浅黄橙	鈍い黄橙	–	○		○		
	966	F-17	SP	古代	口	ナデ	ミガキ	良好	灰	鈍い橙	–	○				
	967	G-18	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○	○	○		
	968	D-14	SP	古代	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い黄橙	–	○				○
	970	G-17	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄	灰黄褐	–	○		○		
	971	E-17	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	灰黄褐	–	○		○		
	972	E-16	SP	–	胴	格子目	同心円	不良	灰	灰	–	○				
	973	E-16	SP	古代	胴	平行	ナデ	良好	灰	灰	–	○				
	974	E-14	SP	–	胴	格子	格子目	不良	灰	灰	–	○				
	975	D-14	SP	–	胴	格子	同心円	不良	灰	灰	–	○				
	976	D-14	SP	–	胴	格子	同心円	不良	灰	灰	–			○		
195	977	G-15	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い橙	–	○	○	○		○
	978	C-15	SP	古代	口	ナデ	ナデ	良好	黒褐	鈍い橙	–	○				
	979	D-14	SP	古代	胴	ハケ	ケズリ	良好	明赤褐	橙	–	○	○	○		
	980	E-18	SP	古代	頸	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	鈍い橙	–	○		○		
	981	E-17	SP	古代	頸	ナデ	ナデ	良好	赤褐	鈍い橙	–	○		○		
	982	E-17	SP	古代	頸	ハケ	ケズリ	良好	赤褐	鈍い橙	–	○		○		
	983	C-14	SP	古代	口	ハケ	ケズリ	良好	鈍い黄橙	橙	–	○		○		
	984	E-16	SP	古代	胴	ナデ	ケズリ	良好	黄橙	黄橙	–					
197	985	E-30	SF01	古代	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	橙	–	○		○		
	986	E-30	SF01	古代	口	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	–		○	○		
	987	–	SF01	古代	胴	ハケ	ナデ	良好	灰黄	鈍い黄橙	2		○	○		
	988	E-16	SF01	古代	脚	ハケ	ハケ	良好	浅黄	鈍い黄橙	–		○	○		
	989	B-16	SF01	古代	完	ナデ	ナデ	良好	灰黄	鈍い黄橙	48		○	○		
199	990	C-15	–	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	橙	鈍い黄橙	–		○			○
	991	E-20	III	古代	口	ナデ	ナデ	良好	明赤褐	橙	2096		○			○
	992	C-15	–	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	黒褐	–	○	○	○		
	993	–	–	古代	口	ハケ	ナデ	良好	灰黄褐	黒褐	–	○	○	○		
	994	–	–	古代	口	ナデ	ナデ	良好	灰黄	黒褐	–	○	○	○		
	995	E-27	III	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い褐	781	○		○		
	996	E-18	III	古代	口	ハケ	ハケ	良好	鈍い橙	鈍い褐	12111	○		○		
	997	C-28	III	古代	口	ナデ	ハケ	良好	浅黄	明赤褐	5105	○		○		
	998	F-17	II	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	明赤褐	985	○		○		
	999	–	–	古代	胴	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	明赤褐	–	○		○		
	1000	表	–	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い褐	–	○		○		
	1001	E-18	III	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い褐	1216	○		○		
	1002	E-15	–	古代	口	ナデ	ハケ	良好	橙	明赤褐	–	○				
200	1003	D-14	–	古代	口	ハケ	ケズリ	良好	鈍い黄褐	鈍い黄橙	–	○		○		○
	1004	C-15	–	古代	口	ハケ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	–	○		○		○
	1005	E-15	III	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い褐	鈍い黄橙	9871	○		○		○
	1006	D-14	–	古代	口	ナデ	ハケ	良好	鈍い黄褐	鈍い黄橙	–	○		○		○
	1007	C-15	–	古代	口	ハケ	ケズリ	良好	鈍い黄褐	鈍い黄橙	–	○		○		○
	1008	E-14	III	古代	口	ナデ	ナデ	良好	黒	鈍い黄橙	10179	○		○		○
201	1009	E-18	–	古代	口	ハケ	ケズリ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	–	○		○		○
	1010	C-15	–	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	橙	鈍い黄橙	–	○		○		○
	1011	D-12	撹乱	古代	口	ハケ	ケズリ	良好	橙	鈍い黄橙	–	○		○		○
	1012	C-16	III	古代	口	ナデ	ナデ	良好	黒褐	鈍い黄橙	11674	○		○		○
	1013	D-18	III	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	褐	鈍い黄橙	2426	○		○		○
	1014	B-14	–	古代	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	12424	○		○		○
202	1015	F-19	III	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	黒	鈍い黄橙	2229	○		○		○
	1016	–	–	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○		○		○
	1017	–	–	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	灰黄褐	鈍い黄橙	–	○		○		○
	1018	B-13	III	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	10713	○		○		○
	1019	D-14	–	古代	口	ハケ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○		○		○
203	1020	E-19	II	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	橙	鈍い黄橙	2379	○		○		○
	1021	D-19	III	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄褐	橙	1444	○	○			○
	1022	E-14	–	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	橙	–	○	○			○
	1023	B-15	–	古代	口	ハケ	ケズリ	良好	鈍い黄	橙	–	○	○			○
	1024	A-13	III	古代	口	ハケ	ハケ	良好	黒褐	橙	12057	○	○			○
	1025	–	–	古代	口	ハケ	ケズリ	良好	褐灰	橙	–	○	○			○
	1026	E-19	III	古代	口	ナデ	ナデ	良好	明褐	橙	2918	○	○			○
	1027	E-16	III	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い褐	橙	708	○	○			○
	1028	B-16	III	古代	口	ナデ	ナデ	良好	灰黄褐	橙	11733	○	○			○
204	1029	G-19	III	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄橙	橙	1339	○	○			○
	1030	E-17	III	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄褐	鈍い橙	1357	○	○	○		
	1031	C-14	–	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	灰黄褐	鈍い橙	–	○	○	○		
	1032	B-16	III	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄橙	鈍い橙	11699	○	○	○		
	1033	A-14	–	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	黒褐	鈍い橙	–	○	○	○		
	1034	D-14	–	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	明赤褐	黒褐	–	○				○
	1035	E-17	II	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄橙	明赤褐	9588	○				
	1036	D-14	–	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	褐	明赤褐	–	○				
	1037	B-13	III	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	橙	10724	○	○	○		
	1038	A-13	II	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い橙	橙	10763	○	○	○		
	1039	E-16	III	古代	口	ナデ	ケズリ	良好	鈍い黄褐	橙	11443	○	○	○		
205	1040	A-14	III	古代	胴	ハケ	ハケ	良好	鈍い黄橙	橙	12098	○	○	○		
	1041	F-15	–	古代	胴	ハケ	ケズリ	良好	橙	鈍い褐	–	○		○		
	1042	D-13	III	古代	胴	ハケ	ケズリ	良好	鈍い褐	鈍い褐	10361	○				○
	1043	F-15	II	古代	胴	ハケ	ケズリ	良好	明赤褐	鈍い褐	9730	○				○
	1044	B-16	II	古代	胴	ナデ	ケズリ	良好	鈍い赤褐	鈍い褐	9462	○				○
	1045	F-18	III	古代	胴	ハケ	ケズリ	良好	灰黄	鈍い黄橙	1172	○				
	1046	E-21	III	古代	底	ナデ	ナデ	良好	明黄褐	鈍い黄橙	3257	○				
	1047	D-27	IV	古代	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	灰黄褐	15408	○				
	1048	E-19	III	古代	底	ナデ	ナデ	良好	褐	褐	728	○	○			○
206	1049	B-13	–	古代	完	ナデ	ナデ	良好	明赤褐	鈍い褐	–	○		○		
	1050	E-17	III	古代	完	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い黄橙	776			○		
	1051	C-17	III	古代	完	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い黄橙	10900	○		○		
	1052	E-19	–	古代	完	ナデ	ナデ	良好	明黄褐	鈍い橙	–		○			
	1053	A-13	II	古代	完	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	10794	○	○			
	1054	G-19	III	古代	完	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄	鈍い橙	1320			○		
	1055	F-17	III	古代	底	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い橙	956			○		
	1056	F-17	III	古代	底	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	956		○	○		
	1057	A-13	II	古代	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	橙	10602		○	○		
	1057	G-17	–	古代	底	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	–		○	○		
	1058	–	III	古代	底	ナデ	ナデ	良好	灰黄	橙	1	○				
	1058	G-21	I	古代	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	橙	–		○	○		
	1059		–	古代	底	ナデ	ナデ	良好	灰黄	橙	–	○		○		
	1060	C-18	III	古代	底	ナデ	ナデ	良好	灰白	鈍い橙	2840	○		○		

挿図番号	報告番号	出土区	遺構	時代	部位	調整（外面）	調整（内面）	焼成	色調（外面）	色調（内面）	取上番号	石英	長石	角閃石	輝石	その他
208	1087	E-16	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	橙	–				○	
	1088	E-15	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐	鈍い橙	–			○		
	1089	E-17	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	灰黄褐	鈍い黄	–	○				
	1090	D-17	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○				
	1091	E-17	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	淡黄	鈍い黄橙	–	○		○		
	1092	G-17	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	黒褐	–	○				
	1093	F-16	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄	鈍い黄橙	–	○		○		
	1094	F-17	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	明赤褐	黒褐	–	○		○		
	1095	D-16	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	橙	黒	10443	○				
	1096	F-16	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	黒	–	○				
	1097	F-17	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄	–					○
209	1098	A-13	II	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	10602	○				○
	1099	F-18	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	1157	○	○	○		○
	1100	F-20	II	中世	底	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い褐	1866	○	○			○
	1101	B-22	I	中世	底	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い橙	–	○				○
	1102	B-14	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	11919	○	○		○	
	1103	F-29	I	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い赤褐	灰褐	–	○	○	○		
	1104	B-27	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	灰黄	鈍い黄橙	–	○			○	
	1105	D-26	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○	○			○
	1106	D-11	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄	暗灰黄	439	○				○
	1107	F-31	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○				
	1108	E-30	–	中世	完	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○			○	○
	1109	F-17	–	中世	口	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	–	○	○		○	
	1110	F-10	–	中世	完	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	–	○				○
	1111	E-18	III	中世	完	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	1280	○				○
	1112	B-14	–	中世	口	ナデ	ナデ	良好	明赤褐	橙	–	○		○		○
	1113	F-14	II	中世	完	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い橙	9749	○	○	○	○	
	1114	D-24	–	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–		○		○	○
	1115	E-19	III	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	褐	褐	728	○	○	○		
210	1116	E-19	III	中世	完	ミガキ	ミガキ	良好	浅黄橙	浅黄橙	2391		○	○		○
	1117	E-16	III	中世	口	ミガキ	ミガキ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	10515		○			
	1118	C-14	–	中世	完	ミガキ	ミガキ	良好	鈍い黄橙	浅黄橙	–	○	○		○	
	1119	D-15	–	中世	口	ナデ	ミガキ	良好	橙	橙	–		○			○
	1120	D-30	–	中世	口	ナデ	ナデ	良好	黄灰	灰黄	–	○	○		○	
	1121	C-18	III	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄	2877	○				
	1122	D-15	IV	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	黒	11573	○				
	1123	C-14	III	中世	口	ナデ	ナデ	良好	黒	明黄褐	11921	○		○	○	
	1124	A-13	II	中世	胴	ナデ	ミガキ	良好	浅黄	黒	10798	○				○
	1125	G-19	I	中世	胴	ナデ	ミガキ	良好	浅黄	黒	–	○				
	1126	E-16	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄	黒	9460	○	○			
	1127	E-16	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	暗灰黄	716	○			○	○
	1128	E-19	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄	2397	○	○			○
	1129	D-17	–	中世	底	ナデ	ミガキ	良好	灰黄褐	鈍い黄橙	–		○	○		
	1130	C-15	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	10303	○				○
	1131	F-18	II	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い橙	1180		○			○
	1132	E-17	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	黄灰	–				○	○
	1133	E-17	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い黄褐	–	○	○		○	○
	1134	B-24	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	明黄褐	明黄褐	–	○				
	1135	F-19	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	2489			○	○	○
	1136	E-29	III	中世	口	ナデ	ナデ	良好	黒褐	褐灰	4202	○	○			
	1137	D-19	III	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	灰褐	1846	○	○			○
	1138	E-15	III	中世	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	明赤褐	9862					○
	1139	–	SD01	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	橙	浅黄	317	○			○	
	1140	–	–	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	97	○				○
	1141	G-18	–	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い赤褐	2223	○	○	○		
211	1148	E-17	–	中世	胴	格子状タタキ	平行タタキ	良好	黄灰	灰黄	–		○			○
	1149	F-16	II	中世	胴	格子状タタキ	同心円文	良好	灰黄	黄灰	–		○			○
	1150	E-16	–	中世	胴	格子状タタキ	平行タタキ	良好	暗灰黄	暗灰黄	–		○		○	
212	1151	E-17	–	中世	胴	平行タタキ	同心円文	良好	オリーブ黒	灰	–					○
	1152	–	–	中世	胴	平行タタキ	同心円文	良好	黄灰	鈍い黄	3	○				○
	1153	F-16	III	中世	胴	平行タタキ	ナデ	良好	褐灰	鈍い褐	2626					○
	1154	F-17	III	中世	胴	平行タタキ	同心円文	良好	灰オリーブ	灰	2693	○			○	
	1155	F-16	–	中世	胴	平行タタキ	同心円文	良好	暗オリーブ灰	灰	–		○		○	
	1156	F-17	–	中世	胴	格子状タタキ	平行タタキ	良好	暗青灰	青灰	–		○		○	
	1157	E-17	–	中世	胴	格子状タタキ	平行タタキ	良好	灰白	灰白	–				○	○
	1158	–	–	中世	胴	平行タタキ	平行タタキ	良好	オリーブ黄	灰白	23	○				
	1159	F-16	II	中世	胴	平行タタキ	平行タタキ	良好	灰黄褐	灰オリーブ	2632				○	○
	1162	E-17	–	中世	胴	格子状タタキ	同心円文	良好	灰オリーブ	灰オリーブ	–	○			○	
213	1163	C-23	–	中世	胴	格子状タタキ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–		○		○	○
	1164	E-25	–	中世	胴	平行タタキ	ナデ	良好	灰オリーブ	灰	–	○	○			
	1166	E-14	–	中世	胴	格子状タタキ	行タタキ，同心円	良好	橙	橙	–		○			○
	1171	–	–	中世	口	ナデ	ナデ	良好	暗灰黄	黄灰	–	○	○		○	
	1172	–	–	中世	口	ナデ	ナデ	良好	暗灰黄	黄灰	–	○	○		○	
	1173	–	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	暗灰黄	黄灰	–	○	○		○	
	1174	–	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	暗灰黄	黄灰	–	○	○		○	
	1175	–	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	暗灰黄	黄灰	–	○	○		○	
	1176	–	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	暗灰黄	黄灰	–	○	○		○	
	1177	–	–	中世	口	ナデ	ナデ	良好	暗灰黄	黄灰	–	○	○		○	
	1178	–	–	中世	口	ナデ	ナデ	良好	暗灰黄	黄灰	–	○	○		○	
	1179	–	–	中世	口	ナデ	ナデ	良好	暗灰黄	黄灰	–	○	○		○	
	1180	–	SK32	中世	完形	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–					○
	1262	–	SI02	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	灰白	鈍い黄褐	242	○	○			
257	1254	G-18	SP	中世	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄	浅黄	–					○
	1255	E-18	SP	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○	○			○
	1256	C-14	SP	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	–		○			
	1257	E-18	SP	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○	○			○
	1258	F-17	SP	中世	口	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	–	○				○
	1259	F-17	SP	中世	口	ナデ	ナデ	良好	淡黄	淡黄	–	○				○
	1260	E-17	SP	中世	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	–					○
	1261	E-17	SP	中世	口	ナデ	ナデ	良好	明褐灰	鈍い橙	–	○	○		○	
	1262	C-17	SP	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○			○	○
	1263	E-14	SP	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–			○		○
	1264	G-17	SP	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○	○	○		
	1265	E-17	SP	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	淡黄	灰白	–	○		○	○	○
	1266	D-17	SP	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄褐	–	○				○
	1267	D-14	SP	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	淡黄	–	○		○		○
	1268	D-14	SP	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○				○
	1269	B-16	SP	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄	浅黄	–	○		○		○
	1270	F-18	SP	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	–					○
	1271	F-18	SP	中世	底	ナデ	ナデ	良好	淡黄	淡黄	–	○			○	
	1272	E-17	SP	中世	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	橙	1360	○	○		○	
	1273	E-17	SP	中世	完	ナデ	ナデ	良好	黄灰	灰黄	–	○				○
	1274	E-17	SP	中世	完	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄橙	–	○				○
	1275	F-17	SP	中世	口	施釉	施釉	良好	オリーブ褐	オリーブ褐	–					
	1276	E-17	SP	中世	底	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	–	○				○
	1277	F-17	SP	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	橙	–	○	○	○		
	1278	E-17	SP	中世	底	ナデ	ナデ	良好	橙	明黄褐	–	○	○		○	
	1279	F-19	SP	中世	口	施釉	施釉	良好	淡白釉	浅黄	–	○				
	1280	E-17	SP	中世	完	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○			○	
261	1282	C-22	SF02	中世	胴	ナデ	カキ目	良好	鈍い黄橙	明黄褐	–	○	○			
265	1283	C-13	–	中世	口	ナデ	ナデ	良好	暗灰黄	灰黄	–	○	○			○
	1284	E-28	III	中世	完	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	1273	○	○			
	1285	–	III	中世	完	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	–	○	○			
	1286	E-18	III	中世	完	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	1280	○				○
	1287	–	–	中世	完	ナデ	ナデ	良好	灰黄	灰黄褐	–	○				○
	1288	D-20	II	中世	完	ナデ	ナデ	良好	淡黄	淡黄	1512		○	○		
	1289	–	–	中世	完	ナデ	ナデ	良好	灰黄褐	鈍い黄橙	–	○		○	○	
	1290	F-10	–	中世	完	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	–	○				○
	1291	B-22	I	中世	胴～底	刷毛目，ナデ	刷毛目，ナデ	良好	橙	鈍い橙	–	○				○
	1292	C-26	I	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い橙	–	○				○
	1293	D-12	撹乱	中世	底	ナデ	ナデ	良好	黄灰	黄褐	–		○		○	○
	1294	C-20	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い黄橙	–	○				
	1295	F-20	II	中世	底	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い褐	1866	○	○			○
	1296	–	II	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	–	○				
	1297	B-18	I	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○				○
	1298	B-27	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	黒	黒	–	○	○			
	1299	B-26	I	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	–	○	○	○		○
	1300	B-14	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	明赤褐	橙	–	○		○		○
	1301	D-18	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄	鈍い黄橙	2421	○				○
	1302	D-28	III	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	橙	4970		○			○
	1303	B-27	–	中世	底	ナデ	ナデ	良好	灰黄	鈍い黄橙	–	○			○	

表31　中世遺物観察表

挿図番号	報告番号	出土区	遺構	時代	部位	調整（外面）	調整（内面）	焼成	色調（外面）	色調（内面）	取上番号	石英	長石	角閃石	輝石	その他
217	1181	—	SK32	中世	完形	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	—	○				○
	1182	—	SK32	中世	完形	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	—	○			○	○
	1182	E-19	SK32	中世	完形	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—				○	○
	1183		SK32	中世	完形	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—	○	○		○	○
	1184	E-18	SK32	中世	口縁～底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄橙	—	○				○
229	1186	F-15	SB12	中世	胴	ナデ	ケズリ	良好	褐灰	灰黄	—	○	○	○		○
	1187	F-15	SB12	中世	胴	ハケ	ケズリ	良好	鈍い橙	浅黄	—		○			○
	1188	F-15	SB12	中世	完形	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い橙	—	○				○
	1189	F-15	SB12	中世	完形	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	—	○				○
	1190	F-15	SB12	中世	完形	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	—	○				○
239	1191	F-16	SD01	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄橙	2533		○			
	1192	G-17	SD01	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄	—	○				○
	1193	C-19	SD01	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	黒	2163	○			○	○
	1194	—	SD01	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	黒	289	○			○	
	1195	—	SD01	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い橙	—	○		○		○
	1196	C-19	SD01	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	2153	○	○			
	1197	—	SD01	中世	口	ナデ	ナデ	良好	橙	浅黄	317	○			○	
	1198	—	SD01	中世	口	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	97	○				○
	1199	—	SD01	中世	口	ナデ	ケズリ	良好	明赤褐	鈍い黄橙	61	○		○	○	
	1200	F-18	SD01	中世	口	ナデ	ケズリ	良好	浅黄	浅黄	2243	○	○		○	○
	1201	—	SD01	中世	口	ナデ	ナデ	良好	橙	明赤褐	96	○	○	○		
	1202	—	SD01	中世	口	ナデ	ナデ	良好	明黄褐	橙	153	○	○		○	
	1203	D-20	SD01	中世	口	ナデ	ケズリ	良好	浅黄	浅黄	2173	○	○			○
	1204	F-17	SD01	中世	胴	平行タタキ	同心円文	良好	鈍い褐	灰	1054	○			○	
	1205	—	SD01	中世	口	ナデ	ナデ	良好	灰	灰白	—				○	○
	1206	G-17	SD01	中世	胴	平行タタキ	平行タタキ	良好	鈍い黄橙	浅黄橙	1618		○	○		○
240	1207	F-17	SD01	中世	胴	格子状タタキ	同心円文	良好	鈍い褐	灰	1054	○			○	
	1208	F-18	SD01	中世	胴	格子状タタキ	平行タタキ	良好	灰白	灰白	2242	○	○		○	
	1209	F-17	SD01	中世	胴	平行タタキ	ナデ	良好	鈍い褐	灰	1054	○			○	
	1210	—	SD01	中世	胴	平行タタキ	ナデ	良好	淡黄	灰白	—	○			○	
	1211	—	SD01	中世	口	ケズリ	ナデ	良好	オリーブ灰	鈍い黄	1633	○	○	○		
	1212	G-17	SD01	中世	底	ケズリ	ナデ	良好	オリーブ灰	鈍い黄	1633	○	○	○		
	1213	D-21	SD01	中世	口	施釉	施釉	良好	オリーブ釉	橙	1601				○	
	1214	—	SD01	中世	胴	施釉	施釉	良好	淡青釉	鈍い黄橙	55				○	
	1215	F-18	SD01	中世	胴	施釉	施釉	良好	淡青釉	橙	2239	○	○		○	
	1216	D-20	SD01	中世	底	ナデ	ナデ	良好	灰白	鈍い黄橙	1604	○	○	○		
	1217	D-20	SD01	中世	口	ナデ	ハケ目	良好	浅黄	浅黄	—	○	○			○
	1218	D-20	SD01	中世	口	ハケ	ケズリ	良好	浅黄	浅黄	—	○	○			○
	1219	E-20	SD01	中世	羽口	ケズリ	剥離	良好	浅黄橙	橙	1596	○			○	○
	1220	—	SD01	中世	口	ナデ	ケズリ	良好	浅黄	浅黄	—	○	○			○
242	1221	—	SD02	中世	口	刷毛目，ナデ	ナデ	良好	灰黄褐	浅黄橙	215	○		○		○
	1222	F-17	SD02	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	橙	1642	○			○	○
	1223	F-17	SD02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い橙	1628	○			○	○
	1224	F-15	SD02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	灰黄	鈍い黄橙	1640	○	○			○
	1225	—	SD02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	灰黄褐	鈍い黄橙	—		○	○		○
	1226	F-17	SD02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い橙	1628	○			○	○
	1227	G-17	SD02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	1022	○	○			○
	1228	G-17	SD02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	1613	○		○		○
	1229	F-16	SD02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄橙	2533		○			
	1230	F-14	SD02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	—	○				○
	1231	G-17	SD02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	1615	○	○			
	1232	F-17	SD02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い黄橙	—	○	○		○	
	1233	G-17	SD02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	1616	○	○		○	
	1234	C-17	SD02	中世	口	ナデ	ミガキ	良好	灰オリーブ	黒	—	○	○		○	
	1235	F-17	SD02	中世	口	ナデ	ミガキ	良好	明黄褐	黒	2704	○	○		○	
	1236	G-17	SD02	中世	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	—	○	○	○		
	1238	D-21	SD02	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	明赤褐	1600	○	○	○		
	1239	G-17	SD02	中世	口	ケズリ	ナデ	良好	オリーブ灰	鈍い黄	1633	○	○	○		
	1239	—	SD02	中世	—	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—			○	○	○
	1240	G-17	SD02	中世	底	ケズリ	ナデ	良好	オリーブ灰	鈍い黄	1633	○	○	○		
	1241	F-17	SD02	中世	胴	平行タタキ	同心円文	良好	灰白	黄灰	1630	○	○			
	1242	F-16	SD02	中世	胴	格子状タタキ	平行タタキ	良好	暗灰	灰	1667		○		○	
	1243	G-17	SD02	中世	胴	平行タタキ	同心円文	良好	鈍い黄橙	浅黄橙	1618		○	○		○
	1244	—	SD13	中世	胴	格子状タタキ	ナデ	良好	灰白	灰白	53	○	○			
	1245	D-24	SD13	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—		○		○	○
	1246	F-27	SD13	中世	口	施釉	施釉	良好	淡緑釉	淡緑釉	15	○	○	○		
	1247	—	SD13	中世	底	施釉	施釉	良好	淡青釉	淡青釉	6	○	○	○		
	1248	G-26	SD13	中世	底	施釉	施釉	良好	淡緑釉	明褐	5	○	○	○		
206	1061	F-16	—	古代	底	ナデ	ナデ	良好	淡黄	鈍い橙	—	○		○		
	1062	B-16	—	古代	底	ナデ	ナデ	良好	淡黄	灰黄	39	○				
207	1063	E-16	Ⅲ	古代	完	ナデ	ナデ	良好	黄橙	橙	717			○		
	1063	E-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	明褐灰	灰黄褐	—	○				
	1064	G-16	Ⅲ	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	浅黄橙	843	○		○		
	1064	F-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	浅黄橙	—	○		○		
	1065	F-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	灰白	鈍い黄褐	—	○		○		
	1065	G-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	浅黄橙	—	○		○		
	1066	D-12	Ⅲ	古代	完	ナデ	ナデ	良好	黒	明赤褐	280	○		○		
	1066	E-18	—	古代	完	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	明赤褐	—	○		○		
	1067	G-17	Ⅲ	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	橙	935	○		○		
	1067	E-14	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	橙	—	○				
	1068	F-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	明赤褐	—	○		○		
	1068	G-21	Ⅰ	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い赤褐	—			○		○
	1069	—	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	明赤褐	—	○		○		
	1069	E-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	—	○		○		
	1070	E-14	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	明褐	—	○	○	○		
	1070	F-18	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	明赤褐	—	○		○		
	1071	C-15	Ⅲ	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	黄褐	10303	○	○		○	
	1071	E-16	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い黄褐	—	○			○	○
	1072	F-15	Ⅲ	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	黒褐	604	○	○	○		
	1072	D-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄褐	橙	—	○	○			○
	1073	G-18	Ⅲ	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	1109	○	○			
	1073	F-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—	○	○			
	1074	E-17	Ⅲ	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	1361	○				○
	1074	F-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	明黄褐	—		○			
	1075	D-12	Ⅲ	古代	口	ナデ	ナデ	良好	黒	鈍い黄橙	280	○				○
	1075	G-18	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄	鈍い黄橙	—	○				○
	1076	E-19	Ⅲ	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄	2382		○	○		
	1076	E-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	黒褐	—	○				
	1077	C-15	Ⅲ	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	灰黄褐	10303	○			○	
	1077	F-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	淡黄	鈍い黄橙	—	○			○	
	1078	C-17	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄	—	○		○		
	1078	—	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	—	○				○
	1079	G-26	Ⅲ	古代	口	ナデ	ナデ	良好	橙	灰黄褐	15189		○			
	1079	E-15	—	古代	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い黄橙	—		○			
	1080	B-16	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い橙	—	○	○			
	1080	E-17	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	灰黄	鈍い黄橙	—		○			
	1081	B-16	Ⅲ	中世	口	ナデ	ナデ	良好	褐灰	鈍い黄	12337		○			○
	1081	G-17	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	橙	鈍い黄橙	—	○				
	1082	C-14	Ⅲ	中世	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	鈍い橙	11958	○	○			
	1082	D-16	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	灰褐	—	○			○	
	1083	G-18	Ⅲ	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	1109	○				
	1083	E-17	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	橙	灰褐	—		○	○		
	1084	A-15	Ⅲ	中世	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	黒褐	10826				○	

挿図番号	報告番号	出土区	遺構	時代	部位	調整（外面）	調整（内面）	焼成	色調（外面）	色調（内面）	取上番号	石英	長石	角閃石	輝石	その他
207	1084	F-17	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	明赤褐	—	○				
	1085	B-16	Ⅲ	中世	口	ナデ	ナデ	良好	褐灰	黒	12337	○	○			
	1085	E-16	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	黒褐	—		○			
	1086	B-16	Ⅲ	中世	口	ナデ	ナデ	良好	褐灰	灰黄褐	12337	○				
	1086	E-17	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	褐灰	鈍い黄橙	—	○	○			
268	1313	F-19	—	中世	胴	平行タタキ	ナデ	良好	灰	灰	2212				○	○
	1314	F-18	—	中世	胴	平行タタキ	ナデ	良好	灰白	灰白	2242	○	○		○	
	1315	F-17	—	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	浅黄	1651	○	○			
	1316	—	—	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	灰白	灰白	53	○	○			
	1317	E-18	—	中世	—	平行タタキ	ナデ	良好	赤褐	青灰	-		○		○	
	1318	E-18	—	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	浅黄	黄灰	-		○			
	1319	E-18	—	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	浅黄	黄灰	-		○		○	
	1320	F-16	—	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	褐	暗灰黄	—	○	○			
	1321	E-18	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	灰	灰	—	○	○			
	1322	—	—	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	青灰	青灰	291		○			
	1323	—	—	中世	底	ナデ	ナデ	良好	灰白	灰	119	○	○			
	1324	—	—	中世	底	格子状タタキ	ナデ	良好	灰	灰	103		○			
	1325	G-17	—	中世	底	ナデ	ナデ	良好	灰白	灰黄	—	○				
269	1326	D-17	—	中世	胴	格子状タタキ	ナデ	良好	灰白	灰白	—					
	1327	E-16	—	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	灰	黄灰	—		○			
	1328	—	—	中世	胴	ナデ	ハケ	良好	褐灰	鈍い褐	—		○			○
270	1335	—	—	中世	胴	ナデ	カキ目	良好	灰白	青灰	157	○	○			
	1336	—	—	中世	胴	ナデ	カキ目	良好	黄灰	灰白	155	○	○		○	
	1337	—	—	中世	胴	ナデ	カキ目	良好	青灰	青灰	291		○			
	1338	—	—	中世	胴	ナデ	カキ目	良好	灰白	灰	—	○	○			
	1339	—	—	中世	胴	ナデ	カキ目	良好	灰白	灰	—	○	○			
	1340	—	—	中世	胴	ナデ	カキ目	良好	灰白	灰	119	○	○			
	1341	—	—	中世	胴	ナデ	カキ目	良好	灰	灰	103		○			
	1342	D-17	—	中世	胴	ナデ	カキ目	良好	灰白	灰白	—	○	○			
	1343	E-18	—	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	灰	灰	—	○	○			
	1344	G-17	—	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	灰白	灰黄	—	○				
	1345	E-16	—	中世	口	ナデ	ハケ	良好	灰	黄灰	—		○			
271	1348	F-21	Ⅲ	中世	底	ナデ	ケズリ，ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	1903	○				○
	1348	A-13	—	中世	口	ナデ	カキ目	良好	灰黄	黄褐	—	○		○		
	1349	D-27	Ⅳ	中世	底	ナデ	ケズリ	良好	鈍い橙	褐灰	15408	○	○	○		○
	1349	E-32	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	黒	黒	—	○				
	1350	E-17	—	中世	底	ナデ	ナデ	良好	灰黄褐	明赤褐	—	○	○			○
	1350	F-16	—	中世	口	ナデ	カキ目	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—	○				
	1351	E-16	—	中世	底	ナデ	ケズリ，ナデ	良好	赤褐	黒褐	—	○				
	1351	E-17	—	中世	口	ナデ	カキ目	良好	灰黄褐	鈍い黄橙	—	○			○	
	1352	F-21	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	1903					
	1352	E-21	Ⅲ	中世	底	ヘラ，ナデ	ナデ	良好	明黄褐	褐灰	3258	○		○		○
	1353	E-21	Ⅲ	中世	底	ヘラ，ナデ	ナデ	良好	明黄褐	褐灰	3257	○		○		○
	1353	—	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—					
	1354	B-20	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	1726					
	1354	A-13	—	中世	胴	ナデ	カキメ	良好	灰黄	灰白	—	○	○			
	1355	C-10	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	黄橙	黄橙	392					
	1355	E-32	—	中世	口縁	刷毛目	ナデ	良好	黒	鈍い黄	—	○	○			○
	1356	C-32	Ⅲ	中世	底	刷毛目	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	14172	○			○	
	1356	E-29	—	中世	胴	ナデ	カキ目	良好	淡黄	淡黄	—					
	1357	A-13	—	中世	底	ナデ	カキ目	良好	鈍い橙	鈍い橙	—					
	1357	A-13	—	中世	底	ナデ	カキメ	良好	鈍い橙	淡赤橙	—	○	○			
	1358	—	—	中世	胴～底	ヘラケズリ，ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	89	○	○			○
	1359	—	—	中世	—	ナデ	刷毛目，ナデ	良好	浅黄	淡黄	44	○	○			○
	1360	E-18	Ⅱ	中世	胴～底	ナデ	刷毛目，ナデ	良好	鈍い黄橙	橙	1226	○	○			
	1360	E-29	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	淡黄	淡黄	—					
	1361	A-13	—	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い橙	—					
	1361	D-17	SP	中世	頸	ナデ	ナデ	良好	鈍い橙	鈍い黄橙	—	○	○			○
279	1535	—	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	—	—	—					
	1536	—	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	—	—	—					
	1537	—	—	中世	口	ナデ	ナデ	良好	—	—	—					
	1538	—	—	中世	—	—	—	良好	—	—	—					
	1539	—	—	中世	—	—	—	良好	—	—	—					
	1540	—	—	中世	—	—	—	良好	—	—	—					
	1541	—	—	中世	—	—	—	良好	—	—	—					
290	1584	—	—	近世	—	—	—	良好	—	—	—					
	1585	—	—	近世	—	—	—	良好	—	—	—					
	1586	—	—	近世	—	—	—	良好	—	—	—					
	1587	—	—	近世	—	—	—	良好	—	—	—					
	1588	—	—	近世	—	—	—	良好	—	—	—					
	1589	—	—	近世	—	—	—	良好	—	—	—					
	1590	—	—	近世	—	—	—	良好	—	—	—					
291	1591	G-10	Ⅰ	—	羐口	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—					
	1592	G-22	Ⅲ	—	羐口	ナデ	ナデ	良好	浅黄橙	浅黄橙	1944					
	1593	F-16	—	—	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い褐	鈍い褐	—					
	1594	E-10	Ⅲ	—	把手	ナデ	ナデ	良好	橙	橙	426					
211	1142	E-14	Ⅲ	—	胴	格子状タタキ	同心円文	不良	浅黄橙	浅黄橙	10016				○	○
	1143	E-14	Ⅱ	—	胴	平行タタキ	ナデ	不良	鈍い褐	浅黄橙	10039		○			○
	1144	E-17	—	—	胴	平行タタキ	同心円文	不良	鈍い褐	橙	—	○			○	
	1145	E-14	Ⅲ	—	胴	平行タタキ	同心円文	不良	褐灰	鈍い橙	11372	○	○		○	○
	1146	F-14	—	—	胴	ナデ	ナデ	不良	橙	浅黄橙	—		○			○
	1147	D-14	Ⅲ	—	胴	ナデ	ナデ	不良	浅黄橙	鈍い赤褐	10369	○				○
212	1160	E-14	Ⅲ	—	胴	格子状タタキ	同心円文	不良	灰褐	鈍い褐	10198		○			○
	1161	E-14	—	—	胴	格子状タタキ	平行タタキ	不良	鈍い褐	鈍い橙	—		○			
	1162	E-14	Ⅲ	—	胴	格子状タタキ	同心円文	不良	鈍い赤褐	橙	9978	○				
213	1165	E-14	—	—	胴	格子状タタキ	平行タタキ	不良	鈍い赤褐	橙	—					○
	1167	E-14	—	—	胴	格子状タタキ	平行タタキ，同心円文	不良	鈍い赤褐	橙	10170		○			○
	1168	E-14	Ⅲ	—	胴	格子状タタキ	同心円文	不良	鈍い黄橙	橙	9959	○	○			○
	1169	E-14	Ⅲ	—	胴	格子状タタキ	平行タタキ	不良	鈍い橙	橙	—		○			○
	1170	E-14	Ⅲ	—	胴	格子状タタキ	同心円文	不良	鈍い橙	橙	—		○			○
	1259	E-14	Ⅱ	—	胴	格子状タタキ	平行タタキ，同心円文	不良	灰褐	鈍い橙	9813	○	○			
	1277	H-27	SP	—	底	ナデ	ナデ	不良	鈍い黄橙	橙	—	○		○		○
	1329	—	—	—	胴	ナデ	ナデ	不良	鈍い褐	橙	—		○			○
	1249	—	SD13	中世	底	刷毛目，ナデ	刷毛目，ナデ	良好	明オリーブ灰	灰白	7	○	○			○
	1250	—	SD13	中世	口	ヘラ磨き	ナデ	良好	緑灰	鈍い黄褐	3	○	○			○
	1251	—	SD13	中世	底	施釉	施釉	良好	淡白釉	鈍い黄褐	—	○	○			○
	1252	—	SD13	中世	底	施釉	施釉	良好	淡白釉	鈍い黄橙	—	○	○			○
244	1244	—	SD05	中世	底	ナデ	ナデ	良好	灰白	灰	—	○	○			
	1245	—	SD05	中世	底	ナデ	ナデ	良好	灰白	灰	—	○	○			
	1246	—	SD05	中世	底	ナデ	ナデ	良好	オリーブ灰	鈍い黄橙	—	○				
247	1247	—	SI02	中世	—	ケズリ	ケズリ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	—					
	1248	—	SI02	中世	胴	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	178	○	○			○
	1249	—	SI02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	鈍い黄橙	鈍い黄橙	116	○	○	○		
	1250	—	SI02	中世	底	ナデ	ナデ	良好	明褐	橙	41	○	○	○		
	1251	—	SI02	中世	胴	格子状タタキ	同心円文	良好	灰白	青灰	157	○	○			
	1252	—	SI02	中世	胴	平行タタキ	ナデ	良好	黄灰	灰白	155	○	○		○	
267	1321	D-14	—	—	胴	ナデ	ナデ	不良	鈍い褐	橙	—		○			○
	1322	—	—	—	—	ナデ	ナデ	不良	鈍い褐	鈍い橙	—		○			
	1323	E-14	—	—	—	ナデ	ナデ	不良	鈍い橙	鈍い橙	—					○
	1324	E-14	—	—	胴	ナデ	ナデ	不良	橙	浅黄橙	—		○			○
	1325	E-16	—	—	底	ナデ	ナデ	不良	鈍い橙	鈍い橙	—	○				○
268	1337	D-14	—	—	—	ハケ	ナデ	不良	淡橙	鈍い橙	—		○			○
	1348	E-14	—	—	胴	ナデ	ナデ	不良	鈍い黄橙	橙	9959	○	○			○

表32　青白磁観察表

挿図番号	報告番号	種類	器種	出土 地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	釉薬	文様（外面）	文様（内面）	備考
270	1353	青磁	碗	D-19/Ⅲ	15.6	—	—	灰色	緑灰色	雷文	—	
	1354	青磁	碗	C・D-27・29	14.1	—	—	浅黄色	黄褐色	蓮弁文	—	
	1355	青磁	碗	表	9.8	—	—	灰白色	灰白色	—	—	
	1356	青磁	碗	F-16	14.0	—	—	灰白色	緑灰色	蓮弁文	—	
	1357	青磁	碗	E-16/Ⅲ	15.6	—	—	灰白色	緑灰色	雷文	—	
	1358	青磁	碗	表	12.0	—	—	灰白色	緑灰色	蓮弁文	—	
	1359	青磁	碗	F-17・18	15.2	—	—	灰白色	明緑灰色	鎬蓮弁文	—	
	1360	青磁	碗	E-32	16.8	—	—	灰白色	緑灰色	—	花文？	
	1361	青磁	碗	C-29	—	—	—	灰白色	灰緑色	—	—	
	1362	青磁	碗	D-29	15.6	—	—	灰白色	緑灰色	蓮弁文	—	
	1363	青磁	碗	D-32/Ⅱ	13.8	—	—	灰色	緑灰色	—	花文	
	1364	青磁	碗	D-19/Ⅱ	10.8	—	—	灰白色	緑灰色	蓮弁文	—	
	1365	青磁	碗	E-18/Ⅱ	12.4	—	—	灰白色	緑灰色	—	雷文	
	1366	青磁	碗	D-18	14.6	—	—	灰色	暗緑灰色	簡略化した蓮弁文	—	
	1367	青磁	碗	表	15.0	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	
	1368	青磁	碗	C-16	12.2	—	—	灰白色	灰緑色	—	—	
	1369	青磁	碗	E-24/Ⅲ	12.6	—	—	灰色	緑灰色	鎬蓮弁文	—	
	1370	青磁	碗	C-23	14.2	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	
	1371	青磁	碗	D-15	—	—	—	灰緑色	緑灰色	花文？	—	
	1372	青磁	碗	表	14.0	—	—	灰白色	暗緑色	雷文	花文？	
	1373	青磁	碗	F-19	8.4	—	—	灰白色	緑灰色	蓮弁文？	花文？	
	1374	青磁	碗	C-26	11.4	—	—	暗灰黄色	灰黄色	—	—	
	1375	青磁	碗	E-33	9.6	—	—	灰白色	灰緑色	—	—	
	1376	青磁	碗	E-31	6.5	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	
	1377	青磁	碗	F-33	10.0	—	—	灰白色	灰白色	—	—	
	1378	青磁	碗	D-26	15.8	—	—	灰白色	明緑灰色	蓮弁文	—	
	1379	青磁	碗	F-26/Ⅱ	13.8	—	—	灰白色	緑灰色	雷文	—	
	1380	青磁	碗	表	3.6	—	—	灰白色	緑黄色	—	—	
	1381	青磁	碗	D-21/Ⅲ	—	—	—	灰黄色	緑黄色	—	—	
271	1382	青磁	碗	表	13.6	—	—	灰白色	緑灰色	雷文	雷文	
	1383	青磁	碗	E-30	16.0	—	—	灰色	緑灰色	雷文	—	
	1384	青磁	碗	E-25	—	—	—	灰色	緑灰色	雷文	—	
	1385	青磁	不明	表	—	—	—	灰白色	灰色	—	—	内面一部釉剝ぎ
	1386	青磁	碗	D-21/Ⅱ	—	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	
	1387	青磁	碗	E-20	—	—	—	灰白色	緑灰色	蓮弁文	花文？	
	1388	青磁	碗	G-25/Ⅱ	—	—	—	灰色	緑灰色	—	花文？	
	1389	青磁	碗	D-29	—	—	—	灰白色	明緑黄色	—	花文？	
	1390	青磁	碗	表	—	—	—	灰白色	灰緑色	—	—	
	1391	青磁	碗	B-29	—	—	—	灰色	緑灰色	花文？	花文？	
	1392	青磁	不明	表	—	—	—	灰白色	明緑灰色	—	—	
	1393	青磁	碗	表	—	—	—	灰白色	緑灰色	花文	—	
	1394	青磁	碗	表	16.8	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	
	1395	青磁	碗	表	14.2	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	
	1396	青磁	碗	F-26	15.6	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	
	1397	青磁	碗	C・D-17/Ⅱ	14.6	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	
	1398	青磁	碗	C-22/Ⅱ	—	—	—	灰白色	明緑灰色	—	—	
	1399	青磁	碗	C-28	13.9	—	—	灰色	緑灰色	—	—	
	1400	青磁	Ⅲ	F-19/Ⅲ	13.0	—	—	灰白色	灰緑色	—	—	
	1401	青磁	Ⅲ	B-13	13.0	—	—	灰白色	明緑灰色	—	—	
	1402	青磁	Ⅲ	F-18	15.0	—	—	灰白色	明緑灰色	—	—	
	1403	青磁	Ⅲ	E-27	13.2	—	—	灰白色	灰緑色	—	—	
	1404	青磁	Ⅲ	F-30/Ⅱ	10.6	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	
	1405	青磁	Ⅲ	E-25	12.8	—	—	灰褐色	緑灰色	雷文？	—	
	1406	青磁	Ⅲ	C-19/Ⅱ	—	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	
	1407	青磁	Ⅲ	表	14.4	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	
	1408	青磁	Ⅲ	D-24	13.4	—	—	灰色	緑灰色	花文	花文	
	1409	青磁	Ⅲ	B-26	—	—	—	灰色	緑灰色	—	花文	口縁部鎬花
	1410	青磁	Ⅲ	F-31/Ⅲ	13.4	—	—	灰白色	灰白色	—	—	口縁部鎬花
272	1411	青磁	Ⅲ	C-27	12.8	—	—	灰白色	灰緑色	—	—	
	1412	青磁	Ⅲ	C-22/Ⅱ	14.0	—	—	灰白色	灰緑色	—	—	
	1413	青磁	碗	E-27/Ⅲ	12.6	—	—	灰色	明緑灰色	花文	—	
	1414	青磁	坏	C-25	8.0	4.8	2.0	灰白色	灰白色	—	—	総釉？
	1415	青磁	皿？	E-11/Ⅲ	25.0	—	—	灰色	緑灰色	—	—	
	1416	青磁	Ⅲ	表	—	—	—	浅黄色	緑灰色	—	—	口縁部輪花
	1417	青磁	Ⅲ	D-18/Ⅱ	—	—	—	灰白色	明緑灰色	—	花文	口縁部輪花
	1418	青磁	碗	C-18	—	4.8	—	灰緑色	灰緑色	—	—	高台内面は釉剝ぎ
	1419	青磁	碗	B-13/Ⅱ	—	6.8	—	灰白色	明緑灰色	—	—	高台脇から高台内面は釉剝ぎ，見込み蛇ノ目釉剝ぎ
	1420	青磁	碗	B-13	—	5.0	—	灰白色	明緑灰色	—	見込みに花文の印刻	畳付と高台内面は釉剝ぎ
	1421	青磁	碗	F-33/Ⅱ	—	—	—	灰白色	緑灰色	—	—	高台内面は釉剝ぎ
	1422	青磁	碗	G-21/Ⅱ	—	5.4	—	灰白色	灰緑色	蓮弁文	—	畳付と高台内面は釉剝ぎ
	1423	青磁	碗	C-22	—	5.6	—	灰白色	緑灰色	—	—	総釉　高台内面に目跡
	1424	青磁	碗	G-20	—	5.0	—	灰色	灰色	—	—	総釉　畳付に砂粒付着
	1425	青磁	碗	D-25	—	5.4	—	緑黄色	明緑灰色	—	—	高台内面と見込みは球刷ぎ
	1426	青磁	碗	D-19/Ⅱ	—	4.7	—	灰白色	暗緑色	—	—	残存部外面は露胎
	1427	青磁	碗	C-29/Ⅲ	—	6.2	—	灰黄色	明緑灰色	—	花文？	畳付と高台内面は釉剝ぎ
	1428	青磁	碗	F-32	—	6.0	—	灰白色	緑灰色	—	花文	高台内面釉剝ぎ
	1429	青磁	碗	C-22	—	4.5	—	灰白色	灰色	—	—	畳付釉剝ぎ
	1430	青磁	碗	D-21/Ⅱ	—	7.8	—	灰色	灰緑色	—	—	残存部は総釉
	1431	青磁	碗	E-14/Ⅱ	—	—	—	灰黄色	緑灰色	—	見込みに花文の印刻	高台内面は釉剝ぎ
	1432	青磁	碗	C-31	—	5.6	—	灰白色	緑灰色	—	見込みに花文の印刻	メンコに転用したものか？
273	1433	白磁	碗	E-11	16.6	5.0	6.5	灰白色	灰色	—	見込みに花文の印刻	外面腰部から高台内面まで露胎
	1434	白磁	碗	—/Ⅲ	20.2	—	—	灰白色	灰色	—	—	外面腰部から高台内面まで露胎
	1435	白磁	碗	F-16/Ⅲ	9.6	—	—	灰白色	灰色	—	—	
	1436	白磁	碗	D-30	10.2	—	—	灰白色	明灰緑色	—	—	
	1437	白磁	Ⅲ	D-17	11.0	—	—	灰白色	灰白色	—	—	畳付釉剝ぎ
	1438	白磁	Ⅲ	C・D-26・27	13.0	—	—	灰白色	灰白色	—	—	畳付釉剝ぎ
	1439	白磁	Ⅲ	C-22/Ⅱ	12.4	—	—	白色	白色	—	—	
	1440	白磁	碗	G－23　Ⅲ	13.2	—	—	灰白色	灰白色	—	—	
	1441	白磁	Ⅲ	B-14	11.0	—	—	浅黄色	灰白色	—	—	

表33　白磁・青花・陶器観察表

挿図番号	報告番号	種類	器種	出土 地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	釉薬	文様（外面）	文様（内面）	備考
273	1442	白磁	皿	B－18 Ⅱ	15.0	8.6	2.6	灰白色	灰白色	－	－	
	1443	白磁	皿	E－27	12.2	－	－	灰白色	灰色	－	－	
	1444	白磁	皿	B－16	10.8	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1445	白磁	皿	D－21 Ⅱ	13.2	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1446	白磁	皿	C－24 Ⅲ	15.0	9.0	2.1	灰白色	灰白色	－	－	
	1447	白磁	皿	E－29 Ⅲ	12.3	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1448	白磁	皿	B－21	12.4	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1449	白磁	碗	D－20 Ⅱ	9.9	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1450	白磁	碗	E－32	14.4	－	－	鈍い黄橙	灰白色	－	－	
	1451	白磁	碗	D－23	11.6	－	－	灰白色	灰白色	－	－	口禿げ
	1452	白磁	碗	F－30	12.2	－	－	灰白色	明緑灰色	－	－	
	1453	白磁	碗	B－22	15.0	－	－	灰白色	灰色	－	－	
	1454	白磁	碗	3T Ⅱ	14.8	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1455	白磁	碗	E－32	8.0	－	－	灰白色	明緑灰色	－	－	口禿げ
	1456	白磁	碗	E－25	11.8	－	－	灰白色	灰色	－	－	
	1457	白磁	碗	F－16 Ⅲ	10.0	－	－	白色	灰白色	－	－	
	1458	白磁	皿	R－21	12.4	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1459	白磁	皿	R－31	10.4	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1460	白磁	皿	R－26	9.4	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1461	白磁	皿	D－19 Ⅲ	9.4	－	－	灰白色	灰白色	－	－	口禿げ
	1462	白磁	皿	G－18	14.0	－	－	灰黄色	明緑灰色	－	－	
	1463	白磁	皿	F－17	9.0	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1464	白磁	碗	F－21	12.8	－	－	灰白色	明緑灰色	－	－	口禿げ
	1465	白磁	皿	C－27	10.0	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
274	1466	白磁	皿	D－22	8.6	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1467	白磁	碗	E－22 Ⅱ	10.4	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1468	白磁	碗	表	14.1	－	－	灰白色	明緑灰色	－	－	
	1469	青磁	皿	D－30 Ⅱ		－	－	灰黄色	灰緑色	－	－	口縁部輪花
	1470	白磁	皿	D－24	9.4	－	－	灰白色	明緑色	－	－	口縁部輪花
	1471	白磁	碗	表	15.8	－	－	灰白色	灰色	－	－	玉縁口縁
	1472	白磁	碗	C－22	8.2	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1473	白磁	碗	C－32	23.8	－	－	灰色	明緑灰色	－	－	
	1474	白磁	水注？	C－32	6.8	－	－	灰白色	灰白色	－	－	
	1475	白磁	坏	表	－	4.0	－	浅黄色	灰白色	－	－	抉り高台，外面腰部から高台内面は露胎，見込みに高台の痕跡あり
	1476	白磁	坏	B－15 Ⅲ	－	4.4	－	灰白色	灰白色	－	－	抉り高台，外面腰部から高台内面は露胎，見込みに高台の痕跡あり
	1477	白磁	坏	C－18 Ⅲ	－	4.0	－	灰白色	灰白色	－	－	抉り高台，外面腰部から高台内面は露胎，見込みに高台の痕跡あり
	1478	白磁	坏	E－15 Ⅲ	－	4.4	－	浅黄色	灰黄色	－	－	抉り高台，外面腰部から高台内面は露胎，見込みに高台の痕跡あり
	1479	白磁	碗	C－21 Ⅲ	－	5.6	－	灰白色	灰白色	－	見込みに花文の印刻	外面腰部から高台内面露胎
	1480	白磁	碗	G－20 Ⅱ	－	6.4	－	浅黄色	灰黄色	－	－	畳付釉剝ぎ
	1481	白磁	碗	E－24 Ⅲ	－	7.2	－	灰白色	灰白色	－	－	高台脇から高台内面露胎，見込みに高台痕
	1482	白磁	碗	D－12	－	5.2	－	灰白色	明緑灰色	－	－	総釉 畳付に砂粒付着
	1483	白磁	碗	A－14	－	6.0	－	灰白色	灰白色	－	－	畳付釉剝ぎ
	1484	白磁	碗	C－23	－	4.6	－	灰白色	灰白色	－	－	見込み釉剝ぎ
	1485	白磁	碗	C－29	－	4.6	－	灰白色	灰白色	－	－	総釉
	1486	白磁	碗	D－21 Ⅲ	－	4.0	－	淡黄色	灰白色	－	－	外面腰部から高台内面露胎
	1487	白磁	坏	表	－	6.8	－	灰白色	灰白色	－	－	総釉
275	1488	陶器	大甕	G－17 Ⅱ 溝	－	－	－	黄灰色	－	－		
	1489	陶器	大甕	B－19 Ⅱ	－	－	－	鈍い黄褐	暗緑色自然釉	－		
	1490	青花	碗	B－18	12.2	－	－	白色	透明釉	－		
	1491	陶器	大甕	F－17 Ⅲ	－	－	－	鈍い黄褐	暗灰褐色自然釉	－		
	1492	陶器	壺？	B－21	－	－	－	灰黄色	褐色鉄釉	－		
	1493	青花	碗	B－28	－	－	－	灰色	白濁した透明釉	－		
	1494	青花	皿	B－18	－	11.2	－	白色	青みがかった透明釉	畳付と高台内側釉剝ぎ		
	1495	青花	皿	F－29	－	7.2	－	灰色	青みがかった透明釉	畳付釉剝ぎ		
	1496	青花	碗	B－26	－	5.6	－	白色	青みがかった透明釉	畳付釉剝ぎ		
	1497	青花	碗	表	－	4.9	－	白色	透明釉	畳付と高台内面釉剝ぎ		
	1498	青花	碗	B－17	－	4.4	－	白色	青みがかった透明釉	畳付釉剝ぎ		
	1499	青花	碗	F－24	－	4.4	－	白色	透明釉	畳付釉剝ぎ 渦班心		
	1500	青花	碗	G－26	－	5.0	－	白色	透明釉	畳付釉剝ぎ		
	1501	青花	碗	F－24	－	4.6	－	白色	透明釉	畳付釉剝ぎ		
	1502	青花	皿	B－24	－	13.6	－	白色	透明釉	畳付に砂粒付着		
276	1503	青花	皿	F－16	15.6	－	－	灰色	透明釉	残存部は総釉		
	1504	青花	皿	D－23	14.2	－	－	灰色	青みがかった透明釉	残存部は総釉		
	1505	青花	皿	F－26	11.6	－	－	白色	青みがかった透明釉	残存部は総釉		
	1506	青花	皿	A－14Ⅲ 12092	－	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1507	青花	皿	表	－	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1508	青花	碗	C－23	14.8	－	－	白色	青みがかった透明釉	残存部は総釉		
	1509	青花	碗	表	10.4	－	－	白色	透明釉	畳付釉剝ぎ		
	1510	青花	皿	F－26	11.4	－	－	白色	青みがかった透明釉	基筒底部は露胎		
	1511	青花	皿	表	12.0	－	－	白色	青みがかった透明釉	残存部は総釉		
	1512	青花	碗	F－19		－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1513	青花	碗	G－23	14.0	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1514	青花	碗	B－16	14.0	－	－	白色	青みがかった透明釉	残存部は総釉		
	1515	青花	碗	B－13 Ⅱ11313	13.6	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1516	青花	碗	C－17Ⅱ10269	10.4	－	－	白色	光沢ない透明釉	残存部は総釉		
	1517	青花	碗	F－18	11.0	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		芭蕉葉文 波濤文
	1518	青花	碗	E－19 2713	14.1	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1519	青花	碗	F－21 Ⅱ	12.4	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1520	青花	碗	G－30 12741	13.3	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1521	青花	碗	F－15	5.0	－	－	灰色	やや白濁した透明釉	残存部は総釉		
	1522	青花	碗	D－27	12.0	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1523	青花	皿	C－23	－	6.8	－	白色	透明釉	残存部は総釉		畳付から高台内面目跡
	1524	青花	皿	A－13Ⅲ12077	－	6.4	－	灰黄色	白濁した透明釉	基筒底部は露胎		
	1525	青花	皿	D－12	－	5.2	－	灰黄色	白濁した透明釉	基筒底周辺は露胎		
279	1526	青花	碗	B－7	14.8	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1527	青花	碗	E－27	－	－	－	白色	光沢強い透明釉	残存部は総釉		
	1528	青花	皿	E－25	－	－	－	白色	光沢強い透明釉	残存部は総釉		
	1529	青花	碗	B－2 Ⅱ 2125	13.0	－	－	白色	白濁した透明釉	残存部は総釉		
	1530	青花	碗	E－24	14.2	－	－	白色	青みがかった透明釉	残存部は総釉		
	1531	青花	碗	D－26	12.8	－	－	灰黄色	白濁した透明釉	残存部は総釉		

表34　青花・陶器観察表

挿図番号	報告番号	種類	器種	出土 地点	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	胎土	釉薬	文様（外面）	文様（内面）	備考
277	1532	青花	碗	D－18Ⅱ2414	－	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1533	青花	皿	D－23	－	－	－	褐色	透明釉	残存部は総釉		白化粧土に刷目　唐津焼
	1534	青花	皿	表	9.4	－	－	灰色	灰色がかった透明釉	蛇の目高台		
	1535	青花	碗	G－15	13.7	－	－	灰色	灰色がかった透明釉	残存部は総釉		
	1536	青花	碗	C－32	13.7	－	－	白色	透明釉	残存部は総釉		
	1537	青花	碗	E－16	11.0	－	－	灰色	灰色がかった透明釉	残存部は総釉		丸文　肥前系
	1538	青花	碗	表	－	－	－	浅黄色	灰色がかった透明釉	残存部は総釉		
	1539	青花	大皿	D－31	20.2	－	－	灰色	灰色がかった透明釉	残存部は総釉		
	1540	青花	皿	E－19Ⅱ 2303	9.2	4.2	2.6	灰色	透明釉	畳付から高台内面釉剥ぎ		
	1541	青花	皿？	E－22	－	9.4	－	灰色	透明釉	総釉		蓋の可能性あり
	1542	青花	大皿	C－17Ⅲ11156	－	－	－	灰色	透明釉	残存部は総釉		
	1543	青花	碗	C－22	－	3.6	－	褐色	透明	畳付釉剥ぎ		現川焼
290	1560	陶器	鉢	G－25	25.0	－	－	鈍い褐色	黒褐色鉄釉	口唇部釉剥ぎ		苗代川焼
	1561	陶器	鉢	G－25	22.6	－	－	暗褐色	黒褐色鉄釉	口唇部釉剥ぎ		苗代川焼
	1562	陶器	擂鉢	D－16	－	－	－	褐色	無釉	－		
	1563	磁器	碗	B－16	－	4.6	－	白色	外面青磁釉内面透明釉	畳付と高台内面無釉		見込みに蛇の目状による文様あり，波佐見焼
	1564	陶器	皿	E－29	－	5.6	－	淡黄白色	淡黄白色化粧土	見込みと高台脇から高台内面は無釉		外面に鉄絵？
	1565	陶器	壺	E－13	－	－	－	灰褐色	褐色鉄釉	口唇部釉剥ぎ		口唇部に貝目
	1566	陶器	擂鉢	D－30	－	－	－	灰褐色	黄灰色灰釉	口唇部釉剥ぎ		
291	1567	陶器	擂鉢	表	26.0	－	－	赤褐色	灰褐色鉄釉	口唇部釉剥ぎ		
	1568	陶器	皿	表	－	6.5	－	鈍い灰褐	褐色鉄釉	畳付　釉剥ぎ		苗代川焼
	1569	陶器	皿	H－4	11.4	－	－	灰色	灰色灰釉	内面と外面腰部まで施釉		唐津焼
	1570	陶器	皿	表	12.0	－	－	灰色	灰色灰釉	残存部は施釉		唐津焼？
	1571	陶器	皿？	表	12.4	－	－	灰色	黄灰色　灰釉	全面施釉		
	1572	陶器	不明	E－23	－	7.0	－	灰色	黒色鉄釉	外面のみ施釉		
	1573	陶器	メンコ	F－19	－	－	－	鈍い褐色	褐色鉄釉	上面・下面とも施釉		
	1574	陶器	メンコ	F－18	－	－	－	鈍い褐色	褐色鉄釉	上面・下面とも施釉		
	1575	陶器	メンコ	F－25	－	－	－	赤褐色	緑褐色　灰釉	上面・下面とも施釉		擂鉢からの転用
	1576	陶器	メンコ	表	－	－	－	灰褐色	褐色鉄釉	上面・下面とも施釉		擂鉢からの転用
	1577	陶器	メンコ	D－14	－	－	－	灰褐色	褐色鉄釉	上面・下面とも施釉		
	1578	陶器	メンコ	D－14	－	－	－	赤褐色	褐色鉄釉	上面・下面とも施釉		擂鉢からの転用
	1579	陶器	メンコ	C－28	－	－	－	赤褐色	褐色鉄釉	上面・下面とも施釉		
	1580	陶器	メンコ	H－25	－	－	－	灰褐色	褐色鉄釉	上面・下面とも施釉		
	1581	陶器	メンコ	E－28 Ⅱ 4252	－	－	－	赤褐色	褐色鉄釉	上面・下面とも施釉		
	1582	陶器	メンコ	E－16	－	－	－	鈍い褐色	褐色鉄釉	上面・下面とも施釉		
	1583	陶器	メンコ	表	－	－	－	鈍い褐色	褐色鉄釉	上面・下面とも施釉		

表35　鉄錆観察表

挿図番号	報告番号	実測番号	取上番号	出土区/層	縦×横(cm)	重量(g)	磁石反応	挿図番号	報告番号	実測番号	取上番号	出土区/層	縦×横(cm)	重量(g)	磁石反応
296	1625	1640	11723	－/Ⅲ	3.8×2.5	20	×	297	1648	1594	－	－/Ⅰ	5.0×4.6	35	×
	1626	1636	10227	－/Ⅱ	4.2×2.1	25	×		1649	1642	11404	－/Ⅲ	4.3×4.0	50	×
	1627	1627	15325	－/Ⅲ	4.2×3.5	25	×		1650	1629	9024	－/Ⅲ	4.4×2.7	35	×
	1628	1635	12850	－/Ⅲ	2.3×1.3	10	×		1651	1597-2	－	－/Ⅰ	3.0×2.2	10	×
	1629	1634	10298	－/Ⅲ	4.2×2.5	20	×		1652	1604	8055	－/Ⅳ	5.7×3.5	40.5	×
	1630	1597-1	－	－/Ⅰ	3.1×2.3	20	×		1653	1639	14936	－/Ⅲ	5.0×3.5	65	○
	1631	1590	－	－/Ⅰ	2.6×2.2	10	×		1654	1612	－	－/Ⅰ	4.9×7.3	65	×
	1632	1632	15014	－/Ⅲ	4.5×3.5	40	×		1655	1592	－	－/Ⅰ	5.3×3.7	40	×
	1633	1591	－	－/Ⅰ	3.0×2.9	25	×	298	1656	1631	14860	－/Ⅲ	4.7×3.5	75	×
	1634	1589	14663	－/Ⅰ	3.5×2.3	15	×		1657	1605	15115	－/Ⅳ	6.7×6.4	185	○
	1635	1637	9618	－/Ⅱ	2.5×2.2	10	×		1658	1599	－	－/Ⅰ	6.2×5.5	180	×
	1636	1601	11356	－/Ⅳ	2.3×2.3	15	×		1659	1624	1951	－/Ⅱ	4.5×3.0	10	×
	1637	1641	9745	－/Ⅲ	2.9×1.9	10	×		1660	1602	9145	－/Ⅳ	2.3×2.2	0.5	○
	1638	1586	－	－/Ⅰ	2.9×2.3	15	×		1661	1614	－	－/Ⅰ	4.0×4.1	30	×
	1639	1628	11631	－/Ⅲ	2.9×3.1	25	×		1662	1638	14100	－/Ⅲ	4.3×2.5	20	×
	1640	1593	－	－/Ⅰ	3.0×2.9	15	×		1663	1606	11766	－/Ⅳ	5.9×5.0	110	○
	1641	1587	－	－/Ⅰ	3.0×3.1	30	×		1664	1610	－	－/Ⅰ	8.1×5.6	250	○
	1642	1633	－	－/Ⅲ	2.9×2.6	25	×		1665	1609	－	－/Ⅰ	6.9×5.6	105	○
297	1643	1623	3681	－/Ⅲ	4.2×3.3	45	×		1666	1611	－	－/Ⅰ	5.6×4.6	40	○
	1644	1595	－	－/Ⅰ	3.5×2.8	35	×	299	1667	1598	－	－/Ⅲ	5.8×6.3	80	○
	1645	1588	－	－/Ⅰ	4.1×1.9	15	×		1668	1608	－	－/Ⅰ	5.9×3.4	50	○
	1646	1630	11774	－/Ⅲ	4.1×2.0	30	×		1669	1613	－	－/Ⅰ	5.5×3.7	105	○
	1647	1596	－	－/Ⅰ	4.0×2.5	15	×		1670	1607	－	－/Ⅰ	11.0×9.6	660	△

第Ⅳ章　分析・同定

分析１　安茶ヶ原遺跡出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

ここでは，古代～中世の土坑から出土した炭化材2試料(№5･7)，古墳時代の炭化材1試料(№8)，中世の炭化材1試料(№6･9)，合計5試料の樹種同定結果を報告する。

２．試料と方法

取上げられていた試料中に複数の破片がある場合は，形状や大きさの異なる炭化材を選び，樹種同定試料とした。

同定は，炭化材の横断面(木口)を手で割り実体顕微鏡で予察し，次に材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)の断面を作成し，走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は，3断面を5mm角以下の大きさに整え，直径１cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し，試料を充分乾燥させた後，金蒸着を施し，走査電子顕微鏡(日本電子㈱製　JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

同定した炭化材の残り破片は，鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

３．結果

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し，材の３方向の組織写真を提示した。

樹種記載

(1)マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　図版１　1a-1c(試料№9)　図版2　6c(試料№8)

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材へは緩やかに移行している。垂直樹脂道はおもに晩材部にある。分野壁孔は窓状，放射組織の上下端には放射仮道管がありその内壁には鋸歯状肥厚の痕跡があることからマツ属複維管束亜属のアカマツまたはクロマツである。

(2)ヒノキ属　*Chamaecyparis*　ヒノキ科　図版１　2a-2c(試料№6)

仮道管･放射柔細胞･樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は非常に少ない。分野壁孔は輪郭が円形で孔口は細いレンズ状に開き，壁孔縁が厚いヒノキ型，1分野に1～2個ある。ヒノキまたはサワラであるが，観察できた壁孔は一部で充分観察でないことからヒノキ属としておく。

(3)クスノキ　*Cinnamomun camphora* (L.) Preal.　図版１　3a-3c(試料№5)　図版２　7a･7c(試料№7)

単独または2個が放射方向に複合した大型の管孔が散在し，周囲状柔組織と大きな油細胞が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状，穿孔は単穿孔，内腔にはチロースとかすかならせん肥厚がある。放射組織は異性，おもに2細胞幅である。

(4)ツツジ科　*Ericaceae*　図版２　4a-4c(試料№9)

小型で多角形の管孔が多数散在し，年輪始めの管孔はやや大きい散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状，穿孔は横棒数約10本の階段穿孔である。放射組織は異性，1～3細胞幅，直立細胞の外形はふっくらして大きい。

(5)エゴノキ属　*Styrax*　エゴノキ科　図版２　5a-5c(試料№9)

やや小型の管孔が単独または2～4個が複合し放射方向に配列し，晩材部では径が減少する散孔材。道管の壁孔は小型で交互状に密在，穿孔は横棒数15～20本の階段穿孔である。放射組織は異性，1～2細胞幅，多列部の上下端は方形細胞や直立細胞からなる単列部となる。

４．まとめ

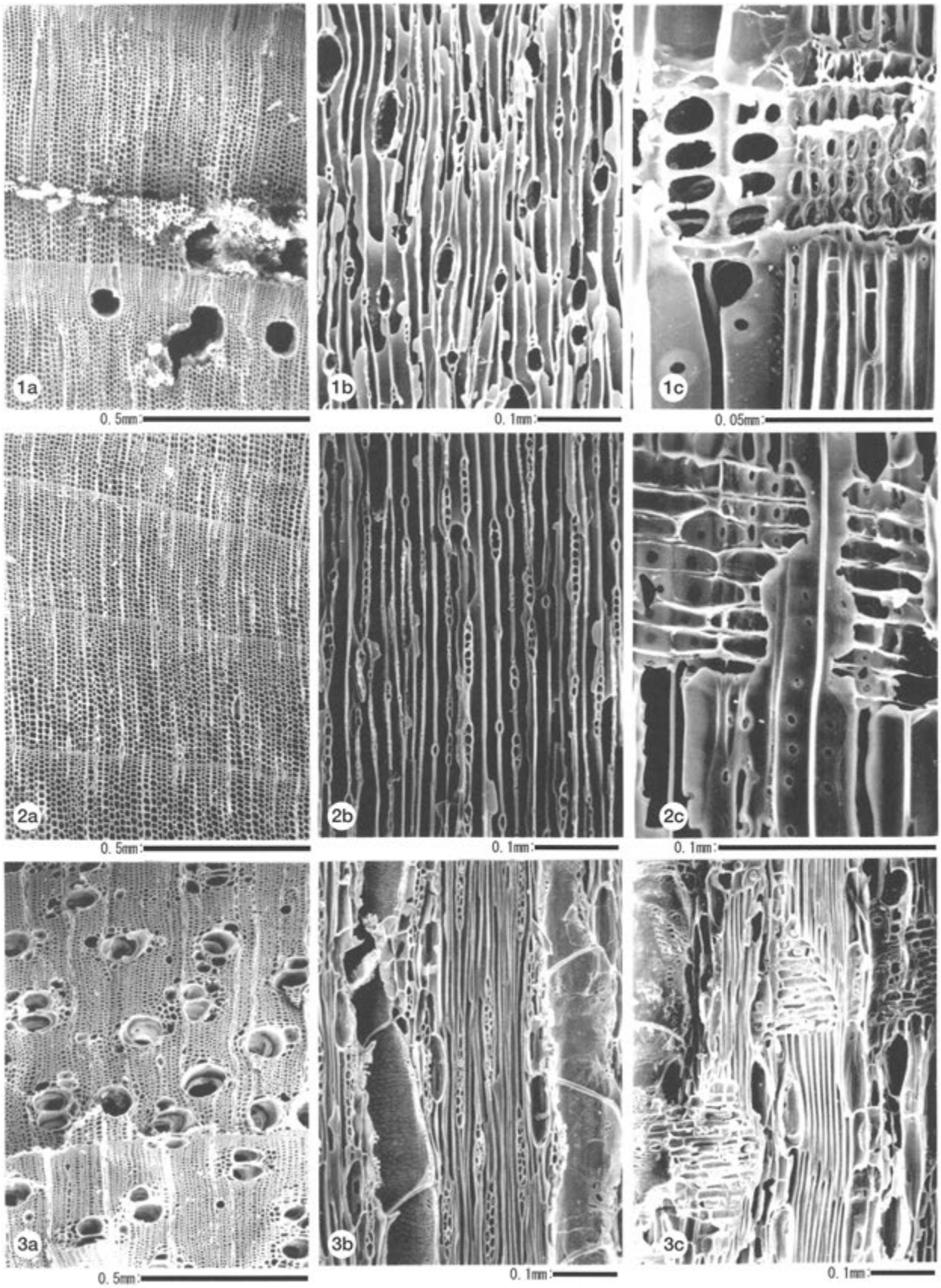
古代～中世の2基の土坑内から出土した炭化材2試料(№5･№7)は小破片で用途も不明であるが，いずれも常緑広葉樹のクスノキであった。

中世の方形竪穴建物跡から出土した炭化材(№6)は1cm角ほどの小破片であるが，樹種はヒノキ属で，有用な建築材や木製品材質として利用度の非常に高い樹種が検出された。

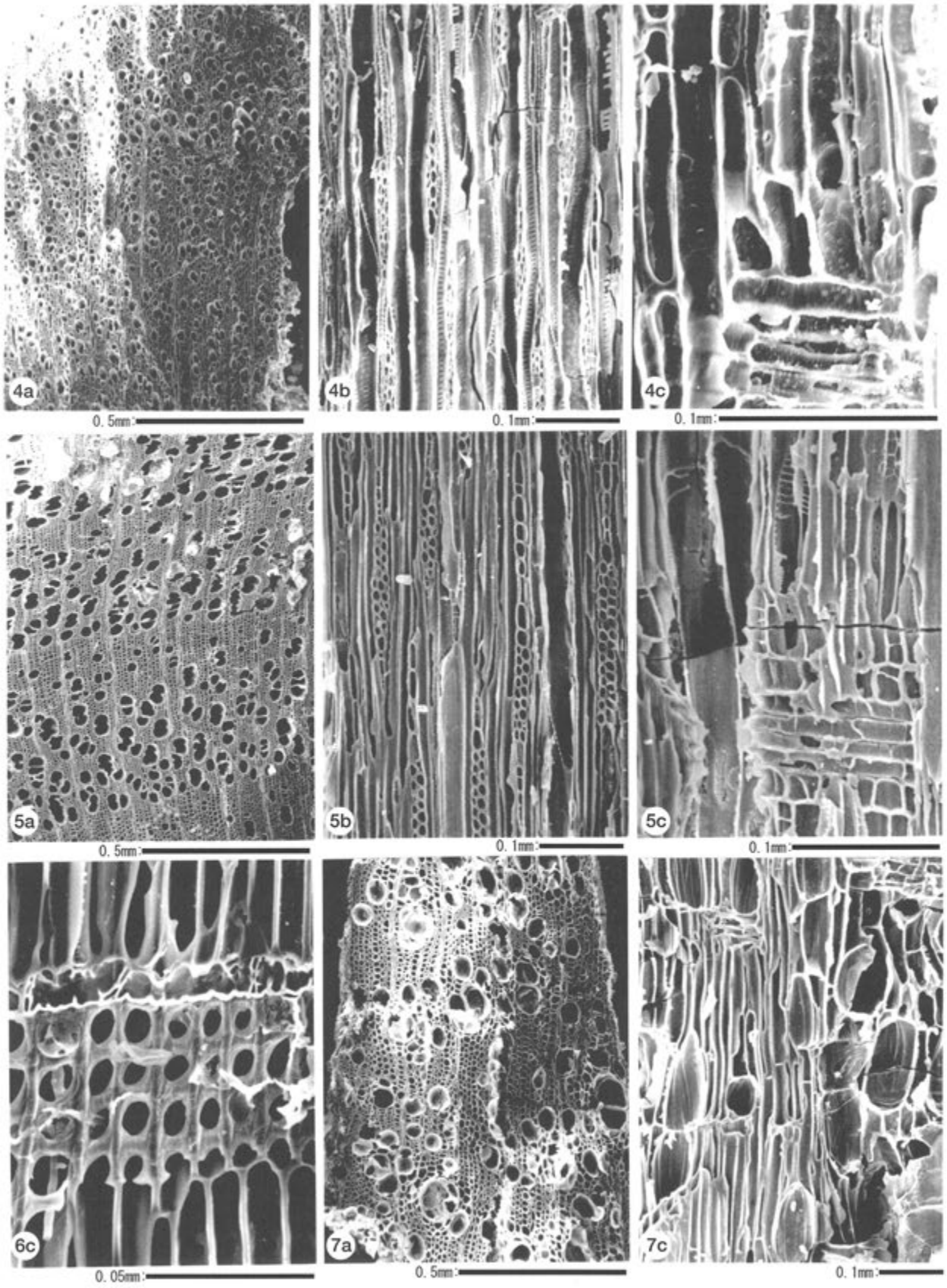
古墳時代の成川式土器破片群6の一括試料中から出土した炭化材(№8)と，中世の土師皿が出土した土坑出土の炭化材(№9)は，二次林要素として知られるマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属は，古墳時代から利用されていたことが判った。中世の土坑からはこのほかに，広葉樹のツツジ科とエゴノキ属の小破片も検出された。ツツジ科の炭化材は，直径約2cmの芯持ち丸木材と推測される破片で，斜め切削痕があった。

表１　安茶ヶ原遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料	地区	遺構		樹種	年代測定番号	発掘･考古資料からの時期
№5	F-28区	土坑1	埋土内	クスノキ	PLD-5547	古代～中世
№6	E-16区	SI02	埋土内	ヒノキ属	PLD-5548	中世
№7	C-22区	SF03	埋土内	クスノキ	PLD-5549	古代～中世
№8	F-16区	SS03		マツ属複維管束亜属	PLD-5550	古墳時代
№9		SK32	埋土内	マツ属複維管束亜属	PLD-5551	中世
				エゴノキ属	―	
				ツツジ科	―	



図版1　安茶ヶ原遺跡出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真
1a-1c:マツ属複維管束亜属(No.9)　2a-2c:ヒノキ属(No.6)　3a-3c:クスノキ(No.5)
a:横断面　b:接線断面　c:放射断面



図版２　安茶ヶ原遺跡出土炭化材組織の走査電子顕微鏡写真
4a-4c:ツツジ科(No.9)　5a-5c:エゴノキ属(No.9)　6c:マツ属複維管束亜属(No.8)
7a･7c:クスノキ(No.8)　a:横断面　b:接線断面　c:放射断面

分析２　安茶ヶ原遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定１

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
小林紘一・丹生越子・伊藤茂・山形秀樹・
Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani・藤根　久

１．はじめに

安茶ヶ原遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

表1　測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理	測定
PLD-5547	安茶ヶ原遺跡 位置：F-28区 遺構：土坑1	試料の種類：炭化材 （クスノキ） 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5548	安茶ヶ原遺跡 遺構：SI02	試料の種類：炭化材 （ヒノキ属） 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5549	安茶ヶ原遺跡 位置：C-22区 遺構：SF03	試料の種類：炭化材（クスノキ） 試料の性状：不明 状態：dry	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5550	安茶ヶ原遺跡 位置：F-16区 遺構：SS03	試料の種類：炭化材（マツ属複維管束亜属） 試料の性状：不明 状態：dry	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH
PLD-5551	安茶ヶ原遺跡 遺構：SK32	試料の種類：炭化材 （マツ属複維管束亜属） 状態：dry カビ：無	超音波煮沸洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 （塩酸1.2N, 水酸化ナトリウム1N, 塩酸1.2N）	PaleoLabo： NEC製コンパクト AMS・1.5SDH

試料５は，F-28区の１号土坑埋土から出土した炭化材で，時期は古代から中世に位置づけられる可能性が高い。試料６は方形竪穴建物跡の埋土内から出土した炭化材で，建物跡は中世に位置づけられる。試料７はC-22区焼土坑の埋土内から出土した炭化材で，古代から中世に位置づけられる可能性が高い。試料８はF-16区の古墳時代の成川式土器の一括試料とともに出土した。試料９は土坑の埋土内から出土した。土坑内からは中世の土師皿４枚が出土した（炭化材の樹種同定結果は別項参照）。

測定試料の情報，調整データは表1のとおりである。試料は調整後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

３．結果

表2に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行った^{14}C年代，^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲，暦年較正に用いた年代値を，図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

なお，暦年較正の詳細は以下の通りである。

暦年較正

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，及び半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正することで，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal3.10（較正曲線データ：INTCAL04）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。それぞれの暦年代範囲のうち，その確率が最も高い年代範囲については，表中に下線で示してある。

表2　放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C（‰）	^{14}C 年代（yrBP±1σ）	^{14}C年代を暦年代に較正した年代範囲		暦年較正用年代（yrBP±1σ）
			1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲	
PLD-5547	-26.31±0.12	1660±25	350AD(13.7%)370AD 380AD(54.5%)420AD	260AD(2.3%)280AD 330AD(93.1%)430AD	1661±23
PLD-5548	-28.39±0.12	770±25	1225AD(5.6%)1235AD 1240AD(62.6%)1275AD	1220AD(95.4%)1280AD	769±23
PLD-5549	-28.04±0.12	1270±25	685AD(37.7%)725AD 735AD(30.5%)770AD	670AD(95.4%)780AD	1271±23
PLD-5550	-25.22±0.13	615±25	1300AD(28.4%)1325AD 1340AD(27.5%)1370AD 1380AD(12.3%)1395AD	1290AD(95.4%)1400AD	614±23
PLD-5551	-25.77±0.12	645±20	1290AD(26.4%)1310AD 1355AD(41.8%)1390AD	1280AD(40.6%)1330AD 1340AD(54.8%)1400AD	644±22

4．考察

試料について，同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち，その確率の最も高い年代範囲に着目すると，それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

測定の結果，試料5は古代から中世と予想されたが，1σ歴年代範囲においてCal AD 380-420年(54.5%)，2σ歴年代範囲においてCal AD 330-430年(93.1%)と計算され，古墳時代中期の年代であった。

試料6は，中世であるが，1σ歴年代範囲においてCal AD 1240-1275年(62.6%)，2σ歴年代範囲においてCal AD 1220-1280年(95.4%)であった。

試料7は，古代から中世が予想されているが，1σ歴年代範囲においてCal AD 685-725年(37.7%)，2σ歴年代範囲においてCal AD 670-780年(95.4%)と計算され，7世紀末から8世紀末の年代であっ

た。

試料8は，古墳時代（成川式土器）の一括試料とともに出土しているが，1σ歴年代範囲においてCal AD 1300-1325年(28.4%)，2σ歴年代範囲においてCal AD 1290-1400年(95.4%)と計算され，中世の年代であった。

試料9は，中世の土師皿が出土する土坑であるが，1σ歴年代範囲においてCal AD 1355-1390年(41.8%)，2σ歴年代範囲においてCal AD 1340-1400年(54.8%)であった。

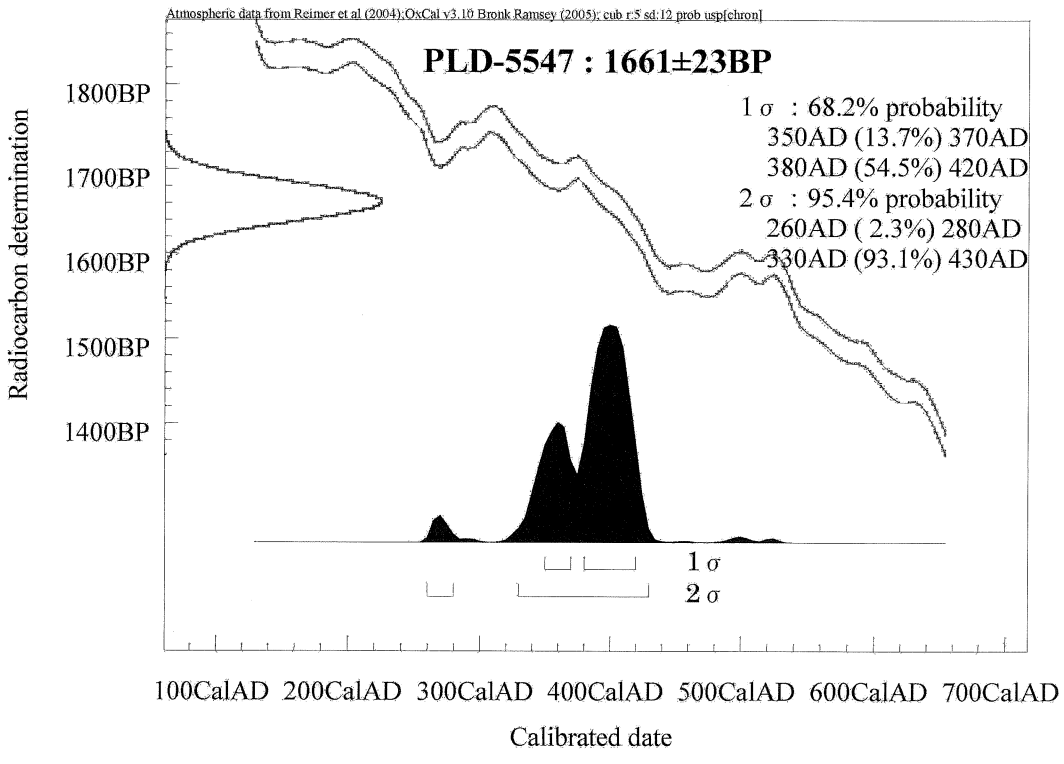
参考文献

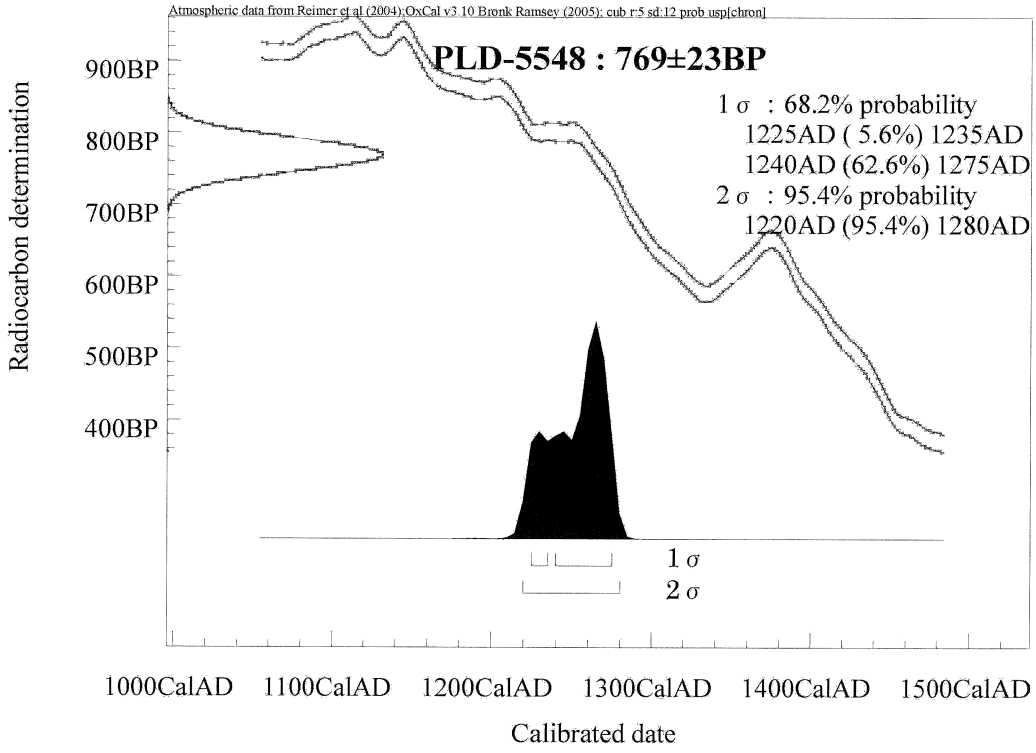
Bronk Ramsey C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program, Radiocarbon, 37(2), 425-430.

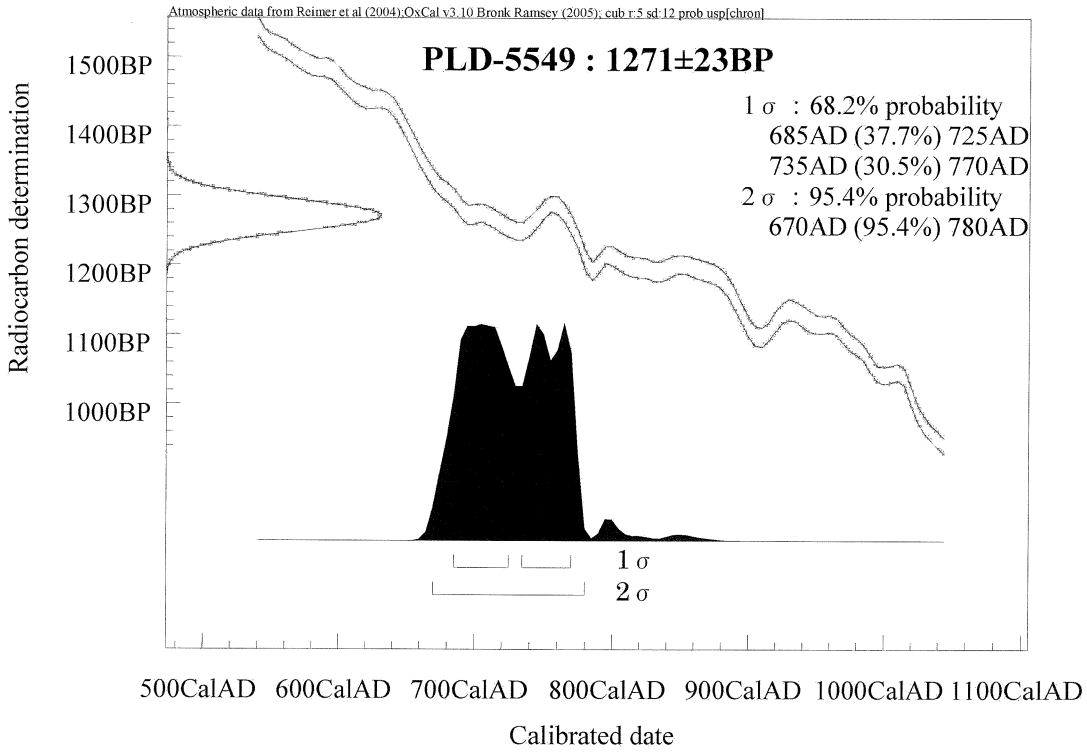
Bronk Ramsey C.（2001）Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon, 43 (2A), 355-363.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代, 3-20.

Reimer PJ, MGL Baillie, E Bard, A Bayliss, JW Beck, C Bertrand, PG Blackwell, CE Buck, G Burr, KB Cutler, PE Damon, RL Edwards, RG Fairbanks, M Friedrich, TP Guilderson, KA Hughen, B Kromer, FG McCormac, S Manning, C Bronk Ramsey, RW Reimer, S Remmele, JR Southon, M Stuiver, S Talamo, FW Taylor, J van der Plicht, and CE Weyhenmeyer. (2004) Radiocarbon 46, 1029-1058.




Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-5548 : 769±23BP
1 σ : 68.2% probability
1225AD (5.6%) 1235AD
1240AD (62.6%) 1275AD
2 σ : 95.4% probability
1220AD (95.4%) 1280AD
900BP
800BP
700BP
600BP
500BP
400BP
1 σ
2 σ
Radiocarbon determination
1000CalAD 1100CalAD 1200CalAD 1300CalAD 1400CalAD 1500CalAD
Calibrated date


Atmospheric data from Reimer et al (2004);OxCal v3.10 Bronk Ramsey (2005); cub r:5 sd:12 prob usp[chron]
PLD-5549 : 1271±23BP
1 σ : 68.2% probability
685AD (37.7%) 725AD
735AD (30.5%) 770AD
2 σ : 95.4% probability
670AD (95.4%) 780AD
1500BP
1400BP
1300BP
1200BP
1100BP
1000BP
1 σ
2 σ
Radiocarbon determination
500CalAD 600CalAD 700CalAD 800CalAD 900CalAD 1000CalAD 1100CalAD
Calibrated date

分析3　安茶ヶ原遺跡出土遺物の放射性炭素年代測定2

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

鹿児島県日置郡市来町に所在する安茶ヶ原遺跡は，郡衙に関わる可能性をもった遺跡として知られている。本遺跡では発掘調査により，貝殻廃棄ピットや溝状遺構が検出されたが，遺構に伴う遺物は8～9世紀頃と思われる須恵器が1点出土したのみである。今回の分析調査では，これらの遺構から出土した貝殻と動物歯を対象に，加速器による放射性炭素年代測定(AMS法)を実施し，年代に関する情報を得る。

1．試料

試料は，貝殻廃棄ピットと貝殻廃棄土坑から採出土した貝殻5点と，溝状遺構から出土した動物歯1点の計6点である。試料の詳細を表1に示す。

2．分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て，AMS法により行った。なお，放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また，測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり，誤差は標準偏差（One Sigma）に相当する年代である。なお，暦年較正は，RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い，いずれの試料も北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与えて計算させている。

なお，測定に先立ち，試料を肉眼およびルーペで観察し，その形態的特徴から，種類および部位の特定も行った。その同定・解析は，金子浩昌氏の協力を得た。

3．結果

結果を表2・3に示す。試料の補正年代は，貝殻廃棄ピットSKP01・02・03出土貝殻(No.1・2・4)が，1560～1430BP，貝殻廃棄土坑SKK01・SKK02出土貝殻(No.3・5)が980～910BPの値を示す。溝状遺構SD07出土動物歯(No.6)は，590BPの14世紀頃に相当する値を示す。

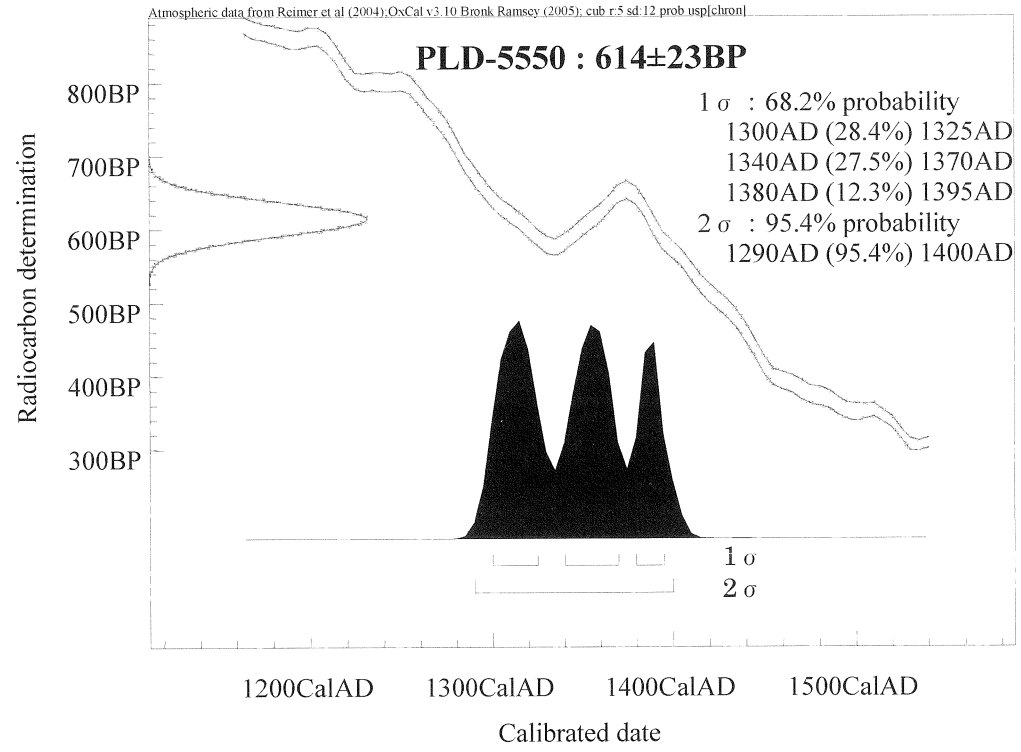
なお，今回の測定試料は5点(No.1～5)が貝殻であるが，貝殻は植物体などに比べると同位体効果が大きい試料である。今回の測定においても貝殻の試料は，補正値が約400年程度である。一方で今回のように海生の貝殻試料には，放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガスとは異なる海洋起源の炭素が取り込まれているため，正確にはその補正も必要である。ただし，海生の貝殻の同位体効果と海洋起源の放射性炭素濃度の効果は，相殺されることが多いと言われている（東村，1990）。したがって，海生の貝殻試料の場合，同位体補正のみを行った年代値では，実際に貝の死滅した年代との差が大きくなるため，同位体補正をしない測定年代で年代を評価することが多い。今回の同位体補正をしない測定値は，貝殻廃棄ピットSKP01・02・03出土貝殻(No.1・2・4)が，1090～1030BPの9～10世紀頃，貝殻廃棄土坑SKK01・SKK02出土貝殻(No.3・5)が530～450BPの15～16世紀頃に相当する値を示す。

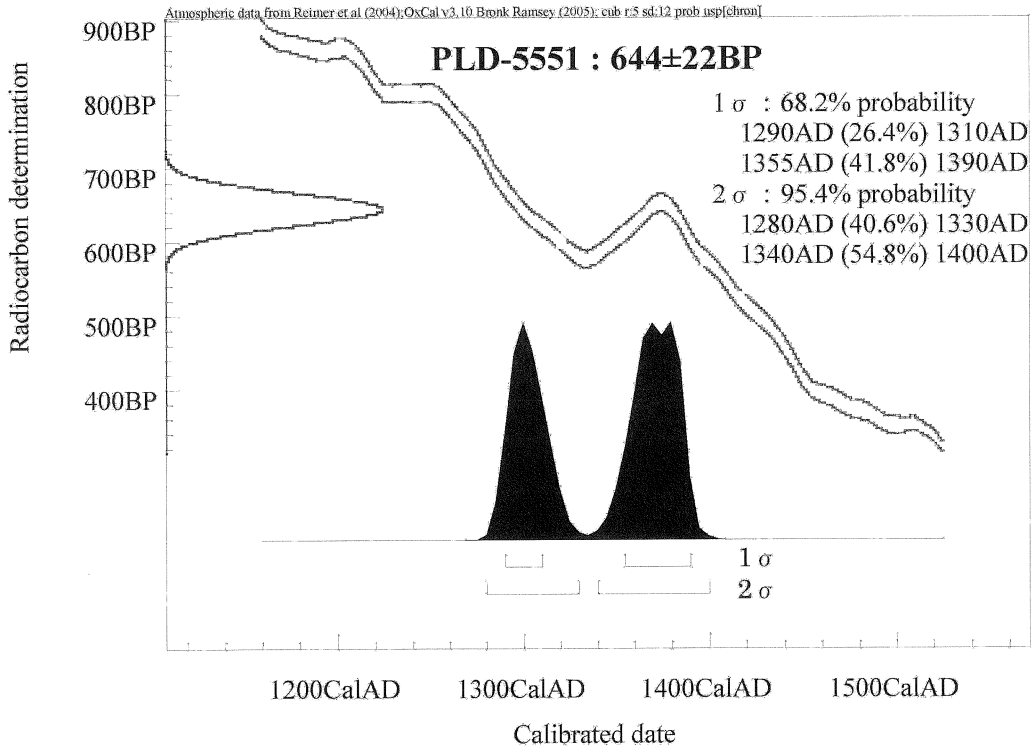
今後は，同一遺構・同一層準から出土した炭化物・貝殻・骨等の測定点数を増やすことにより，

さらに詳細な年代資料が得られると思われる。

引用文献

東村武信,1990,改訂　考古学と物理化学,学生社,212p.





分析４　安茶ヶ原遺跡出土遺物の元素分析結果について

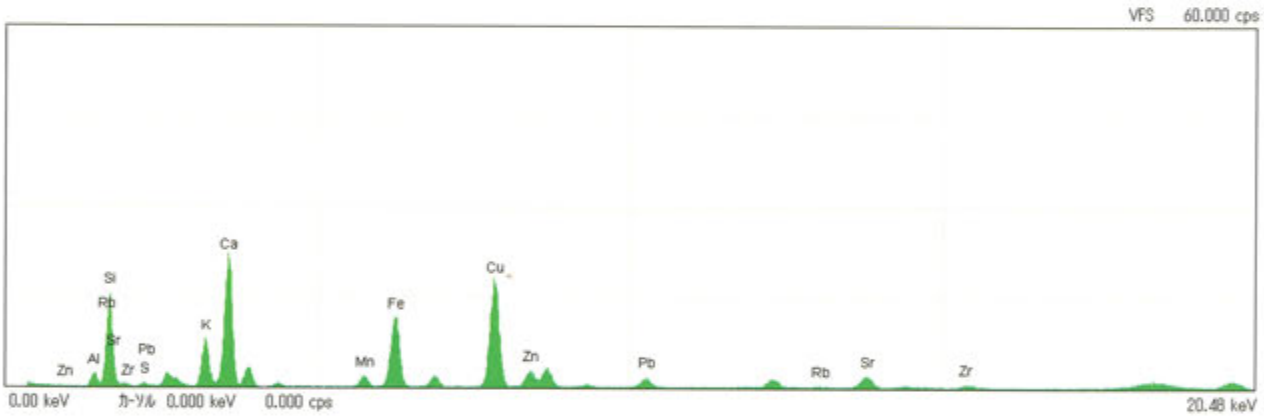
鹿児島県立埋蔵文化財センター　　森　雄二

鹿児島県安茶ヶ原遺跡から出土した土器片２点と青磁１点について蛍光Ｘ線元素分析装置（ＥＤＸ）を用いた元素分析を行った。分析装置は，鹿児島県立埋蔵文化財センター所有の機器（堀場製作所ＸＧＴ－1000）を使用し，測定は右記の条件で行った。結果と考察については，次のとおりである。

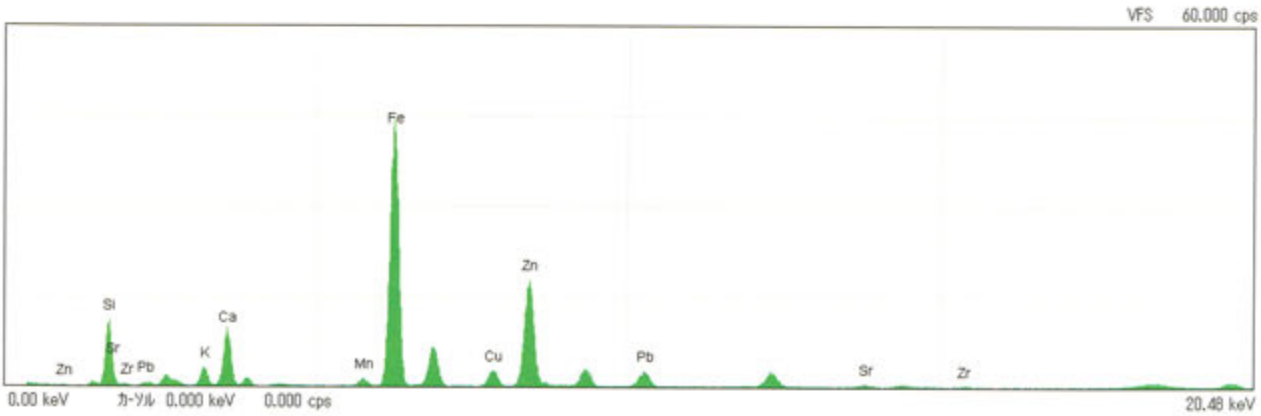
測定条件
- 非破壊分析
- 試料室：大気雰囲気
- 照射域：直径100μｍ（0.1mm）
- 管電圧：50kV（電流自動）
- パルス処理時間：Ｐ3
- プリセット時間：100秒

土器片（遺物番号1623，1624）について

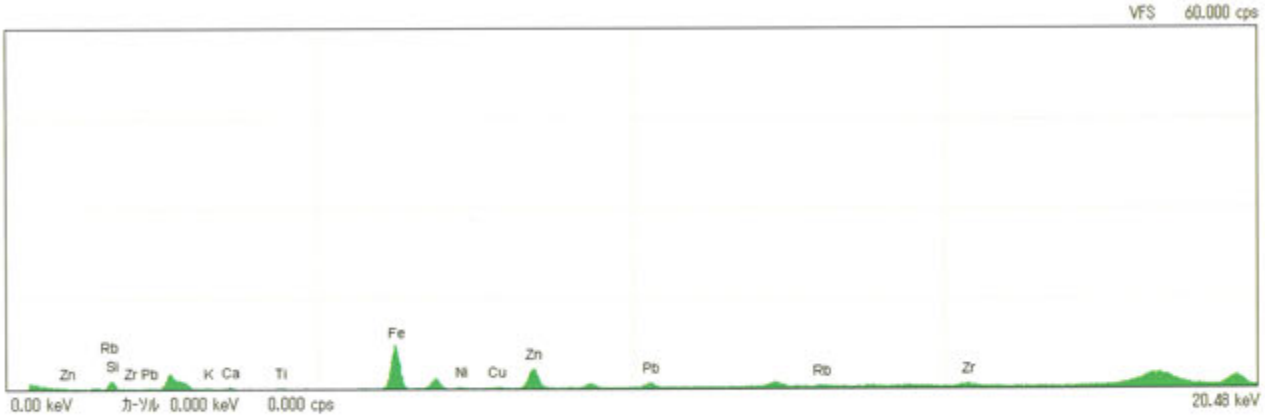
遺物番号1623において，外面の赤色部分（第１図）の銅（Ｃｕ）と内面の黒色部分（第２図）の鉄（Ｆｅ）は強度［cps/mA］が高い。比較のため破断面において測定を試みた結果，金属元素を検出したが，強度は低い（第３図）。遺物番号1624において内面（第４図）の銅（Ｃｕ）は強度が高い。このことから土器片の内外面に金属元素で構成された物質が付着していることを確認できた。この結果，土器片の形状を合わせて勘案すると，この土器片２点は，坩堝の一部である可能性が高い。



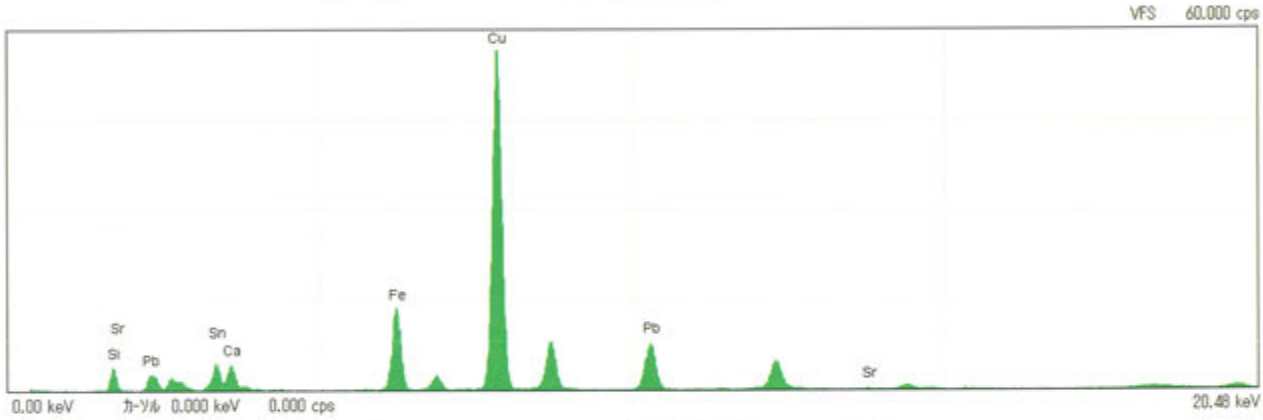
第１図　スペクトル図（遺物番号1623外面赤色部分）



第２図　スペクトル図（遺物番号1623内面黒色部分）



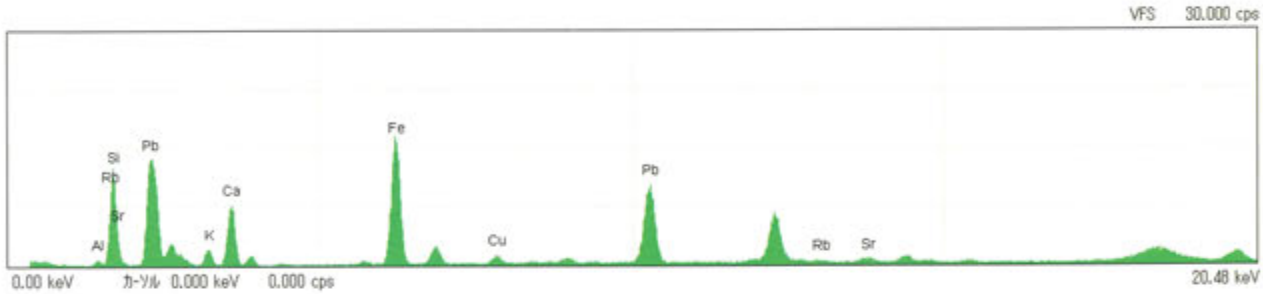
第３図　スペクトル図（遺物番号1623破断面部分）



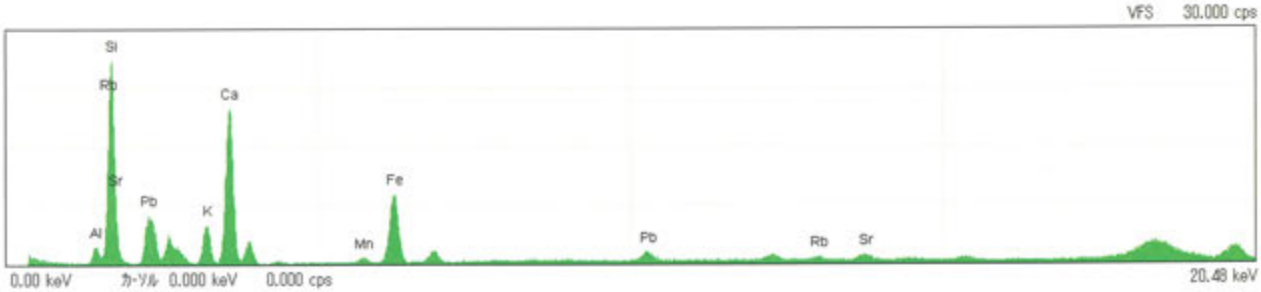
第４図　スペクトル図（遺物番号1624内面）

青磁（遺物番号1473）について

赤絵の部分（第５図）は，釉薬部分（第６図）に比べて鉄（Ｆｅ）と鉛（Ｐｂ）の強度が高い。また，銅（Ｃｕ）も検出されていることから，これら３種類の金属のうちのいずれかが赤絵の成分



第５図　スペクトル図（遺物番号1473赤絵部分）



第６図　スペクトル図（遺物番号1473釉薬部分）

第Ⅶ章　発掘調査のまとめ

第１節　旧石器時代

旧石器時代に関しては，調査段階においてその存在が認識されていなかった。その理由は，①旧石器時代の遺物が複数層にわたって他時期の遺物と混在して少量出土したこと，②Ⅴ層以下の下層確認調査において，遺物が出土したのがB～H-22～33区と範囲が限られており，遺物内容も黒曜石の破片や原石，砂岩・頁岩等の破片などであったこと，③Ⅴ層の状態は明確なチョコ層の範疇に含めることが躊躇されるほど不安定で不明瞭なものであり，“生き”ている層とは言えないような状況であったこと，④Ⅵ層は砂礫層であり，八房川の氾濫による層の堆積と考えられることから，この中に含まれる遺物も原位置を留めているといえないと判断されたことによる。その後，整理作業を通じて旧石器時代相当の遺物の存在が確認されたため，付編という形で掲載した。

旧石器時代に該当する遺物は，狸谷型ナイフ形石器，台形石器，楔形石器，三稜尖頭器などである。狸谷型ナイフ形石器は剥片尖頭器や三稜尖頭器を共伴しない石器であり，時期的にはAT直上期にあたることが近年明らかにされている（宮田2006）。こららのことから判断すると，本遺跡の旧石器は複数時期のものが含まれていると思われる。また本遺跡からは大量のフレーク・チップ類も出土している。旧石器時代の遺物の存在に気がついたのが整理作業の終盤であったため，これ以上の確認が出来なかったが，遺物内容から判断すると，フレーク・チップ類の中に細石刃等が含まれている可能性も否定できない。これらに関しては改めて再整理・検討を行いたい。これらの遺物はⅢ～Ⅷ層から出土しており，層位的に不安定な出土をしているものの，洪水等で流されたようなキズや摩滅等は特に確認できなかった。本遺跡は川沿いの台地上に立地しており，そのような地形の影響を受けている可能性も考えられる。このような出土状況は市ノ原遺跡などの周辺遺跡でも確認されるようであり[1]，調査においては今後注意が必要であろう。

第２節　縄文時代

縄文時代は早期～晩期までほぼ出土しているが，早期が最も出土量が多い。特に早期の土器は北側3分の１にあたる，B～F-25～33区に集中する傾向が伺える。縄文時代の遺構がすべてこのあたりに集中していること，黒曜石や石器の出土状況もこのあたりに集中していることなどを踏まえると，本遺跡における縄文時代の生活の中心地域はこのあたりであった可能性が高いのではないかと思われる。早期の土器としては前平式・加栗山式・志風頭式・吉田式が中心を占めているが，特に加栗山式・志風頭式が多い。そのうち，志風頭式に該当するⅡ類土器は，文様パターンからａ～ｃの３つに細分を行った。この中でⅡｃ類としたものは，器形・調整等がⅡａ類・Ⅱｂ類と同様であるものの，文様はⅡａ類とⅡｂ類の文様パターンを組み合わせたもので，胴部に縦位の沈線文を流水文状に描き，間に縦位の列状刺突文を交互に巡らせるという特徴をもつものである。流水文の特徴から，型式的には志風頭式の範疇におさまるものであるが，後続する上野原タイプに見られる，縦２列に刺突する特徴があらわれており，移行期の特徴をもつものである[2]。同様のタイプは前原遺跡でも出土しているものの，まだ類例はさほど多くはなく，今後の類例の増加が待たれる。

石器は多数の器種が出土している。なかでも石皿は多く出土し，SK03土坑からは，埋土最上層に

置かれた状態で石皿が出土した。このような出土状況としては，女性の墓に日常的に使用する道具である石皿を供えたケースが想定されるが，墓であるとの断定は不可能であった。また，本遺跡では破損して破片になっている石皿の出土も多く見られた。

磨製石斧では，基端部が一方の側縁に偏る，いわゆる北古賀タイプの出土が見られた。北古賀タイプは縄文時代後期の九州西岸の貝塚に見られる傾向があるとされ[3]，後期の貝塚である川上（市来）貝塚に近接した本遺跡から出土することは納得できる。また，腰岳系・針尾系などの県外産黒曜石の出土が見られるなど，九州西岸地域との交流が行われていたことが伺われる。

第3節　弥生・古墳時代

弥生時代の遺物はほとんど出土していないものの，突帯文期の甕形土器と弥生前期の壺形土器が出土した。当該期の遺物は市ノ原第１・５地点でも出土しており，特に市ノ原第１地点からは弥生前期の壺棺が出土している。本遺跡の事例は丹塗り磨研された壺形土器であり，本来は大形の壺形土器と推定され，市ノ原第１地点と同様の壺棺である可能性が高い。これらのことから，いちき串木野市南部地域に弥生時代早期～前期の集落が点在している可能性が考えられる。古墳時代は在地の土器である成川式土器が多数出土したが，遺構として確認できたのは土坑のみであった。ただし，傾斜面部から出土した成川式土器は，出土状況や接合関係などから調査区外からの流れ込みの可能性が想定されることから，調査区外に古墳時代の中心域がある可能性も考えられる。

第4節　古代

古代では，確実なものとして土坑・ピットが検出されている。土坑は17基が検出されたが，うちSK15からは「日置厨」と墨書された須恵器坏が出土した。時期的には８世紀後半～９世紀前半にかけてのものと思われる。またSK17からは墨書土器が２点出土している。ピットは44基検出されたが，うち３基は埋土中に貝殻を含むものであった。

掘立柱建物跡は，確実なものは確認できなかった。しかし，SB13はSKP02・03を囲むように柱穴が存在するため，古代に遡る可能性を含んでいる。その場合，主軸をほぼ同じくするSB05・06・14・16も，ほぼ同時期のものであると考えられる。SB15はSB16と重複する部分があるため，立て替えの可能性が考えられるが，主軸が同じなので，さほど時期差はないものと思われる。またこの場合，貝殻を含む土坑の意味あいが，建物と関連する遺構である可能性が出てくるため，今後さらに検討を深める必要がある。

第5節　中近世

中世では四面廂建物跡２棟，片廂建物跡４棟，掘立柱建物跡14棟，溝状遺構・道跡等が検出された。先述したように，建物跡の中には古代に遡る可能性があるものも含んでいるが，大部分はこの時期と考えられるものである。またSD01溝は，矩形を呈して四面廂建物跡SB01などの建物群を取り囲んでおり，有力層・もしくは公的関連施設の可能性が想定される。

遺物は土師器をはじめ，青白磁・青花などの貿易陶磁器が出土した。青白磁は15世紀を中心とするものである。青花は景徳鎮窯系を中心とし，16世紀末～17世紀を中心とする漳州窯系はあまりみ

られないことから，青白磁と同じく15世紀代のものと思われる。SKK01・02の放射性炭素年代測定が15・16世紀とされていることとも矛盾しないものである。

近世は溝状遺構・道跡が検出されたほか，遺物としては薩摩焼等が出土している。（平）

考察１　「日置厨」墨書須恵器について

本遺跡のSK15土坑から，8世紀後半～9世紀前半頃に比定される，「日置厨」と墨書された須恵器坏が出土した。「厨」銘の墨書土器は県内で5例目である。県内の「厨」銘の墨書土器に関しては永山修一氏がすでに検討を加えられており，本遺跡の事例に関しても言及されている（永山2000）。ここでは永山氏の論考に依拠しつつ，本遺跡出土事例の意味について若干検討を行いたい。

1-1：県内の出土事例と「厨」銘墨書の意味

まず厨の性格について，永山氏の論考に依拠しつつ確認しておきたい。

永山氏によると，古代の厨は，①地子物の収納，②厨房としての酒饌の弁備，③地子米や交易物の頒布・使用，④地子稲や諸司の器物の保管の４つの性格をもっていたとされる。また，国・郡の厨で用意された食酒が供された場所については，A 国府・郡家の施設と，B 国府・郡家以外の場所に大別することができ，郡レベルだと，Aの場合は国内を巡行する国司や伝使に対する給食や宴会が，Bの場合は駅路・伝馬路上での饗宴等が想定できるという（永山前掲）。

上述したように，「厨」銘の墨書土器は，県内では本遺跡以外に4例がある。それぞれの事例を紹介すると，①薩摩国府跡（薩摩川内市）から「国厨」銘土師器，②市ノ原遺跡第１地点（日置市）から「厨」銘土師器，③一之宮遺跡B地点（鹿児島市）から「厨」銘土師器，④橋牟礼川遺跡（指宿市）から，８世紀後半～９世紀初頭に比定される「厨」もしくは「府」銘高台付土師器埦が出土している。永山氏が論考中で紹介した平川南氏の説によれば，「厨」銘墨書土器は，管理・保管のためではなく，官衙内外における恒例行事や臨時行事あるいは接待客に対して「国厨之饌」「郡厨之饌」等の意味において墨書したと見なすことができるという。また，「国厨之饌」は国境を越すことはないため，「国厨」として国名を記さないが，郡の場合は郡家間の饗饌や国府への貢進などから郡域を超えるケースがあるため，「郡名＋厨」の墨書が記されることがある（永山前掲）。これに従えば，薩摩国府の事例は，まさに国府の施設における「国厨之饌」としての使用が想定でき，また安茶ヶ原遺跡の「日置厨」は，郡域を超えるケースも想定した墨書であるといえる。（平）

1-2：「日置厨」墨書須恵器出土の意味

古代の律令制下において，この地域は日置郡に属していたとされる。よって，その郡名を記した土器が出土することは奇異なことではない。しかし，日置郡の中でも郡境にあたる地域から，郡衙の施設名である「厨」という墨書土器が出土したことは注目に値する。郡境にあたるこの地域に日置郡の厨があったとは考えにくく，“もの”だけが移動してきたと考えられる。その移動の原因としては“国司巡行”に伴う“饗宴”に使用されたことが想定される[4]。「日置厨」銘須恵器は，他の２点の須恵器とともに破棄されて土坑に埋められており，目的を果たし終わって遺棄されたものと考えられる。また，古代の遺構として貝殻の詰まったピットも３基検出されている。これらの貝殻は

ある程度まとまったように遺棄されていることから，何らかの容器に入っていた貝を，穴の中に遺棄したように思える。そうすると，宴会など飲食が行われた場で食べられた貝が棄てられた状況が想定され，前述した“国司巡行”に伴う“饗宴”で食された可能性も出てくるのではないかと考えられる。ただ，遺棄された場所が，「日置厨」墨書須恵器出土のSK15土坑と若干距離があるのが幾分気になる。しかし“貝殻”という土に返すことが可能なものと，“須恵器”というそのままでは腐食や風化することなくほぼ永久に残るものとの違いが，遺棄する場所の違いとなったと考えることは可能ではないだろうか。一つの考えとして提起しておきたい。（繁昌）

考察２　建物の併存関係の検討

本遺跡からは，四面廂建物跡2棟・片廂建物跡4棟・掘立柱建物跡14棟が検出されたが，これらを軸方向で検討するといくつかの“群”に分けられる可能性がある。

まず，四面廂建物跡2棟は同時併存の可能性も考えられるものの，2棟の間隔が離れていることや，軸がややズレていることから，ある程度時期差は考えるべきかもしれない。次に四面廂建物跡SB01と併存する建物を検討してみたい。四面廂建物跡SB01の北東に位置し，主軸を直交させる掘立柱建物跡SB07，SB01の西側に位置し，主軸を同じくする掘立柱建物跡SB08については，間隔や建物群としてのまとまりから考えたとき，同時併存の可能性が大きいのではないかと思われる。

一方，片廂建物跡SB03は，四面廂建物跡SB01と近すぎて軒が接すると思われることから，同時併存は難しいと考えられる。また，片廂建物跡SB05は四面廂建物跡SB01と軸を同じくするものの，間隔が開きすぎていることを考慮すれば，同時併存としない方が良いと思われる。片廂建物跡SB05は，その東側に並ぶように位置する掘立柱建物跡SB14，その南及び南東側に軸方向を揃えるように位置する片廂建物跡SB06や掘立柱建物跡SB13・16などと同時併存の可能性があると言えるかもしれない。次に，四面廂建物跡SB02を中心に考えてみると，南東側に位置して軸方向を同じくする掘立柱建物跡SB12，西側に位置して軸をほぼ同じくする片廂建物跡SB04，SB04の南側に位置して主軸を直交させる掘立柱建物跡SB11は，柱筋に不整形のところがあるものの，同時併存の可能性が考えられなくはない。

以上の検討から，四面廂建物跡SB01を中心とする一群，四面廂建物跡SB02を中心とする一群，片廂建物跡SB05を中心とする一群の，大きく3群に分けられる可能性が考えられる。ただし，これらの群の中心となる建物群の主軸方向はほぼ同じであることを踏まえると，全体が同時併存であった可能性も残されており，少なくとも時間的にそれほど隔たらないほぼ同様な時期に，占地の場所を少しずつ変えながら建物群を構成していったと考えられる。また，そう考えたとき，四面廂建物跡SB01を中心とした一群は，溝状遺構SD01の中に軸方向を同じくして収まることから，この溝とも同時併存の可能性が出てくる。その場合，溝に囲繞された建物群の北側は，空閑地または畑などと考えることがふさわしいと思われる。（繁昌）

J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
26
25
24
23
22
21
20
19
18
17
16
15
14
13
12
11
10
9
SB20
SD03
SD01
SB03
SB08
SB19
SB01
SB09
SB07
SB04
SB01
SB02
SB10
SI02
SB12
SB05
SB13
SB14
SB15
SB06
SB17
SB18
0
20m

第309図　建物配置図

考察3　溝状遺構と道跡との関係について

本遺跡では多くの溝状遺構と道跡が検出されている。そのほとんどは同様な場所で検出されており，基本的に機能の異なると考えられる遺構が，同じ場所で，使用された時期を異にして見つかっている。なぜ，機能が異なると考えられる2種類の遺構が，同じ場所から検出されるのであろうか。

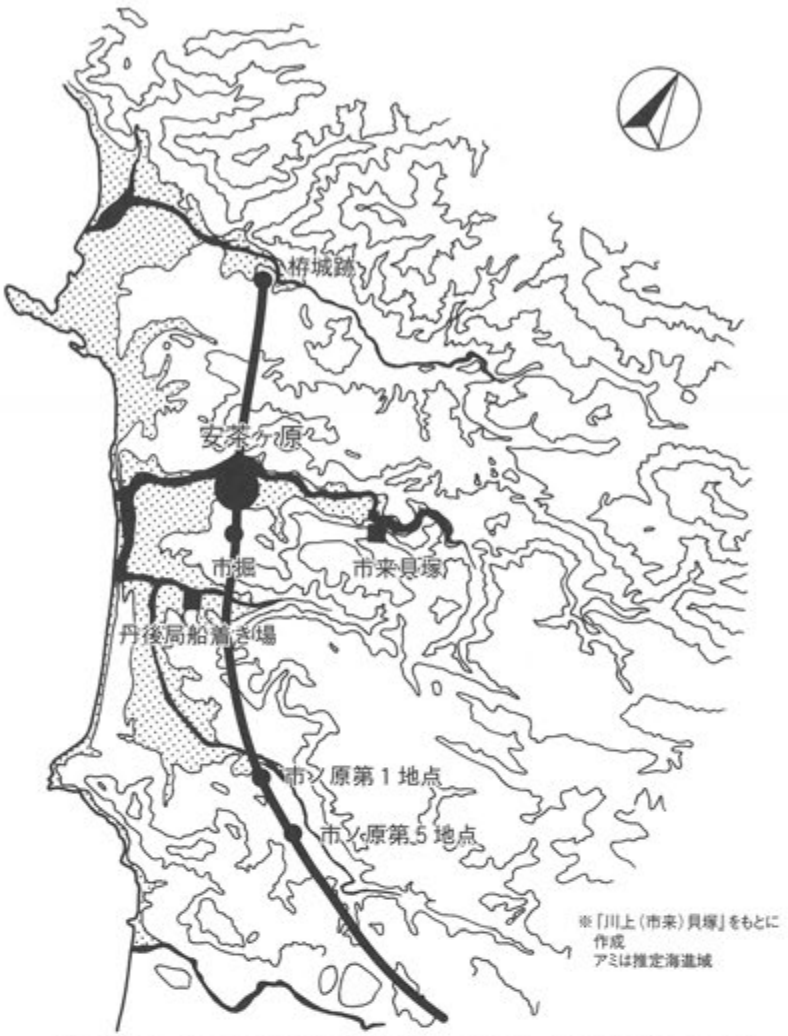
道跡は人が通行する手段として，人為的に，あるいは同じところを繰り返して歩くという，ある意味自然発生的な要因で作られるものである。それに対して溝状遺構は，土地を区画する区画溝としての機能をもつものもあるが，土地からの排水を意図するものが基本であると言える。通行としての道跡と排水を意図する溝状遺構には，一見共通する要素は見あたらないが，これを“人”や“物（水）”が“通る”ものという視点で捉えたとき，共通する機能として理解できそうである。最初に溝として設定された場合は排水機能として働くが，そのうちに周辺の土砂が流入して嵩が上がってくる。それによって周囲との高低差が小さくなり，人が通り易くなって道として使用されるようになることが考えられる。逆に，最初に道として作られた場合は人が通る機能として働くが，歩くうちに様々な要因によって窪みが生じてくる。その結果，周囲よりも低くなることから水が流入し易くなり，常時水が流れやすい状況となってくる。そのようにして溝として機能するようになってくることが考えられる。このように，道と溝は相互関連性をもって，同じ場所に同じような状況で形成されていくと考えられる。そのために，上面では連続した硬化面の存在から道跡と認識したにもかかわらず，下部では溝状遺構として捉えるべき幅と深さをもった掘り方が確認されることも出てきたり，その逆の場合も出てくると想定されるのである。本遺跡ばかりではなく，ほかの多くの遺跡からもこれと同じような状況でこれらの遺構が検出されることがあるが，それはこのようなことに起因していると考えられるのである。

道に関して補足的に述べれば，B-21区からH-25区にかけてほぼ直線的に延びる道は，安茶ヶ原台地を南東部から西側ほぼ中央部に向かって進む道の一角を占めている。この道は，安定した本台地のほぼ中央部を短距離で横切る道と考えられる。また，H-25区からC-32区にかけて延びる直線的な道は，本台地の南西部から上がってきた道が，台地の西側をやや弧を描くように北東部の川へと下りる道の一部をなしていると考えられる。この道と前述した道とがほぼ直交することから，H-25区から西側に向かう道は，市来の湊方面へと向かう恒常的な道として，本台地の南側の迫部分を大きく迂回しながら通る現在の道（里道）よりも以前に使用されていたと考えられる。さらに，地元の方の話によると，八房川の渡河点が本台地の北側先端部付近にあった[5]ということである。確かに，現在この台地先端部付近は，大きく弯曲していることから広い浅瀬が形成されており，また串木野側の岸辺も極端に深い淵とはなっていないことから，ある程度の大きさの石を置いたりすることで，渡河にはそれほど困難ではないと想定される。（繁昌）

考察4　遺跡の立地と性格

本遺跡は八房川に隣接する標高25mの台地上に立地する。先述したように，古代律令制においては，日置郡と薩摩郡の郡境にあたる地域でもある。本遺跡の中心時期である古代・中世からは，「日置厨」銘墨書須恵器や多くの建物群が検出されており，単なる一集落とは異なる様相が伺える。ここでは本遺跡の性格について，遺跡の立地の面から若干考察してみたい。

本遺跡から八房川を上流へ1kmほど遡った場所に，縄文時代後期の遺跡である川上（市来）貝塚がある。川上（市来）貝塚の貝層下面は標高5～6mと推定されており，縄文後期の海岸線はほぼこの位置で，縄文海進のピーク時に近い状態の海岸線が想定されている（新東ほか1991）。川上（市来）貝塚は，現在の海岸線から約3.5kmの位置に所在しており，この想定に従えば安茶ヶ原遺跡は海に突き出した台地状となり，台地の東側は内海として機能していたと考えられる。縄文海進の後，弥生海退，古墳海進，古代海進，中世海退，江戸海退などを経て現在の海岸線へと至るとされ（額田1995）ており，本遺跡周辺はこの海進・海退にあわせて海岸線が上下動する場所であったことが想定できる。



第310図　推定縄文海進域と遺跡の立地（西回り関係：●）

「日置厨」銘墨書須恵器は8世紀後半～9世紀前半頃に比定されているが，このころの本遺跡周辺はどのような状況であったのだろうか。本遺跡から出土した貝類の分類を行ったところ，貝の種類としては，海産貝類が圧倒的に多かった。砂泥帯・汽水地・内湾などに棲息するものはあまり採取されておらず，海岸域の岩礁帯に棲息するような貝が採取されていた。またこれらの貝類は川上（市来）貝塚からも出土している。縄文時代後期と古代の貝の種類に大きな変化が見られないことは，古代の海岸線も遺跡周辺近くにあったことが推測される。また古代海進から8～9世紀は，気候が温暖であったとされる（額田前掲）。これらのことから，古代の海岸線は現在よりも深く進入しており，本遺跡周辺近くまで海が迫っていた可能性が高い。その場合，安茶ヶ原台地は，海もしくは河口周辺に突き出した台地となり，台地の東側は，内海もしくは潟や低湿地が広がるような状態であったと思われる。

近年，伝使や巡行国司らに対する宿泊・供給の機能という郡衙の館・厨家の役割についての機能

的側面に関する研究が進展し，郡衙や別置された館・厨家とみられる遺跡には河川の縁辺に位置する例も多く，渡しや津に関わる宿泊・供給の役割が重視されていたことが推測されている（山中1995）。また，永山修一氏は，「厨」銘の墨書土器が出土した本遺跡と市ノ原遺跡第１地点の近くに，伝使往来路が通っていた可能性を指摘されている（永山前掲）。本遺跡の建物群に関しては，報告書内において中世として扱ったため，古代にどのような性格をもつ遺跡であったのかは，建物群の時期比定の問題を含めて今後再検討しなければならない。しかし，先の検討から本遺跡周辺は湊あるいは船溜まり，あるいは渡河点などが近くに存在していたことが推定されるほか，出土遺物・遺構などから考えて，薩摩国府→成岡遺跡・西ノ平遺跡などのある隈之城地区→多くの墨書・刻書土器や内黒・内赤土器が出土し，公的施設あるいは寺院の可能性も想定される椎城跡→安茶ヶ原遺跡→市ノ原遺跡第１地点を結ぶルートの近くに伝使往来路が通っていた可能性が考えられる。以上の点から，本遺跡は海上・陸上交通路の要衝として機能したものと考えられ，そのような交通路上における饗饌の場として，墨書須恵器も使用・遺棄されたものと思われる。

古代末の10～12世紀になると小寒冷期となり，中世海退，江戸海退と次第に海岸線が後退していく。中世になると八房川河口が市来湊として賑わいを見せるが，本遺跡からも15世紀代を中心に青白磁や青花といった貿易陶磁器や東播磨系須恵器などの出土が見られる。同じく五反田川近くに立地する椎城跡でも青白磁や東南アジア系の貿易陶磁器をはじめ，東播磨系須恵器やカムィヤキなどの国産品が多く出土しており，当時，西薩地域で活発な交易活動が行われていたことが伺える。安茶ヶ原遺跡は，このような交易活動の一翼を担う，市来湊や渡河点を見下ろす場所として重要な立地にあり，交易や交通を支配するような公的あるいは有力層に関連する遺跡であった可能性が高いと思われる。（平）

【註】

1　三垣恵一氏ご教示

2　前迫亮一氏ご教示

3　板倉有大氏ご教示

4　平川南氏及び永山修一氏ご教示

5　永山修一氏は，元禄国絵図から推測して，八房川と大里川の両河川の河口部には低湿地が広がり，渡河点は安茶ヶ原遺跡に案外近かったのではないかと推定されている（永山前掲）。

【参考文献】

新東晃一ほか　1991「第Ⅴ章　発掘調査のまとめ」『川上（市来）貝塚』市来町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

永山修一　2000「鹿児島市一之宮遺跡出土の「厨」墨書土器について」『一之宮遺跡B地点』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(26)

額田雅裕　1995「荘園の立地と環境」『古代の環境と考古学』古今書院

宮田栄一　2006「旧石器時代ナイフ形石器文化期の特徴と位置づけ」『堂園平遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（104）

山中敏史　1995「古代地方官衙論」『考古学研究会40周年記念論文集　展望考古学』考古学研究会

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（118）

安茶ヶ原遺跡

発行日　　2007年3月31日

発　行　　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899－4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森1番1号
TEL (0995) 48－5811

印　刷　　渕上印刷株式会社
〒892－0845 鹿児島県鹿児島市樋之口町6番6号
TEL (099) 225－2727